

明治大学人文科学研究所紀要

第 81 冊

MEMOIRS
OF
THE INSTITUTE OF HUMANITIES
MEIJI UNIVERSITY

VOLUME 81



2017年3月

明治大学人文科学研究所

明治大学人文科学研究所

研究所長 (2016.4～2016.11)	守屋 宏 則	MORIYA	Hironori	
研究所長事務取扱 (2016.11～2017.3)	高田 幸 男	TAKADA	Yukio	
運 営 委 員 (2016.4～2016.8)	石 出 靖 雄	ISHIDE	Yasuo	
	岩 野 卓 司	IWANO	Takuji	
	越 川 芳 明	KOSHIKAWA	Yoshiaki	
	昔 農 英 明	SEKINO	HIDEAKI	
	高 田 幸 男	TAKADA	Yukio	
	田 島 正 行	TAJIMA	Masayuki	
	田 中 伸 明	TANAKA	Nobuaki	
	(2016.9～2017.3)	中 村 成 里	NAKAMURA	Nari
	南 後 由 和	NANGO	Yoshikazu	
	波戸岡 景 太	HATOOKA	Keita	
	林 ひふみ	HAYASHI	Hifumi	
	藤 田 直 晴	FUJITA	Naoharu	
	藤 田 結 子	FUJITA	Yuiko	
	眞 嶋 亜 有	MAJIMA	Ayu	
	松 澤 淳	MATSUZAWA	Jun	
	山 岸 智 子	YAMAGISHI	Tomoko	
山 崎 健 司	YAMAZAKI	Kenji		
山 本 洋 平	YAMAMOTO	Yohei		

出版刊行委員会

委員 長	田 島 正 行	林 ひふみ	
委 員	昔 農 英 明	山 岸 智 子	山 本 洋 平

明治大学人文科学研究所紀要 第81冊

2017年（平成29年）3月31日 発行

発行者 高田幸男

発行所 明治大学人文科学研究所

〒101-8301

東京都千代田区神田駿河台1-1 TEL 03-3296-4135

FAX 03-3296-4283

印刷所 株式会社 外為印刷 ISSN 0543-3894

©2017 The Institute of Humanities, Meiji University

PRINTED IN JAPAN

明治大学人文科学研究所紀要 第81冊

目 次

《個人研究第1種》

聖所・神域・神殿におけるクレタ古法の現象化とポリス形成のコスモロジー	古 山 夕 城 1
---	-----------

《個人研究第1種》

ドイツ近代文学における幼年時代の記述 —— 大都市ベルリンの場合 ——	岡 本 和 子 55
--	------------

《個人研究第2種》

幕末仙台藩におけるロシア学研究の開始とその展開	岩 井 憲 幸 97
-------------------------------	------------

《特別研究第1種》

フランス中央集権化における新規獲得領土の影響 1453年 - 1715年 —— 家族人類学的考察 ——	鹿 島 茂 117
--	-----------

《公募論文》

グスタフ・フェヒナーの死生観のわが国における受容 —— 『死後の生についての小冊子』の多種類の邦訳 ——	岩 淵 輝 135
---	-----------

《公募論文》

元刊本雑劇「汗衫記」は、何処にあったのか —— 併せて明抄本と元曲選本の性格を論じる(2) ——	福 満 正 博 173
---	-------------

《公募論文》

「仮面ライダー」シリーズから読み解く1970年代初頭のヒーローの「正義」と戦争の記憶	花 岡 敬 太 郎 215
---	---------------

* * *

2016年度 第41回人文科学研究所公開文化講座 記録

伝える、伝わる —— 言葉の中の思いを届ける ——	243
------------------------------------	-----

MEMOIRS OF THE INSTITUTE OF HUMANITIES

MEIJI UNIVERSITY

Volume 81 2017

CONTENTS

FURUYAMA Yugi	Visualizing Phenomenon of Cretan Ancient Laws in the Sanctuary, Sacred Place and Temple with Cosmology of the Formation of City-States	1
OKAMOTO Kazuko	Die Darstellung der Kindheit in der neueren deutschen Literatur – mit Fokus auf Berlin	55
IWAI Noriyuki	Russian Studies of the Sendai Clan in the Edo Era	97
KASHIMA Shigeru	L'influence des territoire acquis depuis 1360 sur la centralisation de la France 1453-1715 — réflexions anthropologiques familiales —	117
IWABUCHI Akira	The Favourable Reception of Gustav Fechner's View on Life and Death in Japan: The Different Translations of <i>The Little Book of Life after Death</i>	135
FUKUMITSU Masahiro	Where was the text of the book " <i>Hanshanji</i> " published in Yuan Dynasty preserved?: With a Study of text of transcription of Ming Dynasty and of text of Yuanquxuan of Ming Dynasty (2)	173
HANAOKA Keitarou	"Justice" in the Early 1970s and the Memory of War as Interpreted by <i>Masked Rider</i> Series	215
* * *		
The Institute of Humanities, The 41th Open Seminar 2016		243

聖所・神域・神殿におけるクレタ古法の現象化と
ポリス形成のコスモロジー

古 山 夕 城

Visualizing Phenomenon of Cretan Ancient Laws in the Sanctuary, Sacred Place and Temple with Cosmology of the Formation of City-States

FURUYAMA Yugi

Archaic Crete was the forerunner of the law making and its display in the Greek world. Most of Cretan laws were inscribed on the walls of the building in the sanctuary, therefore seem to have had a close relationship with such a sacred place through the special means.

In the end of the Bronze Age and the beginning of the 'Dark Age', there was a kind of circular cosmology around the 'Bench Sanctuary' and 'Goddess with Upright both hands'. On the other hand, Cretan people of the 'DA' had have felt a sort of divinity to Minoan ruins where they played the cult performance. Through the cult activity there, the physicality of memory and the fetishisms to the wall of BA ruins have been incubated on the spot. In the sanctuaries remote from the settlements we can see the decline of the clay items and the increasing of bronze and luxury goods in their dedication around the 8th century BC. It means the development of the 'elite ideology' among the leaders in the hierarchical regional communities.

During the late 8th and 7th centuries, Cretan societies have created the large cult buildings, which have had a so-called 'Megalon style' inner room and the non-peristyle exteriors. This type was the explicitly visible construction for the cult activity, as 'temple', beside which community had another construction for the ritual of membership, as 'andreion.' They embodied the integration of community and the fix of social stratification through the divine function. The comparative study of epigrams on dedications and law inscriptions on walls suggests that ritualized cult activity in the sacred space would be formalized in some sort of oath to the god. Especially reading aloud the law on the wall of temple was all but the oath toward the Apollo.

When the law inscription was read with voice, the construction of the order by law among the competitive elites should be taken a form of swear facing the wall for super authority beyond them, although they were top leaders of the community and could take a meeting and ritual dining together in the sacred space for their consolidation and status after the sacrifice ceremony. On the other hand, the social class with the low level of, or without literacy could feel the effect of law on one's body through the ritual activity (hearing, singing and dancing) before the God. It was under the cosmology of a way of making ancient city-state that new relationship between members of a community and the god of social order was created in and around the space of temple with laws.

《個人研究第1種》

聖所・神域・神殿におけるクレタ古法の現象化と ポリス形成のコスモロジー

古 山 夕 城

序論 — 研究の目的と意義 —

クレタ島のポスト宮殿期から暗黒期を経てアルカイック期にいたるまでの歴史動向の研究については、30年程前までは輝かしい宮殿時代の発掘調査による華々しい成果の影にあってほとんど注目されていなかったが、1980年代に展開された「ギリシア・ルネサンス論」の影響の下で、クノッソスの暗黒期集落の調査や高所僻地集落の発掘が進み、しだいに光が当てられていくようになった。21世紀に入ってから、各地の個別的な発掘や領域調査を総合して、後期青銅器時代からアルカイック期までの時代像を再構成しようとする包括的な試みが公表されてきている。少なくとも考古学的見地からは、この時代はもはや「暗黒時代」と呼ぶにはふさわしくないほどに、様々な事象が明らかにされているのである。¹

他方で、文字を手がかりとする歴史研究の立場からは、後代の古典期末・ヘレニズム期・ローマ時代の文献史料にうかがわれるクレタのポリス社会の特質と、アルカイック期に多数記録された法碑文の分析から知られる国家規制の特徴とによって、貴族支配による政治体制と厳格な規律による集団生活、そして市民による隷属農民の分有という社会統治体制が、古典期・ヘレニズム期を通じて変ることなく続いたと考えられてきた。こうしたある種のステレオタイプ化されたクレタ・ポリスのイメージに対しても、近年の研究は法碑文や後代の文献資料の批判的検証などによって再検討を加え、新たな時代像に迫りつつある。²

そうした近年の研究動向を踏まえつつ、本研究は、文字表象を採ってたち現れるクレタの法とそれが法碑文として現象化する空間である聖所や神殿との関わりを探求するという観点から、「聖所・神域・神殿におけるクレタ古法の現象化とポリス形成のコスモロジー」と題して調査と考察を進めてきた。それは、クレタの法碑文に関して筆者がこれまで行ってきた研究から、法は（少なくともクレタにみる限り）重層的な構造を持ち、文字表象による可視化された姿をとる前に、聖別された空間で実体化していたことが想定されるようになったからである。³

したがって本研究では、クレタの法が文字に表された碑文を改めて確認するだけでなく、法がたち現れる聖別空間の存在状況と歴史的環境を青銅器時代の最末期にまでさかのぼって追跡し、クレタの法

碑文が現象化する空間をその時代背景の中において相対化して考察する方法を採った。そうすることによって、文字表象としての法碑文がたち現れる歴史的経緯を、文字史料のみではアプローチの困難な時期と環境のもとでも考察できるのではないかと考えるからである。

そして、観念としての法が文字形式の姿で現象することは、法の存在する位相が移り変わることを意味し、その背後に現実世界に対する認識の転換があると思われる。この転換する世界観を本研究では「コスモロジー」というタームで表記しているが、その理解には死と生にたいする人々の想念や神へ向かう意識を問題とせねばならない。この問題に取り組むために、本研究は考古学分野の近年の研究成果の助けを借りている。もちろん、専門分野の異なる考古学の議論に深く係わることはできるだけ差し控えるが、コスモロジーと祭祀空間の表象という観点から、あえて踏み込んだ考察を試みた場合もある。

こうした問題意識を持って課題に着手するにあたり、この成果論文で「暗黒期」という時代呼称を用いるのには理由がある。「暗黒」という語が低迷や困窮というネガティブな印象を与えるとすれば、それはクレタの研究においては払拭されつつある。しかし、本研究の対象時期は、文字による裏づけを基礎にする歴史研究アプローチでは手の届かない時代であるというだけでなく、土器編年にもとづく考古学的な時期区分では特質を表示しきれない時代でもある。歴史・考古の両分野において、この時代の全体像はいまだ明解には提示されておらず、さまざまな議論の余地を残している。その意味で、本研究にとっても手探りで調査と考察を重ねていかねばならない「暗黒期」なのである。⁴

以下、本論では6つの章に課題を分けて論述を展開する。その構成は、いくぶんか重複する期間もあるが、おおよそ時代順に置いてある。しかし、それらは単なる歴史概説の叙述ではなく、各章において論ずるべきテーマを設定して副題に表示した。

I. 「ベンチ聖所」の「万歳女神像」では、青銅器時代の最末期～暗黒期の初頭に典型的な聖所と女神像の観察と分析を通じて、暗黒期祭祀の形質的特質から循環的宇宙観の想念にアプローチする。II. 「廃墟聖所」と「祭祀の記憶」は、ミノア期の遺構に対する暗黒期住民の精神姿勢を祭祀の具体的な行為に関わらせ、壁体の物神性と記憶の身体性を論ずる章である。III. 洞穴聖所と野外聖所においては、青銅器時代以前よりローマ期にまで続く僻地聖所について、考古学研究の成果から暗黒期の特徴的変化を確認し、その変化にうかがわれるイデオロギーの展開を考察する。

IV. 「神殿」の登場と「メガロン」は、暗黒期末に登場してくる祭祀のための大型建造物を取り扱うなかで、その独特の内部構造と建築構成から、そこで執り行われた祭祀儀礼の社会的意味と機能の考察を課題にしている。V. 奉納銘文と法碑文では、暗黒期末からアルカイック期初頭の聖所奉納の銘文と法碑文を、出現状況や形質の特徴に注目しながら比較検証し、クレタにおける法観念が壁体での文字に形象化される意味と社会背景を論ずる。VI. クレタ法碑文と聖所・神殿は、10のポリスの法碑文一覧から存在状況を確認した上で、神殿内の祭祀と宣誓の形式とから法碑文の社会化にクレタの伝統を受け継いだ身体性が関わることを論ずる。そして、最後のむすびにおいて、聖所・神域・神殿におけるアルカイック期クレタの法がどのようなコスモロジーを背景に現象化し、また社会化したのかをまとめ、今後の研究に向けた課題の確認と展望の提示を行なう。

2014年度から2年間にわたる本研究は、その過程で2014年夏期と2015年夏期の2度の海外調査を

表1 クレタ土器編年表 Coldstream (1977) に拠る

	Period	Pottery Chronology	Geometric Chronology (Knossos)		
3000 BC	Prepalacial	EM I	EPG	1000 BC	
		EM II			
		EM III			
		MM IA			
1900 BC	Old Palace (Protopalacial)	MM IB	MPG	900 BC	
1700 BC		MM II			870 BC
	New Palace (Neopalacial)	MM III	LPG	840 BC	
1450 BC		LM I			
	Final Palace at Knossos	LM II	PGB	810 BC	
1380 BC		LM III A1			
		LM III A2			
	Postpalacial	LM III B	EG	790 BC	
		LM III C			
1100 BC		Sminoan			
1000 BC	Early Iron	Geometric	LG	710 BC	
700 BC		Orientalizing			Trans.
450 BC	Archaic	BF		700 BC	
	Classical				

行い、ギリシアやその他の国の博物館に収蔵・展示されている遺物の観察、クレタ島の現地遺跡で残存する遺構と立地環境の確認を重ねてきた。それゆえ、海外調査によって収集した先行研究の図面や現場での撮影データを紙幅の許す限り提示することにした。なお、クレタの青銅器時代から古典期に至る時代の特定については、考古学分野の土器編年に従って表1のようなクロノロジーを前提している。また、古代の固有名詞についてはおおむね慣例に従ったが、母音の長短を無視した場合もある。現代地名に関しては、なるべく原音に近い表記とした。

I. 「ベンチ聖所」の「万歳女神像」——暗黒期祭祀の循環想念——

クレタ中部・東部のLM III C期の居住地遺跡各地の「ベンチ聖所」遺構から、この時期の祭祀慣行を特徴的に示す4種の遺物が随伴的に出土している。それらは、両手を挙げた轆轤造りの陶製女性像（「万歳女神像」）、両側に垂直蛇行する蛇の姿を立体であしらった陶製の筒（スネークチューブ）、陣笠状の脚のない広角円錐の盃（カラトス）、そして紐を通せるほどの小孔が上部にある陶板である。これらは必ずしも常に4点セットで出土するわけではないが、その後の時代からはほとんど現れないものであり、当時の祭祀の特質を示す資料として考古学者たちの間で注目されている。

< 1. 祭祀用具の連関性 >

これら4種の主要遺物は通常、別々の個体として存在したが、一部の出土品において2種の器体が重なった形状を持っていることがある。まず、スネークチューブは筒状に口縁部と底部が開口しているのであるが、時折、口縁部にカラトスを一体形状で載せた形態で製造されているものが出土している。また、カラトスについては内側底部に「万歳女神像」のミニチュアが据えられた事例が出土している。陶板の中にも、表面に浮き彫りで両手を挙げた女神像の描かれた事例が発見されている。

こうした事象は、その事例が一部の個体に限られるとはいえ、これらの主要遺物がそれぞれ相互に深く連関する機能を持っていたこと表しており、この時期の聖所遺構に特徴的な「万歳女神像」・スネークチューブ・カラトス・陶板の4種の遺物が、いずれも同一の祭祀の催行において同一の信仰のもとに用いられていたことを、その形状の重なりから明確に指し示している。

祭祀における具体的用途としては、おおよそ次のように推定されている。カラトスには液体（ブドウ酒・オリーブ油・水）ないしは粒粉物（穀物）が供え物として容れられ、スネークチューブは、一体形状の事例から判断して、それを上に載せるための台として用いられたと考えてよい。おそらく祭祀儀礼のある時点で、その供え物は灌奠儀式によって一部は、大地に注がれ、また一部を参加者が口にしたのであろう。陶板は上部に開いた孔によって壁に打ちつけられるか、紐を通して宙釣りにされたと考えられ、祭祀の行われる時に催行の場所を飾り、そこが神聖な空間であることを表示するものであった



写真1 ベンチ聖所の祭祀用具陶器類（カンニア出土）



写真2 「万歳女神像」とカラトスの融合体（カンニア出土）



写真3 「万歳女神像」の陶板（カンニア出土）

ようである。⁵

そして、「万歳女神像」に関して注目すべきは、カンニア遺跡から出土した比較的小さな女神像の背面に付けられている把手と思しき輪状の突起である。その特異な部位の存在から、「万歳女神像」は持ち運ぶことを前提に製作されていることがわかる。

この女神像は、ベンチ聖所建屋内部の棚もしくはそのすぐ下の床から出土する状況から、普段はベンチに置かれているものが祭礼の際にその部分を掴み持って、聖所の周囲で執り行われる祭祀行列に繰り出されていたと考えられる。把手のない同程度の「万歳女神像」も、だき抱えられて同様に行列に用いられたと推定される。大型の像の場合は、直接抱えての行列は困難になるため、聖所建屋の表側面に設けられた棚の上に展示し、祭礼後に屋内に移したと考えられている。⁶

また、女神像は一箇所の聖所から複数体まとめて発見されることが多く、それぞれの女神像が基本姿勢や装飾構成に共通性・類似性を備えながらも顔や腕の表現に多様な特徴をもつため、複数の製作工房の存在が想定されている。このことから共同体内の諸部族グループがそれぞれ女神像を製作し、祭礼行列で練り歩いた後に聖所に奉納したのではないかという推測もなされている。⁷

< 2. 「万歳女神像」の形質 >

以上の4種の主要出土品の観察と祭祀儀式に関する推定の確認をした上で、「万歳女神像」の形質の問題について若干の考察と指摘を行っておきたい。それは、「万歳女神像」をめぐるこれまでの考古学研究的議論において、形質の問題はほとんど触れられることがなかったからである。具体的には、女神像が轆轤造りの陶製であったという点である。

まず、轆轤造りであることについて考えてみよう。スネークチューブも同様であるが、女神像の製作において轆轤を用いることで得られる特性は、胴部が中空となることである。実用面では、その結果、像の重量が軽減され、祭礼行列での持ち歩きや野外での展示のための移動時に行為者の負担が軽くなる。その効果は「万歳女性像」が大型であるほど大きい。つまり、女神像を持ち運ぶことを前提にすれば、轆轤造りの理由は祭祀利用の際の利便性という実用的側面から説明されるのである。しかしながら他方で、陶製の像を中空にすることは、損壊の可能性が増すという欠点も生じさせるであろう。それにもかかわらず、女神像をあえてがらん胴にしたことには、「中空」という状態に特別な意味があったからではないだろうか。



写真4 背面に取手のある「万歳女神像」
(カンニア出土)

中空の轆轤造りという製法は、前12世紀のファイストス遺跡とアイヤ・トリアダ遺跡の聖所遺構から出土した牛の小型陶製奉納品にすでに見られる特徴であり、そのような特徴をもつ奉納品に関しては前8世紀後半のクノッソスのデメテル聖所まで確認できるので、暗黒期のひとつの伝統となっているとよい。したがって、中空の像の存在事由を考察することは、暗黒期の聖所遺物の特異な形状的特徴を通して、当時の祭祀のありかたを理解するための重要なアプローチとなりうるであろう。⁸

ここでは、この中空の意味について、クレタ島で知られる洞穴聖所とのアナロジーからひとつの解釈を試みてみたい。イダ山頂にある洞穴や、ラシシ盆地の南外輪山にあるプシクロの洞穴に代表される天然の洞穴は、新石器時代以来、神の宿る神聖な場所として崇拜のための空間であった。洞穴が聖所として信仰を集めることは、クレタ島に限ったことではないが、とりわけイダ山頂の洞穴はⅢ章でみるように、青銅器時代から暗黒期を経てアルカイック期・古典期・ヘレニズム期にいたるまで、神の居場所として厚い信仰の対象地であり続け、多数の奉納品が納められた。⁹

こうした洞穴聖所の成立する背景には、地下の異世界の出入り口に対する畏怖が存在すると思われるが、それは大地から泉が湧き、植物が産み出されるという不可思議な自然現象に由来するところもあるのであろう。自然現象の不可思議の背後には、生命をもたらす女神の存在が観念されていた。そして、その女神は地下空洞におわすという信仰が生じ、洞穴の神聖視とともに「中空ろな空間には神が宿る」という民間通念が存在していたと思われる。祭礼行列での練り歩きに抱えられたであろう「万歳女神像」を轆轤でがらん胴にしたのは、この観念のもと祭祀行事に際して女神を迎え呼び入れるために、人工的に中空ろな空間を作り出したのだと考えられないだろうか。¹⁰

さらにより本質的な問題として、「万歳女神像」が陶製であることについて考察を進めよう。神の像を石や金属で製作することは、東地中海の周辺世界では先史の時代から行われていた。エーゲ海域においても初期青銅器時代に、「キクラデス人形」と通称される石偶が存在したことはよく知られている。しかしその後は、石の偶像も金属の大型像もギリシア世界には現れず、クレタの後期青銅器時代においてもテラコッタ小像かファイヤンス焼きの女神像に限られる。おそらくこの女神像の系譜を引いて、LMⅢC期になると多数の「万歳女神像」が居住地の聖所で行われる祭祀のために、陶土で素焼き製作されるようになる。¹¹

女神像が陶製であることに関する考古学的見地からの一般的説明は、海岸部や平地から高所・高地へと住民が避難したLMⅢC期の危機的時代にあっては、外部との交流も島内の物流も途絶え、輸入資材である金属や大理石を入手できなくなったはずであり、その代換えに手近な造形資材である陶土を用いて像を製作した、というものである。しかし、この説明は外在的要因のみに帰するだけで、「万歳女神像」の形質特徴、すなわち衝撃に弱く壊れやすい陶製であることの本来的特徴にまで考察が及んでいない。逆説的に述べるならば、行列や展示など野外での移動のなかで使われる「万歳女神像」が、なぜ損壊しやすい陶製の像であったのか、という点が根本的な疑問である。¹²

祭祀の儀式行為で持ち運ばれたとすれば、衝撃に弱く壊れやすい陶製の女神像には、その過程で損傷する事態が生じてもおかしくはない。テラコッタ小像とは異なり、「万歳女神像」は様々なアトリビュートや装飾具が精巧に作られ、身体の正面ではほぼ90度屈折させた両手を挙げた姿勢で表される。

万歳女神像のもっとも特徴的な表現である頭部のアトリビュートと突き出した両腕は、祭祀の実践に際してはもっとも損傷しやすい部位なのである。また、像が大型になればなるほど、損壊の危険性は高くなる。

破損の虞にもかかわらず「万歳女神像」が素焼きの陶製であるのは、儀式と祭祀の観点からそれぞれに理由が得られる。まず一つは、この像がこの時期の聖所で執り行われる儀式に、他の3種の用具とともに用いられたことが示唆している。それらはみな例外なく陶製であり、この点で女神像も他の3種の祭祀用具も形質上なら変わるところはない。すでに述べたように、一箇所の聖所で多数の「万歳女神像」が出土し、一方では同一の基本構成をとりながらも、他方で細部においては様々なヴァージョンで表現されている。この多数性と多様性は、女神像が神聖不可侵の御神体としてではなく、その時々、あるいはそれぞれの崇拝者グループの祈願内容に応じて、容姿の細部を様々にアレンジできる実用品であったことを示している。

また、頸部背面の把手の事例があるのは、当時の人々が女神像を儀式の際に手で触れることのできる祭祀用具のひとつとして認識していたからに他ならない。その意味では、カラトスやスネークチューブや陶板と同様な祭祀用具であり、「万歳女神像」だけを特別に他の素材で作成する必要はなかったのだと考えられる。「万歳女神像」は神を呼び込む容れ物としての機能を持ったが、祭祀儀式を執り行う崇拝者たちにとっては祭祀用具のひとつに過ぎなかった。重要なのは崇拝の対象である神の存在であって、用具である女神像それ自体ではない。

<3. 死と生の循環>

しかし、もうひとつの理由として、实用合理性の観点からではなく、「万歳女神像」の象徴的意味合いの側面から考察のアプローチを試みてみたい。女神の像をあえて脆く壊れやすい陶土で製作にしたのには、最初から「万歳女神像」が損壊してしまうことを織り込んでいたからではないか、とも考えられるのである。

この点については、クレタ島中部の高所居住地として知られるシヴリタ遺跡の状況が参考になるであろう。この遺跡では、儀礼的酒宴の陶器の破片が埋められた窪穴が、居住地周囲の地面に多数穿たれており、窪穴の数の多さと一つ一つの穴の小さな規模から、一度の儀式ごとに用いた陶器を新たな窪穴に破棄したと考えられている。それは陶器の破棄も儀式の一環として行われたことを意味する。すなわち祭祀用具には、儀礼的使用と儀礼的破棄という二局面が存在するのである。¹³ベンチ聖所での祭祀用具はシヴリタの事例と同様に扱われたわけではない。「万歳女神像」は、屋内ベンチの上や床面からばらばらの破片となって発見されるが、それは建物の崩壊に伴



写真5 シヴリタ遺跡の窪穴群

う損壊とみられており、意図的な破壊ではなかったようである。祭祀儀式の空間とは離れた位置に一括して埋納された事例も存在しない。だが、「万歳女神像」を含めた祭祀用具は、陶製という形質の特徴によって、必然的に損壊の高い可能性を持っており、祭祀の催行者はそのことを無視することはできなかつたであろう。

したがって、破損・損壊のために、——あるいは壊れていなくとも一定の期間を経た後に——、祭祀機能の役割を終えた陶製用具は、破棄される時には「土に返す」と意識されたであろう。「万歳女神像」が陶土で製作されているのは、土くれから創出された物の行く末として、地面に返され土くれに戻される宿命を暗示しているのである。そこにあるのは、祭祀用具を単なる物理的物体としてみる合理的観念ではなく、大地から生まれ出たものは大地に還るのが定め、大地に戻った魂はまた新たな姿をとって再生するという輪廻転生の世界観である。そのためには「万歳女神像」は神の像であっても、不滅不朽の石や金属であるよりは、むしろ陶製であることの方がふさわしい。¹⁴

しかしそうではあっても、当時の聖所で執り行われた祭祀の意味をコスモロジーの観点から理解するためには、「万歳女神像」が表象する存在についてより掘り下げて考察する必要がある。この点に関して、青銅器時代の宗教を研究している Marinatos (1993) が興味深い見解を提示している。

Marinatos は、クレタ島の LMⅢC の聖所遺跡で発見される「万歳女神像」が、基本姿勢や衣服の共通性を持ちながらも、頭上の鳥や「聖別の角」などの髪飾り・衣装の上の装飾品・手や腕に携える果実や蛇などに多様なヴァリエーションがあることについて、それを巫女や崇拜女性の姿を表したことに基因するとみる意見を否定し、それらはひとつの神格対象を崇拜する者たちが、それぞれのグループ毎に女神として表現した結果であり、観念的で抽象的な存在である神格が具体化・具象化された集合的表象であると論述した。

さらに、出土状況と実物の観察から、女性の像のみで男性像が存在しないこと、ほとんどの聖所遺構で複数体発見されること、アトリビュートに蛇か鳥あるいはその両方を携えていること、製造様式から多数の作り手ないし工房の作品であること、柵の上に置かれただけでなく持ち運びされたことを指摘し、この女神像は大地と天空の被造物を融合的に表象する「自然の女神」であるとした。また Marinatos は、聖所における儀式においては、共同体内の諸集団がそれぞれの「万歳女神像」を用意し、屋外での祭祀に用いた後、行列による運搬によって衆目に顕し、最後に祠の内部のベンチに安置したと述べる。¹⁵

原幾何学文様期のクノッソスのフォルテツァ墓地から出土した遺骨納陶棺アンフォラの胴部に描かれている「万歳女神」の図像や、しばしば死者の魂ないしその運び手とみなされるアトリビュートとしての鳥は、この女神はたしかに自然の象徴神ではあるが、天空の世界よりも地下＝大地の世界の方を象徴していることを示している。¹⁶それについては、「万歳女神像」とともに出土するスネークチューブとカラトスも傍証となるであろう。

スネークチューブの両側にあしらわれたり、しばしば女神が携えたりする蛇は、地中の巣にたくさんの卵を産み、大地から湧き出でる生物であり、脱皮を繰り返して成長するところから、豊穡信仰のアトリビュートであると同時に死と再生を象徴する存在でもある。そして、蛇の筒とカラトスを用い

て行われる灌奠儀式は、次代の多産と豊穡を祈願して地下神へ産物の一部を返す儀礼的行為である。大地に還るということは生命の死滅を意味するが、大地はまた新たな生命が萌えいずる根源でもある。

LMⅢC期の居住地遺跡各地の「ベンチ聖所」では、「万歳女神像」・スネークチューブ・カラトス・陶板を主要な用具として、死滅と再生をつかさどる大地の女神を祭る儀式が、共同体の内部のグループ毎に聖所建造物に隣接する庭で行われていた。この神事は、共同体の存続を根源的な理由とするものであったが、そのために必要な動植物の多産と豊穡が祈願され、その際に地下の神へ灌奠儀式によって生命の一部が地下へ返された。つまりこの祭祀儀礼の根底には、共同体の維持・存続は、必然的にその一部が地下へ還り、新たな一部が生まれくるという死と生の循環が伏在している。そして、その死と生の循環祭祀の中心に「万歳女神像」が立っていたのである。

Ⅱ. 「廃墟聖所」と「祭祀の記憶」——物神性と身体性——

暗黒期のクノッソス遺跡を発掘調査したColdstream (2006)によれば、この時代のクノッソスは周辺の墓地に多数の埋葬がなされており、居住区域も12.5haを超える大規模な集落を形成していたが、それに先立つ青銅器時代に行政と物流そして祭祀の中心であった宮殿は、暗黒期の住民にとって居住をタブーとする神聖不可侵のエリアとして認識されていた。クノッソスを最初に発掘したエヴァンズは、宮殿南西区画の大階段と中央広場の間の場所に、暗黒期の基礎遺構を発見し、宮殿崩壊後そこにレアの聖所が設けられたと考えた。¹⁷

< 1. 遺構の神聖視 >

しかし、LMⅢC期からSM期についての確実な考古資料をもって宗教的活動の痕跡がうかがえるのは、エヴァンズがキャラバンサライと呼んだ新宮殿期の施設内のかつて泉場を改装して再利用した遺構だけである。宮殿の丘の南斜面に位置する「泉の間」と呼ばれるこの遺構からは、ベンチに置かれた数体の「万歳女神像」と「聖別の角」2個が発掘され、床面からもその他の貯蔵・調理・宴会用の容器が出土し、この場所が祭祀の空間であったことがわかる。「泉の間」における出土品から、そこで宗教活動は前1000年頃に途絶えたと考えられる。¹⁸

アルカイック期初頭の前8世紀後半になると、宮殿の丘を南に下ったギブサデスと呼ばれる斜面区域に、女性神格の聖所が造営され、古典期にはデメテルが祭られる神殿が設立されたことが判明している。そこは神殿ができるまでは野外祭祀場であつたらしい。また、これとは別に宮殿の西方に隆起しているなだらかなアクロポリスの東裾野の一面に、アルカイック期にグラウコスを祭った半神の祠が設けられる。前6世紀の祠の建物は二間構成で、北側の青天井の部屋は祠施設の内庭として機能したらしい。¹⁹

以上のように、暗黒期の大規模集落であつたクノッソスでは、「泉の間」ののち前800年頃までの間、聖所の構造体が見られなくなる。また、「泉の間」に関しても、当時のクノッソスの集落規模を考慮すれば、その限られたスペースでは集落住民の大勢参加する大掛かりな祭祀の催行ができなかった

ことは明らかである。

暗黒期クノッソスの祭祀空間の問題に関しては、近年宮殿エリアの調査の進展によって、宮殿エリアの内側、とくに広い内庭を使って祭祀が執り行われたことが推定されており、クノッソスでは避難集落のベンチ聖所に類する「泉の間」だけでなく、クノッソスの宮殿遺構が神聖視されて、祭祀の場所として再利用されていたらしい。宮殿エリアが居住にはタブーであったことも、そこが聖別された空間であったと考えれば理解できるであろう。²⁰

このようなミノア期の宮殿遺構の一部が祭祀の空間として暗黒期に再利用されていたことは、クノッソスにとどまらず、同様な大規模集落を維持したファイストス遺跡や、その西3kmほどのところにあるアイヤ・トリアダ遺跡でも確認されている。その他にも、ティリッソス遺跡、アムニソス遺跡、コモス遺跡、パレカストロ遺跡でも、古き建造物の廃墟が暗黒期の祭祀場として利用されていることが判明している。これらの遺跡には宮殿は存在しなかったが、ミノア期の複合施設が存在していた。

アイヤ・トリアダではLMⅢ期にベンチ聖所である建屋Hが存在し、そこからは「万歳女神像」は見つかっていないが、いくつかのスネークチューブが出土している。ただし、この聖所はLMⅢB期に放棄され、Piazzale dei Sacelli（礼拝堂の境内）と呼ばれる、遺跡中央の南に位置する舗装遊歩道の区画に祭祀の場所に移ったと見られる。この場所からは、LMⅢC期－SM期の遺物が多数出土し、PG期のテラコッタ像や青銅製牛小像も見つかっており、暗黒期の祭祀が執り行なわれていたことは確実である。²¹

初期の発掘者たちが残した資料を再調査し、あわせてPiazzale dei Sacelliの空間構成を観察したD'Agata (1998) は、廃墟となったミノア期のストア東壁と北壁が暗黒期における聖所の空間組織の中心的役割を果たしていたと指摘した。そして、そこでの祭祀は、第一局面（LMⅢC期－SM期）と第二局面（PG期）では性格に変化が現れるが、一貫して古き建造物遺構に新たな祭祀機能を持たせ、青銅器時代の祭祀慣行の記憶を継承する様式をとったと論じた。アイヤ・トリアダのPiazzale dei Sacelliの聖所は前7世紀に衰退していき、同世紀末には放棄される。D'Agataは、この衰退と放棄をファイストスの動向と関連付けている。²²

クノッソスと同様に宮殿崩壊（LMⅠB期）後も大規模集落が存続したファイストスでは、宮殿の南西区域において古い建造物の廃墟の上にポスト宮殿期の構造物が建てられ、隣接するアクロポ



写真6 アイヤ・トリアダ遺跡：Piazzale dei Sacelli



写真7 ファイストス遺跡：ハララの居住地エリア

リス・メディアナの丘の頂にも居住地ができたが、祭祀をどこで執り行なったかは判然としない。暗黒期には最も西の丘クリストス・エフェンディの頂にも集落が形成され、その東中腹テラスのアイヨス・ヨルギオス教会の場所に祭祀場があったかもしれない。また、宮殿の丘南東部の裾野の川べりに位置するハララ区域にも居住エリアが広がった。²³

注目すべきはLMⅢC期から暗黒期を通して、宮殿エリアでは居住の痕跡はないが、中庭や階段などから祭祀にかかわる遺物が出土していることである。ここでもやはりクノッソスの場合と同様、宮殿には居住のタブーがあり、神聖視される空間として祭祀をとり行う一部の場所があった。しかし前9世紀以降、宮殿エリア南西の居住区域南の一画に青銅の器や盾の奉納がなされる聖所が存在した。その後、前7世紀の末頃に自然神おそらくラト（レト）女神への祭祀のための構造物が建てられ、その上に現在基礎を目にするヘレニズム時代のレア女神の神殿が建立された。²⁴

宮殿の存在しない遺跡の中で、ミノア期のヴィラのあったティリッソスはLMⅠ期の放棄の後、LMⅢ期に再居住され、かつて建屋Cのあった場所にテラコッタの牛や人物の小像また「聖別の角」など、野外の祭祀活動の痕跡が発見されている。その後の状況は不明な点が多いが、祭祀の連続を主張する学者もいる。歴史時代に関しては、アルカイック期初頃の円柱基礎や階段状の石の祭壇、テラコッタの女性小像や陶器片などが出土している。²⁵

コモスにおいては、LMⅢC-SM期に野外祭祀場が存在し、発掘によって前1000年頃の小神殿の跡が確認されている。この神殿Aでは前10世紀後半からフェニキア人の来訪を示す遺物が伴うようになり、それを前800年頃建て直した神殿Bは、屋内にベンチと円形竈そして3本石柱の祠を備えた正面開放型のフェニキア様式であった。おそらくそこは、祭祀儀礼の中で西メサラ平野の住民エリートとフェニキア商人の会合がもたれる、いわば「祭典交易」の現場であったのであろう。²⁶

ミノア期にはクノッソスの外港であったアムニスは、後期青銅器時代の末に放棄されたが、LMⅢC-SM期において散発的な参詣訪問があったらしい。組織的な発掘がなされていないため前7世紀までの詳細は不明である。前7世紀後半のファイヤンス焼きの器と像は東方ギリシアや近東地域との接触を示し、青銅製の三脚鼎や小像も発見されている。これらの奉納品はいずれも、遺跡のあるパレオホーラの丘の麓にあった44m以上のミノア期の石壁遺構の傍で見つかっており、この構造体がこの時期の祭祀ステージを提供していたようである。²⁷

クレタ島の東端に位置するパレカストロについては、新宮殿期居住区域から「パレカストロ・クーロス」が出土したことで有名だが、「ディクテのゼウスへの讃歌」を記した碑文が発掘区域の南から発見されたことでも知られている。後者の碑文はローマ帝政後期のものであるが、記載されている讃歌それ自体は前4世紀ないし前6世紀の作と推定されている。パレカストロではLMⅢB期に居住地が放棄され、住民は内陸山奥の高地避難集落へと移動したと考えられているが、廃墟となった居住地の街区Xから三脚鼎や武具などの大型青銅製品、またミニチュアの青銅奉納品が多数出土し、ここが周辺の諸共同体の共同祭祀場として利用されたと思われる。その参加者は、奉納品の高い価値や芸術性から、各地域集落のエリート層であったことがわかる。²⁸

＜2. 廃墟祭祀と祭祀劇場＞

以上、7箇所の遺跡で青銅器時代の廃墟が後の時代の祭祀の場所として再利用されている状況が確認できるが、このうちのクノッソスとファイストスではポスト宮殿期以降も大規模な居住地が存続し、それ以外の遺跡では、フェニキア人との接触が早くからあったコモス遺跡をのぞいて、おおよそ居住がいったん中断した後、暗黒期末あるいはアルカイック期初の時代に祭祀のために人々が集まる場所となったと思われる。クノッソスとファイストスにおいても、暗黒期の祭祀が執り行われたのは、もはや居住空間ではなくなった宮殿エリアであり、その点では、他の遺跡の状況とほぼ重なりとみてよいであろう。

こうした青銅器時代の遺構をのちに祭祀の場所とするクレタの慣行について、Prentは継続と変化という観点からクレタの聖所と祭祀の実態を復元しようとする主題の中で、「廃墟祭祀 cult of ruins」という概念をつかち、クレタにおける暗黒期祭祀のひとつの特徴として分析している。Prentがもっとも特徴的であるとして指摘するのは、ほぼ同時期にギリシア本土でみられる「墓所祭祀」の慣行が、クレタにおいては存在しないことである。本土のトロス墓はポリス形成期のギリシア人エリート層がミケーネ文化を自らのルーツとし、領土権の主張と国家の統合とに利用したのに対して、「廃墟祭祀」はクレタのエリート層が古きミノアの記憶を維持し、神格と結合させることで社会内で自らの特権的地位を確認し、近隣共同体間の利害調整という機能を果たした。²⁹

Prentによれば、その際の祭祀において物理的な中核をなしたのが、古きミノア期の建造物である。とりわけ、切石で組み上げられた構造体は居住が放棄された後も、風雨に耐えて象徴性を保持するに十分なモニュメントの威容を残していた。実際の利用のあり方は場所によって様々ではあっても、巨大な遺構を崇拜の場とし、中心的・公共的機能の記憶が保持されたことは、クレタの暗黒期祭祀のひとつの形式といえる。³⁰

ミノア期の遺構が祭祀の現場となっている現象を「廃墟祭祀」という概念で説明しようとするPrentに対し、Cucuzza (2013)は大型廃墟が残存しながら暗黒期に祭祀の痕跡のない遺跡の存在と、アイヤ・トリアダ遺跡のネクロポリスにあるトロス墓Aに「墓所祭祀」の可能性があること、すなわち暗黒期の同時期にアイヤ・トリアダでは2つの異なる方法で祭祀がなされたことを指摘して、「廃墟祭祀」論を批判的に検証している。³¹

Cucuzzaが重視するのは、ミノア期建造物の物理的痕跡たる廃墟ではなく、再利用される空間に残された精神的痕跡たる「祭祀の記憶」である。つまり、クノッソスやファイストスの宮殿で中心的な広場が暗黒期の祭祀に利用されたのは、かつての宮殿時代においてもその広場が重要な儀式が実践される祭祀の場であったからであり、もともとの空間の神聖性ととも、暗黒期の社会において保持された歌舞音曲と祝餐の集団的記憶によるのである。したがって建造物で留意すべきは壁体構造ではなく、集団が祭祀を実践する広場やクレタ独特の劇場の大階段である。Cucuzzaはそうしたクレタ的な空間設備配置を「祭祀劇場 cultic theaters」とみなしている。³²

「祭祀の記憶」が、主体的に参加する祭祀の儀式である歌舞音曲の実践を通じて、集団的記憶とし

て継承されていくという指摘は、本稿にとっても興味深い観点である。なぜなら法の社会化についても、その集団的記憶は単なる文字の記載を手段とするのではなく、主体的な体験という身体性を伴わねばならなかったと考えるからである。しかし他方で、Prentのいう「廢墟祭祀」の根幹にある古き過去の記念碑的建造物の遺構という存在も、決して無視することのできないもうひとつの重要な観点である。ここでは後者の観点を前者の観点と重ね合わせながら、ミノア期の建築構造体の周囲で行われた暗黒期の祭祀の意味を考えてみたい。

< 3. 記憶の身体性と壁体の物神性 >

まず確認すべきは、暗黒期の居住地には切り石を組み上げて建造された大型の構造体が存在しないことである。LMⅢC-SM期の避難集落に設けられた祭祀の建物は、居住用の家屋とは別個の独立した聖所としての建屋であっても、その建築様式は居住家屋となんら変わるところはなかった。クノッソスやフェストスで、宮殿の周囲に広がった居住エリアの家屋と宮殿内にあるミノア期の廢墟とが、根本的に作りが異なることは一目瞭然である。アムニソスの44 mにもわたるミノア期の石壁は、たとえそれが朽ち果てた状態であっても、日常を超越した存在に見えたに違いない。つまり、生活を送る日常空間と祭祀を行う非日常空間とは、少なくとも視覚的に、はっきりと区別すべきことを意識できたはずである。

次に注目すべきは、壁体・石材の再利用である。コムスでは最初期の神殿Aが、ミノア期の建屋Tの壁体の一部を組み込んでおり、それを後継した神殿Bも、建屋Tの石材を利用して造られた「島」の上に建てられている。こうした古の立派な建造物の石材再利用は、クノッソスやファイストスの暗黒期の居住地における住居には行われなかった。聖なる石は聖なる建物にこそふさわしい。コムスの神殿内で露出したミノア期の壁の上から数体の轆轤陶製の大型牛像が発見されたことも、暗黒期の祭祀における壁体の神聖性を傍証するであろう。³³

しかし「廢墟祭祀」は、そこに前代の建物の残滓があるだけでは成立しなかった。上記7箇所の「廢墟祭祀」が確認される個々の遺跡には、それぞれの歴史的経緯と地理的環境があることはPrentも認めている通りである。Cucuzzaが指摘する「祭祀劇場」は「祭祀の記憶」が受け継がれる舞台としての空間であるが、そこで特定の祭礼儀式（歌舞音曲と祝餐）が執り行われることが、その舞台を意味あるものになっている。他方で、LMⅢC期に新たに設営された高地の避難集落の場合と異なり、宮殿やヴィラなどのミノア期の遺産が残存する場合、そこが地域の祭礼の場所として神聖視されることは、むしろ自然であったであろう。記念碑的建造物の遺構に対する畏怖と過去の「祭祀の記憶」の集団的継承は、聖別空間での祭礼儀式として一体化している。

この点で重要なことは、「祭祀の記憶」は単なる觀念上の存在ではなく、歌舞音曲と祝餐という具体的に身体的な行為の形式をとらなければ社会化されないという現実である。歌舞音曲とは歌および音による聴覚効果と踊りによる肉体の運動であり、祝餐とは嗅覚と味覚を通じての体験である。すなわち、遺構を前にして催行される祭礼儀式に人々が参加し、歌舞音曲で神を崇め讃える儀礼的集団行動によって、身体性のレベルで祭祀の記憶は受け継がれていくのである。換言すれば、過去の記憶を社

会の中に埋め込むためには、こうした身体的な経験を共同で集団的に実践することが必要であった。

このような集団的記憶を身体性によって継承するとき、古の記念碑的建造物の残滓は、視覚的效果によって象徴的意味合いを強く帯びようになり、壁体のフェティシズム（物神性）ともいべき意識を生んだと思われる。大きな切り石を整然と組み上げた巨大な建造物は、人の手によるものではなく、ある種の超自然的な力が作用したものと認識されたとしても不思議ではない。ホメロス叙事詩の中でも、難攻不落のトロイアの城壁が「神の築きたもうた城壁」であると歌われている。そして、オデュッセウスの木馬の計によって内側からトロイアは陥落し廃墟になってしまうという物語は「廃墟祭祀」の考察にとって非常に示唆的であろう。³⁴ 廃墟なった巨壁は、過去の輝きへの追憶と神への畏敬の念を喚起するのである。

Ⅲ 洞穴聖所と野外聖所 —— 祭祀の転換と戦士イデオロギー ——

クレタにおける僻地聖所について、Prent (2004) は暗黒期になって新設された6箇所と太古から続く14箇所を挙げ、そのうちの7箇所に直前のLMⅢC-SM期における祭祀活動が確認でき、別の7箇所は後期青銅器時代の間に中断し、それ以外の場所は調査が不十分で不明であると報告している。そして、それらの景観上の特徴からは洞穴聖所と野外聖所の2つに分けうるが、内陸・山間地・不毛の荒地という所在の共通性がある一方で、奉納品の種類と質によって豪華型・中庸型・質素型の3分類を提起している。

本章では、Prentの分類に従いながら、とくに暗黒期の僻地聖所における祭祀のあり方を出土奉納品に注目して整理し、その特徴からそこでの祭祀が当時の社会に果たした機能とその背景にあるコスモロジーにアプローチしてみたい。僻地に所在する聖所は、その僻遠性の故に地域の政治的動向に左右されず、広域的な観点から祭祀の変遷を追跡することが可能だと思われるからである。

< 1. 僻地聖所のヒエラルヒー >

まず豪華奉納聖所として挙げられているのは、イダ山とツツロスの洞穴聖所そしてシミの野外聖所の3箇所である。これら3つの聖所は、僻遠の地にあるにもかかわらず青銅器時代以前から聖所として機能し、LMⅢC-SM期に一時衰退するが、暗黒期において多数の豪華な奉納品を集める重要な聖所として発達した。LMⅢC-SM期の奉納品は轆轤造りの陶製動物像・怪物像や「聖別の角」など質素な陶製品に限られ、他の古くからある僻地聖所と同様であった。ところが、暗黒期になると陶製品の奉納が消滅し、代って青銅製の動物像が登場してくる。そして、前8世紀末～7世紀初頃にそれらの青銅奉納品が大型化し、あわせて貴重な宝石類の奉納も見られるようになる。



写真8 シミのヘルメスとアフロディテの野外聖所

シミの野外聖所では、前8世紀に青銅製の男性戦士像が奉納され始め、それまで多数を占めていた雄牛青銅小像の奉納から野生山羊の青銅小像への変化が生じている。この時期には外套を持ち足に翼のある男性や杖を持った青年を描いた青銅板も出土しており、それはヘルメス神の姿であろうと同定されている。シミにおいては時代が経つにつれて聖域の構造物が順次敷設されていくが、興味深いことに暗黒期の西壁に新宮殿期の囲い壁がそのまま組み込まれていて、この聖所の古い祭祀伝統と暗黒期の新たな祭祀の習合が象徴的に見て取れる。³⁵



写真9 イダ山頂洞穴聖所出土の青銅製大盾

アルカイク期以降の時代において、ゼウス・クレタゲネス（クレタ生まれのゼウス）の聖所であったイダ山の洞穴聖所は、海拔1500 m以上の高山に所在し、幼子のゼウスがクロノスの目を逃れて成長した神話の場所として知られている。出土品からは新石器時代以来、古代末期に至るまで聖所として機能し続けたことが明らかにされているが、中期青銅器時代末から後期青銅器時代初に隆盛を迎えた後、LM III C-SM期には陶製奉納品のみでの衰退期となった。暗黒期にはいると陶製の小像や「聖別の角」が消える一方、前8~7世紀に多種多様な奉納品が膨大に蓄積され、イダ洞穴は超広域的な祭祀の場となる。

この時期のイダ山洞穴聖所から出土する奉納品は青銅製が圧倒的に多数であり、なかでも中央部に張り出しのある大盾群がもっとも目を引く。これらの大盾には、ライオンや神話の怪物、種々の大型動物が浮き彫りにされ、獅子狩りの場面をモチーフにした装飾浮き彫りも見られる。この盾の他にも、大型の釜や三脚鼎、フェニキア製やキプロス製の青銅製品、黄金の装飾品、鉄製の鎌・穂先や刀剣、象牙製品なども多数出土している。わずかな陶製品としては、男性テラコッタ像や馬・牛・山羊のテラコッタと供物・祭祀用の陶製容器などがある。³⁶

クレタ島南東海岸に近いツツロス洞穴については、部分的な発掘調査がなされるに留まり、十分な出土資料は公表されていないが、暗黒期の奉納品として黄金装飾品・象牙小像・ファイヤンス焼き製品・テラコッタの人物像と動物像各種が報告されており、この時期に祭祀が活発化して繁栄したことがわかる。³⁷

以上のように、豪華奉納聖所の変遷として、LM III C-SM期以降いったん奉納数が減少した後およそ前8世紀頃から急激に隆盛に向かうこと、LM III C-SM期にはもっぱら素焼きの轆轤造りの陶製品であった奉納が多数の青銅製品や貴金属の宝飾品に変わったこと、LM III C-SM期には見られなかった海外からの高級品が前8世紀頃以降頻出すること、そして、女性と雄牛をモチーフとするLM III C-SM期の奉納品から男性戦士と野生山羊のモチーフ表現に移り変わるなどが明らかにされている。

次に中庸奉納聖所は、豪華奉納聖所に比べると格段に奉納品の数と品質が劣るけれども、田園や山間にあっても一定の祭祀の中心としての機能を果たした聖所であり、パツォスやプシクロの洞穴聖所とアイヤ・トリアダやティリッソスの野外聖所が挙げられている。後2者については「廃墟聖所」

の考察で触れているので、ここでは前2者についての奉納品を確認していこう。

パツォスの洞穴聖所は、レシムノン南20kmほどの山間のアマリ溪谷の断崖にある横穴のひとつ（高さ4m 幅18m 奥行9.3m）であり、新宮殿時代から祭祀が行われ、LMⅢB期以降は広域的な参詣者を集める聖所になっていた。LMⅢC-SM期についてはテラコッタの牛や山羊、轆轤造りの大型怪物像、「聖別の角」、それに青銅製のレシェブ神の像が同じく青銅の雄牛とスフィンクスとともに洞穴内と前方テラスから出土している。暗黒期になるとテラコッタ像の奉納は続くが「聖別の角」は消え、前8世紀頃に青銅奉納品の割合が増加し、豚や鳥の小像が登場する。また、この時期の男性や女性の青銅小像、フィブラ、原幾何学文様のアッティカ陶器も出土している。³⁸

ラシシ盆地の南西外輪山の内側斜面に位置するプシクロ洞穴は、新石器時代最終期から初期青銅器時代までは居住と埋葬の地であったが、MMⅠ-Ⅱ期の頃から祭祀が行われてMMⅢ-LMⅠ期の頃に最盛期となった。LMⅢC-SM期の奉納としては、青銅製のナイフ、槍、鏃、「双斧」、フィブラ、ピンなどとともに、象牙製や黄金製の髪留めなどが報告されている。陶製品も轆轤製の人物像、雄牛や怪物の小像、様々な容器が出土している。暗黒期になると奉納品の数と種類はしだいに増大し、青銅奉納として人物小像、牛・子羊・山羊・馬・鳥、杯や香油入れなどが多数を占める。前7世紀頃に奉納の傾向に変化が生じ、陶製品に型押し造りの男女の頭部像、裸の女性像や走駆の男性あるいはスフィンクスやグリフィンなどを描いた陶板、大釜やクラテルや水差しなどが現れ、他方で青銅製の大盾・ミニチュア盾、鏃・穂先、種々の装飾品が東方からの象牙小像や黄金装飾品などとともに出土している。³⁹

この2箇所の洞穴聖所は、前8世紀ないし前7世紀に近隣の人口が増えてくるにつれて、奉納の数と種類そして質が変化したようである。プシクロに関しては、ラシシ盆地の人口が増加して対面のパプーラに大きな集落ができてきたことに起因しているであろうし、パツォスについては、東8kmの山間地にシブリタの集落が発展してきたことと無関係ではないだろうと、Prentは推定している。⁴⁰

3番目の質素奉納聖所は、大多数の奉納品が陶器とテラコッタ小像であり、小型の青銅品が散発的にしか現れないような僻地の聖所である。このカテゴリには、ユクタス山とコフィナス山の2箇所の山頂野外聖所、アムニソス・スコティノ・ファノレメニ・リリアノそしてスタヴロミティの5つの洞穴聖所が挙げられている。これらの場所は、青銅器時代から田園や山間の僻地聖所であって、LMⅢC-SM期に奉納数が減退するだけでなく大型陶製品が消え、以後、暗黒期を通じてもっぱら陶器とテラコッタ小像の奉納に限られ、大型で高級の奉納品は現れることはなかった。⁴¹

この状況からPrentは、質素奉納聖所では先行する時代の奉納状態が、暗黒期においても図像的表現の発展も文字表現の出現もなく継続し、クレタ島内で生じてくる政治的変動にともなう祭祀システムの基準化という変化にもほとんど無関係なまま、旧来の祭祀慣行が細々とながらも連綿と続いた、と述べている。そして、このような聖所の参詣者は、おもに山羊の群れをつれ歩く牧者たちであったであろうと推測している。⁴²

Prentによれば、以上の3種の僻地聖所には、暗黒期の間に階層秩序（hierarchy）が構築された。すなわち、青銅器時代とほとんど変わるところのない質素奉納聖所の洞窟や野外聖所は、散発的な牧羊者による細々とした祭祀慣行という下層の位置にあり、中位には付近住民の祭祀場であった段階か

ら、徐々に広いエリアの諸集落より参詣者を集め、しだいに奉納品の大型化と高級化が進む中庸奉納聖所が存在する。そして、LMⅢC-SM期以降いったん奉納を減退させながらも、前8世紀頃から急激に海外製品や貴金属製品の高級な奉納品を大量に集めて隆盛した豪華奉納聖所が、その最上位を占める。前8世紀以降の豪華奉納聖所には、非常に広域的な範囲から参詣者が訪れるが、彼らはそうした豪華な奉納が可能な各地域のエリート層であった。⁴³

< 2. 戦士エリートのイデオロギー >

中庸奉納聖所と豪華奉納聖所に奉納された大型・高級・豪華で見事な品々の特徴からは、前8世紀以降の暗黒期社会のあり方がうかがえる。それまでにはなかった青銅製の大型大釜と三脚鼎は、クレタに限らずギリシア世界でもアルカイック期までの聖所奉納に典型的な豪華奉納品であるが、まずそれほどの品物を奉納できる富の蓄積が社会の内部に存在したことを前提にする。とくに、豪華奉納聖所ではそのような見事な品々が多数奉納されている状況は、そこでエリート層の富と実力の誇示、それをめぐる競争が実践されていたことを示している。言い換えれば、豪華奉納を行う競争に参加できる者たちだけが、社会のエリートの資格を持ちえたのである。

次に、奉納品の大型大釜や三脚鼎は奉納専用に使作されたとしても、その容器の機能としては酒宴の際の液体、おそらくブドウ酒の容れ物であり、合わせて出土する杯や水差しの奉納品を考慮すれば、大勢の者たちで酒を酌み交わす儀礼的な交流の祝餐の存在が暗示されている。つまり、実際の奉納品を使ってはいなくとも、奉納を行う特定のエリート構成員からなるグループは、大釜や鼎を囲んでともに飲食を経験する中で、グループ内の仲間意識を確認し結束を固めるという集団的儀礼行為を行っていたと思われる。中庸奉納聖所においても、このような奉納品が見られることは、地域社会の内部でエリート層が集団化し、いくつかのグループに分かれて競い合っていた状況を推測させる。⁴⁴

また、前8世紀以降の奉納で典型的な青銅武器（大盾・刀剣・槍の穂先など）は、明らかにこの時期のエリート層が軍事に深く関わっていたことを示している。しばしば「戦士エリート」とみなされる彼らの奉納は、それ以前の奉納に特徴的な轆轤造りの陶製女神像／人物像やテラコッタ動物像や陶器類から推定される祭祀と崇拜のあり方とは、決定的に変化している。かつては社会の存続と再生産そして多産と豊稔を第一の願いとした死と再生の女神への祭祀は、エリート集団の勝利と武勇を祈願するものにとって代わられているのである。質素奉納聖所や中庸奉納聖所での陶製品奉納の存続を見れば、前者の祭祀が決して消え去ったわけではないことがわかるが、それらの聖所が僻地聖所のヒエラルヒーの中で中下層に位置づけられるとすれば、前8世紀以降、社会内部での祭祀に関わる意識はエリート層主導の下に大きく変質したと言えるであろう。

イダ洞穴聖所より多数出土した青銅の大盾は、中央に獣や鳥の頭部をあしらった張り出しのある特異な形状をしていて、まったく実践向きではなく奉納専用に使作されたと思われるが、盾の表面を円環状に飾る浮き彫りにはライオンや神話的怪物、種々の大型動物そして獅子狩りの場面がモチーフとされ、アッシリア工芸の影響が指摘されている。このことから前8世紀までに東方からの工芸職人のクレタ到来を推定する見解もあるが、本稿ではこれらのモチーフが東方世界と接触を示しつつ、アッ

シリアの王権のごとき強力な覇権権力を象徴していることが確認できればよい。おそらく他を圧倒するほどの豪華で見事な多数の青銅製大盾の奉納は、イダ洞穴聖所が僻地聖所ヒエラルヒーの頂点に立つ、クレタ全島の国際聖所であったことの証左でもあろう。⁴⁵

さらに、中庸奉納聖所と豪華奉納聖所からは、クレタ島外からの海外輸入の奉納品が現れてくる。とくにキプロスやエジプトなどの遙か東方からの珍しい貴重品は、海外との交流を誇示しているように見える。貴重な舶来品の入手は、有力者間の国際的な贈与交換によるという見解とフェニキア人の到来をはじめとする東地中海・エーゲ海交易の展開の結果と見る立場とがあるが、ここではその問題には触れない。いずれにしても、舶来品の奉納は奉納主体者が、狭い地域内で生活する地元住民とは一線を画す国際的地位にいることを表している。しかも同時に、それは見知らぬ異世界へのアクセスと交渉の能力を意味する物的証しであり、単に海外との交流だけでなく、神の世界との交渉をも象徴するものであった。

ところで、僻地聖所ヒエラルヒーが形成されていくなかで、奉納競争という行動によって、豪華奉納聖所では広域的なエリート層の集合と交流が、中庸奉納聖所では地域的なエリート間交流がもたれたとすると、それらの奉納は特定の祭祀儀式の形式をとったと思われる。僻地聖所の発掘調査によれば、洞穴聖所では洞穴内部だけでなく入り口付近の野外でも多数の遺物が出土し、それらの多くが陶器や獣骨を含むことから、祭祀儀式は洞穴の外で行われたらしい。野外聖所でも特定のミノア期の廃墟の周囲にある広場で祭祀が行われた形跡がある。⁴⁶これは要するに、聖なる洞穴や廃墟の前で行われる祭祀儀式と儀礼的祝宴が、集合した各地のエリートたちの交流の機会であり、同時に、新参者が地域を越えたエリート層の世界に入会する儀式の場でもあったのである。

< 3. 祭祀の変化と世界観の転換 >

僻地聖所における奉納品についての以上の観察を踏まえれば、LMⅢC-SM期から暗黒期末までの僻地聖所の祭祀の変化が浮かび上がってくるであろう。この期間の初期に大量かつ一般的であった素焼き陶製の奉納は、同時期の避難集落の聖所や「廃墟聖所」にも共通する特徴であり、先立つ青銅器時代の伝統を継承しているだけでなく、地域や聖所を問わず均質的で画一的な性格を帯びている。

このことは、おそらく社会の均質性を背景にしているものと思われるが、さらに陶製という形質に着目すれば、「万歳女神像」の場合と同様、そこには消滅と生成の循環という世界観が内在している。そうした社会の存続と再生産を重要な願いとする価値観は、僻地聖所での奉納を見る限り、時代が経つうちに徐々に薄れつつも暗黒期の後半にいたるまで続き、質素奉納聖所の連綿たる継続に見られるように、社会の基底に横たわる心性としてはその後も存在し続けたであろう。

しかし他方で暗黒期の末、前8世紀頃より、僻地聖所における奉納のあり方が大きく変わり、陶製よりも青銅製の奉納品が優勢となる。しかも、その青銅製奉納品は、高度な技術で装飾を施した非常に豪華で個性的な工芸品となった。イダ洞穴聖所の青銅製大盾のように特定の様式が流行し、その様式の枠内で豪華さを競うという現象も見られる。

このような奉納のあり方は、富とエネルギーが奉納行為に集中的に投下できる特権的エリートの存

在を前提にするものである。その特権性は、富の蓄積と軍事の実力とに誇示されるが、さらには神的異世界との接触と交渉という能力としても表現される。そして青銅という形質は、陶製とは対称的に、恒久性・不朽性を象徴しており、自らの富と権力が永遠に続くことを願う静態的な価値観を反映している。

IV. 「神殿」の登場と「メガロン」——内部空間と神の機能分化——

クレタにおいて神殿と呼べる宗教建築がいつから登場したのかを計る際に問題となるのは、どのような建造物を神殿と認めるのかという基準である。他の建築からは独立して、宗教にかかわる機能をもつ建造物とするのであれば、すでにLMⅢC期の避難集落であるカヴーシのヴロンダ遺跡に確認される建屋Gはその条件を十分満たしているし、ほぼ同時期のカルフィ遺跡にも発掘者が「神殿 temple」とよぶ祭祀のための建造物が存在している。⁴⁷

ギリシア本土ではコリントス地方のペラホラ遺跡やアルゴス地方のヘライオン遺跡などから出土する前8世紀頃の陶製の館モデルが、正面に2本の円柱を配したファサードを備えていることから神殿のプロトタイプであろうと考えられているが、クレタの陶製モデルとしてはすでに前1750年頃には正面上部に2つの「聖別の角」を置いて屋内に女性像を椅子に座らせた直方体の祠がガラタス遺跡から出土しており、独立した神聖なる建築物の歴史は宮殿時代にまで古く遡る可能性がある。⁴⁸

クノッソスのLMⅢC-SM期の祭祀場であった「泉の間」からも、内部に「万歳女神像」を置いた円錐屋根の円筒型祠モデルが発見されており、これは「泉の間」それ自体やヴロンダの建屋Gのような同時代の祭祀の建物を模したミニチュアのように見える。ただし、アルハネス遺跡付近の墓から出土した前9世紀後半の同様な形状のモデルには、屋上に口づけを交わすカップルと一匹の犬らしき動物が載っており、このモデルは屋内の「万歳女神像」との配置の対称性から、女神の地下世界と人間・動物の地上世界との関係を示す生と死のコスモロジーの表現であると考えられている。そうであれば、「泉の間」出土のモデルも象徴的な表現であって、現実の建物を描写しているのではないかもし



写真10 クノッソス「泉の間」出土の祭祀建造物陶製モデル



写真11 アルハネス出土の祭祀建造物陶製モデル

れない。⁴⁹

< 1. 神殿内の竈の存在 >

それまでの祭祀の建物とは一線を画する独立の構造物で、建築構造上アルカイック期以降の神殿の先駆けとなる暗黒期の建物は、クレタ島南部メサラ平野の西海岸にあるコモス遺跡の「神殿B」である。神殿Bには前1000年頃より先行する神殿Aが存在したが、「廃墟祭祀」の項目で触れたように、前800年頃それにとってかわった神殿Bは、東正面を開放して屋内に円形竈と3本石柱の祠を備えるというフェニキアの様式を採っており、クレタ島では初めてのタイプであった。ただし、両側の内壁に設えられたベンチは、LMⅢC期～暗黒期クレタの聖所建造物の特徴を受け継いでおり、その意味では、神殿Bは外来の要素とクレタの伝統を習合させた新たな独自の宗教建築様式といえるであろう。⁵⁰

壁の造りは荒削りの切石の再利用であったようであるが、神殿全体の構成プランは同時期の家屋とも、それまでの祭祀の建物とも、非常に異なるものである。前750年頃、床面上昇によって三石柱の祠に被さるように第2の竈が設置され、最終局面では前二者の上に石板を四角に並べた第3の竈が構築された。こうして約1世紀の間に内部の様相は変わっていくが、崇拜の対象と思われる聖なる石や屋内の中央に位置する石組竈の存在は、以下で触れるドレーロスやプリニアスの初期アルカイック神殿にも共通する特徴である。また、神殿Bの内部からは、種々の陶器やテラコッタ小像、青銅製の鎌と穂先などが出土しているが、注目すべきは焼かれた羊ないし山羊の骨が発見されたことである。これは、屋内で動物を焼く犠牲式が行われた証左であり、野外の聖所でなされる祭祀とは異なる性格の儀礼行為が、コモスの神殿に存在したことをうかがわせる。

コモスの神殿Bより約半世紀遅れて前750年頃、東部クレタのミラベロ湾西10km程のドレーロスにアポロンを祭る神殿が建立された。神殿の近くから3体の青銅製神像が発見され、ひと際大きい男性像がアポロンを、小さな2体の女性像が母ラト（レト）と双子の姉妹アルテミスの二女神をあらわすと解釈されている。この神殿は、居住されなくなったコモスの場合と違い、双子山の鞍部に広がるドレーロスの居住地のエリア内に存在し、また、西の丘の上にあるもう一つの大型巨石建造物と並存していた。アポロン神殿の壁は粗仕上げの石を組み上げたタイプであるが、北側正面のみは巨石ブロックで建造されていた。ヘレニズム期に東側に作られた貯水槽から、前7世紀後半の法碑文を記載した巨石ブロックが発見されており、それらは神殿東壁の一部と考えられ

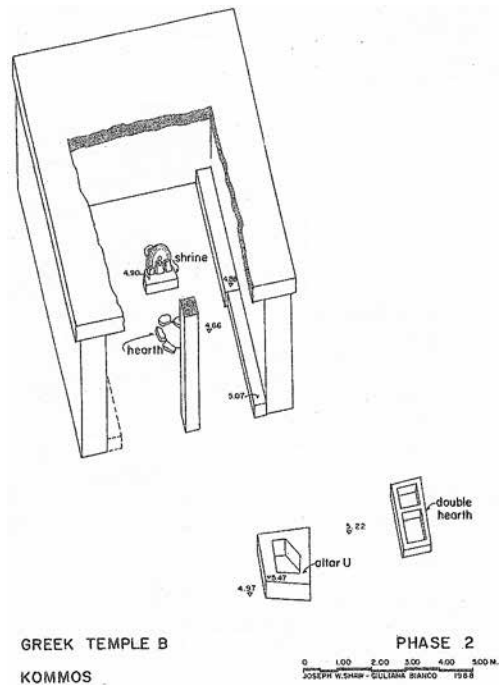


図1 コモスの神殿B Shaw & Shaw (2000) より転載

ている。西壁の外側に岩盤を削って三角形の小エリアができていて、南には5室の別の建物が隣接している。⁵¹

アポロン神殿の内部には、床のほぼ中央に石板組の四角形の竈があり、灰が詰まった状態で発見されている。竈の北側に柱の基礎石が一箇所残り、南側内壁の南西の角にベンチが存在する。その上からは陶製の容器類と祭祀用具の他に、青銅のゴルゴネイオンや骨と灰も見つかっている。ゴルゴネイオンは前6世紀の作品だが、その他は前7世紀のものと推定されている。さらに、ベンチの東脇に角型の祭壇が立っており、ベンチの前には石のテーブルが備えられていたらしい。武具は出土していないが、鉄製と青銅製のミトラ留めリングが発見されている。三角エリアには前8-7世紀のピトス（陶製大甕）2個を含む、12のピトスが置かれていた。その他の小型陶器と牛頭部のテラコッタ、奉納用の青銅小円盤、丸盾と兜を装備した18cmの青銅像、前7世紀頃の有翼青年とゴルゴン頭を線描した石板なども出土している。

他方で、西丘の頂上部にある大型建造物は、前室と主室が東西に配置された二部屋構成で、主室の中央に炭の残ったコの字型の竈が、その西側に2つの柱礎石が存在する。この建物の内部から、前7世紀後半ないし前6世紀前半の多数の青銅武具（大盾・兜・胴鎧・ミトラ・脛当て）が出土し、ほぼ同時期の女性の上半身を描いた陶板も出ている。この建物からは、ヘレニズム期のドレーロス市民入会碑文が出土し、それを根拠にアポロン・デルフィニオスの神殿であるという推定と、鞍部のアポロン神殿との関係性から神殿ではなく、男性市民の集会堂であるアンドレイオンだとする見解との議論がある。いずれにしても、発掘された考古資料から見て、



写真12 ドレーロスのアポロン・ラト・アルテミスの三柱青銅像

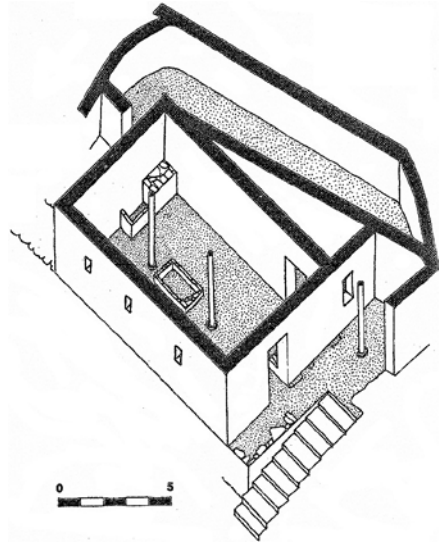


図2 ドレーロスのアポロン神殿復元図

Mazarakis Ainian (1997) より転載



写真13 ドレーロスの西丘頂上部の巨石大型建造物

ここで祭祀と儀礼的会食が行われたことは間違いないだろう。⁵²

ドレーロスとはほぼ同様な状況が、クレタ島の中央に位置するプリニースにも存在する。広い谷を臨む断崖テラスの緩やかな丘にプリニースの居住エリアが広がるが、頂上部の広場に面する位置に2つの神殿Aと神殿Bが並んで建っていた。神殿Bは前8～7世紀の建立で、縦並びに3室から成る細長い建造物である。神殿の壁は粗仕上げの切石の水平積みで組み上げられ、厚さ53cm高さ95cmが残存する。中央の部屋の中心に竈が石板で囲う形で設えられ、内側の土に火焼の痕跡が認められている。竈の東脇に柱の土台石があり、西側には祭壇もしくは供物台の脚部と思しき円錐石もある。部屋の北西隅の床に灌奠儀式用の石桶がはめ込まれていた。神殿Bからの出土品は、日用陶器や粉引き石、織物用銅石、そして西奥の部屋のピトス6個分の陶器片であり、祭祀用具に当たるものは発見されなかった。⁵³

神殿Bに寄り添うように立つ神殿Aは、やや遅く前7世紀後半頃に建てられた、幅広で前室と内陣からなる二室構成の建造物で、内陣の空間は神殿Aよりも広い。壁体は礫石の組み上げで60cm前後の厚みがある。向かい合う女性坐像と盾と槍で武装した騎馬兵士たちを彫刻であしらった建築装飾によって、建築年代が推定されている。したがって、神殿Aと神殿Bは前7世紀後半以降、併存していたと考えられる。内陣の南壁中央に小さなベンチが備え付けられ、部屋の中心には石板を並べた竈が設けてあった。その内側の焼けた土の層から灰と獣骨が出土している。竈の東脇と北西隅には円柱の礎石があり、南西側には四角石が残っている。出土遺物は少ないが、陶製の大釜の断片装飾、青銅板の断片、テラコッ

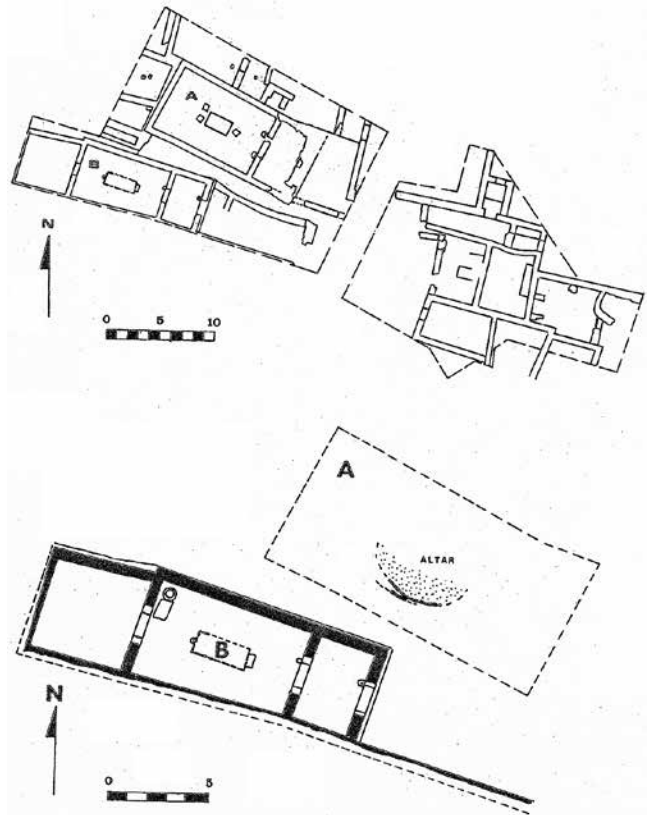


図3 プリニースの神殿A・神殿Bプラン

Mazarakis Ainian (1997) より転載



写真14 プリニース遺跡の神殿A・神殿Bの遺構

タの獅子頭、それに床一面に焼けた獣骨と木材破片が散在していた。床下の地層からも焼けた獣骨や陶器破片、そして弓状に並べ置かれた12個の石が報告されており、神殿建立前にも宗教的活動がこの場所であったらしい。⁵⁴

< 2. 神殿の外観と規模 >

イラクリオンから西へ30km程の山間地にある谷の南の丘にアクソスの居住地遺跡がある。その居住地の丘の頂上部にアルカイック期の大型建造物が所在している。このアクロポリスの建造物からは、岩盤を削った祭壇、大量の獣骨と灰、動物テラコッタ、ピトスの陶片、アルカイック期の碑文が発見されている（法碑文一覧表3のA1）。その碑文にはアンドレイオンでの職人の食事に関する規定があり、それ故にこの建物は市民の会食堂アンドレイオンと推定されているが、アポロンまたはゼウスの神殿とする見解もある。最近の調査では、この構造物は建屋ではなく人工的なテラスで、宗教的機能よりも市民共同生活の場だったのではないか、という指摘もあるけれども、祭壇やテラコッタ動物小像の出土は、やはり祭祀とのかかわりを強く示唆していると思われる。

この丘の東斜面に別の三室構成の神殿建築が存在し、青銅の武器類、数百のテラコッタ小像、浮き彫りを施した建築パーツの断片が出土し、神殿としての機能を持つ構造物であったようである。この神殿については、建設年代も祭られる神格も不明であるが、前10世紀頃から祭祀の場所となり女性・馬・野鹿のテラコッタ小像の奉納品、前7世紀後半ないし前6世紀前半に年代付けられる有翼馬の打ち出し装飾の兜や、大釜を掲げる女性戦士の装飾ミトラなどの見事な青銅武具奉納品が出土しており、アクソスの住民にとって重要な聖所であったことは疑いない。⁵⁵

メサラ平野の北側の縁のほぼ中央に位置するゴルテュン遺跡では、青銅器時代末頃からの3つの高所

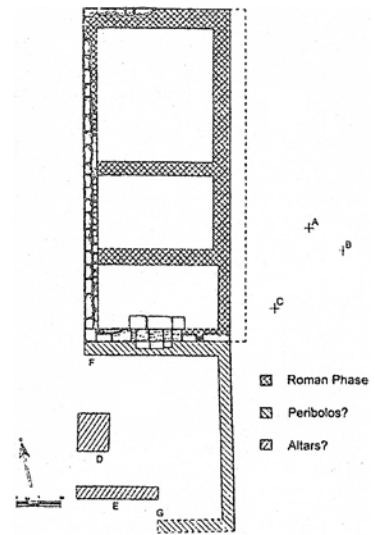


図4 アクソスのアクロポリス建造物遺構 Tegeu (2014) より転載

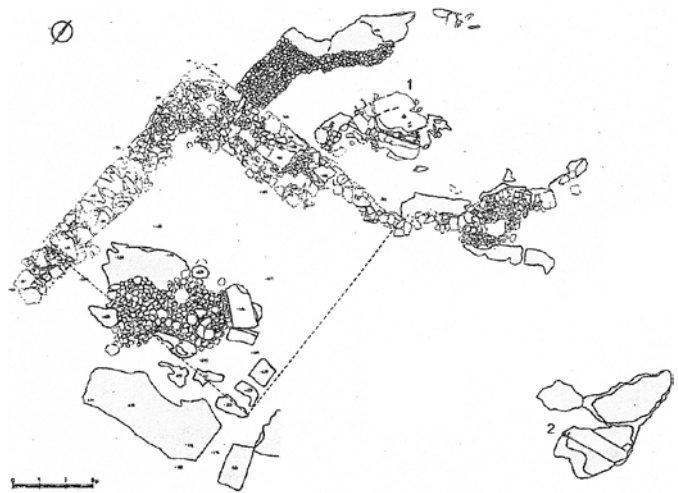


図5 アクソスのアクロポリス東斜面の神殿 Tegeu (2014) より転載

居住地のひとつであったアイヨス・ヨアンニスの丘に、前8世紀ないし前7世紀頃に切り石ブロックを組み上げた建造物が出現した。東側の擁壁で支えられた広いテラスに設けられた石造りの祭壇の存在は、この頂上部エリアがこの時期すでに祭祀の場であったことを示している。祭壇近傍から石灰岩を彫刻した大型女性坐像の下部が発見され、スカートの赤色付けや装飾模様などから前650年頃の作品で、祭壇もしくは神殿に付属する彫刻像と解釈されている。祭壇の周囲からは前8世紀頃の供物用の器やそれを載せる台脚、奉納用の陶器と小石像、青銅ミニチュアの釜や武具やボウルやピンなどが出土している。しかし、このテラスからの出土品の大多数は、前7世紀以降のテラコッタの男女小像や各種の動物像である。⁵⁶

この丘の建物は13.65m×16mの規模の建造物であるが、特異な内部構成をしている。石を敷いた帯状の敷居が内部を前後に区分し、奥の空間は薄い壁で3つの空間に分けられ、さらにそれぞれの空間が壁で前後に仕切られている。中央の空間の床には、石板で囲われた桶がある。このような空間構成は北シリアやエジプトの祭祀建造物の影響であることが指摘されている。ここからは女性を浅浮き彫りで描いた建築装飾の石板が発見されており、この神殿は、祭壇近傍出土の女性坐像とも関連付けて、未婚の乙女を守護する女神、すなわちアテナを祭っていたと考えられている。

このようなテラスや祭壇そして神殿の大掛かりな造営は、前8世紀以降アイヨス・ヨアンニスの丘が居住エリアから聖所専用の場所へと転換したことを意味する。この期間に住民は丘の裾野や平野部へ降りて居住するようになったのである。そして、新たな平地居住エリアの一面にもう一つの神殿が現れる。それがアポロン・ピュティオスの神殿である。この神殿の正確な建設年代は明らかではないが、神殿の壁面に刻まれた碑文の最古の推定年代が前600年頃であるため、神殿がもともと壁に碑文を書くための建物ではなかったとすると、建設時期は前7世紀の間であろう。関連遺物の報告がないので、ここでの祭祀の様子はわからないが、非常に多数の法碑文がこの神殿の基礎部分や壁面に刻まれていたことは、ここが特別な意味をもつ場所であったことの証しである。⁵⁷

イダ山に比定されるプシロリティス山塊の北西の裾野、海から約10km南の内陸に位置するエレウテルナの遺跡は、三方を深い谷に囲まれた細長い急峻な丘の上にある。暗黒期には、ベネチア時代の城塞にちなんでピルギと呼ばれるこの丘と、西側の溪谷を挟んで立ち上がるもう一つのニシの丘に居住の痕跡が残り、また、ピルギ丘の西麓に前9世紀初からローマ期まで使われたオルシ・ペトラ墓場が発見されている。ニシの丘にも野外聖所が存在したが、注目すべきはピルギの丘で二つの神殿建造物の基礎が報告されていることである。

一つは丘の頂上部テラスの6.5×11.2mの建造物で、前7世紀頃に建てられたと推定されている。この建物の内部構成はメガロン・タイプと呼ばれ、コモスの神殿Bやドレーロスのアポロン神殿、プリ

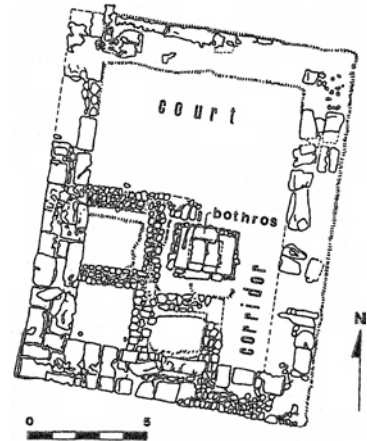


図6 ゴルテュンのアクロポリス頂上部のアテナ聖所プラン

Mazarakis Ainian (1997) より転載

ニアス神殿Aでもみられるように、床に供物溝穴が設けられていた。ヘレニズム期やローマ期の建物が重層的に建てられたため、最古層の建造物の状況は十分に知られないが、これが神殿であるという同定は妥当であろう。このテラスからは、前6世紀～前5世紀のいくつかの碑文が発見された。丘の東斜面のカツイヴェロスと通称されるエリアに、もう一つの細長い（5×15m）建造物があり、これもメガロン・タイプの構成であると報告されている。⁵⁸

< 3. クレタの神殿の特異性 >

前8世紀から前7世紀頃の居住地にある大型建造物について、以上の遺構・遺物から状況の確認できるコモス、ドレーロス、プリニアス、アクソス、ゴルテュン、エルウテルナの事例をつうじて観察してきた。これらをみな「神殿」とみなしてよいかどうかは議論の余地があるであろう。神殿としての違和感は、ギリシア本土や他の島嶼の神殿と比較するとき、建築構成上の大きな違いからも生じるであろう。たとえば、本殿の外周に円柱をめぐらすという「ペリステュレ式」の様相をクレタの神殿は採っていない。外側周囲に円柱が立ち並ぶ神殿様式はクレタでは導入も発達もすることなく、壁体のみのも素っ気無い概観が、結局ヘレニズム期になってもなお、この島の神殿の姿であった。

しかしながら、前8/7世紀において規模や構造様式の点で、これらの事例が同時期の居住家屋やそれまでの祭祀儀式的空間を圧倒する威容を備えていたことは明らかであり、居住地近傍で宗教的な儀式がなされる巨石大型建造物として、「神殿」の名にふさわしいのではなからうか。それらの建造物は、たしかに特異な空間構成や付属施設、そして奉納品の特徴を示しているが、むしろそれ故にこそ、クレタの神殿の特徴的なあり方を考察するに十分な要素と素材を提供している。最後に、以下の4つの観点でそれをまとめておきたい。

その特徴の第一は、神殿内部の構成である。その構成とは、2室ないし3室からなる内部の中央部屋の床に板石を並べ立てた竈もしくは掘り込んだ供物溝穴の存在と、その周囲に配置される複数の柱の組み合わせであり、「メガロン・タイプ」と呼ばれる。さらに、それに付随して供物用のテーブルと内壁に接するベンチが造作されることもある。その部屋からは、奉納品として青銅や陶製の小像の他、供物台や盃などの祭祀用具とともに焼けた獣骨や灰が出土する。別室にピトス（＝大型の甕）が置かれることが多く、穀物やブドウ酒などの貯蔵用であった。したがって、この内部空間では祭祀の犠牲式の催行とあわせて、犠牲獣の一部と穀類やブドウ酒を調理して、参加者で分け合う共同食事が行われていたと考えられる。

第二の特徴は、居住地から遠く離れた海外の遠隔地聖所にして、島外からの来訪者との交流の場という特殊な機能を果たしていたコモスを別にすれば、いずれの居住地においても2つの大型建造物がほぼ同時期に建設されて並存しているという事実である。両者は立地と構造の点で違いが見られる。プリニアスの場合は隣接しているが、その他の居住地では、一方は丘の頂上部を占め、他方は裾野や丘の中腹のテラスにある。また、頂上部に位置する建物は、中腹の建物に比べより大きな空間を内包している。

出土遺物を分析したPrentによれば、これは両者の祭祀の性格が異なることに起因する違いである。

すなわち、後者は共同体の男子成員のための会堂として、成人戦士となる若者の入会儀礼や成員持ち寄りの共同食事を行なう「アンドレイオン」であり、それに応じた収容数の多い広い空間が必要であった。それに対して、前者は社会の上層エリート、なかでも役職に就く限られた者たちだけが祭祀のために会合・祝餐を行ない、また異国からの賓客をもてなす場所で、クレタにはその用語は見られないが、「プリユタネイオン」に相当する。前者に祭られるのは、ゼウス、アテナ、アフロディテであり、後者の祭祀はもっぱらアポロンに向けられる。⁵⁹

第三の特徴としては、すでに述べたように、建物本体に柱をめぐる建築様式をとらず、壁体のみで聖別空間を構成していることである。これは、内部に柱を配していることと裏表の関係にあるのかもしれない。他のギリシア世界では神殿の外部に祭壇があり、犠牲式や祈祷などの神事はそれを中心に屋外で行なわれるが、クレタの初期神殿では内部の竈や供物溝穴が祭祀儀式的中心であった。コモスの神殿Bに存在した3本の石柱祠が暗示するように、柱に神格を想念する信仰があるとすれば、クレタの祭祀において柱は建物の外部にではなく、神殿内部になければならないだろう。そしておそらく、この外側に周柱を欠く建築様式の定着が、法碑文を神殿や神聖な建造物の壁面に刻む慣習の環境的条件を用意したと思われるのである。

第四の特徴は、神殿で崇拝の対象として祭られる神の特定化と個性化である。LMⅢC-SM期の「ベンチ聖所」で祭られる神は、「万歳女神像」に集合的に表象される女性自然神であった。神の像がそれ以外の形象をとることはなく、この女神はどの場所でも同一の形式をもって崇拝される、集合的で、偏在的で、抽象的な神格であった。それに対して、神殿で祭られる神は、アテナであったり、アポロンであったり、ゼウスであったり、アフロディテであったりと、それぞれの神殿で個別具体的である。それは神の機能分化とも言えるであろう。こうした神殿の神々の具象性と明確な機能分担は、大型巨石建造物として神殿が他の建物とはっきり区別できるようになった具象性と構造的に連関していると思われる。

V. アルファベットと聖別空間 —— 文字表現のメンタリティ ——

クレタ島にアルファベットの到来が確認されるのは、前10世紀末ないし前9世紀初の頃である。クノッソスのテツケ墓域の前10世紀末頃の副葬品に、口縁部にフェニキア文字で「□□の子、△△の盃」と刻まれた青銅製ボウルが出土しており、これがクレタにおけるアルファベットの最古の事例である。この銘文に関しては、フェニキア人の記名ではなくクレタの人名の可能性や、クノッソスの有力者による発注の可能性が上っているが、その当否は別にして、書き刻まれたアルファベットの実例を、フェニキアの手になる高級青銅製品を通じて当時のクレタの地域エリートが目にする機会をもったことに間違いはない。⁶⁰

メサラ平野の海岸聖所であるコモス遺跡についても、神殿Aから出土する前9世紀のフェニキア陶器の中に碑文の入った断片1例が確認されており、おそらく奉納銘か所有者銘であったと思われる。そして前8世紀後半以降、ギリシア・アルファベットが陶器に刻まれたグラフィットとして、神殿B

の周囲の建物跡から出現してくるようになる。⁶¹

そうした前8世紀後半～前7世紀の陶器銘文41例を分析したCsapo (1991)によると、そのほとんどが輸入品への書き込みで、焼き上げられる前に生産地で書かれたものも存在するが、9例については南クレタ産の陶器であり、銘文が現地で記載されたものであるという。ただし、その銘文はいずれもエウボイアの文字の形態的特徴を持ち、外来の海上交易商人による記載と推定されている。⁶²

< 1. 非石銘文の出現状況 >

コモスのグラフィッティや未公開のものも含めて、石以外の素材に記載されたアルカイック期クレタの銘文の事例をJohnston (2013) が42件の>casual< inscriptionsとして一覧表に整理しているので、それをもとに出土地ごとに出現の状況を検討してみたい。⁶³

アフラティからは14例の青銅武器銘文が挙げられている。そのうちのひとつは、「スペンシティオス規定」として知られる、ミトラの裏表いっばいにダトレイア人のスペンシティオスとその家系の者たちに対する取り決めが記された長文の碑文である（法碑文一覧表3のDa1）。それ以外はどの銘文も「□□が、これを奪取した」と読める／復元できる短文であり、出土状況はわかっていないが、ベンチつきの大型建造物に由来するらしい。それらはいずれも前7世紀後半に年代付けられ、前6世後半頃とされる「スペンシティオス規定」碑文も、規定の内容は前7世紀後半に遡ると考えられている。⁶⁴

ゴルテュンの8例の銘文は、いずれも陶製の製品に限られ、盃や盃台、オイノコエ、小像、盾に刻まれている。すべて前7世紀に年代付けられ、出土地もアクロポリスのアテナ聖所である。陶製の盾の内側円周部に刻まれている銘文は、レトログレードで主格人名が読み取れるので、アフラティの青銅武器と同様な記載の可能性が高い。それ以外は断片的で内容の推定は困難であるが、奉納品の銘文であることは疑いないであろう。⁶⁵

クノッソスでは4件のうち2例が、アリュバロスに記された前7世紀の銘文であり、墓地から出土した。残る2例は、居住地出土の前6世紀後半のアンフォラ取手にある4文字の記号銘文と、前450年頃の銀の腕輪に「ニケタスの子ノトカルテスがダマトゥルに」と刻まれたデメテル聖所出土の銘文である。⁶⁶

ファイストスからは、前500年頃の「ヘラクレス・ゴルテュス」と刻んだ陶器断片と前5世紀のものと思われる「テミストクレス」の人名が読み取れる陶器断片の2例の他に、前8/7世紀とされるピトスの銘文が存在する。最後の事例は、ピトス肩部に水平のグラフィットで「パイドピラスの子エルペティダモスのものである」と読める銘文がある。Johnstonは居住地由来と分類するが、発掘したLevi (1969)によれば、このピトス銘文はヘレニズム期の神殿に付属する建物から出土し、この神殿が中央の竈やピトスの存在する「メガロン・タイプ」の構成をもち、その下層にある前7世紀頃の大規模な祭祀建造物を受け継いでいるようなので、聖所における文字表象の類例としてもよいかもしれない。⁶⁷

居住地近傍の神殿や聖所からの銘文出土に対し、僻地聖所でのアルカイック期の銘文事例は、豪華奉納聖所であるイダ山洞穴やシミの野外聖所においてさえも、きわめて少なくまた遅く、この点ではオリンピアやデルフィの聖所などのギリシア本土の広域聖所とは対照的である。イダ洞穴では前500

年頃の「シュブリタの子パイストスが十分の一として奉納す」との銘が青銅製ボウルにあるのみで、シミでは前6世紀の「ダタラの人ダモテトスが製作す」と銘が入った青銅の器だけである。クレタ島西部アクロテリ半島の北端にあるレラの洞穴聖所からも、前5世紀前半の「ニュンフにわたしを奉納す」の銘文付き陶器が発見されているが、他のギリシア世界では一般的な製作者銘や奉納銘の表現は、アルカイック期のクレタでは青銅製品に限らず、陶器や彫刻においても極めて稀である。⁶⁸

この他に、初期の事例として、クレタ極東域のアイヨス・ヨルギオス出土の金・青銅製スキュフォス（前8/7世紀）に「奪取した」と読める銘文と、クレタ西部ハニア地域のカヴァリムリから焼成前に「W」と刻まれた前8世紀のアンフォラがある。これら2例は、いずれも墓地より出土している。ミラベロ湾に面するエルウンダの墓地からも、脚部に数文字の記載が確認できる陶器が出土しているが、年代は古典期のものである。⁶⁹

さて、こうして個々の事例を検証してみると、前8世紀ないし前7世紀の初期の非石銘文は、副葬品として出現するのは稀であることが明らかになる。また、聖所の中でも山間地の僻地聖所では、奉納品の見事さを競ったような豪華奉納聖所での銘文事例が非常に少ないことが、イダ山洞穴やシミの野外聖所の状況から判明する。このことは、暗黒期末頃のエリート層同士の自己表現のアリーナであった僻地の広域聖所の祭礼トポスにおいて、アルファベットの文字はほとんど利用されていなかったことを意味すると解釈できるであろう。

他方で、都市部/居住地の聖所・神殿に関しては、8例を数えるゴルテュンと14例を数えるアフラティの銘文が示唆的である。アフラティに関しては、厳密な出土状況は不明であるが、推測されているように居住丘の頂上テラスの緩やかな斜面にあるベンチ付き大型建造物からのものであったとすると、銘文のある青銅武器はベンチの上に並べ置かれていたのかもしれない。この建物は、祭祀の行わ



写真 15 アフラティ遺跡のベンチ付き建造物遺構

れる神殿とする見解と、市民男子が集い儀礼的な共同食事をするアンドレイオンとみなす立場があるが、いずれにせよ神聖な行事の空間を構成する建物であり、そのような共同体の祝祭礼コンテキストの中に銘文が存在することに留意すべきであろう。

ゴルテュンの銘文はすべて、アクロポリスのアテナの聖所から出土しており、奉納品であると理解される。アフラティの場合と違うのは、銘文がいずれも陶製の容器や盾に刻まれていることであるが、共通点としては2枚の盾の銘文が主格男性で記載されていることである。そのうちの一枚は「エンブリダスがこれを奪取した」と復元可能であり、もう一枚も「エウテトス」という男性人名主格が読み取れるので、同様の文意を想定できるであろう。そして、この「誰それがこのものを奪取した」という文言はアフラティの青銅武器銘文にも現れる銘文形式であり、クレタにおける戦利品武器奉納の定式文句であったと考えられる。

勝利の記念に戦利品の一部を神に奉納する慣行はクレタに限ったことではないけれども、「奪取した」という定式的文言は、奉納者個人の戦士アイデンティティを表示するだけでなく、その奉納品が勝利の獲得物として自らの手中にあったことをも示している。したがって、この表現が前6世紀～前5世紀前半の奉納銘からなくなることは、個別的な武勇と所有の意識表示が後退した社会状況を暗示するであろう。

組織的な発掘調査が行われたカヴーシ・アブリアの集落遺跡からは、わずか3例の記号銘が出土するのみで、これらはアルカイック期の居住地にあった日用陶器類に刻まれていた。クレタ極東部のプラエソス遺跡にはテラコッタ女性小像の背面に「DOPH[]」と刻まれた前7世紀の銘文があるが、このようなテラコッタ銘文の事例はギリシア世界全体でも珍しい。⁷⁰

< 2. 個人的石碑の新表現 >

次に、石に刻まれた個人的銘文についても観察していこう。非石碑文と石碑を集めてアルカイック期クレタのリテラシーを論じたPerlman (2002) は、42件の private inscriptions を挙げている。このうちJohnstonの一覧表からは漏れている非石碑文と石の碑文の計19例をリストアップしたのが表2である。⁷¹

表2 アルカイック期クレタの私的碑文一覧

No.	実態	形質・形態	年代	出土地・発見地		銘文	備考	出典
4	グラフィット	陶器・クノッス製壺	前7世紀	アイヤ・ペラギア	アペロニア	Ρ(?) ΗΣΓ(?) / Π (?)		未公開
6	グラフィット	陶器破片	前7世紀	プリニウス		エボロス×3、オスミュルゴス×2、…トウラス×2	練習書き?	IC. I xxvii, 1 LSAG. 315 no. 10
7	墓碑銘	ステレ	660-650 BC	プリニウス		判読不明	左端	Lembesi (1976) 21-22
25	路頭碑文	岩盤	アルカイック/ 古典期初	イタノス	シデロス岬	…モンが我を描いた	イルカの線描画	IC. III vii, 2
26	路頭碑文	岩盤	525-500 BC	イタノス	シデロス岬	エウテレスが… (意味不明) …イタノス人… (意味不明)	4行の牛耕式	IC. III vii.3
28	路頭碑文	岩盤	アルカイック期	オルス	スピナゴ半島	テュンドロスが	銘文左右に足の線描画	IC. I xxii, 64 b
29	墓碑銘?	記念碑	アルカイック期	プロラ	ピュロス	タラドスが		IC. I xxv, 1
30	グラフィット	陶器	前6世紀	ファイトス		ヘラクレスが/ゴルテュスが	2行、キュドニアのアイギナ文字	Garducchi (1952-54)
32	墓碑銘	墓標	前6世紀	ヘルソネソス	ヘラニカ	ティメスの子アウグロスが我を立てた	2行、レトログレード	Masson (1979) 64-65 LSAG. 316 no. 20
33	奉納銘	青銅大釜の縁	500 BC	アイヤ・ペラギア	アペロニア	タリオスがアポロンにこれを奉納す		SEG XXXIV, Nr. 913
34	グラフィット	石灰岩ブロック	前6-5世紀	エレウテルナ		キビュイオスの		SEG XXXXV, Nr. 1271
35	カロス碑文	壁面	前5世紀初	ゴルテュン	オデオイ東壁	ダマゴラスは美しい		IC. IV, 50
36	グラフィット	壁体ブロック	前5世紀初	ゴルテュン		ソティモスが	レトログレード	IC. IV, 71
37	路頭碑文	岩盤	前5世紀?	イタノス	シデロス岬	これはデニオスの両足	銘文上に一揃いの足の線描画	IC. III vii, 4
38	墓碑銘	ステレ	前5世紀初	キュドニア		我はアウトメデスの	キュドニアのアイギナ文字	IC. II x, 7
39	墓碑銘	ステレ	前5世紀初	キュドニア		我はメリッソスの墓である	キュドニアのアイギナ文字	IC. II x, 13
40	墓碑銘	ステレ	前5世紀初	キュドニア		カリデイカ (スの?)	2行	IC. II x, 10
41	グラフィット	ラムセスII世神殿	前5世紀初	エジプト	アビュドス	エウリュプロクスの子ダモクリトス が		SEG XXIV, Nr. 1708
42	グラフィット	ラムセスII世神殿	前5世紀初	エジプト	アビュドス	ヒュベルパロスを		SEG XXVI, Nr. 1709

Perlman (2002) Fig. 3 に拠る (ただし、Johnston (2013) Tab. 1 との重複を除く)

まず前者の非石碑碑文ではあるが、No.4の陶器とNo.33のグラフィットに関してはアイヤ・ペラギアの洞穴聖所出土の奉納品で、No.30のファイストスの陶器も文面から奉納銘のようである。興味深いのは前7世紀とされるプリニアスの練習書きとおぼしきNo.6の陶片グラフィットであり、Perlmanはこれをもって、当時すでに読み書き技術の獲得と確立への高い社会的関心があった証拠としている。しかし、このような事例はこれだけであり、ギリシア世界で文字の手習いとして一般的に現れるアベセダリアはクレタでは一例も見つかっておらず、むしろアルファベットが広く社会に浸透していた状況は窺えない。⁷²

同様の結論は、石のprivate inscriptionsからも引き出せるように思われる。最も数の多い墓碑銘（6例）とその次に多い岩盤路頭碑文（4例）については、判読不明なプリニアスのNo.7と奉納銘かもしれないプロラのNo.29を除けば、いずれもクレタ島北側の沿岸部の入り江や港湾都市に存在する。また、それらはアルカイック期の比較的遅い時期に属するものである。さらに、No.32・No.38・No.39の墓碑とNo.25の岩盤路頭碑文にはクレタの銘文ではあまり馴染みのない一人称表現が使われている。おそらくNo.28の岩盤路頭碑文とNo.40の墓碑銘もその可能性があり、墓碑銘と岩盤路頭碑文には、奉納銘にはほとんど類例のない一人称表現の出現頻度が高い。⁷³

それらの存在した北側沿岸地点はアルカイック期におけるエーゲ海海上交易の展開のなかで、クレタ島への外来の商品と商人の窓口になった場所であった。したがって、これらの地点は外来の文化的慣習の刺激を受けやすかったと考えられる。クレタの伝統にはない墓碑銘の記載慣行やキュドニアのアイギナ文字の使用が、これらの場所で前6世紀後半～5世紀初頭の頃に登場してくるのは、エーゲ海交易の物品や外来商人の駐留とともに、おそらくペロポネソス半島ないしアイギナ島を經由して、新たな碑文・銘文方式が他のギリシア世界の慣習や文化として受け入れられた結果であったと思われるのである。⁷⁴

No.41とNo.42はクレタではなくエジプトの事例であり、クレタ人傭兵の記念の落書きと思われる。前5世紀に入ってからこの2つ銘文については、指揮官クラスのエリート市民による記載であろう。エレウテルナの石灰岩ブロックNo.34のグラフィットは、墓碑銘か奉納銘か判然とせず、また推定年代も前6 - 5世紀と幅を持たされている。No.35の壁に刻まれたカロス碑文は、クレタでは唯一のきわめて珍しい事例であり、ギリシア世界でしばしば見られる陶器グラフィットのカロス碑文は、アルカイック期のクレタには確認されていない。⁷⁵

以上のように、Johnstonのcasual inscriptionsにおいても、Perlmanのprivate inscriptionsにおいても、銘文はほとんどの場合、聖所・神殿への奉納コンテクストの中で現れ、墓地の葬送コンテクストではようやく前6世紀末頃から、外来文化の受容地である沿岸部に用いられるようになる、という状況が浮かび上がってきた。石に刻まれた銘文については、前7世紀～前6世紀前半の時期には墓碑銘も岩盤路頭の落書き銘も存在しなかったと理解できるであろう。また、奉納銘に関しても、「奉納す」という文言の利用は、陶器奉納においても青銅器奉納においても、前6世紀末頃～前5世紀前半の時期に、沿岸部聖所と超広域聖所のイダ山洞穴聖所からの出土品に限られるため、やはり外来文化の影響と考えられる。

< 3. 銘文表記のメンタリティ >

これに対するクレタに定式的な奉納銘用語は「奪取した」という文言である。同様に、奉納品を「これを」と三人称で表現することも、「我を…した」「我は…である」という一人称表現が多い他のギリシア世界とは異なる銘文慣行である。こうした表現の相違の背後には、奉納に対する独特のメンタリティが介在したためと考えられる。この点について「奪取」表記銘文を、奉納する戦士エリートと奉納される神との関係性という観点から、若干の考察を試みてみたい。⁷⁶

そもそも「奪取した」とある品は、それが奉納者の武勇の結果として獲得された戦利品であることを示している。したがって、その戦利品は一次的には奉納者の所有物である。自己の所有物を聖所への奉納とすることは、その品の所有権が自分から神へと移されることを意味する。つまり「奪取」銘文は、その奉納という行為が人から神への贈与であることを明確に語っているのである。しかし、この贈与は決して一回的で一方的なベクトル性をとるものではない。なぜなら奉納に先立つ以前、神から人への贈与が戦勝という形で下賜されているからである。

そしてさらに、戦勝という神からの贈与の前に、それを祈願する人から神への贈与が存在したと考えられる。そこには祈願が成就すれば、その成果の一部を神に奉納として返すという観念が働いていたであろう。これは人と神との間のある種の循環贈与であり、かつての「万歳女神像」に象徴される循環と同一の構造を持っていると見てよい。ただし、戦利品奉納にみえる循環は、自然神崇拝的な輪廻の宿命を背景にしているのではなく、きわめて現世利得的であり、個別利己的であり、かつエリート優越的な価値観を表出している。

クレタにおいて、前6世紀末以降の墓碑銘や岩盤路頭銘文に現れる一人称表記とは対照的に、前7世紀奉納銘では、物品をそれ自体に一人称で語らせることはない。そこに見られる奉納品をあくまで三人称の客体として示す表現形式も、戦士エリートとしての同様な精神姿勢を表している。

最後に、数量的観点からも考察を加えておきたい。クレタ島のアルカイック期において、個人的な銘文の諸事例の観察からは、少なくともより古い時期である前7世紀～前6世紀前半頃までは、もっぱら聖所・神殿での奉納コンテキストのなかで文字表象が出現し、埋葬のコンテキストではほぼ利用されていなかった。墓標にギリシア・アルファベットで自己表現が現れるのは、アルカイック期末頃の前6世紀後半からのことであり、外来のギリシア文化に触発された沿岸部から導入されたように思われる。おそらくそれと同時に、「奉納す」という用語使いや一人称表現が、クレタ内でも採用されていたのであろう。奉納が祭祀に伴って行われるとすれば、コモス聖所のフェニキア文字奉納銘文以来、聖別空間で行われる歌舞音曲の儀式儀礼と文字表象の結びつきを見ることができであろう。

しかしながら、これらの事例の総数は Whitley (1997)・(1998) で指摘されているように、クレタ全島の広さを考えれば、非常に少ないと言わざるを得ない。Pelrman (2002) が掲げる42件の事例は、Johnston (2013) のリストアップする追加事例を考慮に入れてもなお、Whitley (2004) で論じられるように、むしろアルカイック期クレタにおける個人的な自己表現に対する社会的抑制を露にしているという過言ではない。この傾向は、聖所における文字表象の出現についても窺われるものであり、

とくに超広域的聖所の代表であるイダ山洞窟聖所とシミの野外聖所で出土した大量の豪華な青銅製奉納品の中に、銘文表記はそれぞれ前6世紀の1例に限られ、それもクレタには珍しい、やや特殊な銘文であるという事実が端的に示している。⁷⁷

石に刻んだ銘文に焦点を合わせれば、クレタ島外のエジプトのアブシンベル神殿にある落書きを除くと、現状の発見数は13例に過ぎず、次章で考察の対象とする100件を越す法碑文と比較して、その希少性が際立っている。そして発見場所と時代の遅さ、それに一人称表現との相関を考慮すれば、私的石碑銘文は、クレタの碑文慣習の中では非常に例外的で特殊な条件の下に存在したと考えられるのである。

VI. クレタ法碑文と聖所・神殿 —— 掟の身体性 ——

ギリシアで知られる最古の法碑文は、ドレーロスのアポロン神殿の傍らにあるヘレニズム期の貯水槽に落ちたブロック群の中から出土した、前650年頃のコスモス職への10年間再任を禁止する法であり、同じ場所から前7世紀後半の6枚の法碑文も出土している。これらは発見された状況からアポロン神殿の壁面に刻まれていたと考えられる。また、ゴルテュンでは12欄600行を越す記念碑的な「大法典」を筆頭に、前400年までに判読が可能なものだけでも111件の法碑文が確認でき、そのうちの半分以上がアルカイック期に属し、ギリシア最大数の法碑文が存在していた。⁷⁸

この2つのポリスで興味深いのは、ドレーロスにおいて法碑文が刻まれていたアポロン神殿から奉納銘が一例も出土しておらず、青銅製の武具奉納品についても出土は頂上部の「アンドレイオン」に推定される大型建造物に集中していることと、ゴルテュンの奉納銘はアクロポリス頂上のアテナ聖所エリアに集中し、前6世紀～前5世紀前半に膨大な数の法碑文が壁に刻まれた平野部のアポロン神殿には現れないことである。アルカイック期のドレーロスとゴルテュンのアポロン神殿に現出している法碑文の集合と奉納銘の不在は、どのような意味を持つのであろうか。

< 1. クレタ法碑文の存在状況 >

これはすなわち、アルカイック期のクレタ法碑文が刻まれる聖所・神殿は、いかなる祭祀空間であったのか、を問うことでもあろう。本章では、クレタ島で報告されてきた法碑文を前650～400年の期間で改めて纏めなおしたGagarin-Perlman (2016) の碑文史料集をもとに、アルカイック期クレタの法碑文の存在状況を再確認することから始めよう。⁷⁹

クレタで確認されている前7世紀後半～5世紀前半の法碑文を一覧表にしてみると、表4のゴルテュン碑文のエントリーは57件、表3のそれ以外の9ポリスが47件のエントリーである。このうち、後代の家屋への転用でもととの由来地が不明なものは25件、古代の居住地コンテキストで出土したものが2件であり、それらを除く77件(約75%)が神殿ないし聖所に由来することが確実である。前6世紀末の時期までにクレタのポリスにおいて、大型の切石を組み上げる建築物は聖所に所在する建造物以外にはまず存在しないため、後代に転用された法碑文ブロックももともとは聖所に存在していたと考えてよいだろう。

表3. アルカイック期クレタ法碑文（ゴルテュンを除く）

Gagarin-Perlman (2016) に拠る。但し、Guarducci (1935-1950) により一部補足

アクソス 総数12(10+2)		延べ数 13					
推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照	
A1	6C 第4四半期	アクロポリス建造物付近	壁体ブロック	牛耕式	賃労働に関する規定		K 101 VER I. 28
A2	6C 第4四半期	アクロポリス建造物付近	壁体ブロック	牛耕式	労働者に関する規定 (?)		K 102 VER I. 28
A3	6C 第4四半期	アクロポリス建造物付近	壁体ブロック	牛耕式	労働者に関する規定 (?)		K 103
A4	6C 第4四半期	アクロポリス建造物付近	壁体ブロック	牛耕式	労働者に関する規定 (?)		K 104
A5+A6	6C 第4四半期	村の家屋 アクロポリス建造物付近	壁体ブロック	牛耕式	戦利品に関する法規または条約		Perlman 2010
A7	6C 第4四半期	アクロポリス建造物付近	壁体ブロック	牛耕式	(不明)		
A9	5C 前半	アクロポリス	単体ブロック	牛耕式	犠牲式に関する規定	大理石	K 106+107
A10	A B 5C 前半	村の家屋 (由来地不明)	ステレ	牛耕式 牛耕式	遺産係争訴訟手続き	表 裏	
A11	6C 第4四半期	アクロポリス建造物付近	壁体ブロック	牛耕式	(不明)	6断片	
A12	A B 6C 初	アクロポリス東斜面の 神殿	壁体ブロックを台座として再利用	牛耕式 牛耕式	債務に関する規定 (?)	a+a' b+b'	
Axos 1	6C 第4四半期	アクロポリス	壁体ブロック	牛耕式	労働者に関する規定	厚さ 9.3cm	K 105 VER I. 29
Axos 2	5C 前半	由来地不明	ステレ	牛耕式	科料取立てに関する規定		

ダタラ 総数1		延べ数 1 * 聖所奉納品					
推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照	
Da 1	A B c.500	由来地不明	青銅製ミトラ	牛耕式	Spensithios 規定: ボイニカスタス (書記役) 任命に関する規定	表 奉納銘 裏	SEG 27.631 VER I. 22

ドレーロス 総数7		延べ数 7					
推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照	
Dr 1	C.650	アゴラ貯水槽	壁体ブロック	牛耕式・ レトロ	コスモス職再任を禁ずる法規	SEG 27.620; K 90	VER I. 81 Bile 29-30, no. 2
Dr 2	7C 後半	アゴラ貯水槽	壁体ブロック	牛耕式	プレプシダイとミラティオイによる法の提案		VER I. 66 Bile 30, no. 3
Dr 3	7C 後半	アゴラ貯水槽	壁体ブロック	下→上 牛耕式	エタイレイアイに関する規定 (狩猟に関する法規)	復元に異議議論あり SEG 23.530; K 92	VER I. 68+ II. 89 Bile 30, no. 5
Dr 4	7C 後半	アゴラ貯水槽	壁体ブロック	レトロ	儀礼に関する規定 (?)	K 93	VER I. 27 Bile 30-1, no. 6
Dr 5	7C 後半	アゴラ貯水槽	壁体ブロック	牛耕式	アグレタスに関する規定 (?)	K 91	VER I. 64 Bile 30, no. 4
Dr 6	7C 後半	アゴラ貯水槽	壁体ブロック	牛耕式	リュティオンとアゴライオンでの犠牲に関する規定		Bile 31, no. 8
Dr 7	7C 後半	アゴラ貯水槽	壁体ブロック	牛耕式	宣誓に関する規定	SEG 15.564	VER II. 10 Bile 31, no. 7

エレウテルナ 総数18 (13+5)		延べ数 24					
推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照	
Ele 3	6/5C	ビルギ初期ビザンツ建物	石灰石ブロック	牛耕式	アロポリアタイに関する法規	厚さ 13cm	K 109 VER I. 10
Ele 4	6/5C	ビルギ初期ビザンツ建物	ステレ	牛耕式	外国人に関する規定 (?)	厚さ 12cm	K 110 VER I. 83
Ele 5	6/5C	ビルギ初期ビザンツ建物	壁体ブロック	牛耕式	収穫物の所有権に関する法規 (?)		
Ele 6	6/5C	ビルギ初期ビザンツ建物	壁体ブロック	牛耕式	(不明)		
Ele 8	6/5C	アイヤ・イリニ教会近傍	壁体ブロック	牛耕式	(不明)		
Ele 9	6/5C	プリネス村家屋	壁体ブロック	牛耕式	外套職人に関する規定	アーチ状切断・再利用	VER I. 25
Ele 11	6/5C	由来地不明	壁体ブロック	牛耕式	海外居住超過に対する法規・不在者裁判の規定	K 112	VER I. 14
Ele 13	6/5C	プリネス村	壁体ブロック	牛耕式	農産物に関する不正に対する罰則	K 113	
Ele 14	A B 6/5C	プリネス村家屋	壁体ブロック 壁体ブロック	牛耕式 牛耕式	(不明) (不明)		VER I. 46
Ele 15	AB CD 6/5C	プリネス村家屋	壁体ブロック 壁体ブロック	牛耕式 牛耕式	農地に関する法規 (不明)		VER I. 46
Ele 16	Aa Ab Ac Ba 6/5C	ビルギ初期ビザンツ建物	壁体ブロック角石	牛耕式 牛耕式 牛耕式 牛耕式	売買と抵当に関する法規 祭典におけるキトラ奏者に関する規定 裁判保証金に関する規定 —	隣接2面 AB Aに3人の石工	K 114 VER II. 67 K 115 VER I. 26 K 114 VER II. 67
Ele 17	6/5C	由来地不明	石灰石ブロック	牛耕式	金銭の支払いに関する規定 (?)		
Ele 18	6/5C	プリネス村家屋	ステレ	牛耕式	(不明)	厚さ 7cm	
Eleutherai 1	6C 後半	ビルギ初期ビザンツ建物	ステレ	牛耕式	ブドウ消費に関する規定・神官職務の規定	厚さ 10.5cm	SEG 41.739 VER II. 98
Eleutherai 2	A c .500	ニシ	ステレ	牛耕式	法廷係争・宣誓の規定	厚さ 9.5cm	SEG 54.839
Eleutherai 3	A B 6/5C	ビルギ	ステレ	牛耕式 牛耕式	皮革職人に関する法規 (不明)	表 厚さ 7.5cm 裏	SEG 41.740
Eleutherai 4	5C 前半		壁体ブロック	牛耕式	法廷手続きの規定・否認宣誓・罰金	1行上・3-4行間に空白	SEG 23.571 VER II. 15 Bile 41, no. 33

エルテュニア 総数2 (1+1)

	推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照
Elit 2	c. 500	クナヴィ村	壁体ブロック	牛耕式	傷害に対する懲罰規定	ドリス式アルカイック神殿	K 94 VER II. 80
Elytnia1	c. 600-525	クナヴィ村	壁体ブロック	牛耕式	売買に関する法規 (?)	<i>poimikeia</i> (記録) 初出	

クノッソス 総数1

	推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照
K2	c. 500?	居住地	壁体ブロック	牛耕式	罰金支払い規定		VER II. 39

リュクトス 総数7 (6+1) 延べ数 10 (+未刊行碑文1=L4上)

	推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照
L1	6C第3四半期	リュクトス(クシダス)村家屋	壁体ブロック	牛耕式	土地をめぐる係争に関する法規(?)		VER I 45
L2	c. 500	遺跡付近の廃屋	壁体ブロック	牛耕式	不明(コスモス職・市民)		K 95 VER I 26
L3	A c. 500	リュクトス(クシダス)村	壁体ブロック 角石	牛耕式	不明(ヘルメス神)		K 96
	B c. 500			牛耕式	不明(陪審員)		
L4	未 c. 500	遺跡付近の風車	(奉納記念碑?)	牛耕式	不明(未刊行)	7行残存;織り型=正面	
	c. 500			牛耕式	不明(売り手・リュクトス人)	隣接2面の右	K 97
L5	c. 500	リュクトス(クシダス)村家屋	壁体ブロック	牛耕式	資産窃盗に関する法規		K 98
L6	c. 500	リュクトス(クシダス)村家屋	壁体ブロック	牛耕式	不明(外国人の・解放する)		K 99
Lyktos1	A c. 500		イオニア式柱頭 (奉納記念碑)	牛耕式	外国人の取り扱いに関する規定	隣接2面AB;碑文用に両面切断加工・再設置	SEG 35.991 VER I 12
	B c. 500			VER I 12	牧畜地の境界に関する規定		K 87 HMVE

ファイストス 総数1 延べ数 1 (+SEG 23.556; 未公開碑文 4)

	推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照
Ph1	6C後半	ハララ区画	壁体ブロック	牛耕式	遺産相続に関する法規	他のブロックと共に出土	SEG 32.908 VER II. 39 Bile 32.no11

プリニアス 総数1 延べ数 4

	推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照
Pr 7	6C第1四半期	神殿A・B近傍	キュルビス	垂直牛耕式	不明(6分の1)	4面の隣接する2面	VER I 63
					不明(長老会)	4面の隣接する3面	

K=Koerner (1993); VER=von Effenterre & Ruzé (1994-1995); Bile=Bile (1988)

表4. アルカイック期クレタ法碑文 (ゴルテュン)

Gagarin-Perlman (2016) に拠る。但し, Guarducci (1935-1950) により一部補足

ゴルテュン 総数(57+0) 延べ数 65

	推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照
G1	6C第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック6枚 a-b, c, d-e (2文字) f	レトロ	5行=5法規 :家畜・人体の加害に対する罰金規定	3行目は途中で終了 cの位置に議論の余地あり	K 116 VER II.22
G3	6C第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック4枚 a (8文字) b-c, d	レトロ	6行=6法規:アポロン・ヘラ・デメテル 三神への犠牲式規定		
G4	6C第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック2枚 a-b	レトロ	4行=4法規:1商業法規・2犠牲式/罰 金規定・3法的 手続規定・4アンドレイオンでの飲酒規定	「アンドレイオン」の クレタ初出	K 117 VER II 61
G5	6C第1-3四半期	ApollonPythios	ブロック2枚 上部損傷	レトロ	2行=2法規:水流妨害に対する処罰規定		VER II 92
G6	6C第1-3四半期	ApollonPythios	ブロック2枚 上部損傷	レトロ	2行=2法規:内容不明(単数の大釜・ 神殿)		
G7	6C第1-3四半期	ApollonPythios	ブロック単体	レトロ	1行のみ判読可能:内容不明	復元推定は不確か	
G8	6C第1-3四半期	ApollonPythios	横長ブロック15枚 i-a, f, g, h, k, l, m, n, o, p	レトロ	1行:幼児殺害に対する人命金規定(宣 誓・大釜)		K 118 VER II 11
G9	6C第1-3四半期	ApollonPythios	横長ブロック13枚 a-n(正面) o(右面)	レトロ	1行:殺人罪確定後の陪審義務違反規定	基礎2面	K 119 VER II 78
G10	6C第1-3四半期	ApollonPythios	横長ブロック44枚	レトロ	1行:種々罰金刑規定(大釜・ターモ ス・ゴルテュン人)	基礎4面 p-r:旧法G10aの上 に重ね書き	
					b, c-e, f, h, i, k-l, m-n, o-p, q-r, s-t, u, v, x-y, z, a'-b', g', h', k', o', p', q'		
G10a	6C第1-3四半期	ApollonPythios	ブロック3枚':p-r'	レトロ	1行:内容不明(死?)	G10より小さな文字 (未消去)	
G11	6C第1-3四半期	ApollonPythios	横長ブロック9枚 a-b, c-d, (e, f, g, h, i)	レトロ	1行:内容不明(大釜) G/Pに() *碑文への言及なし	基礎2面:角ブロックi	
G12	6C第1-3四半期	ApollonPythios	横長ブロック18枚 a-b, c(d, e, f, g, h, i, k, l)m (n, o, p, q, r, s)**	レトロ/レギュラー G/Pに() *および() **	2行以上=2法規以上:内容不明(擲削) G/Pに() *および() **碑文への言及なし	a-h:レトロ, i-s:レギュラー 後者のごとき左開始は稀有	

推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照	
G13	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック12枚 a1, b1, c1, e1, f1, g-h1, i1, k1, l1, m1	左開始の牛耕式 2行: 訴訟手続き規定 (都市民の訴訟・ポリス全体)	基礎2面: 角ブロックm	K 120 VER I 11	
G14	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック18枚 a1, b1, c1, e1, f1, g-p1, q1, r1, s1, s2, r2, q2, p-g2	牛耕式 2行: 職務未遂行の罰則・再任の期間制限規程	グノメス職 (複数形)・クセニオス職 (単数)	K 121 VER I 82	
G15	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック3枚 a-b1, c1, c2	牛耕式 2行: 里親に関する規定		VER II23	
G16	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック単体	牛耕式 2行: 入信儀礼に関する規定 (?)	1行目の上に空白	VER II24	
G17	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック単体	左開始の牛耕式 2行: 嫁資の取り扱いに関する規定		VER II52	
G18	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック単体	牛耕式 3行: 内容不明 (子供)	1行目は判読不能		
G19	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック単体	牛耕式 3行: 内容不明 (部族)			
G20	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック2枚	牛耕式 4行: 実子と養子の遺産相続規定	父方と母方の財産	K 122 VER II37	
G21	6C 第1-3四半期	ApollonPythios 神殿正面壁	縦長ブロック2枚	1-4: レトロ 5-8: 左開始牛耕式	1-4行: 4法規; 1-2内容不明・3内容不明 (養子)・4内容不明 (同一両親)・5-6相続係争・7-8自己裁定罰則	左隣ブロックへの継続推定 右ブロック右半分: G22B	K 117 VER II61
G22	6C 第1-3四半期	ApollonPythios 神殿正面壁	縦長ブロック右半分 (22 B)	左下から巡回式	訴訟継続し期限の規定 (?)	正面北東角石: 隣接右面に 22 A (上) + G 78 (下)	K 124 VER II84
G23	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	ブロック単体	1-5: レギュラー 6-8a: 牛耕式 8b-10: レトロ 11: 垂直レギュラー	個別条項は内容不明: 全体としては自由人女性と隷属民との婚姻に関する規定	「ウォイクウス」の初出 8b-10: 右隣ブロックからの継続推定	K 125 VER II25
G25	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	25断片 a-v, a'-d'	レトロ, 牛耕式, レギュラー	s: 牛耕式2行 (コスモス職) u: 牛耕式2行 (オポロス・女性の)	複数の法碑文混在: ほ んどが意味不明	
G26	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	16断片 a-q	レトロ, 牛耕式, レギュラー	a2-3: 牛耕式 (オポロス・豚), b: レギュラー (オポロス), c2: 牛耕式 (10), d: レトロ (12), g: レトロ (何物も)	複数の法文混在 (多くは同一碑文): 犠牲式か罰金の規定	
G27	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	ブロック単体	レトロ	3行: 内容不明		
G28	6C 第1-3四半期	Acropolis	縦長ブロック単体	牛耕式	4行: 内容不明 (宣誓・連れ去り) * VERによる復元: 宣誓拒否や碑文破壊への呪い	左右の隣石にテキスト 継続 下部に大空白	VER II12
G29	6C 第1-3四半期	ApollonPythios	縦長ブロック断片	牛耕式	3行: 内容不明 (コスモス)		
G30	6C 第1-3四半期	アイイ・デカ村: ApollonPythios 由来	縦長ブロック単体	牛耕式	4行: 内容不明 (三脚鼎・メデムノイ・年季奉公契約・外国人担当コスモス)	左右の隣石にテキスト 継続 4行目の文字下切れ	VER II12
G40	6C 第1-3四半期	アイイ・デカ村	縦長小断片	牛耕式	2行: 内容不明 (10)		
G41	5C 前半	ヘレニズム建造物 北壁	縦長ブロック3枚 7欄各14行	牛耕式	1-3欄: 動物傷害・取引, 4欄: 逃亡隷農・5-6欄: 年季奉公人に関する訴訟, 7欄: 購入	「小法典」: 最下段の3 石残存 左右に各1欄以上存在 想定	K 127-128 VER II65
G42	5C 前半	ヘレニズム建造物 北壁	縦長ブロック単体 2欄 A, B	牛耕式	A: 内容不明 (訴訟・罰金・技巧) B: 土地境界係争に関する裁定措置規定	A欄左一部のみ・中央 に空白 B欄上石から継続・底 部空白	K 129 VER II5
G43	5C 前半	ヘレニズム建造物 北壁	縦長ブロック単体 2欄 Aa, Ab, Ba, Bb	牛耕式	Ba: 公有農地の転売・抵当設定の禁止 Bb: 川の水の流れの現状維持 Aa: 脱税場抵当設定の禁止 Ab: 不正な奴隷所有・奴隷虐待への処罰	Aa 開始完結・Ab 下石 に継続 Ba 開始完結・Bb 開始 完結 記載順=Ba-Bb-Aa- Ab BaとAaは旧法に重ね 書き	K 130-133 VER I 47: II70
G44	5C 前半	ヘレニズム建造物 北壁	縦長ブロック単体	牛耕式	女子相続人の婚姻規定	大法典7欄15行-9欄 1行に類似の条項	K 134 VER II50
G45	5C 前半	ヘレニズム建造物 北壁	縦長ブロック単体 2欄 A, B	牛耕式	A: 抵当設定に関する規定 B: 抵当承認宣誓に関する規定	上下のブロックとの 法文継続 A右・B左の隣石との 継続	K 135 VER II69
G46	5C 前半	ヘレニズム建造物 北壁	縦長ブロック単体 2欄 A, B	牛耕式	A: 内容不明 (宣誓), B1-5行: 内容不明 (煙突・罰金), B6-14行: 私所有地を通る遺体搬送の許可規定	上下のブロックとの 法文継続 A右隣石との継続	K 136-137 VER II85
G47	5C 前半	ヘレニズム建造物 東壁	縦長ブロック単体 2欄 A, B	牛耕式	A1-16行: 年季奉公奴隷規定, 16-B33: 前期奉公の権利喪失条項と訴訟手続き	AB 連続・開始完結 ABとも旧法に重ね 書き	K 138 VER II26
G48	5C 前半	ヘレニズム建造物 東壁	縦長ブロック複数 A, B, C	牛耕式	A: 内容不明 (神々), B: 内容不明 C: 内容不明 (運ぶ)	風化による損耗激しい B右ブロックにG47上 書き	
G51	5C 前半	ヘレニズム建造物 東壁	正方形ブロック単体 (61.5 × 58cm)	牛耕式	神々への宣誓に関する規定: アポロン・アテナ・ヘルメス (・ゼウス?)	G42との類似: 一連の 法手続き 碑文を構成?	K 139 VER III3
G52	5C 前半	オデイオン区域	ブロック単体 2欄 A, B	牛耕式	A: 内容不明 (流れ) B: 水利権をめぐる係争に対する罰則規定	4辺すべてで法文継続 A4・5行間に空白	K 140 VER II90
G53	5C 前半	アイイ・デカ村	縦長ブロック単体 3欄 A, B, C	牛耕式	A: 内容不明 (外国人・コスモス), B上: 内容不明 (聖別品)・B下: 内容不明 (羊毛), C: 内容不明	4辺すべてで法文継続 B: 上下2条項・左右 端は確定	
G54	5C 前半	オデイオン壁面	ブロック単体 2欄 A, B	牛耕式	A: 内容不明 B: 内容不明 (百の)	左右欠損 A: 上下2条項	
G55	5C 前半	オデイオン壁面	ブロック単体	牛耕式	主人による奴隷取り扱いに関する宣誓文	右側欠損 左端各行に1字分の空白	K 141 VER II21
G56	5C 前半	オデイオン壁面	ブロック単体	牛耕式	上: 内容不明 下: 女子相続人に関する法規	左右欠損 上下2条項 (+1?)	
G57	5C 前半	オデイオン東壁面	ブロック単体	牛耕式	内容不明 (自由人・売買・罰金・告発人)	下左右欠損	K 142

推定年代 (B.C.)	発見場所	形態	行方向	内容	備考	参照	
G58	5C前半	オデイオン区域の小屋	横長ブロック単体	牛耕式	内容不明 (スタテル・ラトシア人・罰金・告発人)	上端に若干空白=欄の上端左端各行に1字分の空白	K 143 VER I 15
G59	5C前半	オデイオン区域	ブロック単体	牛耕式	内容不明 (成人・全体の)	本体紛失・模写2枚に相違 上左右欠損	VER I 3
G60	5C前半	オデイオン壁面	ブロック単体	牛耕式	内容不明 (書かれた通りに)	下左右欠損 上端にふち飾り	
G61	5C前半	オデイオン壁面	横長ブロック単体	牛耕式	内容不明 (支払い・罰金)	右面右上部分のみに記載=法文欄の最終左部分	
G62	6C第4四半期	ミトロポリス村近傍	ブロック単体 (50×66cm)	牛耕式 句読2点	身分に関する法規 (ゴルテュン人・自由人・奴隷・コスモス・解放・神事・飲酒)	左側欠損、右隣石にテキスト・上下の石に法文継続	K 144 VER II3
G63	6C第4四半期	オデイオン区域	横長ブロック単体	牛耕式	ゴルテュンとレベン間の協定 (大麦20メディムノス、運搬、証人、1日当たり5スタテル)	四周に後代の縁削り、法文開始・下の石に継続	VER I 59
G64	6C第4四半期	(言及なし)	横長ブロック2枚ab (177×26.5×58cm)	牛耕式	デュオニシオス顕彰 (アウロンに住む者たち、免税、ピュルゴス内の家屋と区画地、ギムナジウム)	bの右半分は削除、右隣石にテキスト継続、開始完結	VER I 8
G65	5C前半	ミトロポリス村近傍	縦長ブロック単体 (36.2×49cm)	牛耕式 左開始	ゼウス・ヘリオス・その他の神への犠牲品規定 (雌羊・子牛・雄羊・メディムノス・チーズ)	左欠損 (テキスト左端保存)、右隣石にテキスト継続	
G66	5C前半	(言及なし)	小断片	牛耕式	5行: 内容不明 (ボセイドン)	ボセイドン初出 cf. A5+6	
G67	5C前半	アイイ・デカ村	縦長ブロック単体	牛耕式	5行: 内容不明 (女性の)	上部右肩上に欠損 5行の下に大空白	
G68	5C前半	ピュティオン区域	横長小断片	牛耕式	3行: 内容不明 (ゴルテュン)	下右欠損、左隣石に継続	
G69	5C前半	ピュティオン区域	横長小断片	牛耕式	4行: 内容不明 (樹木・分割)	縦溝欠損、右隣石に継続	

K = Koerner (1993); VER = van Effenterre & Ruzé (1994-1995)

碑文の形状に着目すると、アクソスにステレ型が2件、アフラティに比定されるダタラでは青銅製ミトラの1件、エレウテルナでステレ型が5件、リュクトスで奉納記念碑と柱頭切断加工が計3件、プリニアスでキュルビス型が1件存在し、残る93件すべて(約89%)は建造物の組成パーツのブロックである。ダタラの表裏に碑文のある青銅製ミトラは珍しい事例で、出土の詳細はまったく不明であるが、スペンシティオスの末裔一族による奉納品である可能性が高い。リュクトスの隣接する2面に碑文のある柱頭加工碑文は、同所の他の2件と同様に奉納記念碑であったのではないかと思われ、聖所建造物の一部ではないにしても、その境内に建て置かれたと考えられる。⁸⁰

以上のように、出土コンテクストと形状の観点から、法碑文は聖所・神殿との親和性が極めて高く、ほとんどの場合、建物の壁面に刻まれていたことが明らかである。

そこで次に、神殿・聖所の建造物に焦点を合わせて個別に観察すれば、アクソスの法碑文はアクロポリス頂上部建造物の一部が8件で、東斜面の神殿からは1件のみ。ドレーロスでは、7件すべてがアポロン神殿の壁体であったと考えられる。エレウテルナの場合は、ピルギの丘の初期ビザンツの建物が、下層のアルカイック期の祭祀建造物から建築材を再利用しているので、ピルギからの法碑文はいずれもその建造物の一部と考えてよいであろう。東斜面のカツイヴェロス・エリアからは法碑文は見つかっていない。プリニアスの複数面に法文を刻まれたキュルビスは、神殿ABの近傍から出土している。

アルカイック期だけでも57件を数えるゴルテュンの法碑文ブロックのうち、アクロポリス頂上部のアテナ神殿の聖所から出したのは1件のみで、アポロン・ピュティオス神殿に由来するブロックは30件、ローマ期のオデイオン周辺エリアから19件である(近隣の村の家屋転用5件、由来情報なし2件)。年代別に見ると、前6世紀に属する33件の法碑文のうち、28件(約85%)がアポロン・ピュ

ティオス神殿に由来し、アクロポリスのアテナ神殿エリアの1例のほかは由来地が不明であるが、この時期にはオデイオン地区に法碑文は存在しないと言って差し支えないだろう。

逆に前5世期前半に年代付けられる24の法碑文の中で、ピュティオン区域の碑文は2例のみで、もともとの所在地が不明な6件を除くと、半数を超える16件が確実にオデイオン区域に由来する。この出土状況は前6世紀までと前5世期以降とでは対称的で、法碑文の所在場所がこの世紀の転換期頃にピュティオン地区からオデイオン地区へと変更したことを示している。

ところで、総数で100件を越すアルカイック期クレタの法碑文は、わずか10のポリスからしか出土しない。この状況はクレタ各地で発掘や領域調査が進み、Gagarin-Perlman (2016)の最新の成果をみた現在も、戦前の資料をもとに編纂したGuarducci (1935-50)の段階とまったく変わっていない。すなわち、法を碑文として石に刻む慣行は、クレタ全島においてもごく限られたポリスでしか実践されなかったのである。そして、一覧表から明らかなように、ゴルテュンの法碑文数が他を圧倒して多く、他方で、前7世紀後半の最初期の法碑文はドレーロスにしか存在せず、その他のポリスの法碑文は、ゴルテュンを除いては前6世紀後半から前5世紀前半に限られる。⁸¹

<2. 神殿祭祀と法の宣誓>

そこで以下では、冒頭でも触れたドレーロスとゴルテュンの法碑文の状況をケーススタディにして神殿と法碑文の親和性を考察してみたい。この二つのポリスは、法碑文における時代の先進性や数量の圧倒的優越の他にも、冒頭で触れたように法碑文の存在状況においても、きわめてよく似た特徴とまったく相反する特徴の両方をもったポリスであり、アルカイック期クレタの法碑文所在ポリスの代表と言えるからである。

まず両者によく似た特徴的現象の一つに、法碑文が壁面に刻まれているのはアポロンを祭る神殿であるということがある。ドレーロスの神殿で祭られていたのは、アポロン・ピュティオスであるのかアポロン・デルフィニオスであるのか、諸家の見解は割れているが、アポロンの神殿であることに間違いはない。ゴルテュンのアポロン・ピュティオス神殿は前5世紀に入ると法碑文の所在場所としての役目をほぼ終えたようであるが、それはアポロン神殿に碑文を書き加えるスペースがなくなったためかもしれない。そうであるとすれば、そのような状態になるまで法碑文を次々とアポロン神殿に刻み続ける強烈な指向性を感じさせよう。⁸²

他方で、ドレーロスのアポロン神殿は前8世紀頃に建てられ、竈と柱を備えたメガロン・タイプの構成や付属施設でのピトスの設置、古くからの伝統を引き継ぐ内壁に備えられるベンチの存在から、祭祀儀式は神殿の内部で執り行われたと思われる。それに参列するのは、神殿の規模に相応する少人数であり、共同体の役職者につける高位の有力者たちだけであったと考えてよい。前650年頃とされるDr1の最古の法碑文は、最高官職とおぼしき「コスモス」の職について、10年間の再任禁止と違反者への罰則の規程であり、有力者間の機会均等のルール＝相互牽制の心情が透けて見える。⁸³

しかし、実力が伯仲するような有力者同士の取り決めを全員で遵守していくには、それぞれの能力を超越した存在による抗いがたい拘束と絶対の保証を必要としたであろう。それがアポロン神であっ

た。そして、その神のルールを参加者それぞれが内面化させるために、アポロンへ犠牲をささげ、その供物の一部を自分たち自身も共同会食したのである。こうした超越的存在による秩序の構築と共同の儀礼的祝餐による結束の維持が、ドレーロスのアポロン神殿で行われた祭祀儀式的社会的機能であったと推測される。

ここで着目すべきは、唯一ゴルテュンのアクロポリス頂上部エリアで出土したG28の法碑文である。そのエリアはアテナ女神の神殿の所在地であり、縦長ブロックのこの碑文は神殿の壁面にあった可能性がある。碑文の文面を宣誓と呪いとして復元を試みたEffenterre-Ruzé (1994-95)は、この碑文の年代を前7世紀後半に遡ると推定しているが、Gagarin-Perlman (2016)は前600-525年頃に分類し直している。呪いの復元もGagarin-Perlmanによって文字同定と文法の両面から批判されているが、「宣誓する」の文言は復元できそうである。そうだとすれば、この神殿でアテナ女神に対する宣誓の儀式が執り行われたと考えてよいであろう。⁸⁴

ゴルテュンのアテナ女神の神殿は、IV章で触れたように内部空間に仕切られた小部屋と中央床面の石板で囲われた窪みがある特殊な構造をしていた。それは、神殿の内部で主に水やブドウ酒などの液体を使って、少人数で灌奠儀式が行われたことを意味する。したがって、法碑文に示されるアテナ女神に対する「宣誓」のセレモニーと、神殿内部での灌奠儀式は無関係ではなかったであろう。⁸⁵

同時期のドレーロスのアポロン神殿においても、内部空間で少数の有力者たちが動物を火にかける犠牲式と祝餐を執り行ったことは上に述べたとおりであるが、神殿の壁体ブロックに刻まれた最古の法碑文は、最後の一文で「宣誓者はコスモスとダミオイとポリスの20人」とあり、関係者による宣誓を定めている。Gagarin-Perlmanは、これをもって立法のプロセスがポリス全体と役職者と部族代表者たち共同作業となっていると解釈するが、そのような理解は少数者限定でなされる神殿内部の儀式行為の性格とは一致しない。また、宣誓として文面が読み上げられるという儀式がある以上、法碑文の存在状況は儀礼行動の観点から考察されねばならない。

神への宣誓として聖所・神殿に刻まれた法碑文の読み上げという行為は、宣誓文の形式をとる法碑文に限らず、すべての法碑文についてあてはまるはずである。すでに述べたように、相互の牽制し合う有力者間の秩序と結束は、彼らを超越する存在との関係によって構築された。神への誓いは、単に神に向かっての一方的な人の物言いでない。人の間の取り決めが宣誓として神に聞き届けられたならば、当然のことながら、違反者には必ずや恐るべき神罰が下るであろう。ここには観念上、人と神との往復的關係があり、それが読み上げる者たちに対して強い拘束力を生み、それによって初めて法の実効性が担保される。それこそが法碑文が聖所・神殿に存在する理由である。つまり、神は法を守護するのではなく、誓いの遵守を強制するのである。

宣誓儀式によって、神による法の承認が済めば、その後の法の執行や裁定の場で既存の法を逐一参照する必要はなく、法は神殿に刻まれてあればそれで充分であった。ゴルテュンのアポロン神殿やオデイオン地区に刻まれていた夥しい数の諸法には、番号も名前も付けられておらず、系列的にまとめられてもいなかったため、その中から当該係争に関連する法を探し出すのは事実上不可能であったであろう。また、G47の法はG48の法碑文の上に重ね書きされており、後者は一部分しか読み取ること

ができなくなっていた。こうした新たな法の重ね書きによっても、旧法の存在性は揺るがなかったと思われる。⁸⁶

< 3. 法碑文の社会化 >

そして、クレタにおける法碑文のほとんどが聖所・神殿の壁面に刻まれたのは、宣誓という儀式が神殿の外側で行なわれたからであるが、その背景には暗黒期を通じて継承されてきた神の所在する場所での祭祀儀式の伝統と、居住家屋とは明確に異なる巨石大型建造物に対する畏怖と神聖さを感じる精神的態度が存続していた。前8世紀以降のクレタに、神の機能分化とともに聖所・神殿が非日常の聖別された空間として明確な形象を採ってたち現れてきた時、そこに「壁体の物神性」が宿るのは、決して不思議なことではない。内部で祭祀儀礼を行うための「メガロン・タイプ」の構成は、周柱によって壁面の威容を妨げられることのない、クレタに独特の壁体神殿を生み出したのである。

ここで指摘しておきたいのは、神殿内部の犠牲式・祝餐と神殿外部の宣誓式との間にある身体性の違いである。法碑文の読み上げという行為は視認・発声・聴聞という3つの身体行為によって実現されるのに対し、犠牲式と祝餐では視覚・聴覚に加えて嗅覚・味覚・触覚の五感すべてが関わる強い身体的経験を通じて行われる。したがって後者の場合、参加者間のより強固な結束を生んだに違いない。宣誓文の読み上げが文面にある三者によって行なわれる時、それ以外の聴衆はそれを聞くのみであれば、受動的な身体性でしか法を受け取ることができない。しかも、一度耳にしかけた法は、記憶にしっかりと留められたとは思われない。⁸⁷

しかしながら、リテラシーの低いクレタの社会では、それゆえに歌舞音曲の力を借りて法を集団的記憶として社会化する方法を編み出していた。ローマ帝政期の著述家アイリアノスがクレタの教育の風習を紹介する項目で、次のように記述している。

クレタ人は自由民の子弟に音楽に合わせて法律を学ぼう命じたが、それは、音楽の力で楽しい気分になり、法律を記憶しやすくするためと、禁制を犯した者にも「知らずにやった」という言いわけを許さないためであった。⁸⁸

ストラボンの引用する前4世紀の歴史家エフォロスによるクレタの風習に関する記述では、市民の子弟は文字とともに、諸法からの歌と、ある特定の形式の音楽とを習得しなければならなかった、と伝えられている。⁸⁹

これらの伝承は、おそらく古典期後半頃のクレタについて述べており、アルカイック期の法のあり方を直接説明するものではないと思われるけれども、クレタでは法が集団の記憶として社会化される際に、文字と音曲が密接に結びついて機能していることを示唆しているであろう。

ゴルテュンの人タレス（またはタレタス）は、前7世紀の詩人として伝わるが、リュクルゴスに説得されてスパルタへ赴き、抒情詩の歌の形をとって優れた立法者のように、従順と協調を勧める言葉でスパルタ人を教化したという。また、ディオゲネス・ラエルティリオスによれば、クノッソスの人

エピメニデスは第46オリンピアードの頃（前596-583年）、アテネに招かれて疫病の浄めを行い、クノッソスと友好の条約を結ばせたが、そのほかに半神や神に関する詩を残し、『犠牲とクレタの国制について』『ミノスとラダマンテュスについて』という2作品を著したという。さらに彼には、神殿を建てた最初の人との伝えもある。⁹⁰

タレスの時代考証には辻褃の合わない部分があり、エピメニデスについては57年間の洞窟での睡眠や、150歳以上の長寿伝承もあり伝説的な人物と言えるのだが、二人にまつわる伝承の中に、アルカイック期のクレタにおける法と神殿と詩歌と犠牲式の関係性を窺い知ることができよう。

以上のように、法碑文が宣誓の儀式としてだけでなく、読み上げられる際に聖所・神殿における祭礼の音曲が加わるならば、リテラシーの限界を超えて法は集団の記憶として社会に受け入れられたと思われる。したがって、聖所・神殿という建造物は、「壁体の物神性」によって法碑文に非日常性と象徴性を与え、実用的な法碑文のアルヒーフとしてではなく、「法の舞台装置」としての機能を果たしたと考えられる。換言すれば、法碑文は刻まれた法文が歌のように読み上げられ、身体性を通じて記憶に残るための役割を担っていたが、それが実現されたときにはもはや繰り返し参照される必要はなく、神の懷に抱かれているだけで社会の秩序と安寧に貢献していたのである。

むすび — さらなる研究の課題と展望 —

これまでの各章の考察から、神殿が登場してくる前8世紀～前7世紀という時代は、クレタの聖所空間の世界において大きな転換期であったことが浮かび上がってきている。たとえば、メサラ平野西部においては、アイヤ・トリアダの「廃墟聖所」が放棄され、コモスでは神殿Aの上に神殿Bが建て直される。ファイストスでは、宮殿エリア南西の居住区域にラト女神の神殿が建てられ、その発展がアイヤ・トリアダ聖所の衰退をもたらしたようである。クノッソスではデメテルにつながる女性神格の聖所が造営され、その外港であったアムニソスでも石壁遺構の祭祀ステージで奉納が始まる。

この時期は僻地聖所では青銅製の奉納品が陶製の奉納品を凌駕するようになり、とくに青銅製の豪華な大盾や大釜などが集積したイダ山の洞穴聖所では、それが顕著にあわれている。その傾向は、シミの野外聖所でも同様であるが、ここでは青銅小像に関し雄牛から野生山羊への転換とヘルメス神の図像の出現が特徴的である。他方で、質素奉納の僻地聖所は陶製奉納品の細々とした命脈を保つが、おもに牧羊者の聖所として居住地共同体の動向に影響されなかったために、死と生の循環の信仰を保ち続けた。

人里離れた「廃墟聖所」の放棄と居住地近傍での新たな神殿・聖所の造営は、ミノア時代の宗教的特徴とLMⅢC-SM期という危機的時代の信仰の性格を色濃く残した自然崇拜の祭祀から、富と武力に裏打ちされたエリート層に主導される地域社会の統合と階層的秩序を背景にして形成されてきた宗教体系の祭祀への転換とみなすことができるであろう。コモスやアムニソスのように「廃墟聖所」の機能を存続・再生させる場所も存在したが、社会全体の祭祀の中心は、居住地近傍の聖所・神殿に移ったと考えられる。

居住地近傍の聖所・神殿は、前8世紀～前7世紀頃に二種の性格の異なる大型建造物に分化してたち現れた。一つは限られた地域エリートたちの会合と祭祀・祝餐のための内部空間を用意する神殿である。前7世紀後半のドレーロスのアポロン神殿の法碑文を見れば、そこで合議された取り決めは有力者間の機会均等＝相互牽制の規定であり、神への宣誓の形式をとることで実効性を持たせる必要があった。もう一つはより大型で正規の社会構成員たる男性市民が集うと思しき構造物であり、その代表例であるゴルテュンのアポロン神殿には、前6世紀の間、多数の法碑文が壁面に刻み続けられた。

神殿の外側に周柱を配さないクレタの神殿の特徴は、内部空間での祭祀に関連して竈脇に神聖な柱が置かれたためであると思われるが、それはLMⅢC-SM期の「ベンチ聖所」以来のクレタの祭祀伝統と、前9世紀頃よりクレタに到来した東方起源の祭祀との習合の所産と見ることが出来る。そしてこの構造的特徴は、やはりクレタの伝統的心性である「壁体の物神性」を通して壁面の法碑文を現象させる条件を提供した。法碑文が神殿で読み上げと音曲の儀式を伴うとき、文字化されていた法の存在は人々の集団的な身体性の共有によってリテラシーの限界を超えて社会化できたと考えられる。

さて最後に、本研究を結果として浮かび上がってきた問題と、継続して取り組むべき課題についてまとめておきたい。

- (1) 本研究では法碑文の出現にいたる歴史的背景と環境的条件に焦点を当てたため、法碑文そのものの内容に立ち入ってアルカイック期クレタにおける法の機能や性格を検討するには至らなかった。とりわけゴルテュンには古典期前半までの非常に多数の法碑文が残っており、その解釈と分析は重要な課題である。
- (2) クレタのみならずギリシアにおける最古の法碑文を生んだドレーロスは、前7世紀後半に7枚の法碑文を現在に残すが、他のポリスで多くの法碑文が刻まれる前6世紀には、さらには古典期においても、いっさい法碑文の事例がない。再び公的碑文が確認できるのはヘレニズム期になってからである。この法碑文の空白は何を意味するのか、ドレーロスの個別的研究が必要であろう。
- (3) アルカイック期のギリシア世界には、「立法者」と呼ばれる総覧的な諸法を制定した者たちが知られている。スパルタのリュクルゴスやカタナのカロンダス、イタリア・ロクリスのザレウコスなどがそれにあたるが、圧倒的多数の法碑文が存在するクレタにはタレスやエピメニデスのような詩人は登場するが、立法者の出現も、また僭主の出現も見ない。法の社会化という観点から、その歴史的事由にアプローチすることができるのではないだろうか。⁹¹
- (4) クレタ考古学の分野では、「アルカイック・ギャップ」という前6世紀の一世紀間考古資料がほぼ消えてしまったようにみえる時期がある。⁹²それはちょうど、クレタの法碑文がもっとも数量的隆盛をみる時期であり、この対称性はどのように解釈すべきであろうか。他方で、ゴルテュンを除く9のポリスでは古典期の法碑文は極端に減少していく。それらの現象を歴史学の見地から説明することも求められるのである。

以上の4点の課題を踏まえて、クレタにおけるポリスの形成を法の観念の文字表象という視点から研究を継続していく予定であり、その一環として、2016年度人文研特別研究において「ギリシア周縁地域の政治社会構造——クレタにおける文字表象とポリスの形成——」のテーマを設定している。

《注》

- 1 高所避難集落の網羅的研究としてはNowicki (2000), 暗黒期からアルカイック期までのクレタ遺跡についてはSjögren (2003), 青銅器時代末からアルカイック期までの聖所遺跡については, Prent (2005) が近年の発掘成果を総合している。Cf. Davis (2003). また, Wallace (2010) が居住パタンと社会関係の観点からポスト宮殿期以降のクレタ社会の復元を試みている。当時の社会状況や工芸技術に関する簡潔な解説としては, Boardman (1982a)・(1982b)・(1985) が今なお有益である。
- 2 アルカイック期クレタの国制・社会・宗教に関する古典的研究として, Willetts (1955)・(1962)・(1977)・(1982) があり, 基本情報の参照には欠かせない。しかし, 古代の古典文献に依拠するクレタ像に対しPerlman (2005) は史料批判を駆使して, それが造られたイメージであることを論じている。アルカイック期と古典期のクレタ史研究の最新の成果と動向を知る上で重要な文献としてはPilz&Zeelentag (2014), 近年の研究成果を踏まえたアルカイック期クレタの政治的・社会的諸制度の研究としてSeelentag (2015), 小著ながらクレタの先史からローマ期末までの優れた概説としてChanotis (2014) がある。考古学的観点からアルカイック期と古典期のクレタを論じたものとしてErickson (2010) は重要な文献である。また, クレタの古代史の特異な展開から現代的な意味を模索するというユニークな視点で著されたCross (2011) も新たな研究動向に充分配慮している。
- 3 本研究の土台となる問題意識を提示したのは, 古山 (2013) および (2014) の2編である。
- 4 わが国では, 高橋 (1996)・(1998)・(2004) がクレタの「暗黒時代」の評価を問い直している。
- 5 D'Agata (2001) p. 348; Gesell (2001) pp. 253-257; Prent (2005) pp. 174-181; Gaignerot-Driessen, (2014) pp. 508-510.
- 6 Gesell (2004). Cf. Marinatos (1993).
- 7 カヴーシ地区のベンチ聖所から4種の陶製祭祀用具が多数出土する事情については, Day et al. (2006) Cf. Gesell et al. (1983); Glowacki (2007).
- 8 アイヤ・トリアダとフェストスからの轆轤陶製品については, Prent (2005) pp. 185-187. クノッソスのデメテル聖所からの事例はColdstream (1973) p. 182.
- 9 イダ洞穴聖所はPrent (2005) A24/B52, プシクロ洞穴についてはPrent (2005) A30/B65.
- 10 イダ山洞穴聖所で再生神として祭られるゼウス・クレタゲネスについてはVikela (2003). ギリシアだけでなく, 自然崇拜や多神の存在など宗教観念の類似している日本においても「中空の神性」は社会通念であった。Cf. 折口信夫 (1932) 40-49 頁。
- 11 「万歳女神像」が陶製であることについては, Gesell (2004) が宮殿期の女神の大衆化として実用的観点から触れている。キクラデス文化末期以降のエーゲ海域における石遇の消滅については, 周藤 (1997) 64 頁。
- 12 D'Agata (2003) pp. 21f.
- 13 D'Agata (2001a) pp. 56-58.
- 14 Cf. Coldstream (1973); (1994).
- 15 Marinatos (1993) pp. 221-229.
- 16 Coldstream (1994).
- 17 Coldstream (2006) pp. 584-587. Cf. Catling (1977); Coldstream (2000) p. 296.
- 18 Coldstream (1994) pp. 108f.
- 19 デメテルの聖所についてはColdstream (1973) pp.180-182. グラウコスの祠についてはCallaghan (1978).
- 20 Cucuzza (2013).
- 21 D'Agata (1998); Prent (2005) B56, pp. 321-323.
- 22 D'Agata (1998) p. 24. Cf. D'Agata (2001); Watrous, & Hadzi-Vianou (2004) pp. 308-313; Watrous, & Hadzi-Vianou (2004 a.) p. 346; Guizzi (2013).
- 23 Watrous, & Hadzi-Vianou (2004) pp. 315f.
- 24 Prent (2005) B22, p. 265.
- 25 Prent (2005) A2/B53, pp. 318f.

- 26 Shaw (1989); Csapo (1991); J. W. & M. C. Shaw (2000); Prent (2005) pp. 523-527.
- 27 Schäfer (1992); Prent (2005) B60, pp. 332-336; pp. 527-529.
- 28 バレカストロの発掘と聖所遺物の再評価については, Thorne&Prent (2000).
- 29 Prent (2003); Prent (2005) pp. 508-554; D'Agata (2006) pp. 408-410.
- 30 Prent (2005) pp. 529-532.
- 31 Cucuzza (2013) p. 52. 後代の例としてはメサラ平野のカミラリのトロス墓が古典期後半～ヘレニズム期にデメテルの祠として施設利用された。Cf. Alcock (2002) pp. 109-111.
- 32 Cucuzza (2013) pp. 37f. Cf. Fedirico (2013).
- 33 J. W. & M. C. Shaw (2000); Prent (2005) B57, pp. 323-330.
- 34 Hom., II. 8. 519. また, Ibid. 7. 442-453 では, ギリシア軍陣営が急遽造った「人の」防御壁と太古からトロイアを守っている「神の」城壁とが対比されている。
- 35 Prent (2005) A31/B66. また, Erickson (2002) は注目されることの少ない陶製奉納品の類型分析から, シミの聖所がアルカイック期末よりアフラティの庇護のもとに置かれたことを明らかにしている。
- 36 Prent (2005) A24/B52.
- 37 Prent (2005) B59.
- 38 Prent (2005) A23/B51. 高橋 (1998) は, パツツオスからの出土品の概要を調べた上で, 近隣のシブリタ集落の遺跡との関連性を指摘している。
- 39 Prent (2005) A30/B65.
- 40 Prent (2005) pp. 606-610.
- 41 Prent (2005) B54; B55; B58; B61; B62; B63; B64.
- 42 Prent (2005) pp. 557-559.
- 43 Ibid. pp. 560f.
- 44 D'Agata (2006) は, クレタの祭祀システムは継続的要素と変容プロセスをともに持ちつつ, 前8世紀戦士エリート層を核にした社会の登場によって再組織化されたと論じている。
- 45 従来の東方からの渡来職人定着説に対し, Kotsonas (2006) はクノッソスのテッケ墓の金属副葬品の再検証によって, 当時のエリート層に東方製品の嗜好は確かに存在したが, それは文化技術の受容や模倣で実現されたと論じている。Cf. Hoffman (1997).
- 46 Prent (2005) p. 315; pp. 512-514.
- 47 ブロンダの建屋GについてはPrent (2005) A21, pp. 153f. Cf. Glowacki (2007). カルフィの誤解を招きやすい「神殿 Temple」についてはPrent (2005) A6, pp. 139-143.
- 48 ギリシア本における聖所出土の前8世紀の陶製神殿プロトタイプについてはBoardman (1985) p. 33, 前7世紀以降の神殿のペリスチュレ式モニュメント化についてはOsborne (1996) pp. 262-271.
- 49 「泉の間」出土のモデルについてはColdstream (1994) pp. 108f. アルハネスからのモデルについてはPrent (2005) pp. 433-435. Cf. Hägg&Marinatos (1991).
- 50 Shaw (1989); J. W. & M. C. Shaw (2000).
- 51 ドレーロスのアポロン神殿のプランと出土遺物については, Mazarakis Ainian, (1997) pp. 216-218. ドレーロスの近年の発掘調査については, Zographaki & Faranoux (2010)・(2011).
- 52 前7世紀のクレタにおける大型建造物と共同会食の関係については, Rabinowitz (2014) pp. 105-108が, クラテルを囲む私的な宴 (シュンボシオン) と対比して市民戦士意識の醸成機能を分析している。
- 53 Prent (2005) B15 pp. 254-259.
- 54 D'Acunto (2002); Prent (2005) B14 pp. 253f.
- 55 頂上部のアルカイック期の大型建造物についてはPrent (2005) B5 pp. 247-250. なお Tegeu (2014) pp. 50-57 は, 巨石を組み上げた壁体は神殿ではなくテラスの擁壁である可能性が高いとする。東斜面の神殿については Tegeu (2014) pp. 44-49.
- 56 Di Vita (1991); D'Acunto (2002); Prent (2005) B23 pp. 267-273.

- 57 Prent (2005) B24, pp. 274-f; Gagarin & Perlman (2016) p. 263. Cf. Di Vita (2010).
- 58 Prent (2005) B1-4, pp. 246f; Gagarin & Perlman (2016) pp. 222-224.
- 59 Prent (2005) pp. 456-460.
- 60 Catling (1977) pp. 12f; Szyner (1979) S. 90-93.
- 61 Csapo et al. (2000); (2000a). Cf. J. W. & M. C. Shaw (2000).
- 62 Csapo (1991).
- 63 Johnston (2013) p. 429.
- 64 Bile (1988) No. 15-28. 「スベンシティオス規定」の内容の年代については Raubitschek (1970). Cf. 古山 (2013) 52-55 頁。
- 65 Johnston (2013) pp. 427-429.
- 66 Ibid. p. 429.
- 67 Levi (1969) Cf. Watrous, & Hadzi-Vianou (2004 a).
- 68 Johnston (2013) p. 429. Cf. Chaniotis (2010).
- 69 Johnston (2013) p. 429.
- 70 Ibit. アゾリアの前7世紀の集落空間の改造とアルカイック期の居住地プランに窺える社会意識の変化については Haggis et al. (2004)・(2007)・(2007a); Haggis & Mook (2011).
- 71 Perlman (2002).
- 72 アルカイック期ギリシアにおけるアベセダリアについては Powell (1991). pp. 152-157. また、クレタへのアルファベット導入の議論については、Duhoux (1981).
- 73 内容と出典については、表2 参照。
- 74 Erickson (2005) は、前6世紀後半にペロポネソス半島からクレタの西を経由してきたアフリカへと移動する交易ルートが形成され、そのルートに載ってギリシア本土の物質文化がクレタ西部および北海岸部に及んだと指摘している。
- 75 SEG. XXVI, Nr. 1708; Nr. 1709 Cf. Papakonstantinou (2002) pp. 132-146. これが必ずしもリテラシーの普及の裏づけとはならないことは、古山 (2013) 30-33 頁。
- 76 ギリシア世界における一人称銘文の意味については Carraro (2007).
- 77 アルカイック期クレタのリテラシーと社会的抑制については、Whitley (1997)・(1998)・(2005); Cross (2011); 古山 (2013) 27-29 頁; Gagarin (2003)・(2008)・(2011); Gagarin & Perlman (2016) pp. 53f.
- 78 ドレーロス出土の法碑文については、Demargne & van Effenterre (1937)・(1937a); van Effenterre (1946); Gagarin & Perlman (2016) Dr 1-Dr 7. ゴルテュンの法碑文に関しては、Gagarin & Perlman (2016) G1-136+Gortyn 1-7. 「大法典」については、Willems (1967) に詳しい。Cf. Chaniotis (2005). また、クレタのアルカイック期碑文の特質に関しては、Buck (1928); Bile (1988); Jeffery (1989) pp. 52-54; 308-315.
- 79 Gagarin & Perlman (2016) pp. 147-505 掲載のテキストよりアルカイック期の法碑文表3・表4を作成した。前5世紀後半にあたる Eleutherna 5 およびの G72-136 は割愛した。また、形状や由来地に関する情報を Guarducci (1935)・(1939)・(1942)・(1950) より適宜補足した。
- 80 リュクトスの特異な形状の法碑文については Gagarin & Perlman (2016) Lyktos I; van Effenterre, H. et M. (1985). 「スベンシティオス規定」については Gagarin & Perlman (2016) Dal; Jeffery & Morpurgo-Davies (1970); Jeffery, L & Morpurgo-Davies (1971); Raubitschek (1970). Cf. 古山 (2013) 52-55 頁。
- 81 Gagarin & Perlman (2016) Preface vii; 古山 (2013) 33-39 頁。
- 82 ドレーロスのアポロン神の議論については、Prent (2005) pp. 284-289. Cf. Chaniotis (1988); Mazarakis Ainian (1988)・(1997)
- 83 Meiggs & Lewis (1969) Nr. 2; pp. 2f; Osborne (1996) pp. 186f.
- 84 Gagarin & Perlman (2016) G28 p. 289; van Effenterre et Ruzé (1994-95).
- 85 Gagarin & Perlman (2016) Dr1; pp. 200-207. また、同じく Dr7 には宣誓式に際して犠牲式の挙行を指示していると思われる。Cf. Gagarin & Perlman (2016) pp. 220f. アルカイック期における文字の読み上げ慣行に

- については柳沼 (1993)・(1994); Gavrilov (1997), それによる効果についてはスヴェンプロ (2000 [1997]) に詳述されている。Cf. 古山 (2014) 33-35頁。
- 86 Gagarin & Perlman (2016) G48 p. 321. Cf. 古山 (2013) 42頁。
- 87 古山 (2013) 48-51頁。
- 88 Ailian, II. 39. ただし訳文は松平千秋・中務哲郎訳『アイリアノス ギリシア奇談集』(岩波文庫) 91頁より拝借した。
- 89 Ephor. *FGrH*. 70, F149 (Strab. X. iv, 20, C483).
- 90 タレスについてはPlut. *Lyk*. 4, エピメニデスについてはDiog. Laert. I. x, 109-112.
- 91 アルカイック期の立法者とクレタの関係についてはSzegegy-Maszak, (1978); Osborne (1997).
- 92 クレタ考古学における「アルカイック期の空白」についてはColdstream & Huxley (1999), 前7世紀のクレタ社会を考古学的見地から論じたWhitley (2010) は, 言語多様性, 土葬と火葬の混在, 早期からの東方化, 青銅奉納の衰退, ヘラ聖所の欠如, などを列挙してクレタの特殊性を踏まえた研究の重要性を指摘している。

Bibliography/文献一覧

- Alcock. 2002 *Archaeologies of the Greek Past: Landscape, Monuments and Memories*.
- Bile, M. 1988 *Le dialecte crétois ancien: Étude de la langue des inscriptions postérieures aux IC*.
- Boardman, J. 1982a Chapter 18b: The Islands. in *CAH* III2, part 1. pp. 754-778.
- 1982b Chapter 39b: Crete. in *CAH* III2, part 3. pp. 222-233.
- 1985 *Greek Art. 2nd revised ed.*
- Buck, C. D. 1928 *The Greek Dialects: Grammar Selected Inscriptions Glossary*.
- Callaghan, P. J. 1978 KRS 1976: Excavations at a Shrine of Graukos, Knossos. *BSA* 73, pp. 1-30.
- Carraro, F. 2007 The 'speaking objects' of Archaic Greece: writing and speech in the first complete alphabetic documents. in Lomas et al. (2007) pp. 65-80.
- Catling, H. W. 1977 The Knossos Area, 1974-1979. *BSA Arch/Rep 1976-1977*, pp. 3-11.
- Catling, R. W. V. & F. Marchand, 2010 *Onomatologos: Studies in Greek Personal Names Presented to Elaine Matthews*.
- Chaniotis, A. 1988 Habgierige Götter, habgierige Städte Heiligtumsbesitz und Gebietsanspruch in den kretischen Staatsverträgen. *Ktéma* 13 S. 21-39.
- 2010 Phaistos Sybritas: An Unpublished Inscription from the Idaean Cave and Personal Names Deriving from Ethnicity. in Catling & Marchand (2010) pp. 15-21.
- 2014 *Das antike Kreta*.
- Chapin, A. P. ed. 2004 *Charis: Essays in Honor of Sara A. Immerwahr*.
- Coldstream, J. N. 1973 *Knossos: The Sanctuary of Demeter*.
- 1977 *Geometric Greece*.
- 1983 The Meaning of the Religious Styles in the Eighth Century B.C. in Hägg (1981 [1983]) pp. 17-25.
- 1983a Gift Exchange in the Eighth Century B.C. in Hägg (1981 [1983]) pp. 201-207.
- 1994 Urn with Lids: The Visible Face of the Knossian 'Dark Age'. in Evley et al. (1994) pp. 105-121.
- 2000 Evans's Greek Finds: The Early Greek Town of Knossos, and Its Encroachment on the Borders of Minoan Palace. *BSA* 95, pp. 259-299.
- 2006 Knossos in Early Greek Times. in Degar-Jalkotzy & Lemos (2006) pp. 581-596.
- Coldstream, J. N. & G. L. Huxley 1999 Knossos: The Archaic Gap. *BSA* 94 pp. 289-307.
- Cross, M. 2011 *The Creativity of Crete: City States and the Foundations of the Modern World*.
- Csapo, E. 1991 An International Community of Traders in Late 8th-7th c. B.C. Kommos in Southern Crete. *ZPE* 88 pp. 211-216.
- Csapo, E., A. W. Johnston & D. Geadgan 2000 The Iron Age Inscription. in Shaw & Shaw (2000) pp. 101-107.

- 2000a Catalogue of Iron Age Inscriptions. in Shaw & Shaw (2000) pp. 108-134.
- Cucuzza, N. 2013 Minoan Ruins in Archaic Crete.
- D'Acunto, M. 2002 Gortina, Il santuario protoarcaico sull'acropoli di Hagghios Ioannis: Una riconsiderazione. *ASAtene* 80 Tomo I pp. 183-229.
- D'Agata, A. L. 1998 Changing patterns in a Minoan and Post-Minoan sanctuary: the case of Agia Triada. in *Post-Minoan Crete: Proceeding of the First Colloquium on Post-Minoan Brete held by the British School at Athens and the Institute of Archaeology, University college London, 10-11 November 1995*. pp. 19-26.
- 2001 Religion, Society and Ethnicity on Crete at the End of the Late Bronze Age: The Contextual Framework of LMIIC Cult Activities. in Laffineur & Hägg (2001) pp. 345-54.
- 2001a Ritual and Rubbish in Dark Age Crete: The Settlement of Thronos/Kephala (Ancient Sybrita) and the Pre-Classical Roots of a Greek City. *AEA4* [1997-2000].
- 2003 Crete at the Transition from Late Brpnze to Iron Age. in Fischer et al. (2003) pp. 21-28.
- Davies, J. K. 2003 Crtete at the Transition from Late Bronze to Iron Age. in Fischer et al. (2003) pp. 21-28.
- 2006 Cult Activity on Crete in the Early Dark Age: Changes, Continuities and the Development of a 'Greek' Cult System. *Degar-Jalkotzy & Lemos* (2006) pp. 397-414.
- Day, P. M. L. Joyner, V. Kikikoglou & G. C. Gesell 2006 Goddess, Snake Tube, and Plaques: Analysis of Ceramic Ritual Objects from the LMIII C Shrine at Kavousi. *Hesperia* 75 pp. 137-175.
- Degar-Jalkotzy, S & I. S. Lemos 2006 *Ancient Greece: From the Mycenaean Palaces to the Age of Homer*.
- Demagne, P. et H. van Effenterre 1937 Recherches à Dréros. *BCH* 61 pp. 5-32.
- 1937a Recherches à Dréros. II *BCH* 61 pp. 333-348.
- Di Vita, A. 1991 Gortina in età geometrica. *Musti* (1991) pp. 309-319.
- 2010 *Gortina di Creta: Quindici secoli di vita urbana*.
- Duhoux, Y. 1981 Les Étéocrétois et l'origine de l'alphabet grec. *AC* 50 pp. 287-298.
- Erickson, B. L. 2002 Aphrati and Kato Syme: Pottery, Continuity, and Cult in Late Archaic and Classical Crete. *Hesperia* 71 pp. 41-90.
- 2005 Archaeology of Empire: Athens and Crete in Fifth Century B.C. *AJA* 109 pp. 619-663.
- 2010 *Crete in Transition: Pottery Styles and Island History in the Archaic and Classical Periods*.
- Etairia kretikon istorikon meleton ed. 2000 Pefragmena tou h' diethnous kretologikou synedriou.
- Evley, D., H. Hughes-Brock & N. Monighiano eds. *Knossos: Labyrinth of History*.
- Federico, E. 2013 Rethinking the Minoan Past: Two Archaic-Cretan ethnical retrospectives on primitive Crete. in Niemeier et al. (2013) pp. 19-30.
- Fischer, B., H. Genz, É. Jean & K. Köroglu eds. 2003 *Identifying Changes: The Transition from Bronze to Iron Age in Anatolia and its Neighbourin Regions*.
- Fisher, N. & H. van Wees eds. 1998 *Arcaic Greece: New Approaches and New Evidence*.
- Foxhall, L. & A. D. E. Lweis eds 1996 *Greek Law in Its Political Setting*.
- Gagarin, M. — 1986 *Early Greek Law*.
- 2003 Letters of Law: Written Text in Ancient Greek Law. in Yunis (2003) pp. 59-77.
- 2008 *Writing Greek Law*.
- 2011 Writing Sacred Laws in Archaic and Classical Crete. in Lardinois et al. (2011) pp. 101-111.
- Gagarin, M. & P. Perlman, 2016 *The Laws of Ancient Crete c. 650-400 BCE*.
- Gaignerot-Driessen, F. 2014 Goddesses Refusing to Appear? Reconsidering the Late Minoan III Figures with Upraised Arms. *AJA* 118 pp. 489-520.
- Gavrilov, A. K. 1997 Techniques of Reading in Classical Antiquity. *CQ* 47, pp. 56-73.
- Gesell, G. 2001 The Function of the Plaque in the Shrines of the Goddess with Up-raised Hand. in Laffineur & Hägg (2001) pp. 253-258.

- Gesell, G. 2004 From Knossos to Kavousi: The Popularizing of the Minoan Palace Goddess. in Chapin (2004) pp. 131-150.
- Gesell, G., L. Day & W. Coulson 1983 Excavation and Survey at Kavousi, 1978-1981. *Hesperia* 52, pp. 389-420.
- Glowacki, K. 2007 House, Household and Community at LMIIIIC Vronda, Kavousi. in Westgate et al. (2007) pp. 129-139.
- Greco, E. & Lombardo, M. 2005 *La grande iscrizione di gortyna: centoventi anni dopo la scoperta: atti del I Convegno internazionale di studi sulla Messarà.*
- Guarducci, M. 1935 *Inscriptiones Creticae I.*
 ——— 1939 *Inscriptiones Creticae II.*
 ——— 1942 *Inscriptiones Creticae III.*
 ——— 1950 *Inscriptiones Creticae IV.*
- Guizzi, F. 2013 Synoecisms in archaic Crete. in Niemeier et al. (2013) pp. 331-353.
- Hägg, R., & N. Marinatos, 1991 The Giamalakis Model from Archanes: Between the Minoan and the Greek Worlds. in Musti (1991) pp. 301-308.
- Hägg, R., N. Marinatos & G. C. Nordquist eds. 1986 [1988] *Early Greek Cult Practice.*
- Haggis, D.C., M. S. Mook, C. M. Scarry, L. M. Snyder & W. C. West III, 2004 Excavations at Azoria, 2002. *Hesperia* 73 pp. 339-400.
 ——— 2007 Excavations at Azoria, 2003-2004. Part 1. The Archaic Civic Complex. *Hesperia* 76 pp. 243-321.
 ——— 2007a Excavations at Azoria, 2003-2004. Part 2. The Final Neolithic, Late Prepalatial, and Early Iron Age Occupation. *Hesperia* 76 pp. 665-716.
- Haggis D. C. & M. S. Mook 2011 The Early Iron Age-Archaic Transition at Azoria in Eastern Crete. in Mazarakis Ainian (2011) pp. 515-527.
- Hansen, M. H. ed. 2005 *The Imaginary Polis.*
- Henrichs A. 2003 Writing Religion: Inscribed Texts, Ritual Authority, and the Religious Discourse of the Polis. in Yunis (2003) pp. 38-58.
- Hoffman, G. L. 1997 *Imports and Immigrants: Near Eastern Contacts with Iron Age Crete.*
- Jeffery, L. H. 1976 *Archaic Greece: The City-States c. 700-500 B.C.*
 ——— 1989 *The Local Scripts of Archaic Greece.*
- Jeffery, L. H. & Morpurgo-Davies, A. 1970 POINIKASTAS and POINIKAZEN: BM 1969. 4-2.1, A New Archaic Inscription from Crete. *Kadmos* 9 118-154.
 ——— 1971 An Archaic Greek Inscription from Crete. *BMQ* 36 pp. 24-29.
- Jensen, P. F. -, Th. H. Nielsen & L. Rubinstein eds. 2000 *Polis & Politics: Studies in Ancient Greek History.*
- Johnston A. 2013 Writing in and around Archaic Crete. in Niemeier et al. (2013) pp. 427-435.
- Kocke, G. & I. Tokmaru eds. 1990 [1992] *Greece between East and West: 10th-8th Centuries B.C.*
- Koerner, R. 1993 *Inschriftliche Gesetzestexte der frühen griechischen Polis.*
- Kotsonas, A. 2002 The Rise of the *polis* in Central Crete. *Eulimene* 3 pp. 37-73.
 ——— 2006 Wealth and Status in Iron Age Knossos. *OJA* 2006, pp. 149-172.
- Laffineur, R. & R. Hägg eds. 2001 *Potonia Deities and Religion in Aegean Bronze Age.*
- Landinois, A. P. M. H., J. H. Blok & M. G. M. van Der Poel eds. 2011 *Sacred Words: Orality, Literacy and Religion.* <*Mnemossyne Suppl.* 332>.
- Lefevre-Novaro, D. 2007 Les débuts de la *polis* (l'exemple de Phaistos-Crète). *AC* 32 pp. 467-495.
 ——— 2008 Interactions religieuses entre la Messara (Crète) et la Méditerranée orientale aux XIIe-VIIIe siècles avant J.-C. *AC* 33 pp. 259-270.
 ——— 2009 Culti e santuari a Festòs in epoca altoarcaica: Per un'analisi funzionale. *Creta Antica* 10/ II pp. 563-597.

- Lemos, I. S., A. Livieratou & M. Thomas 2009 Post-Palatial Urbanization: Some Lost Opportunities. in Owen & Preston (2009) pp. 62-84.
- Létoublon F. 1989 Le serment fondateur. *Metis* 4 pp. 101-115.
- Levi, D 1969 Early Hellenic Pottery of Crete.
- Lomas, K., R. D. Whitehouse & J. B. Willkins eds. 2007 *Literacy and the State in the ancient Mediterranean*.
- Marinatos, N. 1993 *Minoan Religion: Ritual, Image and Symbol*.
- Marginesu, G. 2013 Il piano urbano di Gortina: Il fattore religioso. in Niemeier et al. (2013) pp. 323-262.
- Mazarakis Ainian, A.J. 1988 Early Greek Temples: Their Origin and Funktion. in Hägg et al. (1986 [1988]) pp. 105-119.
- 1997 *From Rulers' Dwellings to Tempels: Architecture, Religion and Society in Early Iron Age Greece (1100-700 BC)*.
- Mazarakis Ainian, A. J. ed. 2011 *The "Dark Ages" Revised*. vol. 1.
- Meiggs, R. & D. M. Lewis eds. 1969 *A Selection of Greek Historical Inscriptions to the End of the Fifth Century B.C.*
- Michell L. G. & P. J. Rhodes eds 1997 *The Development of the polis in Archaic Greece*.
- Morris, I. — 1992 Archaeology and Archaic Greece History. in Fisher & van Wees (1992) pp. 1-91.
- 2000 *Archaeology as Cultural History: Words and Things in Iron Age Greece*.
- Morris, S. P. 1992 Introduction: Greece beyond East and West: Perspectives and Prospects. in Kopcke & Tokumaru (1990 [1992]) pp. xiii-xviii.
- Musti, D. ed. 1991 *La transizione del Miceneo dell'alto archaism: Dal palazzo alla città*.
- Nielsen, Th. H. 2002 *Even More Studies in the Ancient Greek Polis. Hisroria Einzelschriften* 162.
- Niemeier, W. -D., O. Pile & I.Kaiser hrsg. 2013 *Kreta in der geometrischen und archaischen Zeit: Akten des Internationalen Kolloquiums am Deutschen Archäologischen Institut, Abteilung Athen 27-29 Januar 2006 <Athenaia 2>*.
- Nowicki, K. 2000 Defensible sites in Crete, c. 1200-800 B.C. (LM IIIB/IIIC through Early Geometric)
- Osborne, R. 1996 *Greece in the Making 1200-497 B.C.*
- 1997 Law and Laws: How do we join up the dots? in Michell & Rhodes (1997)
- Owen, S. & L. Preston eds. 2009 *Inside the City in the Greek World: Studies of Urbanism from the Bronze Age to the Hellenistic Period*.
- Papakonstantinou, Z. 2002 Written Law, Literacy and Social Conflict in Archaic and Classical Crete. *AHB* 16-3/4 pp. 135-150.
- Perlman, P. 2002 Gortyn. The First Seven Hundred Years. Part II: The Laws from The Temple of Appolo Pythios. in Nielsen (2002) pp. 187-227.
- 2005 Imaginng Crete. in Hansen & Nielsen (2005) pp. 1144-1195.
- 2006.
- 2010 Of Battle, Booty and (Citizen) Women: A "New" Inscription from Archaic Axos, Crete. *Hesperia* 79 pp. 70-112.
- Perna, R. 2012 *L'Acropoi di Gortina: La Tavola "A" della Carta Archeologica della Città di Gortina*.
- Pilz, O. & G. Seelentag eds. 2014 *Cultural Practices and Material Culture in Archaic and Classical Crete*.
- Powell, B. B. 1991 *Homer and the Origin of the Greek Alphabet*.
- 2009 *Writing: Theory and History of the Technolgy of Civilization*.
- Polignac, F. 1992 Influence extérieure ou évolution interne?: L'innovation culturelle en Grèce géométrique et archaïque. pp. 114-127.
- Prent, M. 2003 Glories of the Past in the Past: Ritual Activities at Palatial Ruins in Early Iron Age Crete. in Dyke & Alcock (2003) pp. 81-103.

- 2005 *Cretan Sanctuaries and Cult: Continuity and Change from Late Minoan IIIC to the Archaic Period*.
- Rabinowitz, A. 2014 Drinkers, Hosts, or Fighters? Masculine Identities in Pre-Classical Crete. in Pilz & Seelentag (2014) pp. 91-119.
- Raubitschek, A. E. 1970 The Cretan Inscription BM 1969.4-2.1: A Supplementary Note. *Kadmos* 9 pp. 155-156.
- Ruzé, F. 1988 Aux débuts de l'écriture politique: Le pouvoir de l'écrit dans la cité. in Detienne (1988) pp. 88-94.
- Schäfer, J. 1992 *Amnisos: Nach den archäologischen, historischen und epigrafischen Zeugnissen des Altertums und der Neuzeit*.
- Seelentag, G. 2015 *Das archaische Kreta*.
- Sekunda, N. ed. 2010 *Ergasteria: Works Presented to John Ellis Jones on his 80th Birthday*.
- Shachter, A. 1992 Policy, Cult, and the Placing of Greek Sanctuaries. *Entretiens* 37 pp. 1-64.
- Shaw, J. W. 1989 Phoenicians in Southern Crete. *AJA* 93, pp.
- Shaw, J. W. & M. C. Shaw eds 2000 *Kommos IV: The Greek Sanctuary. Part 1*.
- Sjögren, L. 2003 *Cretan Location: Discerning Site Variations in Iron Age and Archaic Crete (800-500 BC)*.
- 2008 *Fragment of Archaic Crete: Archaeological Studies on Time and Space*.
- Stoddart, S. & J. Whitley 1988 The Social Context of Literacy in Archaic Greece and Etruria. *Antiquity* 62 pp. 761-772.
- Stroud, S. 1979 *The Axones and Kyrbeis of Drakon and Solon*. <UCP: Classical Studies 19>.
- Svenbro, J. 1993 [1988] *Phrasikleia: An Anthropology of Reading in Ancient Greece*. [1988].
- Szegedy-Maszak, A. 1978 Legends of the Greek Lawgivers. *GRBS* 19 pp. 199-209.
- Szzyrmer, M. 1979 L'inscription phénicienne de Tekke, près de Knossos. *Kadmos* 18, S. 89-93.
- Tegeu, E. 2014 Archaic and Classical Axos. in Pilz & Seelentag (2014) pp. 41-65.
- Themelis, P. G. ed. 2009 *Ancient Eleutherna Sector I*. vol. 1.
- Thomas R. 1992 *Literacy and Orality in Ancient Greece*.
- 1994 Literacy and the city-state in archaic and classical Greece. in Bourman & Woolf (1994) pp. 33-50.
- 1996 Written in Stone? Liberty, Equality, Orality and the Codification of Law. in Foxhall & Lewis (1996) pp. 9-31.
- Thorne, S. M. & M. Prent, 2000 The Sanctuary of Dictaeon Zeus at Paleaikastron: a re-examination of the excavations by the British School in 1902-1906. In *Etairia kretikon istorikon meleton* (2000) pp. 169-179.
- Tzifopoulos, Y. 2009 Eleutherna, Sector I: The Inscriptions. in Themelis (2009).
- Van Dyke R. M. & S. E. Alcock eds. 2003 *Archaeologies of Memory*.
- van Effenterre, H. 1937 A propos du serment des Drériens. *BCH* 61 pp. 327-332.
- 1946 Inscriptions archaïques crétoises. *BCH* 70 pp. 588-606.
- 1961 Pierres inscrites de Dréros. *BCH* 85 pp. 544-568.
- 1985 De l'éteocrète à la selle d'agneau. *BCH* 113 pp. 447-449.
- 1991 Développements territoriaux dans la Crète post-minoenne. in Musti (1991) pp. 197-208.
- van Effenterre, H. et F. Ruzé 1994-95 *Nomima: recueil d'inscriptions politiques et juridiques de l'archaïsme grec*. 2 vols.
- van Effenterre, H. et M. 1985 Nouvelles lois archaïques de Lyttos. *BCH* 109 pp. 157-188.
- 1994 Ecrire sur les murs. in H. -J. Gehrke hrg. (1994).
- van't Wout, E. 2011 From Oath-Swearing to Entrenchment Clause: The Introduction of *ATIMIA*-Terminology in Legal Inscriptions. in Lardinois et al. (2011).
- Vikela, E. 2003 Continuity in Greek Religion: The case of Zeus Cretagenes. *CretSt* 8, pp. 199-215.
- Wallace, S. 2010 Ancient Crete: from successful collapse to democracy's alternatives, 12th-5th centuries BC.
- 2013 Citadel and City-state: Insights from surface ceramics into sociopolitical change in Protogeometric through Archaic Crete. in Niemeier et al. (2013) pp. 103-131.

- Watrous, L.V. & D.Hadzi-Vianou, 2004 The Polis of Phaistos: Development and Destruction (Late Hellenistic). in Watrous, et al. (2004) pp. 307-338.
- Watrous, L. V. & D. Hadzi-Vianou, 2004a Creation of a Greek City-State (Late Minoan IIIC-Orientalizing). in Watrous, et al. (2004) pp. 339-350.
- Watrous, L. V., D. Hadzi-Vianou & H. Blitzer, 2004 *The Plain of Phaistos: Cycles of Social Complexity in the Mesara Region of Crete*.
- Westgate, R.C., N. Fisher & A. J. Whitley, 2007 Building communities: house, settlement and society in the Aegean and beyond: proceedings of a conference held at Cardiff University, 17-21 April 2001.
- Whitley, J. 1997 Cretan Laws and Cretan Literacy. *AJA* 101 pp. 635-661.
- 1998 Literacy and Law-Making: The Case of Archaic Crete. in Fisher & van Wees (1998) pp. 311-331.
- 2005 Before The Great Code: Public Inscriptions and Material Practice in Archaic Crete. in Greco & Longardo (2005) pp. 41-56.
- 2010 Eteocretan and Eteo-britons: The Intellectual Prehistory of the Minoans. in Sekunda (2010).
- Willets, R. ed. 1967 *The Law Code of Gortyn*.
- Willets, R. F. 1955 *Aristocratic society in ancient Crete*.
- 1962 *Cretan cults and festivals*.
- 1977 *The civilization of ancient Crete*.
- 1982 Chapter 39c: Cretan Laws and Society. in *CAH III*2, part 3. pp. 234-248.
- 1991 Aspects of Land Tenure in Dorian Crete. in Musti (1991) pp. 209-214.
- Woodard, R. D. 1997 *Greek Writing from Knossos to Homer: A Linguistic Interpretation of the Origine of the Greek Alphabet and the Continuity of Ancient Greek Literacy*.
- Youni, M. S. ed. 2003 *Written Texts and the Rise of Literate Culture in Ancient Greece*.
- Youni, M. S. 2010 Polis and Legislative Procedure in Early Crete. in Thür (2010) pp. 151-167.
- Zographaki, V. & A. Faranoux, 2010 Mission franco-hellénique de Dreros. *BCH* 134 pp. 594-600.
- 2011 Mission franco-hellénique de Dréros, *BCH* 135 pp. 625-646.
- 大黒俊二 2010『声と文字』岩波書店
- 岡田泰介 2010「クレタの「従属共同体」——クレタにおけるポリスの構造分析のために——」 in 桜井・師尾 (2010) 32-50頁。
- 折口信夫 1932「石に出で入るもの」『折口信夫全集19』中央公論社1996年 所収、36-75頁。
- W. J. オング 著; 桜井直文, 林正寛, 糟谷啓介訳 1991『声の文化と文字の文化』藤原書店
(*Orality and Literacy: the Technologizing of the Word*. 1982)
- 桜井万里子・師尾晶子編 2010『古代地中海世界のダイナミズム——空間・ネットワーク・文化の交錯——』
- ロジェ・シャルティエ／グリエルモ・カヴァッロ編 2000『読むことの歴史』ヨーロッパ読書史』大修館書店
(*Histoire de la lecture dans le monde occidental*. 1997)
- ジュスベル・スヴェンブロ, 片山英男訳 2000 [1997]「アルカイック期と古典期のギリシャ——黙読の発明」 in シャルティエ／カヴァッロ 2000 [1997], 33-73頁。
- 周藤芳幸 1997年『ギリシアの考古学』同成社
- 高橋裕子 1996「クレタ島エレフセルナ——新しいギリシア暗黒時代像の構築に向けて——」『史潮』新39, 71-86頁。
- 1998「クレタ島パツォス遺跡における『暗黒』の時代——ギリシア初期鉄器時代の一聖所——」『古代文化』50, 17-29頁。
- 2004「鉄の時代へ——ギリシアの初期鉄器時代に関する研究動向——」『西洋史研究』新輯33, 96-110頁。
- 古山夕城 2013「アルカイック期クレタにおける法碑文のコスモロジー——形式・形態分析と現象論——」『駿台史学』第147号 25-69頁。

- 2014 「クレタ暗黒期からアルカイック期の宗教変容と法の世界」 山川廣司編『研究報告書 ミノア・ミュケナイ期～前古典期における国家と宗教の諸相と変容に関する研究』〈平成23年度～平成25年度科学研究費（基盤研究C）〉27-42頁。
- 柳沼重剛 1993 「音読と黙読——歴史上どこまで確認できるか——」『社会情報学研究』〈大妻女子大学紀要——社会情報系——〉1, 1-16頁。
- 1994 「音読と黙読 補遺」『社会情報学研究』〈大妻女子大学紀要——社会情報系——〉2, 1-13頁。

ドイツ近代文学における幼年時代の記述
— 大都市ベルリンの場合 —

岡 本 和 子

Die Darstellung der Kindheit in der neueren deutschen Literatur – mit Fokus auf Berlin

OKAMOTO Kazuko

Die vorliegende Arbeit versucht zu klären, wie die Kindheitsdarstellung in der neueren deutschen Literatur ermöglicht wird. Literarische Darstellung der Kindheit befindet sich eigentlich in einer Aporie, wenn man die Kindheit als Lebensphase ohne Sprache betrachtet: vorsprachliches Wesen müsste sprachlich ausgedrückt werden. Literatur scheint diese schwierige Aufgabe so aufzunehmen, indem sie die Grenze zwischen verbaler und nonverbaler Welt, nämlich das Sprachenlernen der Kinder beschreibt.

So könnte man zur Darstellung des kindlichen Spracherwerbes mindestens drei Herangehensweisen wählen; pädagogisch, sprachtheoretisch und literarisch bzw. autobiographisch. Meine Arbeit behandelt hauptsächlich autobiographische Texte, macht aber auch Texte für den Spracherwerb wie Fibeln oder Lesebücher zum Gegenstand der Analyse, weil auch solche Lehrbücher als eine Art Darstellung der praktischen Theorie der Kindheit angesehen werden können.

Im ersten Kapitel wird die Geschichte der Fibeln und Lesebücher vom 18. Jahrhundert bis zum Anfang 20. Jahrhundert vorgestellt. Hier wird erklärt, dass die jeweilige Zeit sich bemüht, sinnliches Begreifen der Kinder zum abstrakten Lesen und Schreiben zu überbrücken. Es wird gezeigt, wie sich der Sprachunterricht und damit auch das entsprechende Kinderbild gewandelt hat.

Im zweiten Kapitel wird die Entwicklung der autobiographischen Darstellungsform veranschaulicht. Zuerst wird Karl Philipp Moritz' autobiographisches Werk *Anton Reiser* (1785-90) behandelt, das zum ersten Mal in der deutschsprachigen Literatur eigene Kindheit zum literarischen Thema gemacht hat. Darin ist kindlicher Spracherwerb chronologisch und systematisch dargestellt. Nach Moritz sollte das Lesenlernen der Kinder dazu beitragen, ihr Denkvermögen zu entwickeln, damit sie weiter als Menschen gut leben können. Im 19. Jahrhundert wird aber die Kindheit nicht mehr als ein Teil des ganzen Lebens, sondern als ein selbständiges Leben betrachtet. Dabei werden einzelne narrative Einheiten der Erinnerungen nicht mehr in chronologischer Reihenfolge, sondern fragmentarisch dargestellt. Diese fragmentarisierende Tendenz kann man an den autobiographischen Schriften von Immermann und Hebbel, vor allem aber an Bogumil Goltz' *Buch der Kindheit* (1847) erkennen.

Im dritten Kapitel handelt es sich um die Darstellung der Berliner Kindheit. Lange blieb Berliner Kindheit als literarisches Thema vernachlässigt. Hauptgrund dafür ist, dass Berlin im 19. Jahrhundert noch im Werden war. Seit dem Anfang dieses Jahrhunderts war Berlin eine zukunftsorientierte Stadt, die danach trachtete, zur Hauptstadt von dem kommenden Nationalstaat „Deutschland“ zu avancieren. Es ist sehr gut möglich, dass eine solche Stadt gegen rückblickendes Verhalten gleichgültig war, das jeder Kindheitserinnerung gewissermaßen innewohnt. Endlich Gutzkow hat als Berliner eigene Kindheitserinnerung als *Aus der Kanbenzeit* (1852) niedergeschrieben. Dieses Werk wurde aber von

seinen Zeitgenossen kritisiert, weil die Darstellung Berlins die Schilderung des Lebens des Subjekts weit in den Hintergrund drängt. Aber gerade diese Verschränkung von der Darstellung der Kindheit und der der Stadt ist ein Merkmal der Darstellung von Berliner Kindheit, das auch bei Benjamins *Berliner Kindheit um neunzehnhundert* (1932-38) erkennbar ist. Anders als bei Gutzkow ist seine Kindheitsdarstellung mit einem Gefühl des Verlustes durchwebt. Kindheit bedeutet für Erwachsene immer eine verlorene Lebensphase. Dieses Verlorengehen der Kindheit beschreibt Benjamin als Schreibenlernen des Kindes. Ferner sieht Benjamin im Ende der Kindheit den Verfall des deutschen Bürgertums, in dessen Lebensbereich Benjamin selber aufgewachsen war. Diese von autorisierter Geschichtsschreibung noch nicht geschriebene Verfallsgeschichte des deutschen Bürgertums wollte Benjamin darstellen, indem er seine eigene Kindheit erzählte. Für ihn war Berlin eine Ruine, wo die Kinder mit dem „Abfall der Geschichte“ spielen.

ドイツ近代文学における幼年時代の記述

——大都市ベルリンの場合——

岡本和子

序章

(一) 文学と幼年時代——言語を学ぶ存在としての子ども

ドイツ文学において幼年時代がひとつのテーマとしてクローズアップされるのは、十八世紀末以降のことである。文学に先立ってまずは教育界が幼年時代に注目していた。「人間を人間として考え、子どもを子どもとして考えなければならない」、「自然は子どもが大人になるまえに子どもであることを望んでいる」として¹、子どもを未熟な大人としてではなく、独自の存在として捉えなおしたルソーの教育思想を実践に移す試みが次々となされた。デッサウに汎愛派の学校（Philanthropinum）を創設したバゼドウ（1724-1790）やその協力者カンペ（1746-1818）、この学校の卒業生であり自身も学校を開設したザルツマン（1744-1811）やスイスで貧民学校を運営したベスタロッチ（1746-1827）など、歴史に名を残す多くの教育者たちが活躍した十八世紀は「教育の世紀」²と呼ばれ、教育書や教科書の類もさかんに出版された。³「幼年時代の発見は近代的な教育の成立と同列に見なされるべきだ」⁴と言われるように、ドイツの啓蒙期に幼年時代が注目されるのは必然的だったのだ。子どもというテーマはやがて、実践的に教育に携わる者たちだけでなく、哲学者や文学者にとっても重要な意味を持ち始める。⁵なかでもジャン・パウロ（1763-1825）は、『見えないロッジ』（1793）や『陽気なヴッツ先生』（1793）といった文学作品で子どもと教育をテーマとしただけでなく、『レヴァーナあるいは教育論』（1807）と題する大部の教育論も著した。そこでは子どもが「細工され、形づくられるときに花の香りをふりまく紫檀にも似た無垢な魂」⁶と呼ばれ、幼年期とは、誰もが自身の内部に宿す「理想の栄光人間」を展開させる「聖なる霊的精神」⁷を最もはっきりと示す段階であるとされた。

こうした無垢な子ども像⁸を受け継いだロマン派の文学者たちは、十九世紀初頭、ナポレオン戦争や科学技術の急速な発展によって既存の社会や思考の枠組みが揺るがされていた危機の時代に、子どもを来たるべき新しい時代の担い手と見なした。ノヴァーリスは「子どもたちのいるところ、そこに黄金時代はある」⁹として、失われた「太古の黄金時代」¹⁰を取り戻すよすがを子どもという形象に見出している。

ロマン派の作家たちはまた他方で、子ども向けの読み物にも関心を抱き始めた。アルニム・ブレン

ターノの編纂による『少年の魔法の角笛——ドイツの古い歌』(1805-1808), グリム兄弟の編纂による『子どもたちと家庭の童話』(初版1812/1815)といった, ドイツ民衆の口承文学の記録であると同時に児童書でもあるような本が矢継ぎ早に刊行された。一七四九年生まれのゲーテは裕福な家庭に育ち, 家には多くの蔵書があったにもかかわらず, 「その頃はまだ子供のための文庫というのはなかった。——アームス・コメニウスの『世界図絵』のほかに, この種の本は一冊も手に入らなかった」¹¹と回想しているが, そんな嘆きは徐々に解消されつつあったと言えるだろう。

そうしたロマン派のなかでクレメンス・ブレンターノは, 子どもを聖なるものとしてではなく楽園喪失の形象として描いたという点で特異だった。ブレンターノが描いた子どもは, 言語を学ぶ存在であり, 言語を習得してゆくにつれて無垢も失ってゆく存在である。¹² ブレンターノは楽園の喪失と言語の習得を同時成立的なこととして捉えていたのだ。

ルソーは「少年 (puer)」と「幼児 (infance)」を区別したうえで, 「幼児」という言葉はラテン語で「話すことができない者」を意味していると指摘し, 子どもについて考察する際には言語という要素が大きく関わっていることを示唆していた。¹³ 本稿でも子どもを「言語を学びつつある存在」と捉えることにする。すると, 幼年時代の記述は, 非言語的な側面をもつ子どもを言語化するという, アポリアを孕んだ言語表現と見なせるだろう。このアポリアに対して, 文学は幼年時代の記述を, 非言語的な領域に対する境界の記述, すなわち, 子どもの言語習得の記述として行っているように思われる。子どもとは, 言語をもたない状態と言語習得との境界上にある存在であり, 幼年時代とは「非言語的な生の歴史」である。つまり, 幼年時代の記述とは, いまだ言語化されていない生の歴史を記述する試みにほかならないのだ。

(二) プログラムのなかの子どもと想起される子ども

子どもの言語習得を記述しようとする場合, そこには少なくとも三つのアプローチの仕方が考えられるだろう。教育的な視点からのアプローチ, 言語学的な視点からのアプローチ, そしてみずからの幼年時代の想起というアプローチである。

教育書が対象とする子どもは, 眼前の生徒であると同時に, 教育プログラムのなかで想定された理念的な子どもでもある。他方, 想起されたみずからの幼年時代のなかの子どもも, 自伝というものに必然的にそなわる虚構性から逃れはしない。さらに最近では, 経験的な観察と客観的なデータが期待される言語学においても, 自伝という立証不可能なデータの有用性が注目され始めている。¹⁴ つまり幼年時代の記述には, それがいかなる種類のものであれ, 記述する者のまなごしが必ず含まれるのだ。そうした記述者の視点はしかし, 虚構を作り上げるものとして排除されるべきであるというよりもむしろ, 要請されるものである。ジャン・パウルは, 幼年時代を記述する際には, 記述する者がみずからのまなごしを意識することが必要だと言っている。

一人の普通の子どものための日記の方が, 普通の著者による子どもたちについての本よりも良いだろう, なにしる, どんな人間の教育論でも, その人物が書き写すのではないことを書くだけ

で、途端に意味深いものになるのだから。社交家とはちがって、その著者はつねに「わたしは」と言えばよいのだ、それ以上の言葉はいらない。¹⁵

「同じ道を仲良く百人で連れだって、単調な自然の音を響かせながら進んでゆく」¹⁶ 社交家ではなく、空間と時間の制約を受けた「わたし」という唯一性を捨て去ることなく記述された幼年時代こそが意味をもつのだ。ジャン・パウルの上記の言葉は、ベンヤミンが歴史記述について言っていることに通底している。

過ぎ去った事柄を歴史的なものとして明確に言表するとは、それを〈実際にあった通りに〉認識することではなく、危機の瞬間にひらめくような想起を捉えることを謂う。歴史的唯物論にとっては、危機の瞬間において歴史的主体に思いがけず立ち現われてくる、そのような過去のイメージを確保することこそが重要なのだ。¹⁷

幼年時代をいまだ完全な言語をもたない生の歴史として捉えるならば、その歴史の記述に必然的に書き込まれている記述者の存在もやはり見届けられるべきだろう。この意味で、本論考の対象として重要になるのは、完全なフィクションとしての幼年時代の記述よりも、特定の時代と土地に定位されたみずからの幼年時代の追想の書である。

(三) ベルリンの幼年時代

本論考が最終的な論考のテーマとするのは、ベルリンという都市における幼年時代の記述であるが、実は十九世紀後半まで、ベルリンの幼年時代はほとんど文学に描かれていない。その理由のひとつは、砂上に人工的に作られたベルリンが長らく、牧歌的な自然もなければ大都市の華やかさもない、魅力に乏しい都市であり続けたことにあるだろう。また、一八〇六年から一八〇九年にかけてナポレオン軍による占領を経験したベルリンが、一八一三年にライプツィヒの戦いでプロイセン軍を含む連合軍がフランス軍を破ったのちには、近い将来に成立すべき国民国家「ドイツ」の首都となるべくあからさまに未来志向になり、回顧的なまなざしが似合う都市ではなかったことも関係している。¹⁸ そうしたなか、ナポレオン軍による占領直後のベルリンで幼年時代を過ごしたグツコーの『少年時代から』(1852)は、ベルリンの幼年時代を記述した最初期のものに属する。この作品と、世紀転換期のベルリンで幼年時代を過ごしたベンヤミンの『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』(1932-38)という二つの作品を手がかりとして、都市の記述と幼年時代の記述が交錯する様を明らかにしてゆきたい。

(四) 本稿の構成

本論考は、みずからの幼年時代を記述した文学作品だけではなく、言語習得のための教科書も考察対象とする。「教育学は全体として幼年時代の実験的な理論と見なされるべき」¹⁹ だからだ。そこで本稿は、言語習得のための教科書という形をとった教育プログラムの記述と回想録という二つの側面か

ら幼年時代の記述を包括的に「子どもの非言語的な生の記述」として捉え、その記述のあり方を探ってゆくこととする。

第一章ではまず、文字学習や読本教科書の歴史を辿ることによって、ドイツ近代の教育プログラムにおける子ども像の変遷を明らかにする。第二章では、みづからの幼年時代を描いた最初のドイツ文学作品とされるモーリッツの『アントン・ライザー』(1785-90)を取り上げ、その子どもの言語習得に関する記述を分析したうえで、十九世紀の半ばに多く誕生した自伝的記述を概観し、そこに新しく現われた形式の特性を示す。最後に第三章でグツコーとベンヤミンによるベルリンの幼年時代の記述を取り上げ、とくにその子どもと言語の関係に関する記述を比較分析し、幼年時代の記述が都市の記述と通底するものであるということを示す。

第一章 言語習得のための教科書

(一) 音声と文字の接続

「先生が年若い少年をつかまえて、ABCの文字を教えた。これはこの少年に最初の苦痛をもたらした」。²⁰ ヴィルヘルム・グリムが『子どもと家庭のメールヒェン』第二版第二巻(1819)の前書き「子どもの性質と子どもの風習」のなかでこう書いているように、子どもの文字学習は、たいていは苦痛を伴うものとして描かれている。アルファベットは文字数が少なく文字そのものを記憶する負担が少ないかわりに、音声と文字との結びつき方が抽象的である点に難しさがあるのだ。ベンヤミンは音声と文字を結びつけるこの能力こそが言語の能力、すなわち、音声と文字とのあいだに類似を認識し、その類似を再生産する「模倣の能力」であるとして、次のように言う。

話されたものと志向されたものとのあいだのみならず、書かれたものと志向されたもののあいだ、そして同様に、話されたものと書かれたものとのあいだにも、緊密な結びつきをつくり出すものこそが、非感性的類似にほかならない。(GS II, 208)

これらの結びつきのうちで最も非感性的なのは、最後に挙げられた「話されたものと書かれたものとのあいだの類似」、すなわち、音声と文字との結びつきだとされている。つまり、子どもを文字習得へと導く際の要諦は、子どもが容易に知覚しうる感性的なもの(音声)を非感性的なもの(文字)にどのように接続させるか、ということになるだろう。この接続を担うものとしてベンヤミンが考えるのが、単語や活字がもつ「文字像(Schriftbild)」(ebd.)である。単語や活字は、抽象的な文字(Schrift)であると同時にイメージ(Bild)でもあり、判じ絵のようにして読み解かれるものだ、とベンヤミンは考えるのだ。たんなる文字を「文字像」として捉えることは、表音文字であるアルファベットのなかに、単語や文として担うことになる意味を予期することにほかならない。ここではとくに子どもの文字学習を念頭において論じられているわけではないが、感性的な類似の認識を非感性的な類似の認

識に接続させる、という言語能力の展開は、子どもの言語習得、とりわけ文字学習にとっても重要な観点をなしていると言えるだろう。子どもが言語を学ぶとはつまり、文字を学ぶことなのだから。

(二) 十七世紀までの文字学習本

ドイツ語圏で確認できる最古の文字学習本は1477年のものだが、本格的に文字学習本が広まったのは、十六世紀初頭に印刷技術が普及したのちのことだった。宗教改革により一般民衆に聖書を読むことが要請されたという事情も、文字学習本の普及に大いに与った。文字学習本が「聖書 (Bibel)」から派生した「フィーベル (Fibel)」という名で呼ばれるようになったのは、当初の言語習得の目的が聖書を読むことだったからである。²¹フィーベルはのちに計算など他の分野の初等教科書のことも指すようになるが、もともとは、口頭による教理問答と文字で書かれた聖書とを結びつけるものとして、子どもの言語習得に大きく関わっていたのだ。

最初に登場した文字学習の方法論は「綴り字法 (Buchstabiermethode)」というものだった。まず個々のアルファベットの名前と音声を学び、続いて子音と母音との組み合わせによる音節の音声を、それに続けて音節の組み合わせによる単語の音声を学ぶ、といった具合に学習が進められる。つまり、単語を文字にまで分解して教えるのである。著者たちは、抽象的な文字を少しでも子どもに身近な事柄に結びつけようとさまざまに努力した。オレアリウスの『ドイツ語技法』(1630) やプーノの『新方式による新ABCと読み物の本』(1650) では、それぞれのアルファベットに、その文字の形と似た形状の生き物や身近な事物のイラストを並置して、抽象的な文字を形態として感性的に習得させようとしている。²²また、その後の多くの教科書にさまざまなヴァリエーションで見出される文字とイラストの組合せ、すなわち、Wの文字とお尻を叩かれる子どもの絵もすでに掲載されている。お尻の輪郭がWの文字を連想させると同時に、子どもの口からは「苦痛 (Weh)」という言葉を連想させるWの文字が飛び出してきているものだ。文字と音声と意味が「文字像」として一体化している例と言えるだろう。とはいえ、十七世紀の文字学習本はたいてい、その大部分が膨大な量の発音練習パターンの羅列や練習法の解説などで占められており、イラストがあるのはほんの数ページである。

画期的だったのは、コメニウスの『世界図絵 (Orbis Sensualium Pictus)』(1658) である。モラヴィア出身のコメニウス (1592-1670) は、ドイツのハイデルベルク大学等で神学を学んだのち、教師・教育思想家としてヨーロッパ各地で活動した。ヨーロッパ最初の絵入り本とも見なされるこの本は、そのほとんどのページにイラストがある。試作版はラテン語のみだったが、初版はラテン語とドイツ語の二言語表記で、ニュルンベルクにて出版された。この本はたんなる文字学習本ではなく、「知り、行動し、話す」²³ことを学校の生徒に教授するための「小さな絵入百科事典」²⁴を標榜している。その項目は、一「神」、二「世界」、三「天空」と始まり、生物や無生物、人間の身体、労働、生活環境、戦争、諸宗教などを経て、一四九「神の摂理」、一五〇「最後の審判」で終わる。この一五〇の項目すべてに木版画がついており、その木版画に描かれている事柄を表わす語彙も掲載されている。「感性的に知覚可能な事物が感覚に対して正しく提示されること」²⁵が肝要だと説くこの本はまさに「イラスト入り語彙集」(WuN 13-1, 21) と呼ばれるにふさわしい。その序文では方法論が次のように述べられている。

これまでより容易に読み方を学ぶにはこつがある。それは何よりも、初めに置かれた象徴的なアルファベットによっている。すなわち、それぞれの文字が模倣する鳴き声を出す動物の絵が描き添えられている個々の文字の文字記号 (Schriftzeichen) に。練習を通じて確実なものになった想像力がすべてを素早く使えるようにしてくれるまでは、ABCを学ぶ生徒は、この動物そのものをよく見ることによって、それぞれの個々の文字記号の発音を容易に思い出すだろう。生徒がその後、音節表に習熟するようになったら (ただし、そうしたものをこの小さな本に付すことは不要に思われた)、諸々の絵とその表題の観察に進むことができるだろう。その際にはまたしても、事物を眺めること自体が、表題が事物の名前を手繰り寄せることによって、表題がどのように読まれるべきかを生徒に思い出させるだろう。そのようにして本全体が読み終えられたら、生徒は絵の表題によってのみ読むということを学ぶようになるのだ。それはつまり——注目すべきことなのだが——、広く用いられている綴り字法、あの非常に嫌な頭をねじ曲げるもの、をまったく使わないのである。それは、ここに示す方法によって完全に回避される。というのも、この小さな本を繰り返し読むことは、より詳しい絵の下に付けられた説明によるだけで、もうすでに、読む力を完全に完成させるからである。²⁶

コメニウスは、絵と擬音語という助けによって、子どもに感性的なものから非感性的な文字への橋渡しを促そうと試みた。²⁷ アルファベットをシステムとして教え込もうとする綴り字法は、すでに話すことができる言葉を意味をもたないたんなる文字に一文字ずつ分解して音読させることによって子どもを混乱させるとして、早期からその非合理性を指摘されていたにもかかわらず、1872年にプロイセンで公的に禁止されるまで、他の方法論が生まれたのちもそれらと並行して長らく使用され続けた。²⁸

(三) 十八世紀の文字学習本

綴り字法の批判から生まれたのが「音読法 (Lautiermethode)」である。すでにイッケルザーマーが1527年の『最短で読み方を学ぶ正しい方法』で提唱していた方法論であるが、一般に広めたのは『音読法による文字学習ハンドブックあるいは初等教科書』(1802)を始めとするシュテファーニの著作だった。音読法には、同じ音で始まる単語を並べて、その綴りと音声に合わせて習得させる「語頭音法 (Anlautmethode)」や、感嘆詞や擬音語的な表現を用いて綴りと音声を結びつけさせる「間投詞法 (Interjektionsmethode)」など、さまざまなヴァリエーションがある。²⁹ ドイツ語では綴りと音声が一対一で対応しているわけではない。そこで音読法は、音声を出発点にして、その音声に対応する綴りを覚えさせ、その綴りを組み合わせて単語を読み、さらに文章を読む、という方法で学習を進めようとしたのだ。すでに日常会話で聞き知っている自然な音から出発できるという点では、より子どもに寄り添う学習方法だったと言えるだろう。³⁰

また他方では、コメニウスが『世界図絵』で示していた、文字を習得させると同時に百科全書的な知識も授けるという志向性や、絵や身近にある事物を用いて視聴覚に訴える「直観教授 (Anschauungsunterricht)」の方法が、十八世紀の大著バゼドウ (1724-1790) の『基礎教科書』(1774)

に引き継がれていた。これは、それまでの主流をなしていた聖書の文句を丸暗記させるような教育方法に批判的だったバゼドウが、一七七四年にデッサウに汎愛学舎を開設するにあたって、そこでの授業用に作成した教科書である。この教科書が人文科学から自然科学に至るまで、人間生活に関わるあらゆる分野の基礎を網羅した百科全書的な性格をもつものであることは、初版の副題「必要なすべての知識の整理された貯蔵庫——初歩から大学入学の年齢までの青少年の授業のため、両親や学校教師や家庭教師に教示するため、知識を完全なものとする読者の利用のため」³¹、あるいは、一七八五年に大幅に改定された第二版の副題「学び、教え、繰り返し、熟考するのに最良の知識の貯蔵庫」³²からも窺える。第一巻は教育者たる大人への助言にあてられ、第二巻、第三巻には挿絵に即した文章が大人への助言とともに掲載されており、これらに当時ベルリンで活躍していた挿絵画家ホドヴィエツキによる銅版画を約百枚収めた巻が付属している。

文字の教育については、第一巻の大人への助言のなかで触れられており、まずは母音から教え、その後子音、子音と母音の組合せ、と進みながら言葉を学ばせるべきで、その際、最初に学ぶ単語は「パパ」、「ママ」といった身近な人物の呼称や身体の各部の名称のような、子どもにとって意味のある言葉を選ぶべきだとされている。³³また、子どもたちが遊びを通じて学ぶことが大切だとして、ひとつの子音に母音を次つぎに付け変えて発音してゆき、子音と母音の組合せをつなげて単語を作り出すという「綴り字遊び (Buchstabierspiel)」³⁴や、「フリードリヒ」という名前から始まって、それを一般化して「王様」という名前を導き出し、これをさらに一般化して「王侯」という名前を導き出す、といったように一般化・抽象化を続けて上位概念を言い当てさせ、最終的には「人間」、そして生きている「存在」という名前を導き出させるという、「名前遊び (Namenspiel)」³⁵なども提案された。

さらにこの『基礎教科書』の特徴として挙げるべきは、文字学習指南に続く物語部分の導入である。この本に採用されたイラストが、それまでのようなはっきりした輪郭の表現にすぐれた木版画ではなく、複数の人物が登場する細かい情景描写を得意とした挿絵画家ホドヴィエツキによる、ストーリー性のある銅版画であるということも、物語形式の必然性を語っている。この銅版画のテーマは食事に始まり、衣服、住居、遊び、労働などを経て、歴史、物理、地理と進んで神話に至る。テーマの構成も、コメニウスの時代より世俗化し、生活に密着した発想のもとになされていることが明らかだ。ベンヤミンはこれを評して、「この本は文章もいろいろな意味で好ましい。というも、この時代にふさわしくあらゆる〈利益〉を——数学の利益も綱渡り術の利益も——できるだけ際立たせようと委曲を尽くす総合授業と並んで道徳的な物語が載っているのだが、それらの強烈さは、意図せずというわけではなく、いささか喜劇的なものにまで達しているのだ」(WuN 13-1, 21f.) と述べている。ここでは文字学習はもはや聖書を読むことを目的としているのではなく、生活の知恵に結びつけられており、教理問答集ではなく、物語という形式が必要とされたのだった。

(四) 読本の登場

文字学習本からこの物語部分を切り離して独立させたものが「読本 (Lesebuch)」というジャンルである。読本には基本的にイラストは使われていない。ロホウの『子どもの友——民衆学校用読本』

(1776) は読本を大規模に普及させ、その後多くの類似書を生み出した、読本の原型とも呼べるものである。一七三四年にベルリンのプロイセン貴族の家系に生まれたロホウは、他の多くの文字学習本の著者とはちがって教育家ではなく、七年戦争にも従軍した職業軍人だった。決闘による負傷で退役し、家族の所有する領地に移り住んだ先で農村の貧困を目の当たりにした際に、この悲惨な状況に対処するには教育が必要だ、と感じたことが読本執筆のきっかけだった。当時の社会の上層部では、階級社会を維持するために下層民の教育は最小限に留めておくべきだとする考えも根強かったが、ロホウは、優秀な農民や労働者や兵士を育てることは国家にとっても有益だと考えていた。そうしたロホウの思想は、プロイセン君主フリードリヒ二世がより優秀な臣下を育成するためにより良い学校を求めて地方学校総合規定(1763年)を発令した時代に、まさに合致していた。³⁶ 貧困対策ということをつねに念頭に置いていたロホウにとって、本が安価であることも重要な要素だったため、装丁は簡素で、値段が表紙に記載されていた。

一七七六年に七十九編のテキストを取めた第一部が刊行されたのち、一七七九年にはより年長の子ども向けに第二部(一〇七編)が刊行された。「文字学習本(Fibel)と聖書(Bibel)のあいだの大きな隙間を埋めるのに適した」³⁷本であろうと欲したこの作品に収められているテキストは、たんに知識を授けるためというよりは、よき子どもであることを学ばせようとするために選ばれている。「わたしは子どもとしてたくさん悪いことを見てしまいます、そして悪いことというのはすぐに学んでしまうものです、神よ、わたしを毎日お守りください、わたしが悪いことを学んでしまわないように！」³⁸と始まる「小さな子どもたちのための祈り」を皮切りに、「食事の際の祈り」、「きちんとした子ども」と続き、農村の子どもにとって身近な話題を網羅しつつ、末尾に向けて抽象的な自然科学のテーマも取り上げられ、最後は「人工の地球、あるいは地球儀」、「宇宙についてのちょっとした知識」と続き、最後は、「老人」と題された、死を前にした老人が息子に善く生きるようにと語ったのちに命果てるという内容のテキストで締めくくられる。バゼドウの『基礎教科書』の最後の項目が「神話」であるのとは非常に対照的だ。自然科学や社会に関する項目においてはバゼドウの記述の方が専門性は高く、ロホウの記述は、農村の貧しい子どもたちの生活により密着した、ある意味でスケールが小さいものになっている。³⁹ 子どもの学習から始まって名もなき一農民の死で終わるという構成に、十九世紀にやってくる個人の時代の予告を見てとることもできるだろう。

また『子どもの友』は、一七八二年にはフランス語訳が、一七九五年にはポーランド語訳が刊行されていることから、ヨーロッパ各地に素早く普及したことがわかる。ロホウの著書に地域性を盛り込んで改訂した「子どもの友」の地域版や、女子校版、カトリック学校版、ユダヤ学校版といった変種も多数発行され、それぞれに多くの版を重ねたが、一八二〇年代頃に出版されたものになると、「子どもの友」という名を冠してはいても、ロホウのテキストからはだいぶかけ離れたものも出てきた。「子どもの友」という名称が、「天文の子どもの友」、「計算の子どもの友」、「音楽の子どもの友」⁴⁰といったように、特定の分野の読本にも用いられるようになったのは、「フィーベル」という名称がたどった歴史と非常によく似ている。ただし、コメニウスやバゼドウでは読本の最初の部分に居場所を占めていた文字学習は、ロホウの読本の出現により、読み物用のテキストから完全に切り離されるこ

とになった。⁴¹

ここで、ベルリンおよびその近郊の幼年時代を描いた文学作品の多くに登場する『ブランデンブルク子どもの友』(1800)に簡単に触れておきたい。一八七九年までに二二四版を数えた大ベストセラーであるこの本は、マクデブルクの説教師の家に生まれベルリンで育ったヴィルムゼン(1770-1831)によるものである。彼は、ロホウの農村学校用の教科書は長いこと学校教育に貢献してきたが、都市学校用の読本も必要だとして、ロホウやその他の読本から多くのテキストを引用しつつ、この本を著した。ロホウとはちがった新しい点があるが、そのうちのひとつが第一章の冒頭に置かれた「さまざまな文章」という項目である。この項目では、本には数字が書いてあるがそれは「頁数」というもので、本のそれぞれの箇所を見つけるのを容易にしてくれるものだ、といった説明に続いて、時間の単位や月名を用いた文章、助動詞を用いた文章、関係代名詞を用いた文章、さまざまな事物の名前(名詞)などが挙げられている。⁴²つまり、読み物の部分に、語彙中心の百科事典的な要素だけではなく、文法的な要素も導入されているのである。また、ナポレオン軍撃破後の一八一五年に改訂された第八版にはブランデンブルク地方の歴史が加筆されているが、このことは、読本が宗教心の育成や普遍的な知識の教授だけではなく、国民国家樹立に向けた愛国心の育成という、この時代ならではの役割を担い始めたことを示している。⁴³さらに、末尾に「歌謡」が付されているのも新しい点である。これは、一八〇二年に同じ著者が、ほとんど同じ内容のものをブランデンブルク地方に限定しない、統一的なドイツを志向したものとして刊行しベストセラーになった『ドイツ子どもの友』では、「格言」に置き換えられている。ベルリンの子どものほとんどに『ブランデンブルク子どもの友』が行きわたっていたことを考えると、この「歌謡」部分がどのようにベルリンの幼年時代の記述に関連しているかは、今後考察するに値するテーマであろう。

(五) 彩色絵本

ヴィルムゼンによる「子どもの友」シリーズのほかに、ツェレナーによる『新ドイツ子どもの友』(1814)や、ヴィルムゼンの息子たちによる『新ブランデンブルク子どもの友』(1847)など、二十世紀まで読み継がれる読本が立て続けに刊行された十九世紀は、まさに「読本の時代」と呼べるだろう。ベンヤミンが、十九世紀半ばに読本の授業が登場するとともに直観教授は姿を消した、と述べているように(WuN 13-1, 291)、読本にはコメニウスやバゼドウらの直観教授の教科書に含まれていた広い世界に関する百科事典的な知識や感性に訴える絵はなかった。だが、これを補完するようにして、彩色された挿絵の入った児童書が増加した。なかでも、ヴァイマルで出版業を営んでいたベルトウフの編集による全十二巻の『子どものための絵本』(1790-1830)は、見開きの左頁に彩色銅版画が、右頁にその解説が掲載された、美しい高価な本である。生物、鉱物、建築、古典古代、近代の技術などに関する写実的で詳細な絵は専門的な図鑑を思わせ、安価で簡素な作りの読本の教科書とは非常に対照的な豪華さだ。採用されている項目に寓話や神話の形象といった想像上の形象が含まれているのも興味深い。

ベンヤミンは十九世紀のこうした彩色絵本を念頭において次のように言っている。「前世期の前半に

訪れた子どもの本の最盛期は、具体的な（そして多くの点で今日のそれを凌ぐ）教育上の認識から生じたというよりも、かの時代の市民生活の一要素として、この生活そのもののなかから生じたのである。ひと言でいうならばピーターマイアーのなかから」(GS IV, 612f)。つまりこうした本は大人の鑑賞・蒐集欲求から生まれたということだ。しかし子どもの側からすると、重要なのは本が「享受されるのではなく、使用される」(ebd.) ことだった。

この絵入り百科事典はじつに丁寧に作られていて、当時子どものためにどれほど献身的な仕事が必要だったかを証明している。いまどきのたいていの親なら、こんな豪華なものを子どもの手に渡さなさいという要求に驚愕するだろう。ベルトッフは序文でまったく平然と、絵を切り抜くように勧めている。(GS III, 16)

ベンヤミンが子どもの学習において重視しているのは、子ども自身が手を動かすことである。そして「手を動かす」ということは、ベンヤミンが述べていた「音声と文字との接続」に関連させて言えば、ほかならぬ文字を書くという行為に通じる行為であろう。

(六) 習字帳としての文字学習本

ベンヤミンは、「文字学習本は、それに基づく授業の目標が教理問答の載った最後の数ページだったときに、そんな偏狭さのなかから生まれているのだが、直観教授が啓蒙主義の時代に登場して以来、文字学習本は百科事典的なものを目指している」(WuN 13-1, 291) と述べている。つまり彼は文字学習本に、子どもにたんに抽象的な文字を教えるだけではなく、幅広い知識を授ける役割も見出していたのである。十九世紀半ばに直観教授が後退して以降⁴⁴、世界に関する知識を子どもに授ける役割は文字学習本が担うことになったということだ。

その十九世紀半ばに、新しい文字学習の方法論が登場した。「標準語彙法 (Normalwörtermethode)」と呼ばれるこの方法は、フランスの教育者・哲学者ジャコト (1770-1840) に由来する。⁴⁵ ジャコトによれば、言語の授業に教師による説明は不要である。学習者が教師に問いかけられ、語りかけられ、それに応えようとするときに初めて、学習者自身のうちに学ぼうとする意志が芽生えて学習が促されるのだ、としている。ジャコトがこうした結論に至った背景には、オランダでの次のような経験があった。彼はオランダ人の学生にフランス語を教える際に、自身にオランダ語の知識がなかったため、フェスロンの『テレマコス』のフランス語・オランダ語原文対訳版を教科書として学生に与えただけで、言語についての説明は一切しなかった。だが、彼がこの本の内容についてフランス語で質問し、それに学生がどうにかして答えようとするうちに、学生はおのずとフランス語を習得していったというのである。⁴⁶ 大学生に外国語を教えていたジャコトはこの問いかけを文章単位で行なったが、これを単語単位に応用したのが「標準語彙法」である。文字や音節といった分解された部分ではなく、ひとつの単語全体を呈示することを旨としている。具体的には、まず子どもに絵と単語を一緒に見せて、そこに描かれている事物について語り合ったのちに、その単語を音声に分解し、再度それを言葉に組み立て

直し、そのうえで文字の学習に入るという方法をとる。⁴⁷教師と子どもの語り合いという、文字学習本の外にある要素が大きな役割をもつ方法論であると言えるだろう。

だが、こうした子どもへの歩み寄りには、「子どもの本質に対する、勘違いの感情移入」(WuN 13-1, 20)という危険をも内包していた。ベンヤミンは、「子どもに立ち向かった、啓蒙の道徳的・教化的な時代と、子どもにおもねった前世期のセンチメンタルな時代、この二つの時代を区別しなければならない」(GS VII, 253)として、十九世紀の児童書を批判している。ロハウの『子どもの友』は「児童書執筆稼業」(ebd.)の始まりを印づけるものであり、「成り上がり教育学」(ebd.)におかされた二十世紀初頭の絵本は、「韻文調の物語の救いようのない歪んだ陽気さや、神に見放された子どもの友たちによって挿絵として描かれる赤ん坊のたにた笑い」(WuN 13-1, 20f.)に溢れているとして切り捨てる。

そうした同時代の子どもの本のなかで、ベンヤミンはトム・ザイトマン・フロイト(1892-1930)による文字学習本を高く評価した。⁴⁸彼はその特徴を「文字学習本と習字帳を一緒にする」(WuN 13-1, 288)という試みに見出している。ベンヤミンにとって、子どもの文字学習においては「読む」ことにおとらず「書く」ことも重要だったのだ。ザイトマン・フロイトの文字学習本では、「書くことと描くことをきわめて緊密に結びつけることによって遊戯衝動を残らず活性化させること、そして、文字学習本を百科事典にまで拡張することによって子どもの自信を確実なものにすること」(WuN 13-1, 336)という正しい教育方針が忠実に守られているとされる。この文字学習本は実際、文字を書く前に、子どもにまず絵を描かせる。例えば、「Aで始まる言葉」と書かれている下にはリンゴ(Apfel)とアリ(Ameise)の絵が掲載されている。そしてここでは子どもに対して、Aではじまる物をもっとたくさん描きなさい、すべての絵に色を塗りなさい、と指示されるのだ。⁴⁹

ベンヤミンは、この文字学習本が提案する書く練習を、子どもの一人旅と見なしている。

通常の習字帳は、行の先頭に——あるいはページの先頭だけの場合もしばしばだが——、教会の塔の先端のように大雪原に聳え立つ手本文字が書いてあり、旅をする子どもの手は、練習するうちに、どんどんこの手本文字から遠ざかってゆかねばならないのだが、そんな習字帳の気力を萎えさせるような荒野と比べると、この本の各ページは、文字密度の高い国々を見せてくれ、「この全部の行線いっぱい新しい文字を書きましょう」という指示がなくとも、鉛筆で宿場から宿場へと旅したい、という気持が生じてくるだろう。(WuN 13-1, 288f.)

ここには、子どもを文字という非感性的なものへ導く作業が「活字を遊戯衝動に優雅に引き渡すこと」(WuN 13-1, 292)によってなされているのが見てとれる。文字という非感性的なものとの接続は、ここでは音声という感性的なものとの接続によって果たされるのではなく、「遊びを通しての無意識的な練習」によって目指されるのだ。感性的なものを担っているのは「遊戯」という無意識的な行為である。子どもが本とともに行う遊戯、すなわち落書きや切り抜きを、ベンヤミンは文字の習得に必要な不可欠なことと考えている(vgl. GS III, 14f., WuN13-2, 39)。子どもが本とともに行う遊戯は「書く者の活動」(GS II, 208)の萌芽だからだ。

遊戯が子どもの文字学習につながるということを、ベンヤミンはみずからの文字習得を回想する形でも記述しているが、そこに登場するのは文字学習本ではなく、より手を直接的に動かして遊ぶ「字習い箱 (Lesekasten)」である。

その字習い箱にはドイツ字体の文字が、ひとつずつ小さな板きれに並んでいて、印刷されたものよりも若々しく、また少女めいて見えた。それらの文字は斜めに傾いた寝床にほっそりした体を横たえていたが、そのひとつひとつはそれぞれに完結していながら、しかも並び順においては、それぞれが属している教団の規則によって、つまり、それぞれが修道女として所属している言葉によって、結ばれているのだった。これほどの謙虚さが、これほどの毅然たる輝かしさと一体になって存在しうる、そのさまに、私は感嘆した。それは恩寵に包まれた状態だった。そして、私の右手は恭順にこの状態を求めて努力するものの、それを見出せはしなかった。この手は、選ばれた人びとだけを通すのが務めである門衛よろしく、あの恩寵の外でじっとしているほかなかった。そのように、私の右手と文字との交わりは諦めいっぱいだった。字習い積み木箱が私の心に呼び覚ます憧憬は、この積み木箱がどんなに深く私の幼年時代とひとつになっていたか、ということの証しである。この字習い箱に私が本当に探し求めているのは、幼年時代そのもの、すなわち、手が粹のなかに文字を押して言葉になるように順々に並べた、その手の動き (Griff) のうちに横たわっているような、幼年時代全体なのだ。(GS IV, 267)

バゼドウはすでに『基礎教科書』のなかで字習い箱を使うことを推奨していた。子どもはまず、そこに並べられた文字を音声にして読めるようになり、その後自分で文字を並べて言葉を作ることができればよく、この作業が「書くこと」の予備練習になるのだとしている。⁵⁰これに対してベンヤミンは「書くこと」について述べる時、音声という観点をほとんど持ち込まない。ベンヤミンが自身の文字学習に即して記述する感性的な類似から非感性的な類似への接続は、音声と文字の接続というよりも、「手の動き」という遊戯的な身体の動作と文字との接続である。⁵¹ベンヤミンがザイトマン-フロイトの文字学習本を高く評価したのは、こうした身体的遊戯を重視しているからにほかならない。ベンヤミンの考える二十世紀にふさわしい文字学習の方法とは、子どもが孤独に行う身体的遊戯だったと言えるだろう。

第二章 ドイツ文学における自伝的幼年時代の記述

(一) 啓蒙の時代における幼年時代の記述——モーリッツ『アントン・ライザー』

「五、六歳の時まで、したことは覚えていない。どんなふうにして読み方を覚えたかもわからない。ただ最初に読んだ本のことと、それがわたしにあたえた影響のことしか思い出せないのだ」。⁵²ルソーがこう語っているように、どのように読み書きを学んだかを書いている作家は多くはない。ゲーテも

やはり自伝『わが人生より——詩と真実』(1808-1831)に記しているのはラテン語の学習についてだけで、どのように母語を学んだかについては記述していない。⁵³だが、ゲーテが自分の人生に似ていてまるで弟のようだ⁵⁴、と評した作家モーリッツ(1756-1793)は違っている。ドイツ文学初の自伝小説とされる彼の『アントン・ライザー——心理小説』(1785-90)には、主人公の少年アントンの最初期の言語習得が事細かに記述されているのだ。

モーリッツは北ドイツはハーメルンの貧しい音楽家の家に生まれた。一七六八年に帽子職人のところに奉公に出され、その後、極貧に喘ぎながらもハノーファーでギムナジウムに進学し、エアフルト大学とヴィッテンベルク大学では、神学を学びつつ芝居に没頭する日々を送った。やがてバゼドウの汎愛学舎やベルリンのギムナジウムで教職に就くも、「学校という牢獄」⁵⁵に縛られていることに嫌気がさし、一七八六年にイタリアへ旅に出て、そこでゲーテと知り合った。イギリス旅行などを経たのち、一七八九年に王立芸術アカデミーの古代学の教授としてベルリンに戻っている。貧しい幼年時代からすれば大いに出世した人生であると言えるが、『アントン・ライザー』の記述は演劇活動に挫折する十九歳までで途切れている。一方ゲーテの自伝は、彼の全作品の内的なつながりを知りたいという読者の要請によって書かれたもので⁵⁶、そのなかでは幼年時代は人生全体をつなぎ合わせるもの、のちの作品と人生を説明すべき根拠と見なされている。

これに対して『アントン・ライザー』は作家のそれまでの人生全体を射程としているわけではなく、とくに子どもの最初の言語習得を前景化しているという点で、まさに幼年時代の記述と呼びうる作品である。この作品においては、子どもと言語の関わりが特定の年齢とはっきりと結びつけてシステムチックに記述されている。「八歳になる年に、実際に父はまた彼に自分で何かを読むことを教え始めた」⁵⁷と始まり、「九歳になる年に、彼はこの聖書のなかの物語をすべて、最初から最後まで読んだ」(AR, 20)。その後アントンは、フランスの神秘主義者ギュイヨン夫人の書物を読み、心のなかで神と対話するようになるが、「これらの変化はすべて九歳から十歳になる年までに起こった」(AR, 24)。「さて彼は十一歳になる年に、初めて禁じられている本を読むという得も言われぬ楽しさを味わった」(AR, 32)、といった具合である。小説中の人名や地名のほとんどがイニシャルでしか記されていないことを考えると、このような時系列に則った詳細な記述は、モーリッツにとって言語習得が特別なテーマだったことをよく示していると言える。

子どもと文字との最初の出会いが記述された部分について、さらに詳しく見てみることにしよう。

八歳になる年に実際に父はまたみずから彼に何かを読むことを教え始めて、そのために彼に二つの小さな本を買ってやった。そのうちの一冊は綴り字(Buchstabieren)の手ほどきであり、もう一冊は綴り字法に反対する論文だった。

前者の本ではアントンは、ネブカドネザル(Nebukadnezar)やアベド・ネゴ(Abednego)等の、それらを聞いてもイメージの影すら抱くことができない、たいていは聖書に登場する難しい名前を一字ずつ綴らなければならなかった(buchstabieren)。それゆえ、いくらか進むのが遅かった。

しかし、組み合わせられた文字によって筋の通った考えが実際に表現されていることに気づくやいなや、読むことを学びたいという彼の欲求は日増しに強くなっていった。

彼の父は彼にほんの数時間手ほどきをただけだったが、彼はいまや、家族みんなが驚いたことに、ほんの数週間でみずからそれを学んでしまった。

今でも彼は、当時、何かを思い浮かべることができた何行かの文を何度も一文字ずつ綴り、苦勞して初めて発音したときに味わった生き生きとした喜びを、密かに嬉しさを感じながら思い出すのである。(AR, 17)

主人公アントンの学習方法は「綴り字法」によっているが、彼には同時に綴り字反対論の本も与えられていることは注目に値する。モーリッツはとくにどちらかの方法論に与しているわけではない。綴り字の本については「幸運なことに、綴り字の本には聖書の箴言のほかに敬虔な子どもたちについての物語もいくつか載っていた。それほど魅力的ではなかったが、それらを彼は百回以上も読み通した」(AR, 18)、と言われ、綴り字反対論の本については「子どもに読み方を教える先生のための手引きや、言語器官による個々の音声の発音についての論文が入っていた。彼にとってこの本は無味乾燥なものに思われたが、それよりましなものがないので、順番にしたがって、絶大なる不屈の精神で読み通した」(ebd.) とされている。つまり、どちらの方法論にも留保を付したうえで、子どもに文字学習を促したのは何らかの方法論ではなく、「読みたいという彼の欲求」(ebd.) だったと結論づけているのだ。

方法論の破綻は学校での綴り字練習の情景を描いた次の箇所からも読み取ることができる。

そこでは、少年たちのうちの一人がまず一人で一つの音節の綴りを声を張り上げて読み上げ、それから残りの全員が、一斉にそれを繰り返して叫ばなければならなかった。——この耳をつんざくような叫び声と練習全体がアントンには、ばかげた、気が狂いそうなことに思われた。そして彼は、もう表情をつけて読むことだってできると自惚れていたので、ここでまた綴りの読みを最初から始めなければならないことを、少なからず恥じた。——だが、声を張り上げる順番はすぐに彼のところに回ってきた。これはまるで野火のように、またたくまに回ってくるのだ。すると彼は、座ったままつかえてしまった。美しい音楽がすべて一挙に調子はずれになった。——「さあ次！」と監督者は言ったが、進まなくなってしまうと、彼はアントンを究極的な軽蔑のまなざしで見つめて「馬鹿なやつ (dummer Knabe)！」と言い、次の生徒に綴り字を続けさせた。(AR, 96)

このときアントンに放たれた「馬鹿なやつ」という言葉は、その後ずっとアントンの頭から離れなくなり (AR, 99, 132, 180, 311)、「心の麻痺」(AR, 180) をたびたび引き起こすことになる。モーリッツは、『子どもの実践的小論理学の試み』(1786) のなかで、だらしのない少年フリッツの家庭教師となる若い男性を「鋼の男」を意味する「シュタールマン (Stahlmann)」⁵⁸と名付けていることから、彼

が教育という名の圧力を強く認識していたことは明らかである。そうした圧力が生み出すのは、「馬鹿なやつ」という、当の教育が目指すところの正反対のものでしかないのだ。

モーリッツはギムナジウムやアカデミーの教師であり、職業的に初等教育に携わることはなかったが、年齢の低い子どもの教育には高い関心を抱き続けていた。⁵⁹「教育の世紀」の真っ只中にあった当時、すでに文字学習本は飽和状態にあったにもかかわらず、『新ABCの本』(1790)とそれに合わせた『子どものための読本』(1792)を著しているほどである。

「同時に子どもたちのための思考への手引きを含む」という副題のついた前者の文字学習本は、発音の説明も百科全書的な知識の提供も序文すらもないわずか数ページの著作であるが、テキストとそれに合わせて作成された銅版画からはモーリッツの言語教育観がよく伺える。

冒頭でアルファベットと数字の一覧が示されたのちに、「第一の絵」、「第二の絵」という見出しのもとに、短いテキストが第二十六の絵まで続く。アルファベットの文字数分だけのテキストと絵があり、各テキストのキーワードを表わす事物が銅版画に描かれていて、そのキーワードの頭文字がアルファベット順になっているのだ。例えば、第一の絵にはAで始まる目(Auge)が描かれており、それに対応するテキストは次のようになっている。

この本には絵と文字が載っています。

第一の絵は、わたしが絵を見るための目を示しています。⁶⁰

第二の絵は木の下に座って本を読む子どもを示しており、テキストには「開かれた目が本を覗き込みます。わたしの目は開いています。本は幼い子どもを賢くしてくれます」⁶¹とある。これに続けて、オルガンを聴く耳、聴覚、嗅覚、味覚、感覚、熟慮、身体と挙げられてゆき、人間と動物、誇り、はかなさ、といったテーマが登場する。最後の二十六番目のテキストには「バラが絡まった開かれた本」という表題が付されていて、「勤勉に読むことは報いられます。バラを折ろうとする者は、棘を恐れる必要はないのです！」⁶²と結ばれる。この文字学習本に収められたテキストでは、学習対象である文字のみならず、それを学ぶ人間にも焦点があてられているのだ。ゲーテはモーリッツの文字教育プログラムを評して次のように言っている。「彼は悟性および感覚のアルファベットを発明した。それによって彼は、文字は恣意的なものではなく、人間の本性に基づいているということ、そして、すべての文字は、それらが実際にまた発音されることを通じて表現している内的感覚の、そのどこかの部位に属しているということを示している」⁶³。モーリッツは、子どもを文字という抽象の世界に導こうとした際に、人間の外にある事物よりも、人間の内部に注意を向けたのだ。『アントン・ライザー』の冒頭に掲げられた次の言葉は、幼年時代の追想の記述にだけではなく、子どもの言語習得の記述にもあてはまる。

とくに人間の内的な歴史を描写しようとする書物には、登場人物の非常な多彩さが期待されてはならないだろう。というのもそうした本は、想像力を分散させるのではなく集中させ、心が自分

自身の内部を見るまなごしを鋭くすべきものなのだから。……人間の注意を人間そのものに向け、人間にとってそのみずからの個的存在をより重要なものとする努力はしかし、少なくともとくに教育的な観点からは、まったく無駄というわけでもないだろう。(AR, 10)

心の内部だけではなく、知覚器官という内部もまた、人間の内面と呼べるだろう。またこの点に、モーリッツにおけるプログラムとしての子どもと追想のなかの子どもの違いを見ることが出来る。自伝的な記述のなかの子どもであるアントンは、両親が神秘主義に傾倒していることもあって、神が子どもの世界の中心をなしているが、教育プログラムのなかの子どもの世界の中心は人間、それも感覚と悟性をもった「わたし」という人間である。アントンの心を捉えている「神」は、文字学習本やその付録として書かれた読本には登場しないのだ。

いずれにしても、モーリッツは子どもの内面を、外の世界から切り離されたものとしてではなく、外界と関連づけられることによって成立するものと考えている。幼年時代と場所の結びつきについて、次のように語られている。

わたしたちがそこに自分のその他のあらゆるイメージを結びつける場所のイメージというものは、このように強力に作用する。——アントンが日々繰り返し目にしていた個々の通りや家々は、彼のイメージのなかで留まり続けるものだった。彼の生のなかでつねに交代するものがそこに繋がれ、それによって彼は夢と目覚めを区別していた。——

幼年時代においては、他のあらゆる観念は、いわばまだあまりにも持続性に乏しく、みずからに確固としがみついていることができないので、場所の観念と接続することがとくに必要なのだ。(AR, 80)

場所は、子どもが出来事を記憶し思考する際に「留め針」(AR, 160)としての役割をもつというのである。まだそれほど大きな旅をせず、ひとつの土地に留まることが多い子どもにとって、この留め針の力は大きいと言えるだろう。「後年、とりわけ多く旅をするようになると、観念を場所に結びつけるということはいくらか少なくなる。どこへ行こうとも、見えるのは、屋根や窓や扉や舗石や教会や塔か、あるいは、草原か森か畑か荒野である。——目立った区別は消えてしまう。つまり、地上は至るところ同じになるのだ」(ebd.)。しかし、子どもの頃になじみであったはずの街の様子を、モーリッツは詳述しない。それは彼が、人間の活動が及ぶ範囲を非常に狭く限定して考えているからだ。

人間はひとつの国に、ひとつの町に住んでいると思っているが、彼が立っていたり横になっていたりするその都度の小さな場所に住んでいるにすぎない、彼が仕事をする部屋や、眠る居室に住んでいるにすぎないのだ。……人間は、自分が自分の本当の存在を有している現在の瞬間と、この小さな場所の貴重さを理解することを学ばない——それゆえに、幸福を未来のなかに探し、自分の住まいという地域の外の至るところで幸福を追い求めるのだ。⁶⁴

幼年時代のアントンが住んでいる町の具体的な記述は意図的に避けられているのである。だが、幼年時代の記述に書き手モーリッツの居場所が滲み出ている箇所もある。モーリッツが著した読本に収められた最初のテキストは「並木道」という表題をもち、「わたしの前には美しい並木道が見えます。人びとがそこを、あちらへこちらへとそぞろ歩いています」⁶⁵と始まる。これから読むことを学ぼうとする主人公の「わたし」は、並木道のある大都市にいる子どもとして想定されていることがわかる。それは、モーリッツが文字学習本と読本を執筆したのがベルリンにおいてであったことと関連しているだろう。ここで言語を学ぶ子どもである「わたし」には、モーリッツの幼年時代ではなく、書き手モーリッツの現在が響いている。とはいえ、都市の描写は匿名のままにとどまり、幼年時代の記述と都市の記述が完全に浸透し合うまでにはまだ至っていない。

(二) ドイツ危機の時代における幼年時代の記述——インマーマンとヘッベル

その後、一八二〇年代から五〇年代にかけてドイツ文学においては、書簡、日記、回顧録や自伝といった、作家の人生に密着した文学表現が量産される時代がやってきたが、⁶⁶このとき手本となったのは、モーリッツの自伝小説と同じく年代順に記述されたゲーテの自伝『詩と真実』だった。だがその一方で、十九世紀も半ばに近づくと、時系列に縛られない記述も登場してくる。

それは、ドイツが対ナポレオン民族解放戦争に勝利したのちで、国民国家建設の気運が高まっていた時代だった。しかし憲法制定の動きは封じられ、一八三〇年のパリ七月革命の影響を受けて各地で起こった革命運動もことごとく挫折した。そうしたなか、この政治的な閉塞状況を打破しようと、厳しい検閲下でありながらも多くの作家たちが自由主義を掲げて活動した。そのうちの一人カール・グツコー(1811-1878)は、ビューヒナーの『ダントンの死』(1835)を出版したことで知られるが、彼は当時、雑誌編集等を通じて多くの作家たちの結節点になっていた。彼自身ものちに『少年時代より』(1852)とする回想録を著しているが、彼の周辺にはすでに幼年時代の記述がいくつか集まっていた。彼はみずから編集を務める雑誌にインマーマンとヘッベルの自伝的記述を掲載していたのである。これらの幼年時代の記述は、多分にゲーテの『詩と真実』の影響下にあるとはいえ、新しさも持ち合わせていた。

マクデブルクのプロイセン官吏の父親のもとに生まれたインマーマン(1796-1840)は、当時の愛国心に満ちた多くの若者の一人だった。ハレ大学法学部在籍中に解放戦争が勃発した際には志願兵として従軍もしている。一八二七年からは、デュッセルドルフの司法官を務めるかたわら劇場監督としての活動や執筆も続けていたが、同地で四十四年という短い生涯を終えた。その死の年に『回想録—第一部』が刊行されるも、第二部以降は書かれずじまいとなった。この回想録は「二十五年前の青春時代」、「デュッセルドルフの初期」、「グラッベ」の三部構成になっており、このうち「二十五年前の青春時代」の初出がグツコー創刊の雑誌『ドイツのための電報』(1838-1848)だった。⁶⁷「最初の部分」という副題が付されたこの「二十五年前の青春時代」に幼年時代の記述が含まれている。

この回想録を構成する三つの部分はそれぞれ複数の章から成っており、「デュッセルドルフの初期」と「グラッベ」はナンバリングによる章分けがなされているが、「二十五年前の青春時代」は「案内

状]、「少年時代の思い出」、「途中で一言」、「家族」、「伯父」、「教育と文学」、「フィヒテ」、「ヤーン」、「専制政治」、「青春時代」といった表題の付された短いテキストで構成されている。記述はゆるやかな時系列に沿ってはいるものの、もはや時間軸は記述の中心原理ではなくなっている。

すぐれた自伝は個人的な思い出だけではなく時代描写をも含むものである。エンゲルスはインマーマンの死に際してグツコーの雑誌に寄稿した「インマーマンの『回想録』」と題する記事のなかで、「インマーマンは省察よりも物語ることに於いての方が力強い。そして彼はみずからの胸のうちに映る世界の出来事の反映を捉えることに完全に成功している」⁶⁸と述べたことがあるが、インマーマンにおいては、彼の幼年時代の背景を成す政治的な状況が、自身の内側から捉え直されているのだ。「二十五年前の青春時代」のなかの「案内状」の冒頭は次のように始まる。

二十五年前の青春時代！——これは何を意味するか？ これは、一八〇六年十月十四日には少なくとも十歳かせいぜい十六歳で、つまり国民のうちで一八一三年二月三日に十七歳から二十三歳の人間を構成していた青春時代を意味するはずである。あの日々が挙げられることによって、本書で言われているのが北ドイツの青春時代であるということがわかる。つまり、まず第一に、北ドイツはひっくり返され、異国の者たちによって可能な限りその存在を破壊されたのだが、第二にしかし、国家の総力による復興が目に見えてきたのである。わたしは、北ドイツの青春時代がこれら二つの日々やその間に起こったことや後者の日にすぐ続けて起こったことによってどんな風に、そしてどのような方法で心を動かされたかを、またそれらの日々によって青春時代にどのような精神と心の形姿が与えられたかを、そして、この形姿がどのような結果に痕跡を残したかを描写しようと企てるものである。⁶⁹

一八〇六年十月十四日はイエナ・アウエルシュタットの戦いでナポレオン率いるフランス軍にプロイセン軍が惨敗を喫した日で、これにナポレオンのベルリン入城、プロイセン王室のケーニスベルクへの避難が続いた。また一八一三年二月はプロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム三世が対フランスの志願兵部隊の結成を呼びかけたときである。学生を含む多くの若者がこの呼びかけに応え（そのなかにインマーマンもいた）、これを受けて同年三月に王はついに対フランス戦争の開戦を決め、一八一四年のライプツィヒの諸国民戦争でのフランス軍撃破へとつながった。インマーマンはこの二つの出来事は関連しあっており、「屈辱的な敗北が先にあったからこそ、栄光に満ちた動乱が起こったのだ」⁷⁰としている。そして、解放戦争はただの嵐のようなものでしかなかった、と考える人びとについて、次のように言う。「あの年月を通してわれわれはただドイツ人としてのみそこにいるのだが、彼らは、自分たちはこの状況に関わりたくないのであって、そもそもいわゆる世界市民としてのみそこに存在するか、あるいは他の諸国民とのあいだに自分の中立を保っていたいのだ、ということを示しているのだ」⁷¹ここで「世界市民」と言っているのは、明らかにゲーテに対するあてこすりであろう。⁷²インマーマンの自伝はこの意味ではまさに、ベンヤミンが「時間的および空間的束縛を免れたゲーニウスの受肉」(WuN 13-1, 398)と評したゲーテの『詩と真実』とは対照的である。ただし、インマーマン

の考える土地は「北ドイツ」や「プロイセン」、あるいは、いまだ統一されていない「ドイツ」といった抽象的な理念であり、生まれ育ったマクデブルクの町についての具体的な記述はほとんど見られない。こうしたインマーマンの理念的な傾向は「読むこと」についての記述にも現われている。インマーマンは、「わたしが最初に読んだ本はラートマンの『マクデブルクの歴史』である」⁷³としている。この四百ページ近い本を最初に読んだ本と呼ぶところからも推測できるように、彼はみずからの最初期の言語習得にはとくに関心を示してはいない。インマーマンの自伝は、時間軸ではなく人物や事柄に即した記述を導入しているという点で新しいとはいえ、幼年時代は人生の一部として描かれるのみで、そこに独自の意味が見出されていたとは言い難い。

さて、グツコーがみずからの雑誌に掲載したもうひとつの自伝はヘッベル（1813-1863）によるものだった。⁷⁴ヘッベルは「みずからの伝記的なことに関する素材を提供するのは、そもそも書くという営みをする人間の義務だと思う」⁷⁵としており、一八四二年三月の日記のなかで回想を記述し始めている。「みずからの人生を叙述する者は、ゲーテのように、愛しいこと、美しいもの、重要なもの、最も暗い状況においてさえも見つかる埋め合わせをしてくれるものを強調すべきであり、他のことは触れずにそっとしておくべきだ」⁷⁶と述べていることから明らかであるが、彼はみずからの回想録をゲーテの系譜に連なるものと見なそうとしていた。一八四六年から一八五四年にかけて書かれた文章が十章からなる「わが人生の記録」としてまとめられてはいたものの、ヘッベルの生前にはその第九章のみが「わが青春時代より（Aus meiner Jugend）」と題されてグツコーの雑誌『家庭の炉辺での楽しみ』（1852-1864）に掲載され、公表された。

ヘッベルは成人するまで、当時はデンマーク王国に属していたシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方の海に近い小都市ヴェッセルブーレンで過ごした。父は日雇いの左官で、保証人になって借金を負ったせいもあり、一家は日々の食べ物にも困るほど貧しかった。⁷⁷貧困はヘッベルの幼年時代の記述にも濃く影を落としており、自伝にはゲーテのように肯定的なものだけを書き留めるべきだ、とするみずからの考えを覆すような描写になっている。

ヘッベルの記述は、「青春時代（Jugend）」という言葉が通例指し示す範囲よりもだいたい幼年期に偏っており、五・六歳までに限られている。⁷⁸そのせいもあって、インマーマンのように政治的な話題に直接触れることはないかわりに、子どもと言語の初期の交わりについての記述がある。ヘッベルは学校に上がる前の予備学校で読み方を学んでいた。

わたしはズザンナの学校に五歳までいて、そこで読み方を学び終えた。書き方は、わたしが若すぎるということで、まだやらせてもらえなかった。書き方はズザンネが教えるべき最後のものだったので、彼女は注意深くそれを出さずにとっておいたのだ。⁷⁹

教師からどのように学んだかの具体的な記述はない。記述されているのはむしろ、子どもが教育としてなされる文字学習を無効化し、文字との独自の交わりをもっているということである。

わたしは骨（Knochen）を見ることができなかつた。うちの小さな庭で見つかったどんな小さな骨でも埋めてしまった。そう、のちにわたしはズザンナの学校で、自分の教理問答集から肋骨（Rippe）という言葉が爪で消してしまった。その言葉は、それが意味しているあの吐き気を催す物を、まるでそれ自体が嫌な腐敗した形でわたしの前にあるかのように、わたしの眼前にありありと現前させたからである。これとは反対に、風が垣根越しに吹いて寄越したバラの葉の一葉でさえも、わたしにとっては、他の人たちにとってのバラの花と同じくらいかそれ以上のものだった。そして、チューリップやユリ、サクランボやアズ、リンゴやナシといった言葉は、わたしを直接、春や夏や秋のなかに連れて行ってってくれるのだった。そのため、それらの言葉が出てくる文字学習本の部分をみんなの前で大声で文字を綴って読み上げるのが好きで、わたしに順番が回ってこないと毎回腹を立てるのであった。⁸⁰

実物の骨が苦手であるためにその言葉までも消去するという行為は、直観教育のネガとも呼べるだろう。事物が初めにあり、それを呼ぶ名前として言葉があるのではなく、言葉が事物に存在を与えるのだ。ここで事物と言葉の結びつきを生き生きとしたものにしていくのは知識ではなく、子どもの好き嫌いという感情である。ヘッベルは「せいぜい広く行きわたるだけの平板な百科全書的知識が、まさにあの厭わしい高慢を生み出すのだ。この高慢は、権威を前にしても頭を下げず、かといって、勢よく噴出する弁証法的な矛盾や対立がおのずと解消される深みまで下りてゆくこともない」として、空虚な知識を批判し、みずからの世代を、迷信にとらわれた世代に続く「きわめて利口ぶった世代」⁸¹と呼んで嘆いている。子どもにとって「事物の原始的な刻印は破壊しえない」⁸²ものとなるのは、子ども自身が生活のなかで事物と言葉を結びつけるときなのだ。

ヘッベルの幼年時代の記述においては、五歳の終わり頃にホルシュタイン地方で学校改革が行われたことや、散歩をしながら近隣の地名を教えてもらったことなど、政治状況や風土は子どもの視線から見える範囲でのみ描かれている。時代背景や土地の記述はそれほど目立たないが、このことは叙述形式にも関連している。近代自伝研究のなかでレーマンは「一八二〇年代から三〇年代にかけて書かれた多くの自伝には、断片的なものに向かう風潮や、物語的な類型が一貫した物語的な繋がりをもたない任意に変更可能な数の個々の話へと解消してゆく風潮が見られるが、それらの風潮に対応するものが、みずからの人生を叙述する際には、人生の個々の局面に、それどころか一つの局面に絞るといって、十九世紀半ば頃の多くの作家たちに見られる傾向である」⁸³と述べている。ヘッベルの記述にはこの双方の傾向があると言える。断片として独立的に記述された各章はインマーマンのものよりさらに短くなっており、もはや時系列に並べられてはいない。また、六歳までという限られた時間に記述が限定されていることや、グツコーが連載にせずひとつの断片のみを雑誌に掲載したということにも、一つの局面を切り取るという、新しい記述のあり方を見てとることができるだろう。ヘッベルの作品は、幼年時代の記述が人生の全体を辿る自伝から独立し始めた時代の一つの証左であると言える。

(三) ゴルツ『幼年時代の書』

こうしたヘッベルの幼年時代の記述におそらく大きな影響を与えたのが、ボグミル・ゴルツ（1801-1870）の『幼年時代の書』（1847）である。幼年時代の記述を一つのジャンルとして打ち立てたとも言えるこの作品は、発刊当初からヘッベルやメーリケに絶賛され、一八七七年には第四版が、一九〇五年には第五版が出ている。⁸⁴フォンターネの『わが幼年時代——自伝的小説』（1893）でも言及されるなど⁸⁵、十九世紀にはかなりよく読まれていた本だった。しかしその後忘れ去られ、一九九二年には、「ボグミル・ゴルツは今日では、もはや文学通や文学愛好家のあいだだけにしか伝わっていない秘密の名前になっている。それよりも広いわれわれの時代の文学意識のなかでは失踪したものと見なされていると言える」⁸⁶と述べられるほど、現在ではほとんど研究されていない作家となっている。

ゴルツは第三次ポーランド分割後にプロイセン支配下に入ったワルシャワで生を享けた。父はプロイセン政府によって同地に派遣された地方裁判所所長である。両親の家はワルシャワ市内にあったが、子どもたちは主にワルシャワから三十キロほど離れたミラヌベクの別荘で自然に囲まれて育った。母が病気がちだったため、ゴルツはすでに七歳で家を出され、一八〇七年には養父に連れられてケーニヒスベルクに行っている。その後、両親の元に戻ることもあったが、さまざまな家を転々とさせられた。母に愛されていないと感じていた彼は、みずからを「よその子」⁸⁷と呼んでもいるが、そうした寂しさは『幼年時代の書』ではほんのわずかにしか触れられていない。牧歌的な環境における子どもの幸せを直接的に描いているこの作品はむしろ、「幼年時代の礼讃」⁸⁸そのものである。

ゴルツは神学の勉強や農場経営の失敗を経たのち作家になろうと決心して、一八四六年にグツコーに会いに行っている。グツコーの宿のドアを朝早くに激しくノックして彼を起こしたゴルツは、腰も下ろさず単刀直入に、作家になるにはどうしたらよいか、とグツコーに助言を求めた。これに対してグツコーは、すでにきちんとしたものを書いているのならば出版者を探しなさい、と答えたと言われている。この面会をグツコーは後に一八七六年になってから回想しているのだが、その時点ではすでにゴルツの『幼年時代の書』を読んでいた。

子どもの心！ 人間における根本的な秘密！ 芽生えつつある精神の始まりという楽園の聖域！ これらは五十年代にはほとんど文学のスローガンになっていた。誰もが少年時代の思い出を書いた。しかし一人の男が立ちあがった、神性というものは、静かに遊びながら夢見る子どものなかに安らっている、と表明した者だ。ボグミル・ゴルツの『幼年時代の書』は、日中の騒がしい混乱や党派や意見の厳しい闘いから、われわれに直接絡みついているわれわれの周りのメールヒェンの世界へと遡ってゆく。⁸⁹

エジプト旅行を取行するなど話題豊富で、朗読家としても名を馳せていたゴルツは、そのエネルギッシュな語り口と振る舞いによって多くの同時代人に強い印象を与えたが⁹⁰、そのデビュー作である『幼年時代の書』の衝撃も、人物の強烈な個性に劣らず大きかったことがわかる。

『幼年時代の書』は、表題の付された八つグループから成っていて、表題はそれぞれ、「子どもという存在——その神秘的な配剤を覗く」、「子どもの遊びと子どもの至福——故郷を想う溜め息」、「自然とともにある暮らしぶり」、「ワルシャワでの出来事」、「内的な暮らしぶり——子どもの存在の性格描写」、「ケーニヒスベルク、あるいはわたしの子どもの頃の道徳的な世界との交流」、「さまざまな出来事と子どもの体験」、「わが父、あるいは実直な男の肖像」となっている。そしてこれらのグループはそれぞれさらに二篇から十三篇の表題の付けられた短いテキストで構成されている。この作品は後年さまざまな編集による抜粋で出版されており、八つのグループのうちのいくつかをまとめた抜粋もあれば、表題が付された最小単位のテキストの順番を入れ替えた抜粋もある。⁹¹これらの小さなテキストがそれぞれ時系列にとらわれない独立性の高いものであり、この作品が十九世紀に進んだ自伝的記述の断片化という傾向を著しく示していることがよくわかるだろう。

幼年時代の自伝的記述の多くが、自身が生まれた時間と場所とその環境、つまり父母についての記述から始まるのに対して、ゴルツの作品はそうではない。序文に続く本文の冒頭は次の通りである。

わたしたち大人にとっては、まず生が、そして最後に死が頭に浮かんでこようとするのではない。それに、わたしたちは生き、死ぬためのいったいどんな準備をしてきたのだろう、何を学び、何をしてきたのだろう！ どれだけの芸術や学問が、どれだけの財産と名誉が拾い上げられただろう、そして徳と宗教に関するどれだけの機構が。だがこれらすべては無に等しかった！

それに対して幼年時代のわたしたちには学問も芸術もなく、職務も名誉もなく、功績も評価もなく、財産も金銭もない……。それでも生はわたしたちにとってどんなにか愉快に思われるだろう、世界はどんなにか素晴らしく思われるだろう、わたしたちはみずからの存在をどんなにか甘く感じるだろう！（BK, 3）

このあとも、彼の出自に関する情報が最初の章で読者に提供されることはない。前面に出ているのは、「悟性という太陽のどぎつい光」（BK, VIII）にまだ照らされていない「子どもの心の花の香り」（BK, IX）を描こうとする情熱である。ヘッベルが抽象的だと評した序文の調子は本文中まで続いてゆく。⁹²そしてまさに、これこそがゴルツの幼年時代の記述の特性なのだ。自身の具体的な体験は随所で、子どもの感性一般や幼年時代の至福の普遍性へと飛躍する。みずからの幼年時代の背景にある世情を強調したインマーマンとは対照的に、幼年時代を「夢の世界」（BK, 167）と捉えていたのである。ジャン・パウルは「今この墮ち行く世界、多くの高貴なものや古代のものや廃墟のなかで、子ども、この純粋な者たち、まだ時代と都市に汚染されていない者たちのほかに何が残っているであろうか」⁹³として、子どもを時代の桎梏から自由な存在と見なしたが、この意味でゴルツをジャン・パウルのエピゴーネンと呼ぶのは妥当だろう。⁹⁴だが、ゴルツに時代性が欠如しているというわけではない。この作品は、三月革命において頂点に達した自由主義的なドイツ統一運動が、それに続くフランクフルト国民議会によって否定されるあの一八四八年の前年に出版されている。ゴルツは冒頭で「わたしたち」という大人を登場させることによって書き手の現在を強烈に意識し、「今日では子どもたちももはやか

つてのように幸せではないし、彼らの遊びは想像力も心のこもった機知も失ってしまっている」(BK, 47)として、みずから時代をかつての時代のネガとして記述している。彼が主として幼年時代を過ごしたのは自然に囲まれた田舎であり、たしかに、田舎の別荘における彼の幼年時代の記述に目を向けると、自然の循環的な時間が支配的であるように見える。しかし彼の生地は人口十万人ほどの、当時としては大都市のワルシャワであり、この都市の記述には近代が共振している。

さて、わたしがこうして、わたしの第一の故郷であるワルシャワの幼年時代にまで遡って詣でてゆき、当時の心が今日の心にまた近づいてくると、イメージ的な言い方で始めるとすれば、寓話的な、しかし不思議と統一感をもって形成され色づけられた混沌が登場するのだ。すなわち、巨大な宮殿、教会、みすばらしい居酒屋の混沌や、壮麗な通り、大きな広場、泥だらけの近所のわんぱく小僧たちの混沌、カフタンを着たユダヤ人、下級貴族たちの混沌、辻馬車、幌付き馬車、豪華な馬車の混沌、リンゴ売り女、パン売り少年、装飾品店の混沌、火酒の店、食べ物の屋台、王侯貴族たちのホテルの混沌が登場するのだ。要するに、全世界の連中、生き方見本、ほろきれ、屑の断片と文化の断片が組み合わされてきたひとつの世界である……。(BK, 169)

田園風景の循環する時間ではなく、子どもが目の前にしたであろう都市の光景が、いわば「物づくし」で空間的に記述されている。下層民に関するものから王侯貴族に関するものまでが空間的な広がりの中に同時に並置されているのだ。プロイセン支配下のワルシャワでは、「スラヴ的カトリック的な原理」と「ドイツ - プロテスタント的な教養と生活のあり方」は、コントラストをなしつつも「オリエンタルな存在のかすかなひとつの香りのなかに染められて」(BK, 169)見える、とゴルツは述べてもいる。時間的な広がりやさまざまな差異は、ひとつの都市空間の記述に集約されている。幼年時代が牧歌的な自然のなかにはなく、都市というさまざまな人間や事物が集合する空間に置かれることによって、その記述は時系列的なものから完全に決別し、都市そのものの叙述と交差し始めている。

幼年時代を人生の一部としてではなく、それ独自の存在として捉えたゴルツは、「学校通いの最初の時間」と題された節のなかで言語習得についても記述している。

わたしはすでに大人になっていた姉からポーランド語とドイツ語の読み方をきちんと学んでいた。音読法で教えられたわけではなかったが、そのかわり、舌を脱臼したり胸を痛めたりしながら教えられたのでもなかった。(BK, 172)

のちに職業朗読家として活躍するゴルツだけあって、音読法について述べるにしても、文字と音声の関係ではなく、発声という身体的な面に注目している。これに対して、文字を書くことについては本作品ではまったく言及されていない。それもそのはずで、子どもの手は文字を書くかわりに、絵の色を塗ることに使われているのだ。ゴルツは、クリスマス前に絵を描いていた場面を回想しつつ、現在では美に関する事柄は大量生産的になってしまったが、彼の幼年時代にはまだ「色彩の至福」(BK,

85) があつたと述べ、色彩を幼年時代に特有の感覚だとしている。「色彩はしかし永遠に色彩のままに留まり、最も本当の素描でさえも、色彩の不足を補うことはできないのだ、少なくとも、詩情豊かな感性にとっては！」(BK, 87) こうした子どもの感性をゴルツは自然的なものと考えている。「子どものうちではすべてが直接性であり、自然であり、生命であり、本能であり、美しい衝動であり、完全な心臓の鼓動である」(BK, 29)。ゴルツにとって、子どもは文字学習の手前の色彩の側に留めておかれるべき存在だったと言えるだろう。

第三章 ベルリンの幼年時代

(一) ベルリン出身の作家たち

ベルリンの幼年時代を描いた作品は実は多くはない。そもそもベルリンはヨーロッパの諸都市のなかでは新興の部類に入り、人口が二十万人を超えたのはようやく一八一九年のことである。⁹⁵ベンヤミンが「大都市の街頭風景を捉えようとした、最も早い試みの一つ」(GS I, 628) として挙げたのはE・T・A・ホフマンの一八二二年の作品『従兄の隅の窓』だったが、ホフマンはケーニヒスベルクの出身で、ベルリンで幼年時代を過ごしたわけではなかった。はたして、彼のベルリン物に登場する主要人物はほとんどが成人男性である。⁹⁶だがホフマンに先立ってベルリンの街を文学作品に描いた作家がいた。綱作りの親方の息子としてベルリン最古の地区「ケルンの魚市場」(現在のフィッシャーインゼル) に生まれ育った生粋のベルリンっ子、ティーク (1773-1853) である。ベルリン啓蒙主義の旗手ニコライの雑誌に寄稿された小品『ジークムントの人生の奇妙な二日間』(1796) の主人公は、顧問官になるべく故郷の上司の推薦を携えて、とある街にやってきた若者である。街の名は明示されていないが、「国民劇場 (Nationaltheater)」が登場することやティークの経歴からして、ベルリンと見てよいだろう。採用関係者を巻き込むドタバタ劇が演じられたのちに、めでたくジークムントの就職が決まるというハッピーエンドの物語である。⁹⁷「ジークムントは、見知らぬ街の通りを行き当たりばったり縦横に歩き、こちらで、またあちらで立ち止まり、見知らぬものやなじみのない建物が彼のうちに呼び覚ます多様で不可思議な印象を心のなかに吸収することをこよなく愛していた」⁹⁸という記述のうちには、ベルリンというこれから発展しようとする新興都市と、これから社会に出ようとする若者の姿が重ね写しになっている。この若者も人生における新参者という意味では、たしかに未熟さの残る子どもと見なせるかもしれない。⁹⁹しかしティークは、本稿が考えるような言語を学ぶ存在としての子どもは描かず、自身の幼年時代についてのまとまった回想録も残さなかった。この都市描写のなかでベルリンがそれと名指しされず匿名のままに留まっていることは、ティークにとってベルリンの幼年時代が文学のテーマにはなりえなかったこととおそらく表裏一体にあるだろう。

また、後期ロマン派のアルニム (1781-1831) もベルリンの出身である。父はプロイセン王国の侍従で、アルニム自身も愛国心の強い若者だった。一八一三年二月には解放戦争に従軍するために国民軍に入隊までしたが、ほとんど兵士らしいことをしないまま七月には失意のうちに除隊し、経済的な困

窮もあって、解放戦争の勝利に湧く世間に背を向け、九月末にはベルリンの南およそ八〇キロにある領地ヴィーパースドルフの城館に隠棲した。¹⁰⁰ベルリンを離れたのち、アルニムは親戚のザヴィニーに宛てて「僕はほんの幼い子どもの頃から、ベルリンではよそ者であるという気持ちを抱いていました」¹⁰¹と書いている。そしてやはりアルニムも幼年時代についてのまとまった記述を残していない。ベルリン出身のこの二人の作家において、ベルリンはいまだ追想される街にはなっていなかったのである。

(二) グツコーのベルリン・ベンヤミンのベルリン

ベルリンの幼年時代を記述した最初期の作品のひとつに、ベルリン生まれの音楽批評家レルシュタープ(1799-1860)による『わが人生より』(1861)と題された二巻本がある。当時の音楽界に強い影響力をもっていたレルシュタープは、グルック、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンを理想とする古いタイプの批評家で、若い世代との交流はほとんどなく、彼より十歳ほど年下のグツコーからも保守的な人物だと思われていた。¹⁰²だがベンヤミンは、「みずからの幼年時代に対する最も深い愛と最も深い追想を持ち続けているのは、最も有名で最も才能のある人びとだということではとうていなし」(GS VII, 93)として、レルシュタープの幼年時代の記述を「彼の書いた最高のもの」(ebd.)として高く評価している。レルシュタープには音楽批評の他に四巻本の『一八一二年——歴史小説』(1834)や銅板画にエッセイを付した『ベルリンとそこごく周辺——絵画による原画付き』(1852)といった著作もある。これらは二十世紀に入っても版を重ねているが、『わが人生より』は初版以降、版が重ねられた形跡がない。ベンヤミンも、子どものためのラジオ放送原稿のなかでこの作品を紹介する際に、「君たちがこのルートヴィヒ・レルシュタープという名前を今まで聞いたことがなかったとしても気後れする必要はない」(GS VII, 92)として、この著者が当時すでに忘れられた存在だったことを認めている。レルシュタープの自伝に記述されている幼年時代はグツコーのそれよりも古いわけだが、執筆および刊行はグツコーの『少年時代より』(1852)よりも後である。そのため、本稿ではグツコーの自伝をベルリンの幼年時代を記述した最初期のものと見なし、レルシュタープの自伝に関しては、現在資料の入手が非常に困難でもあることから、考察の対象外とする。

すでに見たように、グツコーは自身で回想録を書く以前に、他の作家たちの自伝をみずからの雑誌に掲載していた。それらの著作が自伝研究等でしばしば取り上げられているのとは対照的に、グツコーの『少年時代より』は、グツコー研究においても自伝研究においても、長らく等閑視されてきた。¹⁰³彼は自伝的記述が溢れる時代にあえて自伝を書く理由を序文で述べているが、そこからは、この作品が顧みられなかった理由が垣間見える。

自伝の偉大なお手本を模倣するためにこの書物が書かれたわけではない。この書物の執筆に際しては、著者が自分で自分の成長の像を素描しようとしているかのような解釈をはっきりと拒絶しなければならないくらい、著者にとってみずからの人物像はどうでもよいものだった。

著者は、みずからの少年時代の最初期を、その事実を念頭において描写した。事実というのは

決して冒険めいてはいない——捨て子や孤児の方が、好奇心に対してはもっと大きな刺激を与えることができただろう。——しかし、著者にとってまず重要に思われたのは、みずからの少年生活の舞台だった。

その舞台とはベルリンである。——この大都市はそこに生まれた者にとっては、周知のように、最悪なおむつと揺り籠という評判をとどろかせている。この大都市は、わざとらしい冗談や冷たい理性やむき出しの情感の乏しさか生み出しえないと見なされているのだ。今日ではドイツのどの地方も活発に活動し、その内奥を開いて、ドイツの道徳やドイツの根源的な生活の水脈がそれらの地方を貫いていることを示している。ベルリンだけがこのとき、黙りこくって、動きのないままでいたのだ。……。

しかしベルリンは、そのように見せ、そのように受け取られているほど本当にそんなに平板なのだろうか？ 純粋なドイツの情感生活というあの地下を通る銀色の流れは、本当にマルク・ブランデンブルクは迂回してしまって、流れこそひっそりとしてはいるが山脈に由来しているシュプレー川とは交差しないのだろうか？¹⁰⁴

偉大な手本の真似はするまい、とはもちろんゲーテを念頭においてのことだろう。ゲーテの場合とは違って、この幼年時代の記述は、著者という人物の総体を補完するためのものではない。「一八一一年から一八二一年まで」という副題も、少年時代が独立した記述対象として捉えられていることを示している。またこの作品は八章から成るが、その章分けは時系列によるものではなく、目次にのみ記されている各章を構成する複数のキーワードは、それぞれの章がさらに細かな断片から成り立っていることを明かしている。

だが何よりもグツコーの自伝とそれまでの自伝を分けるのは、彼が幼年時代を記した大きな目的のひとつが、都市ベルリンを文学的叙述の対象として見直すことにあったという点だ。ベルリンは一八三〇年代後半から急速に工業的發展を遂げ、一八三八年にはポツダムとのあいだに列車も開通し、グツコーが本書を執筆していた当時は、すでに人口は四十万人を超えていた。¹⁰⁵ 本作品の記述対象である一八一一年から一八二一年にかけてのベルリンは、ナポレオン軍による占領直後で荒廃してはいたものの、解放戦争を経て、国民国家建設の中心にならんとする気運に満ちていた。グツコーはプロイセン王子の厩舎長を父にもち、貧しいプロテスタントの家庭に育ったが、一家の住まいはプロイセン芸術アカデミーの建物の一部にあり、そこは少し歩けばすぐに目抜き通りのウンター・デン・リンデンや大学や図書館、オペラ座や王宮などが目に入る、まさに新ベルリンの一等地だった。彼はみずからがそこで経験したきらびやかなファサードとその裏側にある民衆の生活について、「有名で重要な建物が数多くこんなに密集して建ちながらも、当時ここに巢食うことが許されていたような非常に多くの静かできわめて慎ましい生活が巨大な角石と堂々たる列柱のあいだに存在することを許容している都市はあまりないだろう」(AK, 23) と述べている。いわば上り坂にあるベルリンについてのこうした記述は人びとの興味をひきそうなものだが、本書の売れ行きはグツコーの他の著書に比べてもあまりよくなかった。その理由のひとつとして、書評があまり出なかったことが指摘されている。¹⁰⁶ しかし、

レルシュタープの幼年時代の記述もその後版を重ねていないことを考えると、そもそもベルリンの幼年時代というテーマそのものが読まれない理由だったのではないかと推測したくなる。グツコーの作品に対する当時の批判の多くは、ベルリンの街や建物の詳細な描写が、自伝的・主体的な要素を背景に押し除けてしまっている、というものだった。¹⁰⁷ 当時の読者はまだ自伝的書物に対して、グツコーの言う「今日人びとが社会学（Gesellschaftskunde）と呼んでいる学問に寄与するもの」（AK, 9）よりも、ひとつの人格が完成されてゆく物語を求めていたのである。しかし、幼年時代の記述とその土地の記述が交錯するというところこそが、まさに都市における幼年時代の記述の特性をなしているのではないだろうか。ベンヤミンは、レルシュタープの自伝を読むと、「これを語っている者が本物のベルリンの街の少年として、小さいときから街中を駆けずり回っていたということがわかる」（VII, 97）と述べているが、レルシュタープによるベルリンの幼年時代の記述もやはり、子どもの成長以上にベルリンという都市を描くものだったからこそ、顧みられなかったのかもしれない。

ベンヤミン（1892-1940）の『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』は、一九三二年から三四年にかけてさまざまな新聞に偽名で発表した独立した短いテキストを集めたものである。ベンヤミンはこれを一冊の書物として出版することを強く望み、一九三三年の時点で「本来は決着をつけられている本」¹⁰⁸としていたにもかかわらず、その後も書き直しや各テキストの順番の入れ替えを繰り返し、生涯にわたって推敲を続けた。合計四つの稿が残されているが、一九八一年にパリの国立図書館で見えられた、現在「最終稿」と見なされている稿にさえも「まだ書き直すこと」（GS VII, 695）という注意書きが付されている。¹⁰⁹ 一八三八年の書簡では「この本はそのテーマのせいで出版社を見つけるのは難しいかもしれません。しかし見つければ、書籍業界のかなりの成果となりうるでしょう」¹¹⁰と述べているが、やはり生前の刊行はかなわず、単行本として出版されたのはようやく一九五〇年のことだった。

ベンヤミンが幼年時代を過ごしたベルリンは、プロイセンという一領邦国家の王都からドイツ帝国首都へと昇格し、人口も二百万人を超えて、他のヨーロッパの大都市と肩を並べようという時期にあった。ベンヤミンの父は同化ユダヤ人の古美術商で、それで為した財をさまざまな事業に投資して成功を収めている有能な商人であり、ベンヤミンは十九世紀末に新しく開発されたベルリン西部の高級住宅街で物質的に豊かな環境のもとに育ったが、ナチスの政権掌握をうけて一九三三年にパリに亡命したのは、孤独と経済的逼迫に苦しみ続けた。¹¹¹ 幼年時代の記述を思い立ったのは一九三二年、すでになかば亡命のような形でスペインのイビサ島に滞在していたときのことだった、と『ベルリンの幼年時代』の序文で述べている。

わたしは、過ぎ去ったものの偶然的、伝記的な回復可能性にではなく、その必然的、社会的な回復可能性にまなざしを向けることによって、この憧憬の感情を抑制しようと努めた。

その結果として、経験の深みのなかよりも、むしろ経験の連続性のなかにくっきりと姿を現わすものである伝記的な相貌は、以下の想起の試みにおいては、著しく後退することになった。そしてそれとともに、特定の人びとの——わたしの家族の、またわたしの幼なじみたちの——相貌も。これに対してわたしは、大都市の経験が市民階級のあるひとりの子どもの姿をとりつつ沈殿

している、そのようなイメージこそを捉えようと努めた。

……田舎で過ごされた幼年時代の思い出は、自然感情というかたちをとって何世紀も前から、明確な輪郭をもったさまざまな形式を意のままにしているが、ここに述べたようなイメージを受け止めるべく待っている明確な形式は、まだない。(GS VII, 385)

ベンヤミンがグツコーの『少年時代より』を読んでいたことを示す資料はひとつも残っていない。だがもし知っていれば、都市における幼年時代の記述のひとつのありうべき形式と見なしていたのではないだろうか。グツコーの幼年時代と同様、ベンヤミンの幼年時代においても、ベルリンは前向きで未来志向の都市だったはずだ。だが、ベンヤミンによる幼年時代の記述は喪失感に満ちている。しかも、ベンヤミンにとって失われているのは幼年時代だけではない。故郷ベルリンまでもが失われたものだったのである。ベンヤミンが故郷を失ったというのは、ユダヤ人であるがゆえに亡命を余儀なくされたということを意味するだけではない。ベンヤミンは、みずからの出自であるドイツ市民階級の没落をベルリンという都市に透かし見ていたのだ。一八四八年の革命の挫折から続くこの没落の過程は、一九三〇年代における独裁政権の誕生時に、つまりまさに『ベルリンの幼年時代』の執筆時に、頂点に達していたと言える。だが振り返ってみれば、この市民階級無力化の過程はすでにグツコーの時代に始まっていた。グツコーの著書のうち少なからぬものがプロイセン政府の検閲により発禁処分を受け¹¹²、ときにはイニシャルの署名のみでの発表を余儀なくされた。¹¹³初めて著書が発禁処分を受けた一九三二年にグツコーはベルリン大学からハイデルベルク大学に籍を移すが、これ以降ドイツ各地を転々とするも、ベルリンに腰を据えることは二度となかった。自由主義的な活動を封じられていたという意味では、やはりグツコーにとっても故郷は失われていたのである。領邦国家が乱立するなか貧しいプロテスタントの家庭に育ったグツコーと、裕福なユダヤ家庭のブルジョワ的な生活圏で幼年期を過ごし、ヴァイマル共和国建設とその瓦解を経験したベンヤミンとでは、幼年時代を取り巻く環境もそれを執筆した環境も大いに異なるが、文筆活動を偽名や匿名で行わなければならなかったという事実にも端的に現われているような、ドイツ市民階級の挫折を、二人は共有していたのである。

両者にとって、幼年時代とともに故郷のベルリンも失われたものになっていた。ベンヤミンは幼年時代と都市について、「マルセイユ」(1929)というエッセイのなかで次のように述べている。

この単色の住宅街に古くから住んでいる人びとは、マルセイユの悲しさについて、なにがしか分かっている。というのも、幼年時代こそが、憂いの源泉を発見するのであり、そして、あれほど名声にみちて輝く諸都市のもつ悲哀を知るためには、子どもの頃をそれらの町で過ごしていなければならないのだから。旅行者には、ロンシャン大通りの灰色の家屋も、ピュージェ通りの窓格子も、メヤン並木通りの樹木も、何ひとつ秘密を打ち明けないだろう。ただし、偶然が旅行者を導いて、この町の霊安室であるパサージュ・ド・ロレット、細長い中庭になっている通路に導けば話は別だ。(GS IV, 362)

幼年時代とともに記述される都市とは、輝ける都市ではなく、悲哀に満ちた都市なのだ。

(三) グッコーとベンヤミンにおける子どもの言語習得

グッコーとベンヤミンの幼年時代の記述には、蝶を追う少年、物語るということ、病気、ドライブ、ルーツのつまみ食い、夏の別荘、色彩といった共通のモチーフが数多くあるが、両者の記述において言語の習得はとりわけ重要な位置を占めている。以下では子どもと言語の関わりというテーマを直接扱っている部分に焦点を絞って、両者のテキストを比較したい。

〈原初的な言語体験——病気の子どもと母の声〉

グッコーにおいてもベンヤミンにおいても、子どもの言語体験のひとつとして母親の声が登場する。キットラーは、十九世紀以降母親の声が文字学習への橋渡しの役割を明確に担い始め、母親向けの文字学習本が数多く出版されたということを明らかにしている。¹¹⁴しかしグッコーの記述においては、母親が子どもに与える言語は文字ではなく音声である。

この母は読むことしかできず、書くことはできなかったし、知っておくべき事物については、自分の生活に最も近い領域のことと、子どもの歌の小さな家宝以外には何も知らなかった。彼女は、真の楽園の夢に対する彼女の愛情を子どもの歌にこめて口ずさむ術は知っていた。(AK, 57)

グッコーはここではっきりと、母は書くことができなかったということを記している。母は子どもを文字へ導くのではなく、音声言語に留まらせておくのだ。ベンヤミンもまた、歌う母というイメージを『ベルリンの幼年時代』の草稿と見なせる『ベルリン年代記』(1932)のなかに記録している。

私の母はエルクの『珠玉歌集』(1880年頃、論者注)のなかから、こういった歌やそのほか多くの歌を弾いてくれた。この歌集は緑と金の装丁の分厚い二巻本で、譜面台に置かれていた。私はそれに合わせて歌いはしなかったが、聞くのは好きだった。(GS VI, 511)

両者ともに歌という音声表現を母親に結びつけると同時に、「物語る母」も記述している。グッコーにおいては、「母は熱を出している少年を安心させ、少年が落ち着き、疲れて眠り込むまで語りかけ続けてくれた」(AK, 96)とあり、ベンヤミンもやはり「熱」と題された小篇のなかで、母が語る「お話しにみなぎっている強力な流れが、身体そのものを貫いてゆき、病毒を漂流物のように流し去ってくれた」(GS VII, 404)としている。どちらの子どもも、母の物語を聞くのは病気のときである。つまり、子どもは母の前ではいまだ言語習得の途上という、いわば病気の状態なのだ。グッコーの言葉でいえば「あらゆるより高次の精神的で内的な人間の成長とは、半分病気なのだ」(AK, 96)ということになるだろう。両者において母の声は、子どもがまだ文字を欠いていることを示すしるしとなっているのだ。

〈読むこと〉

グツコーは子どもが快癒する契機を学校での勉強に見出している。グツコーは七歳で教会付属の予備学校に入り、そこで初めて文字の授業を受ける。まだ文字を知らなかった少年は、綴りで読む順番がとうとう自分に回って来てしまったとき、動揺して大声を出してしまうが、先生にこれから学べばよいのだと教えられて安心する (AK, 100f.)。ヘッベルが、綴りの順番が回ってこないとへそを曲げたのと対照的であるが、ほぼ同年代の二人はどちらも予備学校で綴り字法に則って文字を学んでいたことがわかる。

グツコーは、教師のあとについてみんなで、あるいは一人でデモンストレーションしなければならないような学習を退屈だとしているが、しかし同時に、「退屈を感じる病人は、快癒の途上にあるのだ。読み方、書き方、計算の退屈さを我慢できない教師は、みずからの職業に向いていない」(AK, 105)とも述べている。初等教育の単調さや退屈さを否定しているわけではないのだ。むしろ、当時流行していたペスタロッチらによる子どもの自主性を尊重する教育方法に対しては「あらゆる個別化、いわゆる、子どもと子どもの特別な『性質』に対して『理解を示すということ』は、最も危険なディレクタント的な振舞いを生み出す」(AK, 104)として、疑義を呈している。「学校での最初の学習は理性のメカニクな訓練であるべきだ」(ebd.)、「集団学習と精神の一斉訓練という観点において学校通いを越えるものはない」(AK, 105)といった言葉に響く軍隊的なイメージは、グツコーがやはりプロイセンが躍進する時代に、眼前でプロイセン軍の閲兵が行われていたであろうベルリンの中心で幼年時代を過ごしたことと無関係ではないだろう。これに対してベンヤミンは、軍隊的なものとは厳しく一線を画しており、母の歌を聞くのは好きだったが、第一次大戦でよく歌われた歌を唱歌の時間に歌わされることには反感を覚えたと述べている (GS VII, 401)。

また、グツコーとベンヤミンでは「読むこと」に対する態度に違いがある。グツコーにとって「聖書を開くことは、エプソム (イギリスの湯治場、論者注) の馬たちのあいだで行われるように、小さな学校では耳や手や目や口や、近視の者の場合は鼻までも使った競走だった」(AK, 107)。つまり、読むことは身体と密接に結びついた、集団のなかで行われることとして捉えられているのである。また、お気に入りのヘーフェリ (1754-1811) の説教集を読むときについては、「つねに孤独にこの本は読まれた、声を出して読まれた、一人きりで、説教と呼べるほどの大きい声で」(AK, 120)と記されている。子どもはたとえ一人でも、見えない誰かのために、つまり、「聞き手のために言葉に声を貸す準備がある」(GS II, 456)のだと言える。読み手は共同体のなかに存しており、読み方も聞き手の存在を前提とする音読として描かれている。これに対して窓辺で本を読む子どもについてベンヤミンは、「読むときには、わたしは両耳をふさいだ」(GS VII, 396)と描写している。ベンヤミンは、幼年時代の自分を、典型的な近代の文学形式である長篇小説を読む者と同じ、共同体が失われた時代の孤独に黙した読者として描いているのだ (vgl. GS II, 443, 456.)。

〈書くこと〉

すでに見たように、ベンヤミンは子どもが文字を書くことを学ぶ際の準備段階は絵を描くことであり、自身の文字学習の場合には、字習い箱に文字板を並べる手の動きがその前段階だったとしていた（第一章第六節参照）。文学作品においては、書き方を学ぶことよりも読み方を学ぶことに言及される方が多いという指摘があるが¹¹⁵、グツコーにおいても、お気に入りの読本などについての記述が多いのに対して、書くことについてはわずかにしか言及されていない。その数少ない記述のなかに、予備学校では「書くことをハインリヒスの傾斜がややきつめのアンチザクセン的な（未詳、論者）方法で」（AK, 103）学んだ、という記述がある。ハインリヒスは一七八一年生まれのカリグラファーで、学校教育用の文字学習本も多く出版しているが、装飾性の高い美しい文字がその特徴であった。¹¹⁶しかし、少年のグツコーはもっと別の書き方を知っていた。前出のヘーフェリの説教集について述べるくだりで次のように言われている。「それは少年の最もお気に入りの本だった。筆は、その内表紙のヴィンタートゥールの紋章の下にいたずら書きをすることによって、初めての書く試みを行なった」（AK, 120）。つまり、ベンヤミンも言及していたいたずら書きである。この本の出版地であるスイスのヴィンタートゥールの紋章は、左上を向いて歩む二頭の獅子の図柄をしており、その口からは舌も飛び出している。この紋章の下に書かれた落書きのまだ形の定まらぬ線には、紋章に描かれた獅子と一緒にあって文字へと歩いてゆこうとする志向を読みとってよいのではないだろうか。ベンヤミンも字習い箱に関連して、書くことと歩くことを関連づけている。

この字習い箱にわたしが本当に探し求めているのは、幼年時代そのもの、すなわち、手が枠のなかに文字を押して言葉になるように順々に並べた、その指使いのうちに横たわっているような、幼年時代全体なのだ。手はその指使いをまだ夢想できるが、しかし、新たに目覚めてそれを実際にそっくりそのままやってみせることは、もはや決してできはしない。同じように私は、かつてどんな風に歩行を覚えたかを夢想することはできる。だが、それは何の役にも立たないのだ。私はいま歩くことができるが、それを覚えることはもはや叶わないのである。（GS IV, 267）

文字を学んだ子どもはやがてベルリンの都市を歩き、都市を読み、都市を記述することになるのである。

結び

ベンヤミンは幼年時代の終わりを、白昼に月が近づいてきて地球を破壊してしまう子どもの夢として描いたことがあった。夢のなかで子どもは、破局に直面した際に幼年時代の彼岸へ持っていきたいもの、つまり、子どもが戯れていたものを、クレメンス・ブレンターノの詩句¹¹⁷を引用しつつ挙げている。

空に浮かんでいた満月が、突然、どんどん大きくなり始めた。月はどんどん近づいてきて、地球を引き裂いてしまった。……「もしいま痛みというものが存在するなら、神様は存在しない」と認識する自分の声をわたしは耳にし、同時に、彼方へもっていきたくいものを集めた。それらをすべて、わたしは一行の詩句にまとめ入れた。それがわたしの別れの挨拶だった。「おお、星と花よ、精神と衣よ、愛よ、苦悩よ、時間と永遠よ！」けれども、これらの言葉に自分の心を託そうとしているうちに、わたしはすでに目覚めてしまっていた。(GS IV, 302)

だが、子どもにとってこれら美しく輝いて見えるものは、実は瓦礫なのではないだろうか。というのも、子どもにとっては屑こそが最高のおもちゃなのだから。

子どもたちは、事物を扱う、はっきりと目に見える行為が行われる仕事場なら、どんなところでも訪ねてみるという、独特な性癖をもっている。彼らは、建設工事であれ、庭仕事や家具製作、裁縫あるいはその他どこでも生じる屑に、どうしようもなく惹きつけられるのを感じる。屑として生じるこれらのものの中に、子どもたちは事物世界がまさに自分たちに、自分たちだけに向ける顔を認める。これらのものでもって子どもたちは、大人の作品を模造するのではなく、残りであり屑であるこれらの素材相互のあいだに飛躍に富んだ新しい関係をつけるのである。彼らはそうすることによって、自分たちの事物世界を、大きな事物世界のなかの小さな事物世界を、みずからの手で形成する。(GS III, 16f.)

ベルリンとは、ベンヤミンの目の前にある歴史の廃墟そのものだったのだ。幼年時代を追想すると、この廃墟を遊び場とすることのできる「彼」という子どもを「わたし」の内部に作り出すことである。この子どものまなざしは「わたし」を貫いて、ベルリンという都市に堆積する歴史の瓦礫へと向けられるのだ。

注

- 1) ルソー『エミール (上)』(今野一雄訳、岩波文庫、1990年) 103, 125頁。
- 2) Vgl. "Das Pädagogische Jahrhundert": Volksaufklärung und Erziehung zur Armut im 18. Jahrhundert in Deutschland. Ulrich Herrmann (Hrsg.) Weinheim (Beltz) 1981. 十八世紀の教育思想家たちはみずから自分たちの時代を「教育の世紀」と呼んだが、そもそも「教育の世紀」という言葉が最初に用いられたのは、当時の汎愛主義教育に対する批判の意味においてであった。Vgl. Johann Gottlieb Schummel: Spitzbart. Eine komi-tragische Geschichte für unser pädagogisches Jahrhundert. München (C. H. Beck) 1983.
- 3) とりわけ1770年以降は子ども用の文字学習本の発行が爆発的に増えた。タイストラーはこれを当時の社会を席卷した「読書革命」に起因するものとしている。当時ドイツではさまざまな新聞や雑誌が刊行され、読書サークルや貸本の施設が好んで利用された。Vgl. Gisela Teistler: Fibeln als Dokumente für die Entwicklung der Alphabetisierung. In: Geschichte der Fibel. Arnold Grömminger (Hrsg.) Frankfurt/M. (Peter Lang) 2002, S. 109-136, hier S. 127f.
- 4) Gernot Böhme: Anthropologie in pragmatischer Hinsicht. Darmstädter Vorlesungen. Frankfurt/M. (Suhrkamp) 1985, S. 63.

- 5) 一八〇〇年前後のドイツ文学界に対するルソーの影響については次の研究を参照。Vgl. Hans-Heino Ewers: *Kindheit als poetische Daseinsform*. München (W. Fink) 1989.
- 6) Jean Paul: *Levana oder Erziehlehre*. In: *Sämtliche Werke*. Bd. 5. Hrsg. von Norbert Miller. München (C. Hanser) 1987, S. 532.
- 7) Jean Paul, *ibid.*, S. 560.
- 8) そもそも「無垢な子ども」というイメージは聖書に由来するものでもある。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」(「ルカの福音書」18-16-17, 新共同訳)。
- 9) Novalis: *Blütenstaub*. In: *Schriften*. Bd.2., 3., nach den Handschriften erg., erw. und verb. Aufl. Stuttgart (Kohlhammer) 1981, S. 457. ノヴァーリスは「教育学の研究——子どもというの未開拓地である」として教育にも関心を示しているが、子どもと教育についてのまとまった著作は残さなかった。Vgl. Yvonne-Patricia Alefeld: *Göttliche Kinder. Die Kindheitsideologie in der Romantik*. Paderborn (Ferdinand Schöningh)1996, S. 14f., S. 286f.
- 10) Novalis: *Heinrich von Ofterdingen*. In: *Schriften*. Bd.1. 3., nach den Handschriften erg., erw. und verb. Aufl. Stuttgart (Kohlhammer) 1977, S. 225.
- 11) Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. Abt. 1. Bd. 14. *Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit*. Hrsg. von Klaus-Detlef Müller. Frankfurt/M. (Deutscher Klassiker) 1986, S. 41.
- 12) 『少年の魔法の角笛』における言語を学ぶ子ども像については、次の拙論を参照。岡本和子：「アルニム／ブレンターノ『少年の魔法の角笛』の『子どもの歌』における子どもと言語」、『あうろ〜ら』第28号(日本アイヒェンドルフ協会、2011年)所収(1-15頁)。
- 13) ルソー：前掲書、97頁。次の研究も参照。ジョルジョ・アガンベン『幼児期と歴史』(上村忠雄訳、岩波書店、2007年)123-125頁。
- 14) Harald Burger: *Erwachendes Sprachbewusstsein – in der Erinnerung autobiographischer Texte*. In: Regula Schmidlin, Heike Behrens, Hans Bickel (Hrsg.): *Sprachgebrauch und Sprachbewusstsein – Implikationen für die Sprachtheorie*. Berlin (Walter de Gruyter) 2015, S. 17-38.
- 15) Jean Paul: *Levana*. *ibid.*, S. 531.
- 16) *Ebd.*
- 17) Walter Benjamin: *Über den Begriff der Geschichte*. In: *Werke und Nachlaß. Kritische Gesamtausgabe*. Hrsg. von Christoph Gödde und Henri Lonitz in Zusammenarbeit mit dem Walter Benjamin Archiv, Frankfurt/M. (Suhrkamp) 2010ff., Bd. XIX, S. 72. 以下、ベンヤミンの著作の現在刊行中の批評版からの引用は、WuNに続けてローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を示す。また既刊の著作集(Walter Benjamin: *Aufgabe des Übersetzers*, in: *Gesammelte Schriften*. 7 Bde. Hrsg. v. Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt/M. (Suhrkamp) 1972-89)からの引用は、GSに続けてローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を示す。なお、引用の訳文には以下の既訳を参照させていただき、本論の論旨に即して適宜変更した。『ベンヤミン・コレクション1~7』(浅井健二郎編訳、久保哲司ほか訳、ちくま学芸文庫、1997-2014年)。
- 18) ナポレオン占領前後のベルリンの文学事情については次の拙論を参照。岡本和子：「異質なものが作り出す磁場——ナポレオン軍による占領前後のベルリン文学風景——」、『ベルリン——砂上のメトロポール(西洋近代の都市と芸術5)』(尾関幸編、竹林舎、2015年)所収(60-91頁)。
- 19) Böhme, *ibid.*, S. 64.
- 20) Brüder Grimm: *Kinder- und Haus-Märchen*. 2. Auflage. Band 2. Berlin (G. Reimer) 1819, S. VI.
- 21) Fibelという言葉はすでに1419年には使われていることがわかっている。また、カトリックにとどまった南ドイツではFibelという呼称よりも「ABCの初心者」を意味するABC-Schützeという呼称が好まれた。Vgl.

- Ernst Schmack: Der Gestaltwandel der Fibel in vier Jahrhunderten. Ratingen (A. Henn) 1960, S. 9f.
- 22) Arnold Grömminger, Horst Schiffler: Die Funktion der Illustration in der Geschichte der Fibel. In: Geschichte der Fibel. *ibid.*, S. 77-97, hier S. 79f.
 - 23) Johann Amos Comenius: Orbis sensualium pictus. Neu herausgegeben von Uvius Fonticola. 4., korrigierte Auflage. Frankfurt/M. (Friedrich Verlagsmedien) 2012, S. XXV.
 - 24) Comenius: Orbis sensualium pictus. *ibid.*, S. XXXI.
 - 25) Comenius: Orbis sensualium pictus. *ibid.*, S. XXV.
 - 26) Comenius: Orbis sensualium pictus. *ibid.*, S. XXIX.
 - 27) ベンヤミンは、十七世紀の文字学習本に見られる絵と文字を関連させる方法論は、バロック期の文学に見られる「事物と記号のあいだの深淵をトリックめいたやり方で克服する」というアレゴリー的な志向と軌を一にしていると指摘している。Vgl. WuN 13-1, S. 290.
 - 28) Vgl. Wolfgang Menzel: Geschichte der Methoden. In: Grömminger (Hrsg.): Geschichte der Fibel. *ibid.*, S. 55-64, hier S. 58f.
 - 29) *Ebd.*
 - 30) 音声の自然な連なりを前面に打ち出すことによって文字がそもそももっていた異質性を消滅させ、音声を言葉の意味に直結させるこうした志向性をキッターはアルファベットの「オーラル化 (Oralisierung)」と呼び、その転換点を一八〇〇年前後に見出している。Friedrich A. Kittler: Aufschreibesysteme 1800, 1900. 4., vollständig überarbeitete Neuauflage. München (W. Fink) 2003, S. 42.
 - 31) Vgl. Johann Bernhard Basedow: Elementarwerk mit den Kupfertafeln Chodowieckis u. a.. Kritische Bearbeitung in drei Bänden. Hrsg. von Theodor Fritsch. Bd. 1. Hildesheim (Georg Olms) 1972, S. XXIX.
 - 32) *Ibid.*, S. XXXIV.
 - 33) *Ibid.*, S.14f.
 - 34) *Ibid.*, S.17f.
 - 35) *Ibid.*, S.6f.
 - 36) Schulbücher vom 18. bis 20. Jahrhundert für Elementar- und Volksschulen. Bd. 1. Friedrich Eberhard von Rochow: Schulbücher Gesamtausgabe. Hrsg. von Jürgen Bennack. Köln (Böhlau) 1988, S. XXIII.
 - 37) Friedrich Eberhard von Rochow: Der Kinderfreund. Ein Lesebuch zum Gebrauch in Landschulen. Frankfurt/M. 1776, S. nichtgegeben (Vorbericht). In: Schulbücher vom 18. bis 20. Jahrhundert für Elementar- und Volksschulen. Bd. 1.
 - 38) *Ibid.*, S. 9.
 - 39) 次の研究は、ロホウの教科書における「都市」と「売買」の項目をバゼドウにおける「商業について」の章と比較して、ロホウの記述は狭い農村地域に限定されているということを示している。寺田光雄『民衆啓蒙の世界像 ドイツ民衆学校読本の展開』(ミネルヴァ書房, 1996年) 33-102頁。
 - 40) Schulbücher vom 18. bis 20. Jahrhundert für Elementar- und Volksschulen. Bd. 1., *ibid.*, S. XXXVI. 寺田光雄: 前掲書, 99-102頁。
 - 41) Ernst Schmack: Gestaltwandel der Fibel in vier Jahrhunderten. Ratingen (A. Henn) 1960, S. 12.
 - 42) Friedrich Wilhelm Willmsen: Der Branfenburgische Kinderfreund. In: Schulbücher vom 18. bis 20. Jahrhundert für Elementar- und Volksschulen. Bd. 3. Friedrich Wilhelm Willmsen: Kinderfreunde. Hrsg. von Holger Rudolf. Köln (Böhlau) 1992, S.1f.
 - 43) Schulbücher vom 18. bis 20. Jahrhundert für Elementar- und Volksschulen. Bd. 3. *ibid.*, S. XVII.
 - 44) 直観教育の先駆の実践者ペスタロッチは一八二七年に死去、その後継者であるフレーベルは一八五二年に、ヘルバルトは一八四一年に死去している。
 - 45) Ferdinand Sander: Lexikon der Pädagogik. Leipzig (Verlag des Bibliographischen Instituts) 1884, S. 203f.
 - 46) ジャック・ランシエール『無知な教師』(梶田裕・堀谷子訳, 法政大学出版局, 2011年) 3-27頁参照。
 - 47) Sander, *ibid.*, S. 313. 単語という全体から始まってそれを分解・分析してゆくこの方法論は、十九世紀末

- 以降、綴りと音声の不一致が著しい英語の教育においてとくに発展した「全習法 (Ganzheitsmethode/ Ganzwortmethode)」—— 単語や文章をそのまま呈示し、音節や文字に分解するという作業は行なわない—— につながってゆく。Vgl. Menzel, *ibid.*, S. 59f.
- 48) ベンヤミンは「ヒヒロイヒラオホラ」(1930), 「初等教育の新しい芽」(1931) と題する彼女の初等学習本二冊についての書評を書いている。Vgl. WuN 13-1, 287f., 336f.
- 49) Tom Seidmann-Freud: Hurra, wir lesen! Hurra, wir schreiben! Spielfibel No. 1 von Tom Seidmann-Freud. Berlin (Herbert Stuffer) 1930, S. 3.
- 50) Basedow, *ibid.*, S.21f.
- 51) 子どもと文字との最初の関わりに美術史における性的なイメージが響いているということを、文字が若く少女めいているという箇所から読み取って指摘している研究もある。Vgl. Heinz Brüggemann: Walter Benjamin über Spiel, Farbe und Phantasie. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2007, S. 69.
- 52) ルソー『告白 上』(桑原武夫訳, 岩波文庫, 1993年) 15頁。
- 53) Goethe, *ibid.*, 38f.
- 54) Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Abt.2. Bd. 3. Italien - im Schatten der Revolution. Briefe, Tagebücher und Gespräche vom 3. September 1786 bis 12. Juni 1794. Hrsg. von Karl Eibl. Frankfurt/M. (Deutscher Klassiker) 1986, S. 193.
- 55) Karl Philipp Moritz: Sämtliche Werke. Kritische und kommentierte Ausgabe. Bd. 6. Schriften zur Pädagogik und Freimaurerei. Hrsg. von Jürgen Jahnke. Berlin (De Gruyter) 2013, S. 660.
- 56) Goethe: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Abt. 1. Bd. 14., S. 11f.
- 57) Karl Philipp Moritz: Sämtliche Werke. Kritische und kommentierte Ausgabe. Bd. 1. Tl. 1. Anton Reiser. Hrsg. von Christof Wingertzahn. Tübingen (Niemeyer) 2006, S. 17. 以下、モーリッツ『アントン・ライザー』からの引用は本書に拠り、ARに続けてアラビア数字で頁数を示す。
- 58) Moritz: Sämtliche Werke. Bd. 6. S. 146. ちなみに、少年のフリッツという名前は、バゼドウの『初等教科書』やカンペの『小さな子どもの図書館』(1781)の主人公の少年の名前にも採用されているドイツの一般的な男子名である。
- 59) 彼の『神話辞典』(1794)や『ドイツ語正書法』(1784)は初等学校向けに書かれたものである。また、一七八二年には聾啞の十五歳の少年を施設から引き取って言語教育を試み、その記録を雑誌に掲載している。Vgl. Moritz, *ibid.*, S.816-817, 846-849.
- 60) Moritz: Sämtliche Werke. Bd. 6. S. 236.
- 61) Ebd.
- 62) Moritz: Sämtliche Werke. Bd. 6. S. 250.
- 63) Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Abt.1. Bd. 15-1. Italienische Reise. Hrsg. von Christoph Michel und Hans-Georg Dewitz. Frankfurt/M. (Deutscher Klassiker) 1993, S. 494.
- 64) Moritz: Sämtliche Werke. Bd. 6. S. 231.
- 65) Moritz: Sämtliche Werke. Bd. 6. S. 254.
- 66) Friedrich Sengle: Biedermeierzeit. Deutsche Literatur im Spannungsfeld zwischen Restauration und Revolution, 1815-1848. Bd. 2. Die Formenwelt. Stuttgart (Metzler) 1972, S. 197-237.
- 67) 「わが生涯より—カール・インマーマン」という表題のもとに一八三九年に四回に分けて、さらに、「伯父—カール・インマーマンの少年時代の追想」という表題のもとに一八四〇年に三回に分けて掲載された。なお、グツコーが同誌の編集に携わったのは一八四三年までである。Vgl. Karl Immermann: Werke in fünf Bänden. Hrsg. von Benno von Wiese. Bd. 4. Autobiographische Schriften. Frankfurt/M. (Athenäum) 1973, S. 845.
- 68) Friedrich Engels Schriften der Frühzeit: Aufsätze, Korrespondenzen, Briefe, Dichtungen, aus den Jahren 1838-1844 nebst einigen Karikaturen und einem unbekanntem Jugendbildnis des Verfassers. Gesammelt und herausgegeben von Gustav Mayer. Berlin (J. Springer) 1920, S. 155-163, hier S. 157f.

- 69) Immermann, *ibid.*, S. 361.
- 70) Immermann, *ibid.*, S. 362.
- 71) *Ibid.*
- 72) ゲーテは一八二〇年の書簡のなかで、「ドイツ人の使命は、全世界市民の代表にまで高まることである」と言っている。Vgl. Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Abt. 2. Bd. 9. Johann Wolfgang Goethe zwischen Weimar und Jena.* Hrsg. von Karl Eibl. Frankfurt/M. (Deutscher Klassiker) 1999, S. 67f.
- 73) Immermann, *ibid.*, S. 377. なお、書名は正しくは『マクデブルク市の歴史』(1800)である。
- 74) グツコーは同誌の編集に携わったのは一八四三年までであるため、この作品の採用に直接関わったとは言えないが、両者のあいだには個人的な交流があった。
- 75) Friedrich Hebbel. *Werke.* 5Bde. Hrsg. von Gerhard Fricke, Werner Keller und Karl Pörnbacher. München (Hanser) 1963-67, Bd. 4. S. 30.
- 76) *Ibid.*, S. 486.
- 77) Friedrich Hebbel in *Selbstzeugnissen und Bilddokumenten.* Dargestellt von Hayo Matthiesen. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1970, S. 12f.
- 78) インマーマンの「青春時代」が学生時代まで含んでいるのとは対照的である。
- 79) Hebbel: *Werke.* Bd. 3. *ibid.*, S. 731.
- 80) Hebbel: *Werke.* Bd. 3. *ibid.*, S. 728f.
- 81) Hebbel: *Werke.* Bd.5. *ibid.*, S. 733.
- 82) Hebbel: *Werke.* Bd.5. *ibid.*, S. 736.
- 83) Jürgen Lehmann: *Bekennen, erzählen, berichten. Studien zu Theorie und Geschichte der Autobiographie.* Tübingen (Niemeyer) 1988, S. 215.
- 84) Rudolf Trenkel: *Bogumil Goltz, einem genialen Weichsel-Preussen zum Gedenken.* Hamburg. 1978, S. 59.
- 85) Vgl. Theodor Fontane: *Autobiographische Schriften.* Bd. 1. *Meine Kinderjahre.* Berlin (Aufbau) 1982, S. 173. なお、フォンターネのこの作品は、基本的には時系列に沿った古典的な形式をとっているが、唯一、父の死を語る末尾の部分においてのみ、書き手の現在が突出してくる。また、刊行当時からこの作品は高く評判されたが、そのほとんどが、強烈な個性をもつ父の逸話の部分に対する賞賛であり、父に関する部分だけを抜粋して出版してはどうか、という提案もあったが、フォンターネはそれを拒否している。彼は幼年時代を時系列に沿って記述したものの、その記述は何らかの一貫した物語性をもつものではなく、いくつもの「細密画」の集合であると考えていた。Vgl. *ibid.*, S. VII., 210.
- 86) Bogumil Goltz: *Kindheit in Warschau und Königsberg.* Hrsg. von Marek Zybura. Berlin (Nicolai) 1992, S. 144.
- 87) Bogumil Goltz: *Buch der Kindheit.* Hrsg. von Friedhelm Kemp. Frankfurt/M. München (Heinrich Zimmer) 1847, S. 221f. 以下、ゴルツ『幼年時代の書』からの引用は本書に拠り、BKに続けてアラビア数字で頁数を示す。
- 88) Lehmann, *ibid.*, S. 215.
- 89) Karl Gutzkow: *Am Lethestrom.* In: *Die Gartenlaube,* Heft 19. Hrsg. von Ernst Keil. Leipzig (Ernst Keil) 1876, S. 315-319., hier S. 316.
- 90) Trenkel, *ibid.*, S. 51f.
- 91) 前者の例としては脚注87に挙げた文献を参照。後者の例としては次の文献を挙げることができる。なお、こちらの文献では、最小単位のテキストまでもが分解され、他のテキストと結合されたりしている。Bogumil Goltz: *Buch der Kindheit.* Hrsg. von Friedhelm Kemp. München (Kösel) 1964. また、二十世紀初頭に教育学者ムテジウスによって刊行されたものは、初版をそのまま採用している。Vgl. Bogumil Goltz: *Buch der Kindheit.* Hrsg. von Karl Muthesius. Langensalza (Hermann Beyer & Söhne) 1908.
- 92) ヘッベルは一八五〇年にウィーンでゴルツと知り合い、そのときの印象も含めた『幼年時代の書』につい

- ての記事を雑誌『さすらい人』(1809-1873)に寄稿している。そこで同書を絶賛しているが、序文については「他の部分に対してあまりにも弱い」としているものの、「それに対してほとんどの章も、なんとという真正きわまりないポエジーの充溢に満たされていることか!」と述べている。Vgl. Hebbel: Werke. Bd. 3. *ibid.*, S.641-645, hier. S.644f.
- 93) Jean Paul: *Levana. ibid.*, S. 532.
- 94) Lehmann, *ibid.*, S. 217.
- 95) Berliner Hausbuch. Hrsg. von Diethard H. Klein. Freiburg (Rombach) 1982, S. 610.
- 96) ホフマンはベルリンに三度住んだことがあり(合計十一年間)、『従兄の隅の窓』はその三度目の滞在中、死の直前に書かれたものである。それ以前の、法律家としての仕事に見切りをつけ、芸術家として身をたてるべくベルリンにやってきた二度目の滞在時(一八〇七—一八〇八年)の経験をもとに書かれた『騎士グルック』(一八〇九年)においても、すでに都市ベルリンが主役になっている。
- 97) Ludwig Tieck: Werke in vier Bänden. Bd.1. Nach dem Text der Schriften von 1828-1854, unter Berücksichtigung der Erstdrucke. Hrsg. von Marianne Thalmann. München (Winkler) 1963, S. 39-58.
- 98) Tieck, *ibid.*, S. 39.
- 99) エーヴェルスは、ティークの『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』(1798)や『ウィリアム・ロヴェル』(1795-1796)といった作品の主人公の若者も、これから社会に出てゆく「子ども」と見なして、ロマン主義における子どもという主題の研究対象としている。Vgl. Ewers, *ibid.*, S. 203-256.
- 100) Günter de Bruyn: Die Zeit der schweren Not. Schicksale aus dem Kulturleben Berlins 1807-1815. Frankfurt/M. (Fischer) 2010, S. 333f.
- 101) Arnims Briefe an Savigny. 1803-1831. Mit weiteren Quellen als Anhang. Herausgegeben und kommentiert von Heinz Härtl. Weimar (H. Böhlau Nachfolger) 1982, S. 73.
- 102) Vgl. Ludwig Rellstab: 1812 - Ein historischer Roman. Altermünster (Jazzybee) 2012, S. 28.
- 103) Peter Hasubek: ‚Rückblicke‘ auf die ‚Knabenzeit‘. Zur Autobiographie Karl Gutzkows. In: Gutzkow lesen! Beiträge zur Internationalen Konferenz des Forum Vormärz Forschung vom 18. bis 20. September 2000 in Berlin. Hrsg. von Gustav Frank, Detlev Kopp. Bielefeld (Aisthesis) 2001, S. 299-324, hier S. 299f.
- 104) Karl Gutzkow: Aus der Knabenzeit. Textkritische und kommentierte Ausgabe. Hrsg. von Peter Hasubek. Hildesheim (Olms) 2013, S. 7f. 以下、グツコー『少年時代より』からの引用は本書に拠り、AKに続けてアラビア数字で頁数を示す。
- 105) Berliner Hausbuch, *ibid.*, S. 610.
- 106) Karl Gutzkow: Aus der Knabenzeit, *ibid.*, S. 207.
- 107) *Ibid.*, 208f.
- 108) Walter Benjamin: Gesammelte Briefe. 6 Bde. Hrsg. vom Theodor-W.-Adorno-Archiv. Christoph Göttsche und Henri Lonitz. Frankfurt/M. (Suhrkamp) 1995-2005, Bd. IV, S. 204.
- 109) 『ベルリンの幼年時代』の改稿については次の研究を参照。Vgl. Davide Giuriato: Mikrographien. Zu einer Poetologie des Schreibens in Walter Benjamins Kindheitserinnerungen (1932-1939). München (W. Fink) 2008, S. 92f.
- 110) Benjamin: Gesammelte Briefe. Bd. VI, S. 72f.
- 111) Willem van Reijen, Herman van Doorn: Aufenthalte und Passagen. Leben und Werk Walter Benjamins. Eine Chronik. Frankfurt/M. (Suhrkamp) 2001, S. 142f.
- 112) Dieter Breuer: Geschichte der literarischen Zensur in Deutschland. Wiesbaden (Quelle & Meyer) 1982, S. 155f.
- 113) Karl Gutzkow. Erinnerungen, Berichte und Urteile seiner Zeitgenossen. Eine Dokumentation. Hrsg. von Wolfgang Rasch. Berlin (De Gruyter) 2011, S. 543.
- 114) Vgl. Kittler, *ibid.*, S.35f.
- 115) Burger, *ibid.*, 32.

- 116) Vgl. Werner Neite: Der Kalligraph Johann Heinrigs. Begleitheft zur Ausstellung des Kölnischen Stadtmuseums Kölner Museums-Bulletin. Sonderheft 2. Köln (Museen der Stadt Köln) 1989.
- 117) 「一月(一八三五年)大きな苦悩の後に」からの引用。Vgl. Clemens Brentano: Werke. Bd. 1. 2., durchgesehene Aufl. Hrsg. von Wolfgang Frühwald, Bernhard Gajek und Friedhelm Kemp. München (C. Hanser) 1978, S. 601.

幕末仙台藩におけるロシア学研究的開始とその展開

岩 井 憲 幸

Russian Studies of the Sendai Clan in the Edo Era

IWAI Noriyuki

In the closing days of the Tokugawa shogunate, *Yōkendō*, an educational institution of the Sendai Clan, included Russian studies as one of the subjects in its curriculum. The institution held a valuable Tatishchev's French-Russian Dictionary. It was the same edition that the Shogunate government had bought from Golovnin. It had been released in Hakodate in 1813 and then kept and used by *Baba* and *Adachi*, who had been excellent pupils of Golovnin in Russian language at Hakodate, at the Government's Academy in Edo.

I began my study mainly on the basis of Dr. *Yamagata*'s articles regarding learning and education at *Yōkendō*. An excellent opportunity to study Russian was taken by *Ōtsuki Heisen*, the 5th headmaster of the institution whom, in 1819, the lord of the Clan had ordered to create a Japanese translation of a world atlas made in Russia. It was difficult for him, a Confucianist, but he was able to finish it in 1821 with the help of *Ōtsuki Gentaku*, a member of the same family, at Edo, and a famous scholar of the Dutch language and sciences. About 10 years earlier *Ōtsuki Gentaku* and *Shimura Kōkyō* had compiled "*Kankai-ibun*", a full report on 16 sailors of the Sendai Clan who had been cast off course and drifted from Japanese into Russian territory. It covered the years 1793-1803. On that occasion *Ōtsuki Heisen* felt an absolute necessity for Russian language ability and picked his best student, *Onodera Daisuke* (later *Tangen*), 22 years old, to go to Edo and to learn Dutch and Russian. In 1824, *Onodera* returned to Sendai, but we have no information about where he had studied or who had taught him Russian. From 1828 to 1834 he lived in Nagasaki and worked on Dutch and Russian studies under *Nakayama Sakusaburō*, a Dutch-language interpreter, and with him translated Russian topography and history from Dutch originals. *Onodera* got Tatishchev's French-Russian Dictionary from J. W. F. Van Citters, chief of a Dutch factory of Dejima, and brought it back to Sendai. In 1849, *Onodera* became a main translator of Dutch and Russian for the Sendai Clan. In 1850, *Ōtsuki Shūsai*, son of *Ōtsuki Heisen* and 6th headmaster of *Yōkendō*, appointed him to a professor of Russian language at *Yōkendō*. In 1859, the Shogunate government, perhaps in recognition of his abilities, ordered him to become an assistant to academicians in Edo. In the same year, he translated, from Russian into Japanese, a ratification instrument brought by Goshkevich, the first Russian consul at Hakodate. In 1863, he returned to Sendai and then, in 1873, moved to Tokyo, where he died in 1876.

I have investigated the following works by *Onodera* concerning Russia and the Russian language.

- 1) *Roshiya-kokushi* I, *Roshiyakokushi-enkakusetsu* II : MSS in 2 volumes owned by the Saga Prefectural Library.

- 2) *Roshiya-kokushi* II, *Roshiya-enkakusetsu* III, IV : MS in one volume owned by Seikadō.
- 3) *Roshiya-kokuji* : a single-sheet printed in 1838, owned by the Waseda University Library.
- 4) *Shinyaku-gaikoku-keisei-ryakujō* : MS owned by the Ichinoseki City Museum.
- 5) *Yūyoku nikki* : MS owned by the Ichinoseki City Museum.

1) and 2) make up one work of Russian history and topography which was translated into Japanese from Dutch by *Nakayama* and by *Onodera* while he was studying at Nagasaki. In 3) *Onodera* illustrates the Russian alphabet. 4) was translated into Japanese from Dutch, as were 1) and 2), by *Onodera* in 1847. It is a brief topography of North and South America, still unknown to Japanese. In its foreword, he expressed sympathy for Reverend *Ōsen*'s opinion about which was the better approach to translation, word-for-word or free? This was an important matter of opinion for translators like *Onodera*. They had struggled to achieve a new style of Japanese language among old-fashioned scholars. 5) is a selected travel diary written in classical Chinese in 1831.

We don't know how pupils learned Russian or did Russian studies in *Yōkendō*, but, in fact, only *Onodera* did Russian studies for the Sendai Clan. The scholastic mantle fell on the shoulders of his son-in-law, *Roichi*, who learned Russian under the missionary Nikolaj at Hakodate and then went to Russia for study in 1870. After 4 years, he came back to Japan and became a government official in Hokkaido.

In the Meiji era, Japanese improved their abilities in Russian, as Chekhov noted praisingly in his work "Sakhalin Island", 1895. At the same time, Japan increasingly regarded Russian language and Russian studies as geopolitical instruments.

幕末仙台藩におけるロシア学研究の開始とその展開

岩井 憲 幸

はじめに

明治23年(1890)に出版された『日本教育史資料 壹』を繙くと、旧仙台藩の学制・学校等の簡潔な記述の中に次のような一文があって、仙台藩藩校養賢堂において教授科目としてロシア学が設置されていたことが判明する。(原文縦書き。以下同断。次の引用文中では通行体を用いる)。

学科学規試験法及諸則 養賢堂ニ於テ教授セシ科目ハ漢学歌学魯学蘭学算術筆道習礼及ヒ兵学劍鎗術ナリ [中略] 魯学蘭学歌学ハ試験ナシ (pp.697-698)

さらに宮城県図書館伊達文庫にはオランダ語・英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語の洋書が伝存する。ロシア語書は10点を算えるが、就中タチシチェフの仏魯辞典が含まれていることに驚く。この書は当時幕府天文台にのみ蔵されていたもので貴重な辞書であり、仙台藩がどのように入手したのか興味をそそる。これら二つの事柄に触発されて、今次の調査・研究は為された。

仙台藩藩校養賢堂にかかる科目が設置された経緯にはさまざまな要因が看取できるが、それらを探るまえに、仙台藩における外国研究の遠因となったいくつかの事情について、まず触れておく必要があるだろう。

前史

奥州仙台藩は開祖伊達政宗以来幕末・明治初年に至る迄外国との関係を、時に積極的に時に消極的にでももたざるをえなかった。その第1は政宗による支倉常長らのいわゆる慶長遣欧使節派遣であり、第2は元文の黒船への対応であり、第3は津太夫ら仙台漂民のレザノフからの受領であり、第4は北辺への警柝となった工藤兵助・林子平の出現と、その後の蝦夷地出兵であり、第5はプチャーチンとペリー来航時における対応であり、第6は戊辰戦争前後に生じた箱館への仙台藩士流入とロシア正教会のニコライとの出会いである。

これらの多くの場合、文化的・学術的な営為が喚起されることになったが、その際強力な推進力は江戸期におこった蘭学・洋学が担った。仙台藩は、大槻家を中心として主に江戸において蘭学者を輩出・活躍せしめ、また幕閣堀田正敦^{注1)}による大槻玄沢らの庇護・助成のもと蘭学・洋学の盛行があった。特に後者は仙台藩の洋学を語る時、重要な一件といえる。

支倉常長らの帰国は、外国貿易の禁止とキリシタン禁令施行後になされたために、直接の成果を生み出さなかった。だが興味深いことに、常長帰国（元和6年、1620）の約190年後（文化9年、1812）、大槻玄沢は請うて当時秘匿されていた渡来物の一覧を行ない、『金城秘韞』上・下を著わしている。（その補遺は大槻文彦により明治45年（1912）に著わされる。『磐水存響』乾所収。常長らの遺物は明治39年（1906）5月開催の東京帝室博物館特別展覧会甲部において〈伊達伯爵家蔵支倉遺物〉と銘うたれて列品された）。

元文の黒船とは元文4年（1739）、ペーリング（В. И. Беринг, 1681-1741）麾下の露国日本探検隊シュパンベルグ（М. П. Шпанберг, ?-1761）艦隊——（4隻、のち7隻）——が、日本沿岸に出没した事件をさす。仙台藩に限定して語れば、初め牡鹿郡谷河浜に、ついで亶理郡磯村沖に出現した。仙台藩は在府中の藩主伊達重宗に急報し、出兵の準備を行なったが、シュパンベルグの碇泊が短期であったため事なきを得た。牡鹿郡では仙台藩の役人等とも接触があった。^{注2)}

津太夫ら仙台漂民4名がレザノフの遣日使節に伴われて帰国したのは文化元年（1804）である。同2年（1805）幕府より漂民引渡ししがなされ、仙台藩吏が長崎より江戸へ移送。江戸愛宕下の藩邸内では大槻玄沢と志村弘強が漂民から事情聴取の上、記聞作成を命じられる。一旦兩人により記聞はなったが、玄沢はさらに考究を加え、文化4年（1807）に『環海異聞』全16巻を完成し藩に上呈する。本書は大黒屋光太夫の漂流記聞たる桂川甫周撰『北槎聞略』（寛政6年（1794）序）に範をとったものだが、後者が幕府医官によって公式に編纂されながらも秘匿されつづけられたのに対し、前者は一藩において作成され、結果的には世間にも流布した。しかもレザノフ（Н. П. Резанов, 1764-1807）はクルーゼンシテルン（И. Ф. Крузенштерн, 1770-1846）の世界周行艦隊に同乗していたから、期せずして仙台漂民らは日本人として初めて世界一周の体験をなしたわけであり、記聞の内容も変化に富み、多くの彩色図を含んだ秀れた編纂物となった。ここでも堀田と大槻玄沢一門の蘭学が大きな推進力となっている。一方レザノフは文化2年（1805）通商を拒否され長崎を退去するが、忿懣やる方なく、自己の管掌下にあった海軍大尉フヴォストフ及び同少尉ダヴィドフに命じて日本北辺の侵掠を実行させる。世にいう文化露寇事件である。これにより日本国内は俄にロシアへの恐れと関心が高まり、幕府も警戒感を抱かざるを得なくなった。このような状況下『環海異聞』編纂後、玄沢は藩命を受けて文化3年（1806）『北辺探事』を撰する。この書の後半は文化露寇事件等露国関係の記録をなし、対露政策の緊要を求めるものであった。なお『環海異聞』編纂にあたり、玄沢門下の地理学者山村才助・松原右仲の助力も大いにあったことは特筆に値する。

玄沢より以前、仙台藩には工藤兵助と林子平の二人の経世家があった。共に蘭学者との交流が頻繁であった。兵助は『赤蝦夷風説考』（天明3年（1783）序）を著わし、ロシアの南下に対抗策として蝦夷地開発とさらに対露貿易の要を説き、田沼意次の蝦夷地経営に影響を与えたとされる。子平は『三国通覽図説』（天明5-6年（1785-86））を刊行して、結果的に日本がロシアを含む大陸から見ての東端の

弧状列島たることを認識させしめた。『海国兵談』（天明6年（1786）序，寛政3年（1791）刊）では海防論を大きく展開した。しかし両著とも幕府の忌避するところとなり，板木が没収されたという。兩人とも一藩を超えて対露の警鐘を全国に鳴らした。後述の小野寺玄丹はことに子平の書に啓発されたと説かれる。このような対露政策は蝦夷地警備の要となつて具体化する。フヴォストフ事件後，文化4年（1807）幕府は西蝦夷地を松前藩より取り上げて直轄領とし，堀田正敦を蝦夷地に派し，防備責任者とする。この折，大槻玄幹，桑原隆朝の仙台藩医が同道。堀田は同年10月帰還するが，幕府は同年11月仙台藩に対しエトロフ・クナシリ・箱館の蝦夷地警備を命ずる。安政2年（1855），前年の日米和親条約及び日露和親条約締結後，幕府は東西蝦夷地を直轄領とし，仙台藩に対してはシラオイ・ユウフツ・ネモロ・エトロフ・クナシリを自領として警備することを命じたが，事実上は対露国境警備であった。二次に亘る蝦夷地警備には仙台藩医員も随い，極寒地での疾病研究も余儀なくされた。

ペリー来航，プチャーチン来航時の嘉永6年（1853），玄沢の次男にて藩儒の大槻磐溪は同年8月に米国国書につき，同10月には露船の処置につき幕閣に対し上申書を送っている。開港の要とその利，又露国をして米国を牽制すべきことを説く。さらに次年ペリー再来航時，磐溪は藩主の命により神奈川に赴き，ペリー艦隊をはじめ，ペリー自身，その一行の多岐に亘る事物を，鋏形赤子らの絵師の助力も得て，二巻の絵図に纏めた。今日大槻家本が『金海奇観』として早稲田大学に蔵される。

仙台藩は，明治政府への政権移行前後，多くの下級藩士が旧蝦夷地へと向かった。その時分，ロシア正教会を他の既存のキリスト教会と俄に峻別できず，むしろ自分たちの望む政体を実現せしめる教義と誤認し，これに帰依する者が多かった。箱館が開港地であったため，この地を集って正教の研究，ロシア語の学習に志ざす者もあった。

上述のごとき仙台藩の歴史的流れの中にあつて，養賢堂における蘭学研究さらにロシア研究は徐々に立ち現われることになるのである。

仙台藩のロシア研究開始と小野寺丹元

仙台藩にロシア研究のきっかけを与えた事件・人物については上述したが，直接的契機となりえたのは，やはり仙台漂民の帰国とその取り調べ報告書ともいべき『環海異聞』の作成であった。ここでは地誌とくに地理学的研究が要請された。『環海異聞』を成す調査・研究は江戸の大槻玄沢とその門下生に帰される。かくして江戸から本国の仙台へロシア研究はどのように移行したか。

仙台藩藩校養賢堂の第五代学頭大槻平泉^{註3)}は，文政4年（1821）『俄羅斯版万国輿地図』の訳を藩に上呈する。その自跋に次のようにあるという。『新撰洋学年表』より引用。[]内は筆者の補い。

文政己卯〔同2年，1819〕之秋，大槻準受命，欲反訳魯西亞板万国図，而其文字蚊脚蟹行，未易粹通解，向某江戸客在之日，蔵山村氏所訳彼国字之書，出而參校，終得反訳国名，是以寄書於江戸同族玄沢，玄沢転寄崎陽舌人馬場氏所著一小冊，因就二書，竭力焦思三年而卒業，惜哉，原図多磨滅，間有不可了者，故其不審者剛刪焉，

平泉はもとより儒員であるが、ロシア製世界図の翻訳を命ぜられ、江戸在住の玄沢を介して山村才助のロシア文字の訳と長崎通詞馬場佐十郎の著書を参考とし、苦心惨憺の上3年を経て反訳上呈した。原図は磨滅し、文字は不鮮明とあるが、おそらくは国名・地名等を翻訳したものであろう。この原図が具体的に何であったか不明だが、いずれにせよ、平泉はロシア語の学習の必要性を痛感した。

そこで門人の小野寺大助（のちの丹元）^{註4)}を抜擢して江戸に派し、オランダ語とロシア語の学習を命じた。丹元は当時22歳もとより儒学生であった。平泉はかつての享和3年（1803）同族の玄幹—玄沢の長子—と共に遊学に及び長崎に至り、洋学にも接した経験を有する。帰藩の途上、京都に於てロシア文字を見、筆写したと伝えられるが、上記藩命による翻訳にはつながるべくもなかった。

丹元が江戸にあってどのように勉強したか、すなわち誰にそしてどこで学んだのか不明である。玄沢の近辺にあったことは容易に想像しうるが、ロシア語は誰に学んだのか。この頃幕府天文台とその周辺には馬場佐十郎と足立左内があった。文化10年（1813）正月両者は幕命を受けて松前に至りゴロヴニン（В. М. Головин, 1776-1831）らに直接ロシア語を学んだ。ゴロヴニンは文化露寇事件のあおりをくらい、捕らえられて松前に留置されていたのである。馬場・足立さらに箱館奉行所の村上貞助はゴロヴニンの薫陶をうけ、ロシア語力は比類なく向上した。同年5月馬場・足立は帰藩、ともに魯西亜辞書取調御用掛となる。馬場は文政5年（1822）7月に歿するが、丹元が江戸にあった時、馬場・足立は天文台等に在職中であり、彼らに接触した可能性がある。当時、天文台員等は余暇に私塾を営むことが慣習的に許されていたらしい。天文台でにせよ私塾でにせよ丹元がどこで誰に師事したのか、これを直接明らかにする資料は今のところ存在しない。

丹元は文政7年（1824）帰藩。これより前、仙台藩では文政4年（1821）に養賢堂に蘭学方が、翌5年に医学館に蘭方科が設置される。文政10年（1827）玄沢歿。文政11年（1828）丹元は長崎に遊学。禅寺に寄寓し、長崎通詞中山作三郎^{註5)}について蘭学・露学を学ぶ。一説にシーボルトの鳴滝塾においてロシア語を学んだとされるが、同年シーボルト事件が出来するから、疑問が残る。この間、作三郎と『魯西亜国史』を共訳する（後述）。天保5年（1834）帰藩。同9年（1838）『魯西亜国字』刊行（後述）。嘉永2年（1849）丹元は魯西亜阿蘭陀両学和解方引切を命ぜられ、藩医員となる。同年儒者の国分平蔵と共に長崎に遊学、3ヶ月滞在して養賢堂用に蘭書・露書を購入した。翌3年（1850）帰藩、第六代学頭大槻習齋^{註6)}の命で蘭学局の露語教授となる。さらに安政3年（1856）蘭学局総裁となり、『濟々一方』を上梓する。安政6年（1859）幕府の蕃書調所教授手伝に任ぜられ、江戸に出仕。文久3年（1863）帰藩。のち明治6年（1873）東京に移住し、ロシア語の私塾など経営したが、明治9年（1876）に歿する。歳77。

小野寺丹元の医師としての業績は別として、こと蘭学・露学における活動と実績、さらに養賢堂におけるロシア語教育の実態を示す資料はきわめて少なく、戦前・戦後にかけて精力的に仙台藩の医学・蘭学を調査・研究した山形徹一氏の論攷^{註7)}の域を超えることは難しく、以前不明とすべき点が残っている。筆者は基本的に山形氏に従いつつ、今次ロシア学に関わるごく一部の資料を探訪し調査を行なったにすぎない。

伊達文庫中のロシア語書籍

養賢堂の露学がいかなるものであるかを窺うよすがとして、伝存するロシア語書を調査した。宮城県図書館伊達文庫には計10点の露書が蔵されていることは既に述べた。D242からD251の番号を付されているのがそれである。養賢堂由来の書籍には「仙臺府學圖書」の印類を有するというが、これに該当するのは10点中、D242からD247の6点である。今回閲覧を許可されたものは、次の6点である。以下その報告であるが、はじめに日本語通名を示し、()内に旧分類番号、上述印類を有する場合には番号前に*印を付し、ついでロシア語タイトルを旧正字法によって示す。番号の若い順に掲げる。

- 1) 航海測量書 (*D242) : Курсъ Навигаціи для воспитанниковъ Морскаго Кадетскаго Корпуса. Составилъ Лейтенантъ П.Вальрондъ. 1861г. Въ Литографіи Іо. Прохорова.
- 2) 魯西亜幾何学書 (*D243) : Начальная геометорія составленная Капитаномъ-Лейтенантомъ Θ. Веселаго. Санктпетербургъ, 1853.
- 3) 航海二用ユル天文書 (*D244) : Астрономическія средства кораблевожденія. Составилъ С. Зеленой, Санктпетербургъ, Въ Типографіи Морскаго Кадетскаго Корпуса. 1861.
- 4) 物理学書 (*D246) : Руководство физики. Составилъ Академикъ Э.Ленць. Часть II. Санктпетербургъ. Въ Типографіи Императорской Академіи Наукъ. 1851.
- 5) タチシチェフ仏魯辞書全2冊 (D249) : Полной французкой россійской лексиконъ, съ послѣдняго изданія Лексикона Французской Академіи на Россійской языкъ переведенный. Второе изданіе, рачительнѣйше сличенное съ французскимъ оригиналомъ, исправленное и дополненное Статскимъ Совѣтникомъ И. Татищевымъ. Томъ I. А-К, Томъ II. Л-З. Въ Санктпетербургѣ, 1798. Печатано въ Императорской Типосрафії, у Ивана Вейтбрехта. ; [見開き左扉に] Dictionnaire complet François et Russe composé sur la dernière édition de celui de l'Académie Française. Second édition soigneusement confrontée avec l'original françois, corrigée et augmentée par Mr. J. de Tatischeff, Conseiller d'Etat. Tome I. А-К., Tome II. Л-З., à St. Petersburg, 1798. De l'Imprimerie Impériale chez J. J. Weitbrecht.
- 6) 魯国史 (D250) : Русская исторія. Н. Устрялова. Изданіе пятое, исправленное и дополненное историческимъ обзорѣніемъ царствованія Государя Императора Николая I. Съ 5 картами и 45 планами. Часть первая. Древняя исторія. Санктпетербургъ. Въ Типографіи Аполлона Фридрихсона. 1855.

このうち養賢堂由来を示す印記を有するのは1)～4)の4点。未見のD245、D247にも同上印が捺されているようだ。丹元が露学教授として在仙期間中(1849-1859)に養賢堂へ購入された可能性があるものは、D243・D245・D246だが、D251もあるいは丹元がかかわったのかも知れない。5)については後述するが、いずれにせよ海軍に関係する書物が多いことは、先に述べた仙台藩による軍艦建造の事実

とかかわりを有すると思う。その関係の書はロシア帝国海軍幼年学校の図書が多く、使用の形跡が判然としており、学習・研究用であったのではないか。

丹元のロシア語研究という観点から最も興味ぶかいのは5)である。そのタチシチェフ仏魯辞書は保存状態がよく、美麗とさえいえる。

下述の商館長よりの譲り受け時点での原装か。書誌的な事項をまず述べる。第1・第2巻共に茶色革表紙。表紙に細い金線を廻らす。背は黒革地に6つの赤革の横縞を配し、それぞれ別様の金箔押し模様をもち、中央の楕状紋中に巻数をアラビア数字で箔押し。その上の第2段目に〈Dictionnaire/de Tatischeff〉と金箔押し。大きき第1巻、23×14.5cm前後、第2巻、22.5×14.5cm前後。厚さ各々7cmと6.5cm前後。2巻共表紙の次に青緑のマーブル紙あり。第1巻遊び紙白紙前のマーブル紙ウ中央に〈俄羅斯語書 二冊〉の墨書貼り紙、養賢堂時代のものか。遊び紙オにインクによる2種の書き込み(後述)。同ウ白紙。ついで見開きで左に仏文タイトル、右に露文タイトルが続く。後者上端に露文書き込み。同ウは白紙。次に序文等Ⅰ～Ⅷページ。Ⅰ～Ⅱは左右2段組みで左欄に〈Avertissement.〉の仏文、右欄に〈Предъувѣдомленіе.〉の露文。共に〈諸言〉の意。Ⅳ～Ⅶは書肆J. J. Weitbrechtの刊行書目、同工左右2段組み。Ⅲは独魯辞典の見本組み。Ⅷは使用略語一覧。ついで辞典本体1～957ページ。同じく2段組み。緑のしおり紐あり。本文所々に不審紙小片あり。第2巻目も造本同様。遊び紙オ上部に2行のペン書き込み。第1巻露文書き込みと同筆。遊び紙ウ白紙。本文は1～858ページ。ただし1はインクによる書き込み。本文中不審紙多数、特にPの部分に顕著。270-271ページ間に〈無〉字の和紙小片。本文末の遊び紙は上端が欠損。遊び紙ウのど下端に〈蘭佛/式(?)号〉と第1行墨書き、第2行朱の付箋を貼る。あるいは下げ札か。しおり紐なし。両巻共に料紙はやや厚手、当時常用のもので透かしなし。なおこの伊達家本は、現在第1巻が一橋大学図書館に、第2巻が静岡県立図書館葵文庫に別れて伝存する旧幕府天文台本と同一再版本である。旧幕府天文台本は、ゴロヴニンらの釈放時、ゴロヴニン所持本をしかるべく代価を払って、馬場佐十郎を介して譲渡された貴重書である。

上述書き込みは重要である。未報告部分もあるので改めて述べる。インクによる書き込みはロシア語によるもの3箇所、オランダ語によるもの1箇所の計4。後者は報告済みで、丹元所有の証左となるものである。4者の位置は、まず第1巻遊び紙上端に露文(Aとする)、その下に線で区切って蘭文(B)、ついでロシア語タイトルページに露文(C)。第2巻遊び紙に露文(D)。A・C・Dは同筆、位置からみてこの書の最初の所有者によるか。Bは第2の所有者とみられる。以下ロシア語から検討する。[]内は訳。

Aは3行。

A) Эдуардъ Августусъ Манглесъ / Алхангельскъ / 22 Іюня 1808 Года [エドゥアルド・アウグストゥス・マングレス, アルハンゲリスク, 1808年6月22日]

Bは1行のみ。

B) Эдуардъ [エドゥアルド]

Dは2行。Aと同文。

D) Эдуардь Августуь Манглесь / Архангельскъ 22 Июня [sic] 1808 Года

〈エドゥアルド〉以下は英国人名Eduard Augustus Mangles。未詳。この人物が当時対英貿易の拠点港であったロシアのアルハンゲリスクにおいて、刊行10年後のタチシチェフ仏魯辞典第2版を入手したと解される。

Cは6行である。

C) Ter gedachtenis van / het Opperhoofd / J: W: F: Van Citters aan / docter Gentik. / Decima den 26 December / 1833 [医師元適に対し商館長 J. W. F. Cittersの記念として、1833年12月26日出島 [にて]]

元適は丹元の号の一。よって1833年（天保4）出島にて蘭館長 Jan Willem Frederik Cittersから本書が丹元の手へ渡ったといえる。〈記念として〉とあるが、常套句であって、恐らく中山作三郎を介してCittersに相当額を支払い譲渡されたものであろう。1833年（天保4）は丹元が帰藩する前年にあたる。購入金は大概平泉を介して仙台藩から公費があてられていた可能性があるが、かくしてタチシチェフ仏魯辞書は天保5年（1834）以後、丹元の手許ないし養賢堂に留まり、今日に引き継がれたことになる。どの程度利用されたかについては不明というしかない。上述の如く保存良好で、本文中には不審紙等が含まれるものの、勉強を示す書き込み等は見当たらない。幕府天文台旧蔵本と比較するのは酷であるが、こちらは縦横無尽に利用された痕跡が歴然としており、これに比して伊達家本は余りにもいわば〈きれい〉である。

養賢堂の露学がいかになされていたかの実態は、残念ながらほとんど知るところがない。ただ丹元がその教授職にあったことは事実である。

丹元の著作若干

露学に焦点を絞り、小野寺丹元自身の訳述を含む若干の著作について調査・検討したことを述べた。周知のものが殆んどではあるが、新しい所見も加えたい。筆者が直接閲覧することができなかった資料は以下の5点である。

- 1) 佐賀県立図書館所蔵『魯西亜國史 一』(aとする), 『魯西亜國史沿革説 二』(b)
- 2) 静嘉堂文庫所蔵『魯西亜國史 卷之二／魯西亜沿革説 卷三四』
- 3) 早稲田大学図書館所蔵『魯西亜國字』
- 4) 一関市立博物館所蔵『新譯外國形勢畧乗』
- 5) 同上『遊浴日記』

1)は旧鍋島家本, 2)は旧大槻家本, 3)は洋学文庫本, 4)5)は山形徹一氏旧蔵本である。1)と2)は元来

同一本で、互に補い合うが、従来2)のみが知られていた。1) 2)については中山作三郎の『書留帳』中、湊長安宛書簡控えに興味深い記事が存する^{注8)}。織田毅氏によれば天保3年(1832)に書かれたと推定されるとする。とすれば、丹元が長崎滞在中のものである。

一小野寺玄適老無事ニ被罷在候、[中略] 同人とも申談専ら魯西亞風土記翻訳仕最早七十葉計り之本式三冊出来仕候、若御主家ともニ御入用も御座候ハ、追々差出可申様可仕候、[下略]

ここで言う〈魯西亞風土記〉の訳稿が1)2)の元本であろう。分量は1冊約70葉、2, 3冊とする。現存写本の分量と近似する。

1)に戻る。書誌的事項だが、a・bともに写本で、書名は各々表紙の書き題簽による。a・bともに表紙は濃紺の波形紋。a・bともに多くの朱筆あり。aは大きさ26.3×18.3cm前後。aに〈魯西亞國史 二冊〉の下げ札、背に〈一〇六〉の朱書。小口書きは右より〈魯西亞國史〉。表紙ウ内側に〈魯西亞國史 二本ノ内〉と逆さに文字が透けてみえる。よって表紙は後のものか。巻首内題は〈魯西亞國史序卷之一／中山武徳／小野寺將順／對譯〉とあり、続く本文初めに〈封疆〉の朱筆タイトル、次に〈○魯西亞領地ノ四境ハ〉と続く。墨附70葉、巻一と巻二の間に白紙1葉。毎半葉10行取り。印類はのど下に〈□□所藏〉(2字不読)、のど上に〈鍋島家藏〉、ともに陽刻朱印。aの内容を章題で示せば、次の通り。

○封疆／第二章 時令風土／第三章 驛站／第四章 戸口習俗／第五章 言語／第六章 教門

a巻二の巻頭は〈魯西亞國史序卷之二／中山武徳／小野寺將順〉とある。よって元来2冊であったものを1冊に纏めたか。表紙題簽と下げ札との齟齬は解消する。本文内容を示す。

第七章 學業／第八章 僧人民産／第九章 互市／第十章 権度／第十一章 錢貸／第十二章 沿革／第十三章 帝統／第十四章 尊号／第十五章 旗文／第十六章 神祠／第十七章 官職／第十八章 賦税／第十九章 兵備／第二十章 舟船／第二十一章 區分

最終章末に〈方言〉とあり、40余項に亘りロシア語単語を示す。さらに露里〈ウエルスト〉につき嘉永元年(1848)〈憂天生〉なる人物により、〈伊能氏〉〈次郎吉〉に依拠する按文を付す。

bはaと同体裁だが、虫損が多い。大きさ26.4×19.3cm前後。表紙右下に〈5/470〉の朱書き、後筆か。小口書きは右から〈魯西亞國史沿革説二〉。手は巻一に似るが、巻二は複数人か。全81葉。毎半葉10行取り。朱筆の入り多し。途中2箇所、葉の左端に朱太線で標示の上「**レイフランド**」「**イストランド**」志、〈**インゼルマンランド**」志 新都〉と朱書し、独立部分のごとく各々内題を有する。

bの巻首内題は〈魯西亞沿革説卷之二／歐羅巴魯西亞篇第一章 方域 [2字朱]〉、次に本文〈○東方ハ亜細亞洲ニ境ヲ接ス〉と始まる。印類は巻一に同じ。内容を列挙する。初め6葉に〈第一章方域

／第二章大河)。7葉オに上述の葉左端朱太線の標示。首に〈「礼弗蘭土」「伊斯土蘭土」篇卷之一此則千七百六十一年蘊齋亜ヨリ獲ル国名〔注双行〕／中山武徳／小野寺將順／對譯〉と内題。次に〈第一章〉とあり〈○ヘルトフドンメル […]〉と本文が続く。ただし章題を表示せず〈第十五章〉まで計42葉半。ついで同上の朱太線標示があり、その首に〈魯西亞國史卷之二／中山武徳／小野寺將順對譯〉とあり、タイトルとして〈印僞兒滿蘭土^{インゲルマンランド}〉(右傍朱線)とし本文が続く。〈国態〉を略述したのち、〈○都府ノ著キ地ヲ下章ニ挙ク〉としAからFまで各地誌をしるす。(なおA以下の洋字は漢字の如く書かれている)。Fの後半では外国人の多いこと、1750年の各種人口を挙げ、1760年には外国人の急増を具体的にしるす。さらに〈雪車〉、これに関するロシア語をあげ、又〈○其都府ノ政事甚タ善良ニメ厳格也〉と書く。その末は、錯誤によるものか〈第十一〉〈第十二〉の地名の条を掲げる。以上全31葉半。さらに裏表紙ウには〈第一〉～〈第十〉の新都サント・ペテルブルグの条を付加。ここで新都が〈北極出地五十九度五十七分〉、家数を〈凡ソ八千戸アリ〉等々しるす。

a・bの内容は上述中山書簡に言う〈魯西亞風土記〉であり、ロシア本国のことに新都の地誌であり、さらに地政学的翻訳であるとさえいえる。本文中の片仮名表記等々からオランダの原本から翻訳がなされたことは明確だが、その名はa・bのどこにも記されていない。1) a・bのさらなる性格づけは、2) との対照を経て行なう。

2) の書名は2行に亘り黄色表紙に直書き。第1行右下に小字で〈卷之一欠本〉(後2字朱筆)とある。写本1冊。大きさ25.2×17cm前後。巻首内題は〈魯西亞國史卷之二／長崎阿蘭陀譯司 中山武徳／東奥 小野寺將順／對譯〉。印類は2つ、のど下〈大槻氏印〉、その上に〈静嘉堂藏書〉、ともに陽刻朱印。毎半葉10行取り。全33葉。文字は整った楷書。本文ははじめのタイトルは〈印僞兒滿蘭土^{インゲルマンランド}〉、改行して墨筆印の下に1) bの内〈インゼルマンランド志〉と同文が書かれる。上述1) bの該所と内題は同じ。(ただしこちらは職名・出身地を付加)。注意すべきは1) bに載せるAからFの記事および裏表紙ウの〈第一〉～〈第十〉とF末に付加される〈第十一〉〈第十二〉の記事は、2) では順序が異なり、初めに〈第一〉から〈第十〉のサント・ペテルブルグまでを載せ、A～Fの洋字記号を伊～邊と変更してその記事を掲載する。邊の条末には〈雪車〉の記事を添え、その後には〈○十一〉～〈○十五〉の地名の条を載せる。これ迄墨附23葉半。2) は次に別料紙・別筆の全45葉が合綴される。仮表紙左端に〈魯西亞沿革説卷之三四〉と直書きの書名。巻首内題は〈魯西亞沿革説卷之三／長崎和蘭譯官 中山武徳／東奥 小野寺將順／對譯〉、次に〈物夜皮田而古ニ屬スル地^{ウエイボルグ}〉の章題をもち改行して本文を始める。毎半葉10行取り。墨附29葉半。

同綴後半の巻首内題は〈魯西亞沿革説卷之四／長崎譯司 中山武徳／東奥 小野寺將順／對譯〉、章題は〈莫斯科ニ關係スル地〉とあり改行後本文開始。はじめモスクワ全体の地理を誌し、次に第二としてモスクワの属領を〈第一〉～〈第十二〉と示し、最後に〈第四(ママ) 尼設兀陸土城邑ニ屬スル地〉で終わる。墨附全14葉半。巻末に〈大槻文庫〉の朱印。

1) a・bと2) はいずれも欠巻を有するが、両者の関係を確認しておく必要がある。内題と各内容を比較してみると次表の如くである。

旧鍋島家本 (1) a・b		旧大槻家本 (2)	
内題	内容	内題	内容
魯西亜國史序卷之一	ロシア全体地誌 第1章～第6章	\	
魯西亜國史序卷之二	ロシア全体地誌 第7章～第21章		
魯西亜沿革説卷之二	ヨーロッパ・ロシア地誌		
「礼弗蘭土」「伊斯土蘭土」 篇卷之一	レイフランド、イストラ ンド地誌		
魯西亜國史卷之二	インゲルマンランド地誌	魯西亜國史卷之二	インゲルマンランド地誌
\		魯西亜沿革説卷之三	ウエイボルグ属領地誌
		魯西亜沿革説卷之四	モスクワとその属領地誌

内題・内容が一致するのは〈魯西亜國史卷之二〉のみである。ただし2)において内容やや増加。他はそれぞれ欠けた巻とみれば——むろん全体は不明だが——作三郎・丹元が企図した訳書はロシア帝国全体とヨーロッパ・ロシアとりわけ新都に関する地誌、附録的なものとしてモスクワの地誌となるうか。1) a・bは計150葉程、2)が計80葉弱、うち33葉が両者に重複することになる。現存の実数は約200葉分とすれば、上記中山書簡の言及に近似してはいる。翻訳の原典がオランダ語のいかなる書か、その数は複数か、あるいはこれらの抜萃か、不明としかいいようがない。

2) 旧大槻本は、体裁からみて原翻訳の浄書本だろう。なおレイフランド、イストラ、インゲルマンランド、ウエイボルグは、今ドイツ語で示せばLivland (=リヴォニア)、Estland (=エストニア)、Ingermanland, Wiborg (=カレリアの一部)で、新都サント・ペテルブルグとその周囲の地方で、北方戦争勝利の結果ビョートル大帝がスウェーデンより1721年に割譲された土地である。訳者らの関心から新都建設の歴史・地理にあつて、逸することのできぬ事項であつたに相違ない。作三郎との共訳がいつなされたか写本に記載はないが、上述書簡が天保3年(1832)とすれば、この頃すでに大部分が成立していたといえる。なおシーボルト事件は文政11年(1828)に発覚した。

3)に移る。稀覯の一枚刷り。刊行地不明。丹元のロシア語を直接語る資料である。現在、宇田川榕庵筆『魯西亜字音考』末に折り込みで貼付・保存される。料紙28×44cm前後。匡郭内20.7×32.2cm前後。〈魯細亜國字〉と題し、改行して次のようにある。

順 按ニ魯細亜国ニ於ハ文字ヲ^{アスブカ}亜斯歩加ト稱シ又^{アルハベツト}亜兒法別杜又^{ボカバラ}薄加菟刺ト唱フ今左ニ列スル四體ハ
則チ平日書籍ニ鏤行スル者ナリ發頭大字ハ猶^{オランダ}喞蘭、「^首ホーフド^字レーツテル」ノ如クニメー文ノ
首ニ記シ鏤行小字ハ猶「^板ドリーユーク^字レーツテル」ノ如ク書中ニ通用ス今四體三十五字ヲ舉ル
左ノ如シ

ついで〈亜斯歩加四體〉と題して各々〈鏤行〉の〈發頭大字〉〈小字〉とに分類し、左より掲げる。各直立文字は発音ではなく文字名を片仮名で付す。その後こうある。

又捺ニ魯細亞ノ始祖ハ^{スラフアヘン}スラフ亜顯ノ種族ヨリ出ツ故ニ其文字ト言語ト亦是ヨリ由来ス^{スラフホニキ}スラフ復ニ設文字ハ魯学訓蒙中ニ載ス

天保戊戌臘月穀旦／小笠寺松洲藏梓印

印は陽刻朱印〈橘將順〉を捺す。天保戊戌は同9年（1838）。初学者向けの文字論だが、蘭学の心得ある者を前提としており、スラヴ語・スラヴ文字に言及している点が特色。ただ次の2点は不明である。〈Ж〉〈Ш〉〈Щ〉の名を〈イーヘテ〉〈カ〉〈カトカ〉とするが、特に後二者は奇妙。〈живѣте〉〈ша〉〈ща〉すなわち〈ジヴェーチェ〉〈シャ〉〈シチャ〉に近くあるべきで、誤刻の可能性大だが、後の2つはこう読まれたか。その二として〈魯学訓蒙〉は書名であろうか、一般的な語か。この一枚刷りは長崎遊学後の刊行であるが、丹元のロシア語の水準を計るには不足している。

4) は写本1冊。大きさ26×17cm前後。本文匡郭は縦19cm前後。茶の混じる灰色表紙、題簽なし。四周単辺の匡郭と柱のみを刷った料紙に書かれている。柱題は〈新譯性原約説〉、次に上魚尾、さらに〈有秀亭藏〉と刻す。いずれも未詳で、本書とは関らず、かかる料紙を用いて、上梓を意図して制作された浄書本か。全体を仔細にみると、何箇所か胡粉を塗った上での訂正が存在し、文字は整っているが板刻ではない。表紙の次に遊び紙。次に図2枚折り込み。第1の図は手書き匡郭外のど上に〈レンヂール〉(=蘭語rendier, トナカイ)と図名を示す。手書きの細密画にして彩色あり。雪原中樞を引かせたトナカイを中心に描く。匡郭内18.7×25.4cm前後。第2の図は上下左のみの書いた匡郭(25×36.2cm前後)に機那樹2種を手書き彩色細密に描く。図の余白は説明でうめられ、標題なし。第1の図は北アメリカに、第2は南アメリカに付随するもの。翻訳原典からの謄写であろう。次に〈例言〉2葉(後述)。毎半葉9行取り。例言中翻訳原典への言及なし。ただし蘭書であること明白。〈目次〉1葉。内容を知るために列挙する。

新譯外國形勢畧乗／亞墨利加洲目次／亞墨利加洲／北亞墨利加州 薄斯東兩都入註／所属之地／新斯箇譯蘭土／新沃旧郭／新沃兒郭 以前新亞繆期得兒沓繆／新忽由尹獨蘭土／墨幾失格明譯墨是可／新墨幾失格一名弗陸利沓／加陸利那／南亞墨利加洲／所属之地／郭伊杜

次に本文。巻首内題は〈新譯外國形勢畧乗／東奥 小野寺將順譯述〉。上欄に〈芝蘭書屋藏印〉の陽刻朱印、寄贈者山形徹二氏のものとのこと。本文毎半葉9行取り。全47葉。〈南亞墨利加洲所属之地〉の章末に〈弘化四菊花月十四夜五更譯了〉とある。そのウは白紙、次に〈郭伊杜〉の章2葉。訳了時弘化4年（1847）がなぜこの位置にあるか、不明。が、成立時とみる。本文は南北アメリカの歴史略・地誌で、当時未知であった両大陸への丹元の関心がみてとれる。かつての『魯西亞國史』の如きである。前述〈例言〉は、丹元の翻訳態度を知る上で重要。よって大意を述べる。かつて丹元は長崎の海雲山に寄寓。一日、黄泉禪師の『碧巖録』の講筵に列なる。禪師曰く、文字は「葛藤」でそれなくば意伝わらず、さりとて文字に依らざれば伝わらず、と。その上で不立文字の俗解を退ける。経文を説

く時の志は、経文に従って文字外の深意を得、かつ文字の義に反しないことだ。漢訳仏典中同書で異なるは、直訳と義訳の故。義訳は分かりやすいが、直訳はしからず。原文あるがために分かりにくい直訳をせざるをえない。これを当世風に訳すことは原文に通じながらも、巧みに文章を操る者のみである。丹元は禅師の言説に大いに心酔し、〈今予ノ翻譯二期スルトコロ原文ニ反セスメ人意ニ協ニアリ然レモ文ノ佳ナラサルハ原書ニ就テ止ヲ得サルナリ〉と綴る。丹元の翻訳態度は原文に反せず衆人に解し易い訳を選ぶということで、義訳に傾いているとみなせる。しかし当時の漢文中心の作文にあつての制約、——丹元も初め儒生であった——というよりも当時の水準から悪文と評されようとも、異言語の原文に忠実たんとするからだと言断りもみせている。当時の翻訳者に共通する問題意識の吐露であろう。彼らは翻訳作業を通じて、日本語表現の可能性を探る実験の場に立たされていたのである。なお4)の書名中、〈畧乗〉とは〈略記事〉をいうか。

5) はまさに日記である。4) 同様山形氏寄贈本の由。写本1冊。大きさ25.2×16.9cm前後。紙縫りの仮綴じ。表紙に直書きで〈遊浴日記〉。表紙を含め6葉、うち墨附4葉半。内題は〈遊浴日記／橘将順述〉。のど下に陽刻朱印が捺されるが、不読。本文は筆印の下に〈天保二年三月十一日〉と始まり、〈四月朔〉に終わる。全文漢文体で書かれ、朱の加点あり。3葉目辺りから右肩上がりとなり別筆の感もあるが、小冊ゆえに同筆か。さらに自筆稿本か。天保2年(1831)、長崎遊学中の著作だが、温泉紀行のジャンルに属するものであろう。巻末に本書は元来日記の抄であり、然るべく文の批正を乞うている。長崎近傍から島原を経て熊本に至り、途中処々の温泉に宿泊し、長崎に引き返す旅であった。元来、丹元は大槻平泉の下で儒生であり、嗜みとしてかかる著作の存在も当然といえる。

丹元の著・訳とかかわらぬ事柄を付記する。丹元の学問環境を知る上で、ひとつの手掛りとなる記事がある。昭和3年(1928)「日本医史学雑誌」1141号に掲載された武藤一郎の〈露西亞学者小野寺丹元を中心とする書簡(日本医史学会六月例会席上談話)〉と題する2ページの小文である。丹元とその男・魯庵を紹介し、目録を掲げる。魯庵のものも混じるが、佚失もあると思われるので、一つ書きとなっているが、注解部分も略し必要部分のみ引用する。計24条：

露西亞国王の献上書訳文／洋書調書通達／外国風説書通詞上申せしもの／大槻磐水の重訂解体新書の出版を祝したる詩文を門下生に与ふるもの／古賀侗庵尺牘五通／大槻習齋尺牘／大槻礼助尺牘／小石元瑞尺牘／品川永保尺牘／手塚律蔵尺牘／足立栄安尺牘／石田卯兵衛尺牘／宇田川榛齋尺牘／吉雄常三尺牘／伊藤玄朴尺牘／杉田玄端尺牘／高須松亭尺牘／赤沢寛堂尺牘／栗崎道巴尺牘／河本幸民尺牘／市川斎宮、杉田玄端、下ジ龍之助連名尺牘／中山作三郎尺牘／石川玄水処方／小野寺丹元及び魯庵の詩稿三通

錚々たる蘭学者の一群である。当然ながら丹元は蘭学の徒であった。上記中〈露西亞国王の献上書訳文〉〈洋書調所通達〉は惜しまれる。次節とのかかわりからである。

丹元と蕃書調所，後継者魯一

馬場と足立亡き後，天文台のロシア語はどうであったか。馬場は文政5年（1822）歿，足立は弘化2年（1845）歿。その状況の一端を示す資料がある。嘉永6年（1853）9月天文方山路弥左衛門から幕閣に宛てられたとみられる上申書である。^{註9)} プチャーチン使節の露文書簡和解を命じられたが，漢文訳のみ添付され蘭訳がないため，露文のみでは不可能であると訴え，次にこう述べる。〈[上略] 兼て御預り蘭書之内ニ，魯西亜辞書御座候得共，独乙語と魯西亜語との辞書ニ付，右辞書にて独乙語を引出し，右を以独乙語と和蘭語との辞書之内，阿蘭陀にてハ何々と申儀を相弁へ，和解仕候義ニ御座候処，右辞書之内ニ無之語多く，且先年足立左内馬場佐十郎取調候魯西亜辞書之内をも取調候得共，是又右辞書之内ニ無之語多，何分魯西亜文而已ニては，和解出来不仕候ニ付，此段申上候，以上〉。馬場・足立らのロシア語伝習は不首尾であったと解される。だが，原平三『幕末洋学史の研究』（1992年）の〈市川兼恭〉の章（元来，昭和15～19年執筆）が引く元治元年（1864）11月改正の「開成所稽古規則覚書」中には蘭・英・仏・独に並んで〈魯西亜学〉の学科目が上げられているから，後復活したとみられるが，誰が関係したのであろうか。

丹元は安政6年（1859）蕃書調所教授手伝となる。『日本教育史資料 七』〈洋学〉の章中〈安政六年〉条に，〈[上略] ○三月廿七日村上英俊小野寺丹元出役教授手伝トナル〉とあり，さらに〈教授方〉条中，村上英俊の次に〈松平陸奥守藩士小野寺丹元〉とある。注から〈書籍調等〉に携っていたと読めるが，ロシア語力を評価されてのことであろう。事実丹元は露国初代領事ゴシケーヴィチ（Ю. А. Гошкевич, 1814-1875）が持ち来った露帝国書の翻訳を行なっているのである^{註10)}。東京大学史料編纂所所蔵『安政六年己未 魯國往復書翰』^{註11)}の冒頭にゴシケーヴィチの添書訳文さらに下に引用する文と同内容の訳文がまずあり（共に訳者名不記），ついで〈魯文和解〉と但書があって以下の文が載せられている。

日本高貴の政廳諸君に呈す

千八百五十八年第八月九日及ひ十七日アヂユータント，ゼ子ラル，アドミラル官名ガラーフ爵名エウゼニエム，プウチアチンと日本の全権諸公と取結ひたる條約の第十九條に従ひ吾大皇帝今方に親ら取究の盟書に題名し而て余亦是に對し吾か華押及ひ帝國の璽章を押したり○此取究書の取替。は此方より箱館のコンシユル議定官たるゴスケキツチに委託す○右に云ふ取替は」ガラーフ爵名プウチアチンと日本全権諸公と應接して取究めたる如く江戸に於て之を為へし」余此に全く誓ふことあり此大儀を挙るハ愈々兩國政府の親交と交儀を堅くし且兩國臣民の幸福を加倍すへしとす

千八百五十九年第三月六日

シント，ペイトルスブルグに於て
外國事務宰相プリンス爵名 ア・ゴルカコッフ」

小野(ママ)丹元譯

末の〈小野〉は〈小野寺〉と解す。明瞭な訳文である。よって全文を引用した。

蕃書調所での在勤期間は不明である。文久3年(1863)帰藩とされるから、3・4年程の江戸出仕であったか。しかしこの時期が丹元にとってロシア語力が最も評価され発揮された時であったと評しうる。

丹元のロシア研究は彼の養子である魯一(魯庵)^{注12)}により継承された。本格的なロシア語の学習は箱館のニコライの許で行なわれたと考えるが、魯一は明治3年(1870)ロシア留学、同7年(1874)帰国、開拓使御用掛となり多岐に活躍した。次節以下紙幅の関係上簡略に述べる。

ニコライと仙台藩出身者

ニコライ(Николай, 本名 И. Д. Касагкин, 1836-1912)は文久元年(1861)にロシア領事館付き主任司祭として箱館に着任。一方仙台藩から当時エゾ地に多数の流入があった。養賢堂出身者としては笹川定吉がおり、ニコライに受洗。後仙台正教会に力を尽くした。詳細は専書に譲るが、ロシア語に限定すれば、ニコライの許に集った人々のうち小野莊五郎が教理研究上ロシア語学習は必須と考え実行する。並行して漢訳聖書は儒者真山温治が和訳を行なう。ニコライは小野を補助とし、真山と共に露和字典を編する。これは後『寿露和里』として、神田のニコライ塾において競って用いられた辞書の前身か。(共に筆者未見)。ニコライはゴシケーヴィチの『和魯通言比考』(Япоксско-русский словарь, ..., СПб., 1857)を愛用したというから、上記の辞書にも活用されたであろう。ニコライ一時帰国の間より小野寺魯一はロシア語学習を開始。1867年(慶応3)の年紀を有する『魯語和譯』(Русско-Японские Разговоры.)はニコライの著した部門別会話書であるが、小野寺魯庵と江戸の三輪魯純、加賀の嵯峨善次郎が全篇日本語に対訳する体裁をとる。半紙本袋綴1冊で、墨附110という^{注13)}(筆者未見)。ニコライは、終生師として敬愛した大曲の木村謙齋から儒学等万般を学び、のち聖典翻訳に際しては大坂の漢学者・中井木菟磨を協力者と仰いだが、箱館時代当初漢訳聖典の訓点・翻訳に勤しんだ真山温治らの努力は、ニコライの聖典和訳事業にとり礎として記憶されてよからう。魯一はロシアに留学してさらなる研鑽に努める。

付説 仙台藩と升屋

大坂の豪商升屋は仙台藩の蔵元を務め、藩の財政に多大な貢献をなした。同藩との関わりは宝暦年中、山片家二代重賢より始まったとされるが、二代歿後店が傾いた折、三代重芳を支え店の復興に功あったのは番頭小右衛門である。小右衛門は『夢之代』(享和3年, 1803)を著わした山片蟠挑。彼は海保青陵に〈妙手〉となかば揶揄された〈サシミ〉を案出し、莫大な利益をあげた。^{注14)}しかし仙台藩は升屋を尊重し、藩主自ら『環海異聞』全16冊の善本を下賜している。明治5年(1872)山片家八代重明は本宅跡地を学校建設のために、併せて和・漢・洋の蔵書をも寄贈する。後者が〈愛日文庫〉の核をなす書籍だが、上記善本の他、仙台藩に関わるものとして山村才助『訂正増譯采覧異言』全14冊

も存する。愛日本は通行本と異なり、彩色世界地図を含み、体裁から推して官庫に収めるべく作成された謄録本に属し、別途師の大槻玄沢を介して仙台藩に献上された一本の浄書本であろうか。仙台藩による学を好む升屋への学問的返礼と考える。

おわりに

仙台藩のロシア学は、藩の始めからの流れとその役割に沿って、必然的に開始された。直接的には藩校養賢堂学頭大槻平泉の発意により小野寺丹元が養成され、丹元ひとりが担ったといってもよく、幕末の短期にしか亘らなかった。しかしよくその業を成したと評してよい。学は魯一によりひき継がれるが、ロシア学は文化・外交面に大きく広がりを見せる。チェーホフは『サハリン島』(Остров Сахалин, 1895)の注中に日本人のロシア語力を賞しこう記す。^{注15)}〈[日本領事よりの]この書翰は、日本の青年秘書官らが短日月の間に露語研究に関して示しつゝある進歩をも物語るものである。同じく露語研究中のドイツ将校やロシア文学作品の翻訳に従事中の外国人たちの手紙は、これとは比較にならぬほどさである。〉かくて、主に地政学的見地からの制約をうけつつ、日本のロシア語・ロシア研究は続けられてゆくことになる。

【謝辞】

本稿を成すにあたり下記の諸氏・諸機関に協力をえました。英文レジュメはM・ピーターセン氏の校閲をえました。記して謝意を表します。

イサベル・ファン・ダーレン 石橋道秀 織田毅 菊池亮一 佐々木和博 相馬美貴子 丸山悦治
愛日文庫 一関市立博物館 旧函館図書館 佐賀県立図書館 静嘉堂文庫 鍋島報効会 早稲田大学図書館

注 (*紙幅が尽きたので、参考文献共々最少とする。)

- 1) 寛政2年(1790)―天保9年(1838)若年寄、主に対外問題担当。仙台藩主伊達宗村の八男。近江堅田藩主、のち下野佐野藩主。仙台藩・佐倉藩後見役。
- 2) 『通航一覽』巻273～。参考文献9参照。
- 3) 安政2年(1773)―嘉永3年(1850)。名、清準、通称民治。文化7年(1810)仙台藩儒。
- 4) 寛政12(1800)―明治7年(1874)。名、将順、通称主一郎・玄(元)適・丹元、号松洲。参照：長田勝郎〈日本ロシヤ学の祖、中里の人 小野寺丹元について〉、岩手県南史談会「会報10」, 1957；山口興典〈箕作省吾と交友関係〉、同上『研究紀要 11』, 1982。
- 5) 天明5年(1785)―天保15年(1844)。長崎通詞。号、武徳。『ドゥーフ・ハルマ』編纂に助力。シーボルトの鳴滝塾に場所を提供し、基をつくった。
- 6) 文化8年(1811)―慶応元年(1865)。名、清格。通称格治。平泉の長男。
- 7) 参考文献1を見よ。さらに参照〈仙台藩医学校沿革史稿(上・下)〉、「仙台郷土研究」14巻3-5号, 昭和19年3-5月；〈養賢堂の沿革とその洋学の発達(一・二)〉、同上15巻10, 11号, 昭和21年10, 11月。
- 8) 新畑末男〈史料紹介 中山文庫「書留帳」〉、織田毅〈[解説] 中山文庫「書留帳」について〉、「シーボルト

記念館 鳴滝紀要」第22号, 2012年。

- 9) 『大日本古文書 幕末外国関係文書之二』一五三。
- 10) 参考文献11参照。
- 11) 東京大学史料編纂所蔵史料目録データベースによる。
- 12) 仙台藩士岩崎勇蔵の子にして養子となる。文彦に従えば明治28(1895)歿。
- 13) 松村明〈幕末期ロシア語学書についての覚書〉, 「文学・語学」第33号, 昭和39年9月, 参照。旧函館図書館のペン書き筆写本は未完。
- 14) 『日本思想大系 本田利明 海保青陵』中『新壘談』。参照: 末中哲男『山片蟠桃の研究』, 清文堂, 昭和51年。
- 15) А. П. Чехов, Соб. соч. в 12-и томах, Т. 10, 1963, стр. 241. 訳文は中村融訳『サハリン島』下巻, 岩波文庫 1988(第3刷)による。

参 考 文 献

(*本文, 注で述べたものは再掲しない。)

- 1) 『仙台市史 第4巻別篇2』(昭和26年)中とくに山形敏一〈仙台藩に於ける医学及び蘭学の発達〉; 重久篤太郎〈仙台の洋学〉。同第10巻(昭和31年)。
- 2) 『岩手県史 第4巻 近世篇1 仙台藩附・一ノ関藩』, 昭和38年。
- 3) 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』I-V, 早稲田大学出版部, 昭和51-57年。
- 4) 『日本教育史資料 壺』, 明治23年, 文部省總務局; 同七, 明治37年再版, 富山房。
- 5) 『伊達文庫目録』, 昭和62年, 宮城県図書館。
- 6) 『愛日文庫目録』, 昭和61年, 大阪市立愛日小学校。
- 7) 『嘉永以前西洋輸入品及参考品目録』, 明治39年, 東京帝室博物館。
- 8) 杉本つとむ他『環海異聞 本文と研究』, 1986年, 八坂書房。
- 9) 田保橋潔『増訂近代外国関係史』, 昭和18年, 刀江書院。
- 10) 石川喜三郎『日本正教伝道誌 卷之一, 卷之二』, 明治34年。
- 11) 秋月俊幸〈明治初年のギリシャ正教迫害顛末〉, 「窓」34, 1980年10月, ナウカ。
- 12) 中村健之助・中村喜和・安井亮平・長縄光男『宣教師ニコライの日記(Дневники Святого Николая Японского)』, 1994年, 北海道大学図書刊行会; 『宣教師ニコライの日記抄』, 2000年, 同上。
- 13) 『日本人とロシア語 ロシア語教育の歴史』, 2000年, 日本ロシア文学会。
- 14) 沢田和彦『近代日本とロシアの文化交流史に関する実証的研究』, 2014年(平成22年度~平成25年度科研費研究成果報告書)。
- 15) F. W. Putzger, Historischer Schul-Atlas, Bielefeld-Leipzig, 1925.

フランス中央集権化における新規獲得領土の影響
1453年 - 1715年
—— 家族人類学的考察 ——

鹿 島 茂

L'influence des territoire acquis depuis 1360 sur la centralisation de la France 1453–1715

— réflexions anthropologiques familiales —

KASHIMA Shigeru

Pourquoi et comment la centralisation de la France s'est-elle réalisée si aisément au temps de Louis XIV?

On dit que c'est grace aux efforts acharnés des rois, de Louis XI à Louis XIV. Mais en analysant les situations historiques de ce temps, on s'aperçoit que la centrisation s'est effectuée presque automatiquement à cause d'une structure latente des territoires nouvellement acquis depuis la Guerre de Cent ans.

Ces territoires acquis correspondent quasiment, selon les termes d'Emmanuel Todd, aux régions de la famille-souche tandis que les territoires royaux d'avant la Guerre s'accordent aux régions de la famille nucléaire égalitaire.

Une telle clivage anthropologique s'accentue au mesure que la vénalite des offices introduite en France sous la règne de Francois Premier se généralise depuis l'Edit de Paulet d'Henri IV.

Parce qu'à cette époque-là les pères bourgeois dans les régions provinciales de la famille-souche achètent de plus en plus des offices au Parlement pour leur fils-cadets afin de donner d'avance leur part héréditaire, bien que les pères dans les régions parisiennes de la famille nucléaire égalitaire sont plutôt indifferents à la vénalite des offices.

Une telle difference pourrait se jeter aux yeux si on cherche les origines familiales des 13 ministres de Louis XIV. 9 ministres sur 13 sont issus de la noblesse-robe des territoires nouvellement acquis, c'est-à-dire qu'ils ont pour origine la famille-souche, exepté Michel Le Tellier dont l'ancêtre est bourgeois de Paris, donc de la famille nucleaire égalitaire.

Ces 9 ministres sont très capables, habiles,mais très obéissants au Roi-Soleil ainsi que les fils de la famille-souche sont très dociles à leur pères.

Donc, on peut en conclure que la centralisation de la France s'est presque automatiquement réalisée à cause de la structure anthropologique pré-existante dans les territoires nouvellement acquis.

《特別研究第1種》

フランス中央集権化における新規獲得領土の影響 1453年－1715年

— 家族人類学的考察 —

鹿 島 茂

序論

フランス史の最大の問題の一つは、フランスがいかにして、また何ゆえに中央集権の国家になったか、ということではあるまいか。

なぜなら、ルイ十四世の時代に中央集権化を成し遂げたフランスは大革命という最大の試練があったにもかかわらず、その後も中央集権国家であり続け、中央集権体制は「フランスは一にして不可分」という共和国原理を支える国家システムになっているからである。

だが、フランスの中央集権化が、近代日本のそれのように島国で単一言語、ほぼ単一民族という地理的環境から必然的に生まれた統治システムだったかと問うと、答えは否定的とならざるをえない。

というのも、アンドレ・シーグフリートからシオドア・ゼルディン⁽¹⁾に至るフランス文化論は、どうしてこれほどまでに多様で多文化的な風土と文化を持つ国が分裂もせずに統一を保ってこれたか不思議でならないとする点では一致しているからだ。つまり、フランスの中央集権化は地理的環境によるのではないのである。事実、歴史家の多くはルイ十三世の宰相リシュリューが本格的に中央集権に着手して以来、ルイ十四世が最終的にこれを達成するまで、多くの困難が伴ったことを指摘している。また、近年では、ルイ十四世による中央集権化はかならずしも完璧なものではなかったという意見もある⁽²⁾。

だが、そうした不徹底さ、不十分さにもかかわらず、ルイ十四世の時代に絶対主義的統治の中核として採用された中央集権制は維持され、いやむしろ強化され、大革命、ナポレオン帝政、王政復古、第二共和政、第二帝政、第三共和政という体制の変遷を経た後も、根幹においては変更がなされぬまま今日に至っているのである。

というわけで、われわれは問題を次のようなかたちで設定してみなければならない。

すなわち、地理的には中央集権に「向いていない」ように見えるフランスが、絶対王政期に中央集権体制を確立するや否や、この体制にむしろジャスト・フィットしてしまったのはなにゆえか、と。

この問題を解くには、まず中世から絶対王政期に至る歴代の王および宰相たちの中央集権化の努力ないしは野心について検討しなければならない。

具体的にいえば、英仏百年戦争後フランス王国の領土拡大に奔走したルイ十一世に始まり、ヴァロワ＝アングレーム王朝の開祖フランソワ一世を経て、ブルボン王朝の歴代の王（アンリ四世、ルイ十三世、ルイ十四世）と宰相・大臣・長官たちによる中央集権化の努力を概観する必要があるが、これまで、多くの歴史書では、中央集権化は、アンリ四世からルイ十四世に至る王の「意思」によるものとされてきた。

しかし、ブルボン王朝の中央集権化政策を分析してみると、浮かび上がってくるのは、歴代の王たちの「意思」というよりも、むしろ、多元的な領土を抱え込んだがために、王たちには中央集権化以外に選択肢がなかったという事実の方なのだ。

しかし、本稿において問題設定としたいのは、こうした中央集権化の「必然性」ではない。むしろ、王たちがそうした必然性に迫られたとき中央集権化を容易にするような要素が拡大した領土の中に「構造的」に含まれており、それが次第に顕在化してきたのではないかという視点を導入してみたいのである。

換言すれば、領土拡大は中央集権化という課題をブルボン王朝の王たちに突き付けると同時に、その解決策も同時に王たちに提供したのではないかという疑問なのである。

では、このように考える根拠はいったいどこにあるというのか。

それは、ブルボン王朝の歴代の王たちが取り組んだ中央集権化が、領土拡大から150年もたたないうちにほぼ自動的に成し遂げられたという事実の中にある。どうやら、拡大領地に潜在的に存在していた中央集権化の加速要因が150年の間に成熟してきて、一気呵成にこれを達成したと見えるのである。

では、その中央集権化の加速要因とはいったいなんなのだろう。これが本稿における第二の、しかし、最も重要な問題設定である。

われわれは、この中央集権化加速要因を家族システムの中に探りたいと考える。というのも、領土拡大は多様な風土と言語・習慣の地域を王領に組み込んだばかりか、新しいタイプの家族類型の人々を臣民として取り込んだはずなのだが、どうしたわけか、これまでのフランス史研究においてはこうした新領土の家族類型が与えた影響というものがないと検討されてこなかったからである。

だが、それではこの仮説をどのように証明すればいいのだろうか。

まずは、ルイ十四世の政府において官僚として重きをなした人物の系譜を溯り、その祖先がいかなる地方の、いかなる階層の出身であったかを調べることから始めたい。そして、その結果をマッピングした地図を家族システムの分布図と照合して、どの地方のどの家族類型の住民が最も多くの官僚を政府に送り込んだかを調べることにしたい。

このさい、手掛かりとなるのはいわゆる法服貴族と呼ばれる官僚たちの系譜図であるが、これは近年インターネットの普及により非常に入手しやすくなった⁽³⁾。また、家族システムの類型に関しては、フランスとイギリスの家族人類学研究者たちが確立した家族類型を採用することにする。

ブルボン王朝の王たちや宰相たちがいくら中央集権化にやっきになったとしても、手駒となって働いてくれる有能な官僚がいなければ、中央集権化は成就しなかったはずである。

問題を解く鍵は、ブルボン王朝における新官僚層の分析、とりわけその家族システムの分析にかかっているのである。

第一章 英仏百年戦争後のフランス領土拡大

英仏百年戦争を大きく前半と後半にわけた場合、その境目は、ロンドンに捕虜として幽閉されていたジャン二世の摂政である王太子シャルルがイングランド王エドワード三世との間で1360年に結んだブレティニー＝カレー条約に当たる。本稿においては、図1として掲げた条約締結時のフランス王領を基準にして、以後の領土拡大を比較してゆくことにする。その場合、国王親族領（apanage）⁽⁴⁾をカウントせずに純粹にフランス王領と認められるのは以下の通りである。

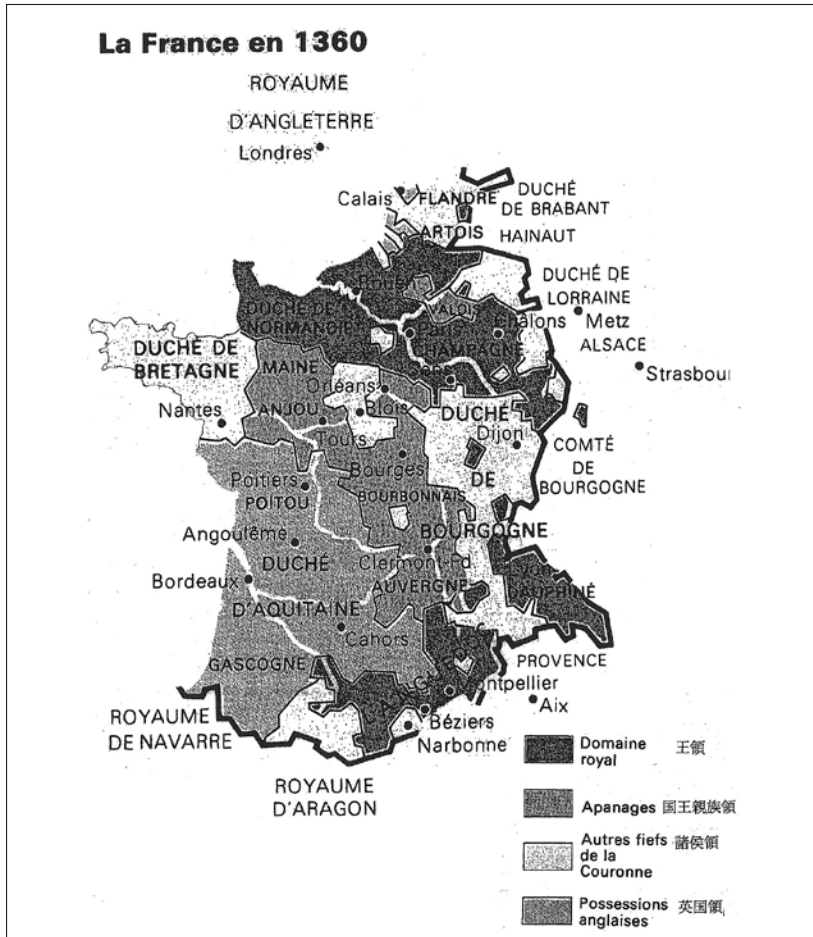


図 1

(«Chroniques de la France et des François» 1987, Paris, Larousse)

まず、パリを中心としたフランス王国発祥の地イル・ド・フランス。次に2番目の王領であるシャンパーニュ伯領、ルーアンを中心としたノルマンディー公領、飛び地のラングドックとドーフィネだけである。ブルターニュとブルゴーニュという二つの大きな公爵領はまだフランスに帰属せず、アキテーヌ（ギユイエンヌ）とガスコーニュという南仏の大きな土地はイングランド領である。プロヴァンス伯領も独立国であった。国王親族領としては最も古いオルレアネも王領から独立していた。全体に王領はフィリップ＝オーギュストの時代に逆戻りしたかのように縮小している。

ところが、93年後の1453年にはフランスはボルドーを陥落させてイングランドを大陸から放逐し、百年戦争を終結させることになるのである。この1453年という百年戦争終結の年に、イングランド領だったアキテーヌ（ギユイエンヌ）とガスコーニュという二つの大きな領地が回復されたのがフランスの領土拡大の始まりである。これに続いて、1461年に即位したルイ十一世は、在位中、領土の拡大につとめ、国王親族領や大諸侯領（principauté）の領主が継子を残さずに没した場合はすかさずこれを没収して王領に編入するという方法で、メヌ伯領、アンジュー公領、ブルゴーニュ公領、プロヴァンス伯領、さらにはピカルディーなど多くの王室親族領や大諸侯領を併合することに成功した。

さらに王位を受け継いだシャルル八世はブルターニュ女公爵アンヌ・ド・ブルターニュとの強制結婚でブルターニュ公領を1498年に併合。その結果、フランスはほぼ現在のエクサゴヌ（六角形）に近い領土を所有することになったのである。

これら百年戦争後の新規獲得領土は、1360年のそれと比べると実に四倍近く、いかにフランスがヨーロッパの超大国へと変身したかがわかる。しかし、その反面、新規獲得領土がイル・ド・フランス中心のパリ盆地ととあらゆる面で異なっていたため、フランスは王権の確立と中央集権化のためにあらゆる対応を迫られることとなるのである。

第二章 戦費調達と官職売買の開始

こうした状況の中で王位に就いたのがヴァロワ＝アングレーム王朝の開祖フランソワ一世である。

フランス史においては、フランスへのルネッサンスの導入者、あるいは神聖ローマ皇帝カール五世との戦争で知られるフランソワ一世は、高等法院を中心とする司法・行政組織の整備および軍隊の近代化の面では一定の効果を上げたが、これらのシステムの維持のために不可欠な財政の面では、改革は中途半端なものに終わらざるをえなかった。というのも、中央財務局（Trésor de l'Épargne）を設けて歳入と歳出の一元化を図るかたわら、タイユ税の増額や入市関税の強化など一連の増税策を行ったが、中央から徴税官を派遣して直接税を強制徴収を行うという強権発動にまでは至らなかったからである。つまり、中央集権化に最も必要な財政改革は志半ばで終わったのである。

ところが、これらの中央集権システム構築が思うにまかせないことから、フランソワ一世がいわば苦し紛れに打ち出した方策がやがて思わぬ効果をあげてくることになる。

すなわち、フランソワ一世が戦費の財源捻出のために1522年に行った官職売買（vénalité des offices）の公認である。

官職売買は13世紀以来、ひそかに行われており、1467年にはルイ十一世が王令で財政関係の官職（office）の売買を部分的を認めたことはあったが、司法関係の官職に関しては一応、売買を禁ずる王令を出していた⁽⁵⁾。

ところが、カール五世との戦費捻出に苦慮したフランソワ一世は1522年に至ってこの禁をついに破る。1522年に中央財務局（Trésor de l'Épargne）を設立したとき、歳入が絶対的に足りないを知るや、司法職も含めて官職の売買を公的に認める方針に転じたのである。なかでも人気の高かった高等法院では官職を新設して一般に売りだすことにした。

ただ、フランソワ一世は、一度官職を売り出してしまったら最後、その官職がいくら売買・譲渡・相続（語気緩和的表現で《放棄 *résignation*》と呼ばれた）されても国庫へは一文も入ってこないという不都合を避けるため、売買官職の移動に当たっては、売却者（同じく語気緩和で《官職放棄者 *résignant*》と呼ばれた）に売買価格の10分の1ないしは12分の1を襲職税（後に3分の1に増額）として国庫に収めさせることとし、同時に次のような規定を設けた⁽⁶⁾。

すなわち、官職放棄者が放棄（売買・譲渡・相続）を申し立ててから40日以上生きていない場合、放棄は無効となり、官職は国家に回収される、と。これは成文化こそされなかったが、「40日規定」として1604年のポーレット法施行まで法律として機能した。しかし、このような規制はあったものの、官職売買はフランソワ一世以後、事実上完全に公認され、国庫財源の大きな柱の一つとなったのである。

というのも、都市経済の発達で巨万の富を蓄えるようになったブルジョワジーがこの官職売買に殺到したからである。ブルジョワジーは、それまで利殖と身分向上のため、没落貴族の土地を買いあさっていたが、官職売買が解禁されると知るや、利殖にも身分向上にもこの方がとっとり早いと判断したのだ。かくて、官職はブルジョワジーにとって、不動産と同じように売買・譲渡・相続可能な大きな家産の一つとなったのである。官職売買は、あらゆる種類、あらゆる地位の官職にも及び、最高位の官職である外務、陸軍、海軍、宮内などの國務卿、財務総監とて例外ではなかった。

「これらの國務卿は王国行政の中心となるべき存在であるから、当然のこととして国王が直接任命し必要とあれば常に罷免できるものではなくてはならない。ところが、この國務卿のポストは、私人間で売買・譲渡・相続しうる売官職では勿論ないが、その職に就くためには多額の権利金を先任者に支払う必要があった。コルベールは売官制にきわめて批判的であったとされる訳であるが、このコルベールも、1669年財務総監と兼ねて宮内卿のポストに就任する際には、先任者のデュプレシ＝ゲネゴーに、実に70万リーヴルという巨額の権利金を支払ってこの職を受け継いだことが、コルベールの財産目録により明かにされている」⁽⁷⁾

ことほどさように、フランソワ一世によって封印を解かれた売官制はたちまちのうちに行政・司法・軍事の官職すべてを覆いつくし、やがて官職そのものの概念を変えてしまうことになる。

その一つは、貴族の占有職業であった官職がブルジョワ子弟の有力な就職先となったことだが、もう

一つは、高位の官職を購入して一定期間その地位にとどまれば保有官僚は貴族として授爵されるというおまけがついたことである。つまり、官職売買の解禁は、ブルジョワジーに「貴族への道」を大きく開いたことになるのだ。歴史学では、官職売買によって授爵した貴族を一般に「法服貴族 *noblesse de robe*」と呼ぶ。

時代が移り、アンリ四世の御代となると、宗教戦争による国庫の疲弊を救うため官職売買は法的にも公認されるに至る。1604年のいわゆるポーレット法 (*édit de Paulet*) がそれである。

すなわち、王室秘書官シャルル・ポーレ Charles Paulet が官職売買を活発化させるために、40日規定を撤廃し、①官職所有者は官職価格の六〇分の一を毎年税金として払うことによって制約なく売買・譲渡・相続を行うことができる（この年税はポーレット *paulette* と呼ばれた）②売買・譲渡・相続に際して、放棄者は売買価格の三分の一を官職放棄税として支払う、のいずれかの選択肢を選べるようにした法律である。⁽⁸⁾

このポーレット法の施行により、官職売買は完全に公認され、財政、司法、軍隊の三つの分野にブルジョワの子弟がなだれこんだのである。これにより、身分制社会は徐々に崩壊に向かって歩みを速めてゆく。そして、解体しつつある身分制社会に代わって、17世紀から現れてきたものこそ、法服貴族を事実上の主体とする中央集権的な絶対王制だったのである。

第三章 中央集権化の思い掛けぬ加速と法服貴族たちの家族類型の関係

これまで官職保有者ないしは保有官僚と訳される «*officiers*» についてはさまざまな研究がなされてきたが、まったく考察の対象となっていなかった要素が一つある。売買によって新たに官職保有者となった者のほとんどが商工業によって財を成したブルジョワジーであることは明らかだが、その官職購入者たるブルジョワジーは「だれのために」これを買ったのかという問題は考慮の外にあったのだ。

というのも、「何のために」という問題にはすでに十分な答えがあるが、「だれのために」ということになるほとんど誰も考えたことがないように思えるからだ。

だが、何ゆえにこの点の解明が必要なのか。

それには、財を成したブルジョワが売りに出され官職を一族で「初めて」購入しようと思立った場合のことを想定してみるとわかりやすい。

そのブルジョワは官職を自分のために買うだろうか。

この可能性は極めて少ないといえる。というのも、たとえば最も購入希望者が多かった（つまり最も実入りがよく、付随特権の多かった）高等法院の評定官の官職が売りに出されたとしても、買い取ったブルジョワがまったく学歴も法曹経験も有していなかったなら、評定官になることは不可能だったからである。

「王権はこのような司法官への就任に際し、どのような資格を要求しているのだろうか。従来、

王権は司法官志望者へ大学の法学部で法学を勉強し、その後数年、弁護士の修習をするよう要求している」⁽⁹⁾

この資格は時代が下るにつれ厳しくなる。また司法経験の年数も増えてくる。

したがって、高等法院の評定官という官職を買うには金だけでは足りず、大学の法学部を卒業した上に法曹経験を積むことが不可欠となったのである。

では、ブルジョワは誰のためにこの官職を買ったのか。いうまでもなく、自分の息子ないしは婿のためである。法学部を卒業し、弁護士の修習を終えた息子や婿がいれば、金満家の親としてはたとえ一時的に巨額の購入費がかかっても長い目で見れば元が取れるのだから、購入資金を与える（ないしは貸し与える）ことは十分に採算が合うはずなのだ。

と、ここまでは誰でも想像がつく。しかし、本当の問題はこの先にある。というのも、もし、そのブルジョワが自分が財を成した職業に誇りを抱き、なおかつ後継者を求めているとしたら、当然、息子あるいは婿にそのブルジョワ的職業を継がせたいと思うはずだからである。それとも、ブルジョワ的職業は自分の代までにして、息子は購入官職に就かせるという決断を敢えて下すだろうか。選択に迷うところである。

だが、息子ないしは婿が複数いた場合、あるいは息子と婿がいた場合はどうだろう。一人には家業を継がせ、もう一人には官職の道を歩ませるというリスクヘッジ的な「両張り」的選択というものもあり得たのではあるまいか。少なくとも、官職売買の初期の段階では、このような「両張り」的選択をするブルジョワが多かったのではないか。

たとえば、長男は跡取りとして家業を継がせるが、次男以下は法服貴族への道を歩ませるようにすれば、金と身分とが両方手に入ることになるからだ。

この点において、われわれはとかくフランス中のブルジョワが同じ選択に傾いたのだらうと想像してしまいがちだが、しかし、実際には、フランスでも地域によってかなりバラツキがあったのである。

正確な統計は出ていないが、いくつかの指標から判断する限り、パリを中心としたパリ盆地のブルジョワは「両張り」が少なく、1360年以降の新規獲得領土のブルジョワは「両張り」が多かったと推測されるからである。

それは、出自がほぼ解明されているルイ十四世親政開始から崩御までの期間（1661-1715）に宮内卿、財務卿（財務総監）、外務卿、陸軍卿、海軍卿、大法官といった主要閣僚たちの経歴から推測される。⁽¹⁰⁾

なお、コルベール一族（ジャン＝バチスト・コルベール・ド・セニュレー、シャルル＝コルベール・ド・クロワシー、シャルル＝コルベール・ド・トルシー、ニコラ・デマレ）、ル・テリエー族（フランソワ＝ミシェル・ル・テリエ・ド・ルーヴォワ、ルイ＝フランソワ＝マリ・ル・テリエ、エティエンヌ・ダリグル）および各大臣の息子は除く。（ ）内の年数は在位時期。

① アンリ・デュ・プレシス＝ゲネゴー（宮内卿 1643-1669、海軍大臣 1643-1662）オーヴェルヌ地

方のサン＝プルサン＝シュル＝シウールの法服貴族の家系，祖父の代に授爵

- ② ルイ＝フェリポー・ド・ボンシャルトラン（宮内卿 1690-1699，財務総監 1689-1699）プロワの法服貴族の家系。
- ③ ニコラ・フーケ（財務卿 1653-1661）アンジュー地方アンジェのラシャ商人の家系。父の代に法服貴族の仲間入りを果たす。
- ④ ジャン＝パチスト・コルベール（宮内卿 1669-1683，財務総監 1661-1683）シャンパーニュ地方のランスの商人・銀行家の家系。コルベール家六代目のエドゥアール・コルベールの代にパ＝ド＝カレ地方のマニューとクレヴクール城主となる。先祖はスコットランド人というのは伝説にすぎない。
- ⑤ クロード・ル・ベルティエ（財務総監 1683-1689）メヌ地方ル・マンの弁護士の家系。祖父の代に授爵。
- ⑥ アンリ・オーギュスト・ド・レオニ（外務卿 1643-1663）リムーザン地方フラヴィニャックの法服貴族の家系
- ⑦ ユーグ・ド・リオンヌ（外務卿 1663-1671）ドーフィネ地方の帯剣貴族の家系。
- ⑧ シモン・アルノー・ド・ボンボンヌ（外務卿 1663-1671）バス・オーヴェルニュ地方の法服貴族の家系。ポール・ロワイヤル文法で有名な出身のジャンセニスト，アントワヌ・アルノーの一族。
- ⑨ ミシェル・ル・テリエ（陸軍卿 1651-1662）パリのブルジョワの家系。祖父の代に授爵して法服貴族。
- ⑩ ミシェル・シャミヤール（財務総監 1699-1708，陸軍卿 1701-1709）ノルマンディー地方カーンの地方長官をつとめた法服貴族ギー・シャミアールの息子というところまではわかるが家系のルーツは不明。
- ⑪ ダニエル・ヴォワザン・ド・ラ・ノワレー（陸軍卿 1709-1715）トゥレーヌ地方アンボワーズの法服貴族の家系。
- ⑫ ピエール・セギエ（大法官 1656-1672）サン＝プルサン＝シュル＝シウールの法学者の家系。祖父の代に授爵。
- ⑬ ルイ・ブシュラ（大法官 1685-1699）出自は不明だが，パリ高等法院の出身。

13人のうち，帯剣貴族の家系はユーグ・ド・リオンヌのみ。残りは全員，法服貴族の家系だが，その12人のうち，家系の出自不明のルイ・デシュラとミシェル・シャミヤールを除いた10人の系譜を調べてみると，パリのブルジョワから法服貴族となった家系はミシェル・ル・テリエのみで，残り9人は地方の法服貴族の家系であることが判明する。

彼らの上昇の軌跡を辿ると，共通しているのは，地方のブルジョワだった祖父か曾祖父が次男ないしは三男に財産分与のかたちで官職を購入したときに社会的上昇が始まることである。そして，高等法院で出世を遂げたその息子は自分の官職を長男に相続させるかたわら，次・三男にも別の官職を買っ

て与える。以下、これが繰り返されるうち、幸運に恵まれた者が法服貴族となり、ルイ十四世の官僚にまで出世したというわけだ。

さて、問題は13人のうち9人という数である。統計的には母数が少なすぎるきらいはあるが、しかし、時代が下ってルイ十四世治世の末期になると、上記13人の家系がクラン（門閥）を成し、主要閣僚や地方長官（intendants）を独占する傾向が強くなるから、この統計的傾向は強まりこそすれ弱まることはない。つまり、統計を採取する時代的環境としてはそれほど悪いタイミングではないといえる。言い換えると13人の主要閣僚のうち地方法服の家系が9人という数字はかなり有意的であるということだ。

ではいったい、この数字は何を意味しているのだろうか？

まず、帯剣貴族出身の閣僚がユグ・ド・リオンヌだけというのは、ルイ十四世が親政開始に当たって王族・大貴族を閣僚から排除し、実権のない宮廷貴族にしたことが大きく関係している。つまり、この数字はルイ十四世の「意思」で説明がつくということだ。

では、パリのブルジョワの家系がル・テリエのみというのは王の「意志」で説明可能だろうか？

フロンドの乱の前半、すなわち「高等法院のフロンド」の主な舞台がパリ高等法院だったことから、ルイ十四世がパリ高等法院に多くの法官を供給しているパリの法服貴族を嫌ったという説明はもっともらしく聞こえるが、しかし、これは、フーケ以下の地方の法服貴族の家系の閣僚たちも、一族の「売官すごろく」の「上がり」がパリ高等法院の官職であると認識していたという事実と矛盾する。つまり、ルイ十四世がパリ高等法院出身者を嫌ったという事実はないのである。

というわけで、親政開始以後の歴代閣僚13人のうち9人が地方の法服貴族の家系ということの説明するには別の観点からの解釈が必要となるのである。

そこで、家系の出身地が判明している9人について、それを1360年のブレティニー＝カレー条約の地図（図1）にマッピングしてみると（図2）、見事なくらいに1360年以降の新規獲得領土、それもアンジュー、メース、トゥレーヌ、ブルボネ、オーヴェルニュといった国王親族領に集中している事実が明らかになる。

これに対して1360年以前の王領からはランス出身のコルベールのみ。ただし、厳密に言えば、コルベールの先祖はランスよりも北のパ＝ド＝カレの領主だったらしいので、これまた必ずしも王領出身とはいえない。⁽¹¹⁾

では、これら9人の地方に出自を持つ閣僚の出身地におおむね共通する特徴というものは果たして存在するのだろうか？

共通性のヒントとなるのは、近年、歴史学において発展著しい家族類型についての考察である。その分野の先駆者であるアンドレ・ピュルギエールは次のように要約している。

「私はかつてアンシアン・レジーム最後の三〇〇年間のフランスについて（ヨーロッパ全体についてと同様に）、地方によって三者の比率は異なるとしても、次の三つの家族のモデルを識別することを、他の研究者たちとともに提起した。

(1) とりわけ北部フランスに広く分布し、その規模が一組の夫婦核にまで縮小した核家族。

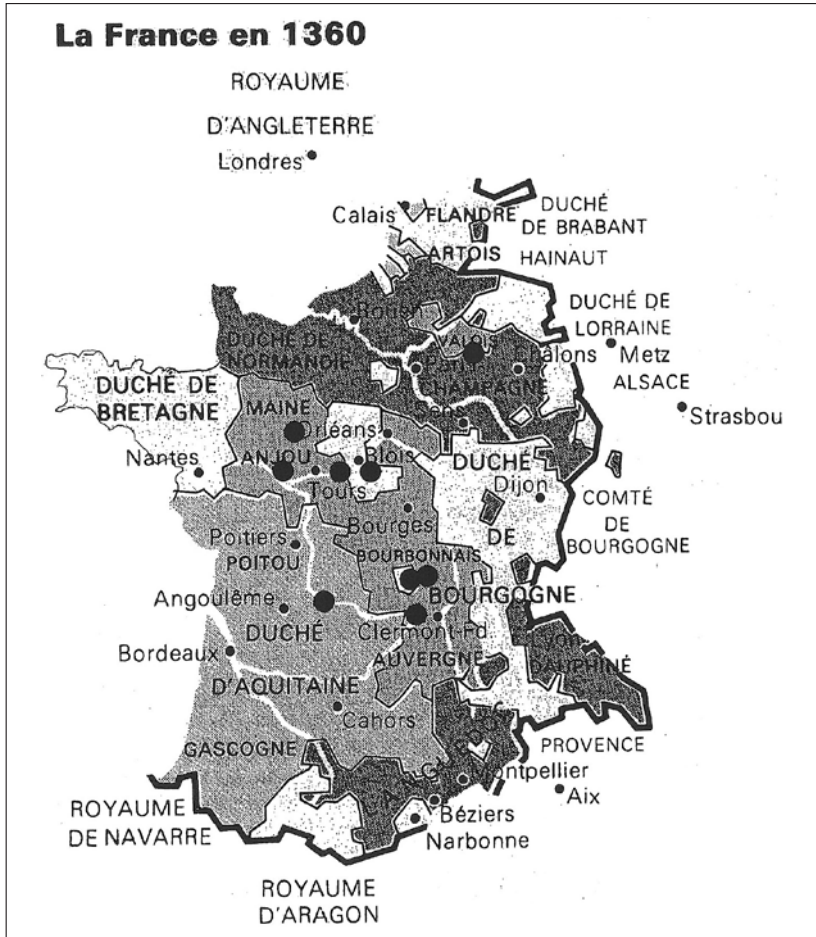


図 2

(図 1 に 9 人の閣僚の出自を ● でマッピング)

(2) 両親がその相続人となるべきただ一人の既婚の子どもとともに暮らす直系家族のモデルは、南フランスの山岳地方、ピレネー地方、中央山塊の南東部門、アルプス地方およびプロヴァンス地方にとくに多い。

(3) 幾人かの既婚の子どもがともに生活する共同体家族で、両親がその指揮をとる場合が多い。このモデルがもっとも頻繁にみられるのは、ポワトゥ地方からリムザン、ニヴェルネ、さらにバス＝オヴェルニュ地方を通してフランシュ＝コンテ地方にいたる東西に長い地帯である」⁽¹²⁾

これは十九世紀の社会学者フレデリック・ル・プレーが観察と統計に基づいて割り出した三つの家族類型、すなわち不安定家族 (famille instable)、幹家族 (famille souche)、族長的家族 (famille patriarcale) に対応する区分である。ル・プレーはこれらの家族のうち幹家族 (直系家族) を最も安定してカトリック的な家族形態と称揚する一方、不安定家族 (核家族) を資本主義的利己主義に毒されて退廃した家族形態として断罪した。⁽¹³⁾

イギリスのケンブリッジ・グループ (ピーター・ラスレット, アラン・マクファーレン, ジョン・

ヘイナル) とフランスのアナール派家族歴史学者がル・プレーの三分類を再発見して、新たな光を当てて社会解読格子として復活させたのである。

そして、この三分類にあらたに兄弟間の平等相続、不平等相続、および外婚、内婚という要素を入れて分類し直したのがケンブリッジ・グループに学んだエマニュエル・トッドである。トッドは『第三惑星』と『世界の幼少期』⁽¹⁴⁾において、この家族類型を世界中の地域に適用して世界を七つないしは八つの家族類型の地域に分割してみせた。

そして、さらにそれを精緻化してヨーロッパに集中適用したのが『新ヨーロッパ大全 I, II』⁽¹⁵⁾で、フランスは絶対核家族地域、平等主義核家族地域、完全直系家族地域、不完全直系家族地の四つに分割されたうえ、共同体形態(マイノリティだが重要) 残存地域が●で弁別されている。『新ヨーロッパ大全 I』の80ページに掲げられた「地図12 家族型——総合」を引用させてもらうと次のようになる(図3)。

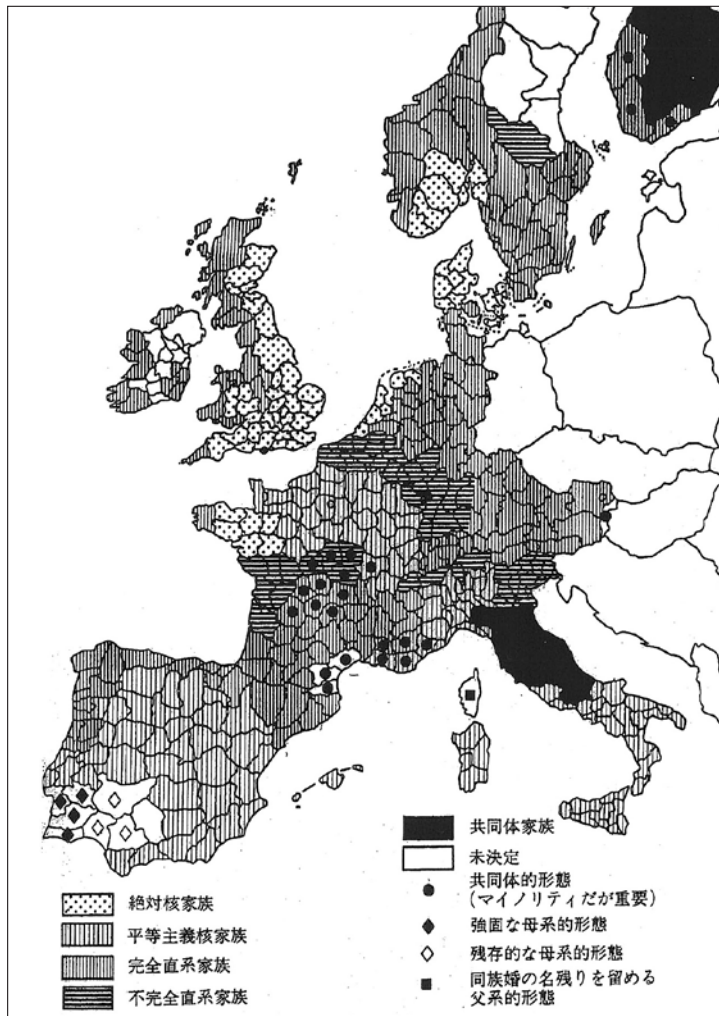


図3

さて、このトッドの地図を、先ほどわれわれが作成した1360年のプレティニー＝カレー条約地図にルイ十四世紀の閣僚を●という印でマッピングした地図（図2）と比較すると、後者の●を張った地点は前者（トッドの地図）における「完全直系家族」地域および「不完全直系家族」地域に共同体的形態の残存を示す●が張られた地域とかなりの部分重なっていることがわかる。同時に、1360年のプレティニー＝カレー条約地図の王領地域が「平等主義核家族」地域と完全に重複していることも理解される。

では、これらの地図の比較から、われわれはどのような結論を引き出したらいいのだろうか？

両者の地図が重なる地域は、完全なかたちにしる不完全なかたちにしる、また共同体的形態の残存があるにしるないにしる、いずれも直系家族地域であることに変わりはない。

では直系家族の特徴とはなんだろう？ トッドは『新ヨーロッパ大全Ⅰ』でこう定義している。

「最初のカップルが子供を作る。成年に達したとき、男子のうちただ一人が結婚し、当初の家族を離れることなく子供を作る。他の子供は、出身家庭集団に独身のまま留まるか、それとも家を出て、どこかの跡取り娘と結婚するなり、新たな世帯を創設するなり、僧侶か兵士になるしかない。息子たちのうち、家庭集団の連続性を保証する役回りの者は、必ずしも遺産のすべてを手中にするわけではないが、家族が時を越えて永続することの物質的印である土地と家屋は彼のものとなる。他の子供たちは、少なくとも理論上は《清算金》によって補償を受ける」⁽¹⁶⁾

さて、この説明により、ルイ十四世の閣僚の先祖が官職売買が解禁されると同時に、跡取り予定の長男を除いた息子たち、つまり次男、三男に教育を受けさせ、弁護士試験に合格させたあと高等法院の官職を買い与えたその理由が明らかになったのではないか？ つまり、直系家族にあっては土地と家と家業は分割できないため、次男、三男、あるいは娘の婿には、財産分与ないしは娘の持参金のかたちで官職を購入してやったということだ。それ以前には、直系家族地域の次男、三男は財産分与がなければ、僧侶か兵士になるしか選択肢がなかったが、この売官制により、独立して一家を構えることができるようになったのである。しかも、こうした選択は、官職購入というかたちで財産分与する父親にとっても有益なものとなった。つまり、長男と次男・三男に「両張り」をすることでリスク・ヘッジが可能になったのである。やがて、ポーレット法の施行により、購入した官職が自動的に世襲可能になり、授爵への道も確保されたため、直系家族地帯のブルジョワたちは、この選択を次男・三男だけではなく長男にも適用するようになる。

このように、ルイ十四世の閣僚たちの家系の多くが直系家族地帯に発していることは証明されたが、しかし、まだ二つのことが説明されていない。

一つは、伝統的な直系家族地帯である南仏およびドーフィネ、プロヴァンスおよび直系家族的要素の強いベルギー国境地帯とドイツ国境地帯からはルイ十四世の閣僚たちの家系が発していないのはなぜかという疑問である。これに対しては、次のように説明するのが可能と思われる。

すなわち官職売買はリターンが大きい高等法院の官職を中心として行われたが、南仏には、ラングドックを管轄とするトゥールーズ高等法院（1443年創立）、ドーフィネを管轄とするグルノーブル高等法院（1453年創立）、ギュイエンヌ（アキテーヌ）とガスコーニュを管轄とするボルドー高等法院

(1462年創立)、プロヴァンスを管轄とするエク＝サン＝プロヴァンス高等法院(1501年創立)など創立年代が古くて伝統がある高等法院があったため、これらの地域のブルジョワたちは息子にそれらの高等法院の官職を購入したやっただのである、と。地方の高等法院ではやはりルイ十四世の目につきにくく、取り立ても少なかったと思われる。

またベルギーおよびドイツ国境地帯は三十年戦争とルイ十四世によるフランドル戦争を待って初めてフランスに併合されたので、それら地域の出身者が中央の官僚組織に到達するにはまだ時間が必要だった、と。

しかし、時代が下るにつれ、南仏や北部国境の直系家族地帯からもやがて野心的なブルジョワ子弟が売官制に乗ってパリに集まってくることになるのである。

もう一つの疑問は、パリを中心としたパリ盆地、すなわちイル・ド・フランス、シャンパーニュ、ノルマンディーなどの古くからの王領がル・テリエー人を除いてルイ十四世に閣僚を供給しなかったのはなぜかというものである。これに対しては、これらの王領で支配的だった平等主義家族に関するトッドの次のような説明が有効なのではないかと思われる。

「最初のカップルが子供を作り、子供たちは成年に達すると独立の世帯を創設する。親の財産は、子供たちの間で細心・綿密に平等に分けられる。親の生前に何らかの財貨が一部の子供に与えられていた場合には、複雑な評価手続きによって取り分の平等化が行われる」⁽¹⁷⁾

つまり、パリ盆地では遺産の厳密な平等主義原則が適用されるから、財産分与としての教育投資や官職購入などを行う親が少なかったと想像される。現に、パリ盆地(ただしパリを除く)では、現在でも親に教育投資という概念が希薄で、そのために直系家族地域と比べて貧困化が起きているとトッドは指摘している⁽¹⁸⁾。おそらく、16、17世紀はこの傾向がさらに露骨で、パリ盆地のブルジョワは平等主義家族ゆえに教育に不熱心であり、大学進学者も官職購入者も少なかったのだろうと想像されるのである。

というように、フランソワ一世の時代に始まり、ポーレット法で完全に定着した売官制は、それが平等主義核家族の構造ではなく、直系家族のそれに適合したため、直系家族地帯である中部フランスから多くの人材を中央に集めることとなったが、その一方では、こうした直系家族地帯出身の官僚たちは、この家族類型に内包される権威主義に無意識のうちに影響されて、ルイ十四世の絶対主義を無前提で信じる主要閣僚となったのである。

かくて、ルイ十四世の時代に、中央集権システムはフランスを二分する家族人類学的な布置により、とりわけ、直系家族地帯の併合をきっかけとして、直系家族という「構造」が、一種の国家的インフラとなって、完成を見ることになったのだ。

結論

さて、以上で序文で提起した問題に対してはほぼ答えが用意できたかと思う。

すなわち、英仏百年戦争の勝利とルイ十一世の拡張主義により、1360年のブレティニー＝カレー条約の時点の領土からほぼ4倍に近い領土を獲得したフランスは、その獲得領土の多様さ（トッド的には家族類型の違いに基づく差異）という「遠心性」に直面し、国家として、高度に「求心的」なシステムである中央集権制を必要としたが、しかし、中央集権制はルイ十三世、リシュリユー、マザラン、ルイ十四世らの統治者の努力だけで達成されたものではなかった。むしろ、中央集権化を「構造的」に可能にした要因が獲得領土の中に潜在的に存在していたのである。

その「構造」は、やがて官職売買の一般化が獲得領土の直系家族構造とマッチしたことにより顕在化する。すなわち、直系家族地帯では、優秀な次男・三男が売官制により保有官僚となることが可能となり、次に彼ら、あるいは彼らの子供や孫がリシュリユーやマザラン、あるいはルイ十四世やコルベールなどにより中央官僚として引き立てられることになるが、そのときまさに、直系家族システムに内包されていた権威に柔順なメンタリティが国家的規模にまで拡大されたのであり、ルイ十四世の絶対主義に奉仕する優秀な官僚群が形成されたのである。

結論すれば、核家族地帯のみから構成されていた中世フランスは、新規獲得領土が直系家族地帯であったがゆえに、いわば、中央集権国家という肉体を支える骨組を領土とともに獲得し、それが国民国家という近代的国家体制を用意したのである。

《注》

- (1) André Siegfried: *L'Ame des Peuples*, Paris, Armand Colin, 1950, Theodore Zeldin: «The French», London, William Collins Sons, 1983
- (2) 柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦篇『世界歴史体系 フランス史 二 16世紀▶19世紀なかば』（山川出版社）の服部春彦「第一章 アンシャン・レジームの経済と社会」および林田伸一「第五章 最盛期の絶対王政治」参照。
- (3) 基本的には系譜学の書物が主たる情報源となるが、近年、wikipediaなどの各閣僚の項目においては、在野の研究者による、県庁の公文書館の書類調査による系譜学的書き込みが多く行われているので、典拠のあるものはそれを採用することにする。
- (4) 国王親族領（apanages）とは、フランク族特有の分割相続習慣の名残で、カペー王朝の王が王子や王弟に王国の一部を分割して与えた領土のこと。
- (5) 官職売買の前史については Roland Mousnier: *La Vénalité des Offices sous Henri IV et Louis XIII*, Paris, Presses Universitaires de France, 1971, pp.14-43
- (6) Roland Mousnier opt. cit, pp.44-55
- (7) 二宮宏之『フランス アンシャン・レジーム論 社会的結合・権力秩序・叛乱』（岩波書店、2007年）、226ページ
- (8) Roland Mousnier: *La Vénalité des Offices sous Henri IV et Louis XIII*, Paris, Presses Universitaires de France, 1971, pp.232-269
- (9) 宮崎揚弘『フランスの法服貴族 18世紀トゥールーズの社会史』（同文館、平成6年）58ページ

- (10) Thierry Sarmant et Mathieu Stoll: *Régner et gouverner: Louis XIV et ses ministres*, Paris, Perrin, 2010
- (11) コルベールの先祖が13世紀にパ＝ド＝カレ地方、現在のノール県の小村クレヴクール＝シュル＝レスコーの領主になったのが一族の起源とされている。コルベールその人もその冷徹な人柄から「オム・デュ・ノール」すなわち「北の人」と呼ばれた。
参考としたのはJean-Jaques Bourgeon: *Les Colbert avant Colbert*, Paris, Presses Universitaires de France, 2002
- (12) アンドレ・ビュルギエール「アンシアン・レジーム期の王権と家族」(藤田苑子訳) 二宮宏之・阿河雄二郎編『アンシアン・レジームの国家と社会 権力の社会史へ』(山川出版社, 2003年) 161ページ。
- (13) Frédéric Le Play: *La Réforme Sociale en France Déduite de l'Observation Comparée des Peuples Européens*, Tour, Alfred Mame et Fils, 1878 とりわけその第三部「家族」が重要。
- (14) Emmanuel Todd: *La troisième Planète*, Paris, Editions du Seuil, coll. «Les Empreintes», 1983 (『第三惑星』)
Emmanuel Todd: *L'Enfance du monde*, Paris, Editions du Seuil, coll. «Les Empreintes», 1984 (『世界の幼少期』)
邦訳はこの二冊を纏めた Emmanuel Todd: *La Diversité du monde*, Paris, Editions du Seuil, 1999 (『世界の多様性 家族構造と近代性』(荻野文隆訳 藤原書店))
- (15) Emmanuel Todd: *L'Invention de l'Europe*, Paris, Editions du Seuil, 1990 (邦訳『新ヨーロッパ大全 I, II』石崎晴己・東松秀雄訳 藤原書店, 1992年)
- (16) 『新ヨーロッパ大全 I』石崎晴己・東松秀雄訳 藤原書店, 1992年 43ページ
- (17) 同書 43ページ
- (18) Emmanuel Todd: *La Mystère français (en collaboration avec Hervé Le Blas)*, Paris, Editions du Seuil, 2013 (『不均衡という病 フランスの変容 1980-2010』石崎晴己訳 藤原書店, 2014年)

文献目録

日本語文献

- 『岩波講座 世界歴史 14 近代世界の形成 I』(岩波書店, 1969年)
- 『岩波講座 世界歴史 15 近代世界の形成 II』(岩波書店, 1969年)
- 斎藤修編著 ピーター・ラスレット他著『家族と人口の歴史社会学 ケンブリッジ・グループの成果』(リポート 1988年)
- 柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦篇『世界歴史体系 フランス史 二 16世紀▶19世紀なかば』(山川出版社)
- 千葉治男『ルイ 14世紀 フランス絶対王政の虚実』(清水書院, 1984年)
- 中木康夫『フランス絶対王制の構造』(未来社, 1963年)
- 二宮宏之『フランス アンシアン・レジーム論 社会的結合・権力秩序・叛乱』(岩波書店, 2007年)
- 二宮宏之他編『叢書・歴史を拓く 《アナル》論文選 新版2 家の歴史社会学』(藤原書店, 2010年)
- 二宮宏之・阿河雄二郎編『アンシアン・レジームの国家と社会 権力の社会史へ』(山川出版社, 2003年)
- 二宮宏之『二宮宏之著作集 2』(岩波書店, 2011年)
- 二宮宏之『二宮宏之著作集 4』(岩波書店, 2011年)
- 速水融編『歴史人口学と家族史』(藤原書店, 2003年)
- 宮崎揚弘『フランスの法服貴族 18世紀トゥールーズの社会史』(同文館, 平成6年)
- アラン・マクファーレン『イギリス個人主義の起源 家族・財産・社会変化』(酒田利夫訳, リポート, 1993年)
- アラン・マクファーレン『再生産の歴史人類学 1300~1840年 英国の恋愛・結婚・家族戦略』(北本正章訳, 勁草書房, 1999年)
- ピーター・ラスレット『ヨーロッパの伝統的家族と世帯』(酒田利夫・奥田伸子訳, リポート, 1992年)
- 外国語文献
- Bluche (François): «*Louis XIX*», Paris, Fayard, 1986

- Bluche (François): *Dictionnaire du Grand Siècle*, Paris, Fayard, 1990
- Bourgeon (Jean-Jaques): *Les Colbert avant Colbert*, Paris, Presses Universitaires de France, 2002
- Lavissee (Ernest): *Louis XIX, Histoire d'un Grand Roi*, Paris, Hachette, 1978
- Le Play (Frédéric): *La Réforme Sociale en France Déduite de l'Observation Comparée des Peuples Européens*,
Tour, Alfred Mame et Fils, 1878
- Mousnier (Roland): *La Vénalité des Offices sous Henri IV et Louis XIII*, Paris, Presse Universitaires de France,
1971
- Sarmant (Thierry) et Stoll (Mathieu): *Régner et gouverner: Louis XIV et ses ministres*, Paris, Perrin, 2010
- Siegfried (André): *L'Ame des Peuples*, Paris, Armand Colin, 1950,
- Smedley-Weil (Anette): *Les Intendants de Lois XIX*, Paris, Fayard, 1995
- Todd (Emmanuel): *La troisième Planète*, Paris, Editions du Seuil, coll. «Les Empreintes», 1983 (『第三惑星』,
『世界の多様性 家族構造と近代性』収録)
- Todd (Emmanuel): *L'Enfance du monde*, Paris, Editions du Seuil, coll. «Les Empreintes», 1984 (『世界の幼少
期』, 『世界の多様性 家族構造と近代性』収録)
- Todd (Emmanuel): *L'Invention de l'Europe*, Paris, Editions du Seuil, 1990 (『新ヨーロッパ大全 I, II』石崎晴巳・
東松秀雄訳 藤原書店 1992年)
- Todd (Emmanuel): *La Diversité du monde*, Paris, Editions du Seuil, 1999 (『世界の多様性 家族構造と近代性』
(荻野文隆訳 藤原書店 2008年)
- Todd (Emmanuel): *Le Mystère français (en collaboration avec Hervé Le Blas)*, Paris, Editions du Seuil, 2013 (『不
均衡という病 フランスの変容 1980-2010』石崎晴巳訳 藤原書店, 2014年)
- Theodore Zeldin: *The French*, London, William Collins Sons, 1983

グスタフ・フェヒナーの死生観のわが国における受容
— 『死後の生についての小冊子』の多種類の邦訳 —

岩 渕 輝

The Favourable Reception of Gustav Fechner's View
on Life and death in Japan:
The Different Translations of *The Little Book of Life after Death*

IWABUCHI Akira

During his lifetime, Gustav Theodor Fechner (1801–1887), who was the founder of the discipline of psychophysics, addressed not only philosophical and religious problems but also scientific ones. Fechner's *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode* (*The Little Book of Life after Death*), an example of his books on religion, was published in 1836 under the pseudonym of Dr. Mises. In this book, Fechner expresses a unique view on life and death that combines the motifs of Christianity, pantheism, and panpsychism. *The Little Book of Life after Death* has been translated into many languages, including English, French, Italian, and Japanese. It is noteworthy that this book has over five different Japanese translations, although the number of Christians in Japan is relatively low. The first Japanese translation, by HIRATA Motokichi, was published in 1910, during the late Meiji Era. During the Edo Era (1603–1868), a policy that prohibited contact with most foreign countries was enforced; this policy continued to be in force for more than 200 years, from 1641 to 1853. The Meiji Restoration—which comprised a chain of events that led to extensive changes in Japan's cultural, political, and social structures—took place at the beginning of the Meiji Era (1868–1912). At the time, both the Western culture and concepts were flooding Japan, and people were urgently trying to understand and absorb them. Under these circumstances, the import of Western science, technology, and materialism posed a challenge to the traditional culture of the country. The first translation of Fechner's work was published during this period. This study discusses why Fechner's view regarding life and death became widely accepted in Japan. It is suggested that prior to the appearance of the first translation, three thoughts attracted considerable attention: (1) the 'living Universe', (2) anti-materialism, and (3) the 'world of unconsciousness'. Fechner's doctrines were acceptable to the Japanese because they resembled the three Japanese thoughts and fitted well with the mentality of many Japanese who longed for a non-materialistic worldview.

《公募論文》

グスタフ・フェヒナーの死生観のわが国における受容 ——『死後の生についての小冊子』の多種類の邦訳——¹

岩 瀨 輝

1. 序

科学的心理学の祖として知られる19世紀ドイツのグスタフ・テオドーア・フェヒナー (Gustav Theodor Fechner; 1801-1887) は、プロテスタントの家系に生まれた科学者・哲学者である。フェヒナー自身も敬虔なキリスト教徒だった。

当時の心理学は、主として思弁的な方法でなされるのが普通だったが、一方で、思弁的方法とは異なる科学的研究方法を確立し、それに基づいた科学的心理学を構築しようとする試みも始まっていた。だが、そうした試みはうまく行っていなかった。心の世界を科学的に研究するためには、心の世界を数値化する必要があるが、それが困難だったためである。そうした中でフェヒナーが登場し、感覚を数値化し、感覚量と刺激量の間に、「フェヒナーの法則」と呼ばれる対数関数の法則的關係のあることを発見した。そして、それらの成果を基に科学的心理学の一分野「精神物理学 (独 Psychophysik; 英 psychophysics)」を創始した。全2巻のフェヒナーの著『精神物理学原論 (Elemente der Psychophysik)』(1860年) は心理学史上の重要な古典の一つとみなされている。

このように、心理学を科学化する上で多大な貢献をしたフェヒナーであるが、フェヒナーは科学とは無関係に見える、いわば「非科学的」著作も多数上梓していた。ここで注目すべきは、科学とは一見無関係に見えるそうした「非科学的」著作の中には、フェヒナーの精神物理学に通底する哲学的思想を含むものが含まれている、ということである。その一例が、フェヒナーの死生観が表明された、キリスト教的色彩の強い宗教哲学的著作『死後の生についての小冊子 (Das Büchlein vom Leben nach dem Tode)』(1836年) (以下、『死後の生』) である。この書は『精神物理学原論』に24年先立って刊行された書であるが、この書には後年フェヒナーが創始する精神物理学の思想の萌芽が見られることが指摘されている²。

後に詳しくみるように、『死後の生』は、抄訳も含めれば、わが国では明治期から現在に至るまで別々の翻訳者によって5種類以上の邦訳が出版されている。また、キリスト教徒の人口比がわが国より、はるかに高い欧米諸国でも、数カ国語に翻訳されている。とりわけ英訳は、これまで幾度となく版を重ねている。しかしながら、訳文の種類に関しては、そうした英訳版においてすら、Hugo Wernekke

訳かMary C. Wadsworth訳のいずれかを復刻・再版したものがほとんどであり、わが国のように別々の翻訳者による5種類以上の翻訳が出版されているわけではない³。そうした欧米諸国の翻訳状況と比較した場合、アジア諸国の中でもキリスト教徒の人口比が特に低いことで知られるわが国で、キリスト教色の強い『死後の生』が別々の翻訳者によって5度以上にわたって翻訳されたということは、わが国の人々が何らかの理由で『死後の生』のような書を希求していた可能性を示唆するものであろう。

本研究の目的は、フェヒナー『死後の生』がわが国で幾度も翻訳・出版された理由を、とくに明治期の思想的背景に焦点を当てて探ることにある。『死後の生』の邦訳は明治・大正・昭和・平成のいずれの時代にも出版されているため、これらいずれの時代に関しても思想的背景を探ることが望ましいが、紙数の都合で本稿では、わが国初の邦訳が刊行された明治期の思想的背景を中心に、文献研究の方法で分析する。

なお、『死後の生』の翻訳状況と翻訳の思想的背景に焦点を当て、わが国におけるフェヒナーの死生観の受容を探った先行研究は、管窺の限りではほとんど存在しない⁴。

以下では、まず第2章で『死後の生』のわが国における翻訳状況に関するわれわれの調査結果を記す。また、『死後の生』の翻訳者たち自身の記述を手がかりに、翻訳者たちが同書を翻訳した動機と理由を探る。第3章から第5章までの各章では、『死後の生』の翻訳書を出版したわけではないが、明治期のわが国においてフェヒナーやフェヒナー『死後の生』について、いち早く紹介した人々の文献を手がかりに、『死後の生』がわが国で受容されるに至った思想的背景を探る。具体的には、第3章では明治のはじめから明治20年代までの思想的背景を、大西祝らの文献を基に分析する。第4章では明治30年代の思想的背景を、高橋五郎らの文献を手がかりに検証する。第5章では明治40年代はじめから、わが国初の『死後の生』邦訳が刊行された明治43年前後までの思想的背景を、夏目漱石らの文献を糸口に探る。最後に第6章で結論を記す。

2. 『死後の生』のわが国における翻訳状況 — 翻訳者たちの動機と理由 —

本章では、まず、フェヒナーの略歴と『死後の生』の概要について素描する。続いて、諸外国に例をみないほど多種類の翻訳が存在する、『死後の生』のわが国における翻訳状況を概観する。しかる後に、翻訳者自身の記述を手がかりに、翻訳者たちが『死後の生』を翻訳・出版した動機と理由を探る。

2-1. フェヒナーの略歴と『死後の生』の概要

フェヒナーは、江戸時代の享和元年にあたる1801年4月19日、ドイツ東部の小村グロースゼルヒェン（現ポーランド領）の牧師の家に生まれた。16歳でライプツィヒ大学に入学し、以後、1887年に86歳でその生涯を閉じるまで、生涯のほとんどをライプツィヒで過ごした。フェヒナー家は代々牧師の家系であり、父も父方の祖父も母方の祖父も、この地の牧師だった。フェヒナー自身も終生、敬虔なキリスト教徒だった。

フェヒナーの業績としては、刺激量と感覚量の間に対数関数の関係が存在することを定式化した、

いわゆる「フェヒナーの法則」が有名である。フェヒナーは同法則を基盤に新しい学問分野「精神物理学」を創始し、59歳のとき、その成果をまとめた『精神物理学原論』全2巻（1860年）を上梓した。同書は心理学史の金字塔の一つと目されている⁵。

『死後の生』の初版は、『精神物理学原論』が世に出る24年前の1836年、フェヒナーが35歳の頃にドレスデンの出版社Grimmerから刊行された。50頁ほどの小著で、本名ではなく、フェヒナーのペンネームDr. Mises名で出版されている。1866年にライプツィヒの出版社Leopold Voßから出された第2版以降は、Gustav Fechnerの本名で発行されている。『死後の生』は本国ドイツで、現在に至るまで繰り返し版を重ねている⁶。

『死後の生』の思想的特徴は様々あるが、とりわけ、(1) 宇宙は生命に満ちているという、いわば、「汎生命的宇宙観」、(2) 物質主義や唯物論と対極的な「反物質主義的思想」、(3) 「無意識の世界が存在するという思想」、具体的には、意識と無意識は連続的なものであり、意識と無意識の状態は、ある閾の上下に対応するという思想、の三思想が特徴的である⁷。

本稿の結論を先取りすれば、わが国初の『死後の生』の翻訳が出版される前に、すでにわが国では、以下にみてゆくように、これら三思想と関連した思想が人々の間で話題に上っていた。そうした思想的背景があったからこそ、『死後の生』がわが国で度々翻訳され受け入れられることが可能になったと思われる。

次節以降、『死後の生』のわが国における翻訳状況について概観する。『死後の生』の邦訳刊行順に、まず、平田元吉、田宮馨、佐久間政一、上田光雄の四人の翻訳について、次に、それ以外の翻訳についてみてゆく。

2-2. 平田元吉による翻訳（初版：明治43年、第2版：大正13年）

『死後の生』をわが国で最も早く翻訳・出版したのは平田元吉^{もときち}（1874-1942）である。平田は旧制第三高等学校のドイツ語の教授で翻訳家だった⁸。著書には『京大法学部事件批判——瀧川教授の「刑法読本」検討——』（1933年）などが、訳書にはヒルティ『眠られぬ夜の為め』（1920年）などがある。

フェヒナー『死後の生』の平田による翻訳（以下、「平田訳」）は、『死後の生活』の邦題で明治43（1910）年に東京の丙午出版社から出版された⁹。ちなみに、丙午出版社は平田訳の出版当時、井上門了が創立した京北中学校の門前にあったという¹⁰。平田訳は本の大きさが横127mm×縦186mm。総頁数は248頁で、内訳は、フェヒナーの原著の翻訳が掲載された112頁分に加え、訳者・平田による序が6頁分、平田による「附録 フェヒネルの生活及び哲学」が130頁分である。平田によれば同附録は、フェヒナー生誕100年祭におけるヴィルヘルム・ヴントの講演と、フロマン社発行のフェヒナーに関するラスヴィッツの著書を参考に編述したものであり、とくにフェヒナー哲学に関する記述はヴントの講演の抄訳に近い性格のものであるという¹¹。底本に関しては明記されていない。

なお、平田訳の目次には各章に「第一章 総説、生活の三段階」「第二章 来世の体の形成」のように、原著にはみられない標題が付されているが、標題を付したことについて平田は、原著の内容は錯雑であり簡単な標題でそれを示すことは容易ではないが、わが国の読者に多少なりとも役立つかと思ひ、

あえて極めて不完全な標題を添えることにした、と断っている¹²。

平田訳には第2版（以下、「平田訳・第2版」）も存在する。平田訳・第2版は大正13（1924）年に刊行された。平田訳・初版との主な違いは、平田訳・初版には収録されていなかった、原著・初版のフェヒナーによる後書きと、原著の第2版・第3版・第4版の各版のフェヒナーによる序が訳出されて追加収録されたこと、および、平田訳・第2版用の平田による訳者序3頁分が追加されたことにある¹³。平田訳・初版では底本に関して明記されていなかったが、平田訳・第2版でも明記されないままである。ただし、平田訳・第2版には、フェヒナーによる序が原著・第4版の分まで収録されていることから、原著・第4版¹⁴が底本として用いられた可能性が高いと推測される。

さらに推測すれば、平田訳・初版と平田訳・第2版には内容的に大きな違いがないことから、平田訳・初版の底本も原著・第4版である可能性が高いと思われる。

2-3. 田宮馨による翻訳（初版：大正5年、豆本版：昭和21年）

田宮馨（^{かおる}1891-?）は、明治44（1911）年に結成された、大阪を本拠地にする催眠術・霊術関係の団体「帝国神秘会」の会長をつとめていた人物である¹⁵。田宮の著作には『催眠治療術』（福来書院、1915年）、『暗示の秘訣』（帝国神秘会、1940年）などがある。

『死後の生』の田宮による翻訳（以下、「田宮訳」）は、『死んだら如何なるか』の邦題で大正5（1916）年に帝国神秘会から刊行された¹⁶。総頁数192頁の手帳大の大きさの本（横105mm×縦150mm）である。『死後の生』の翻訳部分172頁分に加え、巻末に20頁ほど田宮による附録「科学の勝利か神秘の勝利か」がつけられている。底本に関しては記載がない。田宮訳の扉には、書名の右脇に「独逸 パツチエラー ドクトル フェツヒネル原著」「日本 帝国神秘会会長 田宮馨意識」と書かれている。「意識」と表記されている通り、田宮訳は原書の忠実な翻訳ではなく、大幅な意識である。

田宮訳には豆本サイズの異本（以下、「田宮訳・豆本版」）が存在するが¹⁷、本稿執筆時点では、同書に関する書誌情報は、国立国会図書館の蔵書検索システムや大学図書館等の各種検索システムに登録されていない。初版の通常サイズの田宮訳も相当に小型の本だが、田宮訳・豆本版はさらに一回り小型化しポケットに入る大きさになっている（横90mm×縦126mm）。田宮訳・豆本版は総頁数や頁の組み立てが田宮訳・初版と同一で、誤字が修正されていること等を除き、内容的にも田宮訳・初版とほぼ同じだと思われる。違いは、田宮訳・初版に存在する扉と奥付が省略されていることである。田宮訳・豆本版では、発行日に関する記述は裏表紙に「昭和二十一年三月一日 第一〇版発行」とあるだけであり、初版発行日に関する記述は見当たらない¹⁸。ここでの「第一〇版」とは、「版」「刷」に関する現代の一般的な用語法でいえば、「初版第10刷」の意味に相当すると思われるが、本の大きさや体裁が変更されたという意味では、豆本版は単なる初版の増刷ではなく改訂版とみなすことが可能である。そこで本稿では、豆本版を改訂版とみなし、その発行年を豆本版（第10版ないし第10刷）に表記されている昭和21（1946）年とした。なお、田宮訳・豆本版の表紙には、田宮訳・初版の書名『死んだら如何なるか』とは微妙に異なり、「か」の字が抜けた『死んだら如何なる』という書名が記されているが、これは誤植であろう。ちなみに、豆本版の第一章の直前には『死んだら如何なるか』とい

う初版と同一の書名が記されている。

2-4. 佐久間政一による翻訳（昭和23年）

佐久間^{まさかず}政一（1885-1949）はドイツ語学者・翻訳家である。明治43（1910）年、東京帝国大学文学部独文科を卒業。東北帝国大学農科大学のドイツ語嘱託講師を経て、明治44（1911）年、東北帝国大学予科教授に就任。大正3（1914）年、熊本の第五高等学校教授に転任、さらに大正7（1918）年、仙台の第二高等学校教授に転任。大正14（1925）年から1年半、文部省の留学生としてドイツ、スイス、米国に留学した¹⁹。佐久間のフェヒナー以外の訳業には、シラー『シラー小論文』（南江堂、1928年）、ヒルティ『処世論』（北隆館、1946年）、ショーペンハウエル『ショーペンハウエル論文集』（春秋社、1933年）などがある。

『死後の生』の佐久間による翻訳（以下、「佐久間訳」）は、『死後の生存』の邦題で昭和23（1948）年に東京の北隆館から出版された²⁰。佐久間訳は本の大きさが横128mm×縦184mm、本文の総頁数134頁の薄い本である。佐久間訳には『死後の生』の訳文の他、訳者序、原著第2版・第3版・第4版・第5版の序の訳と附録「グスターフ・テオドール・フェヒネル」が収録されている。佐久間によれば、同附録は訳者・佐久間が「発見し得たる限りの寡少なる材料によつて綴つた」ものであり、「平田氏及アーベル氏の『大思想家の世界観』」や「イエーデルマンズレキシコンやヴィンデルバントの『哲学史教科書』」やフェヒナーの著書Ueber die Seelenfrage収録のパウルゼンによる序文などに基づいて書かれたものであるという²¹。底本に関しては、訳者序に『死後の生』1906年版から訳されたと記されているのみだが²²、1906年という底本刊行年と、訳出されている内容とから判断すれば、底本はおそらく原著第6版だと思われる²³。

佐久間訳が上梓されたのは平田訳・初版刊行の38年後、平田訳・第2版刊行の24年後であるが、佐久間は自分の翻訳を出版する間際まで平田訳の存在に気づいていなかったようである。このことについて佐久間訳の訳者序には次のように記されている。

訳者〔佐久間〕は、原著者の名を聞くこと既に久しく、またメービウス、パウルゼン、ヴント等諸家の推奨の辞を読んだが、機縁いまだ熟せずして、その著を直接に被読したことがなかった。去年冬十一月この小著を畏友塚本虎二氏の書庫に発見し、借読一番、その稀観の奇著なるに驚き、試みに訳筆を執った。〔…〕

第三稿の終る頃、畏友松江高等学校教授高橋敬視君によりて、平田元吉氏訳するところの『死後の生活』が貸与された。この書は約四十年前の訳述に係り、大正十二年に再版した由であるが、訳者は当初、これに就いては、全く知るところなく、この後、岩波版哲学辞典フェヒネルの項で、之あることを知った。〔…〕邦語では彼〔＝フェヒネル〕に関して書かれたるもの、——訳者の寡聞を以てすれば、——殆ど無いと言ってよかろう。かかるが故に平田氏の労は、まことに多とするに足りる。訳者の如きも、この文によって裨益されたる所甚だ大であったことを告白し、謹んで同氏に感謝の意を致す。〔一部、現代的表記に改変〕²⁴

2-5. 上田光雄による翻訳（昭和23年）

上田^{みつお}光雄（1895-1957）については詳細は不明だが、東京都中野区鷺宮5丁目216にあった出版社「株式会社・光の書房」の発行人だったことが判明している²⁵。また、日本科学哲学会の主幹をつとめていたことがわかっている²⁶。著書に『ハルトマンの無意識の哲学』（1948年）が、訳業にはF. W. J. シェリング『神とは何か—— 神的啓示の哲学——』（1948年）、I. カント『意訳・純粋理性批判』（上巻1948年・中巻1949年）などがある。

『死後の生』の上田による翻訳は「靈魂不滅の理説」の邦題で、上田が訳したフェヒナーのもう一つの著書「宇宙光明の哲学」（原題：*Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht*）と合本にする形で、昭和23（1948）年に光の書房から刊行された。書名は『宇宙光明の哲学・靈魂不滅の理説』（以下、「上田訳」）である²⁷。なお、「靈魂不滅の理説」〔=『死後の生』〕は原書の全ての章を訳した全訳だが、「宇宙光明の哲学」は原書のいくつかの章の翻訳を省略した抄訳である。上田訳の大きさは横127mm×縦180mmである。本文の総頁数は、翻訳部分である「宇宙光明の哲学」（318頁分）と「靈魂不滅の理説」（72頁分）を合わせた390頁であり、さらに、上田による訳者はしがき8頁分がつけ加えられている。底本に関してはWilhelm Bölsche編のDeutsche Bibliothek in Berlin版であるとのみ記されており²⁸、底本の書名や発行年に関する記述はないが、おそらく底本は*Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht. Das Büchlein vom Leben nach dem Tode* [1919年?] だと思われる。

上田は、上田訳は「日本科学哲学会翻訳部員、水野不二夫氏の絶大なる努力が基底となって」世に出たものであり、訳者名として自分（上田）の名を出したのは便宜上そうしたまでに過ぎないと述べ、水野に謝意を表している²⁹。

なお、上田訳には、平田や佐久間ら『死後の生』の他の翻訳者たちの訳業に関しては何も言及されていない。ちなみに上田訳は、佐久間訳と同年同月の昭和23（1948）年7月に刊行されている。佐久間は前述のとおり、平田訳の存在を佐久間訳の出版間際に知ったと述べているが、上田訳に関しては何も触れていない。上田と佐久間は、同じ本の翻訳準備を行なっていることを互いに知らぬまま、全く独立に訳書を刊行した可能性が高いと思われる。

2-6. その他の翻訳

以上みたように、わが国では異なる訳者によって『死後の生』が度々訳されてきたが、平成20（2008）年にも、服部千佳子による訳（以下、「服部訳」）が『フェヒナー博士の死後の世界は実在します』の邦題で東京の成甲書房から出版された³⁰。本の大きさは横135mm×縦188mm、総頁数は157頁である。フェヒナーは『死後の生』で、此岸（この世）とは別の「彼岸（死後の世界）」など存在しないという意味のことを述べているが、服部訳の邦題は、こうしたフェヒナーの真意とは真逆の考えをフェヒナーが抱いていたかのような誤解を読者に与えかねない。また、服部訳の第1刷の本の帯には「フェヒナー博士の不朽の名著、初の日本語版ここに誕生！」と記されていたが、服部訳は『死後の生』の「初の日本語訳」ではない。

底本については、服部訳8頁に「訳出にあたっては一九〇四年刊のリトル・ブラウン社（在ポストン）の英訳版を定本〔原文ママ〕とした」³¹との記載があることから、服部訳はMary C. Wadsworth訳の英訳版からの重訳であると思われる。服部訳には、英訳版にも原著ドイツ語版『死後の生』にも存在しない、訳者が独自に追加した記述が見受けられるので注意が必要である。たとえば、各章に独自のタイトルが追加されているが、第八章につけられた「第八章 天国が見えるようになる」などは、「いわゆる天国や地獄は存在しない」というフェヒナーの考え³²を見えにくくし、読者を曲解へと誘導しかねない。なぜ、このようなタイトルが訳者によって付け加えられたのかという理由は記されていない³³。

『死後の生』のその他の日本語訳としては、単行本として出版された翻訳書ではないが、吉田正史による、『九州栄養福祉大学研究紀要』に発表された部分訳が存在する。フェヒナーは晩年、『死後の生』など若い頃に上梓した作品をいくつかまとめて『小品集 (Kleine Schriften)』（ライプツィヒ、1875年）を出版しているが、吉田は、復刊された『小品集』（ウィーン、1980年）に収録された『死後の生』を底本に翻訳を行なっている。吉田の翻訳は本稿執筆時点では、「フェヒナー『死後の生』についての小冊子」（訳、その1）、「フェヒナー『死後の生』についての小冊子」（訳、その2）」の2本のみが発表されており、『死後の生』全12章中、前者には第1章と第2章の訳が、後者には第3章と第4章の訳が収録されている。吉田は、翻訳にあたってMichèle OuerdとAnnick Yaicheによる『死後の生』の仏訳*Le petit livre de la vie après la mort*（モンペリエ、1987年）と、上田光雄による和訳『靈魂不滅の理説』（光の書房、1948年）を参照したと述べている。なお、吉田が『死後の生』を訳した動機については特に語られていない³⁴。

2-7. 翻訳者たちが『死後の生』を翻訳した動機と理由

以下では、翻訳者たちが何故『死後の生』を翻訳したのか、その動機と理由を翻訳者自身の記述を主な糸口として探ってゆく。それにあたって先述の翻訳のうち、翻訳の動機や理由が記載されていない服部と吉田による翻訳を除外し、平田・田宮・佐久間・上田の合計四人の訳者による記述を手がかりにする。

その前に、これら四人の邦訳の刊行年を再度確認しておく。それぞれの刊行年は、平田訳・初版が明治43（1910）年、田宮訳・初版が大正5（1916）年、平田訳・第2版が大正13（1924）年、田宮訳・豆本版が昭和21（1946）年、佐久間訳と上田訳が昭和23（1948）年である。これらの刊行年を戦争との関連で眺めれば、平田訳・初版は日露戦争終結（1905年）の5年後、田宮訳・初版は第一次世界大戦（1914～1918年）の最中、平田訳・第2版は第一次大戦終結の6年後、田宮訳・豆本版は第二次世界大戦終結の翌年、佐久間訳と上田訳は第二次世界大戦終結の3年後に刊行されていることがわかる。いずれも戦争と近い時期に刊行されているわけだが、戦争という時代背景が人々に死を強く意識させ、そのことが『死後の生』の翻訳出版を促した可能性があるろう。

続いて、平田・田宮・佐久間・上田の『死後の生』翻訳の動機と理由をみよう。

まず、平田訳・初版（明治43年）の訳者序から引用する。

今日は科学の時代である。科学万能ともいうべき時代である。人民みな科学の知識応用をもって自然界を支配し、地球が蔵せる富をひらき、地球が蓄えたる力を出し、火を使い水を制し風を御し、地を縮め時を省き、もって人類の勢力を増し、幸福を進め、富強を計っている。国民の興亡、国家の隆替、野蛮文明の差、実に科学の知識これが応用いかに関するといっても差支えない。

〔一部、現代的表記に改変〕³⁵

明治維新以来、わが国では科学技術が爆発的に発達した。たとえば、明治5（1872）年、新橋と横浜の間に日本初の鉄道が開通。明治11（1878）年、わが国で初めて電灯が灯され、明治20（1887）年には、日本初の火力発電所が建設された。明治23（1890）年、東京―横浜間で電話交換業務が開始。明治34（1901）年、現在の八幡製鉄所の前身の官営製鉄所が操業を開始。明治37（1904）年には、最初の国産自動車「山羽式蒸気自動車」が制作された。平田訳・初版が刊行された明治43（1910）年には、陸軍の軍人・徳川好敏が日本国内で初めて飛行機で飛行。翌明治44（1911）年には、わが国初の飛行場が埼玉県入間郡所沢町に完成している。

近代化が怒濤のように押し進められたわけだが、当時も今と同様、科学技術の発達は正の側面ばかりでなく負の側面も伴うものだった。先の序文に続けて、平田は「しかれども科学の支配、物質的文明の裏面には大なる欠陥がある」と述べ、欠陥の例として、精神的な不満足、自己内の不調和、感情意思の矛盾、精神の疑惑を挙げている。要するに、物質的な豊かさと引き換えに精神的な不調和が生じ、人々がそれに適応できなくなっていることが問題だと平田は指摘している。このような状態は「今日のいわゆる文明国に一般であって、欧米のみならず、実に我が国の現状である」³⁶。平田はさらに続けて、だからといって「科学の知識を有し科学心に満てる近代人」は科学を棄てることができないし、また、科学と十分に調和し一致するわけではない旧来の宗教に依存することもできないと述べ、そうした状況において必要なのは一人の指導者であると主張する。平田によれば、その指導者は「事実経験を重んじ、近代の科学を貴びてこれに精通し、伝説に依らず、嗜好に騙られず、ただ真これ求めて顧みざる独立自由の精神を有している者でなければならぬ。同時にこの人は優しき性、温かき情を有し、敬虔の心を備え、慈愛に富み、小児の如く純粹で無邪気で、詩人的で、宗教心に充満する者でなければならぬ。同時にまた、宇宙の謎を善や美の理想が損ぜぬように解かんとする人心固有の欲求に対して、深き理解力を有する哲学者でなければならぬ。吾人は此の如き人の指導を欲し、此の如き人の信仰思想を知り、もって吾人が不満足を治せんと欲している」。そして平田は、そのような人物を求めてフェヒナーに辿り着いたと述べている。平田によれば、フェヒナーの『死後の生』は、「諸科学の事実を基とし、帰納比論の両方を用い、詩的想像をもってこれを補い、宗教的情緒を帯びたる、未来生活の描写であって、正に科学と宗教との靈妙なる融和」であった³⁷。まさに、当時の人々が欲していると平田が考えていたとおりの本だったということができよう。

平田訳・第2版が刊行されたのは、平田訳・初版が刊行された明治43（1910）年から14年後の大正13（1924）年のことだが、平田は第2版の記者序で、この間に時代はこの種の書を一層渴望するようになり、フェヒナーの哲学書は本国ドイツで、またおそらくは広く世界で、一層読まれるようになって

たと思われるが、それはフェヒナーの哲学書が時代精神の要求に適することを証するものである、と述べている。さらに、『死後の生』の平田訳・第2版が「幾分か我が国現今の人々の渴望をいやし、また一般に著者の哲学に対する興味を我が思想界に喚起することを得ば、予の幸いとす所である」と結んでいる³⁸。

平田以外の訳者、すなわち、田宮・佐久間・上田の三名は、訳者序の類の記述を平田のように大量に記しているわけではないが、これら三名が記した少量の記述の中に平田同様の動機と理由が読み取れる。そのことを以下で具体的に検証する。

田宮は田宮訳（大正5年）に自身が加筆した附録「科学の勝利か神秘の勝利か」の中で、次のように語っている。科学が勝つか神秘が勝つかと言う問題は大本題である。今日は科学万能の時代で、何事も科学の力で動かされているが、では神秘は無力になったのであろうか。その答えを知っていただくために私（田宮）はこの附録でフェヒナーの生涯について書いたのである、と³⁹。さらに田宮は、『死後の生』が私たちに示したのは、「神秘、神秘、神秘の奥底であったではないか。科学の勝利か、哲学の勝利か、それは私が述べないでもフェツヒネルが、及び此一巻が語っている」と書いている⁴⁰。

このように、田宮も平田と同様、科学万能の時代への反動から神秘を擁護し、科学と神秘の両方を深く理解する論者としてフェヒナーに期待を寄せていることがわかる。

次に、佐久間が佐久間訳（昭和23年）を出した意図を探る。佐久間の『死後の生』に対する関心の中心がどこにあったのかという点については、訳者序には明記されていない。だが、佐久間が佐久間訳につけた附録「グスターフ・テオドール・フェヒネル」が、それを知る手がかりになり得る。同附録は佐久間の完全な書き下ろしではなく、他の人々が執筆したフェヒナーに関する解説記事を基に佐久間が抜粋・編集したものに過ぎないが、佐久間の抜粋・編集のしかたをみれば、佐久間がフェヒナーや『死後の生』について何を伝えたかったのかということが推測できるはずである。

佐久間による附録には、フェヒナーの青年時代は精密自然科学の発達した時代でフェヒナーも当初、精密自然科学の熱心な研究者だったこと、しかし他方でフェヒナーは深い宗教感情と美意識の持ち主でもあったこと、次第にフェヒナーは唯物論的世界観に耐えられなくなったこと等が記されている⁴¹。そして佐久間は附録をパウルゼンの次の言葉で結んでいる。

パウルゼンは、「彼 [=フェヒネル] の驚くべく円熟せる人格の模範的なることはさておき、彼の現代文化全体に対する意義を述べて、それは次の事柄に存すると言っている。曰く、彼に於て、精密科学的研究の全真面目さが、詩的空想的世界解釈への天賦や衝動と、極めて親密な結合をなした事、曰く、これによって、現実の自然的把握と宗教的世界観との間に——現代最大の損失を償うべき、すなわちわれらの科学とわれらの現行信仰の間に開口せる決裂を、閉鎖すべき使命を有する——一仲介物を創造した事であると。

〔佐久間政一による附録。一部、現代的表記に改変〕⁴²

以上のことから、佐久間が『死後の生』を訳した理由は、平田のそれと似通ったものだったであろう

うことが推測される。

続いて、上田が上田訳（昭和23年）を公刊した理由をみてゆこう。上田は「暗黒観」「光明観」という用語を用い、上田訳の訳者はしがきに次のように記している。ちなみに、暗黒観（闇の世界観, Nachtansicht）とはフェヒナーの造語で近代自然科学を基盤とする「宇宙は光も音もない暗黒の世界である」という世界観のこと、光明観（光の世界観, Tagesansicht）とは同じくフェヒナーの造語で暗黒観に対抗するフェヒナーの思想のことである⁴³。上田の訳者はしがきには「本書の基本的思想は、彼〔＝フェヒネル〕の畢生の念願たる宗教と科学の融合という点にあるのであって、浅薄なる唯物論や、空虚な観念論などの如き暗黒観的思想に対して、現実に根を下ろした楽天的光明観を積極的に大胆に展開されている点は、現下日本の思想界に大いなる滋味を与えるであろうと信ずる。なぜならば、今日の思想界はフェヒネル在世の頃と同じように、再び暗黒観の雲によって蔽われているからである」⁴⁴とある。

上田が『死後の生』を訳した理由も、平田のそれと非常によく似たものであることがわかる。

以上、平田、田宮、佐久間、上田が『死後の生』を訳した理由を彼ら自身の言葉を手がかりに探った。平田訳・初版が明治43年、田宮訳・初版が大正5年、平田訳・第2版は大正13年、田宮訳・豆本版が昭和21年、佐久間訳と上田訳が昭和23年と、刊行された時代は様々だが、いずれの訳者たちも、科学技術と物質文明が発展する一方で、精神的な危機が生じていることを危惧し、そうした危機を乗り越えるために、科学と宗教の両者に深い理解があり両者を止揚・融合できる人物の出現を待ち望んでいた。訳者たちが『死後の生』を翻訳したのは、そうした可能性のある人物としてフェヒナーに期待したためである可能性が高いことが判明した。

3. 明治のはじめから明治20年代まで——大西祝「読我観小景」等を巡って——

前章では、翻訳者たちの言説を手がかりに『死後の生』が翻訳された理由を探った。本章と続く二つの章では、翻訳書を出版したわけではないが、明治期のわが国においてフェヒナーや『死後の生』をいち早く紹介した人々の文献を基に、『死後の生』がわが国で受容されるに至った思想的背景を探查する。本章（第3章）では、明治のはじめから明治20年代までの思想的背景を大西祝らの文献を中心に探ってゆく。第4章では明治30年代について、第5章では明治40年代のはじめから、わが国初の『死後の生』邦訳が刊行される明治43年前後までについて検討する。

本章の構成は次のとおりである。まず、明治のはじめにキリスト教信仰が自由化された状況について簡単に触れる。しかる後に、明治20年代にフェヒナーと同様の汎生命的宇宙観を展開した三宅雪嶺『我観小景』^{がかんしょうけい}、フェヒナー『死後の生』をわが国で最も初期に紹介した文献の一つである大西祝「読我観小景」^{どくがかんしょうけい}などを中心に、『死後の生』受容の思想的背景を精査する。

3-1. キリスト教信仰の自由化

戦国時代の16世紀にわが国に伝来したキリスト教は、いったんは受容されたが、天正15（1587）年

の豊臣秀吉による禁教令（バテレン追放令）や慶長17（1612）年から翌年にかけての慶長の禁教令などによって弾圧され、根絶状態に追い込まれた。明治になってからも明治政府は高札を立てて禁教令を継続した。明治初期には浦上で信徒の大規模な弾圧が行なわれている。その後、信教の自由を認めよという諸外国からの圧力を受け、明治政府は明治6（1873）年に禁教令の高札を撤廃したが、これによりキリスト教を信仰する自由が十分に公認されたわけではなく、布教が単に黙認されたに過ぎなかった。信仰の自由が形式的に公認されるには、明治22（1889）年の大日本帝国憲法の公布を待たねばならなかったが、大日本帝国憲法ですらキリスト教を無条件に認めたわけではなく、第28条にあるように日本臣民は「安寧秩序を妨げず、かつ、臣民としての義務に背かない限りにおいて」という条件つきでのみ信仰が認められたのであった。信教の自由がこうした条件無しに認められるようになるには、第二次大戦後の日本国憲法を待たねばならなかった⁴⁵。

さて、いままたように、明治22（1889）年に信仰の自由を形式的に公認した大日本帝国憲法が公布されたことにより、明治20年代のわが国では、それ以前の時代に比し、キリスト教関係の書籍を出版したり紹介したりすることがずっと容易になったはずである。事実、明治20年代のわが国では、キリスト教色の強いフェヒナー『死後の生』を紹介する文献が後述のように少数だが出現している。

以下で、わが国に『死後の生』を紹介した初期の文献を取り上げる。その前に、『死後の生』への言及は無いが、フェヒナーの名は記載されている文献が明治初期に少しずつ現われているので、それらの中から二、三を選びごく簡単に紹介しておく。

明治20年代の『哲学会雑誌』には、当時の欧米の学問動向を伝える様々な雑報が掲載されている。たとえば、明治21（1888）年の同誌第20号には「H. O.」という著者名の「新心理学」という記事があり、従来の主観的な心理学とは異なり、客観的・実験的な方法に基づく新心理学ないし科学的心理学と呼ばれる心理学が出現しつつあることが報じられている。また、科学的心理学に関連した「プシヒョフィジック」（精神物理学；Psychophysik）の創始の最大の功労者として、ヴェーバーの名と共にフェヒナーの名が紹介されている。さらに、フェヒナーが唯物説に反対の立場に立っていることについても触れられている⁴⁶。同じく明治21（1888）年の『哲学会雑誌』第21号には、雑報の一つとして著者名が記載されていない「心物理学科」という記事が掲載されている。同記事には、東京帝国大学文科大学に心物理学（サイコフィジックス）〔＝精神物理学〕という科が置かれ、元良勇次郎（1858-1912）が講義を嘱託されたことや、元良が米国のジョンス・ホプキンス大学に留学し、心理学・哲学史・理財学等を修め「ドクトル、オヴ、フィロソフィー」の学位を授与されたこと等が紹介されている。また、心物理学と称する学はドイツの「ヴェーベル、フェヒネル、ヴェント等の研究により漸く世人の注意を喚起し来れる学問」であることも記されている⁴⁷。ちなみに、同記事にも話題が出ているが、日本で最初の心理学者・元良勇次郎が東京帝国大学文科大学でわが国で初の「精神物理学」の講義を行なったのも明治21（1888）年である⁴⁸。

このように明治20年代の『哲学会雑誌』にはフェヒナーや精神物理学関連の記事が出始めていたわけだが、中でも特筆すべきは、わが国に最も早い時期に『死後の生』を紹介した文献の一つである明治21（1888）年の『哲学会雑誌』第22号の雑報記事「フェヒネル」である。総分量2頁程度の著者名

無しの記事である。「フェヒネル」には、「その死するの年、第三版に附したる「死後の生命」〔=『死後の生』〕と題する一小書はもと千八百三十六年に出でたるものにしてフェヒネルの著作中最初に著したるものの一なり」という記述がある⁴⁹。「フェヒネル」は短文ながら、フェヒナーの略歴と主要著書についても伝えている。無記名の著者は、フェヒナーが亡くなって1周年になろうとしており、わが国の（東京帝国大学）文科大学に心物理学の科が置かれたことにちなんで、「フェヒネル」の名を掲げた記事を書いて読者の注意を引こうとした、と述べている。また、著者は、心物理学の問題の論争がすでに飽きられていることを恐れているとフェヒナーが述べていたことに触れ、もしフェヒナーがまだ存命中だったら、自分はフェヒナーに向かって「恐るるなかれ。なんじが半生を供したる心物理学は今、東洋の一孤島に於てもこれを研究する者を得たり」と言うのだが、と書いている⁵⁰。

上記「フェヒネル」以外で、わが国で『死後の生』を紹介した最初期の文献の一つに、明治26（1893）年の『六合雑誌』に掲載された大西祝の講演録「読我観小景」がある。この講演は、大西が、前年に出版された三宅雪嶺（雄二郎）『我観小景』への批判を展開したものである。大西「読我観小景」の話題の中心はフェヒナー『死後の生』ではなく、雪嶺『我観小景』であるが、講演の最後に『死後の生』の内容が少しばかり紹介されている。以下で、雪嶺『我観小景』および大西「読我観小景」についてみてゆこう。

3-2. 三宅雪嶺『我観小景』（明治25年）—— 汎生命的宇宙観 ——

三宅雪嶺（1860-1945）は哲学者・評論家で、本名を雄二郎という。東京大学文学部哲学科を卒業後、東京大学準助教授として同大学編輯所に勤務し、日本仏教史の編纂に従事した。また、東京専門学校（早稲田大学の前身）の講師として倫理学等を、哲学館（東洋大学の前身）の講師として西洋哲学史を講義した。29歳の明治21（1888）年、井上円了、志賀重昂、島地黙雷らと「政教社」を創立。同時に機関誌『日本人』を発刊。『日本人』は後に『日本及日本人』と改題された。雪嶺は政府の欧化主義に対抗し国粹主義的な言論を展開した。著書には『哲学涓滴』『我観小景』『宇宙』などがある⁵¹。

雪嶺『我観小景』は明治25（1892）年に政教社から出版された。明治文学の研究者・柳田泉によれば、書名の「我観」とは「我を観察すること」、「我観小景」とは「我観を小景として説いたもの」という意味であるという。哲学をするには、まず「我」とは何かをはっきりさせておかなければならないが、そのために必要なのが我観である⁵²。

『我観小景』の当時の人気について、大西祝は講演「読我観小景」の中で、雪嶺は「当今我国では誰もその雷名を聞かないものはない」人物であり、雪嶺の著書『我観小景』は刊行前から非常に評判の高い書物だったと述べている。また大西は、国粹を誇りたいと思っても、その国粹の中には日本哲学と言われるべきほどのものは見当たらないが、「三宅君が我国に独立の哲学を起さうとの試みをなされたことは我等の最も喜ぶところであります」と雪嶺を持ち上げている⁵³。

雪嶺『我観小景』は漢文調のやや難解な文章だが、それを柳田がわかりやすく要約しているのので、ここで柳田による雪嶺『我観小景』の要約を参考にし、『我観小景』の内容を所々拾い上げておく⁵⁴。

雪嶺は、「我」を明らかにするための「考究法」として「類推」を重視する。雪嶺によれば、直接に

は経験できない未知の事柄に関しても、既知の事柄からの類推により、何らかのを知ることが可能である。我には体があって心がある。他人を見れば、その顔つきや肢体や運動は、私の顔つき・肢体・運動と似ている。このように我と他人の間に外形的類似性があるとき、我と他人の内部の状態も似たものであることが推し測られる。言い換えれば、他人にも心があり、それは私の心と似たものであることが類推される。

このように、私の攻究法としての類推の重要性を説いた後、雪嶺は心について考察するため、外部からさほど干渉を受けていない心の状態であると思われる「夢幻」(=夢)に焦点を当てる。夢は脈絡がなく整合性を欠き矛盾だらけである。夢で見るものごとは観念に留まるに過ぎず、実物に関わるわけではない。覚醒は、実物に関わる感覚を生ずるという点では夢とは異なるが、つきつめて考えてみると覚醒状態でもわけのわからない観念の連鎖があり、夢と覚醒の境界は明確ではない。

夢と覚醒についてひとしきり論じた後、雪嶺は死について次のように考察する。覚醒の後の状態は普通、死という言葉で言い表される。死は覚醒の反対で意識のない空滅の状態と考えられているが、夢と覚醒との境界が明確ではなく両者に連続性があるように、覚醒と死も連続的なものなのではないか。言い換えれば、死とは意識のない空滅の状態ではなく、有意識、大覚醒、覚醒中の超覚醒なのではないか。これが雪嶺の考えである。雪嶺はさらに類推を進め、いわゆる死後の生とは宇宙の生に帰することではないかと述べる。宇宙は、ある種の人々が考えているような無生命の物体ではなく、生きた機関であり、それ自身の心意をもって活動している。それゆえ、「我」なるものは、死した後も、この大宇宙の超覚醒状態に融合して生き得る可能性があるのではないかと⁵⁵。

以上が雪嶺『我観小景』の要点であるが、実はフェヒナー『死後の生』の内容を知る者なら誰しもが、雪嶺の類推の運び方や、宇宙を生きた存在とみなす見方、生と死を連続的に捉える見方、そして、われわれの意識は死後完全に無に帰すわけではなく「宇宙の大意識」とでも呼ぶべきものに一体化するという考え方などが、『死後の生』におけるフェヒナーの考えにあまりにも似ていることに気づくはずである⁵⁶。このことについては、次節でも触れる。

話は少し脇に逸れるが、上の要約にもあったように、雪嶺はしばしば宇宙を「心意」ある存在とみなしている。この「心意」とはドイツ語Seeleの訳語だと思われる。実際、明治期に刊行された辞書『英独仏和 哲学字彙』には、Seeleの訳語として、「心意」を含む「心、霊、精神、心霊、靈魂、精気、心意」の語群が挙げられている⁵⁷。なお、Seeleは、ギリシア語「プシュケー」やラテン語「アニマ」のドイツ語訳でもある。「プシュケー」や「アニマ」は「心」と「生命」の両義をあわせもつ概念であったため、ドイツ語Seeleにも「心」のみならず「生命」の意味が含まれることが多い⁵⁸。話を戻すと、『死後の生』でフェヒナーは宇宙をSeele(心、生命、心意)に満ちた存在と捉えている。その点においても、雪嶺の議論はフェヒナーのそれに似通っていることがわかる。

雪嶺が、宇宙を生きた存在と捉える見方、いわば「汎生命的宇宙観」を有していたこと。また、死後もわれわれの意識は無に帰すわけではなく、宇宙の「大覚」と一体化するという考え方をとっていたこと⁵⁹。そして、それらいずれもが『死後の生』のフェヒナーの思想に極めて似通ったものであるということ。以上を念頭に置き、先に進むことにしたい。

3-3. 大西祝「読我観小景」(明治26年) — フェヒナー『死後の生』の最初期の紹介例 —

雪嶺の考えに対し、大西は講演「読我観小景」で批判を展開した。大西の同講演は講演録の形で、雪嶺『我観小景』刊行翌年の明治26(1893)年に『六合雑誌』に掲載された。批判の内容に踏み込む前に、大西祝の略歴を簡単に眺めよう。

哲学者・批評家であり美学者としても知られている大西祝おおにしはじめ(1864-1900)は、号を操山そうざんという。親戚にキリスト教徒が多かった大西は、自身も明治11(1878)年に新島襄から洗礼を受けている。大西は同志社英学校神学科を卒業後、東京大学予備門に編入、帝国大学(東京大学の前身)文科大学哲学科を卒業。大学院で学んだ後、明治24(1891)年から東京専門学校(早稲田大学の前身)で哲学・心理学・論理学・美学などの講義を行なった。明治31(1898)年ドイツに留学、ライプツィヒ大学ではヴント、フォルケルトらの下で学んだ。ライプツィヒ滞在中の明治32(1899)年、重度のインフルエンザにかかり、ほぼ回復したが神経衰弱になり帰国。明治33(1900)年、36歳の若さで世を去った⁶⁰。

ここから、大西「読我観小景」の雪嶺批判をみてゆこう。「読我観小景」で大西は次のように述べている。三宅君(雪嶺)が言うように、この世で覚醒中に夢ではないかと思うことがあり、また、夢の中で夢から覚めるのではないかと思うことがあるということから、死後に必ず大覚があると言えるのだとすれば、われわれがこの世に生まれる前にも、大夢や大覚があつて、それらが繰り返されてきたというべきではないか。雪嶺は生の前は死であると述べているが、生の前にも大夢と大覚が繰り返されている可能性に雪嶺は気づいていないのではないか。また、雪嶺は死後に無意識の世界があるというが、いかなる証拠に基づいて、そう主張するのか。無意識があるということはハルトマンもしきりに主張するし、私(大西)も必ずしも無意識の世界がないと主張するわけではない。もしかすると意識の世界に超越した無意識の世界があるのかもしれない。だが、雪嶺の論では、死後、すべてが消滅するのではなく無意識の世界があるのだという論拠が示されていないのだ⁶¹。以上が大西の批判である。

ここで、雪嶺と大西が、無意識の世界が存在するのか否かということとの関連で死を論じていることは特筆に値する。当時のわが国では、ハルトマン(Hartmann, Karl Robert Eduard von; 1842-1906)の学説が流行しており、ハルトマンは無意識に関する学説も唱えていたため、無意識の世界が注目されはじめていた。無意識については、後にまた触れることにし、まずは雪嶺と大西の議論の他の論点、「宇宙の心意」についてもみておこう。

大西は、雪嶺の「宇宙の心意」説を嘲弄を含んだ口調で批判している。「三宅君の類推法に従えば宇宙に就いては色々な事が推せましよう。宇宙も心があるからして吾人が夢を見るように夢を見ては居りませぬか。心がある以上は随分夢を見て居りましよう。宇宙の夢はドンナでありましようか。吾人の夢に較ぶればサゾ大きなものでしょう。ドンナに大きいでしょう。私は三宅君からこの宇宙の大夢を聞きたいと思います(大笑)」⁶²。

最後に大西は雪嶺『我観小景』の批評の結論として、同書は想像的文学の著作としては読む価値があるが哲学の議論としては論理を欠いているため一向に感服しないと述べている⁶³。

この結論の直前に、大西が唐突にフェヒナーの『死後の生』を引用・紹介していることは注目に値

する。大西は「数年前没しました独逸の有名なる哲学者フェヒネル [=フェヒナー] が若い時」に著した『死後の生活』を紹介し、次の箇所を引用している。

吾人は世に只^{ひとたび}一度住むにあらず、三度住むなり。その第一期の生活は絶え間なき睡眠（之れは母の胎内に居る時を指すのです）、第二期は睡眠と覚醒との相交々するもの（即ちこの世の中です）、第三期は永遠の覚醒なり、（即ち死後の生活です）。第一期に於ては吾人は寂寞として独り闇夜に住み、第二期に於ては相集まりて、然れども彼我の差別を立てて光明の場所に住む。しかもその光明はただ物の表面を照らすのみ。第三期に於ては自他、生霊あるものの生活、相結んで絶高絶大なる靈妙者の中にありて一生涯を為す。しこうして有限の事物の本体を看破し得。

〔ルビは原文。一部、現代的表記に改変〕⁶⁴

フェヒナーの『死後の生』を紹介した理由について大西は、雪嶺の『我観小景』を読んでいて『死後の生』のことを何とはなしに思い出したので紹介した、としか述べていないが⁶⁵、先にも触れたように『死後の生』を読んだことのある者なら大西でなくとも、『死後の生』と『我観小景』がよく似た書であることに気づくはずである。なぜなら、両者には、類推を多用するという方法的な共通性があるのみならず、内容的にも「宇宙は生きている」「宇宙はゼーレ（心意）に満ちている」「死後、個人の意識は完全に消滅して無になるわけではない」「死後、個人の意識はより大きな意識と融合する」などのモチーフが登場するという共通性があるからである。

大西は『死後の生』的モチーフに必ずしも共感を示していないが、そうした大西でも明治26（1893）年という極めて早い時期にフェヒナー『死後の生』の内容を知っていたということは特記しておきたい。

では、『死後の生』に極めて類似した思索を『我観小景』で展開した雪嶺の方は、『我観小景』執筆時にフェヒナーの『死後の生』を知っていたのであろうか。われわれが調べた限りでは、その証拠は発見できなかった。ただし、雪嶺が少なくとも後年には、フェヒナーの思想についてかなり詳しく知っていたことは確実である。明治42（1909）年刊の雪嶺の『宇宙』には、フェヒナーに関する言及がある。その具体的内容については、後に明治40年代のわが国の動向を検証する際にみることにし、今は触れずにおく。

先の大西の雪嶺批判に戻ろう。上述のように大西は雪嶺の「宇宙の心意」説を嘲弄口調で批判しつつも、批判の最後にさりげなく、宇宙はSeele（心意）に満ちていると唱えるフェヒナーの『死後の生』を紹介していたわけであるが、大西は『死後の生』をどう捉えていたのであろうか。『死後の生』の評価に関する大西の直接的な言説が存在するか否かは不明だが、それを探る手がかりとなる大西の随筆「独想二題」が、大西「読我観小景」刊行前年の明治25（1892）に『宗教』に掲載されている。なお、「独想二題」は「矛盾の一致」および「自力と他力」の二随筆から成る。

「読我観小景」での大西は、雪嶺の「宇宙の心意」説を真面目に取りあわなかったが、「独想二題」での大西は宇宙の生命的なはたらきを否定しておらず、むしろ、肯定的に捉えている。具体的には、大西は「宇宙の妙力」を持ち出しつつ、一個の「我」は自力で他の存在とは独立しているようにみえ

るが、見方を変えれば「我」は他力に支えられている、と述べている⁶⁶。大西「独想二題」から引用しよう。

哀別離苦の世の中に我れ淋しと思う時、正義を踏んで世に容れられず孤忠を懐いて独り涙をのむの時、我が一片の衷情を知る人もがな、我がこの赤心を見る人もがなと思う時、吾人の心はおのずから吾人以外の吾人以上の高大靈妙の者に向かわざらんや。〔…〕何ぞや一本の草花の咲く独り花の咲くとな思いそ。全宇宙の妙力が花に咲くと思え。名も知らぬ路傍の花見ても「処に余るの思い」をば詩人の思い浮かぶるは是れこれが故にあらずや。全宇宙は一滴の露の中に己れを^{まどか}囿ならしむとエモルソン [=エマーソン] は云えり。一心三千と説かば是れこれを仏説に翻えしたるに外ならず。我の活くるは我によりて活くるにあらず。我にある神によりて活くるなり。

〔傍線とルビは原文。一部、現代的表記に改変〕⁶⁷

このような大西の見方は、「我」あるいは一個人は孤立し自立した存在ではなく、他のはたらきを常に受け、そうしたはたらきの上で初めて成り立つ存在であるとみなす『死後の生』のフェヒナーの見方と、ある程度共通したものとみてよいであろう。大西はフェヒナー『死後の生』に完全に共感するわけではないが、ある種の親近感を抱いていた可能性もあると思われる。だからこそ大西は、雪嶺批判の最後に雪嶺とは直接関係のない『死後の生』をわざわざ紹介したのではなからうか。

以上、本章では明治20年代のわが国の思想的状況の一断面を、三宅雪嶺（雄二郎）『我観小景』や大西祝「読我観小景」等を手がかりにみてきた。雪嶺は当時非常に人気を博した『我観小景』で、宇宙は生きた機関で、宇宙には宇宙の心意があるとする見解を披露し、人の死後、意識や無意識は完全に無になるわけではなく宇宙の生命的活動と合するのだと主張していた。こうした雪嶺の「汎生命的宇宙観」および「無意識の世界が存在するという思想」は、フェヒナー『死後の生』にもみられるものである。また、大西は雪嶺の説には批判的な立場に立ちつつも、宇宙に「妙力」が存在することは認めており、雪嶺批判の最後に、わざわざ当時まだ翻訳されていなかった『死後の生』を紹介していた。

これらのことから、『死後の生』が翻訳される前の明治20年代には、日本人の間に「汎生命的宇宙観」や「無意識の世界が存在するという思想」に対する関心が高まりつつあった、言い換えれば『死後の生』受容の土壌が育ちはじめていた、とみてよいであろう⁶⁸。

4. 明治30年代 — 高橋五郎『最新一元哲学』『宇宙観』等を巡って —

本章では、明治30年代にフェヒナーの名や『死後の生』の内容を紹介した、高橋五郎をはじめとする人々の文献を中心に、『死後の生』受容の明治30年代の思想的背景を検証する。

本章の構成は次のとおりである。まず、明治30年代の重要な文献として井上円了『破唯物論』、中江兆民『一年有半』『続一年有半』、兆民の著作への反論の書である高橋五郎『一年有半と旧式の唯物

論』をとりあげる。次いでフェヒナー思想との類似点が認められる黒岩涙香『天人論』、フェヒナー『死後の生』を紹介した高橋五郎『最新一元哲学』『宇宙観』などを手がかりに、『死後の生』受容の思想的背景を探る。

4-1. 井上円了『破唯物論』(明治31年) — 唯物論の流行への徹底抗戦 —

まず、フェヒナーに関する記述は無いが明治30年代はじめの思想的状況を理解する上で重要な書があるので、内容を簡単に確認しておこう。その書とは、反唯物論の立場から執筆され、明治31(1898)年に東京の四聖堂から刊行された井上円了『破唯物論——一名 俗論退治——』(以下、『破唯物論』)である⁶⁹。

井上^{えんりょう}円了(1858-1919)は真宗大谷派の寺院の長男として生まれ、洋学を学んだ後の明治11(1878)年、東京大学予備門に入学した。24歳の明治14(1881)年、東京大学文科大学哲学科に入学。明治17(1884)年、神田錦町学習院で「哲学会」を創立した。明治18(1885)年、28歳で東京大学を卒業。明治20(1887)年には本郷麟祥院の敷地内に哲学館(東洋大学の前身)を創設し、仏教や西洋哲学などを教えた⁷⁰。先の三宅雪嶺の略歴の箇所でも触れたことだが、円了は明治21(1888)年、三宅雪嶺、志賀重昂、島地黙雷らと国粹主義的団体である政教社を創立している。

円了『破唯物論』諸論は次のように始まる。近頃西洋より唯物論という名の、実になまぐさい風がわが学問社会に吹き込んでいるが、これになびく輩が次第に増え、このため神州の清潔さが汚されようとする有様になった。最初のうちは軽はずみで生意気な学生が物好き半分に嘸し立てるだけだったので、さほど心配するには及ばぬことと思っていたが、最近では明治の大家と呼ばれる人たちが、かなりその波に巻き込まれ、大先達から小先達に至るまで次第に唯物論の立場を表明するようになった。その勢いで、いい加減な言説でも真実として広まってしまい、世間はみなこれに雷同しようとする傾向がある。そこで、とても傍観坐視してられなくなった。このように述べた後、円了は読者に向かって、唯物論と共にわが国に從來からある神・儒・仏の三道は存立できるのか、忠孝人倫の大道は変わらず存在できるのか、万国に卓絶せる一種無類の国体は将来どうになってしまうのか、と問いかけ、次のように続ける。唯物論は元来、無神論かつ無心論であるから、神道や仏教で一般に唱えられている靈魂説や未来説が唯物論によって真っ先に打ち毀されるだけでなく、儒道という仁義も忠孝もさんざんに打ちくだかれるに違いない。唯物論者の目からみれば、道徳も善悪も人間がつくったもの、人間の利己心から起こり経験から生じたものであり、真理は優勝劣敗のほかに決してあってはならない。唯物論者は、人に忠孝の本心が存在するのは先天あるいは天賦のものと考えた考え方は、へぼ学者の寝言に過ぎないと批判しており、中には、儒教の主義を根本から打ちくだかなければ日本は文明国になる見込みなしと叫ぶ者さえいる始末である。以上のように円了は唯物論の台頭に危機を感じていた。なお、『破唯物論』の序に円了は、『破唯物論』の目的は主として「近来流行の唯物論を破斥する」ことにあるが、神儒仏の三道の再興をはかることも目的の一つであると記している⁷¹。

『破唯物論』刊行翌年の明治32(1899)年、円了は『通俗講義 靈魂不滅論 —附 靈魂集説—』(以下、『靈魂不滅論』)を東京の南江堂から出している。『破唯物論』は哲学専門の学者からは非科学的だとか

空想臆断だとか評されたが、一般の人々からは論が高尚過ぎて理解するのが難しいと言われたので、より通俗的な書を世に出す必要を感じ、『靈魂不滅論』を書いた、と円了は述べている⁷²。

『破唯物論』にも『靈魂不滅論』にもフェヒナーの名は一切みられないが、明治30年代はじめに、こうした反唯物論・反物質主義の書が出版されていたという事実を頭に留めておきたい。反物質主義の書は、後にみるように明治30年代に、さらに続々と登場する。

4-2. 中江兆民『一年有半』『続一年有半』(明治34年) — 唯物論哲学 —

円了の反唯物論の書から数年遅れた明治34(1901)年の9月、中江兆民が自らの唯物論的ないし物質主義の立場を表明した書『一年有半』を東京の博文館から出版し、大変な反響を呼んだ。兆民の「生前の遺稿」といわれる『一年有半』は初版1万部を3日で完売、その後も版を重ね、翌年の9月までに20数万部を売り尽くしたという。『一年有半』刊行の1か月後の10月には続編である『続一年有半』も出版された⁷³。

中江兆民(本名、^{ちやうみん}篤介^{とくすけ})(1847-1901)は思想家である。高知に生まれた兆民は、15歳で高知の藩校・文武館に入学し、洋学や漢学を学んだ。また、18歳の時、土佐藩の留学生として長崎に行きフランス語を学んだ。明治4(1871)年から3年間、政府の留学生としてフランスに滞在している。帰国後、ルソーの『民約論』を一部翻訳して日本に紹介し、自由民権運動の指導者の一人として活躍した⁷⁴。

明治34(1901)年、兆民は咽喉がんになり医師から余命は一年半であると告げられる。残された最後の力を振り絞って遺著のつもりで完成させたのが『一年有半』である。『一年有半』が完成した後も、まだ余力があった兆民は、自身の唯物論哲学をさらに展開した『続一年有半』を、わずか10日間ほどで書き上げた⁷⁵。

絶筆となった『続一年有半』で兆民は、精神と身体の関係について唯物論的な立場から論じている。兆民によれば、身体は本体だが精神は本体ではない。精神は、本体である身体から発する作用ないし働きに過ぎぬものである。したがって、身体が死ねば精神は同時に消滅する。精神や靈魂が不朽不滅だとする説は「虚霊派哲学士〔唯心論者〕の言語的泡沫」である⁷⁶。兆民は、精神や靈魂を重視する説を唱えたプラトン、プロティノス、デカルト、ライプニッツなど錚々たる哲学者たちに対しても、これらの哲学者たちが「知らず識らずの間己れの死後の都合を考慮し、己れと同種の動物即ち人類の利益に誘はれて、天道、地獄、唯一神、精神不滅等〔…〕此等の物は唯言語上の泡沫〔原文ママ〕で有ることを自省しないで、立派に書を著はし、臆面もなく論道して居るのは笑止千萬で有る。又欧米多数の学者が、〔…〕乃ち無神とか無精魂とか云へば大罪を犯したるが如く考へて居るとは笑止の極で有る」と痛烈に批判している⁷⁷。

兆民は自身の哲学を「ナカエニスム」と呼んでいたが、ナカエニスムは唯物論的かつ無神論的な哲学だった。伊藤友信によれば、兆民の無神論は「西欧の尺度をもって測ることのできない複雑な唯物論的無神論」だった。船山信一も指摘するように、「西洋においては無神論は少数の例外を除いて同時に唯物論」であり、徹底した無神論は唯物論的無神論であるのが普通である。だが、「明治の無神論には唯心論的無神論があり、むしろそれが主流である。逆説のようであるが、日本では唯物論的無神論

にさえ、唯心論的要素があるのである」。兆民に関しても「唯物論的無神論の中に多くの唯心論的要素の混入」があることが指摘されている⁷⁸。

兆民の『一年有半』『続 一年有半』が唯物論と反唯物論、あるいは、無神論と有神論の両方の陣営からの注目を集め、それらの論争に関する世間の関心を高める上で少なからぬ影響を与えたことは間違いないであろう。なお、『一年有半』にも『続 一年有半』にもフェヒナーへの言及は存在しない。

4-3. 高橋五郎『一年有半と旧式の唯物論』（明治34年）のフェヒナーへの言及

— 反唯物論者・高橋の兆民批判 —

兆民『一年有半』『続 一年有半』は、反唯物論の立場の多くの論者から批判されたが、批判の急先鋒の一人が高橋五郎だった。

高橋五郎（別名、在一居士）（1856-1935）は翻訳家、評論家である。漢学や国学を修め、さらに仏典研究も行なった。早い時期にフェヒナーをわが国に紹介した一人でもある。高橋は明治8（1875）年、わが国のプロテスタントの指導的役割を果たした牧師・植村正久（1857-1925）を横浜に訪ねた。植村の紹介で、植村の師で宣教師のS. R. ブラウン（Samuel Robbins Brown; 1810-1880）の家に秘書として迎え入れられた。高橋は、ブラウンやJ. C. ヘボン（James Curtis Hepburn; 1815-1911）らによる新約聖書の翻訳事業に参加し、その間、英、独、仏、ギリシア、ラテン、ヘブライの各語学を習得。後に旧約聖書の翻訳事業にも参加した。明治13（1880）年、『仏道新論』（私家版）と『神道新論』（私家版）を刊行し一躍注目された。また、同年創刊されたキリスト教界の総合雑誌『六合雑誌』に毎号のように評論を寄稿した。明治15（1882）年、フェリス女学院の英語教師に就任。その後、神田英学館、早稲田大学、中央大学、立教中学校、駒沢大学、日本女子高等学院（昭和女子大学の前身）などでも教鞭をとった⁷⁹。

話は少し逸れるが、高橋五郎は井上哲次郎（1855-1944）とキリスト教に関する論争を繰り広げたことでも知られている。明治24（1891）年、第一高等中学校の嘱託教員をしていた内村鑑三が教育勅語に礼拝しなかったことが「不敬」だとされ、内村は同校を辞めさせられた。いわゆる「内村鑑三不敬事件」である。それを契機に、世間にはキリスト教自体を非難・攻撃する者が現われ始めた。そうしたキリスト教排斥の流れに便乗したのが井上哲次郎だった。それに対して、高橋五郎や大西祝らによるキリスト教擁護の反論が起こったが、井上は再反論をし、さらに様々な論者が加わって一大論争に発展した⁸⁰。

話を戻す。兆民批判が展開された高橋五郎『一年有半と旧式の唯物論』は明治34（1901）年12月、東京の一三三館から刊行された⁸¹。

高橋は言う。今日のわが国民には、兆民『続 一年有半』の哲学に共感する者が増えているようだが、同書を熱心に歓迎するのは火に油を注ぐようなものである。元来、わが国の国民は眼前のことにしか思いをめぐらすことのできない国民で、現世のことについては短期的な視点で利害を考えるだけであり、百年単位で策を画する者は極めて少ない。ましてや、来世のことについてまで思いを巡らす者はほとんどいない。このように、わが国民は「現世的」で「眼前的」で「短見的」であり、唯物主

義は彼らが最も得意とするところである。中江兆民は、そうした明治の現世主義的気運の代弁者であり、兆民の哲学は「粗大独断の唯物論」「旧式の唯物論」である。邦人が狂喜してこれを歓迎するのも無理はない。鉄が磁石に引き付けられるように、同じ気質の者同士が求め合っているのである⁸²。

高橋は兆民『一年有半』『続一年有半』の様々な言説に嘔みついているが、とくに激しい非難の言葉が向けられたのは、精神と身体に関する兆民の言説に対してである。

兆民の精神と身体に関する考えについては、すでに簡単に触れたが、もう少しみておこう。兆民によれば、精神は身体が発する作用ないし働きであるに過ぎない。比喩的にいえば、精神と身体の関係は、炭と炎の関係、あるいは薪と火の关系到似たものである。炭が灰になり減すれば同時に炎も減するように、人が死ぬとき身体は死ぬが、そのとき同時に精神も消滅するはずである。身体がすでに減んでいるのに精神がなお存在するという説は「背理の極」であり、健全なる脳髓〔の持ち主〕には理解できない説である⁸³。

こうした兆民の言説を引き、高橋は次のように言う。兆民のこうした「放言」があまりに鋭利であることに吃驚すると同時に、議論があまりに通俗的であることに失望した。兆民が鉄面皮であるとか浅薄だとかは必ずしも言わないが、兆民居士の言説だからといって媚びへつらう気もない。曲学阿世は学者として恥ずべきことだと聞いている。そこで自分も勇気を出して中江哲学（ナカエニスム）に論評を加えてみたい。このように、やや遠慮がちな前置きをした後で高橋は、兆民は単なる常識哲学者であり、哲学者の眼光を少しも有していない、哲学者たるべき知識も持っていない、さまざまな事を常識で論断しているだけである、遺憾ながら氏は旧式の唯物論者であると言わざるを得ない、と辛辣な言葉を並べている。また、精神と身体に関する兆民の説に対し高橋は、兆民は身体を本体（実体）とみなしているようだが、われわれの眼に見えるがままの実体がわれわれの感覚器官に入ってくるとする常識説は、100年前にカントによって打ち破られた説である。香木が燃え尽きると芳香も消えるように、身体が死ぬと精神も消滅するという考えは常識的には一理ある説のように見えるが、学術的には、この種の比喩（analogy）には少しもみるべき価値がない、と批判している⁸⁴。

『一年有半と旧式の唯物論』の終わり近くでも、高橋は兆民に対して皮肉を述べている。兆民は靈魂不滅説をたわごとだと罵り、無理屈非論理の寝言だと嘲った。自分（高橋）は今あえて、この兆民居士の放言を酔人の狂語だとは言わないが、ただその浅薄な独断説の甚だしきに驚くのみである、と⁸⁵。

ところで、高橋の『一年有半と旧式の唯物論』には、後述する高橋『宇宙観』とは異なり、『死後の生』に関する直接的な言及はないが、フェヒナーの名前は登場するので、そのくだりを記しておく。高橋は「霊とは何ぞや」という問いに対し、次のように答えている。高橋によれば、霊とは無形にして延長という性質をもたないものであって、物質のように無生無命なものではない。霊の霊たるゆえんは、生きて自ら動くことにある。霊は、一個の体としてみた場合は靈魂（soul, Seele）と呼ばれ、一般の作用としてみた場合は精神（mind, Geist）と呼ばれる。霊や物が結局のところ何であるかという問題とは別の問題として、霊は必ず存在するということを自分は論じているだけであるが、旧い唯物論者たちは根拠なしに霊の存在を否定した。だが、「近世の大家」ロツツェは言うに及ばず、デュ・ボア＝レイモンやフェヒナーやヴントのような「大生理学兼心理学者」らはことごとく霊の存在を確

認するに至ったのである⁸⁶。このように高橋はフェヒナーの名を挙げている。なお、高橋は、フェヒナーらが霊の存在を「確認」するに至ったと述べているが、ここでの「確認」とは、「存在することを科学的に証明した」という意味ではなく、「存在を認めた」「存在を前提に思索した」といった意味であろう。

ちなみに高橋は、別のくんだりでもフェヒナーの名を「心理的物理学 [= 精神物理学]」という学説名と共に紹介している⁸⁷。

以上、兆民『一年有半』『続一年有半』に対する反唯物論の立場からの批判の書である高橋『一年有半と旧式の唯物論』の概要を眺め、そこにフェヒナーの名前が登場することをみた。

4-4. 黒岩涙香（周六）『天人論』（明治36年）——フェヒナーとの思想的類似性——

高橋五郎のその他の言説については、後にまた検証することとし、続いて、やはり『死後の生』への直接的な言及はないものの、わが国で最初期にフェヒナーの名を紹介した書の一つである黒岩周六『天人論 全』（以下、『天人論』）に話題を移す。『天人論』は明治36（1903）年、東京の朝報社から発行された⁸⁸。

著者の黒岩涙香（本名、^{るいこう} 周六）^{しゅうろく}（1862-1920）は作家、翻訳家、思想家、ジャーナリストである。黒岩は日刊新聞『萬朝報』の創刊者である。『萬朝報』の発行元の朝報社には一時、幸徳秋水、堺利彦、内村鑑三ら錚々たる面々が参加していた。黒岩はアレクサンドル・デュマの『巖窟王』やヴィクトル・ユーゴーの『^{あゝ} 噫無情』等の作品を自ら翻訳し、同紙紙上に連載した。黒岩の翻訳には、その他、ジュール・ヴェルヌ『月世界旅行』などがある。

『天人論』の「凡例」で黒岩は、当時のわが国で一元論が流行した理由を次のように明快に説明している。人の知識は本来、一元論（モノイズム）に向かう傾向があるものだが、学問が進んでいないため一理をもって万有を説明することが非常に困難である。そこで二元を立てる説が存在し、自然と超自然のように互いに矛盾する二つ以上の原理を立てて強引に理屈をこじつけることが行なわれているのである。19世紀の中頃に進化論が出現して以来、一元論の根拠が確立し、20世紀の今（『天人論』刊行時の明治36年）、迷雾はほとんど一掃されたように見える。有神と無神、物質と靈魂、哲学と神学、宗教と倫理、これらはすべて一主義の下に調和されようとしている。同じ一元論でも、物的方面に立脚したものと心的方面に立脚したものとがあるが、両者は大体のところは同じであり、物心一如、汎神論（パンセイズム）、萬有理教（パンロギズム）、生命一体（ユニバーサル）の向上主義（アナポリズム）などの考え方に相当する。余（黒岩）は心的一元論の所説に基づき、自ら信ずる所を述べて『天人論』を書いた。心的一元論を知識として講述したものであれば他にも著名な人物による本があるはずだが、本書では余は余の信仰を告白する⁸⁹。

当時のわが国ではヘッケル（Ernst Haeckel; 1834-1919）の物的（機械論的）一元論が流行しており⁹⁰、一元論といえば物的一元論のことと解釈する者が多かったようである。だが、黒岩の言うように一元論には物的一元論と心的一元論があり、黒岩は心的一元論に近い立場だった。

『天人論』の冒頭は「人は疑問の中に生れ疑問の中に死す」の言葉で始まる。黒岩は、われわれが何

故生まれたのが第一の疑問、生存中われわれは何をなすべきかが第二の疑問、そして、「死すれば何の境に入るや」が第三の疑問だと述べ、人生観とは、そうした疑問を解釈したものだと言う。ここで黒岩が死後のことを重要な疑問の一つに挙げていることに注目しておこう。続けて黒岩は「人は自ら知らずして生まる。即ち天然に生れたるなり」と記し、けれども天然の「天」とはいったい何なのだろうか、「天」は人生観の奥底に横たわる大問題である、「天」を解釈するのが宇宙観である、そこで、宇宙観と人生観をあわせて余は「天人論」と呼ぶのである、と結んでいる。つまり、「天人論」とは宇宙観と人生観の両方の意味をあわせもつ語である⁹¹。

黒岩は『天人論』の所々で、物と心を分断しない一元論的思想家としてフェヒナーを紹介している。なお、われわれは、フェヒナーを一元論者に区分するのは必ずしも妥当ではないと考えるが、本稿ではその点について踏み込むことはしない。

『天人論』の「学者の断言を聞け」と題された章で黒岩は「物質の活けることは余自らの活けると同様に確実なり。〔…〕フェヒネル曰く地球も活けるなり」⁹²と述べ、黒岩と同じくフェヒナーも汎生命的宇宙観を有していることを紹介している。

黒岩『天人論』とフェヒナー『死後の生』には、いくつかの類似点・共通点が存在するが、紙数の都合で詳しく論ずる余裕がないため、ここでは一例だけ挙げておく。両者の類似点・共通点の1つに、肉体の死は、新たな生の始まりであるとみなす点がある。受精の際に雌雄の生殖細胞の核と核とが融合するが、その際、黒岩の用語にいう「外包」、すなわち、生殖細胞の受精に不要な部分は邪魔になり一部が脱ぎ捨てられて死骸になる、と黒岩は述べる。黒岩によれば、外包が死ぬのは核を生かすためである。それと同様、肉体の死はわれわれにとって重大事件だが、肉体の死でわれわれの生命の一切が死ぬわけではない。肉体の死があるからこそ、次の生命が生ずるのである。つまり、「死の真成の意味は生なり。生命は依然として不死」である。これが黒岩の考えだが、フェヒナーに極めて近い考え方である⁹³。

黒岩とフェヒナーの間のこうした考え方の類似性がなぜ生まれたかは定かではない。黒岩がフェヒナーの思想を詳細に知っており、それらの影響を受けた可能性を否定することはできない。他方で、黒岩はフェヒナー思想の断片しか知らずフェヒナーとは独立に思索した結果、偶然多くの点でフェヒナー思想に類似した思想を打ち立てた可能性もあるであろう。いずれにせよ、黒岩の思想にフェヒナー思想と極めてよく似た点が多々みられることは事実であり、わが国の黒岩の読者は、フェヒナー『死後の生』が翻訳される以前に、黒岩の著書を通じて『死後の生』的思想に多少なりとも馴染んでいたということは言えるだろう。

4-5. 高橋五郎『最新一元哲学』(明治36年) — フェヒナー『死後の生』の紹介 —

さて、黒岩の『天人論』刊行から4か月後の明治36(1903)年9月25日、高橋五郎『最新一元哲学』が発行された。わが国では明治後期に一元論哲学が流行したが、高橋『最新一元哲学』は黒岩『天人論』と並び、そうした流行の一翼を担った書物の一つであると思われる。『最新一元哲学』の序で高橋は、黒岩周六が最近「例の有名なる天人論」を著わして正々堂々と「准唯心論的一元論」を提唱し

たところ、「一元」という名がにわかに「世間に喧びすしく成れり」と述べている。黒岩『天人論』が当時相当に注目を集めた書であったことがうかがわれる。これに続けて高橋は、自分は黒岩『天人論』の刊行以前から某学校に哲学科を設置して一元哲学など各種の哲学を講究しようと計画していたところだったので、この機会に本書『一元哲学』を著わし講究しようと思った、と述べ、一元論が喧伝されるようになるのに貢献した『天人論』に謝意を表している⁹⁴。

『最新一元哲学』で高橋は、古代から近代に至る哲学史上の一元論 (monism) 思想を概観し、とりわけスピノザやショーペンハウエルの学説を詳しく解説した後、フェヒナーの学説を紹介している。フェヒナーの哲学的立場は、純粋な一元論とは異なるものであるが、同書で高橋はフェヒナー哲学を広義の一元論哲学の一つとみなしているように思われる⁹⁵。

高橋は、フェヒナーの生涯についても、フェヒナーの生涯と業績を手短かにまとめた「某氏」の記述を転載する形で紹介している。ちなみに、「某氏」について高橋は何も記していないので、「某氏」が誰であるかは不明である。高橋は「某氏」の記述を「孫引き」し、フェヒナーの生涯について、故フェヒナーがライプツィヒ大学の教授だったこと、近年の心理学書には必ずフェヒナーの名が「実験心理学の巨擘」として繰り返し登場すること、フェヒナーがPsychophysik (精神物理学) という新しい学問を創始したこと等を記している。また高橋は、「浅学耳食の徒ややもすれば思えらく彼〔フェヒナー〕は唯物論者の泰斗なりと。何ぞ図らん彼はまた思想を高遠に奔る哲学者なり。天地の微妙を穿つ詩人なり」「真に彼は粗俗の唯物論者に非ざりし、否な却って世の軽躁児が唯物論に奔るを叱せん」と書いている。さらに、フェヒナーに『死後の生』や『ナンナ』『ゼンド・アヴェスタ』『日景と夜景』 [= 『光の世界観、闇の世界観』] などの著作があることも紹介している⁹⁶。

『最新一元哲学』は、このように、フェヒナーに関する当時としては詳しい解説があるという点のみならず、『死後の生』の具体的内容について触れられているという点においても注目に値する。さらに10年早く『死後の生』を紹介した大西「読我観小景」(明治26年)には及ばないとはいえ、明治36(1903)年という極めて早い時期に高橋が『最新一元哲学』で紹介した『死後の生』の具体的内容は、明治43(1910)年にわが国初の『死後の生』邦訳である平田訳・初版が刊行される以前のわが国で、フェヒナーの死生観を知るための数少ない貴重な手がかりだったはずである。

ここで『最新一元哲学』の『死後の生』の具体的内容を引用しよう。既に説明したように、以下の記述は高橋自身が記したのではなく、「某氏」の記述を高橋が引用・紹介したものである。

但し今は単に「死後の生」につきて一言せんに、開卷第一に巖然と説き出して曰く。

“Man lives on earth not once, but three times: the first stage of life is continual sleep; the second, sleeping and waking in turns; the third, waking for ever.”

「人類は地上に只一たび生くるに非ず、三たび生くるなり、第一期の生は続いて睡る也。第二期の生は交も睡りかつ醒むる也。第三期の生は永遠に醒むる也」。

“The spirits of the dead exercise continual influence on the mind of the living — Only we lack the appropriate senses wherewith to perceive the spirits of the third stage.”

是れ肉眼を以て靈物の有無を審決すべき者に非ざるを説ける也。

“Behold in this the wonderful justice throughout the universe — There are no outward rewards and punishments for our actions; but there is no dead stop either, no absorbing of the soul into the universe —

‘Let us then be up and doing’ For he who walks at a slow pace here will be lame there.” —

是れ未来の賞罰を説ける也。

もちろんこれ等の事は各自に想像して必ずしも皆ことごとく当たるものにあらず。天啓なくしては殆ど暗中に摸索するの憾なきに非ず。ただ我輩はフェヒネル氏がその心理試験の結果として唯物論者とならざりしを一言せるのみ。[…]

[傍点と傍線とルビは原文。一部、現代的表記に改変]⁹⁷

繰り返しになるが、「某氏」の記述からの「孫引き」の形ではあるが、高橋『最新一元哲学』における『死後の生』の具体的内容の紹介が、フェヒナーの死生観をわが国に知らしめる上で一定の役目を果たしたことは間違いないであろう。

4-6. 高橋五郎『宇宙観』（明治37年）——フェヒナー『死後の生』のさらなる紹介——

『最新一元哲学』刊行翌年の明治37（1904）年、高橋五郎は立て続けに『宇宙観』を上梓している。すでに黒岩『天人論』の節で、当時わが国ではヘッケルの一元論的学説が流行していたことをみてきたが、高橋『宇宙観』にもヘッケルの話題が登場する。高橋によれば、現今の一元論の主唱者ヘッケルの一元論は、宇宙に終極目的があることを認めず、機械的進化法によって一切の現象を説明しつくそうとする機械的一元論である。また高橋は、ヘッケルは一切の心的現象を無視する者に似ており、心理学と物理学を混同しているが、ヘッケルと同じドイツ人である大家フェヒネルは唯物論を断固として認めようとしない、と述べている⁹⁸。

高橋『宇宙観』には、フェヒナー『死後の生』についても以下のような記述がある。死生観に関するゲーテの言葉に続けて次のように書かれている。

フェヒネル自身もまた『死後の生命』Leben nach dem Todeと題する小冊子を著わして、この問題を論じたり。曰く、——

『人類は地上に只一たび生くるに非ず、三たび生くるなり。第一期の生は続いて睡るなり、第二期の生は交も睡りかつ醒むるなり、第三期の生は永遠に醒むるなり。』

『死者の靈魂は生者の精神上へ不断の感化を及ぼす者なれど、吾人はこの第三期の靈魂を知覚すべき微妙の耳目なきを憾むのみ。』

『視よ、ここに驚歎すべき賞罰の宇宙にあまねく行なわるるあるぞかし。もちろん外部の賞誉苛責の在るには非ず。しかれども一たび死するや萬事既に休むに非ず。また靈魂の波瀾宇宙の大洋裏に没入し了るにも非ず。……然れば吾人は起きて働かざるべからず。如何となれば

ここ（この世）にて歩趨遅々たる者は彼処^{かしこ}（来世）にて跋行せざるべからざればなり。

〔…〕

〔傍点と傍線とルビは原文。一部、現代的表記に改変〕⁹⁹

このように高橋は、『最新一元哲学』に続き『宇宙観』においても、『死後の生』の具体的内容を紹介している。高橋『最新一元哲学』と『宇宙観』は、わが国初の『死後の生』の邦訳（平田訳）に6、7年先立つ書である。高橋のこれら二書は、わが国において『死後の生』への関心を高める上で少なからぬ役割を果たしたとみてよいであろう¹⁰⁰。

以上、本章では、明治30年代の思想的状況を井上円了『破唯物論』、中江兆民『一年有半』『続一年有半』、高橋五郎『一年有半と旧式の唯物論』『最新一元哲学』『宇宙観』、黒岩周六（涙香）『天人論』などを手がかりに考察した。明治30年代は、唯物論の流行への徹底抗戦の書である井上円了『破唯物論』で幕を開けた。明治34年には兆民の唯物論思想の書『一年有半』『続一年有半』が出版されて爆発的に売れ、人々の間に唯物論が浸透しはじめた。それに対抗し、高橋五郎は反唯物論思想の書『一年有半と旧式の唯物論』を刊行した。黒岩涙香は『天人論』を著わしフェヒナー思想に類似した思想を展開しつつ一元論哲学を広めた。それを受け、高橋五郎は一元論的かつ反唯物論的な思想書『最新一元哲学』や、宇宙の無意識について言及した『宇宙観』を上梓した。以上のことに加え、高橋が『最新一元哲学』と『宇宙観』でフェヒナー『死後の生』を紹介していることもみてきた。

明治30年代には、一元論哲学の流行や無意識哲学の流行と連動した汎生命的宇宙観、および、唯物論の流行への反動としての反唯物論哲学が思想的背景としてあり、それらと親和性のあるものとして『死後の生』が捉えられていたとみることができるだろう。

5. 明治40年代 — 夏目漱石「思ひ出す事など」等を巡って —

本章では、明治40年代のはじめから、わが国で初めて『死後の生』邦訳が出版された明治43（1910）年ごろまでの間に刊行された夏目漱石らの文献を中心に、『死後の生』受容の明治40年代の思想的背景を探る。

本章の構成は次のとおりである。まず、三宅雪嶺の明治40年代の文献で、フェヒナーに関する記述も含まれている『宇宙』をとりあげる。次に、同じくフェヒナーについての言及がある夏目漱石「思ひ出す事など」を糸口に、漱石が『死後の生』を読んでいた可能性について検討し、明治40年代の『死後の生』受容の思想的背景について考察する。

5-1. 三宅雪嶺『宇宙』（明治42年） — フェヒナーへの言及 —

まず、三宅雪嶺の明治40年代の著作をとりあげる。われわれは既に三宅雪嶺の明治25（1892）年の著作『我観小景』についてみてきた。『我観小景』の内容にはフェヒナー『死後の生』に通ずるものがあつたが、同書にはフェヒナーに関する言及は存在しなかった。それに対し、雪嶺の『宇宙』には、少量ではあるがフェヒナーに関する記述があり、そこからは雪嶺がフェヒナーの思想を相当な程

度知っていたことがうかがわれる。総頁数621頁の大著『宇宙』は明治42(1909)年に政教社から刊行された。その3年前から雑誌『日本人』に「原生界と副生界」という題で連載したものをまとめたのが『宇宙』である。

『宇宙』からフェヒナーに関する箇所を引用しよう。雪嶺は、ニュートンが宇宙を有機体のようなものとして考えていたことに触れたのち、次のように記している。

〔…〕フェヒネルは物理学に長じ、心意物理学〔＝精神物理学〕の基礎を造り、ヴントをしてこれを大成せしめしだけありて、宇宙を軽々しく看過せず、星辰の団体に精神の満ちるを主張せり。その説く所は汎神教なるも従来の瞑想的なると違い、すこぶる物理を加味せる所あり。心意物理学に比して不充分なるにせよ、世に軽んぜられ居るが如く軽んずべきものにあらず。かえって大に見るべき無しとせず。ただ初め神の存在を仮定せしがために混乱を避くる能わざりしならん。

眼識の透徹せることブルーノの如く、ニュートンの如く、フェヒネルの如くんば、超大至広なる宇宙の何等かの意義あるを看取するに相違なけれど、宇宙その物に生命ありとし、人格的神の立場を失はしむるの類は、直ちに基督教より無神教呼ばわりせられ、種々の点に不便を被るを免れず。〔一部、現代的表記に改変〕¹⁰¹

『宇宙』の中で雪嶺は、宇宙を、単なる死物同然のものではなく生命に満ちた巨大な存在として捉えている。つまり『宇宙』は雪嶺の「汎生命的宇宙観」の書である。さらに雪嶺は、宇宙にも意識があり、人間の意識は宇宙の意識の一部であるという、フェヒナーに通ずる見方をも提示している¹⁰²。

この雪嶺の『宇宙』刊行翌年の明治43(1910)年に、わが国初の『死後の生』の翻訳である平田訳が刊行されたことについては、すでにみたとおりである。雪嶺の『宇宙』は、わが国でフェヒナーが注目される地盤を形づくるのに貢献した書の一つであるとみてよいであろう。

5-2. 夏目漱石「思ひ出す事など」(明治43-44年)

— 漱石がフェヒナー『死後の生』を読んでいた可能性 —

夏目漱石(本名、金之助)(1867-1916)は小説家・英文学者である。明治26(1893)年、帝国大学英文科を卒業した。漱石には、『吾輩は猫である』『坊ちゃん』『三四郎』『行人』『こゝろ』など有名な作品が多数ある。

以下で漱石とフェヒナー『死後の生』の関係について考察するが、その際にウィリアム・ジェームズの著作について論ずる必要があるため、まずは、ジェームズの著作についてみておくことにしよう。

ウィリアム・ジェームズ(William James; 1842-1910)はアメリカ合衆国の心理学の草分けであり、哲学者としても知られている。主著に*The Principles of Psychology*(『心理学原理』)、*A Pluralistic Universe*(『多元的宇宙』)、*The Varieties of Religious Experience*(『宗教的経験の諸相』)などがある。

フェヒナーより40歳以上年下のジェームズはフェヒナーの影響を受けており、フェヒナー『死後の

生』の英訳（1904年）に序文を寄せている。また、ジェームズ自身の著作にも、時折フェヒナーに関する言及がみられる。とりわけ『多元的宇宙』には、フェヒナーや『死後の生』に関する非常に詳しい記述がある。

ちなみに、ジェームズ『多元的宇宙』のわが国初の翻訳は、昭和36（1961）年に日本教文社から出された『ウィリアム・ジェイムズ著作集』第6巻収録の、吉田夏彦による訳だと思われる。明治期には、少なくとも単行書の形で出版された邦訳は無かったはずであり、『多元的宇宙』の内容を知るとは困難だったはずである。それでも知識人の間ではジェームズは、かなり有名だったとみえて、漱石は『多元的宇宙』の原書が刊行された明治42（1909）年の翌年には、すでに原書を手にしている。漱石の明治43年8月7日（日）の日記には「独りでジェームズの多元的宇宙を読むほか意味が分らず」とある。また、明治43年10月13日（木）の日記には「ジェームズの死を雑誌で見る。八月末の事、六十九歳」とあり¹⁰³、漱石がジェームズや『多元的宇宙』のことを時々気にかけていたことがうかがわれる。

漱石が初めてフェヒナーの存在を知ったのがいつなのかは定かではないが、少なくとも『多元的宇宙』の原書を読んだ前後に漱石がフェヒナーを意識していたことは間違いないと思われる。その証拠に明治43、4年ごろの漱石の手帳には、「○Jamesノ文章」というメモ書きのすぐ近くに、フェヒナーの名が含まれた断片的メモ書きが次のように記されている。

○Fechner — consciousness of the earth

— analogous?

Physicist — molecular activities of crystal

○変化, antagonism. fossilized

○Continuity? — Gap?

life — death

organic — inorganic

light — darkness¹⁰⁴

これらの断片から、地球に意識があるというフェヒナーの説を漱石が知っていたことがわかる。また、フェヒナーの名をメモした際、漱石の関心が「生 (life) と死 (death)」や「生物的なるもの (organic) と非生物的なるもの (inorganic)」にあったことが察せられる。

引き続き、漱石がフェヒナーに関心をもっていた可能性を示唆する、明治40年代の漱石の小品「思ひ出す事など」についてみてゆこう。「思ひ出す事など」は『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』に明治43（1910）年から明治44（1911）年にかけて断続的に発表された連載である。連載終了後もない明治44年には、単行書『切抜帖より』（春陽堂）に収録されている¹⁰⁵。

「思ひ出す事など」には、フェヒナー『死後の生』についての直接的な記述はない。だが、漱石がオリヴァー・ロッジ〔ロッヂ〕(Sir Oliver Joseph Lodge; 1851-1940) 著の『死後の生』を読んだという

記述のすぐ後に、フェヒナーの名が登場する以下のようにくだりがある。漱石がフェヒナーの『死後の生』を読んでおり、ロジの同名の書からフェヒナー『死後の生』を思い出した可能性を示唆するものであろう。

死後の生！名からしてが既に妙である。我々の個性が我々の死んだ後迄も残る、活動する、機会があれば、地上の人と言葉を換す。スピリチズムの研究を以て有名であったマイエルは慥かにかう信じていたらしい。そのマイエルに自己の著述を捧げたロジも同じ考えのように思われる。ついこの間出たポドモアの遺著も恐らくは同系統のものだろう。

独乙のフェヒナーは十九世紀の中頃既に地球その物に意識の存すべきゆえんを説いた。石と土と鑛あらがねに靈があると云うならば、有あるとするを妨げる自分ではない。しかしせめてこの仮定から出立して、地球の意識とは如何なる性質のものであろう位の想像はあつて然るべきだと思ふ。

われわれの意識には敷居のような境界線があつて、その線の下は暗く、その線の上は明らかであるとは現代の心理学者が一般に認識する議論のように見えるし、またわが経験に照しても至極と思われるが、肉体と共に活動する心的現象にかよふの作用があつたにした所で、わが暗中の意識すなわちこれ死後の意識とは受取れない。〔ルビは原文。一部、現代的表記に改変〕¹⁰⁶

上記引用箇所「独乙のフェヒナー」以下の部分に関して漱石研究者・重松泰雄は、漱石自身が特に断り書きや注記を付しているわけではないが、ここで登場するフェヒナーや意識の明暗の記述は、ジェームズの『多元的宇宙』や『宗教的経験の諸相』の記述に基づいたものだという。重松によれば「漱石の旧蔵書中にはフェヒナーの著作は一冊も見当たらない」。だが、漱石が、ジェームズ『多元的宇宙』の原書（1909年）の、フェヒナーに関する記述の所々に傍線を引いていることから、重松は、ジェームズ『多元的宇宙』が「漱石のフェヒナー論の原拠であることは疑いを容れぬだろう」と推測している¹⁰⁷。

以下に『多元的宇宙』の翻訳の一部を掲載し、漱石が原書の手沢本『多元的宇宙』に傍線を引いた箇所であると重松の論文に記されている箇所に傍線を付す。

精神の秩序が広大になれば、身体の秩序も広大になる。フェヒナーによれば、我々が住んでいるこの地球も、それ自身の集合的な意識〔collective consciousness〕をもっているにちがいない。また太陽や月や遊星もそうにちがいない。太陽系全体も、それ自身のさらに広い意識をもっていて、我が地球の意識も、このより広い意識の中で一役買っているにちがいない。だからまた、全天体系もその意識をもっている。そうしてもし全天体系が、質量的にみた場合、あるところのすべてのものの総和でないとすれば、この全天体系は、そのほかのすべてのものと共に、宇宙の絶対的に全体化された意識の体〔the body of that absolutely totalized consciousness of the universe〕となっているであろう。この宇宙の絶対的に全体化された意識を、人は神というのである。

こういうわけで、フェヒナーは、その神学においては、一元論の思想をもっている。しかし彼の

宇宙には、人間と、究極的にすべてを包括する神との間に、あらゆる度合の霊的な存在 (spiritual being) を入れる余地がある。[…]

[吉田夏彦訳。傍点は翻訳書原文。傍線は、漱石の手沢本の傍線部分。傍線の位置は、重松, 1978, p.1120に基づく]¹⁰⁸

『死後の生』をはじめ、様々な自著の中でフェヒナーが説いた意識論の特徴は、「地球の意識」「宇宙の意識」などの個体を超えた意識があり、個体の意識はそれらに包含されるという考え方にある。また、意識と無意識とは互いに分断された別々のものではなく、両者は連続的なものであるという考え方もフェヒナー意識論の特徴の一つである。フェヒナー意識論に従えば、連続的な意識と無意識を分けるのは、「識閥 (Schwelle des Bewusstseins)」と呼ばれる意識の閥である。フェヒナーは『死後の生』の中で、意識を司る活動がこの識閥の上にあるときにわれわれの意識は存在するが、死後、われわれの意識を司る活動は識閥の下に沈む。ただし、消滅して無に帰すわけではない、と論じている¹⁰⁹。

漱石「思ひ出す事など」の前掲の引用部分には、「死後の生！」の文言があり、フェヒナーの地球意識が紹介されていた。そして漱石は、意識の「敷居のような境界線」すなわち識閥に言及しつつ、識閥下の意識があるとしても、それを「死後の意識とは受取れない」と述べていた。また、漱石が傍線を引きながら読んだ前掲のジェームズ『多元的宇宙』の原書にも、フェヒナー関連の豊富な記述があった¹¹⁰。フェヒナー『死後の生』を蔵書としては所持していなくても、漱石が『死後の生』に強い関心を持っており、その内容を詳しく知っていた可能性は極めて高いとみてよいであろう。

以上、本章では明治40年代前半の思想的状況を、三宅雪嶺『宇宙』、夏目漱石「思ひ出す事など」等を手がかりに考察した。雪嶺の「汎生命的宇宙観」の書『宇宙』には、宇宙にも意識があり、人間の意識は宇宙の意識の一部であるという、フェヒナーに通ずる見方が提示されていた。夏目漱石「思ひ出す事など」には、「死後の生」との関連でフェヒナーや「地球の意識」に関する記述があり、さらには、フェヒナー意識論の識閥に極めて近い話題が見受けられた。漱石が、フェヒナーの『死後の生』やそこで展開される意識論ないし無意識論に関心を寄せていたのは確かだと思われる。

明治40年代前半には雪嶺や漱石らの著作の影響で、「汎生命的宇宙観」や、スピリチュアリズムと連動した無意識の世界への関心をもつ人々が一定数存在していた。そうした背景が、明治43年にわが国初の『死後の生』邦訳が出版される機運を醸成した可能性があるであろう。

なお、本稿でとりあげた文献を中心に、フェヒナー『死後の生』とその周辺に関する年表を、表1に掲載する。

〈表1〉 フェヒナー『死後の生』とその周辺に関する年表（1801年～1948年）

享和元(1801)年	4月19日、フェヒナー生まれる。
天保7(1836)年	『死後の生』原書・初版がDr. Misesのペンネームで刊行される。
明治20(1887)年	11月18日、フェヒナー死去(86歳)。
明治21(1888)年	[無記名]「フェヒネル」。 H. O.「新心理学」。 [無記名]「心物理学科」。
明治25(1892)年	元良勇次郎が東京帝国大学文科大学でわが国初の「精神物理学」の講義。 三宅雪嶺(雄二郎)『我観小景』。 大西祝「独想二題」。
明治26(1893)年	大西祝「読我観小景」。
明治27(1894)年	日清戦争勃発。
明治28(1895)年	日清戦争終結。
明治31(1898)年	井上円了『破唯物論』。
明治32(1899)年	井上円了『靈魂不滅論』。
明治34(1901)年	中江篤介〔兆民〕『一年有半』。『続一年有半』。 高橋五郎『一年有半と旧式の唯物論』。
明治36(1903)年	黒岩周六『天人論』。 高橋五郎『最新一元哲学』。 藤村操の投身自殺。明治20年代以降の催眠術の流行のピーク。
明治37(1904)年	日露戦争勃発。 高橋五郎『宇宙観』。
明治38(1905)年	日露戦争終結。
明治42(1909)年	三宅雪嶺(雄二郎)『宇宙』。
明治43(1910)年	フェヒネル『死後の生活』平田元吉 訳。初版。 福来友吉らによる御船千鶴子の千里眼実験が話題になる。
明治43(1910)～ 明治44(1911)年	夏目漱石「思ひ出す事など」。
大正3(1914)年	第一次世界大戦勃発。
大正5(1916)年	フェツヒネル『死んだら如何なるか』田宮馨 意訳。初版。
大正7(1918)年	第一次世界大戦終結。
大正13(1924)年	フェヒネル『死後の生活』平田元吉 訳。第2版。
昭和6(1931)年	満州事変勃発。
昭和8(1933)年	満州事変の停戦協定締結。
昭和12(1937)年	日中戦争始まる。
昭和14(1939)年	第二次世界大戦始まる。
昭和16(1941)年	12月8日、真珠湾攻撃、太平洋戦争に突入。
昭和20(1945)年	8月15日、日本が降伏。第二次世界大戦終結。
昭和21(1946)年	フェツヒネル『死んだら如何なるか』田宮馨 意訳。豆本版。
昭和23(1948)年	フェヒネル『死後の生存』佐久間政一 訳。 フェヒネル『宇宙光明の哲学 靈魂不滅の理説』上田光雄 訳。

6. 結論

本稿では、わが国における『死後の生』の翻訳状況を調査し、なぜ、これほどまでに多種類の翻訳がなされたのか、また、キリスト教的色彩の強いフェヒナーの死生観がこれほど度々日本人に受容された思想的背景はどのようなものであったのか、ということをつまららかにする目的で研究を行なった。フェヒナーやフェヒナー『死後の生』に関する記述のある明治期の文献を中心に分析した。

その結果、平田訳（初版および第2版）・田宮訳（初版および豆本版）・佐久間訳・上田訳のいずれもが、日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦のいずれかの戦争の戦中、もしくは戦争終結から6年以内に刊行されていることが判明した。戦争が人々に死を強く意識させ、そのことが『死後の生』の翻訳出版を促した可能性のあることが示唆された。

また、平田・田宮・佐久間・上田の四人の翻訳者たちが邦訳を刊行した時代は明治期・大正期・昭和期と様々だが、四人は共通して、科学技術と物質文明の発展につれ精神的な危機が生じていることを危惧し、そうした危機を乗り越えるために、科学と宗教の両者に深い理解があり両者を止揚・融合できる人物の出現を待ち望んでいたということがわかった。そして、そうした可能性のある人物としてフェヒナーに注目し、『死後の生』を翻訳したことが判明した。

『死後の生』が翻訳された思想的背景としては、わが国初の『死後の生』の翻訳（平田元吉 訳）の出版以前に、わが国には（1）汎生命的宇宙観、（2）反物質主義的思想（一元論哲学やスピリチュアリズムの流行と連動）、（3）無意識の世界が存在するという思想（ハルトマン哲学やスピリチュアリズムの流行と連動）の三思想が人々に注目される状況があったことが明らかにされた。そして、そうした思想的背景があったからこそ、それら三思想と類似した思想を含んだ『死後の生』が人々に受け入れられた可能性の高いことが示唆された。

本研究では、わが国における『死後の生』受容の思想的背景を主として明治期を中心に考察した。紙数の都合で十分には論ずることができなかつた、『死後の生』受容とスピリチュアリズムの流行¹¹¹との関係、および、『死後の生』受容と大正期以降の思想的背景との関係を探ることが今後の課題である。

本研究でみてきたように、わが国では、科学技術と物質文明のみが過度に発達し精神的な危機が訪れる度に、『死後の生』の翻訳がなされてきた。『死後の生』の原書・初版が刊行されてから180年が経過した現在、われわれは再び精神的な危機の時代を迎えている。フェヒナー『死後の生』や、『死後の生』に関心を寄せた先人たちの思索に立ち返りつつ、生と死の意味を見つめ直す必要があろう。

参考文献

- [Fechner, Gustav Theodor] Dr. Mises (1836). *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*. Dresden: Ch. F. Grimmer.
- Fechner, Gustav Theodor (1866). *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*. 2. Auflage. Leipzig: Leopold Voß.
- Fechner, Gustav Theodor (1882). *On life after death: From the German of Gustav Theodor Fechner*. translated by Hugo Wernecke. London: Sampson Low, Marston, Searle, & Rivington. [原典: *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*.]
- Fechner, Gustav Theodor (1887). *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*. 3. Auflage. Leipzig: Leopold Voß.
- Fechner, Gustav Theodor (1900). *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*. 4. Auflage. Leipzig: Leopold Voß.
- Fechner, Gustav Theodor (1903). *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*. 5. Auflage. Leipzig: Leopold Voß.
- Fechner, Gustav Theodor (1904). *The little book of life after death*. translated by Mary C. Wadsworth. introduced by William James. Boston: Little, Brown, & Company. [原典: *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*.]
- Fechner, Gustav Theodor (1906). *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*. 6. Auflage. Leipzig: Leopold Voß.
- [Fechner, Gustav Theodor] フェヒネル (1910). 『死後の生活』平田元吉 訳。東京：丙午出版社。

- [Fechner, Gustav Theodor] フェツヒネル (1916). 『死んだら如何なるか』 田宮 馨 意訳。大阪：帝国神秘会。
- [Fechner, Gustav Theodor] フェヒネル (1924). 『死後の生活』 平田元吉 訳。第2版。東京：丙午出版社。
- [Fechner, Gustav Theodor] フェツヒネル (1946). 『死んだら如何なるか』 田宮 馨 意訳。豆本版 (第10版)。大阪：帝国神秘会。
- [Fechner, Gustav Theodor] フェヒネル (1948a). 『死後の生存』 佐久間政一 訳。東京：北隆館。
- [Fechner, Gustav Theodor] フェヒネル (1948b). 『宇宙光明の哲学・靈魂不滅の理説』 上田光雄 訳。東京：光の書房。
- Fechner, Gustav Theodor (2004). 「フェヒナー『死後の生についての小冊子』(訳, その1)」 吉田正史 訳。『九州栄養福祉大学研究紀要』。第1号。pp. 13-19.
- Fechner, Gustav Theodor (2005). 「フェヒナー『死後の生についての小冊子』(訳, その2)」 吉田正史 訳。『九州栄養福祉大学研究紀要』。第2号。pp. 1-6.
- [Fechner, Gustav Theodor] フェヒナー (2008). 『フェヒナー博士の死後の世界は実在します』 服部千佳子 訳。東京：成甲書房。
- 「フェヒネル」(1888). 『哲学会雑誌』。第22号。pp. 634-638.
- 船山信一 (1999). 『明治哲学史研究』。(船山信一著作集 第6巻)。東京：こぶし書房。
- 比較思想史研究会 編 (1975). 『明治思想家の宗教観』。(大蔵選書 16)。東京：大蔵出版。
- 平山洋 (1989). 『大西祝とその時代』。東京：日本図書センター。
- H. O. (1888). 「新心理学」。『哲学会雑誌』。第20号。pp. 487-493.
- 一柳廣孝 (1993). 「深層の近代明治期の心靈学受容をめぐる(3) ——」。『人文科学論集』。第52号。pp. 412-370.
- 一柳廣孝 (2006). 『催眠術の日本近代』。(復刊選書 7)。東京：青弓社。
- 井上円了 (1898). 『破唯物論 —— 一名 俗論退治 ——』。東京：四聖堂。
- 井上円了 (1899). 『通俗講義 靈魂不滅論 一附 靈魂集説一』。東京：南江堂。
- 井上哲次郎・元良勇次郎・中島力造 (1912). 『英独仏和 哲学字彙』。東京：丸善。
- 岩淵輝 (2007). 「グスタフ・フェヒナーの生命思想 —— 精神物理学との関わりにおいて ——」。『明治大学教養論集』。第416号。pp. 1-27.
- Iwabuchi, Akira (2009). “The favourable reception of Gustav Fechner’s ‘The little book of life after death’ in Japan”. *Proceedings of the 25th Annual Meeting of the International Society for Psychophysics* (The International Society for Psychophysics). pp. 405-410.
- 岩淵輝 (2014). 『生命 (ゼーレ) の哲学 —— 知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯 ——』。東京：春秋社。
- 岩淵輝 (2015). 「グスタフ・フェヒナーの〈意識の関〉概念 —— 1870年代から1970年代にかけてのわが国におけるその受容 ——」。『明治大学人文科学研究所紀要』。第76巻。pp. 209-239.
- James, William (1909). *A pluralistic universe: Hibbert lectures to Manchester College on the present situation in philosophy*. London: Longmans, Green & Co.
- [James, William] ジェイムズ (1961). 『多元的宇宙』 吉田夏彦 訳。(ウィリアム・ジェイムズ著作集 6)。東京：日本教文社。
- 上村直己 (2005). 『九州の日独文化交流人物誌』。熊本：熊本大学文学部地域科学科。
- 黒岩周六 (1903). 『天人論 全』。東京：朝報社。
- Laßwitz, Kurd (1896). *Gustav Theodor Fechner*. herausgegeben von Richard Falckenberg (Frommanns Klassiker der Philosophie, Band I). Stuttgart: Fr. Frommann.
- 三宅雄二郎 (1909). 『宇宙』。東京：政教社。
- 宮沢虎雄 (1974). 「心靈研究者の歩んだ道 —— 私と心靈研究 (9) ——」。『心靈研究』。第28巻。第5号。pp. 26-30.
- 元良勇次郎 (1893). 「我観小景ヲ読ム」。『哲学雑誌』。pp. 602-614.
- 中江篤介 [兆民] (1901a). 『一年有半』。東京：博文館。
- 中江篤介 [兆民] (1901b). 『続 一年有半』。東京：博文館。
- 中江兆民 (1995). 『一年有半・続一年有半』 井田進也 校注。(岩波文庫)。東京：岩波書店。

- 夏目金之助 (1911). 「思ひ出す事など」。夏目金之助『切抜帖より』。東京：春陽堂。pp. 1-234.
- 夏目金之助 (1994). 『漱石全集』。第12巻 (小品)。東京：岩波書店。
- 夏目金之助 (1996). 『漱石全集』。第20巻 (日記・断片下)。東京：岩波書店。
- 大西祝 (1892). 「独想二題」。『宗教』。第6号。pp. 7-15.
- 大西祝 (1893). 「読我観小景」。『六合雑誌』。第146号。pp. 73-88.
- 佐藤恵子 (2015). 『ヘッケルと進化の夢 (ファンタジー) —— 一元論, エコロジー, 系統樹 ——』。東京：工作舎。
- 佐藤達哉 (2002). 『日本における心理学の受容と展開』。京都：北大路書房。
- 重松泰雄 (1978). 「漱石晩年の思想 (上) —— ジェイムズその他の学説を手がかりとして ——」。『文学』。第46巻。第9号。pp. 1117-1128.
- 「心物理学科」(1888). 『哲学会雑誌』。第21号。pp. 566-571.
- 神陵史編集委員会 編 (1980). 『神陵史 —— 第三高等学校八十年史 ——』。京都：三高同窓会。
- 昭和女子大学近代文学研究室 (1974). 『近代文学研究叢書』。第39巻。東京：昭和女子大学近代文化研究所。
- 高橋五郎 (1901). 『一年有半と旧式の唯物論』。東京：一二三館。
- 高橋五郎 (1903). 『最新一元哲学』。東京：前川文栄閣。
- 高橋五郎 (1904). 『宇宙観』。東京：前川文栄閣。
- 上田光雄 (1948). 『ハルトマンの無意識の哲学』。(世界哲学講座 4)。東京：光の書房。
- Wundt, Wilhelm Max (1901). *Gustav Theodor Fechner. Rede zur Feier seines hundertjährigen Geburtstages.* Leipzig: Wilhelm Engelmann.
- 柳田泉 編 (1967). 『三宅雪嶺集』。(明治文学全集 33)。東京：筑摩書房。

註

- 1) 本研究の基となった予備的研究の結果は、アイルランドのゴールウェイで開催された第25会・国際精神物理学会・年会 (2009年10月) において発表された。Iwabuchi, 2009.
- 2) 岩淵, 2007 参照。
- 3) 代表的な英訳には、次のものがある。Fechner, 1882; 1904.
- 4) ただし、註1に記したように、本稿の予備的研究としてわれわれが行なった先行研究は存在する。Iwabuchi, 2009.
- 5) 岩淵, 2014, pp. 19-66, 248-261 参照。
- 6) 例えば、Dr. Mises, 1836; Fechner, 1866; 1887; 1900; 1903; 1906.
- 7) われわれは以前に拙論で、本稿とは別の観点、具体的には『精神物理学原論』との関わりという観点から『死後の生』にみられるフェヒナーの生命思想の特徴をまとめたことがある。岩淵, 2007, pp. 21-23 参照。
- 8) 神陵史編集委員会, 1980, pp. 497-498, 790.
- 9) フェヒネル, 1910.
- 10) 宮沢, 1974, p. 27 参照。なお、宮沢虎雄は、平田訳 (『死後の生活』) が絶版になった後、これを少し増補した『近代心靈学』(大正14年) が出版されたと記しているが、『近代心靈学』は平田訳とは関係のない平田元吉の単著である。
- 11) フェヒネル, 1910, 訳者序 pp. 5-6 参照。平田が参考にしたのは次の文献だと思われる。Laßwitz, 1896; Wundt, 1901.
- 12) フェヒネル, 1910, 訳者序 p. 5 参照。
- 13) フェヒネル, 1924, 訳者による新版序 pp. 1-2 参照。
- 14) Fechner, 1900.
- 15) 一柳, 2006, p. 195 参照。
- 16) フェツヒネル, 1916.
- 17) フェツヒネル, 1946.
- 18) 本稿執筆時までにわれわれは田宮訳・豆本版をのべ3冊手にしたが、いずれも発行日に関する記述は「昭和

二十一年三月一日 第一〇版発行」であった。

- 19) 上村, 2005, pp. 117-119 参照。
- 20) フェヒネル, 1948a.
- 21) フェヒネル, 1948a, pp. 133-134.
- 22) フェヒネル, 1948a, 訳者序 p. 1 参照。
- 23) 原著第6版の出版社Leopold Voßによって記された原著第6版の序によれば, 原著3版以降, 原著第6版まで本文には内容的な差は無いという。Cf. Fechner, 1906, S. X-XI.
- 24) フェヒネル, 1948a, 訳者序 pp. 3-5.
- 25) フェヒネル, 1948bの奥付参照。
- 26) 上田, 1948のタイトルページ参照。
- 27) フェヒネル, 1948b.
- 28) フェヒネル, 1948b, 訳者はしがき p. 1 参照。
- 29) フェヒネル, 1948b, 訳者はしがき p. 7 参照。
- 30) フェヒナー, 2008.
- 31) フェヒナー, 2008, p. 8.
- 32) Cf. Dr. Mises, 1836, S. 11-12.
- 33) 服部訳以外の邦訳にも, 各章に訳者による独自のタイトルが付与されているものがあるが, たとえば平田訳の場合は本稿で触れたように, 原著に存在しないタイトルを訳者が付与したことが明記されており, また, その理由も読者の便宜をはかったつもりである旨, 記されている。上田訳でも各章のタイトルは原著にないものであることが明記されている。フェヒネル, 1910, 訳者序 p. 5; フェヒネル, 1948b, 訳者はしがき p. 1 参照。
- 34) Fechner, 2004; 2005.
- 35) フェヒネル, 1910, 訳者序 p. 1.
- 36) フェヒネル, 1910, 訳者序 pp. 1-2 参照。
- 37) フェヒネル, 1910, 訳者序 pp. 2-4 参照。
- 38) フェヒネル, 1924, 訳者による新版序 pp. 2-3. 一部, 現代的表記に改変。
- 39) フェツヒネル, 1916, p. 175; 1946, p. 175 参照。
- 40) フェツヒネル, 1916, pp. 191-192 参照。
- 41) フェヒネル, 1948a, pp. 128-129 参照。
- 42) フェヒネル, 1948a, p. 133.
- 43) たとえば, 岩渕, 2014, pp. 325-330 参照。
- 44) フェヒネル, 1948b, p. 7. 一部, 現代的表記に改変。
- 45) 比較思想史研究会, 1975, pp.17-18, 37-39 参照。
- 46) H. O., 1888 参照。
- 47) 「心物理学科」, 1888 参照。
- 48) 佐藤達哉, 2002, p. 109 参照。
- 49) 「フェヒネル」, 1888, p. 637. 一部, 現代的表記に改変。
- 50) 「フェヒネル」, 1888, p. 637. 一部, 現代的表記に改変。
- 51) 柳田, 1967, pp. 431-439 参照。
- 52) 柳田, 1967, p. 426 参照。
- 53) 大西, 1893, pp. 73-74 参照。
- 54) 柳田, 1967, pp. 237-271, 426-427 参照。
- 55) 柳田, 1967, pp. 254-271, 426-427 参照。
- 56) Cf. Dr. Mises, 1836, S. 1, 15-17; 岩渕, 2007, pp. 12-19.
- 57) 柳田, 1967, p. 263; 井上ほか, 1912, p. 137.
- 58) たとえば, 岩渕, 2014, pp. 12-14 参照。

- 59) 柳田, 1967, p. 254 参照。
- 60) 平山, 1989 参照。
- 61) 大西, 1893, pp. 83-85 参照。
- 62) 大西, 1893, p. 87 参照。一部, 現代的表記に改変。
- 63) 大西, 1893, p. 88 参照。
- 64) 大西, 1893, p. 88.
- 65) 大西, 1893, p. 88 参照。
- 66) 大西, 1892, pp. 10-15 参照。
- 67) 大西, 1892, pp. 12-15.
- 68) 雪嶺『我観小景』に対する批評としては, 大西の「読我観小景」以外に元良勇次郎も「我観小景ヲ読ム」を明治26(1893)年の『哲学雑誌』に書いている。元良「我観小景ヲ読ム」にはフェヒナーに関する記述が全くないため, 本稿では立ち入ることはしない。元良, 1893.
- 69) 井上, 1898.
- 70) 比較思想史研究会, 1975, pp. 150-151 参照。
- 71) 井上, 1898, 序 pp. 2-3, 本文 pp. 1-3 参照。
- 72) 井上, 1899, p. 1 参照。
- 73) 中江, 1901a; 1901b; 1995, p. 314 参照。
- 74) 比較思想史研究会, 1975, pp. 271-273 参照。
- 75) 比較思想史研究会, 1975, pp. 274-275 参照。
- 76) 中江, 1901b, pp. 6-19 参照。
- 77) 中江, 1901b, pp. 2-3 参照。
- 78) 船山, 1999, p. 204; 比較思想史研究会, 1975, pp. 279-283 参照。
- 79) 昭和女子大学近代文学研究室, 1974, pp. 15, 248-249, 291 参照。
- 80) 平山, 1989, pp. 141-142, 175-179 参照。
- 81) 高橋, 1901.
- 82) 高橋, 1901, pp. 38-40 参照。
- 83) 中江, 1901b, pp. 6-9 参照。
- 84) 高橋, 1901, pp. 47-56 参照。
- 85) 高橋, 1901, pp. 101-102 参照。
- 86) 高橋, 1901, pp. 74-75 参照。
- 87) 高橋, 1901, pp. 77-79 参照。
- 88) 黒岩, 1903.
- 89) 黒岩, 1903, 凡例参照。
- 90) ヘッケルの学説については, 佐藤恵子の研究が参考になる。佐藤, 2015.
- 91) 黒岩, 1903, p. 1 参照。
- 92) 黒岩, 1903, pp. 22-23.
- 93) 黒岩, 1903, pp. 84-86 参照。
- 94) 高橋, 1903, p. 序5 参照。
- 95) 高橋, 1903, p. 151 参照。
- 96) 高橋, 1903, pp. 151-153 参照。一部, 現代的表記に改変。
- 97) 高橋, 1903, pp. 153-155.
- 98) 高橋, 1904, pp. 382-383 参照。
- 99) 高橋, 1904, pp. 484-486.
- 100) 高橋五郎は, 本稿でとりあげた著作以外にも, たとえば『神秘哲学』(明治36年)や『心霊萬能論』(明治43年)など, フェヒナーに関する記述がある書を出しているが, それらについては紙数の都合で本稿ではとり

あげなかった。

- 101) 三宅, 1909, p. 116.
- 102) たとえば, 三宅, 1909, pp. 137-146, 379-389 参照。
- 103) 夏目, 1996, pp. 189, 230.
- 104) 夏目, 1996, p. 261.
- 105) 夏目, 1994, pp. 785-788 参照。
- 106) 夏目, 1994, p. 407. 夏目, 1911, pp. 118-120 も参照。
- 107) 重松, 1978, pp. 1119-1120, 1128 参照。
- 108) ジェイムズ, 1961, pp. 117-118. 原書では, James, 1909, pp. 152-153 に該当。本稿執筆時点で, われわれは東北大学所蔵の漱石の原書の手沢本『多元的宇宙』を確認していない。傍線の引かれた位置は, 重松泰雄の論文に記載されている漱石の原書の手拓本の傍線の位置に従った。重松, 1978, p. 1120 参照。
- 109) フェヒナーの識閾概念の特徴については, たとえば, 岩渕, 2015.
- 110) 『多元的宇宙』にはフェヒナーの著作の1つに『死後の生』があることが記されている。James, 1909, pp. 171, 337-338 参照。
- 111) 明治期のスピリチュアリズムの受容については, たとえば, 一柳の論考が参考になる。一柳, 1993, pp. 410-408 参照。

元刊本雜劇「汗衫記」は、何処にあったのか
— 併せて明抄本と元曲選本の性格を論じる (2) —

福 満 正 博

Where was the text of the book “*Hanshanji*” published in Yuan Dynasty preserved?:

With a Study of text of transcription of Ming Dynasty and of text
of Yuanquxuan of Ming Dynasty (2)

FUKUMITSU Masahiro

The plot of the drama “*Hanshanji*” is as follows. On a winter day a certain Squire Zhang Wenxiu and his wife Zhao are having a party with their son Zhang Xiaoyou and son’s wife Li in Kaifeng city. They take pity on the beggar Chen Hu and rescue him. Chen Hu becomes a sworn brother of the Zhang Xiaoyou, the Son of Zhang Wenxiu. Chen Hu also comes to hold the purse strings. At that time a convict, his name Zhao Xingsun, seeks help from the Zhang family. So Zhang’s wife Zhao treats him as a nephew however, Chen Hu is actually a bad person. He takes Zhang Xiaoyou and his wife with their much treasure to the mausoleum of Dongyue. Zhang Xiaoyou’s wife Li is in the eighteenth month of pregnancy. Zhang Wenxiu and his wife Zhao run after them and try to persuade them to come home. But they refuse. So Zhang Wenxiu divides Zhang Xiaoyou’s shirt into two pieces between the two families to leave evidence.

When Squire Zhang Wenxiu and wife come home in Kaifeng, a fire breaks out, and they become beggars. About that time, Chen Hu pushes Zhang Xiaoyou into Yellow River and takes Zhang Xiaoyou’s wife Li.

Seventeen years after, Zhang Xiaoyou’s son became a military officer. His mother advised him to go to the Xiangguo temple in Kaifeng. Zhang Wenxiu and his wife are begging for a living and also go to the Xiangguo temple. They happen to meet each other, and recognize the grandfather and grandmother and the grandson by the evidence of the half pieces of shirt.

Zhang Wenxiu who was pushed into Yellow River by Chen Hu had not died. Instead, he had become a high-ranking Buddhist priest of the Xiangguo temple in Kaifeng. So, at last, Zhang family, Zhang Wenxiu, his wife Zhao, Zhang Xiaoyou, his wife Li and grandson, meet again at the Xiangguo temple in Kaifeng.

The drama “*Hanshanji*” has three different versions. One version is found in *Yuankan zaju sanshizhong* (in Guben xiqu congkan siji). Another is found in *Maiwangguan chaoxiaoben gujinzaju* (in Guben xiqu congkan siji). “*Maiwangguan*” is the name of the library of Zhao Qimei. Zhao Qimei is a famous book collector. And the other is the *Yuanquxuan* which is the anthology Zang Maodun edited during the Wanli era of Ming Dynasty. These three versions are representative materials of the Drama of Yuan Dynasty.

The first version called “*Yuankanben*” is the oldest version. So this version is considered most valuable version but this version is too brief to understand the details of the drama.

The second version that is found in *Maiwangguan chaoxiaoben gujinzaju* is the one that Zhao

Qimei transcribed and proofread from the imperial store house's version in 1615. So this version has information from when the drama played on the stage.

Third version is the one of the *Yuanquxuan*. This is the most famous anthology of the Yuan Dynasty.

In this paper I separated 21 scenes of Act 2 of this drama on the basis of every stage directions, speeches and songs of first half of Yuankanben's version. I compare three versions scene by scene in order to highlight the distinctive features of these three versions.

元刊本雜劇「汗衫記」は、何処にあったのか ——併せて明抄本と元曲選本の性格を論じる(2)——

福 満 正 博

はじめに

本稿は、前稿「元刊本雜劇「汗衫記」は、何処にあったのか——併せて明抄本と元曲選本の性格を論じる(1)——」(『明治大学人文科学研究所紀要』第79冊, 2016年)の続きである。元刊本雜劇「汗衫記」第三折に関する論述である。

元刊本の本文に沿ってできるだけ細かい場面に分けてみた。その場面ごとに、明抄本と『元曲選』本との対応の状況を分析しようというものである。

今回予想に反して時間がかかってしまった。その理由の一つは曲牌「醉春風」を巡ってであった。結局曲牌の歴史を全部洗い直して、やっと明らかにすることができた。ここで、臧懋盾の『元曲選』編纂の跡を、くっきりと示すことができたと思う。

また、曲牌「上小樓」の後ろの賓白に於いて、元刊本と明抄本・『元曲選』本は、会話はそれぞれに類似しているが、その対応関係が不明確であった。しかし今回よく分析してみて、その話者がすべて逆になって対応していることを明らかにした。

このような経過で、本稿は元刊本雜劇「汗衫記」第三折を分析した。第四折は、次の機会を待ちたい。

III

三折

(56) ◎元刊本

(等外末一行上。)

(淨打外末下水了)

○抄本

(邦老上云)

定下施刀計，必趁我心苗。

自從將他兩口耳拐將出來，見在船倉裏，這裡好下手。我如今叫他出來，哥也出那船來。

(張孝友同旦兒上)

(張孝友云) 他比在家裏越狠了也。

(但兒云) 員外你休出去。

(張孝友云) 你放心咱。我眼裏偏識這等好人，大嫂不妨事。兄弟叫我是麼。

(邦老做殺末科云) 我要殺也。

(旦兒奪刀科) 小叔叔你好下的也。

(張孝友云) 兄弟但是金珠財寶你都將的去。你則留我性命，我也不會不歹看成你也。

(邦老云)

你做是麼這般叫呼殺喚的，你起來我那裡肯殺你。我故意的這等教那別的船上見呵。兀那箇船上有這等的好漢，我則與你壯膽哩。我是壓伏別人，你休怕。

(張孝友云) 你不是殺我，原來教那別的船上看，我眼裏偏識這等好人。

(邦老云) 哎約，好東西兒也，一對金色鯉魚在水中鬪。哥你看咱。

(張孝友云) 在那裡。

(旦兒云) 你休看。

(張孝友云) 我看一看去。

(邦老推孝友科) 你下水去。

(張孝友云) 哎約，我眼裏偏識這等好人。

(下)

(旦兒悲科云) 哎約男兒也，痛殺我也。

(邦老云) 你休啼哭。我則為你來送了你丈夫的性命。你隨順了我罷。

(旦兒云) 小叔叔，你怎生說這等話。

(邦老云) 你不肯，連你也攬在河裏。

(旦兒云) 住住住，我且尋思咱。

(邦老云) 你尋思者波

(旦兒云) 你依的我麼

(邦老云) 你說，依你些甚麼。

(旦兒云) 等我三年服孝滿者。

(邦老云) 三年也依不的。

(旦兒云) 一百日花孝。

(邦老云) 也依不的。

(旦兒云) 等我分曉了，我隨順你。

(邦老云) 這等也罷。跟的我家中去來。

(同下)

○元曲選本

無

「評」

元刊本のト書によれば、次の二つの場面が展開される。まず張孝友と妻李玉蛾、陳虎の三人が登場する。次に淨の扮する陳虎は、張孝友を殺そうとして黄河につき落とす。しかしこれらは、一連の場面であるので、本稿では(56)の一つにまとめる。

抄本の前半は、元刊本のト書に忠実に科白を展開させている。第二折で陳虎に騙された張孝友と妻の李玉蛾は、徐州にある東岳廟に三人で船に乗って祈願に向かう。陳虎が張孝友を船の上に呼び出して、刀で殺そうとするが、李玉蛾に止められる。そこで陳虎は、張孝友を船から突き落とす。張孝友は、陳虎から河につき落とされても、「陳虎のことを理解している」と叫ぶ。張孝友の愚かな人物ぶりが強調されている。

抄本の後半は、陳虎が李玉蛾を脅して、徐州にある自分の家に連れ帰る場面である。この場面は、元刊本にはない。しかし、李玉蛾が、陳虎に従って徐州に行き、子供を産まなければ、汗衫記劇そのものが成立しない。本来、元刊本の段階からこのような筋立てがあったが、元刊本のト書では省略されているとしか考えようがない。したがって、抄本は元刊本の筋立てに、忠実に従っていると考えられる。

元曲選本は、この場면을省略している。

(57) ◎元刊本

(等淨提得俵兒了)

○抄本

(邦老上云) 過日月好疾也。自從將張孝友推在河裏，今經可早十八年光景。那箇婦人驀入我家門，就添了箇滿抱兒。如今十八歲，十八般武藝皆會，我常時家一頓打，便是一箇小死。我恨不的待打死這箇小廝。可是為何。我則待剪草除根，萌芽不發。左右來打不死。婆婆將些錢鈔來與我。我與弟兄每吃酒去來。休教那小廝生事，我吃酒去也。

(下)

○元曲選本

(邦老上, 云) 人無橫財不富, 馬無野草不肥。

我陳虎只因看上了李玉娥, 將他丈夫攏在黃河裏淹死了。那李玉娥要守了三年孝滿, 方肯隨順我。我怎麼有的這般慢性? 我道莫說三年, 便三日也等不到。他道你便等不得三年, 也須等我分娩了, 好隨順你, 難道我耽着這般一個大肚子, 你也還想別的勾當哩。誰知天從人願, 到的我家不上三日, 就添了一個滿抱兒小廝, 早已過了壹十八歲。那小廝好一身本事, 更強似我。只是我偏生見那小廝不得, 常是一頓打就打一個小死, 只要打死了他方纔稱心。卻是為何, 常言道, 翦草除根, 萌芽不發。那小廝少不的打死在我手裏。大嫂, 將些錢鈔來與我, 我與弟兄每吃酒去來。(下)

〔評〕

元刊本の「俵兒」は、子役を意味する。焦循の『劇說』^(註1)に、次のようにある。

俵兒多不言以何色扮之, 惟貨郎旦李春郎前稱「俵兒」, 後稱「小末」, 則前以小末扮俵兒。蓋俵兒者, 扮為兒童狀也。春郎前幼, 當扮為兒童, 故稱「俵兒」, 後已作官, 則稱「小末」耳。(卷1)

清朝の学者焦循は、元曲の「貨郎旦」という作品を取上げ、「俵兒」と「小末」との関係を説明している。この「貨郎旦」のト書では、同一人物が幼少の時は「俵兒」と書かれ、成長した後は「小末」と書かれていることを指摘している。

したがって元刊本のここの「俵兒」は、李玉娥が生んだ張孝友との間の子供(陳豹と名付けられる)を意味する。この後では全て、「小末」とされている。余談であるが、「汗衫記」と同じく、「貨郎旦」でも「俵兒」は成長して役人になる。また父親が河につき落とされて、子供と離れ離れとなることも一致している。

ともかく、上に示した抄本の部分が、元刊本のト書に相当することになる。抄本の科白は、邦老の演ずる陳虎が登場して、李玉娥の生んだ陳豹に関するこれまでの顛末について、取上げて話をする。そうすると抄本のこの部分は、元刊本のト書の「提」の字の意味に、正に合致する場面であることがわかる。

元曲選本は、邦老の扮する陳虎が、これまでの経緯を説明する科白である。実際には、(56)場面の抄本の後半の陳虎と李玉娥のやり取りと、(57)場面の抄本の内容を足して作っている。少し長くなっている。しかし言葉は、抄本をほぼ踏襲している。

(58) ◎元刊本

(等外末扮相國寺長老上, 開関子, 下了)

○抄本

無

○元曲選本

無

「評」

元刊本のこのト書は、相国寺の長老が登場して、「関子」（役所の文書）を示すというものである。具体的には「無遮大會」（施餓鬼のこと）を開くということである。抄本も元曲選本も、この場面が唐突であるからであろうか、省略している。

(59) ◎元刊本

（等外旦，浄，小末上云住）

（等浄・付了先下）

○抄本

（旦兒上云）心中怨恨天來大，何日何時得報讐。

自家李玉娥の便是。自從這賊漢將俺員外推在河裏，今經十八年光景也。我跟前添了一箇孩兒，長年十八歲。喚做陳豹。每日山中打大蟲。今日無甚事掩上這門，看有是麼人來。

（小末同打蟲の俵兒上）

（小末云）每日山中習武藝，窩弓藥箭不離身。

岩前虎瘦雄心在，男子身貧志不貧。

自家陳豹，長年一十八歲，血氣方剛。十八般武藝無有不拈無有不曾，每日在於山中下窩弓藥箭。今日正在山中演習武藝。見山坡前走將一箇牛來大小大蟲。我拈弓在手搭箭當弦味的一聲，箭去正中大蟲。我欲帶要擊那大蟲去。不知那裡走將幾箇小廝來。他說是我每打死的大蟲。我問你，你怎生打殺來。

（俵兒云）我一隻手摺住尾，當腰裡則一口咬殺了。我打殺的大蟲，你道你打殺的，我告你家去。陳媽媽。

（旦兒云）是誰門首叫我。開開這門，你做是麼。

（俵兒云）媽媽，我打殺的大蟲，你兒子說他打殺的大蟲。他賴我的。

（旦兒云）哥哥你將的去罷。

（俵兒云）我兒也不看你娘面上，我不道的饒了你哩。

（下）

○元曲選本

（旦兒上，云）自家李玉娥。過日月好疾也。自從這賊漢將俺員外推在河裏，今經十八年光景。我根前添了一箇孩兒，長成一十八歲，依了那賊漢的姓，叫做陳豹，每日在山中打大蟲。怎這早晚還不回家來吃飯哩。

（小末同俵兒上）

（小末詩云）每日山中打虎歸，窩弓藥箭緊身隨。

男兒志氣三千丈，不取封侯誓不灰。

自家陳豹，年長一十八歲，臂力過人，十八般武藝，無有不拈，無有不曾。每日在於山中，下窩弓藥箭，打大蟲耍子。今日正在那裏演習些武藝，忽然看見山坡前走將一個牛也似的大蟲。我拈弓在手，

搭箭當弦，味的一聲射去，正中大蟲。我待要拏那大蟲去，不知那裏走將幾個小廝來，倒說是他每打死的大蟲。咄，我且問你，你怎生打殺那大蟲來。

(俵兒云) 我一隻手摺住頭，一隻手摺住尾，當腰裏則一口咬死的。你倒省氣力，要混賴我的行貨，我告訴你家去。陳媽媽。

(旦兒云) 是誰門首叫我。開開這門。你做甚麼。

(俵兒云) 媽媽，我辛辛苦苦打殺的一個大蟲。只這一張皮也值好幾兩銀子，怎麼你家兒子要賴我的。

(旦兒云) 小哥，你將的去罷。

(俵兒云) 我兒也，不看你娘面上，我不道的饒了你哩。

(下)

〔評〕

この(59)場面で、元刊本のト書の「浄」というのは、元刊本でこれまで演じてきた陳虎の役ではない。抄本で「俵兒」と書かれる、「小末」(陳豹)の喧嘩相手の役である。元刊本のト書は、まず「外旦」(李玉娥)、「浄」,「小末」(陳豹)の三人が登場する。

元刊本のト書は、次の順番にト書が並んでいる。仮に①②③と、順番に名前を付けて見る。

- ① (等外旦, 浄, 小末上云住)
- ② (交小末應舉科)
- ③ (等浄吐付了先下)

しかし抄本と元曲選本の粗筋は、次のように並べ替えられている。

- ① (等外旦, 浄, 小末上云住)
- ③ (等浄吐付了先下)
- ② (交小末應舉科)

元刊本のト書の順番で展開する話が、実際に存在したのかどうか、問題となるであろう。元刊本のト書の通りだとすると次のような筋書になる。「小末」(陳豹)が「浄」と喧嘩をして、その「浄」が舞台上にいる間に、「小末」が武挙を受験することになり、その後喧嘩相手の「浄」が下場するというものである。

これでは、冗長というか、まとまりがない演出となると思われる。そこで、抄本の作者がこの筋書を少し改良したとも考えられる。或は、本来元刊本のト書の単純な間違いであったかもしれない。それに気づいた抄本の作者が、②と③を入れ替えたとも考えられる。私としては、後の元刊本の単純な印刷間違いの説を取りたい。

ここでは抄本の筋書きに従って、順番を入れ替えた①と③をまとめて、(59)場面とした。②は、この次の(60)場面として、次に置いた。

(59) 場面では、一番目の㉠のト書の場面で三人が登場し、「浄」と「小末」が喧嘩する。二番目のト書である㉡の場面では、敵役になった「浄」が「咄付」して下場する。次の(60)場面の㉢のト書で、「外旦」が説得して、「小末」に武拳の試験を受けに行かせる。元刊本も本来、このような流れの筋書だったと思われる。

さて「咄」の字は、「嘱」の通仮と考えられている。「嘱」は、中原音系で /tʃiu/ 照母魚模韻上声だと推測される。つまり声母は、清音である。ところが、「咄」は『玉篇』^(註2)では、「勅主切」である。中古音では /hɿu/ 遇攝合口3等徹母麌韻上声だった。徹母であるから、次清音である。しかし、『集韻』には、「冢庾切」曷韻上声というのがあるので、清音の声母もあったと思われる。したがって、「嘱」の通仮と考えても、問題はないわけである。

「咄付」というのは、何かを頼んだ、命令したということである。抄本では敵役となった「浄」は、獲物を巡って「小末」と争う。そこで、「外旦」(李玉娥)が息子の「小末」を諫める。最後に、「浄」が捨て台詞をはいて立ち去る。それを、「咄付」と表現しているのであろう。

(60) 元刊本

(交小末應舉科)

○抄本

(旦兒云) 陳豹你家來，你跪着教你休惹事。你又惹事，躺著必當痛快。

(小末云) 母親打則打，休閃了手。

(旦兒云) 且住者，倘或間打的孩兒頭疼額熱，誰與他父親報讐。陳豹我不打你。且饒你這一遭。

(小末云) 母親打了呵好。母親若不打了呵，說與父親。這一頓打也打殺你孩兒。

(旦兒云) 我也不打你，也不对你父亲說。

(小末云) 不與父親說，謝了母親也。

(旦兒云) 孩兒你學成十八般武藝，為何不進去功名。

(小末云) 您孩兒欲待上朝求官應舉去。爭奈無盤纏。

(旦兒云) 既然你要上朝求官去，來來來我與你些碎銀兩一對金鳳釵，與你做盤纏。

(小末云) 今日是個吉日良辰。辭別了母親。便索長行也。

(做拜科)

(旦兒云) 陳豹你記者。若到京師，尋問馬行街竹竿巷金獅子張員外老兩口兒。尋見呵你帶將來。

(小末云) 母親，和嚙是甚麼親眷。

(旦兒云) 孩兒你休閒。他和嚙是老親。

(小末云) 你孩兒經板兒記在心頭，出的這門。

○元曲選本

(旦兒云) 陳豹，你家來，妳跪著。教你休惹事，你又惹事。你倘著我打你，等你好記的。

(小末云) 母親打則打，休閃了手。

(旦兒云) 且住者，倘或間打的孩兒頭疼額熱，誰與他父親報讐。陳豹，我不打你，且饒你這一遭兒。

(小末云) 母親打了倒好。母親若不打呵，說與父親，這一頓打又打一個小死。

(旦兒云) 我也不打你，也不對你父親說。

(小末云) 不與父親說，謝了母親也。

(旦兒云) 孩兒，你學成十八般武藝，為何不去進取功名。

(小末云) 您孩兒欲待應武舉去，爭奈無盤纏上路。

(旦兒云) 既然你要應舉去，來，我與你些碎銀兩，一對金鳳釵做盤纏。

(小末云) 今日是個吉日良辰，辭別了母親，便索長行也。

(做拜科)

(旦兒云) 陳豹，你記者，若到京師，尋問馬行街竹竿巷金獅子張員外老兩口兒。尋見呵，你帶將來。

(小末云) 母親，他家和啗是甚麼親眷？

(旦兒云) 孩兒妳休問他，他家和啗是老親。

(小末云) 您孩兒經板兒記在心頭。母親，孩兒出門去也。

〔評〕

元刊本では、元刊本の卜書では、主語が省略されている。しかし明らかにこれは、「外旦」(李玉娥)である。母の李玉娥が、夫である張孝友を殺した陳虎に復讐するために、まず陳豹に武拳を受験させるのである。元代には武拳の試験は廃止されていた。しかし、本劇の時代設定となっている北宋の時代には、確かに武拳の制度が存在した^(注3)。元曲選本は、抄本とほぼ同じである。

(61) ◎元刊本

(外旦与小末汗衫了)

○抄本

(旦兒云) 陳豹你回來。

(小末云) 母親有什麼說話。

(旦兒云) 你若見那老兩口兒，你便帶將來。

(小末云) 你孩兒理會的。我出的這門來。

(旦兒云) 陳豹你回來。

(小末云) 母親有的話一發說了罷。

(旦兒云) 我與你這塊絹帛兒。你見了這老兩口兒，與了他這絹帛兒。他便知啗是甚麼親眷。

(小末云) 理會的收拾行程，應舉走一遭去。

辭母便登程，說的話叮嚀。

認了親和眷，早早就回程。

(旦兒云) 孩兒去了也。

眼觀旌節旗，耳聽好消息。

(下)

○元曲選本

(旦兒云) 陳豹，你回來。

(小末云) 母親有甚麼話說。

(旦兒云) 你若見那老兩口兒，你便帶將來。

(小末云) 您孩兒記的，我出的這門來。

(旦兒云) 陳豹，你回來。

(小末云) 母親，有的話一發說了罷。

(旦兒云) 我與你這塊絹帛兒，你見了那老兩口兒，只與他這絹帛兒，他便認的啞是老親。

(小末云) 理會的。

(旦兒云) 孩兒去了也。

眼觀旌節旗，耳聽好消息。

(下)

「評」

元刊本のト書では、「外旦」(李玉娥)が、張一家が別れる際に父張文秀が形見に作った汗衫の片割れを、子供の陳豹に渡すことになる。陳豹が祖父に当たる張文秀に会う際に、これを証しにするようにという目的であった。形見の汗衫の片割れというのは、第二折の第(40)場面から(45)場面までにかけて描かれている。抄本は、この話を拡張している。元曲選本は、ほぼ抄本を踏襲している。異なっているのは、抄本にある「小末」の下場詩が、元曲選では省略されていることである。抄本と元曲選に使われる「旦兒」の下場詩は、しばしば使われるもので、「望江亭」二折などにも見える。

(62) ◎元刊本

(等長老上，開住)

○抄本

(長老上云)

澗水煎茶燒竹枝，袈裟零落任風吹。

看經只在明窓下，花落花開總不知。

貧僧相國寺主持長老。今有箇陳相公做這無遮大會。一應人等都要捨貧散齋，都準備了，這早晚相公敢待來也。

○元曲選本

(外扮長老上，詩云)

近寺人家不重僧，遠來和尚好看經。

莫道出家便受戒，那箇貓兒不吃腥。

小僧相國寺住持長老。今有陳相公做這無遮大會，一應人等都要捨貧散齋，小僧已都準備下了。這早晚相公敢待來也。

〔評〕

元刊本で長老は、(58) 場面に次いで二度目の登場となる。「無遮大會」を開いたという意味であろう。

抄本と元曲選本は(58) 場面を省略しているのので、初めての登場となる。抄本の長老の定場詩は、「薦福碑」三折などにも見える。元曲選の定場詩は、孤例である。定場詩以外は、元曲選本は抄本を踏襲している。

(63) ◎元刊本

(等小末扮孤上，見長老提打齋，坐定)

○抄本

(小末上云)

泰山頂上刀磨缺，北海波中馬飲枯。

男子三十不立身，枉做堂堂大丈夫。

小官陳豹，到於帝都闕下，演武場中三箭成功，加小官本處提察使。自從母親分付我尋那兩口兒老的，那裡尋去。今日在於相國寺中散齋濟貧。數日前我與了長老錢鈔，與小官安排下齋供。今日拈香走一遭去。可早來到也。

(見長老科云) 長老多生受你也。

(長老云) 相公來了也。

(小末云) 小官來了也。有勞長老用心生受。

(長老云) 相公食用些齋食。

(小末云) 小官不必喫齋，看有什麼人來。

○元曲選本

(小末領雜當上，云) 下官陳豹，到於都下，演武場中比射，只我三箭皆中紅心，中了武狀元，授了下官本處提察使。自從母親分付我尋這馬行街竹竿巷金獅子張員外那兩口老的，那裏尋去。如今在相國寺中散齋濟貧。數日前我與長老錢鈔，與下官安排齋供，須索拈香走一遭去。可早來到了也。

(見長老科，云) 老和尚，多生受你。

(長老云) 相公，請用些齋食。

(小末云) 下官不必吃齋，只等貧難的人來時，老和尚與我散齋者。

〔評〕

元刊本では、小末が「孤」に扮して登場したとする。「孤」というのは、役人の扮装である。長老と「無遮大會」について、話をしたということであろう。

抄本では、武拳に合格して、「提察使」になったとする。「提察使」というのは、汗衫記にしか出てこない言葉である。元代から明・清代に「提刑按察使」という職名があるので、この略称かもしれない。汗衫記で時代設定されている宋代にはない官職である。

抄本の小末の定場詩は、萬曆四十三年三月二十一日の趙琦美の署名した内府鈔校本「閨閣舞射柳

蕤丸記」の二折に、また明記はないが内府本だろうと推定される脈望館の鈔校本「程咬金斧劈老君堂」の楔子、「長安城四馬投唐」の第二折などにも、類似したものがある。「長安城四馬投唐」第二折の殷開山の定場詩には、次のようにある。

泰山頂上磨刀缺，北海波中飲馬枯。
男子三十名不立，枉作堂堂大丈夫。

また、脈望館鈔本の中の来歴不明の「関雲長千里獨行」楔子の張飛の定場詩も、これらと同じである^(注4)。

元曲選本では、小末の定場詩が消されている。それ以外は、基本的に抄本を踏襲している。

(64) ◎元刊本

(正末引ト兒扮都子上)

(叫街住)

○抄本

(正末同ト兒薄藍上)

(正末云) 叫化咱，叫化咱，叫化咱。可憐見俺無挨無靠無主無倚，火燒了家緣家計無計奈何，長街市上有那等捨貧的咱波，叫化些兒波，爺娘佛囉。

○元曲選本

(正末同ト兒薄藍上，云) 叫化咱，叫化咱。可憐見俺許來大家私，被一場天火燒的光光蕩蕩，如今無靠無依，沒奈何，長街市上，有那等捨貧的財主波，救濟俺老兩口兒佛囉。(唱)

〔評〕

元刊本のト書にある「都子」というのは、乞食のことである。張文秀とその妻が、乞食に扮して登場する。

抄本は、元刊本を拡張している。「薄藍」というのは、粗末な服を着ていたことを示しているのので、元刊本の「都子」と同じことになる。元曲選本は抄本を踏襲している。

(65) ◎元刊本

〔粉蝶兒〕

繞着後巷前街，叫化些餘食剩湯殘菜，受了些霜欺雪壓風篩。我想五臟神，一頓飽，多應在九霄雲外。運拙時乖，叫幾聲爺娘佛有誰憐愛。

○抄本

我遶着這後巷，可兀的前街叫化些剩湯和這殘菜。我更了些箇霜欺雪壓波風篩。則我這五臟神無一頓飽呵，約哎，則我這冤魂靈兒在九霄雲外。也是咱運拙時衰。叫一聲爺娘佛囉，有誰把俺來憐愛。

(ト兒云) 老的也可怎生無一箇捨貧的。

○元曲選本

(唱)

我繞著他後巷前街，叫化些剩湯和這殘菜，我受盡了些雪壓波風篩。猛想起，十年前，兀那鴉飛不過的田宅。甚麼是月值年災，可便的眼睜睜一時消壞。

(卜兒云) 老的也，可怎生無一個捨貧的。

〔評〕

「粉蝶兒」は、宋詞の詞牌に見える^(注5)。双調(兩疊)七十一字，上片七句四仄韻，下片三十五字六句四仄韻である^(注6)。曲牌「粉蝶兒」は、『西廂記諸宮調』に見える。『中原音韻』^(注7)、『輟耕錄』などにも見え、『太和正音譜』^(注8)にも見え、八句である。

曲辭は、元刊本と明抄本が近似している。明抄本は、元刊本を忠実に書きなおしていると思われる。『元曲選』本は、これを大きく書き改めている。元刊本と抄本は、張文秀夫婦の現在の困窮を歌っている。元曲選本は、第3折の始めの曲であるから、張文秀が過去には金持ちであったのに火事の災難にあって、現在は貧困に陥ったこれまでの事を追懐している。改作された『元曲選』本の曲辭は、三折の最初というこの作品全体の中の位置づけを良く認識して書かれたものといえることができる。

(66) ◎元刊本

〔醉春風〕

濟困的衆街坊，您是救苦的觀自在。誰肯与半抄籩米一根柴。街坊每歹，沒个把俺采(睬・採)，着个甚買。但得半片兒羊皮，一頭藁薦，俺便是得生天界。

(做跪下，放)

○抄本

捨貧咱波衆街坊，救苦難的觀自在。誰肯與我半抄兒粗米一根兒柴。叟街坊每恁常好是歹，可怎生無箇將俺來採。

(卜兒云) 老的也兀那水床上熱熱的蒸餅兒，我喫一箇兒。

(正末云) 婆婆你道是麼哩。

(卜兒云) 我纔說那水床上熱熱的蒸餅兒，我要喫一箇兒。

(正末云) 婆婆你道那水床上熱熱的蒸餅兒你要喫一箇兒。則不你待要喫，我也待要喫一箇兒。赤緊的嚙手裏無錢呵，

(唱) 叟，婆婆來你說波可着是麼去買。俺但得那半片兒羊皮，一頭兒藁薦，叟婆婆俵我便是得生他天界。

(正末云) 婆婆。

(卜兒云) 老的你叫我怎麼的

(正末云) 我叫了這一日街，我可也乏了也，你替我叫些兒街。

(卜兒云) 你着誰叫街。

(正末云) 我着你叫街。

(卜兒云) 你着我叫街，你道不識羞。我好歹也是財主人家的女兒，着我如今叫化。我也曾喫好的穿好的，我也曾車兒上來轎兒上去。誰不知我是金獅子張員外的渾家。如今可教我叫街，我不叫。

(正末云) 你道是麼哩。

(卜兒云) 我不叫。

(正末云) 你道你是好人家好人家女。你從那兒車兒上來轎兒上去。你那哩會叫那街。偏我不是金獅子張員外。我是胎胞兒裏叫化來。赤緊的嚙手裏無錢也。我要你叫。

(卜兒云) 我不叫，我不叫。

(正末云) 我要你叫，要你叫。

(卜兒云) 我不叫，我不叫。

(三科了)

(正末云) 你也不叫，我也不叫。餓他娘那老弟子。

(悲科)

(正末云) 婆婆你也說的是。你是那好人家兒好人家女。那裡會叫那街。罷罷罷。我與你叫。我與你叫。

(卜兒云) 你是叫咱。

(正末云) 噯約約，可憐見無挨無靠無主無倚，火燒了家緣家計，長街市上有那等捨貧的咱波。叫化些兒波，爺娘佛囉。

○元曲選本

(正末唱)

那捨貧的波衆檀樾，救苦的波觀自在。肯與我做場兒功德散分兒齋。可怎生再沒個將俺來睬，睬。

(卜兒云) 老的也，兀那水牀上熱熱的蒸餅，我要吃一箇兒。

(正末云) 婆婆，你道什麼哩。

(卜兒云) 我纔見那水牀上熱熱的蒸餅，我要吃一個兒。

(正末云) 婆婆，你道那水牀上熱熱的蒸餅你要吃一箇兒。不只是你要吃，赤緊的嚙手裏無錢呵，可著甚的去買那。

(唱) 佛囉但得那半片兒羊皮，壹頭兒藁薦，哎婆婆味我便是得生他天界。

(云) 婆婆。

(卜兒云) 老的，你叫我怎麼的。

(正末云) 我叫了這一日街，我可乏了也，你替我叫些兒。

(卜兒云) 你着誰叫街。

(正末云) 我着你叫街。

(卜兒云) 你着我叫街，倒不識羞。我好歹也是財主人家女兒，着我如今叫街。我也曾吃好的，穿好的。我也曾車兒上來，轎兒上去。誰不知我是金獅子張員外的渾家。如今可着我叫街，我不叫。

(正末云) 你道什麼哩。

(卜兒云) 我不叫。

(正末云) 你道你是好人家兒，好人家女，也曾那車兒上來，轎兒上去，那裏會叫那街。偏我不是金獅子張員外，我是胎胞兒裏叫化來。赤緊的嚙手裏無錢那。我要你叫。

(卜兒云) 我不叫。我不叫。

(正末云) 我要你叫。要你叫。

(卜兒云) 我不叫。我不叫。

(正末云) 你也不叫，我也不叫，餓他娘那老弟子。

(卜兒做悲科)

(正末云) 婆婆，你也說的是，你是那好人家兒，好人家女，你那裏會叫那街。罷，罷，罷，我與妳叫。

(卜兒云) 你是叫咱。

(正末云) 哎喲。可憐見俺被天火燒了家緣家計，無靠無捱，長街市上，有那等捨貧的叫化些兒波。

〔評〕

「醉春風」は、宋詞の詞牌に見える。句式は、「双調（メロディの名前ではなく、基本的に同じような句式が二回繰り返されるもの）、各片七句、四仄韻、二疊韻（三回同じ韻字を繰り返す）」と説明される。第四句が疊韻をし、三字同じ字が連続するのが定格だとされる。『全宋詞』には、「醉春風」が六首みえるが、その中の五首は、第四句で三字同じ字が連続する。

『雍熙樂府』卷七に残る『天寶遺事諸宮調』にも「醉春風」がある。第四句は、二字同じ字が連続する疊韻である。曲牌「醉春風」の名は、『中原音韻』『正語作詞起例』や『輟耕録』卷二七「雜劇曲名」にも見える。『太和正音譜』にも見え、七句である。第四句は、同じ字が二字繰り返されて韻を踏む。『太和正音譜』卷上「對式」には、「疊字，重疊字者是也。醉春風第四句是」とある。中呂「醉春風」は、韻字を重ねる句式として、わざわざ取り上げられる曲牌であった。

元刊本では中呂「醉春風」は、22例ある。そのうち第四句を見てみると、三疊韻（四字同じ字が連続する。以下同じ）が一例、二疊韻が六例、疊韻が十五例である。この曲の場合は、二疊韻で、それぞれに増字が行われている^(注9)。本来中呂「醉春風」は、第四句の一句の中に、韻を踏む字を複数回繰り返す句式だった。ところが、この曲では第四・第五・第六句は字の異なる三疊韻で、しかもそれぞれに増字がなされている。独立した三句のようで、曲全体としてみると、九句のように見える。これは、元刊本全体の中で見ると珍しいものではない。しかし、述べたように由来を辿って考えると、七句の句式なのである。

明抄本は、元刊本の九句の句式を引き継いでいる。更に、第五句目と第六句の間に、巧みに賓白を入れて第六句につなげている。まず第五句の終わりの賓白で、妻趙氏が、蒸し器の饅頭を食べたいと騒ぐ。そこで張文秀が、私も食べたいがお金がないと言う。そして六句目の曲辞「哎，婆婆來，你說波可着是麼去買（おい，婆さんや，どうやって買おうというのだ）」に繋げている。

ところが『元曲選』本では、第四句目の曲辞が省略され、また第六句の曲辞が曲辞から外されて賓白として扱われている。明抄本では、元刊本と同じ九句であるのに、『元曲選』本では七句となっている。通常明抄本を踏襲することの多い『元曲選』本で、なぜこのようになるのだろうか。

『元曲選』を調べてみると、中呂「醉春風」は全部で五十九例ある。興味深いことにほぼすべて第四句は疊字・疊韻である。例外は、脱字ではないかと思われる一例だけである。中呂「醉春風」は、『元曲選』全体を通じて、均一の七句の句式を構成しているのである。これは、元刊本の例から考えて、不自然であるのは明らかである。つまり、『元曲選』における曲牌の中呂「醉春風」の句式は、すべて臧懋循の改作の手を経たとしか考えられない。

ではなぜ、臧懋循は曲牌の中呂「醉春風」の句式に手を入れたのか。一番考えられるのは『太和正音譜』の影響である。知られるように『元曲選』の冒頭には次のような多数の曲論が引用して、載せられている。それは、陶宗儀の『輟耕録』巻二十五「院本名目」からの引用である「天台陶九成論曲」と、燕南芝菴の『唱論』からの引用である「燕南芝菴論曲」と、周德清『中原音韻』からの引用である「高安周挺齋論曲」と、趙孟頫の「吳興趙子昂論曲」と、朱権の「丹丘先生論曲」と「涵虚子先生論曲」とである^(注10)。これらは、直接の引用というよりは、なにかの類書からの引用であろう。例えば、周德清『中原音韻』からの引用である「高安周挺齋論曲」は、『中原音韻』の現存する版本の文章と完全には一致しない。

今にわかに、『元曲選』の冒頭の曲論が、具体的にどこから引用されたのか正確に示すことはできない。しかし、朱権の文章が二つも引用されているところから見ても、朱権の『太和正音譜』などからの影響は、強いと予想される。先ほど引用したように『太和正音譜』巻上「對式」には、「疊字、重疊字者是也。醉春風第四句是」とある。また、『太和正音譜』の後半にある曲譜中の「醉春風」は、七句の句式であり、第四句目の中で韻字が二回繰り返されている。つまり、本曲の「醉春風」がまさにこの句式となっている。

これらのことから臧懋循の手による改作は、明らかである。前稿で指摘した改訂方針の二番目が、それに当たる。

②曲調に合わないものは改作した（其不合者既以己意改之）

これが、適用されている。^(注11)

臧懋循において、明王朝の皇族である朱権の影響は、大きいことは十分考えられる。また元曲選本のこの改作には、曲調だけではない問題も含まれているように思われる。元刊本の第四句「街坊每歹（町の奴らは悪い奴らだ）」とか、明抄本の「咬街坊每恁常好是歹（あー、町の奴らときたら本当にとんでもない奴らばかりだ）」などという、町の人々を非難する言葉は曲調の関係もあるが、省略されている。これは前稿の（17）場面、（54）場面などの改作と共通したものがあり、臧懋循の文学思想を考えるうえでも興味深い。

元刊本の曲辞「醉春風」の後の賓白は、あまりにも簡単なものであるので、このままでは十分に意味を把握することはできない。これに対応する、明抄本の内容は、以下のである。張文秀が、妻の趙氏に物乞いの呼びかけを代ってくれるように頼む。趙氏は断り言い争いになる。張文秀は諦めて、物乞いの呼びかけを始める。

明抄本には、次の賓白がある

（悲科）（悲しむしぐさ）

(正末云) 婆婆你也說的是。你是那好人家兒好人家女。那裡會叫 那街。罷罷罷。我與你叫。我與你叫。(張文秀が言う、婆さんや、お前の言うのももつともで、お前は両家の子女だ。ままよ、私がまた物乞いを呼びかけるとしよう)

これは、張文秀が物乞いをどうしても嫌がる趙氏を許す場面である。元刊本の短い賓白は、張文秀が物乞いを代ってくれと、妻趙氏にお願いして跪き、それでも断られてしかたなく妻を許すという意味かもしれない。

『元曲選』本は、明抄本の賓白を踏襲している。

(67) ◎元刊本

「快活三」

風梢(捎) 得个手倦擡，凍餓死怎掙揣。一場天火送了家才(財)。婆子，我問你那少年兒今何在。

○抄本

哎約，則這風吹的我這項怎擡。雪打的我這眼難開。則被這一場家風火散了家財，俺少年兒是今何在。

(卜兒云) 哎約，爭奈俺年紀老了也。

○元曲選本

(唱)

哎哟，則那風吹的我這頭怎擡。雪打的我這眼難開。則被這一場家天火破了家財，俺少年兒今何在。

(卜兒云) 嗨，爭奈俺兩口兒年紀老了也。

「評」

曲牌「快活三」は、『中原音韻』『輟耕録』などにその名が見える。『太和正音譜』にも曲譜が見える。また、『雍熙樂府』卷七に残る二つの『天寶遺事諸宮調』に、それぞれ残っている^(注12)。

元刊本にある「梢」の字は、「捎」の字と同音である。宋の楊冠卿の『客亭類稿』(卷13)「適安旅次」に「風梢窗紙急，月轉藥欄蔭」とある。「風梢」「風捎」「風吹」は、みな同じ意味である。「凍餓死怎掙揣(飢えと寒さでどうしようもない)」と、明抄本と『元曲選』本の「雪打的我這眼難開(雪で目が開けられない)」というのは、(大きな違いはない。『元曲選』本は、明抄本を忠実に踏襲している。明抄本の「項」の字を「頭」に書き換えているが、意味は変わらない。

(68) ◎元刊本

「朝天子」

老邁，正該，命運拙饑寒煞。無鋪也末無蓋冷難捱(捱)，雪風緊沒遮塞。俺不敢番(翻)身，拳(卷)做一塊。您敢救冰堂地獄災。俺這裏跪在，大街，把救苦的爺娘來拜。

(等卜兒云了)

○抄本

哎約，可則俺兩口兒便老邁。肯分的便正該。哎，天那，天那，正遇着這命運拙，合受饑寒債。我如今無鋪無蓋教我冷難挨。肯分的便雪又緊，風又大。到晚來可便不敢翻身，我便拳成一塊。天也天也，

可則俺兩口兒便受冰雪堂地獄災。我這裡跪在（跪在）他這大街，望着那救苦難爺娘每拜。

（卜兒云）老的這般風又大，雪又緊。俺如今身上無衣，肚裏無食，眼見的不是凍死，便是餓死也。

○元曲選本

（正末唱）

哎喲，可則俺兩口兒都老邁，肯分的便正該。天哪，天哪，也是俺注定的合受這饑寒債。我如今無鋪無蓋，教我冷難挨。肯分的雪又緊，風偏大，到晚來。可便不敢番身，拳成做一塊。天哪，天哪，則俺兩口兒受冰雪堂地獄災。我這裏跪在大街，望着那發心的爺娘每拜。

（卜兒云）老的，這般風又大，雪又緊。俺如今身上無衣，肚裏無食，眼見的不是凍死，便是餓死也。

〔評〕

宋詞の詞牌に「朝天子」があり，双調，上片・下片，各四句四仄韻である^(註13)。曲牌「朝天子」は、『中原音韻』『輟耕錄』などにその名が見える。『太和正音譜』の曲譜にも見える。

元刊本の「番」と「翻」，「拳」と「卷」は，字形による通假。

曲牌「朝天子」は、『中原音韻』の「作詞十法」や、『太和正音譜』などに録されている。句式は11句である。元刊本も，同じである。明抄本は，元刊本の曲辭に対して大量に増字をしている。しかし，「朝天子」の基本的な句構造は変わっていない。明抄本中の「跪在」は二回連続していて，後半は衍文である。引用文中に（ ）を付けて，そのまま記した。『元曲選』本は，基本的に明抄本を踏襲している。

(69) ◎元刊本

〔四邊靜〕

冬寒天色，冷落窩中又沒根柴。凍死尸骸，無人揪（揪）採（睬），誰肯着杵（杵）土埋，少不得撇在荒郊外。

（等外云了）

（等卜兒云了）

（云）婆婆，前面引着，咱喫齋去來。

○抄本

哎喲，正值着這冬寒天色，破瓦窩中又無米柴。眼見的凍死屍骸，無人揪（揪）採（睬）。誰肯着這半揪兒家土埋，老業人眼見的便撇在他這荒郊外。

（雜當上云）兀的那老兩口兒，比及你在這裡叫化，相國寺裏散齋哩。你那裡求一齋有何不可。

（正末云）多謝哥哥。相國寺裏散齋哩，婆婆去來去來。

（卜兒云）老的也，俺往那裡叫化去。

○元曲選本

（正末唱）

哎喲，正值着這冬寒天色，破瓦窩中又無些米柴。眼見的凍死屍骸，料沒個人揪睬。誰肯着半揪兒家土埋，老業人眼見的便撇在這荒郊外。

(雜當上, 云) 兀的那老兩口兒, 比及你在這裏叫化, 相國寺裏散齋哩。你那裏求一齋去不好那。

(正末云) 多謝哥哥。元來相國寺裏散齋哩。婆婆, 去來, 去來。

(卜兒云) 老的也。俺往那裏叫化去。

〔評〕

曲牌「四邊靜」の名称は、『輟耕録』には見えない。『中原音韻』「作詞起例」には、『西廂記』第二本二折の「四邊靜」を引用している。『太和正韻譜』の曲譜によれば、六句構成である。元刊本も同じである。明抄本は元刊本に増字しているが、基本的に同じである。『元曲選』本は、明抄本を踏襲している。

元刊本で「外」の科白となっているのが、明抄本では「雜當(端役)」と代わっている。相国寺で、お齋の施与があるので、そちらに行った方がよいと勧めるのである。それに答えているのは、張文秀の妻趙氏である。そして、外末の科白であろうが、「妻よ、お前が先で、一緒に相国寺のお齋に行こう」となっている。これに対し、明抄本では、張文秀と妻の順番が交代している。張文秀が答え、妻と一緒にしようと言っている。『元曲選』本は、明抄本を踏襲している。

(70) ◎元刊本

〔普天樂〕

听道了喜盈腮, 岡(剛)行岡(剛)陌, 身軀強整, 脚步難擡。

(做到寺了)

(外云了)

(做回身云) 婆婆, 嚙這口衣服, 子阿的是也。

(放)

餓紋在口角頭, 食神在天涯外。誰似俺公婆每窮得煞, 嚙怎生直恁地月滯(值)年災。能夠殘湯半瓢, 食充五臟, 俺又色(索)日轉千階。

(等孤喚了)

(做過去)

(等與齋飯了)

(云) 婆婆, 你子在這裏, 我那壁謝官人去。願官人一官未盡, 一官到來。

(打認科)

○抄本

〔普天樂〕

聽到罷喜盈腮。我這裡便剛行剛驀, 把我這身軀強整, 將我這脚步兒忙擡。

(正末云) 官人叫化些兒波。

(雜當云) 無齋了也。

(唱) 哦, 餓紋在俺口角頭, 食神在這天涯外。不似俺這兩口兒公婆每, 俺便窮的來煞。可則俺端的便正值着月值和這年災。

(正末云) 官人也。

(唱) 但的他那殘湯半碗，充實我這五臟。

不濟事。

(唱) 哎，婆婆也嚙去來也波。可則我又索與他日轉千街。

(雜當云) 無了齋也。

(正末云) 官人可憐見叫化些兒。

(雜當云) 無了齋也。

(小末云) 為什麼大呼小叫的。

(雜當云) 門首有兩箇老的，討齋來的。遲了無了齋也。

(小末云) 長老有小官的那一分齋，與了那兩口兒老的喫了罷。

(長老云) 下次人，便將相公的那一分齋送與那兩口兒老的去。

(雜當云) 理會的。兀那老的你來的遲了，無有齋了。這箇是相公的一分齋，與你這老兩口兒。你喫了，你過去謝一謝那相公去。

(正末云) 多謝了官人。婆婆你喫些兒，我也喫了些兒。留着這兩個饅頭，嚙到破瓦甕中喫。婆婆你送這碗兒去。

(卜兒云) 我送這碗兒去。

(正末云) 就謝一謝那官人。

(卜兒云) 我知道。

(見小末做拜科云) 官人官人，積福的官人。今世裡為官受祿，到那生那世又做官人。

(做認小末科)

(小末云) 這老的怎生看我。

(卜兒云) 官人官上加官，祿上進祿，輩輩都做官人。

(出門科) 這官人好和那張孝友孩兒廝似。仔細看。正是我那孩兒。我對我那老的說去。着他打這弟子孩兒。

(見正末科) 老的也喜歡咱。

(正末云) 則麼那婆婆。

(卜兒云) 你笑一箇。

(正末云) 我笑是麼。

(卜兒云) 你笑。

(正末云) 我笑。

(做笑科)

(卜兒云) 你大笑。

(正末做笑科了)

(卜兒云) 你也是箇傻老弟子孩兒。如今嚙那張孝友孩兒有了也。

(正末云) 在那裡。

(卜兒云) 原來散齋的那官人，正是張孝友。

(正末云) 婆婆真箇是。

(卜兒云) 我的孩兒，如何不認的。我這眼不喚作眼，喚作琉璃葫蘆兒。則是朗朗朗朗的。

(正末云) 是真箇。我過去打這弟子孩兒。婆婆可是也不是。

(卜兒云) 我這眼則是琉璃葫蘆兒。

(正末云) 我則記着你琉璃葫蘆兒。

(卜兒云) 則是箇明。

(正末見小末云) 生忿忤逆的賊也。

(小末云) 長老喚你哩。

(長老云) 相公喚你哩。

○元曲選本

(正末唱)

聽言罷不覺笑哈哈。我這裏剛行剛驀，把我這身軀強整，將我這脚步兒忙擡。

(云) 官人，叫化些兒波。

(雜當云) 無齋了也。

(正末唱) 哎，可道哩餓紋在口角頭，食神在天涯外。不似俺這兩口兒公婆每便窮的來煞，直恁般運拙也那時乖。

(云) 官人也。

(唱) 但的他殘湯半碗充實我這五臟，

(帶云) 不濟事，不濟事。

(唱) 哎，婆婆也，嚙去來波，可則索與他日轉千街。

(雜當云) 你來早一步兒可好，齋都散完了也。

(正末云) 官人，可憐見。叫化些兒波。

(雜當云) 無了齋也。

(小末云) 為甚麼大呼小叫的。

(雜當云) 門首有兩個老的，討齋來的遲，無了齋也。

(小末云) 老和尚，有下官的那一分齋，與了那兩口兒老的吃罷。

(雜當云) 理會的。兀那老的，你來的遲，無有齋了。這個是相公的一分齋，與你這老兩口兒。你吃了，你過去謝一謝那相公去。

(正末云) 多謝了。婆婆，你吃些兒，我也吃些兒，留着這兩個饅頭，嚙到破瓦窰中吃。婆婆，你送這碗兒去。

(卜兒云) 我送這碗兒去。

(正末云) 就謝一謝那官人。

(卜兒云) 我知道。

(見小末做拜科云) 積福的官人，今世裏為官受祿，到那生那世，還做官人。

(做認小末科)

(小末云) 這老的怎生看我。

(卜兒云) 官人官上加官，祿上進祿，輩輩都做官人。

(出門科) 這官人好和那張孝友孩兒廝似也。仔細打看，全是我那孩兒。我對那老的說去，着他打這弟子孩兒。

(見末云) 老的也，喜歡咱。

(正末云) 什麼那，婆婆。

(卜兒云) 你笑一個。

(正末云) 我笑什麼。

(卜兒云) 你笑。

(正末云) 哦，我笑。

(做笑科)

(卜兒云) 你大笑。

(正末做大笑科)

(卜兒云) 你也是個傻老弟子孩兒，如今嗜那張孝友孩兒有了也。

(正末云) 在那裏。

(卜兒云) 原來散齋的那官人正是張孝友孩兒。

(正末云) 婆婆，真個是。

(卜兒云) 我的孩兒，如何不認的。我這眼不喚做眼，喚做琉璃葫蘆兒，則是明朗朗的。

(正末云) 是真個，我過去打這弟子孩兒。婆婆，可是也不是。

(卜兒云) 我這眼則是琉璃葫蘆兒。

(正末云) 我則記着你那琉璃葫蘆兒。

(卜兒云) 則是個明朗朗的。

(正末見小末，云) 生忿忤逆的賊也。

(小末云) 長老，他喚你哩。

(長老云) 相公，他喚你哩。

「評」

曲牌の「普天樂」は、比較的新しい曲牌である^(注14)。『中原音韻』の作詞起例には「普天樂」として、姚燧の「別友」という散曲が挙げられている。七韻十一句構成である。『太和正韻譜』も同じである。元刊本も七韻十一句構成になっている。明抄本は七韻十三句、『元曲選』本も同じである。しかしこれは、第十一句と第十二句が増句されているだけで、基本的には同じである。

「普天樂」の第一句の曲辞「喜盈腮（喜びが顔に満ち）」を、明抄本では、「不覺笑哈哈（思わずハハと笑った）」というように具体的な表現に変えている。『元曲選』本は、明抄本を踏襲している。

元刊本の「陌」の字を、明抄本と『元曲選』本は「驀」に作る。「陌」は中古音で「梗撰・開口・2等・入声・陌韻・明母」で、中原音韻では「皆来韻・明母・去声」である。「驀」の字も、「陌」

とまったく同じである。元刊本で「陌」の字は、「驀」の字の通仮字として使われている。つまり、中古音における入声どうして、通仮関係になっている。

第三句と第四句の間には、元刊本には張文秀の次のような賓白がある。

(做到寺了)(相国寺につく)

(外云了)(端役が、お斎は無くなったと言う)

(做回身云) 婆婆，啗這口衣服，子阿的是也。(後ろを振り向いて、婆さんや、何も食べ物にあり付けなかったよ)

(放)(あきらめるしぐさ)

この賓白は、明抄本では「官人叫化些兒波(旦那様お恵みを)」と「無齋了也(お斎は無くなった)」という会話に代わっている。『元曲選』本も同じ。

明抄本では、第十句と、第十一句の間の「不濟事」が、曲辞の中に紛れ込んでいる。『元曲選』では、「(帶云)」として明記され、せりふとして明確に区別されている。

元刊本の「月滯年災」の「滯」の字は、「値」の字の通仮である。『中原音韻』によれば、「滯」は「齊微韻・照母・去声」で、「値」は「齊微韻・照母・陽平声」である。声調が異なっても、同音であれば通仮になる、典型的な例である。

また、元刊本の第十一句では、「色」の字は「索」の字の通仮字として使われている。但し、「索」も「索」の字の通仮字とされる^(注15)。「色」は、中古音では「曾摂・開口・3等・入声・職韻・生母」、『中原音韻』では「皆来韻・審母・上声」である。「索」は中古音では、「宕摂・開口・1等・入声・鐸韻・心母」、『中原音韻』では「蕭豪韻・心母・上声」である。「色」の字と「索」の字は、入声どうして通仮字になっている。「色」の字と「索」の字の通仮は、2折の「収尾」にもあった。

元刊本の最後の科白は、次のような順番で進んでいる。

- ①(等孤喚了)
- ②(做過去)
- ③(等與齋飯了)
- ④(云) 婆婆，你子在這裏，我那壁謝官人去。願官人一官未盡，一官到來。
- ⑤(打認科)

明抄本で、これに対応する部分を、少し長くなるが、示して見ると、次のようになる。

①—(雜當云) 無了齋也。

(正末云) 官人可憐見叫化些兒。

(雜當云) 無了齋也。

(小末云) 為什麼大呼小叫的。

②—(雜當云) 門首有兩箇老的，討齋來的。遲了無了齋也。

③—(小末云) 長老有小官的那一分齋，與了那兩口兒老的喫了罷。

(長老云) 下次人，便將相公的那一分齋送與那兩口兒老的去。

(雜當云) 理會的。兀那老的你來的遲了，無有齋了。這箇是相公的一分齋，與你這老兩口兒。你

喫了，你過去謝一謝那相公去。

④—(正末云) 多謝了官人。婆婆你喫些兒，我也喫了些兒。留着這兩個饅頭，嚼到破瓦罌中喫。

婆婆你送這碗兒去。

(卜兒云) 我送這碗兒去。

(正末云) 就謝一謝那官人。

(卜兒云) 我知道。

(見小末做拜科云) 官人官人，積福的官人。今世裡為官受祿，到那生那世又做官人。

⑤—(做認小末科)

(小末云) 這老的怎生看我。

(卜兒云) 官人官上加官，祿上進祿，輩輩都做官人。

(出門科) 這官人好和那張孝友孩兒廝似。仔細看。正是我那孩兒。我對我那老的說去。着他打這弟子孩兒。

(見正末科) 老的也喜歡咱。

(正末云) 則麼那婆婆。

(卜兒云) 你笑一箇。

(正末云) 我笑是麼。

(卜兒云) 你笑。

(正末云) 我笑。

(做笑科)

(卜兒云) 你大笑。

(正末做笑科了)

(卜兒云) 你也是箇傻老弟子孩兒。如今喏那張孝友孩兒有了也。

(正末云) 在那裡。

(卜兒云) 原來散齋的那官人，正是張孝友。

(正末云) 婆婆真箇是。

(卜兒云) 我的孩兒，如何不認的。我這眼不喚作眼，喚作琉璃葫蘆兒。則是朗朗朗朗的。

(正末云) 是真箇。我過去打這弟子孩兒。婆婆可是也不是。

(卜兒云) 我這眼則是琉璃葫蘆兒。

(正末云) 我則記着你琉璃葫蘆兒。

(卜兒云) 則是箇明。

(正末見小末云) 生忿忤逆的賊也。

(小末云) 長老喚你哩。

(長老云) 相公喚你哩。

元刊本賓白と、明抄本の対応する賓白を示して見た。元刊本の賓白は、5つの簡単なものである。その一つ一つに、明抄本は対応している。異なるのは、④のお齋でもらった食事のお礼に行く場面で

ある。元刊本では張文秀が行く。それに対して明抄本では、妻の趙氏が行くことになっている。妻の趙氏が行く方が、劇の笑いの世界が広がるからであろう。

なんにしてもはっきりとしていることは、明抄本の賓白は、ほぼ元刊本に対応しているが、その量が次第に増加していることである。多くの中国の演劇や小説が長編化する場合に、物語の後半が追加され、肥大化していく現象と共通しているようである。とするならばここから、元刊本は張国賓が作ったとされる「汗衫記」の元代における何らかの複雑な上演内容を、簡略に纏めたものというわけではないことが、はっきりとする。もし複雑なものをまとめたのなら、元刊本の賓白に対して、明抄本の賓白もほぼ均等の長さに分かれているはずである。ところが、このように後半になるにしたがって、賓白が増加していくという、不均衡な形になっていることは、逆のことを示している。なんらかの経緯で一旦まとめられた元刊本の賓白を基に、明抄本がこれに沿って独自に話を増加させていったということである。『元曲選』本の、賓白は明抄本の賓白をほぼ踏襲している。

(71) ◎元刊本

「上小樓」

甚風兒吹你到來，又還 界。交我呆呆鄧鄧，哭哭啼啼，怨怨哀哀。你喜喜歡歡，停停當當，无妨无碍。也合探恁這老耶娘快也不快。

(等孤云了)

(正末云) 官人姓甚底

(等云了)

(正末云) 多少年紀。

(等云了)

(与卜兒云了)

(等云了)

(正末云) 不是，它十七也。

(打認了)

○抄本

「上小樓」

甚風兒便吹你到來，你今日便還俺這 界。每日家俺煩惱，哭哭啼啼想殺我兒也，俺端的可便怨怨哀哀。你如今便歡歡喜喜，停停當當，的便無妨無礙。

(正末云) 生忿忤逆的賊也。

(唱) 你合問這雙老爹娘可是在也那是不在。

(卜兒云) 正是我的兒。

(小末云) 這老的好要便宜。休道我是你的兒，可姓什麼那。

(正末云) 你姓張，是張孝友。

(小末云) 兀的可不明白。你的孩兒姓張是張孝友。我姓陳是陳豹。我怎生是你的兒。

(卜兒云) 他改了姓也。

(小末云) 你的孩兒去時多大年紀。

(正末云) 你去時三十歲，也去了十八年，你如今四十八歲也。

(小末云) 你的孩兒去時三十歲也。去了十八年，如今四十八歲也。俱（據）着這等說將起來，你那孩兒去時節那其間，敢不會生我哩。

(正末云) 婆婆不是了也。

(正末云) 我道不是了麼。

(正末云) 可不道你眼似琉璃葫蘆兒。

(正末云) 則纔門前擠破了也。

(小末云) 兀那老的，你那孩兒怎生與小官貌類相似，你慢慢的說一遍咱。

(正末云) 相公聽我說一遍咱。

○元曲選本

甚風兒便吹他到來，也有日重還 界。則俺這煩惱惱，哭哭啼啼，想殺我兒也怨怨哀哀。到如今可也便歡歡愛愛，瀟瀟灑灑，無妨無碍。(小末云) 兀那老的，你說甚麼那。

(正末云) 生忿忤逆的賊也。

(唱) 哎，怎把這雙老爹娘做外人看待。

(卜兒云) 老的，他正是我的兒。

(小末云) 兀那老的，你說甚麼我的兒。我且問你，你那兒可姓什麼那。(正末云) 我的兒姓張，叫做張孝友。

(小末云) 兀的你孩兒姓張，是張孝友。我姓陳，是陳豹。你怎生說我是你的兒。

(卜兒云) 呀，他改了姓也。

(小末云) 你的孩兒去時，多大年紀。

(正末云) 他去時三十歲也，去了十八年，如今該四十八歲。

(小末云) 你的孩兒去時三十歲，去了十八年，如今該四十八歲，這等說將起來，你那孩兒去時節，我還不會出世哩。

(正末云) 婆婆，不是了也。

(卜兒云) 我道不是了麼。

(正末云) 可不道你這眼是琉璃葫蘆兒。

(卜兒云) 則纔寺門前擠破了也。

(小末云) 兀那老的，你那孩兒怎生與下官面貌相似。你試說與我聽咱。(正末云) 官人聽我說波。

〔評〕

曲牌「上小樓」の名は、『中原音韻』『鞞耕録』などに見える。『雍熙樂府』卷七に残る『天寶遺事諸宮調』に三例見える。『太和正韻譜』によれば、五韻九句である。小令の場合は、四韻が大部分である。元刊本の「上小樓」は、七韻九句が多い。しかしここでは、『太和正韻譜』と同じく五韻九句となっている。

元刊本の賓白は、次のような順番で進んでいる。

- ①（等孤云了）
- ②（正末云）官人姓甚底
- ③（等云了）
- ④（正末云）多少年紀。
- ⑤（等云了）
- ⑥（与ト兒云了）
- ⑦（等云了）
- ⑧（正末云）不是，它十七也。
- ⑨（打認了）

明抄本で、これに対応する部分を、少し長くなるが、示して見ると、次のようになる。

- ①—（ト兒云）正是我的兒。
- ②—（小末云）這老的好要便宜。休道我是你的兒，可姓什麼那。
- ③—（正末云）你姓張，是張孝友。
- ④—（小末云）兀的可不明白。你的孩兒姓張是張孝友。我姓陳是陳豹。我怎生是你的兒。
（ト兒云）他改了姓也。
（小末云）你的孩兒去時多大年紀。
- ⑤—（正末云）你去時三十歲，也去了十八年，你如今四十八歲也。
- ⑥—無し
- ⑦—（小末云）你的孩兒去時三十歲也。去了十八年，如今四十八歲也。
俱（據）着這等說將起來，你那孩兒去時節那其間，敢不曾生我哩。
- ⑧—（正末云）婆婆不是了也。
- ⑨—（ト兒云）我道不是了麼。

元刊本の「孤」というのが、明抄本の「小末」に相当する。そうすると、元刊本と抄本では、まず科白を述べる人物が異なっている。そこでこの場面の登場人物を、張文秀と妻の趙氏の側と、彼らの夫婦の孫で今は役人をしている陳豹の側の、二つの立場に分けてみる。そうすると、元刊本と明抄本では、①から⑤まで、話者がすべて逆の立場の人物によってなされていることが分かる。例えば、②で元刊本の「官人姓甚底」と、明抄本の「可姓什麼那」という表現が類似している。また④で元刊本の「多少年紀」と、明抄本の「多大年紀」という表現が類似している。これらは、表現は類似しているが、反対側の立場の話し手の科白なのである。

これは、「上小樓」の曲が終わった後、張文秀の妻が「正是我的兒（ほんとにわたしの子だよ）」と女性の立場で始めたほうが、元刊本のように役人の陳豹が、例えば「私がお前たちの子供だというのか」などと言って始めるより、舞台の場面としてふさわしいと明抄本の改作者が判断したのかもしれない。ともかく、科白の話者は反対であるが、内容はほぼ同じであったものと思われる。

元刊本の⑥の科白は、⑧に移動して吸収され、無くなっている。⑧と⑨では、立場は元に戻っていると思われる。ともかく、明抄本は、内容として元刊本と同じ内容のものを作ったと思われる。また⑨以後の部分で、明抄本は更に、4回新たな賓白が繰り返される。これは前の(70)場面と同じように、後半に賓白が増加される抄本の通例である。

「則纔門前擠破了也」という科白が、明抄本では「正末」のものとして誤記されている。『元曲選』本では、「卜兒」のものとして訂正されている。『元曲選』は、明抄本を基本的に踏襲している。

(72) ◎元刊本

(正末唱)

「幺篇」

嗨，好似呵，便是一个印合脫將下來。一般言語，一般容顏，一般身材。不是忙壯（莽撞）頭，把官人廝羸廝賽，錯認了把老身体怪。

(等孤云了)

(正末做接了衫兒看了)

(正末云) 婆婆，嚙那壁衫兒那里。

(等卜云了)

((正末) 做將兩半衫兒比了)

((正末) 悲云) 婆婆，我省得，嚙張孝友孩兒被陳虎那廝虧圖了。嚙媳婦兒去時，有三個月身小，經今去了十七年也。這官人道它姓陳，十七歲也。眼見的陳虎那廝送了俺孩兒性命，把媳婦強嚇為妻也。

○抄本

「幺篇」

你兩個恰便似一箇印盒，印盒兒裏脫將下來。恁兩個便一般容顏，一般模樣，一般箇身材。我這裡便覷絕時觀覷了我這心中寧奈。老漢可便眼昏花，錯認了你箇相公，你便休怪。

(正末云) 相公老漢年紀高大錯認了。相公休怪。

(正末做跪三科了)

(小末云) 這老的拜將下去，我背後恰便似有人推起我來一般。莫不這老的他福分到大似我。不怪你，你回去。

(正末云) 多謝了相公。

(小末云) 且回來。

(正末云) 相公莫非番悔麼。

(小末云) 大丈夫豈有番悔之心，我見你那衣服破碎，與你這塊絹帛兒，補了你那衣服，你出去。

(正末云) 多謝了官人。這箇官人又不打我，又不罵我，又與我這塊絹帛兒，着我補衣服。我是看咱。

(哭科云) 我道是甚麼來，原來是我那孩兒臨去時留下的那半壁衫兒。有什麼那難見處。眼見的是那婆子恰纔過來謝那官人，篤速篤速吊了。我如今問他，若是有呵便罷。若是沒呵我可不到的饒了他哩。婆婆俺那孩兒的呢。

(卜兒云) 孩兒的是麼。

(正末云) 孩兒臨去時留下的那半壁衫兒在那裡。

(卜兒云) 我恰纔忘了，你又提將來。我為那衫兒呵，則怕吊了，我牢牢的揣在我這懷裏。

(〔正末〕做取科云) 老的兀的不是我兒的。

(正末云) 我這裡有半壁兒

(卜兒云) 你那裡的來。

(正末云) 嗒是比咱。可不正是我那兒的衫兒。

(做悲科云) 哎約，眼見的無了我那兒也。哎約，兒也苦痛殺我也。

○元曲選本

您兩個恰便似一箇印盒，印盒裏脫將下來。您兩個都一般容顏，一般模樣，一般個身材。哎，我好呆，也合該，十分寧奈。

(云) 相公，恕老漢年紀老了。

(唱) 我老漢可便眼昏花錯認了你個相公休怪。

(正末做跪拜請罪科)

(小末云) 兀那老的拜將下去，我背後恰便似有人推起我來一般。莫不這老的他福分倒大似我。我不怪你，你回去。

(正末云) 多謝了官人。

(小末云) 你且回來。

(正末云) 官人莫非還怪着老漢麼。

(小末云) 我說道不怪，怎麼還怪着你。我見你那衣服破碎，與你這塊絹帛兒補了你那衣服，你將的去。

(正末云) 多謝了官人。這個官人又不打我，又不罵我，又與我這塊絹帛兒，着我補衣服。我是看咱。

(哭科，云) 我道是甚麼來，原來是我那孩兒臨去時留下的那半壁汗衫兒。哎，這有甚麼難見處。眼見的是那婆子恰纔過來謝那官人，篤速速的掉了。我如今問他，若是有呵，便是那官人的。若是沒呵，我可不到的饒了他哩。婆婆，俺那孩兒的呢。

(卜兒云) 孩兒的什麼。

(正末云) 孩兒臨去時留下的那半壁汗衫兒在那裏。

(卜兒云) 我恰纔忘了。你又題將起來。我為那汗衫兒呵，則怕掉了，我牢牢的揣在我這懷裏。

(做取科，云) 兀的不是我孩兒的。

(正末云) 我這裏也有半壁兒。

(卜兒云) 你那裏得來？

(正末云) 嗒是比着，可不正是我那孩兒的汗衫兒那。

(做悲科，云) 哎喲，眼見的無了我那孩兒也。兀的不苦痛殺我也。

〔評〕

曲牌「上小樓」は雜劇では、「幺篇」と二曲連続するのが主な形式となっている。『太和正韻譜』で

「幺篇」は、四韻九句である。元刊本では、六韻九句の場合が多い。この曲では、四韻九句となっている。

元刊本の「上小楼」の中の「忙壯」という語は、「莽撞」とも表記される言葉で、「そそっかしい」というような意味の疊韻連語である。また、「廝羸廝賽」という語は、ほかに用例がない。後半の意味は、「そそっかしいことに、お役人様をとんでもないことをしてかして、見誤ってしまいました。この老いぼれをお許してください」というような意味であろう。

明抄本の「上小楼」も、四韻九句である。内容は、後半部分を書き改めて「私は（陳豹の方を）何度も見直しては、しかたなくここで忍耐する。お役人様、目がかすんでしまいましたこの老いぼれをどうかお許してください」という内容になっている。元刊本に、わかりにくさがあったからかもしれない。

『元曲選』本は、六韻九句に書き改めている。『元曲選』では、六韻九句の例も少なくない。後半部分の内容にも改作を加え、「（歌）ああ、私がかだだ、ここはしっかり忍耐しよう。（科白）お役人様この老いぼれをお許してください。（歌）私は目がすっかりかすんでしましまして、お役人様のことを見誤ってしまいました」としている。

元刊本の賓白を順番に並べてみる。

- ①（等孤云了）
- ②（正末做接了衫兒看了）
- ③（《正末云》婆婆，嚙那壁衫兒那里。
- ④（等ト云了）
- ⑤（《正末》做將兩半衫兒比了）
- ⑥（《正末》悲云）

明抄本で、これに対応する部分を、示して見ると、次のようになる。

- ①（正末云）相公老漢年紀高大錯認了。相公休怪。

（正末做跪三科了）

（小末云）這老的拜將下去，我背後恰便似有人推起我來一般。莫不這老的他福分到大似我。不怪你，你回去。

（正末云）多謝了相公。

（小末云）且回來。

（正末云）相公莫非番悔麼。

（小末云）大丈夫豈有番悔之心，我見你那衣服破碎，與你這塊絹帛兒，補了你那衣服，你出去。

- ②（正末云）多謝了官人。這箇官人又不打我，又不罵我，又與我這塊絹帛兒，着我補衣服。我是看咱。

- ③（《正末》哭科云）我道是甚麼來，原來是我那孩兒臨去時留下的那半壁衫兒。有什麼那難見處。眼見的是那婆子恰纔過來謝那官人，篤速篤速吊了。我如今問他，若是有呵便罷。若是沒呵我可不到的饒了他哩。婆婆俺那孩兒的呢。

④(卜兒云) 孩兒的是麼。

(正末云) 孩兒臨去時留下的那半壁衫兒在那裡。

(卜兒云) 我恰纔忘了，你又提將來。我為那衫兒呵，則怕吊了，我牢牢的揣在我這懷裏。

⑤((正末) 做取科云) 老的兀的不是我兒的。

(正末云) 我這裡有半壁兒

(卜兒云) 你那裡的來。

(正末云) 恰是比咱。可不正是我那兒的衫兒。

⑥((正末) 做悲科云) 哎約，眼見的無了我那兒也。哎約，兒也苦痛殺我也。

このように見てくると、①から⑥まで、明抄本の賓白は元刊本の賓白をそれぞれに増加させている。しかし、それらは同じ流れで対応していて、同じ順番で物語が進んでいる事が分かる。②の「看」、③の「那(半)壁衫兒」、⑤の「比」、⑥の「悲」などの字が部分的であるが、明抄本が元刊本と共通していることも興味深い。

この最後の⑥部分では、元刊本は「((正末) 悲云)」として、上述のように珍しく長い賓白が書かれている。張文秀は、形見に分けた肌着が一致したことから、息子の張孝友が陳虎に殺されたこと、陳虎が趙孝友の妻李氏を奪ったこと、目の前にいる役人の陳豹は、実は自分の孫であることが分かったことなどを述べている。ここで正末の演じる張文秀が、事件の顛末に気が付くという内容が記されているのである。

明抄本では「((正末) 做悲科云)」として、基本的には対応しているが、元刊本の賓白の内容は省略されている。元刊本では、趙孝友と妻李氏たちが家から出奔した時、妻李氏は妊娠三ヶ月であったとするのに対し、明抄本の二折の始めでは、趙孝友の妻李氏は、妊娠して十八ヶ月たっても子供が生まれていなかったとするのである。それが原因で、陳虎に騙されて張孝友夫婦は家を出奔して徐州の東岳廟に祈禱に行くという話に変化させていた。明抄本は、この点で汗衫記の粗筋を大きく変えたので、この賓白をそのままにすることはできない。

明抄本は、正末の演じる張文秀が、事件の顛末の全体像を認識する場面を、次の次の「小梁州」の「幺篇」の曲の後ろの賓白にまで延ばしている。粗筋を変更させているので、仕方のない処理だったと思われる。

なお明抄本の「吊」の字が、『元曲選』本では、「掉」に改められている。二字は『中原音韻』では、共に「簫豪韻・端母・去声」で同音の通仮である。

(73) ◎元刊本

(唱)

「脱布衫」

覷絶時雨淚盈腮，俺那別離時我心規劃。被你盼望殺這爹爹妳妳，問俺那少年兒在也不在。

○抄本

我這裡便覷絶時雨淚盈腮。不由我便感嘆傷懷。則被你拋閃殺恁這爹爹和您妳妳。婆婆也去來波，問

俺那少年兒是在也不在。

(見小末云) 相公，這半壁兒衫兒不打緊，上面干連着兩箇人的性命哩。

(小末云) 你看這老的波，怎生干連着兩箇人性命，你是說一遍，我是聽咱。

○元曲選本

我這裏便戲絕時雨淚盈腮，不由我不感嘆傷懷。則被你拋閃殺您這爹爹和您姝姝。婆婆也去來波，問俺那少年兒是在也不在。

(見小末云) 官人，這半壁汗衫兒不打緊，上面干連着兩個人的性命哩。(小末云) 你看這老的波，怎生干連着兩個人性命。你是說一遍，我是聽咱。

〔評〕

曲牌「脫布衫」は、中呂調ではなく、正宮調で使われることが多い。『西廂記諸宮調』卷二と卷七には二例ずつ正宮「脫布衫」がある。『中原音韻』、『輟耕録』などにも、正宮にその名称が録されている。『太和正韻譜』でも正宮に曲譜が録され、四句四韻である。元刊本も七例あるが、四句四韻が多い。

明抄本は、元刊本をほぼ踏襲している。二句目の「規劃」という言葉は、計画するというような意味なので、明抄本の改作者は良くないと判断したのだろう。元刊本の「俺那別離時我心規劃」を、「不由我便感嘆傷懷」と替えている。『元曲選』は、明抄本を完全に踏襲している。

(74) ◎元刊本

〔小梁州〕

這半壁衫兒是我拆開，你可是那裏將來。

(孤問了)

(正末唱) 二十年前有家才(財)，我是張員外，家住在馬行街。

○抄本

〔小梁州〕

想當初他一領家這衫兒是我拆開，不俫，問相公這一半兒那裡每可便將來。

(小末云) 你為甚麼這等窮暴了來。

(唱) 想着俺那二十年前有家財。

(小末云) 你姓是名誰。

(唱) 則我是張員外。

(小末云) 在那里居住來。

(唱) 我家住在馬行街。

(小末云) 為甚麼窮了來。

○元曲選本

(正末唱) 想當初他一領家這衫兒是我拆開，不俫，問相公這一半兒那裏每可便將來。

(小末云) 你為甚麼這等窮暴了來。

(正末唱) 想着俺那二十年前有家財。

(小末云) 你姓甚名誰。

(正末唱) 則我是張員外。

(小末云) 哦，張員外。你在那裏居住。

(正末唱) 我家住，住在馬行街。

(小末云) 你家曾為什麼事來。

〔評〕

曲牌「小梁州」も、中呂調ではなく、正宮調で使われることが多い。唐の崔令欽の『教坊記』に「梁州」の名がみえる。『樂府詩集』^(註16)の引く段安節『樂府雜錄』にも「梁州曲，本在正宮調中，有大遍小遍」とある^(註17)。『宋史』樂志十七にも、「所奏凡十八調，四十大曲。一曰正宮調，其曲三，曰梁州，嬴府，齊天樂」とある。

宋詞では、「梁州令」または「梁州令疊韻」という詞牌が見られる。また『西廂記諸宮調』卷五・卷七の正宮に「梁州纏令」，卷七の正宮にはまた「梁州令斷送」がある。宋詞と諸宮調は，句式は類似しているが，宋詞の韻が仄韻に限定されているところが異なる。

『中原音韻』の「正語作詞起例」には，曲末が「仄仄仄平平」の例として，曲牌「小梁州」が挙げられている。『輟耕録』，『太和正韻譜』に録されている。

『太和正韻譜』では，「幺篇」と二曲連続する形式となっている。元刊本のほかの五つの用例のうち四つには「幺」の字が明記されている。従って，ここでは曲の最後に，「幺」の字が抜けているとして，校正される。

明抄本や『元曲選』本の「窮暴」という言葉は，「窮薄」と書かれることもある。『中原音韻』では，「暴」「薄」の二字は声調が異なるが，同音である。

元刊本では曲辞に対する挿入の賓白が一回であったのに対して，明抄本は三回に増加させ，最後にまた賓白を加えている。しかし曲辞の内容は基本的に変わらない。『元曲選』本は，明抄本を踏襲している。

(74) ◎元刊本

「幺篇」

當年認得不良才，是俺一家兒橫禍非災。俺孩兒去做客，離 外，趣着黃河一派，一去不回來。

(帶云) 官人，你娘那裏。

(等云了)

((正末) 做把衫兒分付与孤了)

○抄本

(唱) 想着我當年認了箇不良才。

(小末云) 曾與你家作福來。

(唱) 送的俺一家橫禍非災。

(小末云) 你那孩兒那裡去了。

(唱) 俺孩兒做買賣離了 外。

(小末云) 他曾有書信來麼。

(唱) 趁黃河一黛 (帶)，他一去了不曾回來。

(小末云) 兀那兩口兒莫不是金獅子張員外麼。

(正末云) 則我便是張員外，婆婆趙氏。相公您父親莫不是陳虎麼。

(小末云) 誰將俺父親名姓叫。

(正末云) 您母親莫不是李玉娥麼。

(小末云) 這老的我的母親的胎諱怎生叫。

(正末云) 嚙都是老親哩。

(卜兒云) 老的想起來了也。這廝正是媳婦兒行十八箇月不分旣，惹是頭的弟子孩兒。

(小末云) 您兩口兒跟我去來。

(正末云) 婆婆，他要帶將俺去哩。嚙去不去。

(卜兒云) 休去。

(正末云) 為什麼。

(卜兒云) 說道路上有剝脫人的。

(正末云) 有什麼。那相公俺在那裡相等。

(小末云) 我與你些碎銀兩。金沙院相等小心在意者。

○元曲選本

(正末唱) 只為那當年認了個不良賊，送的俺一家兒橫禍非災。

(小末云) 你那孩兒那裏去了。

(正末唱) 俺孩兒聽了他胡言亂道巧差排，便待離家 做些買賣。

(小末云) 他曾有書信來麼。

(正末云) 俺孩兒去了十八年也。

(唱) 只一去不回來。

(小末云) 兀那老兩口兒，你莫不是金獅子張員外麼。

(正末云) 則我便是金獅子張員外，婆婆趙氏。官人曾認的個陳虎麼。

(小末云) 誰將俺父親名姓叫。

(正末云) 你還認的個李玉娥麼。

(小末云) 這是我母親的胎諱。你怎生知道。

(正末云) 嚙都是老親哩。

(卜兒云) 老的。我想起來了也。這廝正是媳婦兒懷着十八個月不分旣，生這個弟子孩兒那。

(小末云) 既是老親，你老兩口兒跟我去來，

(正末云) 婆婆，他要帶將俺去哩。嚙去不去？

(卜兒云) 休去。

(正末云) 為甚麼。

(卜兒云) 說道一路上有強人哩。

(正末云) 有甚麼強人。敢問官人要帶我去時。着我在那裏相等。

(小末云) 我與你些碎銀，到徐州安山縣金沙院相等，你老兩口兒小心在意者。

〔評〕

元刊本の「幺篇」の曲辞は六句、挿入句は一つである。明抄本でも曲辞は六句であるが、挿入句は三つに増加されている。「幺篇」の曲辞の後の賓白も、三つの簡単なものである。

(正末いう) お役人様、ご母堂はどこにおいでですか。

(小末いう)

(正末が肌じゅばんをとって、小末に言い伝える)

元刊本の粗筋の流れは、次の曲辞(75)「耍孩兒」と(76)「收尾」の中で、張文秀が形見の肌じゅばんをもって、陳豹の母親に見せるように言いつけるというものである。ところが、明抄本はこれを改変している。元刊本の(72)「幺篇」の後ろの賓白で、張文秀は肌じゅばんの片割れを見て、事件の概要を理解するという賓白があった。これは、張文秀一人の独白体である。元刊本(72)「幺篇」の場面を省略した明抄本は、(74)「幺篇」の後ろの賓白に、これを移している。そして、張文秀と陳豹の二人の会話によって、明らかになるという体裁に変えている。こちらの方が、演劇として進化している。

明抄本は、ここの賓白の最後に元刊本の三折最後の「等孤云了(役人役の陳豹が、張文秀夫婦に何か言う)」の内容を、ここにまとめている。明抄本(74)「幺篇」の最後の科白「我與你些碎銀兩。金沙院相等小心在意者(少しお金を渡すので、お前たち夫婦はそれをもって金沙寺に行って待っておれ)」が、元刊本の陳豹による張文秀夫婦への指示の内容であったと思われる。明抄本の張文秀夫婦の会話にも、滑稽な会話が増えられている。

『元曲選』本は、ほぼ明抄本を踏襲している。異なる点として、「幺篇」の第一句の「不良才」がある。これは、元刊本も明抄本も同じである。しかし『元曲選』本では、「才」の字を、「賊」の字に代えている。この曲は皆来韻なので、「才」の字であれば押韻していることとなる。「賊」の字であれば、齊微韻となり、押韻しないことになってしまう。「不良才」よりも「不良賊」のほうが、陳虎の悪さを示す言葉としてよいと、臧懋循は判断したのであろう。しかし、三折の後ろの「音釈」では、「賊池齋切」と注している。この解釈では、「賊」の字は「陰平・皆来韻」とになってしまう。

本来は周德清の『中原音韻』でそうだけでなく、王文璧の『中州音韻』や葉以震の『中原音韻』^(註18)でも「賊」の字は、齊微韻に属している。したがって、「賊」の字を「池齋切」としたのは、そのような方言音がどこかにあったというのではなく、臧懋循が押韻を合わせるために、「賊」の字を無理に皆来韻に読ませようとしたということであろう。

(75) ◎元刊本

「耍孩兒」

將衫兒半壁親稍帶，你子道馬行街里公婆每老邁。這消息莫交你耶知，子你娘行分付的明白。若是您一句射透千年事，強如俺十調朱門九不開。那賊漢也合是敗，您福消災至，俺苦盡甘來。

○抄本

將衫兒半壁親稍帶，你說道是馬行街公婆每都老邁。相公這言語休着您爺知，

(小末云) 怎生休着他知道。

(唱) 則去那親娘上分付的明白。則要你一言說透千年事，便俺十調朱門九不開。那賊漢也合當敗。也是他福消災至，婆婆嚙正是苦盡甘來。

(正末云) 去來去來。

○元曲選本

(正末唱) 你將這衫兒半壁親稍帶，只說是馬行街公婆每都老邁。官人呵，這言語休着您爺知，

(小末云) 怎生休着他知道。

(正末唱) 則去那娘親上分付明白。則要你一言說透千年事，俺也不怕十調朱門九不開，那賊漢當天敗。婆婆，這也是災消福長，苦盡甘來。

(云) 婆婆，我和你去來，去來。

「評」

曲牌「耍孩兒」は、『輟耕録』卷二十七「雜劇曲名」の中呂調に名前が見えるが、『中原音韻』・『太和正韻譜』などには見えない。元刊本では、十三例見える。鄭騫の『北曲新譜』は、九句六韻とする^(注19)。この曲の場合は、九句六韻である。明抄本・『元曲選』本も同じである。『元曲選』本の「儻」の字も、『中原音韻』では、皆來韻に所属している。

元刊本の「射透（透の字は漫漶）」の語は、元刊本に「説透」の語が二例あるので、徐沁君は「説透」に校正する。しかし「射透」の語は、『五燈會元』・『碧巖録』などにも見える語で、特に校正する必要があるかは問題がある。元刊本の「您福消災至，俺苦盡甘來（陳虎よ，これでお前の運命もお終い，私たちも運が向いてきた）」を、明抄本は「也是他福消災至，婆婆嚙正是苦盡甘來（お前の運命もお終い，婆さんよ，私たちも運が向いてきた）」、『元曲選』本は「婆婆，這也是災消福長，苦盡甘來（婆さんよ，これこそ災難が消えて，運が向いてきた）」というように、少しずつ変わっている。変えた理由は明確ではないが、基本的に三本とも意味は同じである。

『元曲選』本は、明抄本を踏襲している。

(76) ◎元刊本

「收尾」

強如俺佛刺佛刺頭又磕，天呵天呵手又攔。能夠俺媳婦兒眼前把公婆拜。識認了俺孫兒大古里采。

(等孤提了)

(下)

○抄本

「尾聲」

我再不去佛囉佛囉，將我這頭去磕，天那天那，將我這手去攔。我但能勾媳婦兒覷着，啗這沒主意的公婆拜。我今日箇認了這箇孫兒大古來睬。

(同卜兒下)

(小末云)長老勿罪。小官則今日收拾了行程還家中去來。

認了親和眷，心內喜偏長。

登程上駿馬，衣錦早還。

(下)

(長老云)相公去了也。貧僧無甚事，回方丈中去來。

(下)

○元曲選本

(唱)

「煞尾」

我再不去佛囉，佛囉，將我這頭去磕，天那天那，將我這手去攔。我但能勾媳婦兒覷着啗這沒主意的公婆拜。我今日先認了那個孫兒大古來睬。

(同卜兒下)

(小末云)老和尚多累了。下官則今日收拾行程，還家中去來。

(詩云)親承母親命，稍帶汗衫來。

誰知相國寺，即是望 臺。

(下)

「評」

「尾」の語は、南宋の『都城紀勝』の「瓦舍衆伎」や、『夢梁錄』の「妓樂」などに見える。

唱賺在京師日，有纏令，纏達。有引子，尾聲為纏令。引子後
只以兩腔互迎，循環間用者，為纏達。

南宋杭州で行われた大衆芸能の一つに「唱賺」というのがあった。「引子」「尾聲」の二種類のメロディしかないものを「纏令」といった。「引子」の後に、二種類のメロディを交互に連続させるものを「纏達」といったという。この説唱芸能「唱賺」の一つ「唱賺」の終わりのメロディが「尾聲」といったのである。ちなみに「纏達」が「轉踏」とも書かれて、『楽府雅詞』^(注20)などに残っていることを指摘したのは、王国維である^(注21)。彼はまた、元代の類書である『事林廣記』の中にも残されていることを見つけている。

組曲の終わりに使われる「尾」は、その後諸宮調のジャンルにも多く使われる。『劉知遠諸宮調』、『西廂記諸宮調』、『天宝遺事諸宮調』などに見ることができる^(注22)。これらは、七言三句の形が、主

であることも指摘されている。特に『西廂記諸宮調』においては、ほぼ例外なく七言形式であることは、興味深い。

元刊本では三十曲残っていて、一曲が四折なので、「尾」は百二十あることになる。実際には「収尾」,「賺煞」,「煞尾」「尾」などの曲牌名が多い。中呂の場合は、「尾」「収尾」「尾聲」などの名称が使われる。この曲では「収尾」が使われている。明抄本は「尾聲」,『元曲選』本は「煞尾」と名称を変えている。

元刊本の「佛刺」という語は、他に用例がない。「佛囉」「佛羅」の語なら多くある。元刊本が「佛刺」とした理由は不明である。

また、元刊本の「収尾」の曲辞で、「強如（ずっとまし）」という語は、明抄本では「再不（二度としない）」という語に置き換えられている。『元曲選』本もこれを踏襲している。また元刊本「把（給と同じような意味）」の語を、消している。ほかは、基本的に同じである。

明抄本は、小末の陳豹が退場する際に、下場詩を詠じている。しかし、『元曲選』本では、下場詩をまた省略している。

注

- (1) 『中国古典戏曲論著集成』8, 中国戯劇出版社, 1980年。
- (2) 『大廣益會玉篇』, 中華書局影印, 1986年。
- (3) 『宋史』卷157, 選挙三。
- (4) 孫楷第『也是園古今雜劇考』83頁参照。
- (5) 唐圭璋『全宋词』(中華書局, 1080年), 『全宋词作者詞調索引』(中華書局, 1992年)等参照。
- (6) 『欽定詞譜』(清康熙五十四年内府刻本, 中国書店影印, 1983年), 萬樹『詞律』(光緒二年, 上海古籍出版社影印), 『詞律辭典』(山西人民出版社, 1991年), 『中華詞律辭典』(吉林人民出版社, 2005年), 『中華詞律』(湖南大学出版社, 2010年)等参照。
- (7) 『中原音韻』(中華書局影印訥菴本, 1978年), 張玉來・耿軍『中原音韻校本』(中華書局, 2013年), 『中原音韻箋釋』(臺大出版中心, 2016年)等参照。
- (8) 『涵芬樓秘笈』(影写明洪武刊本, 北京図書出版社影印, 2000年), 姚品文『太和正音譜箋評』(中華書局, 2011年)等参照。
- (9) 元雜劇や散曲における「襯字」「増字」については、古くは『中原音韻』周德清自序, 王驥徳『曲律』論襯字第十九, 李魚『閒情偶寄』演習部教白第四などが知られている。最近の研究は、羅忼烈『詞曲論稿』「填詞襯字釋例」(中華書局香港分局, 1977年), 鄭騫『龍淵述学』「論南北曲之襯字與増字」(大安出版社, 1992年), 李昌集『中国古代散曲史』第一卷第三章第六節「襯字」(華東師範大学出版社, 1991年), 羊春秋『散曲通論』第五章第二節「曲的襯字」(岳麓出版社, 1992年), 趙義山『元散曲通論』第四章第一節「元散曲的襯字」(上海古籍出版社, 2004年), 梁揚・楊東甫『中国散曲綜論』第四章第三節「襯字与増句」(中国社会科学出版社, 2007年)等を参照されたい。
- (10) 曾永義「〈太和正音譜〉的作者問題」(『中国書目季刊』第九卷四期, 1975年)など参照。
- (11) 「元刊本雜劇『汗衫記』は、何処にあったのか——併せて明抄本と元曲選本の性格を論じる(1)——」(『明治大学人文科学研究所紀要』第79冊, 明治大学人文科学研究所, 2016年)247頁を参照されたい。
- (12) 四部叢刊統編集部所収。
- (13) 李昌集の『中国古代散曲史』は、唐の『教坊記』に見える「謁金門」や、『西廂記諸宮調』に見える「朝天

急」を挙げる。名称が異なる上に、宮調、句式も異なるので、ここでは取り上げない。

- (14) 趙義山『元散曲通論』二章「北曲的曲牌宮調」には、唐宋大曲に「普天楽」の名を挙げる。しかし、『宋史』卷142「楽志」にあるのは、「南呂宮平晋普天楽」であり、中呂宮ではない。
- (15) 段玉裁は、『説文解字注』で「索」の字について、「經典多假索為之」と述べている。
- (16) 卷七九近代曲辞
- (17) 『楽府詩集の研究』（中津濱渉、波古書院、1974年）、『傳增湘藏宋本、楽府詩集』（人民文学出版社、2010年）、『《楽府詩集》版本研究』（尚麗新、中国社会科学、2012年）等参照。
- (18) 内閣文庫蔵本。
- (19) 『北曲新譜』（藝文印書館、1973年）。
- (20) 『四部叢刊』初編所収。
- (21) 『宋元戯曲考』第四章「宋之楽曲」。
- (22) 「宋金元諸宮調考」（『鄭振鐸文集』第6巻所収、1988年人民文学出版社。原作は1932年）などを参照されたい。

「仮面ライダー」シリーズから読み解く
1970年代初頭のヒーローの「正義」と戦争の記憶

花岡 敬太郎

“Justice” in the Early 1970s and the Memory of War as Interpreted by *Masked Rider* Series

HANAOKA Keitarou

This paper will examine the principle of justice and its relationship with the memories of the war in the early 1970s through the analysis of the content of the *Masked Rider* series, its production process, and the formative setting.

Masked Rider (*Kamen Rider*) is a popular tokusatsu (live action) hero program that started with the broadcast of its first show in the series, *Kamen Rider*, in April 1971 and have remained and been produced for forty years up to the present time by going through interruption and changes in medium/broadcasting station. However, its program composition and the theme setting were not consistent within the 40 years of broadcasting period. Rather, the series was continued by changing the composition and themes slightly to match the spirit of each era. This paper will focus on the change in composition and theme in order to match the spirit of the era; in particular, this series will focus on the series broadcasted in 1971 to 1975 and debate on the memories of the war (in particular, the Asia-Pacific War) of people during the late economic development era.

This paper will focus how in the early series, the motive of the masked rider, the protagonist, was to throw himself into the battle to annihilate evil organizations as represented by the villain, Shocker. This paper will discuss how the justice of the masked rider is placed as an antithesis to the evil that opposes him. This means that following the transition of the image of villains allows pursuing the transition of the opposing phase of “justice”. Furthermore, Shocker, the villain in the beginning, was positioned as a remnant of Nazis. This shows that the fragments of the memories of the war held by people during the period (including the producers of the series) were embedded everywhere. Analysis of this individual work revealed that as the time went by and the program was renewed, such depiction related to the memory of the war was cast away from the direction and the setting of the villain. The analysis of the *Masked Rider* series reveals that the memories on the wars in the past are becoming forgotten in the value system criterion on good and evil as shown in the program direction and how an aspect of the formative setting of mass culture depicted a part of a process of forgetting the memories of the war in Japanese society in the 1970s.

《公募論文》

「仮面ライダー」シリーズから読み解く 1970年代初頭のヒーローの「正義」と戦争の記憶

花岡 敬太郎

1 はじめに

(1) 本稿の目的

本稿では、戦後のヒーロー番組の変遷を整理し、それを通して同時代日本における「正義」の価値基準と戦争の記憶との関わりを測っていく。中でも高い人気を誇る「仮面ライダー」シリーズを考察の軸に据え、同シリーズを中心に、ヒーロー番組が隆盛を誇った1970年代前半を分析の主対象とする。

「仮面ライダー」の放送開始は1971年4月。高度経済成長末期に登場したヒーローと言える。だが「仮面ライダー」シリーズや、「仮面ライダー」と双璧をなす「ウルトラマン」シリーズは、常に同じ社会状況下で作品展開をしていたわけではなく、それぞれがシリーズ開始当初から持っている番組プロットやそれらを構成する制作者の関心を時代の変化に合わせて変化させてきた。本稿は、この制作者の関心の変化に着目し、それを促したのが同時代の社会背景であると仮定して分析することで、同時代日本における人々の思考様式に戦争の記憶がどのように関わっていくかを把握していく。

「仮面ライダー」シリーズは、今日に至るまで継続的に新作が作られる人気プログラムである。このシリーズは、放送時期や制作経緯、制作主体等の変遷から、大きく5つに時期区分することが出来る。まず1971年の第1作「仮面ライダー」から75年の第5作「仮面ライダーストロンガー」までのシリーズを第1期、この第1期とほぼ同じスタッフ構成で79年に復活した第6作「仮面ライダー(新)」と続作「仮面ライダースーパー1」(80年)、雑誌グラビアと特別テレビ番組を媒体に展開した「仮面ライダーZX」(82~84年)の3作が露出していた時期を第2期、スタッフを一新し新展開を試みた「仮面ライダーBLACK」と続編「仮面ライダーBLACK RX」が放送されていた87~89年を第3期、オリジナルビデオによる「真・仮面ライダー序章」、中編映画「仮面ライダーZO」「仮面ライダーJ」が放映されていた92年~94年を第4期、そして2000年に開始した「仮面ライダークウガ」以降、2017年現在の「仮面ライダーエグゼイド」まで連続と続く平成仮面ライダーシリーズ⁽¹⁾(第5期)と区分でき、71年の初放送依頼、40年以上にわたる長い期間、放送媒体やスタッフ、放映局などを変えつつシリーズを継続し複数の世代にわたり支持され続けている。本稿では、第1期シリーズの動向に着目し、1970年代前半における戦後の人々の思考様式と戦争の記憶との相関について考察する。第1期シリーズと

いう限定された時期の作品だけをとっていても、番組の基本構造を堅持しつつも該当する5作品の間でも少しずつ作風が変化していることが読み取れる。この変化は、主に登場する悪役の設定に関する変化なのだが、この変化を詳細に考察し位相を追うことで、同時代の社会と戦争の記憶の関係が説明できるのではないかと仮定する。

(2) 先行研究整理と問題の限定

まず、本稿で前提とする戦後史理解についての論考を整理する。キャロル＝グラックは1997年に『世界』において「近代としての20世紀」という論題で日本の戦後史を「神話的歴史」「戦前の逆説」「冷戦」「進歩的」「中流階級化」の5つ柱に類型化し、日本史における「戦後」という言葉の多義性・多様性を主張した⁽²⁾。グラックは、この5つの柱を相互連関的に読み解く中で、「戦後はいつ終わったか（終わるのか）」という議論に対し、「進歩的戦後」以外は形を変えつつも（1997年時点では）終わっていないと述べ「戦後」という言葉の多様性を強調することで、「戦後」の連続と断絶の両面を描き出している。しかし、グラックのこの論文では、「日本の戦後の歴史にあらわれた多様性と共通性」を示してはいるが、それに対するアプローチ方法についての具体的言及はなく、日本の「戦後」が多様であるのに対して、「戦後史」はどのように展開をするべきか（あるいはしてきたか）という事には触れられていない。2005年に安田常雄は『日本史講座 第10巻 戦後日本論』の序文において、グラックの5つの戦後論の問題意識を取り上げた上で、90年代中ごろまでに現代史の研究領域が政治学・経済学・社会学・教育学・メディア論・文化論など広範囲に広がっていることと、どの分野から戦後を見渡してみても戦後が変容していることを述べている⁽³⁾。また、全体を通して変容の転機が70年代にあったのではとも指摘している。ここで安田は、70年代前後の戦後史変容の転機を理解するための課題として、アニメやマンガ、ゲームといったサブカルチャーに目を配る必要性について言及しているが、同書に所収された論文でその分野の議論を深く掘り下げることはほとんどできていない。この本における安田の問題意識をさらに掘り下げ、大衆文化の側面から戦後史を描こうとしたのが国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の現代展示だろう。歴博の現代展示では「戦後日本の大衆文化」という切り口から（博物館展示という限定的な叙述方法ではあるものの）戦後史を描き出すことを意図しており、ここに前述のグラックの戦後史の五類型を「喪失と転向」「冷戦」「民主主義」「中流階級化」「忘却」と形を改めてあてはめることで、戦後日本の大衆文化の多様性と多義性、そして共通性を描いている。特に「忘却としての戦後」というテーマを最後に設定することで、戦後日本の大衆文化の側面において、戦争の記憶を忘れ去ろうとする動きと、それを阻もうとする動きが併存していることも強調している。80年代半ばごろから戦後を単純化し否定していく傾向が強まっていると、歴博現代展示をめぐる議論で安田は述べている⁽⁴⁾。

「ウルトラマン」や「仮面ライダー」のような子ども向けヒーロー番組を素材にした論考自体は、90年代以降、比較的豊富に出されている。特に「ウルトラマン」を議論の対象にした論考は、90年代前半に佐藤健志⁽⁵⁾や切通理作⁽⁶⁾、呉智英⁽⁷⁾らが、それぞれ立ち位置は異なるものの「ウルトラ」シリーズ（特に初期作「ウルトラマン」「ウルトラセブン」）の作品分析を通じた社会評論を展開している。昨

今、「ウルトラマン」や「ウルトラセブン」は戦後日本の日米同盟や安保体制そのもの、沖縄問題などを強く意識した作品であることは指摘され出してはいるが、これらの指摘の原形は、佐藤や切通、呉らの議論がきっかけになっていると言えるだろう。彼らの議論は、90年代半ばから2000年代初頭に相次いで刊行された「ウルトラマン」の制作スタッフの回想など⁽⁸⁾によってより具体的に整理され、特に沖縄出身の脚本家金城哲夫の問題意識が強く注目されるようになり、「ウルトラマン」における正義の味方ウルトラマンは、60年代なかばの日本が抱える諸矛盾を代弁する者として語られていくことになる。一方で、これらの言説が多分に「ウルトラマン＝（金城哲夫）＝沖縄」の構図を強調しすぎ、「ウルトラマン」が放送されていた60年代後半という時代のテレビ制作現場が持っていた高揚感との緊張関係が無視され、「ウルトラマン」が本質的に持っていたはずの社会への柔軟なまなざしと感心への考察が決定的にかけてしまっていることを拙稿「『ウルトラマン』『ウルトラセブン』のポリティクス⁽⁹⁾」で指摘した。

「ウルトラマン」と並ぶ特撮ヒーロー番組である「仮面ライダー」を考察軸に据えた論考は、「ウルトラマン」のそれに比べると数が少ない。「ウルトラマン」ほど制作者（特に脚本家や監督）が後年になって注目されることが少なかったことも一因かもしれない。近年、40年以上の長い歴史を持つコンテンツということもあり、大人向けのファン本などが多数出版され、その中には時代との相関性や制作過程についての分析も掲載されていることが多いが、多くは「時代性に関する論考」というよりは制作秘話や苦労話、裏話の粹を出ないものが多数であり、「仮面ライダー」シリーズを素材とした論考は依然体系的に積み重ねられていないというのが現状だろう。

作品構造と同時代の社会構造の相関に最も自覚的で、60年代の「ウルトラマン」から70年代の「仮面ライダー」への移り変わりから、時代の変化を描き出した著作として宇野常寛の『リトル・ピープルの時代⁽¹⁰⁾』がある。宇野は60年代後半の政治の季節に活躍したウルトラマンを「ビッグ・ブラザー」と位置づけ、ヒーローの正義（戦う動機）と同時代の政治状況が不可分であること、政治の季節が終焉に近づくとつれて、「ウルトラマン」の正義も退潮せざるを得ないとした。そのため、政治の季節の終焉後に放送された「帰ってきた〜」以降のいわゆる第2期ウルトラシリーズは、常にヒーローとして戦う意義の迷走に近い葛藤に迫られ、一つの番組として趣旨を貫徹させることが難しかったとしている。一方で、対抗作品としての「仮面ライダー」を「人外の奇形に墮とされた青年がショッカーという強大な政治的物語に抵抗していく」という大文字の政治に規定されているかのようなストーリー設定を持ちながら、番組序盤で早々にその政治性を放棄し脱臭することで、同時代の政治状況を本質的に引き受けずに勧善懲悪の二項対立構造を確立させた「リトル・ピープル」的なヒーローであると位置付けた。宇野の「政治性」の議論にはアジア・太平洋戦争の「記憶」に関する配慮があまりなく、60年代後半から70年代初頭にかけての政治の季節の位相の理解も前述の安田のそれとは異なる。しかし、少なくとも「ウルトラマン」や「ウルトラセブン」が同時代（1966～68年）の政治状況に対して自覚的であったのに対し、「仮面ライダー」は、同時代の政治状況（国外的にはベトナム戦争やオイルショック、国内的には環境問題など）を意識したシナリオ構成になっていないという点は同意する。本稿では、宇野のような社会状況の変化からの作品説明ではなく、それぞれの作品におけるキャ

クターの造形設定過程などから、制作者の関心や思考様式と番組制作をめぐる様々な状況とそこからの要求との緊張関係の場として「仮面ライダー」をとらえていきたいと思う。

1971年に放送を開始した第1作「仮面ライダー」から第5作「仮面ライダーストロンガー」(75年)までを本稿の主な分析対象とすることは既に述べた。この期間は、社会学者見田宗介の時期区分⁽¹¹⁾からいえば「夢」の時代から「虚構」の時代への転換期と言える。見田は戦後日本社会をアメリカン・デモクラシーとソビエト・ Kommunizmusの「理想」の時代(1945年～60年ごろ)、次いで「理想」の先の高度成長の豊かさを楽しみつつも違和感を覚え、現実の彼方の夢を追い求める「夢」の時代(60年代～70年代前半)、最後に、現実の彼方の「夢」を「虚構」としてしか認識できなくなる「虚構」の時代(70年代半ば以降)と時期区分している。「夢」から「虚構」へのターニングポイントとして見田は73年のオイルショックを上げているが、「仮面ライダー」シリーズ内での変化を追えば、オイルショックとは位相の異なる「夢」から「虚構」への移行を読み取ることができるはずである。

以上を踏まえ、安田の「忘却」としての戦後の観点と見田の戦後時期区分をベースに、宇野が指摘しなかった「仮面ライダー」という作品が内在的に抱える「戦争の記憶」という政治性がどのように形成され変化したかを追ひ、現代史変容の転機としての1970年代の内実の一端を探っていくのが本稿の目標である。

最後に分析方法とその目標について確認する。初期の「仮面ライダー」シリーズを考察する場合、個別具体のエピソード分析はほとんど要をなさない。これは宇野の「仮面ライダー」における物語はライダーと怪人の戦いを盛り上げるための添え物に過ぎない⁽¹²⁾という指摘に筆者も同意するからである。加えて指摘すると、「仮面ライダー」の各エピソードは、制作段階で設定された作品構造の大枠を繰り返しリライトしているといえ、作品分析で重要視されるべきは、この「制作段階で設定された作品構造」そのものであると考える。よって本稿は、作品の基本設定が構築される経緯とスタッフの考えの背景を分析対象とする。「仮面ライダー」シリーズの設定、特に悪役の設定は徐々に変化していく。具体的には、「仮面ライダー」の宿敵・ショッカーがナチスや軍国主義を象徴していたのから、第3作「X」のGOD機関で共産主義者や過激派にイメージの源泉を移し、最終的に第5作「ストロンガー」でイメージ不詳のデルザー軍団という組織に変わっていく。このイメージの変遷を「戦争の記憶」と同時代の社会状況の変化から説明することで、見田とは異なる「夢」から「虚構」の時代への変化の位相を探っていく。

2 「仮面ライダー」シリーズの展開と1970年代

(1) 前史としての「ウルトラマン」「ウルトラセブン」

1970年代のヒーロー像に言及するまえに、大前提として1966年に放送された「ウルトラマン」と翌67年に放送された「ウルトラセブン(以下「セブン」)」について触れる。両作は制作が「ゴジラ」の円谷英二率いる円谷プロダクションであったこと。作品の構成を手がけた脚本家金城哲夫が、当事ま

だ米軍施政下の沖縄出身で沖縄戦経験者であったこと。佐々木守や実相寺昭雄など多方面で注目されることとなるクリエイターが数多く携わっていたことなどがあり、先述の先行研究の多くで、同時代の政治状況や沖縄を中心とした戦争の記憶との関わりあいから頻繁に論ぜられてきた。この「ウルトラマン＝沖縄」を前提とした同シリーズをめぐる議論の是非については、先行研究整理でも述べた通り、拙稿（2016）で沖縄をめぐる政治性・社会性の観点に過剰に傾倒することで、かえって、当時における新興メディア・テレビがもっていた躍動感の一端としての「ウルトラマン」制作現場への理解を矮小化させ、同シリーズが持つ同時代社会全体への幅広く柔軟なまなざしを見誤ってしまっていると指摘した。とはいえ、「ウルトラマン」や「セブン」が本質的には地球にゆかりもない異星人に地球人の正義や利益を代弁・代行させるという作品構造上、その地球人の「正義」をある程度相対化させてストーリーを構築することが可能であったことは事実である。この基本プロットが、60年代後半という社会背景と絶妙に交配し、同時代の大きな政治状況や「正義」のあり様について疑義を提唱する問題意識を醸成していったのは事実だろう。このような作品基盤を作り上げていったのが、金城哲夫を筆頭に佐々木守、市川森一、上原正三、藤川桂介といった脚本家と、円谷一、実相寺昭雄、山田正弘、飯島敏宏ら気鋭の監督たちであったと言える。改めて詳述する必要はないと思うが、放映当時の「ウルトラマン」「セブン」の人気は絶大で、毎週の放送はコンスタントに視聴率30%代を記録、67年3月26日に放送された「ウルトラマン」第37話「小さな英雄」⁽¹³⁾の視聴率は42.8%⁽¹⁴⁾とシリーズ最高の数字を見せるなど、娯楽メディアとしてのテレビの有り様が現在とは若干異なるとはいえ、文句なしに国民的人気コンテンツであったと言える。

驚異的な人気を誇った「ウルトラマン」「セブン」の両作も、「セブン」の後半から徐々に人気低迷し、視聴率も下降傾向を取るようになる。68年9月の「ウルトラセブン」の終了以降、円谷プロは第3のウルトラ戦士を登場させるのではなく、「怪奇大作戦」のような別の方向性の番組制作へ転換していくが、全般に奮わず苦戦を強いられることになる。

一方で、「ウルトラマン」「セブン」の再放送は好評で、新規番組に匹敵する視聴率を残している⁽¹⁵⁾。さらにウルトラマンと怪獣との戦いのシーンだけを切り取って再編集した短尺番組の「ウルトラファイト」も確実な人気を取り付け、1970年に入るところには第2次怪獣ブームと呼ばれるまで人気を取り戻す事となった。この第2次怪獣ブーム期に作られた2つの作品が「帰ってきたウルトラマン」と「仮面ライダー」である。

(2) 「仮面ライダー」の登場と新しいヒーロー像の確立

「仮面ライダー」の制作スタッフと言った場合、真っ先に名前があがるのは原作者の石森章太郎⁽¹⁶⁾であろう。石森は「仮面ライダー」シリーズだけでなく、「人造人間キカイダー」や「秘密戦隊ゴレンジャー」など多くの特撮ヒーロー作品の原作を手掛け、「原作」という意味においてなら、石森は円谷英二と並ぶ戦後ヒーローの生みの親と言っても過言ではない。だが、「仮面ライダー」というテレビ番組が制作されていく経緯をたどると、実際に番組の方向性を強く規定していたのは、石森ではなく東映のプロデューサー平山亨⁽¹⁷⁾であることがわかる⁽¹⁸⁾。平山は、54年の東映入社以来、京都で助監督

として時代劇制作に携わってきた時代劇畑の人物で⁽¹⁹⁾、「笛吹童子」「旗本退屈男」「水戸黄門」など東映の定番シリーズに従事、東映時代劇が得意としたスターシステムによる大御所俳優総出演の娯楽活劇を制作するうえで欠かせない調整役であり、物語を棚上げにした痛快時代劇をまとめ上げる手腕に長けた人物であった。65年にテレビ部に異動、プロデューサーとして「悪魔くん」の制作に携わり、「キャプテンウルトラ」のプロデューサーとなる。「キャプテンウルトラ」はTBS系空想特撮シリーズにおける「ウルトラマン」の後番組で、同枠上では「セブン」の前番組でもある⁽²⁰⁾。

「キャプテンウルトラ」のプロデューサーとして、「ウルトラマン」という作品の完成度の高さを目の当たりにしていた平山は、「仮面ライダー」というまったく新しいヒーローを成立させるため、まず、作品の箔付けを図るために当時人気絶頂だった漫画家・石森章太郎に原作（実質的にはキャラクター原案）を依頼。石森のビジュアルイメージに加え、自身が歩んできた東映時代劇のスタイルを番組の基本スタイルとして導入した。時代劇の殺陣を専門にする大野剣友会、「ウルトラ」を知る名優小林昭二⁽²¹⁾らの人材を得て、単純なチャンバラではなく、同じく平山がプロデューサーとして手掛けた「柔道一直線」に見られるような「スポ根」の要素を上乘せし、いわば〈スポコンチャンバラヒーロー〉としての仮面ライダーを誕生させた。また、脚本家には、宣弘社出身の盟友伊上勝⁽²²⁾を中心に、「セブン」で金城哲夫とともに執筆の中心を担った上原正三⁽²³⁾と市川森一⁽²⁴⁾をそれぞれ番組企画立ち上げに際し招聘した。

これは… 話せば長いんだけど…「仮面ライダー」が難航してたわけよ。企画が。それで、関西の毎日放送がこんな番組はやりたくないって言い出したんです。

それで、僕と市川は「ウルトラマン」や「セブン」をやってるから、応援演説のために呼ばれたんです。銀座の東映（本社）でさ、会議室があるんだけど、前の岡田会長、渡辺亮徳さん、それから石ノ森章太郎さんとか、もう何十人が大きなテーブルを囲んでいるわけ。で、彼らが今まで毎日放送さんとやってきたことがダメなわけ。で、平山さんが「頼むよ」っていうわけよ。なんか言わなきゃいけないってんで、実際にそこで見せられたんだよ。あの仮面ライダーを…

毎日放送さんは、「ウルトラマン」のようなスキットしたヒーローモノをやりたいんだと。なんで等身大の虫のようなチンチクリンのやつが出てくるんだと彼らは言うわけ。それで、やめる寸前だったわけですよ。そこで、僕と市川が呼ばれて、僕は30分近くしゃべったかな。このキャラクターがいかに素晴らしいかって。〔中略〕

なぜかっていうと、「ウルトラマン」を越えることは出来ないんだと。あれはもう完成されている。それに対抗できるのは、全く真逆のものしか受けないだろうって言ったんですよ。意外とね、僕や市川が言うとな、「この若造たちはウルトラマンやってるから、なんか説得力あるよね」っていう風になったらしい。それで、毎日放送さんが「じゃあ、やってみましょう」って話になったわけ⁽²⁵⁾。

上原や市川の招聘は、特撮ヒーローものをレギュラー放送させることに慎重な姿勢だった毎日放送

を納得させるための切り札だったことが上原の回想からわかる。また、特撮ヒーローものを撮るのであれば、「ウルトラマン」のようなスタイリッシュな作風を毎日側が企図していたことに対して、上原や市川のように「ウルトラ」の現場をよく知る人物から、「ウルトラマン」と同じようなことをやっている「ウルトラマン」を追い越すことは出来ないと指摘されれば、「仮面ライダー」が「ウルトラマン」とは異なるヒーロー像を希求することの意義も相応の説得力が付与されたといえる。上原や市川らの助勢を得て、「仮面ライダー」の制作は軌道に乗る。そのまま前述の伊上、そして上原、市川の三頭体制で脚本家陣を形成するのではなく、平山は脚本家を実質的に伊上一人に絞って企画を進めていく。

それでね、企画を受けて、僕は（「仮面ライダー」の）1話から書くつもりだったの。で、準備を東映でやっていたんですよ。それで、島田陽子さんとか、主演の人たちが挨拶に来たの。そしてたら、いきなり橋本洋二プロデューサーから電話があって、すぐに円谷に帰って来いよと。で、平山さんもさ、反対するのかと思ったら、なんか「行ってらっしゃい」みたいな感じでさ…

裏で、橋本洋二と平山さんが繋がっててさ…僕はレンタルライターみたいになっててさ。じゃ「ちょっと貸すよ」みたいになってたみたい。

大変な人だよ。まともに行けない所は、全部裏から通しちゃう⁽²⁶⁾。

上原の上記の回想からうかがえるのは、上原や市川の招聘はあくまで「仮面ライダー」という企画を毎日放送側に通すための平山の策であり、同時期に「帰ってきたウルトラマン」の企画を進めていたTBS系プロデューサーの橋本洋二との了解の上での一時的な「人事異動」であったということだ。結局、企画会議で熱弁をふるった上原正三が実際に「仮面ライダー」で脚本を執筆することはなく、上原と市川は「帰ってきたウルトラマン」にその活躍の場を戻すことになった。

以上のような人的経緯を経て、「仮面ライダー」は制作・東映、放送局・毎日放送の看板のもとで制作を開始することになった。企画成立の論理的支柱として「ウルトラマン」を知る上原正三、市川森一を招聘しつつも、企画成立後は彼らを古巣に返してしまった平山が企図した「仮面ライダー」の世界観はどのようなものだったのか。

仮面ライダー本郷猛は改造人間である。

彼を改造したショッカーは世界征服を企む悪の秘密結社である。

仮面ライダーは人間の自由のため、ショッカーと戦うのだ⁽²⁷⁾。

この「仮面ライダー」番組冒頭の短いナレーションだけで、テレビ番組「仮面ライダー」の世界観はほぼ語りつくされていると言っている。「人間の自由のため」というくだりは、番組の企画段階で市川森一が考えた一文で⁽²⁸⁾、市川はライダーが敵と戦う動機について、平山と以下のようなやりとりをしていた。

市川森一さんは、スケジュールの都合で書いてくれたのはたった一話だけだったが、成立段階のディスカッションで、

「正義のために戦うなんて言うのは止めましょう。ナチスだって正義を謳ったんだから、正義って奴は判らない。悪者とは、どんなお題目を掲げていても人間の自由を奪う奴が悪者です。仮面ライダーは、我々人間の自由を奪う敵に対し人間の自由を守るために戦うのです」

と素晴らしい提案をしてくれた。正義と言えば、ショッカー側だって正義の戦いと言うだろう。しかし、その正義のために人間の自由を奪うショッカーは許せない。

これは「仮面ライダー」をただのヒーローアクション物から一大跳躍させた大変な提案だったのだ⁽²⁹⁾。

上述のナレーションで仮面ライダーの戦う動機（本稿ではこの「戦う動機」を便宜上「正義」と呼称する）を「人間の自由」のためと方向づけたのは、企画段階での市川と平山のやりとりによるものであったことがわかる。その上で、打倒すべき「悪」は「人間の自由」を侵害する者で、ショッカーの悪とは「人間の自由」を阻害する悪であると位置づけようとした。ここで、平山があえて「自由」の内実まで厳密に定義せず、「自由」とは何かを自問するようなテーマ性を追求すれば、「自由」の在り方をめぐり、仮面ライダーはかつての「ウルトラマン」「セブン」のように、社会の内面に切り込んでいくような逡巡や葛藤を見せたかもしれない。しかし、市川や上原が抜け、伊上一人で脚本を賄っていたうえ、主演の藤岡弘が撮影開始直後に負傷降板し、改造人間・仮面ライダーという異形の姿に悩める青年科学者・本郷猛という主人公像を早々に棄却しなければならなかったなど、「仮面ライダー」は科学の狂気と横暴を背景に持つシリアスな怪奇ドラマから、陽気で都会的なスポーツマン一文字隼人（演：佐々木剛）を頂く明るいヒーロー番組へと変質せざるをえなかった。テレビ版の一文字隼人は本郷猛のように自身のおかれた悲劇的状况に悲嘆することはほとんどなく、毎週繰り出されるショッカーの怪人を問答無用に駆逐する陽性なヒーローとして子どもたちから強い支持を得た。この本郷猛から一文字隼人への主人公の交代による番組の大きな路線変換は、主人公のパーソナリティの変化も相まって、正義の味方・仮面ライダーの戦う理由への問いかけを完全に棚上げにすることに成功した。本郷猛から一文字隼人への主人公の交代によって作風が大きく変わっていったのは事実だが、平山は以下のような回想も残している。

作品のタッチも変わった。これも当初からの私の計画ではあったのだ。最初シリアスに始めて、作品イメージが決まったらポピュラータッチに移行する。そうする事によって視聴者層の拡大をはかるのだ。〔中略〕

どんなシリアスな物でもシリアスそのものではないのだ。明るく楽しい仮面ライダー。仮面ライダーの孤軍奮闘の悲壮な戦いも、その悲壮さが浸透したら、そのテーマは底に沈めて、タッチは明るく描く構想だった。

藤岡の負傷による早期降板は想定外であったにせよ、早晩、平山はシリアスな作風は「そこに沈めて」明朗な作風に転換するつもりであった。原作者・石森の抜擢も上原や市川の招聘も、「仮面ライダー」に明確なストーリーを与えるための手立てではなく、あくまで一つの番組制作を軌道に乗せるために必要な補助剤に過ぎなかったことがこれらの経緯からわかる。事実、藤岡弘は負傷降板の八ヶ月後に番組に復帰するが、画面に再登場した本郷猛は、最初期の内省的な本郷ではなく、一文字隼人のキャラクターを踏襲した、明るく都会的なキャラクターが強調されるようになっていた。

このような段階を踏んだ主人公のパーソナリティの明朗化は、作風の明るさを担保すると同時に、石森が原作を書き、上原や市川が企画に関わっていた段階で作品の根底に配置されていた複雑さやシリアスさを徐々に形骸化させていった。石森が執筆した「仮面ライダー」原作漫画には公害問題や爆二世問題などの同時代の社会問題への直接的な言及があり、主人公が本郷猛から一文字隼人に交代しても、ショッカーの背後で人類の統制を目論んでいたのが実は日本政府であったという伏線を張り巡らせることで、常に改造人間としての自らの立ち位置の複雑さや何のために（誰の自由のために）戦うのかという「正義」の処在の葛藤が描かれていた。だが、テレビ番組「仮面ライダー」の一文字隼人や復帰後の本郷猛は、作品に新たに導入された「変身」の掛け声とともに絶対的な「悪」であるショッカーを懲らしめる英雄として描かれた。平山が京都映画時代に得意とした、娯楽時代劇と相似形の勧善懲悪の二項対立構造がそこには垣間見え、この二項対立構造の確立により、従来の「ウルトラマン」シリーズや石森版「仮面ライダー」と異なり、ヒーローの「正義」や戦いの必然性が同時代の社会状況に大きく規定されることなく自明化され固定化された、新しいヒーロー番組のプロットが出来上がったのである。

では「仮面ライダー」の「正義」はどこに固定されたのであろうか。それを探る上で重要なのが、敵役ショッカーである。仮面ライダーは徹頭徹尾ショッカーのアンチテーゼとして扱われ、ライダーの「正義」はショッカーを「悪」と断定することから始まっていると言える。仮面ライダーの「正義」は人間の自由を守ることであり、いかなる理由があっても人間の自由を阻害するものを「悪」と設定しようとしてきたことは既に述べた。では、具体的に何をイメージして作中の悪役に人間の自由を脅かさせようとしていたのだろうか。

鬼道院「何でもない。君たちのような輩を一掃して統制ある世界を作る。統制こそが発展をもたらす。君たちのように一人、一人が勝手な事を主張する混乱の世の中より、個人を没して社会のためにつくす世界こそ美しい」

城 「全体主義！」

結城 「ファシズム」

鬼道院「それがどうした！一人、一人が勝手なことをして、ズルくて金のあるものだけがうまい汁を吸うこの汚濁に充ちた世界を見ろ！これがお前たちの好む民主主義の世界だ！」

風見「汚れ切ったこの世界でも、自由を失うことにくらべれば、まだ数万倍も美しい！この混濁の世界にも命を賭けてこれを守ろうとするものがあることをおぼえておけ！⁽³⁰⁾」

鬼道院が悪役（ショッカーの流れを組むバダン帝国の幹部）、城、結城、風見はそれぞれ仮面ライダーたちの名前である。この文献は80年代の平山の悪役像を表しているもので、71年段階の「仮面ライダー」での観点とはズレがある可能性はある。ここから、平山がイメージする「悪」は全体主義やファシズムであり、こういった思想によって統制された世界とくらべれば、汚濁・腐敗が横行している、物言う自由が認められている世界を守るべきであると考えていることが読み取れる。

加えて、平山自身の戦争体験から、より具体的に「自由」を制限するものが何であるのかが見えてくる。平山は少年期、海軍飛行予科練習生（通称予科練）に在籍し、空襲後の市街地で被害者の遺体回収作業等に従事してきた。戦争で衣食住を制限され、家族も出征や疎開で離ればなれ、戦争という巨大な出来事の前に誰も助けられない、誰も助けてくれないという無力感に包まれた少年時代を過ごしてきた⁽³¹⁾。平山にとって仮面ライダーというヒーローは「そんな世界からみんなを救ってくれる誰か⁽³²⁾」への期待を具体化させたものでもあった。平山の回想録などを追うと、少年時代の平山は言うところの軍国少年ではなかったが、さりとして熱心な平和主義者でも決してなかった。その意味では、平山の「自由」や「悪」のイメージについて、戦争経験は無関係ではないにしても、体系だった影響を及ぼしているとはまでは言えないだろう。平山にとって大切だったのは、具体的にこれが「悪」（もしくは「善」）とガッチリ固めて演出することではなく、人間の「善意」にどのように向き合っていくかを描くことであった。

私の制作生活三十年を通して、追い求めて来たものは、人間の善意のテーマだったようだ。

お人好しの私は幼い頃から、人間本来、性は善、世界はすべて友達だ、と思い込んで裏切られ、悲しい思いをかみしめて来た。

これは自分自身についても同様。

自分だけは、人を裏切るようなことはすまいと、ひそかに、誓ったのではあったが、その自分でさえ、心ならずも他人を裏切ったりしているのだ。

人間は本来「悪」なのだろうか？

社会との都合上、善を装っているのだろうか？

この悲しいテーマが私を駆り立て、作品上の登場人物に仮説を設定して来たのだ⁽³³⁾。

平山は人の「善意」をどのように描くかをテーマに据えようとしていた。好むと好まざるとに関わらず発生してしまう「悪」にどのように「善意」で向き合うかが、平山にとっての大きな課題だったのではないか。以上を踏まえると、平山の想定する「悪」は人々の「悪意」そのもので、その「悪意」の最たるものが人々の「自由」を奪うということ。そして、最も人の「自由」を侵害していた現象が戦争だったと考えていたといえるのではないだろうか。戦争を象徴する軍国主義なども平山にとっては「悪意」の一つの具体例だったのかもしれない。こういった平山の強い「悪」観に裏付けられた仮面ライダーの「正義」は、守るべき「自由」の意味について葛藤することはほとんどなく、敢然と「自由」を侵害するショッカーに立ち向かっていくこととなった。

ショッカーの「悪」が戦争や戦争実行主体そのものを象徴したものであるとして、具体的にショッカーのビジュアルも含めたイメージの源泉はナチスである。この事は、設定上でも明確に「ナチスの残党⁽³⁴⁾」と位置付けられていることからわかる。ショッカー＝ナチスという設定は、番組開始当初こそ、方向性が怪奇性や異形性に強くシフトしていたこともあり、ナレーション等で時折語られる程度であった。だが、本郷猛から一文字隼人へ主役が変更され人気上昇したのに合わせ「大幹部」の設定が導入される。そこから、ショッカー＝ナチスの構図が前面に押し出される。「大幹部」の設定は、ショッカーという組織が明確な規律を持った絶対的縦社会であるという事を強調し、指揮官を「凶暴なナチ的指揮官⁽³⁵⁾」とナチスを改めて強調している。とくに最初の大幹部ゾル大佐は、その出自を「アウシュビッツのガス室管理人⁽³⁶⁾」と設定され、階級が宛がわれていることからわかるように軍人としてのパーソナリティも備えている。「大幹部」にも関わらず、多くの勲章をまとう高級軍人というより、現場の士官然とした出で立ちをしていることから、ゾル大佐が象徴する「悪」は、銃弾や爆撃にさらされる「戦場」そのものであった可能性が見て取れる。ゾル大佐は、ごく一般的な「悪い軍人」のイメージを悪役として描き出そうとした産物と言えるだろう。戦後の日本においてナチスやヒトラーは悪の象徴であり、ナチスがメディアで描かれる場合は、現実政治を計る基準として、時には絶対的な悪役、あるいは指導者ヒトラーに悪魔的な魅力を見出す装置として機能していたとされる⁽³⁷⁾。ヒトラーの人間性に注目して再評価を試み、ナチスカルチャーに独特の魅力を見出していくような文化の一潮流が台頭するのは80年代以降が中心⁽³⁸⁾であるため、ショッカーやゾル大佐は、平山が嫌悪する「戦争」や「軍国主義」を解りやすく象徴させるためのキャラクターであったと考えたほうが自然だろう。「仮面ライダー」とほぼ同時代に羽仁五郎は、日本の体制諸制度（裁判や警察）に潜む軍国主義的要素をアウシュビッツになぞらえて批判したが⁽³⁹⁾、そのことを踏まえるのなら、ナチスやアウシュビッツをモチーフに据えることの向こう側には、日本の軍国主義への批判があったのかもしれない。

ゾル大佐の次の大幹部死神博士には、ゾル大佐に比べると軍人や戦争といったイメージを直接喚起するような外見上の特徴はない。ただ、平山が死神博士に付与した設定にはいくつかナチスと戦争を想起させるものが含まれている。

死神博士とは、仮面ライダーの敵、ショッカーの大幹部ゾル大佐の後を継いで総司令官となり、その冷酷な作戦で日本各地を恐怖のどん底に陥れた男である。その冷酷な彼の人格は、どのようにして形成されて行ったのか。彼の本名はイワン・タワノビッチ、国籍は日本だがロシア人と日本人の混血であった。[中略]

イワンの母は白系ロシア人で、ロシア革命で故国を追われた薄幸の人であった。異国日本の片隅で貧窮にさまよう彼女は、素姓も知れぬ日本人男性の情を受けイワンとナターシャを産み、そして男に捨てられた。

困窮の中に二人の子供を育てた彼女は、イワンたちの将来のみを案じていたが、病魔に冒されていた。彼女は自分の死期を悟り、最後の手段と旧知をたどってイワンたちを、ポーランドはク

ラクフのシモン教授に託したのだ。[中略]

十六歳で名門ヤギエオ大学の医学部に入学できた彼は、シモン教授の専門である内臓外科の分野に没頭していった。[中略]臓器移植による延命術。これが彼の最大のテーマであった。[中略]すべてを取り替えてしまえば、老衰死すらなくなるのではないか。この人間最大の悲しみである死別を、この世界からなくすためなら、この魂を悪魔に売っても罪にはならぬ。[中略]クラフ市の西郊六十三キロにあるアウシュビッツ（オウビエンチム）だった。占領ドイツ軍の傭員として徴用され生体実験の研究者となっていたイワンは、狂奔の天才を揮って臓器移植の研究を続けたのだ⁽⁴⁰⁾。

劇中で言及こそされなかったが、やはり死神博士にもアウシュビッツで人体実験に関わっていたという設定が付与されており、彼もまたナチスの残党であることが意識されていた。またナチスの関係者でありながら、その血筋はロシアと日本人のハーフとされており、帝政ロシア期の上流階級の血統が想定されている。「仮面ライダー」シリーズには死神博士の他にも帝政ロシア出身と設定された大幹部が数人おり⁽⁴¹⁾、平山にとってナチス以外にも戦争を起こす「悪」や人の「悪意」の象徴としてロシア帝国が意識にあったことが伺える。また、死神博士に日本人の血が入っている設定も、「仮面ライダー」シリーズ全般から見るとかなり異色である。初期のシリーズにおいて、大幹部と設定されたキャラクターで明確に日本人のアイデンティティを付与されているのは死神博士だけである（無論、どの大幹部も演者は日本人ではあるが）。死神博士に続く第三の大幹部・地獄大使には、それまでのゾル大佐や死神博士とはやや趣きの異なる出自が設定された。

地獄大使みたいな奴が、どうして人民解放などという大して得にもならないことに参加したのだろうか？ 若い頃の彼には、まだ理想もあったのか？

たしかに、ショッカーにも力の秩序という理想はあった。それを潜在侵略という新しい型式で、彼等は彼等なりに進めようとしたのだ。この潜在侵略という新型式は、現実には世界のあちこちで進んでいる。この方法論の基礎は解放戦線のゲリラ戦法なのだ。

若い地獄大使は、もちろん純粹に人民のために闘ったわけではない。彼は彼なりの野望をもち、それを果たせる所を求めて東南アジアにやってきたのだ。力こそ正義だ。彼はどうしようもない最下層の生活から、はい上がる手段として、過去や身分を問われない最果ての戦場にやって来たのだ⁽⁴²⁾。

地獄大使の出自は東南アジアの独立運動家であり、それも民族のための運動ではなく自身の力を誇示するために外部から民族運動に加わった野心家であると設定された。具体的に平山がどういった運動家を直接にモチーフに据えたかは資料がなく判断しかねるが、行き過ぎた暴力は、たとえ独立運動という「正義」があったとしても平山の眼には「自由」を侵害する「悪」と映ったのだろう。

ここまで、平山の「悪」への問題意識の処在を探ってきた。ナチスを象徴に据えつつ「自由」を侵

害する戦争や暴力そのものを「悪」としてきていることが確認でき、「仮面ライダー」は戦争被害の記憶や経験、眼差しに根差したヒーローということが出来る。石森や市川の目指した内面的な葛藤を同時代の社会問題と深く関わらせながら深めていこうとするヒーロー像を表面上は引き受けつつも主題としては貫徹させずに底へ沈め、「戦争」という現象とその現象に自由を統制されていく事態そのものを「悪」としてとらえていく構図を選択した形だ。この構図は、吉田裕の指摘する、過去の大戦の加害者としての自覚やベトナムの民族自決権の承認といった意識からのベトナム反戦ではなく、日本が戦争に巻き込まれていくことへの忌避感からアメリカの軍事行動に批判的な姿勢をとった、1970年代初頭の日本人の戦争観⁽⁴³⁾ともある程度符合する。吉田の指摘によれば、厭戦感からベトナム戦争へ反対していく人のほうが同時期においては主流であり、本郷猛降板以降の（平山の問題意識が優先された）「仮面ライダー」は同時代のしごくオーソドックスな反戦平和意識をベースに抱えたヒーローであると言える。ベトナム反戦における厭戦意識による反戦と加害者意識の本質的欠如という戦争観は優れて政治的な産物ということも吉田は加えて指摘しており、「仮面ライダー」の同時代の戦争観をベースにできあがった勧善懲悪にもとづく善悪二元構造もまた強く政治性に規定されていたと言えよう。宇野常寛は「仮面ライダー」を政治性が脱臭されたヒーローであると指摘したが、「ウルトラマン」や石森の原作版「仮面ライダー」のような主人公の内面に大文字の政治性を見るアプローチとは全く異なるかもしれないが、テレビ版「仮面ライダー」もまた、戦争の記憶の投影のされ方という意味で、強く政治に規定されていたと言えるのではないか。

「仮面ライダー」の「善」と、敵役ショッカーの「悪」は作中において、どのような対立構造をとってきたのかを整理したい。テレビ版では、本郷猛降板以降、勧善懲悪の二項対立構造が一層強調されるようになったことは述べた。この構図をより細かく見ると、作中のライダーや彼の協力者達のショッカーに対する態度が思いのほか攻撃的かつ排他的であることがわかる。作中での善悪の認定基準はショッカーに属しているか否かのみであり、ショッカーの構成員はそれだけで排除の対象となる⁽⁴⁴⁾。ライダーや協力者達は積極的にショッカーを探し出して戦う傾向にあり、ショッカーがまだ悪事を働いていない（計画段階で実行には移っていない）にも関わらず、計画が露見し次第、アジトに乗り込んで計画諸共敵を退治してしまうエピソードは数多い⁽⁴⁵⁾。

ショッカーを絶対的な「悪」と設定し、ショッカーの魔の手から人類の自由を守るために、積極的に敵を探し求め、相手が違法行為をしているかどうかの厳密な判定をする前に実行に移るという姿勢は、冷戦体制化の西側諸国の軍事スタンスを彷彿とさせる。その意味において「仮面ライダー」は、戦争被害や軍国主義による「自由」の侵害といった記憶を問題意識の根幹に据えつつも、まさに「冷戦」いう戦後の世界構造をダイレクトに表現する作品構成になっていることが見て取れる。ショッカーの演出が明らかにナチスや帝政ロシアといった独裁国家・軍国主義を念頭に置いているため、「戦争」を彷彿とさせるのは必然かもしれないが、対抗する仮面ライダーと協力者たちの構成からも「戦争」像を読み取ることが出来る。ライダーはショッカーを見つければ問答無用で戦闘を挑むのだが、時に返り討ちに会うことがある。この時、ライダーが真っ先にとるのは、「自らの体を何らかの方法で強化して戦力増強を図る」という手段であることが多い。この戦力増強方法は、先に述べたように平

山がかつて手がけた「柔道一直線」などのいわゆるスポコン作品のエッセンスに範をとった特訓による戦力増強が主だが、時として武器やオートバイの強化や、自分自身の体の再改造（仮面ライダー自身もショッカーの改造人間である）によって戦力向上を図ることがある。また、「ショッカーの攻勢が強くなるのに備える」という理由で、実際にショッカーと交戦する前に戦力を増強するときもある。そして、多くの場合ライダーや協力者たちはこの戦力増強に逡巡を見せない⁽⁴⁶⁾。また、ショッカーも世界征服の目的達成のために打倒ライダーを掲げ強力な怪人を次々と作り出す。ライダーはそれに対抗するためにまた戦力増強をはかる。この繰り返しが「仮面ライダー」という作品をより子どもたちが熱中するものに仕立て上げたのだと言え、以後のシリーズや後進の類型他ヒーロー番組でも、善悪双方のパワーアップの繰り返しは必要不可欠な要素となった。この要素は、結果的に作品の構造を東西冷戦構造との相似性を一層深め、「戦争」による自由の侵害を克服することがライダーの「正義」であったにも関わらず、「仮面ライダー」における「善」「悪」の対立は、それ自体、「戦争」における勢力間の対立に似た構図を作り出してしまった。

(3) 変化する悪役像

「仮面ライダー」の人気を引き継いだ次作「仮面ライダーV3」(1973年)でシリーズの人気は最高潮に達する。「V3」の主な敵デストロンはショッカーの後継組織と明言され、作風面で前作との大きな違いを読み取ることは難しい。そのせいか、徐々に子どもたちに飽きられ、本編内での若干の路線修正を経て、74年から始まる第3作「仮面ライダーX」は従来の2作の続編と位置づけつつ、「仮面ライダー」V3から大きな変化を導入した。

「X」では陽気な一文字隼人や、気取り屋の熱血漢・風見志郎(V3)と言った従来の主人公像に修正を加え、主人公・神敬介を「仮面ライダー」開始当初の本郷猛のキャラクターに若干近い、自身の肉体と、父や恋人を同時に失ってしまったシリアスな青年として設定した。

また、敵対するGOD機関の設定も、成長著しい日本を壊滅させるために東西両大国が手を組んで作った組織⁽⁴⁷⁾と変更され、ナチスの残党と設定づけられていたショッカーやデストロンとは一線を画す組織として描かれた。「X」は平山亨や石森章太郎よりも、平山とともに「仮面ライダー」シリーズを支えていたサブプロデューサー・阿部征司⁽⁴⁸⁾が主体となって企画が進行した⁽⁴⁹⁾作品で、神敬介役に比較的都会的で二枚目の俳優・速水亮を据えたのも阿部であった。阿部の人間性や追求しようとしたテーマについては、平山の回想等から人柄を推し量るのが精一杯だが、阿部は、平山がヒーローに自らの夢や理想を強く投影する傾向にあるのに対し、早大シナリオ部出身ということもあってか、かなり現実主義的な側面の強い人物であったようだ。そもそも、「仮面ライダー」という番組の企画自体、「バッタの改造人間」という設定があまりに陳腐で幼稚であるとして、企画に賛同しよとできなかった経緯もある⁽⁵⁰⁾。このような阿部のスタンスからか、「X」は従来の二作品より、一層、現代社会の世相に引き付けた番組設定が心がけられた。また、メイン格の脚本家も交代になり、これまでの伊上勝主導の娯楽時代劇型の勧善懲悪路線から、長坂秀佳⁽⁵¹⁾が「人造人間キカイダー」などで見せた、恋愛要素も含めた人間ドラマ重視の路線に舵切られた。

「X」での現実志向は、特に敵役GOD機関の描き方に顕著に表れている。番組企画段階でのGOD機関は以下のように設定されようとしていた。

G・O・D機関とは――

Government Of Darkの略

人類抹殺計画を主張する秘密工作機関であります。

世界の勢力を分割する某三大国は常に民族的、思想的対立をし、軍事力の均衡で危険一杯の平和を保っているかに見えるが――その実はそれぞれの秘密諜報組織が来るべき、全世界的資源枯渇を見越して密かに裏で手を結び、全くの大国エゴイズムのために、弱小民族、弱小国家を抹殺する計画で造った恐怖の機関であります。

[中略]

そして一つ全く奇怪なことには、三国共通の組織ながらボスの存在があります。しかしそれは単にボスの意思として伝達されるだけで、姿を見たものがない、神秘の存在で、もしかすると、それはデストロンの手口と似通っていることから、何らかの関係があると推理する者も居るのです⁽⁵²⁾。

ショッカーが「仮面ライダー」番組冒頭ナレーションにもあるように「世界征服を企む悪の秘密結社」と説明されていたのに対し、GODは成長著しい日本を牽制するために東西両大国によって組織されたという設定はすでに述べた。さらに上述の企画文などからも推測できるは、GOD機関の設定の背景に冷戦下における東西対立という同時代的要素が、より積極的に導入されているということだ。同時代に世界各地で勃発していた民族間（あるいは民族内）の対立は、ベトナム戦争がそうであるように、常に背後に大国のエゴイズムが介在しており、その大国間エゴイズムがGOD機関という「悪」の組織を生み出し、日本にダメージを与えようとしている。というのが、企画段階で設定されたGOD機関という組織の背景と言えらるだろう。ショッカーやデストロンと類似した組織のように見えるが、実は相当程度、悪役のイメージの源泉には変更が加えられていることがここからわかる。

「X」本編中において、GOD機関は全体に諜報機関の色合いが強く、大量破壊・大量殺戮を企図することの多かったショッカーとはやや趣の異なる演出がされた。指揮官アポロガイストの肩書も、従来の「大幹部」という漠然としたものから、GOD秘密警察第一室長という諜報機関の長という設定になり、本編中にはアポロガイストが陣取る秘密警察の〇〇分署というアジトが登場する。アポロガイストやGOD秘密警察の設定はゲシュタポや日本軍の憲兵などをイメージしたものとも取れるが、大国間のエゴイズムの産物がGOD機関であるのであれば、KGBやCIAのような同時代の諜報機関をイメージしていると考えた方が納得いく。ここからも、悪役のモデルがナチス的なものからより同時代的なものに移行してきたことがうかがえる。

アポロガイストは主人公Xライダーの宿命のライバルと描かれ、自由主義下で成長する日本を守る事に「正義」を見出すXと、日本の成長を嫌いGODに統制された世界にこそ「正義」を見出すアポロ

ガイストの対立は、まさに東西冷戦構造下の米ソの対立に似る。従来の指揮官は、一目で悪役とわかる出で立ちだったのに対し、アポロガイストはどちらかと言うとヒーロー然とした好青年の姿をしている。この悪役像の変化は、主人公と同格の強力なライバルを設定することで過去作との差異化をはかったのが最も大きな理由で、兄弟番組「人造人間キカイダー」にもハカイダーというライバルキャラクターが登場し人気を博していた。だが、差異化として打ち出されたのが悪役像の変化であるという事は、「仮面ライダー」におけるライダーの「正義」はあくまで悪役の「悪」のアンチテーゼであったことから考えると、ライダー側の「正義」の位置も変化していることを意味する。

推測の域を出ないが、GOD機関は組織モチーフの随所に「赤」色が用いられ、「赤」すなわち共産主義そのものが悪役のモチーフに加えている可能性がある。「X」が放送されていた1974年、先鋭化しすぎ、抱えるべき正義を見失ったため過激化し暴走した連合赤軍事件（72年）が記憶に新しい時代だ。あさま山荘事件のあと「総括」の実態が明らかにされ、まさにショックやデストロンの悪事よろしく山奥で私刑が秘密裏に繰り返されていたという事実は、「仮面ライダー」のスタッフたちに新しい「悪」のモチーフとして過激な共産主義者を想起させるのに十分だったのではなかろうか。作風に沿った単純明快な「悪」の定義が「ナチス」「軍国主義」「戦争」「戦争被害」といった制作者の記憶に依拠する問題意識から「ソ連」「共産主義」「過激派」といったより身近で同時代的なものへと移っていった事を示していると考えられるだろう。

「X」は前作までの人気の余勢もあって開始当初はまずまずの人気を得る。だが、「V3」後半からの人気の緩やかな低下に歯止めがかかる事はなく、「マジンガーZ」などのロボットアニメに猛追され人気陰り出す。そこで、さらなる作風のマイナーチェンジを要求された第4作「仮面ライダーアマゾン」では、今までのシリーズとは全く異なるスタイルを打ち出した。「アマゾン」の主人公は一切人語を介さず、都市や都市社会にも無縁な野生児という極めて異質な人物設定をとる。そのため作品序盤は主敵であるゲドンだけでなく、舞台となる日本の都市社会そのものも主人公にとっては脅威として描かれた。この物質文明そのものを脅威として描く姿勢は、詳述しないが平山や阿部の問題意識よりも原作者・石森章太郎のそれに近く、環境破壊などに警鐘を鳴らす「大自然の使者」としての側面が強調された形だ。実際、「V3」や「X」では石森は原作漫画を描いておらず、主役ライダーのデザインを担当したに過ぎないのだが、「アマゾン」については石森本人が原作漫画を制作している。しかし、「アマゾン」は機械的でスマートな「X」からの大転換が却ってあだとなり、視聴率はさらに悪化してしまい、結局、物質文明の対極を生きる野生児・アマゾンの設定は、途中で放棄されてしまう。その上、NET改編⁽⁵³⁾と呼ばれるテレビ局の再編の影響もあり番組はわずか2クールで終了してしまう。改編による「アマゾン」の短期終了は当初からの既定路線ではあったが、結果として「アマゾン」の挑戦は中途半端なまま成果を上げることなく幕を下ろした。

このようなドタバタの末に毎日放送・TBSのラインで放送されたのが第5作「仮面ライダーストロンガー」であり⁽⁵⁴⁾、第1期仮面ライダーシリーズの最後となった。「ストロンガー」は極端に登場人物が少なく、主人公城茂も風来坊の設定で全体に股旅物の時代劇のようなイメージが付きまとう。「ストロンガー」は制作事情から第1作「仮面ライダー」当初と比べると戦いの構図が小規模に演出され、

悪役像も「ストロンガー」終盤のデルザー軍団は魔物や妖怪の寄り合い所帯と設定された。それまでのシリーズの悪役は、いわゆる大首領こそ正体不明の人外だが、大幹部も怪人も改造人間で、あくまで人間の営みの中に直接的に「悪」の象徴を見出そうとしていた。つまり、ショッカーにせよ GOD 機関にせよ、戦争や冷戦という人間の産物を具体的に映像作品の中に象徴として落とし込むことで悪役を創出してきたことから考えると、デルザー軍団という「魔物の寄り合い」という設定は、従来とは決定的に異なる変換と言えるだろう。「ストロンガー」の終盤は、このデルザー軍団と次々と世界各地から駆け付けた歴代仮面ライダーによる総当たりの決戦が描かれたが、この間（放映期間にするとわずかに数回分のエピソード）、デルザー側の「悪」の動機は、「世界征服」になったり、「日本制圧」になったり、「ストロンガー打倒」になったりと一貫せず、まさにストーリーやテーマを棚上げにしたオールスターによるお祭り騒ぎによって幕を閉じた。ある意味では、平山享だからこそ為せるエンディングだったのである。

1971 年から始まり 5 作に渡りマイナーチェンジを重ねて放送されてきた「仮面ライダー」シリーズは、75 年、この「ストロンガー」をもって放送を終了する。放送終了の背景は、NET 改編の余波と、ロボットアニメ台頭による人気の分散等があげられる。特に、「ウルトラマン」シリーズは NET 改編の後、当該期の「ウルトラマンレオ」の後継番組を用意せず、事実上の打ち切りとなった。

二大ヒーローが同時にテレビから消え去るということは、それまでの悪役像のあり方と善悪の対立構造自体が（ウルトラマンと仮面ライダーでは根本的に対立の捉え方が異なるとしても）時代のニーズから、ややづれ始めていたことの象徴的な出来事であった。特に「仮面ライダー」シリーズに関していえば、制作経緯や作品の性格上、作品構造が同時代の冷戦構造と相似形をなしていた。しかし、同時代の国際社会はデタント期であり、沖縄返還やベトナム戦争の終焉、日中の国交回復など、それまでの冷戦構造を支えていた様々な事象が変化したり終わりを告げ始める時代である。主人公の「正義」や「自由」の在り方に従来のウルトラマンのような内面的葛藤は見られなくなったとはいえ、ショッカーにせよ GOD 機関にせよ、制作者平山の各体験や同時代の社会状況といった現実との緊張関係の上に成立していた悪役像が、その現実との関係性を希薄にさせだしていたと言えるのではないだろうか。見田宗介は 73 年のオイルショック以降の日本を「虚構」の時代と言いつたが⁽⁵⁵⁾、まさに「ストロンガー」に登場するブラックサタンやデルザー軍団（あるいは、「ウルトラマンレオ」に登場する円盤生物）らは、シリーズの番組構造こそ引き継いでいたが、悪役像としてナチス（戦争の記憶）やソ連・共産主義者（冷戦）などの大文字の政治をキャラクター像に象徴しない「虚構」の時代の悪役と呼べるのではないだろうか。

(4) 第 1 期「仮面ライダー」シリーズ終了後のヒーロー

「仮面ライダー」が放送されていない時期、子どもたちの興味をさらった番組の傾向は大きく分けて 2 つ、1 つは「マジンガー Z」以降急速に台頭したロボットアニメ、もう 1 つは「秘密戦隊ゴレンジャー」などの東映制作・石森章太郎原作の特撮作品である。特に「ゴレンジャー」は NET 改編で放送時間改変を余儀なくされた「仮面ライダーアマゾン」の事実上の後枠の番組であり、以後のスー

パー戦隊シリーズ⁽⁵⁶⁾の先駆けとして大きな人気を獲得した。ただし、「ゴレンジャー」を除けば、多くの子どもの興味はロボットアニメ等流れ、東映系の特撮は70年代後半のヒーロー番組としてはやや傍流と言える。

「仮面ライダー」が放送を再開するのは「ストロンガー」終了から4年後の1979年。「ウルトラマン」もアニメ放送ながら新作放送を開始しており、両作は、ほぼ同じタイミングで放送を再開することになった。シリーズ再開の背景は多々あるが、78年に日本公開された「スター・ウォーズ」などに代表されるSFブームによるところが大きい⁽⁵⁷⁾。復活した新作「ライダー」は、原点回帰を歌い、タイトルもそのまま「仮面ライダー⁽⁵⁸⁾」となった。敵役もネオショッカーと設定され、第1作の仮面ライダーとショッカーの関係の再構築が試みられた。だが、絶大な人気を誇った旧シリーズ程の勢いを示すことができず、人気は低迷する⁽⁵⁹⁾。主脚本家伊上勝を降板させ、続々と先輩仮面ライダーを客演させるというなどテコ入れをしたが、番組序盤で強調されていたナチス的「悪」は後半に進むほど色を薄め、戦争そのものを「悪」と意識するような演出も影をひそめるようになる。「仮面ライダー」という人気コンテンツは、番組存続の関係上、本番組のプロットを規定していた要素を廃してでも、路線変更をして同時期のニーズに応えられるような作風に変更せざるを得なかった。この傾向は、次作「スーパー1」で決定的になる。「スーパー1」では従来とは別物といえるほど大きな変化が見られ、主人公・仮面ライダースーパー1/沖一也は、アメリカ国際宇宙開発局の職員でスーパー1も本来は惑星開発用のサイボーグであると位置づけられた。従来「ライダー」シリーズに共通していた「世界征服を企む悪の秘密結社による戦闘用改造人間」という設定はオミットされ、平和利用のため創造されたという設定になっている。惑星開発用という言葉からも読み取れるように、随所に「宇宙」を連想させる設定が組み込まれており、前作以上にSF色が強く打ち出されるようになった。また敵役であるドグマ帝国やジン・ドグマも、侵略異星人という設定を明確に当初から導入し、従来のナチス的な「世界征服を企む悪の秘密結社」という色合いはほとんどなくなった。この大幅な路線変更は奏功し、「スーパー1」自体は高い人気を取り付ける事に成功したが、結局「スーパー1」の終了をもって、第2期仮面ライダーシリーズも放送を終了することになった。以降「仮面ライダー」シリーズのスタッフに平山や伊上、大野剣友会の名が加わる事はなく、「仮面ライダーBLACK」以降のシリーズは原作者石森の名を冠するのみとなる。「スーパー1」で好評だった宇宙・SF路線は、以降「宇宙刑事ギャバン」などの「宇宙刑事⁽⁶⁰⁾」シリーズに継承され、80年代の新たなヒーロー像を支える下地になっていく。

3. まとめ

本稿では、1970年代に放送された「仮面ライダー」シリーズについて、企画成立過程や番組構成、シリーズ内での細かなヒーローや悪役の出自・立ち位置の変化にも着目して議論をした。

「仮面ライダー」という作品によって以後のヒーロー番組のプロットは大きく規定され、後続の「スーパー戦隊」「宇宙刑事」シリーズも30分番組の構成としては「仮面ライダー」のそれを大きく逸脱する

ものではない。この番組スタイルは、「ウルトラマン」のように「ヒーローがなぜ戦うか」という問いだてを棚上げにし、ヒーローの正義の社会状況からの脱臭を可能にした。この作品構造はプロデューサー平山亨や脚本家伊上勝の存在があればこそそのスタイルであった。その意味で、「仮面ライダー」は宇野常寛が言うように、脱政治化された「リトル・ピープル」の時代のヒーローであるという指摘⁽⁶¹⁾には相応の理がある。だが、脱政治化されたヒーローであるはずの「仮面ライダー」にも、ヒーローの内面性に切り込んでいくことで作品に深みを持たせていくような構図ではないが、戦争体験（と記憶）という大きな政治状況による規定が根底にあったこと。また、その戦争体験や記憶までもが、徐々に表象から曖昧に捨て去られてきたことを敵役の描かれかたから明らかにしてきた。シリーズ最初の敵ショッカー、は、ナチス的な「悪」と位置づけられ、「戦争」「全体主義」を忌むべき「悪」とした。次作「V3」のデストロンを経て、第3作「X」のGOD機関は、同時代の謀略機関というイメージを纏いつつ、設定やナレーションなどでの直接的な言及はなかったが、組織構成員の配色に赤色を多く盛り込むことで、明らかに同時代の「赤」つまり共産主義者、ひいては連合赤軍などの過激派も悪役像の射程にいれていたように見受けられる。石森の意向を強く反映した「アマゾン」を挟み、第1期最終作「ストロンガー」のデルザー軍団は、その象徴自体が曖昧な「化物」になってしまった。ストロンガーに登場する悪役たちからは、戦争経験や記憶、同時代の社会状況も直接読み取るのは難しい。

「仮面ライダー」から「ストロンガー」までの期間、つまり1971年から75年は、見田の時期区分からいえば「夢」の時代から「虚構」の時代への転換期と言える。見田は「夢」から「虚構」へのターニングポイントとしてオイルショック（と高度成長の終焉）を想定しているが、「仮面ライダー」シリーズの悪役像の在り方を追ってみると、オイルショックとは少し位相の異なる「夢」から「虚構」への移行を読み取ることができる。繰り返し述べているが、ショッカーの「悪」は、プロデューサー平山亨の体験やテーマにもとづき、自由を阻害する事象の象徴として戦争を具現化させたものであった。さらに、平山の戦争観は同時代の人々の比較的オーソドックスな戦争観と大差ないことも述べた。平山は自身が培ってきた映画・ドラマ制作のノウハウを駆使して、同時代のオーソドックスな戦争観を「仮面ライダー」という一つのコンテンツ上に無駄なく表現させることに成功したというべきかもしれない。ショッカーやデストロンは、実際にあったアジア・太平洋戦争という出来事に対する人々の記憶に依拠した「悪」であったといえる。だが、高度経済成長期は戦争そのものへの種々の問題意識と生活の豊かさの充実が急速に乖離しはじめた時期でもあった⁽⁶²⁾。結果として、戦争の記憶に依拠した「悪」像のありかたは、より同時代の「悪」に象徴をとってかわられることになる。GODと仮面ライダーXの対立軸は、まさに冷戦構造そのもので、自由主義（ライダー）と全体主義（GOD）の対決構造を、前作までのそれ以上に強く反映させていた。加えて、GODのイメージの中には、連合赤軍事件などをはじめとした72～73年前後の左翼過激派のイメージも読み取ることができることも示唆した。むしろ、「X」が放送されていた時期が、いわゆるデタント（東西緊張緩和）期のご真ん中であったことを考えれば、左翼過激派のイメージはかなり強く、「悪」の像に反映されていたのではないだろうか。そして、石森が人々の謳歌する都市文明に対し、「アマゾン」で一定の疑義を呈したのを挟んで、「ストロンガー」のデルザー軍団という形でシリーズは終焉する。71年という時代にショッカー

が登場し、そのショッカーが戦争の記憶（「全体主義」「ナチス」「戦争」への忌避感）に強く規定されていたのだとすれば、ショッカーの「悪」は、やはり現実との緊張関係の中で語られうる「悪」ではないだろうか。つまり、仮面ライダー（1号・2号）や仮面ライダーV3は、戦争という状況を打破した先に「世界の平和」を見出す、「夢」の時代のヒーローだったと言える。つづくGOD機関の「悪」は、一見すると同時代のあさま山荘事件のような強烈な現実の規定された「悪」ととれる。だが、同時代の大半の人々が本当にあさま山荘事件を「体験」していたわけではないことを看過してはなるまい。あさま山荘事件は現実起こった出来事ではあるが、多くの人々はその状況をテレビ経由で、自分たちの日常と地続きではない世界の絶望的行為として受け取っていた⁽⁶³⁾。連合赤軍の行為を見る社会の視線には、事件の悲惨さと相反し、現実との緊張関係がとて希薄だったといえる。上野千鶴子や成田龍一は見田の言う「理想の時代」の終わりを連合赤軍事件と関連付けて説明している⁽⁶⁴⁾が、これらの指摘を踏まえれば、GOD機関は一見すると現実との緊張関係に規定されているが、実は現実と地続きの問題として真摯に受け取られにくい「虚構」の側面も多く引き受けていることになる。GODに対しXライダーは「夢と虚構」の時代のヒーローだったと言える。そして、「ストロンガー」のブラックサタンやデルザー軍団は、それまでの戦争の記憶（「戦争」「ナチス」「全体主義」）も冷戦構造（「ソ連」「共産主義」「過激派」）もダイレクトには象徴しない悪役である。仮面ライダーストロンガーが日本の平和を守るために戦っていることは、同作の主題歌歌詞からも明らかなのであるが、平和を守るために打倒すべき「悪」が、現実との緊張関係の上では語られなくなってしまった「虚構」になってしまっているのだ。仮面ライダーストロンガーは「虚構」の時代のヒーローと言えるだろう。私は、「仮面ライダー」から「X」をへて「ストロンガー」への移り変わりの中に、「夢」の時代から「虚構」の時代への移行の位相を読み取りたい。そして、「X」「アマゾン」「ストロンガー」の悪役は、ダイレクトに戦争の記憶を反映しているとはいえないことは本稿のこれまでの議論でも明らかだと思う。仮面ライダーの「悪」の変容を戦争の記憶との距離感に軸を置いて考えると、ショッカーからGOD機関、そしてデルザー軍団へと移り変わるにつれ、徐々にアジア・太平洋戦争の記憶から離れていっていることがわかる。「夢」の時代から「虚構」の時代が変わっていく時、人々は（少なくとも「仮面ライダー」の世界観の中では）、戦争を「悪」の象徴としては語らなくなった。そして、「スカイライダー」の挫折からもわかるように、79～80年という時代に差し掛かってしまうと、戦争の記憶に依拠した「悪」であるショッカーとライダーの対立軸は完全に機能しなくなってしまう。東映のチャンバラ映画の流れを組んだ「仮面ライダー」は、その単純な善悪二項対立構造の番組構成で「ウルトラマン」と並ぶ二大ヒーローの地位を得た。だが、その「単純」な悪役の象徴として戦争を前面に出せなくなったことは、戦争の負の記憶が人々の重要な関心事でなくなってきた事の一つの表れだろう。つまり、70年代初頭には人々の問題意識に戦争の負の記憶がありえたが、70年代という期間を経るにつれて徐々に主要なものとして機能しなくなり、80年代に入った時には、戦争の記憶は負の記憶の象徴としては機能しなくなったという事だと思う。戦争の記憶は、「夢」の時代から「虚構」の時代への変化の位相のなかで、「仮面ライダー」という一つの表現の場から「忘却」されてしまったのだ。

本稿は、決して「仮面ライダー」制作者の思想や歴史認識の変遷を追った議論ではない。むしろ、

重要視したのは、「仮面ライダー」という一つのシリーズを継続させていくために必要だった変化や工夫、あるいは番組制作環境や時代状況の変化からくる、周囲から要求されるものの変容の位相をトレースしてきたつもりである。そして、そこに敢えて「忘却」というタームをあてがい、アジア・太平洋戦争との距離感を押し量るファクターを組み込んだ。本来、歴博での「忘却」としての戦後という考え方は、何か（主に「戦争」「植民地」「原爆」）を「忘れる」力と「忘れてはいけない」力のせめぎあいの磁場とされている⁽⁶⁵⁾。そう考えたとき、別に平山亨は戦争の記憶を喚起しようとして「仮面ライダー」を作り、ショッカーを設定したわけではないし、「X」での阿部征司にしても戦争の記憶を忘れようとして（もしくは忘れさせようとして）、GOD機関という組織を考えたわけではない。これは「アマゾン」や「ストロンガー」についても同様のことが言える。この点について、筆者は「仮面ライダー」シリーズから読みとれる「忘却」の構図を重要視したい。平山亨や阿部征司をはじめとする「仮面ライダー」の制作スタッフたちは、戦争の記憶を喚起しようという自覚をほとんど持たずに戦争の記憶を語り、戦争の記憶を忘れさせようという意識もほとんどないまま、戦争を語るのをやめた。「X」や「ストロンガー」でみられる変化は、「仮面ライダー」という1つの大きなコンテンツを維持しようとする、スタッフたちの制作努力の一環と理解されて問題ない。「仮面ライダー」という作品を維持しようとする営みそれ自体が、戦争の記憶を無意識のうちに「忘れる」力と「忘れてはいけない」力がせめぎ合う場として機能していたと言えるのではないだろうか。私は、この第1期「仮面ライダー」シリーズの変容の位相の中の無意識の「忘却」の構図の中に、安田常雄のいう「その都度実に複雑な矛盾を含んだ〔中略〕両義的な一瞬⁽⁶⁶⁾」を垣間見るのだ。さらに敷衍して考えると、今日、筆者を含めた多くの「仮面ライダーファン」たちは「仮面ライダー」から「仮面ライダースーパー1」、特別編の「ZX」までを「昭和シリーズ」や「昭和ライダー」として一括りに考えることが多い。2000年以降展開する「平成ライダー」シリーズとの区別的なニュアンスで「昭和」と括るのだが、「昭和」と一括りに語られる時、本稿で詳述してきたように、それぞれの組織が象徴している物に相当な差異があるにも関わらず、敵役も「ショッカー的なもの」と同質に扱われる。もちろん、作品上、同一世界観の出来事として扱われる一連のシリーズ番組であり、ほぼスタッフも一貫している以上、一括して語られる事に無理はなく、むしろ非常に自然な括り方である。だが、そういった制作過程等の枠組みで括った時、それぞれの作品は「昭和」というフレーズの中で個別の問題意識と時代背景もろとも「単純化」される。「戦争」に関する負の記憶に立脚していた「仮面ライダー」が徐々に「戦争」から離れていったにも関わらず、それらが全て同質なものとして「単純化」されだしているとすれば、それは安田常雄が唱える 80 年代以降の戦争記憶の「忘却」の構図⁽⁶⁷⁾ とよく似た構造を読みとる事が出来、2010 年代を生きる（筆者を含めた）人々が、1970 年代という時代が持っていた複層性や時代の移り変わりの繊細さを見誤ってしまう下地を形成してしまっているのではないだろうか。

《注》

- (1) さらに厳密に区分をすると、平成シリーズ第1作「クウガ」から「仮面ライダーディケイド」(2009年)までの10作品を「平成第1期」、続く第11作「仮面ライダーW」以降、現在まで続くシリーズを「平成第2期」と呼称する場合もある。

- (2) キャロル=グラック「近代としての20世紀」『世界 第642号』(岩波書店, 1997年11月)
- (3) 安田常雄編『日本史講座 第10巻 戦後日本論』序文(東京大学出版会, 2005年)
- (4) 国立歴史民俗博物館, 安田常雄編『歴博フォーラム 戦後日本の大衆文化 総合展示第6室〈現代〉の世界3』(東京堂出版, 2010年) 3頁
- (5) 佐藤健志『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』(文藝春秋, 1992年)
- (6) 切通理作『怪獣使いの少年』(宝島社, 1993年)
- (7) 呉智英「怪獣の名前には、なぜ『ラ行音』が多いか?」石井慎二編『怪獣学・入門!』(JICC出版局, 1992年)
- (8) 制作スタッフによる回顧本は多いが、佐々木守『戦後ヒーローの肖像』(岩波書店, 2003年)、上原正三『金城哲夫』(筑摩書店, 2001年)、同『上原正三シナリオ選集』(現代書館, 2009年)内の各インタビュー記事、山田輝子『ウルトラマン昇天』(朝日新聞社, 1992年)、実相寺昭雄『ウルトラマン誕生』(ちくま文庫, 2006年)などが、金城哲夫の人となりと同時代の社会背景や番組制作環境などの関係が比較的クリアーに読み取れる。また「ウルトラマン」の制作スタッフではないが、今野勉『テレビの青春』(NTT出版, 2009年)では、テレビディレクター今野勉の視点から彼の盟友である佐々木守や実相寺昭雄が「ウルトラマン」のスタッフとして参入していく経緯が簡潔だが明瞭に描かれている。
- (9) 拙稿「『ウルトラマン』『ウルトラセブン』のポリティクス」『駿台史学158号』(駿台史学会, 2016年9月)
- (10) 宇野常寛『リトル・ピープルの時代』(2011年, 幻冬舎)
- (11) 見田宗介『社会学入門』(岩波書店, 2006年)を今回は参照した。
- (12) 前掲『リトル・ピープルの時代』189頁
- (13) 「ウルトラマン」第37話「小さな英雄」脚本:金城哲夫, 監督:満田かずほ,
- (14) 引田惣彌『全記録テレビ50年戦争』(講談社, 2004年) 224頁
- (15) ビデオ・リサーチ編『視聴率20年』(ビデオ・リサーチ, 1982年) 150~151頁
- (16) 石森章太郎(いしのもり・しょうたろう)本名/小野寺章太郎(おのでら・しょうたろう)1938年1月25日, 宮城県登米郡中田町石森生まれ。宮城県立佐沼高校在学中の1954年、『二級天使』でデビュー。高校卒業後, 上京してマンガ家生活に入り, 以後マンガ界の第一人者として活躍する一方、『仮面ライダー』より, 表現の分野を映像にも広げ, 数多くのヒット作を生み出している。1984年, デビュー30周年を機に, 初心に返るべく「石ノ森」と改名。
- (17) 平山亨(ひらやま・とおる)1929年3月19日生まれ。東京都出身。東京大学文学部美学美術史料を卒業後, 五四年東映京都撮影所に入所。助監督として, 130本を越える作品に参加, 63年『銭形平次捕物控』(里見浩太朗主演)で初監督。65年に東映テレビ部に異動し『悪魔くん』(66年)でプロデューサーとしてデビュー。以後, 『キャプテンウルトラ』(67年), 『ジャイアントロボ』『柔道一直線』『刑事くん』等, 子供, ティーン向けのテレビ番組を数多くプロデュース。『仮面ライダー』『人造人間キカイダー』等, 多くの東映ヒーロー作品をプロデュースした。
- (18) 小田克己・村枝賢一『仮面ライダーをつくった男たち』(講談社, 2007年) 3頁~56頁
- (19) 平山の東映入社から京都での時代劇畑での活動については, 平山亨『泣き虫プロデューサーの遺言状』(講談社, 2012年)第2章「東映入社」の項が詳しい。
- (20) 現在は「ウルトラQ」から始まり「ウルトラマン」「セブン」を経て, 「帰ってきたウルトラマン」へ繋がる作品群を「ウルトラシリーズ」と呼び, 本稿でもそれに準じているが, 当時は「ウルトラQ」「ウルトラマン」「キャプテンウルトラ」「ウルトラセブン」の4作は, TBS主導の「空想特撮シリーズ」と位置づけられた一連の作品群とされていた。
- (21) 小林昭二(こばやし・あきじ)1930年9月26日生まれ。東京都出身。俳優座2期生で同期は小沢昭一, 土屋嘉男ら。52年, 新東宝「殺人容疑者」で映像作品デビュー。66年「ウルトラマン」でのムラマツ, 71年「仮面ライダー」での立花藤兵衛など特撮ヒーロー作品にはかかせない俳優として地位を築く。
- (22) 伊上勝(いがみ・まさる)本名/井上正喜(いのうえ・まさき)1931年7月14日生まれ。群馬県出身。58年, 宣弘社入社, 日本テレビ系「遊星王子」で原作・脚本デビュー。「隠密剣士」や「仮面の忍者・赤影」な

ど忍者ものがヒット。71年から「仮面ライダー」シリーズのメインライター。

- (23) 上原正三（うへはら・しょうぞう）1937年2月6日生まれ。沖縄県出身。中央大学文学部を卒業後、一時帰京。同郷の金城哲夫に呼ばれ円谷プロダクションに所属。64年、沖縄のローカル番組で脚本家デビュー。66年「ウルトラQ」「ウルトラマン」にも参加。71年「帰ってきたウルトラマン」のメインライター。後、「秘密戦隊ゴレンジャー」「宇宙刑事ギャバン」など、数多くの東映特撮ヒーローの原案・脚本を担当。
- (24) 市川森一（いちかわ・しんいち）1941年4月17日生まれ。長崎県出身。日本大学芸術学部卒業後、「怪獣ブースカ」や「ウルトラセブン」など子ども向け作品の脚本を書くようになる。72年「ウルトラマンA」のメインライターになるが方向性の違いから降板。以降、一般のドラマに活躍の場を移す。
- (25) 2015年9月29日、上原正三氏へのインタビューより
- (26) 同上
- (27) 「仮面ライダー」番組冒頭ナレーション
- (28) 前掲『泣き虫プロデューサーの遺言状』128頁
- (29) 平山亨『仮面ライダー名人列伝』（風塵社、1998年）139頁
- (30) 平山亨『仮面ライダーZ Xオリジナルストーリー』（風塵社、1998年）107頁～108頁
- (31) 前掲『泣き虫プロデューサーの遺言状』第1章「出生から学生時代」参照
- (32) 前掲『仮面ライダーをつくった男たち』24頁
- (33) 平山亨『私の愛したキャラクターたち』（朝日ソノラマ、1998年）6～7頁
- (34) 『KODANSHA Official File Magazine 仮面ライダー ショッカー』（講談社、2005年）4頁
- (35) 前掲『KODANSHA Official File Magazine 仮面ライダー ショッカー』10～11頁
- (36) 前掲『KODANSHA Official File Magazine 仮面ライダー ショッカー』8頁
- (37) 佐藤卓己「日本にとっての『ナチカル』とはなにか」佐藤卓己編『ヒトラーの呪縛』（飛鳥新社、2000年）6頁
- (38) 佐藤卓己編『ヒトラーの呪縛』（飛鳥新社、2000年）巻末ナチカル資料編に掲載されたナチスカルチャーの刊行年次を参照
- (39) 羽仁五郎『アウシュヴィッツの時代』（潮出版社、1973年）22頁～26頁
- (40) 前掲『私の愛したキャラクターたち』48～52頁
- (41) 管見で確認できるかぎり、「仮面ライダー」に登場するブラック将軍、「仮面ライダーV3」に登場するキバ男爵が帝政ロシア出身であると設定されている。
- (42) 前掲『私の愛したキャラクターたち』8頁
- (43) 吉田裕『文庫版 日本人の戦争観』（岩波書店、2005年）153頁～154頁
- (44) 例えば「仮面ライダー」第四四話「墓場の怪人カビニング」（脚本：滝沢真理、監督：田口勝彦）などが極めて象徴的である。番組冒頭でショッカーによる殺人カビ培養計画の概要が語られ、この殺人カビ計画を目撃してしまった少女が誘拐されてしまう。仮面ライダー・一文字隼人は誘拐現場に急行し、その場に居合わせた怪人カビニングと死闘を繰り広げる。殺人カビ計画の概要をすでに知っている視聴者にとっては自然な展開であるが、一文字隼人がショッカーの計画の内容な実態を把握するシーンは一切用意されておらず、結果として仮面ライダーは不審な事件の起こった現場に居合わせたショッカーの構成員を不審な事件の実行主体として一方的に決めつけ攻撃を仕掛けたことになる。
- (45) 前注のカビニングのエピソードがそうであるように、多くの場合、番組冒頭でショッカーの作戦計画が詳細にナレーターによって語られ（場合によっては、実験等で無辜の市民が殺害され）、その残虐性・違法性が強調されるので、ライダー達の行動の排他性が視聴者の印象に残らない演出がされている。
- (46) これは、「ウルトラ」シリーズが「セブン」第26話「超兵器R1号」脚本：若槻文三、脚本：鈴木俊継などで危機対策の兵器開発競争を「地を吐きながら続ける悲しいマラソン」と喩え批判しているのとは好対照である。
- (47) 「仮面ライダーX」第1話「X, X, Xライダー誕生!!」（脚本：長坂秀佳、監督：折田至）本編ナレーションより

- (48) 阿部征司(あべ・せいじ) 1937年8月1日生まれ。秋田県出身。実家が映画館だったため、幼いころから映画業界を志し、早稲田大学教育学部社会学科在学中にはシナリオ研究会に所属。卒業後、東映に入社し、61年からは東映東京撮影所制作課に配属。野田幸男監督の『不良番長』第1作などに参画した後、自らの希望で東映テレビ部に移籍。『プレイガール』で初のプロデューサーを務め、『男一番! タメゴロー』を経て『仮面ライダー』に参加。以後、平山亨とともに84年の『ZX』特番までのシリーズ(『スカイ』初期を除く)を担当する。
- (49) 前掲『泣き虫プロデューサーの遺言状』162頁
- (50) 同前『泣き虫プロデューサーの遺言状』127~128頁
- (51) 長坂秀佳(ながさか・しゅうけい) 1941年11月3日生まれ。愛知県出身。豊橋工業高校機械科在学中に東宝系「野獣死すべし」に衝撃をうけ東宝撮影所入りを決意。美術助手を5年間経験後、本社テレビ部企画課へ異動。66年、NHKシナリオコンクールに応募した「もの言う犬」が佳作入選。のちに同作が映像化され脚本家デビュー。70年に独立。「人造人間キカイダー」の主脚本家を務め、のちに「仮面ライダーX」のパイロット脚本を担当。89年、『浅草エノケン一座の嵐』で第35回江戸川乱歩賞受賞。脚本家としての代表作は「キカイダー」や「X」のほか映画「小説吉田学校」や「ウルトラマンゼアス」などがある。
- (52) 「新番組(仮面ライダー5号)企画案」『仮面ライダー1971~1984』(講談社、2014年)242~243頁より重引。
- (53) 当時、「仮面ライダー」は大阪を拠点にする毎日新聞系列毎日放送制作であったが、関東での放送局は朝日放送(NET・現テレビ朝日)であった。この資本系列と矛盾する在京・在阪テレビ局の放送形態の「腸捻転」状態は1975年3月を最後に大きく見直され、関東ではTBS・朝日放送のテレビプログラムが大幅に整理されることになった。この影響で、「仮面ライダーアマゾン」は半年での放送を終え、後継番組の「仮面ライダーストロンガー」は毎日放送・TBS放送となり、関東視聴者目線から言えば、放送テレビ局を変えて存続し、旧来のNETの放送枠の後番組として「秘密戦隊ゴレンジャー」が設定される。また、TBS制作の「ウルトラマンレオ」は、この改変を機にシリーズ自体が終了する運びとなった。
- (54) 「アマゾン」→「ストロンガー」では放送時間の変更の余儀なくされており、「アマゾン」の放送時間上の後番組として制作されたのが「秘密戦隊ゴレンジャー」である。
- (55) 見田は戦後に日本社会をアメリカン・デモクラシーとソビエト・ Kommunizmusの「理想」の時代(1945年~60年ごろ)、次いで「理想」の先の高度成長の豊かさを享受しつつも違和感を覚え、現実の彼方の夢を追い求める「夢」の時代(60年代~70年代前半)、最後に、現実の彼方の「夢」を「虚構」としてしか認識できなくなる「虚構」の時代(70年代半ば以降)と時期区分している。
- (56) 厳密に言えば、石森章太郎原作の「秘密戦隊ゴレンジャー」と次作「ジャッカー電撃隊」は、石森が制作に関わっていない「バトルフィーバーJ」以降の作品と切り離されており、よく似た別系統の作品として扱われていた。1995年に「ゴレンジャー」放送20周年を期に、同年放送の「超力戦隊オーレンジャー」をスーパー戦隊20周年記念作品に位置づけ、正式にスーパー戦隊シリーズとして「ゴレンジャー」「ジャッカー」を同系列の作品として取り扱うようになった経緯がある。本論では、便宜上、以上の経緯を基本的には加味せず、一貫して「ゴレンジャー」以降の作品全てを「スーパー戦隊」シリーズとして言及する。
- (57) 講談社編『なつかしの東映×石ノ森ヒーロー大図鑑』(講談社、2010年)111頁
- (58) 同作の主人公ライダーは作中でスカイライダーと称されることが多かったため、本稿でも便宜上79年版の「仮面ライダー」を「スカイライダー」と表記する。
- (59) 『KODANSHA Official File Magazine 仮面ライダー Vol.8』(講談社、2004年)17頁
- (60) 「宇宙刑事ギャパン」から始まる一連の作品を「メタルヒーロー」シリーズと呼ぶが、その中でも「ギャパン」と続作「宇宙刑事シャリバン」・「宇宙刑事シャイダー」の3作を「宇宙刑事」シリーズと特に呼ぶことがあり、本稿でもそれに準じる。
- (61) 前掲『リトル・ピープルの時代』198頁
- (62) 前掲『文庫版 日本人の戦争観』118頁~149頁
- (63) 吉見俊哉『ポスト戦後社会』(2009年、岩波書店)10~11頁
- (64) 上野千鶴子、小森陽一、成田龍一「ガイドマップ60・70年代」成田龍一他編『戦後日本スタディーズ2』

(紀伊國屋書店, 2002年) 3頁

(65) 前掲『歴博フォーラム 戦後日本の大衆文化 総合展示第6室〈現代〉』18頁~19頁

(66) 同前, 4頁

(67) 同前, 3頁

2016 年度
第 41 回人文科学研究所公開文化講座 記録

伝える，伝わる
——言葉の中の思いを届ける——

日 時： 2016 年 10 月 15 日（土） 13：00～16：00
場 所： 明治大学 中野キャンパス 5 階ホール
演 者： 石井大裕（株式会社 TBS アナウンサー）
司会進行： 田中伸明（明治大学文学部教授）

開 会

田中 伸明（明治大学文学部教授）

○司会（田中伸明教授／以降、司会）：それでは始めさせていただきますと思います。

皆さま、こんにちは。本日はまさに秋晴れという素晴らしい中、このようにご来場いただきまして大変ありがとうございます。ただ今より「第41回明治大学人文科学研究所公開文化講座」を始めさせていただきますと思います。

講演に先立ちまして、お願いが2点あります。まずは、ホール内は飲食禁止となっておりますが、飲み物に関しましてはふたのできるものであれば構いませんということです、それ以外のものは食べたりなさらないようお願いいたします。

続いて、講演中の撮影はご遠慮ください。スライドの中で、スポーツ選手の映像が出てきます。選手側の著作権の問題も発生してきますので、申し訳ありませんが、撮影はご遠慮ください。

遅くなりましたが、私は本日司会を務めさせていただきます文学部の田中です。よろしくお願いいたします。私の専門はテニスとスポーツ心理学です。そこで、スポーツに関する話を少しだけさせていただきますと思います。

近年、スポーツは大変身近なものになってきているのが現状ではないかと思えます。その理由の一つとしましては、テレビによるスポーツ中継が増えてきていることではないかと思えます。

以前といいましてはだいぶ以前ですが、以前は夕方のプロ野球の中継ぐらしかスポーツの番組がないんじゃないかというぐらい、あまりに数が少なかったわけですが、近年は衛星放送

が充実していることもありますが、ペイチャネルを含めると、かなり多種多様なスポーツを見ようと思えば見ることができるのが、今現在の状況ではないかと思えます。

いろいろなスポーツが放映されるというのは初期段階ではあると思えますが、次の段階を考えるのであれば、そのスポーツの深みをしっかりと求めていき、より多くの人を引きつけるようなものにしていかなければいけないのではないかと思えます。そうやってこそ、スポーツそのものが一つの文化として根付いていくことにつながっていくのではないかと思えます。

その次の段階へ進むにあたって、大変重要な役割を果たしているのがメディア、マスメディアといったところではないでしょうか。つまり、ただ放送するだけではなく、いかにして、その深みというものをしている方に伝えていくかということが重要になってくるのではないかということでもあります。

そこで本日は、メディアの真ただ中と申しますか、メディアの最前線と申しますか、そちらで活躍をされているTBSアナウンサーの石井大裕さんにお越しいただきまして、ご講演いただく運びとなりました。本日は「伝える、伝わる」というのを大テーマとしてご講演いただくこととなります。

少々話しが長くなりましたが、これにて開会の挨拶とさせていただきますと思います。続きまして、本公開文化講座の主催機関であります明治大学人文科学研究所所長の守屋よりご挨拶を申し上げたいと思えます。

挨拶

守屋 宏則（明治大学人文科学研究所所長 経営学部教授）

○守屋：本学人文科学研究所所長の守屋でございます。本日はご来場ありがとうございます。私がお話ししようと思っていたことは全て田中教授がもうお話しになりましたので、ご挨拶だけ申し上げたいと思います。

おかげさまで、第41回公開文化講座を開催できる運びになりました。例年は御茶ノ水の駿河台キャンパスで開いていたのですが、今回初めてこの中野キャンパスで開催することになりました。

皆さまがお掛けになっている椅子の座面と背もたれの色は、何の色かお分かりですか？ これは明治カラー、紫紺の明治カラーなんです。ここから見るとすごくきれいです。後でちょっとこの辺からご覧になってください。明治一色という感じがします。

今日のお話しのテーマは「伝える」ということ、「伝わる」ということ。これは人間にとって、伝える、伝わるということは非常に重要なことです。そして、ただ情報を伝える、伝わるだけの言葉というのがありますけれども、言葉の中には人の感情、心というものがあります。今日は石井アナウンサーがそのあたりの非常に奥深いお話しをしてくださることになっております。

本日は素晴らしい秋晴れになりまして、皆さまのご人徳の賜物だと思っております。では、今日の会が盛会になりますことをお祈りいたしまして、所長の挨拶とさせていただきます。

○司会：それではさっそく講演のほうに移らせていただきたいと思います。今日は2部構成となっております。第1部が「伝える、伝わる」というテーマです。休憩を挟みまして、第2部は「言葉とスポーツ」という、2部構成になります。

まず第1部の「伝える、伝わる」ですが、もしかすると止まらない可能性もありますが、1時間程度を目安に考えております。

TBSのチャンネルをよくご覧になられている方は恐らく目に映っているんじゃないかと思いますが、一日の中でも石井アナウンサーが出てくる回数が非常に多いんですね。今やTBSの看板アナウンサーといっても過言ではない、その石井大裕アナウンサーにご登壇いただきたいと思っております。ぜひ拍手でお迎えいただければと思います。それでは、盛大な拍手をお願いいたします。

第一部 講演 「伝える，伝わる」

石井 大裕 氏（TBS アナウンサー）

○石井：皆さんこんにちは。TBSアナウンサーの石井大裕です。どうぞよろしくお願いいたします。

今、守屋先生、そして田中先生からかなりハードルを上げられまして、一体これから3時間、私は何をしゃべるでしょうか!? はっきり言います、何も考えていません。よろしくお願いいたします。嘘です。しっかり話していきますので、ぜひよろしくお願いいたします。

私はTBSのアナウンサーになりまして、今年で7年目ということになるわけですが、この中でもほとんどの方々が20代前半の方ということで、就職活動の方もいらっしゃると思います。20代の方はもうちょっと来られるかなと思いましたけど。

20代だよという方はいらっしゃいますでしょうか!? あっ、いらっしゃいますね。学生だよという方はいらっしゃいますか!? あっ、学生の方もいらっしゃるということですね。

今日は、先ほど守屋先生もお話しくさしました、そして田中先生も仰っていましたが、「伝える，伝わる」ということがテーマですが、私自身はスポーツを中心に現在TBSアナウンサーをしております。そういった意味で、どのように自分が伝えているのか、そして自分自身も選手たちからいろんなエネルギーですとか夢をもらっています。選手たちから私は何を伝わっているのか、そういった部分についてもお話できていければなと思っております。どうぞよろ

しくお願いいたします。

まず、「あんた誰だよ」とお思いの方もいるかもしれませんが、私自身で自己紹介をさせていただきます。

今日は、3時間もしゃべっていいということですので、ゆっくりたっぷりお話しをさせていただきます。

テレビというメディアは非常に時間にうるさいんです。特に民放。NHKさんはCMがないです。スポンサーさんから怒られるなんてこともないかもしれませんが、我々が勤めておりますTBS、あるいは日本テレビ、フジテレビなどはスポンサーさんからの収入をもって生計を立てておりますので、そういう意味で、CMにいくタイミングが遅れたりしますと大変厳しく罰せられます。罰せられるというのは嘘です。

でも仕事なくなる可能性もあるぐらい、かなり厳しく指導されているという部分があります。今日は3時間ありますのでグラグラしゃべります。飽きたら寝ていただいても全然構いません。そしてまた、面白い時は笑っていただいても構いません。

3時間背筋を伸ばすというのも難しいので、私もだいぶ姿勢が悪くなってくるかもしれません。そういう時は皆さんから注意していただければと思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。

第1部では「伝える，伝わる」、そして第2部では「言葉とスポーツ」ということでお話しをしていきます。

「言葉とスポーツ」というと何かなと思うわけですが、このたびリオデジャネイロオリンピック、皆さんもご覧になりましたよね!? 全く見てないよという方はいらっしゃいますか? たぶんいらっしゃらないと思うんです。というのは、今年のリオデジャネイロオリンピックは41個、日本選手団はメダルを取りました。私もリオに1カ月行っていたんですが、そこで感じた選手たちからももらった言葉、たっぷりそれについてお話しできればなと思っております。

長くなりましたが、自己紹介をさせていただきます。TBSのアナウンサーをしております石井大裕(いしいともひろ)です。「大きい」という字に石原裕次郎の「裕」と書いて、大裕。かなりいい名前を親から頂きまして、こういった名前で生きております。

現在担当しております番組は「あさチャン!」という番組なんです、ご存じの方はいらっしゃいますでしょうか!? 知らないよという方は? 知らない!? 朝5時25分から毎日、月曜日から金曜日までやっております。こちら、夏目三久さんです。夏目さんは知っていらっしゃいますか!? 大丈夫ですか!? うんうんとうなずいてくださっていますが、「あさチャン!」という番組をやっております。これから皆さん、今日ここに来てしまったからには、「ZIP!」ですとか、「めざましテレビ」とかは見ることはないと思いますので、ぜひひとつ「あさチャン!」をよろしくお願いいたします。

あと「ひるおび!」という番組、知っているよという方はいらっしゃいますかね!? みんな知っていらっしゃる!? よかったです。恵さんという方が司会をやっている、私も出演させてもらっています。

あとは、「炎の体育会TV」という土曜日の

ゴールデン帯にやっている、ゴールデン帯というのは夜7時からのことを言うんですが、みんながよく見るよという時間帯にやっているのがこの「体育会TV」という番組です。

あと私は音楽番組の司会をやったり、そういうことも担当しております。

こんな話しをしましたが、私の一番の今やっている仕事と申しますが、スポーツ中継です。例えばワールド・ベースボール・クラシック。来年3月にまた始まります。日本が世界一をもう一度奪還を目指してという、侍ジャパンの戦いがあります。これも私が中継を担当します。そして世界陸上ですね。去年は北京の大会がありました。あるいはバレーボール、オリンピック世界最終予選というのが今年6月にありましたが、こちらも男女共に盛り上がりました。こちらでもキャスターをやらせていただきました。そして、つい先日行いましたリオデジャネイロオリンピックでは、現地でキャスターを務めました。

そして、他のもろもろ今担当しているスポーツだけで、大体11競技から12競技ですね、担当しております。そういう意味では、いろんなアスリートの方々と出会う機会も多くなります。そういう中で、今日は自分が感じたことを皆さんにお伝えしていければなと思っております。簡単な自己紹介になりました。

私は1985年東京都生まれで、慶應義塾大学を卒業しました。先ほどの明治大学の田中先生とは、実は私13歳の時から知っております。「というと18年の付き合いだね」、なんていう話しを先ほどさせていただいたところでした。

実はアナウンサーになる前はテニスをやっておりました。一応テニスで世界を転戦して、選手として活動するということをしていたんです

が、その中でけがをして、世界ランキングを獲得した後もなかなかランキングが伸びずに、引退をするということになりました。

その後、今度はちょっと縁がありまして、後ほどまた詳しく話しますが、メジャーリーグ・ベースボール、いわゆるアメリカですね。当時だと松坂大輔投手がいました。あとイチロー選手も活躍していた時です。そして今でもプレーをしている黒田選手もいましたが、他には松井秀喜選手なんかちょうど大活躍している時期に、メジャーリーグ・ベースボールの取材をさせていただいておりました。

そして2010年になりましてから、TBSテレビに入社ということで、アナウンサーとして現在活動しております。

テニスにおいては、ですが、実は私の師匠はこの方なんです。この方は誰かご存じですか!? 松岡修造さんです。こんな感じで今でも大変お世話になっています。

その松岡修造さんが現役を引退されてから、「修造チャレンジ」というものをつくったんですが、修造チャレンジって皆さん、知っていらっしゃる方はいらっしゃいますか!? 全日本のジュニアの合宿になるわけですが、こちらのほうで私は、松岡修造さんにテニスの指導を10歳から12歳ぐらいまで受けていました。

この時、修造チャレンジというチームに入った時に、田中先生もそのチームの指導者のほうのメンバーでいらっしゃいまして、そこからお世話になっているというつながりでございます。その松岡修造さんの合宿で出会いましておまえは世界に行くんだと、世界のトップ選手になるんだと我々ジュニアの選手たちはいろいろと言われて、そして日々練習を重ねてということになりました。

今でも修造さんにお世話になっているわけですが、さらにこの時に出会ったのが錦織圭選手です。さすがにもう錦織圭選手を知らない日本の方はいらっしゃらないんじゃないかというぐらい、今ではもう錦織選手は非常に世界でも有名な選手になりましたよね。

錦織圭選手は私の四つ下になるんですね。私が高校1年生の時に小学校6年生の錦織圭選手と出会ったわけです。高校1年生と小学校6年生です。四つ差があるんですよ、錦織選手は6年生、身長が錦織選手は150センチぐらい、私は180センチぐらい既に高校1年生でありましたが、なんと私、錦織圭選手に合宿で、完敗いたしましたして、錦織選手のすごさというのをそこで知ることになったわけです。

錦織圭選手はそこから世界の舞台に羽ばたいていく。私も錦織選手に負けたことによってもう一度頑張ろうということで頑張っ、ヨーロッパに行きまして、ヨーロッパ、あるいはアフリカなどのツアーを転戦してテニスをしていたんですが、この時に小学生の錦織選手に出会うということがありました。錦織圭選手とは今でもいろいろ取材をさせてもらいまして、いろんな話を聞くことができます。

ちょうどこの写真の 때가、私が合宿で錦織選手に負けた時の写真になります。今見てもちょっと嫌な思い出として残っています。今となってはいろんなテレビでも、ご覧になった方がいらっしゃるとは思いますが、何かこう、いい思い出だなという感じもしております。

テニスを通じて松岡修造さん、あるいは錦織選手などなどの出会いがありました。自分自身は二十歳の時にけがのためにテニスを引退するということになりました。テニスを引退した時にまだ二十歳です。私自身は慶應義塾大学に

は一応入学したんですが、自分はテニスで飯を食っていくんだと、そしてテニスで世界の頂点に行くんだ、と意気込んでおりましたから、けがをして目の前が真っ暗になりました。

やることがないという時に、実はテレビの関係者の方から「新たな挑戦を試みたらどうだ」ということを言われました。それが何だったかと言いますと、先ほども言いましたがメジャーリーグ・ベースボールですね、アメリカに行つて野球の取材をしてみないかということをお勧めされました。

私自身テニスをしていたんですが、野球ですとか、サッカーですとか、他のスポーツにも非常に興味がありました。その中で特に好きだったのが野球でした。英語もテニスをやっている中で、必要だったためしゃべれるようになったこともあり、じゃあアメリカに行つてみて野球の取材をしてみようじゃないかということで、最初はアシスタントのようなかたちで、21歳の時にアメリカに渡り、メジャーリーグですとか、あるいはWBC、世界1位を王監督が率いて取つた日本の野球の取材をさせていただくということになりました。

その中でカリブ海の野球ですとかいろんな、自分が経験したことのないスポーツの一面を見ていくことになりました。

この写真で言いますと、上の写真がバリー・ボンズさんという世界のホームランの記録をつくつた方ですが、バリー・ボンズさんにまたいろんな言葉をもらつて、野球の取材を頑張ろうなんていうことも思つたこともありました。後ほどたっぷりお話できるかもしれません。

こういうことをしていくんですが、私、中南米の野球ですとかあるいはアメリカの野球を見て感じたことというのが、選手たちがとにかく

楽しんでいるなということでした。僕は一度テニスでけがをして、スポーツはきついし、けがをして嫌な思いしかなかった部分がありました。でもその中で、野球を取材するにあつて、メジャーリーグの方々、選手たちと出合つて話を聞いて、何てこの人たちは楽しんでやっているんだということに気がしました。それは選手もそうなんですが、ファンの方もそうです。関係者もそうです。そして、見に来ている子どもたちもそうでした。

これをどうにか自分の中で、この楽しさというものを伝えられないかということをお考えた結果、「伝えたい」という気持ちが出てきまして、アナウンサーになろうと思ひ、2010年にTBSに入社することになりました。

テニスをやつて、野球の取材をして、入社した時にはいろんな方々、先輩方から、当然スポーツアナウンサーとして入社したというふうに言われましたが、自分の中ではいろいろなことに視野を向けたいと思つていました。ですので、当然楽しいことを伝えたい、あるいはニュースを伝えるのもいい、「伝えたい」という気持ちが入っていますから、いろいろなことをやりたいと思つて入社をしました。しかしながら、入社後、先輩方とも話しをした結果、今こうやつてアナウンサーとして、そしてスポーツを伝える人間として今やつてきているわけでありまふ。

今、自分自身のことを簡単にお伝えしてきましたが、ここから本題に入つていきたいと思ひます。

まず、「伝える、伝わる」という中で、今私が担当しております「あさチャン！」という番組ですが、朝5時25分からやつております。この中で自分自身はスポーツをメインに伝えておりますが、ニュースなども読んでおります。

「伝える」というと皆さんなかなか、普通にしゃべっていても「伝える」ですし、視覚的に見ても「伝える」ですし、耳で聞いても、嗅覚でも「伝える」と、五感を使うもの全てにおいて「伝える」という言葉は当てはまると思います。

アナウンサーといえますのは、これまでは、放送によってニュースや案内などを告げること、いわゆるアナウンスメントということでした。つまり、放送によってニュースや案内などを告げること、ということだったわけですが、自分自身にとって「伝える」というものは何だろうと一度考えた時に、やはり自分自身が取材をして、自分自身が見て、調べて、聞いて、それを視聴者の皆さんに伝えていこうと、それを強く思いました。

ニュースなどを読んでいるアナウンサーというのは、原稿をただ間違えずにしっかりと読むこと、これも当然「伝える」ということですが、自分がやるべきことというのは、いろんな方にお話しを伺って、いろんな所に行って話しを聞いて、そして学んで、そして自分が一番感じたことを伝えていくと、このスタイルなのではないかということを思って今、日々仕事をしております。

皆さんの中に、あんまりテレビを見ないよという方はいらっしゃいますでしょうか？

あんまり見られない!? なぜ見られませんか？

- 男性：つまらないから。
- 石井：つまらないから!? なぜ見られませんか？
- 女性：放送内容が偏っているから。
- 石井：偏っているから!? なぜそういうことが今言われているんでしょうか？

例えば20年前までのテレビで言えば、朝の放送の視聴率は各チャンネル15%以上取っていました。

今、「つまらないから」という言葉がありました。そして同じように、「偏っているから」という言葉がありました。これは、いろんなメディアが出てきたことによって、例えばインターネットですとか、あるいは放送の中でも雑誌ですとか、いろんな媒体の中での扱うニュースというのが先ほど言われたとおり、偏ってきているんですね。

例えば、テレビの中でやっていること、これを見てインターネット上でニュースが書かれるケースが非常に多くなりました。インターネットに出ているニュースの80%がテレビから情報を得ていると言われます。つまりどういうことかということ、テレビを見てインターネットの記者の人が書いている、ということです。

でも一つ、皆さんが気になることがあると思うのですが、最近のテレビでは、インターネットに出ている情報を今度はテレビがやるというケースもあります。ランキングなんかを付けちゃって、インターネットで一番検索されたものがこれですなんていうことです。

でもそれというのは矛盾していることは分かりますよね!? テレビでやっていることをインターネットが書いているのに、インターネットでやっていることをテレビがやろうとしている。これだとなかなか面白いものはできないと思います。

でもスポーツにおいてはどうですか、スポーツ中継。WBCの中継をやると今でも30%の視聴率が取れます。バレーボールのオリンピック世界最終予選をやると20%取れます。この間のリオデジャネイロオリンピック、中継しますと

25%, 30%取れます。

やはりスポーツの持つ力、あるいは感動というのはインターネットでは表現できないわけです。そして先ほど言いました、つまらないというものは、これもスポーツが持つ力によって払拭することができる。それだけ力があるコンテンツをどれだけやるか、ということになるわけです。

お金も稼がなきゃいけないし、当然伝えたい我々の意見というものも伝えなきゃいけないし、偏りが生まれちゃいけないし、いろんな放送の中において、矛盾と闘うという部分もあるわけです。そういった中において自分は、やはりリアルを伝える、そこで起きている物事を伝える、そして一番自分が心に残ったことを視聴者の皆さんに伝える、ということで、自分の役目であり、できることであると考え、作業を行っています。

スポーツという中において考えてみますと、今東京オリンピックというのが問題になっておりますよね。

2013年に私は、アルゼンチンのブエノスアイレスに取材に行きました。それは何の取材かといいますと、IOC総会です。覚えていらっしゃいますか、「TOKYO」という発表がされた、あの場所です。そこに、私は取材に行っておりました。あの時に非常に感動するシーンがありました。

世界各国の記者と話しをする中で、みんな、東京というのはどういう街なんだ、東京オリンピックというのをやると何かいいことがあるのかと、いろんな記者から僕が質問攻めにあつた機会がアルゼンチンのブエノスアイレスでありました。その時には、「東京の魅力」ですとか、「いっぱい地下鉄が走っていてね」とか、あるいは「治安が良くてね」、「ごみがほとんど落ちて

なくてね」とか、「人が優しくてね」、と話しをしました。といろんな、僕も世界中の記者と話しをする中で、ぜひ東京でオリンピックをやってもらいたいという気持ちがどんどん高まっていった、その決定の瞬間というのは、60年ぶりに東京オリンピックが来るぞと、何か気持ちの中で嬉しさ、そして高まりというのを感じました。皆さんそう思われた方も、多かつたのではないかと思います。

東京と決まった瞬間、オリンピックが来るの嫌だよって思った方っていらっしゃるじゃないですか!、この中で。あんまりいらっしゃるじゃないですか。でも今実際、東京オリンピック、大丈夫なの!? って思ってた方いらっしゃる方はいらっしゃいますか!ね、思いますよね。若い方たちでも。何で思います、大丈夫? って。

○男性：いろいろな問題が起きているので、このまま微妙な空気のまま。

○石井：確かに今、微妙な空気になっていきますよね。

でもあの2013年を思い出していただければ、東京オリンピックがみんな楽しみでしょうがなかったはずなんです。

だからこそ、我々メディアとしてもきちんとしたものを伝えなければいけないし、きちんとした状況取材して伝えていかなければいけない。これがどれだけ多くの民衆の方々に届くか。いろんな方々がテレビというメディアを見ていらっしゃるその中で、視聴者の方々にどう伝わるかというものを。私自身もそうです。

例えば、リオデジャネイロオリンピックが始まる前、いろんな問題がありました。あの時メディアはどう伝えたか。「リオは怖えところだぞ」、「おっかねえぞ」、「犯罪が多いぞ」、と伝えました。しかし、実際終わってみれば、いかが

でしたでしょうか!? 大きな問題は特に起こりませんでした。

でも日本ではネガティブ・キャンペーンです。マイナスな話しが非常に多いです。これというのは当然世界でもそうでした。アメリカでも、ゴルファーなども「ジカ熱怖いぞ」と、「ゴルフの会場にみんな来たくないぞ」と言いました。そしてキャンセルをした選手たちもいっぱいいました。でも実際にリオのゴルフ場に行って、私は1匹も蚊を見ませんでした。

そう考えますと、情報、メディアはどういう役割をしているんだろうということを改めて感じるところであります。そして僕も、それを日々感じながら生きています。

こんな話しをしながらも、「ジカ熱が怖い」と言われた時に、私は、なけなしの給料をはたいて4万円分の蚊対策のグッズを買ってリオに乗り込みました。1人だけ蚊帳をかぶって寝ていたなんていうこともありました。そうやって私自身もちょっと怯えた部分もあったんですが、帰ってきてみれば1カ所も蚊に刺されず、無事に帰ってきたということになります。

そういう意味で、伝え方ひとつで皆さんの気持ちも変わるし、そして盛り上がりも変わるということになるわけです。

何を見て皆さんが、そして我々もそうですが、スポーツの熱を感じるか。そして、何を伝えていかなければいけないか、ということがあるわけですね。

この間のリオデジャネイロオリンピックで、何の種目に一番感動しましたか!? レスリング!?

○男性：吉田沙保里。

○石井：吉田沙保里選手。ちょっとその話しは後でしようと思っていたのですが、それはなぜ感動しましたか？

○男性：最後まで諦めない。

○石井：そうですね。「ごめんなさい」っていうせりふも含めてですよ。

ああいうものに感動した方もいらっしゃると思います。何が一番感動しましたか。

○男性：体操ですね。

○石井：体操。内村君を含めの団体。

○男性：そうですね。

○石井：そうですね、あの金メダルというのは私は会場で見えていたけども、とにかく何かが、日本の声援があつた会場に届いたようなものが、「着地の瞬間」、しました。

やっぱりそういうものというのは選手にも通じますし、「伝える」というのは当然視聴者の皆さんに伝えるということもそうですし、選手の皆さんに、皆さんの思いを伝えるという部分もあります。いろんな意味合いが出てくるわけですよ。

このオリンピックというのは、41個というメダルは成功に終わったと思いますが、一方のパラリンピック、若い方で見たよという方はいらっしゃるでしょうか!? テレビでパラリンピックを見たよって。見ました!? 何をみました？

○男子：陸上競技。

○石井：陸上のね、山本篤さんとかですか。

○男性：日本人の方に注目したんですけど、健常者よりもかなり記録が。

○石井：そうでしたよね。でも、「その話しを知っているよ」という方はいらっしゃるのでしょうか。あっ、知ってらっしゃる。パラリンピックは見られましたか？

○女性：はい。

○石井：何が一番感動しましたか？

○女性：全体的にしか見てないんですけど、ボッチャ。

○石井：ボッチャですね。よくご存じですね。広瀬選手ですね。

ボッチャというスポーツ、これも非常に面白くて、脳性まひのある方がやられるスポーツなのですが、椅子に座って、ある程度重みのある球、大きさはテニスボールぐらいなのですが、お手玉のようなもので、中におもりが入っていて、それを投げるんです。単純な競技なんですけど、非常に難しい。的に向けて一番近づけた人が、近づけたチームが強い。これはタイが意外と世界で一番強かったりして、こういう驚きなどもあるわけです。

でもこのニュースというのは日本のメディアにおいて、本来であればもっともっと伝えなきゃいけないニュースでありました。

日本はパラリンピックにおいて金メダルは0個です。ご存じか分かりませんが、パラリンピックで世界で一番金メダルを取った国を知っていますか!? 100個取っている国があるんです。日本は0個ですよ。金メダルを100個以上取っている。105個かな、中国なんです。

そして、中国、アメリカなどについて、3位に入っている国がある。ウクライナなんです。41個の金メダルを取っている。これはなぜか!?

ウクライナはオリンピック・パラリンピック協会の会長さん、皆さん知っていますか!? 棒高跳びのセルゲイ・ブカさんです。うんうんっていう。大体それで年齢が分かっちゃいますね。ブカさん、世界記録を35回つくったあの方ですが、あのブカさんが会長で、私はこの間リオでもお話を聞いてきました。ウクライナという国は、「とにかくロシアに負けたくないんだ」とはっきり言っていました。ロシアも当

然そうですし、他の国でもそうですが、やっぱりその中で勝てるもの、パラリンピックなんだと。パラリンピックを強化して、世界中に、メディアを使ってウクライナのパラリンピックが強いんだということを世界に知らしめる、それによって自分たちの国が注目される。こういう考え方をやってやっているわけですね。

そういったように、メディアの中でもうまく使って世界に発信していこうですか、そういうふうに住戦を立てている国も当然ありますよね。オリンピックという、パラリンピックという舞台を使って。でも日本におけるパラリンピックというのは、僕はまだまだ、もっと伝えていかなきゃいけない部分だなと、改めて2020年に向けて思うところでもあるんです。

そういう意味では、先週行われた銀座でのパレード、あれは何十万人お越しになったかご存じですか!? 何万人が銀座のパレードに、都民の皆さん含め、全国から集まったか。あれは、100万人近く集まったということです、銀座に。80万人とか90万人という話しもありますが。

私もその現場に行っていましたが、今回のあのパレードというのは素晴らしかったです。2.5キロをパレードしていくのですが、前は1キロだったんですね。それが2.5キロにちょっと距離が増えました。それによって見る方々も沿道でもっと広がって見られるということで、事故なども防止できるということもありました。パラリンピックの選手たちもバスに乗って手を振ってらっしゃいました。

さっき仰ったボッチャの選手たちも乗っていましたし、陸上の山本篤選手とかも乗っていました。木村選手という水泳の選手も乗っていました。銀座にあれだけの人が集まる中でパラリンピックの選手たちが参加したという、非常に

意味のある銀座でのパレードになりました。

皆さんの意見を取り入れながら成長していかなければいけないというのが、これから2020年の東京オリンピックに向けてのテレビ・メディアの姿であると、伝える姿であると、私は、日々感じております。

皆さんの中で、「テニスやっているよ」という方はいらっしゃいますでしょうか!? あっ、やっている。あっ、やってらっしゃる。

テニスというスポーツは本当に、小さい子どもから、老若男女問わず楽しめるというスポーツです。60代の方でも70代の方でもいまだに試合に出てらっしゃる方もたくさんいるというスポーツですが、最近テニスが実は、野球、サッカー、テニスと、3番目に人気のスポーツになりました。

そして、1番尊敬するアスリートという日本でのアンケート、子どもたちが憧れるアスリートというアンケートで、錦織圭選手が1位になりました。当然錦織選手の活躍というのは皆さんご存じだと思いますが、私、入社してからこんな時代が来るとは全く思っていませんでした。

このテニスというスポーツは非常に伝えるのが難しかったです、「フェデラー」って知っているよという方はいらっしゃいますか!? 「フェデラー」という名前を。手が上がりました。「ジョコビッチ」って知っているよという方!? ああ、って言うぐらいの方ですけどね。だんだん「フェデラー」とか「ジョコビッチ」とか「ナダル」とか、皆さんがうんうんってうなずく姿、これははっきり言いますが、5年前はなかったですからね。なぜならば、「錦織圭」という選手が出てきて「ジョコビッチ」とか「ナダル」とか、そういう名前を皆さんが覚え始めた。そして聞き始めたんですね。

誰も知らない中で私、入社してから実はラジオ番組を毎週やっていました。「森本毅郎スタンバイ!」というラジオはご存じですか!? TBSラジオでやっています。30年ぐらいやっている番組で、その番組自体はものすごく聴取率のいいラジオ番組なんですけど、その番組に私は毎週出ていまして、しつこくですね、嫌というほどテニスの話しをしていました。

まだ錦織圭選手が出てくる前です。そこまで強くない、世界ランキングがまだ150番とか100番ぐらいの時です。だからまだ錦織選手のことを誰も知らない時ですが、「ジョコビッチ」という選手を伝える時にいろんな言い方をしていました。本当にそれが今、自分自身のアナウンサー生活にとっても役に立っていると思っています。それは、テレビの世界における「枕詞」という、ちょっと文法的なことです。

例えば駅伝の中継をするときに、「ユニバーサルエンターテインメント」というチームがある。これは強いチーム。ここに枕詞を付けるならば、「今年の優勝、ユニバーサルエンターテインメント」とか、あるいは「高橋尚子を育てた小出監督率いるユニバーサルエンターテインメント」とかいろいろ言い方が出てくるんですが、その枕詞の部分というのは非常に人に伝える時には大事になってきます。

テニスにおいて「ジョコビッチ」を伝える時に、最初は、ラジオです。皆さん顔も分からない。テレビと違ってしゃべる時にイメージさせなきゃいけない。いろんなことをしました。「顔が平井堅に似ているジョコビッチ」とか、あるいは「年間で何と30億円を稼ぐジョコビッチ」、あるいは「5大会連続で優勝している、無敵のジョコビッチ」、いろいろな言い方があります。こういう言い方を、どうやったら人に刺さる言

業で伝えることができるかということ、日々ラジオで鍛錬をしていました。

日々伝えることによって、だんだんテニスの選手たちのことも皆さんが知ってくださるようになってきて、今では「ジョコビッチ」という時に何というか。例えば「絶対王者」と言うか、一言でそれが伝わるようになってきた。

でもこれというのは、何のスポーツにおいても、何のニュースにおいても非常に大事なことで、例えば学校の生活においても、人と話す時においても、枕詞というのを意識するだけで、「こんなに伝わり方が変わるんだ」ということが、私もアナウンサーになってから大変勉強になりました。

例えば、僕らが一番最初に研修でやることなんです。実況の研修でやることは、「自分の家から会社に来るまでの道のりを今この場でしゃべってみろ」と、地図を見ながら先輩が線を引いていくわけですね。ちゃんと会社にたどり着くかという研修などがあります。その時にいろんな言葉を考えながら、例えば「左側に立っている表札」と言うか、あるいは「黄色い表札が立っている、そこを左に曲がってください」とか、いろんな言い方をしていくわけです。

この枕詞というものにおいては、今の放送においても大変、私自身が意識してやっていることであります。「伝える」という部分においては、これがある種の楽しさを伝える役割にもなりますし、そして皆さんにその選手の気持ちを悟ってもらうための言葉の大切な部分になってくるのではないかなと思っております。一つのポイントとして今日挙げさせていただきますと、枕詞ということですね。

後ほどまた、これを第2部にとっておかないとまた話すことがなくなっちゃいますので、こ

ちらはまた後ほどお話しすることとします。

もう一つ、私が話しをしたいことは、どんどんいろんな話しに飛んでいっちゃって申し訳ないのですが、取材をする時に意識していることというものがあります。先ほど軽くお話ししましたが、テレビというメディアが廃れないために、いろんないい選手の言葉をもらわなければいけない。いわゆる、選手のonをもらわないといけないという時に、先ほど田中先生とも話しをしていてふと思い出した言葉がありました。リオデジャネイロオリンピックでメダルを取った、こちら枕詞を付けますと、「ノーパンの水谷選手」と言えば分かる方がいらっしゃると思いますが、いろんな番組で「僕はノーパンです」、「ノーパンです」とずっと言っている水谷選手って、卓球の選手です。卓球選手というのは水谷選手いわく、下着を着ないでズボンを履く選手も多いらしくて、その中で彼は、そういうことをある種の売りにして、最近よくバラエティー番組などで話しをしているわけです。

この水谷選手の神ラリーというのを見た方はいらっしゃるでしょうか!? あまり見てらっしゃらない!? とんでもないラリーがありました。あっ、見られた!? 中国の馬龍選手と繰り広げたとてもつもない、30球を超える卓球でのラリーです。この水谷選手を私はずっと取材しておりました。3年前から取材をずっとさせてもらっていたんですが、水谷選手というのが団体ではメダルを取りました。個人でもメダルを獲得しました。銅メダルです。この水谷選手のメダルというのは取るべくして取るメダルだったなと改めて感じます。

と言いますのも、リオデジャネイロの会場で水谷選手にお話しを聞いたんですが、水谷選手は記者会見で話しをした時は非常に落ち着いて

いて、「しっかりとやれることをやるだけです」というようなコメントをしました。私はずっと取材をしていただけに、このリオにかける思いというのは水谷選手にとっては特別なものがあるというのも確信して、分かっていたので、会見が終わった後、出てきた水谷選手をつかまえて、一言お話を伺いました。

この時に、選手に話しかける時というのは当然、日ごろの取材をしているのでいろんな聞き方があります。例えば、「1回戦の相手は誰々ですけれども、水谷選手どうですか。あしたに向けて一言お願いします」、こういう聞き方もあります。もう一つは、「このリオに入ってから、選手村はあまり環境が良くないと聞いていますけれども、今の気持ちはどうですか。コンディションはどうですか」という聞き方もあります。

本当にいろんな質問の仕方があります。ちょっと聞いてみたいと思いますが、例えば試合前の水谷選手に質問するとしたら何て聞きますか!? 前日です。緊張感あります。

○男性：「緊張であり寝れてないかもしれないんですが、今のコンディションはどうですか」。

○石井：今のコンディションはどうですかと。何かありますか、聞きたいことというの。特に思い浮かばない。でも、人によって聞くことというのは変わってきます。

私もずっと考えました。一言、まず声をかけて聞く時に、出てきた答えは、「どう?」でした。僕の中では。「どうですか」って、「今どうですか」でもなく、「明日どうですか」でもなく、自分の中でいろんな気持ちを整理した結果、彼に聞くことというのは、「どうですか?」っていうこの質問がたぶん一番いいだろうと思いました。

そして水谷選手から返ってきた言葉は、「メダルを取ることが使命ですから」、と一言だけ返ってきました。それを聞いた時に私は、間違いなくメダルを取るな、と思いました。

僕自身、聞きたいことは山ほどありましたが、ここではあえて、僕が決めて質問するよりも、彼がどう受けとめるか、このリオについて彼が何を思って臨んでいるかということを知るのが最適なんじゃないかと思い、一言その質問をしました。そして、「使命ですから」という一言が出てきたわけです。この「使命ですから」という言葉はうちのニュースでもずっと使われていました。やはり、それだけ彼らにとってのオリンピックというのは特別ですし、僕らが質問を決めるということではないと思います。やはり、一種独特の空気感があります。

他の選手のことを言うならば、ウエイトリフティングで感動の銅メダルがありました三宅選手です。この三宅選手というのは非常に頑張り屋さんで、ロンドンでも銅メダルを獲得して、2大会連続のメダルが期待されていたわけです。当然、重圧もあります。

その中で三宅選手は前日、腰がヘルニアで全く立てなかったんです。練習ははっきり言って2カ月ぐらいできていませんでした。その中で迎えたリオ・オリンピックです。腰が痛い中であるわけですが、ですから、体重制限があるウエイトリフティング、重量挙げは、減量もしなければいけないわけです。しかし、動けないですから痩せることができない。じゃあ何をするか!? ご飯を食べない、サウナに入る、水分を抜く、これしかないわけです。前日までにまだ2キロ痩せなきゃいけない体重が残っていたんですね。48キロとかの選手が一日で2キロ痩せなきゃいけないって、これはもう、女性なら皆

さんよく分かると思うんですが、大変なことなんです。

でも、それをする前の三宅選手に僕は質問をしなければいけない立場でした。代表質問です。いわゆる各局の代表として、全部の日本のメディアの代表として質問をさせてもらいました。しかし、自分の中では納得のいく質問ができませんでした。なぜなら、全ての局を代表しての質問なので、この質問をしてください、この質問をしてください、と、他の局からもいろんなアンケートをもらうわけです。そういう質問を見て質問をしなければいけないので、自分がしたいものとは、意にそぐわない形での質問をしなければいけなかったんです。

三宅選手は一言しか答えてくれませんでした。インタビュー時間は5分あったんです。私がした質問は、六つありました。「いよいよあしたを迎えますけど」という質問、あるいは「もう自分がやる試技の順番が決まりましたけど」、あるいは「ライバルの中国人がいませんが」とか、いろんな質問を六つしたんですけど、三宅選手から出てきた言葉というのは「あしたは大丈夫だと思います」、この一言だけです。5分間で一言だけしか引き出せないアナウンサーというのはどうかと思いますよね。でもこれはみんなの、日本のメディアの代表としてしている質問だったわけです。

だからその質問の中で僕が感じることというのは、これはちょっと厳しいのではないかと、いうところでした。彼女の中でしゃべる言葉がない、見つからない、という状況だったわけです。

そんな状況の中で次の日を迎えて、見事に三宅選手は挙げてしまうわけです。このギャップというのも一つの日本に感動が生まれる瞬間な

わけです。前の日は全くしゃべれなかった人が、次の日に見事に銅メダルを獲得する。これも一つのスポーツの素晴らしさだと思います。水谷選手のように、「自分の使命です」と言ってつかみ取る銅メダル。三宅選手のように駄目かもしれないところからの銅メダル。同じ銅メダルであっても全く違うわけです。これがやはりスポーツの持つ魅力なのかなということを感じるわけであります。

こういう日々の現場を通していろんなことを感じさせてもらって、そして伝えていくという仕事をさせていただいておりますが、今僕がやっている「あさチャン！」という番組は、今日はひたすら「あさチャン！」の宣伝をしにこようと思ってさせていただきますが、「あさチャン！」という番組は、見てらっしゃる方々の層が60代、70代、80代の方が非常に多い番組になります。

もともとTBSの「あさチャン！」の前の番組というのが「朝ズバッ！」という番組、みのもんたさんの番組でした。そういう意味では、みのもんたさんのことがお好きな方々も多いということもあり、そのぐらいの年齢層の方々が非常に多く、いまだにご覧いただいているわけです。

この「あさチャン！」を放送するにあたって、当然60代、70代の方々に向けて、80代の方々に向けての放送になり、いわゆるNHKに近い形になるわけですね。ゆっくりと、一つ一つお話しをしていくということになります。大体こういったペースでのお話しのスピードになっていくわけですが、でもこれというのは私自身の中ではちょっと違うと思うんです。

会社に言われることとしては、「とにかくゆっくりしゃべりなさい」と言われる部分が非常に

多い。でも私が存じ上げている限りの60代、70代、80代の方々是非常にお元気で、そしてスポーツなどもやられて、ものすごくパワフルな方が多い。特に僕が伝えるスポーツコーナーとこのを見てくださる方というのはものすごくエネルギッシュで、お若い方が多いと。

私はこういった大学の講演の他にもいろいろな県から、茨城県とか岡山県とかから呼ばれてお話しをさせていただく機会が多いんですね。今日ここにいらっしゃる方もかなりご年配の方もいらっしゃいますが、とにかく皆さん元気で明るくてということでいらっしゃいますので、僕自身はとにかく「あさチャン！」では元気良く、そして楽しく、少し、あえてスピーディーなしゃべりでお話しをしようというふうに関心掛けております。

これは会社から止められる部分もあるんですが、でも皆さんは若い方々よりも非常に知識も、テレビもよく見ていらっしゃる方も多いですから、そういう意味では詳しい方々もいらっしゃるわけなので、とにかく明るく元気よく、そして詳しくお伝えしようと思って日々生活をさせてもらっています。

スポーツにおける実況アナウンサーは、私も実況もやっていますが、当然カンペですとか原稿はありません。3時間だったら3時間ずっとしゃべらなきゃいけない。ぶっ続けて伝え続けるわけですね。ラジオですともう本当に、プロ野球のプレーボールから、「ピッチャー、第1球投げました。外角低め、ボール」というところから全て一言一言、一瞬も逃さずにしゃべっているわけです。

3時間、3時間半そらでしゃべっていきますから、そういうスポーツの魅力というのも当然あるわけですが、そういう中での中継をやっている

こともあり、朝の私のスポーツコーナーというのは台本ですとか、あるいはカンペというのが無いんです。自分が感じたことをどれだけ楽しく、そしてお伝えできるかということを日々研究しています。

だからこそ全く伝わらないこともあります。自分自身が伝えようと思ってもなかなかうまく伝わらないことというのが当然あるわけです。でもそれをし続けること、そして自分自身が感じたことを話し続けることというのが大切なかなと思って日々やっております。

一つの取材の時のポイントとして、いろんな選手にお話しを伺ったりとか、年間でいうと365日あるうちの300日ぐらいい取材をしていて、取材ですとか資料を作る時間というのは、アナウンサーでいいますと、一日大体5、6時間は最低でも資料を作っている時間となります。しかし、100取材して出すのは、放送で言うことというのは1とか0.5とかそれぐらいなんですね。

だから、とにかく取材をして、そして放送で少しだけ言いたいことをしゃべる。先ほども最初に言いましたが、今日は3時間ありますから、私も徹底的にしゃべっていきますが、普通は1秒でも押したら怒られるという世界で生きていますので、ぴったりそこに収めるという作業をしなければいけないわけです。したがって、そういう中ではしゃべれることというのは限られているわけですね。

取材をする時にどうするか!? いろんな記者がいます。いろんなスタイルでやります。ボイスレコーダーをこう持って、いろんな選手たちから話しを伺っている……、ちょっと僕、今、気付いてしまったんですが、ここにボイスレコーダーがあります。僕が話していることを録音されているというわけですね。消しちゃおうかな、

なんて今ちょっと思いました。汚い言葉は言わないようにします。

取材をする時に、メモをたくさん取る記者もいます。あるいはボイスレコーダーを取って後で書き起こすなんていう記者もいます。しかし、私は取材をする時に一切のメモを取りません。そして録音もしません。相手の目を見て、取材対象者の目を見て、自分の聞きたいことを聞く。そして相手が言ったことで心に刺さる言葉を、追い追いノートに取ると。取材が終わった後にノートに取るという方法を取っています。

ちょうど私、今週、バレエダンサーの熊川哲也さんとトークショーをさせていただきました。意外にあの方もよくしゃべる方なんです。クールな感じがするんですが、スイッチが入っちゃうとずっとしゃべってらっしゃる方でした。汗かきながら。あんなにバレエで美しい話しをするのに、意外と言葉遣いが汚かったりして驚きました。

その熊川さん、すてきな言葉を一つ仰っていて、それがすごく心に残っているんです。「100年前にこのバレエというのが実演できて、100年後にもこのバレエが実演できる」と。どういふことかという、100年前の状況においても同じバレエが行われていて、そして100年後を見ても同じバレエが行われている。そして同じストーリーで同じ内容でやっていると、「こんな美しい芸術ありますか」って私言われたんです。確かにそうだなと思いました。

テニスにしても、道具が変わったりですとか、いろんなものが変わってきているわけですが、バレエというのはなかなかそういうのがどうやら変わらないようで、当然演じる方ですとか音楽ですとかそういうものも変わっていくことはあるかもしれませんが、ストーリーですとか演

出というのはなかなか変わることがない。そういう部分というのは、「こんなに美しいものってありますか」って言われて、確かにないなって思ったりしました。

そういう言葉というものは、どんどん蓄積されていくわけです。こういう言葉の「強さ」とか「面白さ」というのは、取材をしながらノートに書いていては、やはり感じることはできないわけです。録音することに必死になっていたら、やはり感じることはできないと思うわけです。

この言葉というのは私も15歳の時に松岡修造さんに言われたことがありました。「傾聴」という言葉を言われました。傾ける、聴く、と書いて「傾聴」ということです。耳を傾ける、この能力というのが、とにかくテニスをやるのも、強くなるのもそうだし、テレビの世界で生きるのもそうだけど、とにかく傾聴というのが大事だと。「耳を傾ける」、メモしている場合じゃないわけです。どこでどうやって感じるか、それが大事なんだということです。

松岡修造さん、カレンダーが売れているわけですが、本当はそういう素敵な一面があるんですね。本当にいい言葉を修造さんもよく仰るんですが、とにかく、「伝える」ということはまず最初に「伝わる」。つまり、「聴く」という、「傾聴する」ということが大事なんだと、最近また改めて強く思う部分があります。

後ほど第2部で、「言葉とスポーツ」ということで、いろんな選手たちの写真をお見せしながら、この選手はこういうことを言っていたよとか、あるいはこういう言葉でもものすごく生きる糧になるんだという言葉がたくさんご紹介していければなと思っております。

この話しの中で、先ほども言いましたが、「聴

く」という部分、「伝わる」という部分に関しては、何か力になったなとか、あるいは勉強になったなとか、今日聞いたこれを会社でしゃべってみたいとか、今日テレビで見た、伝わったことを学校でちょっと話してみたいとか思うシーンというのを、私は皆さんにたくさん提供したいと、常日頃思っております。何か一つポイントに、フックになってもらえればなと思って日々放送業務をさせてもらっています。クスツとすることでもいいですし、あるいは、何かくだらねえな、ということでもいいと思っております。

例に出しますと、今大相撲というのが比較的またブームになりまして、最近ですとほぼ連日、満員御礼が出ていますね。

若い方で、相撲が好きだよという方はいます!? あんまりない……、あっ、好き。まあまあ好きと。でも、大相撲を見られるよという方はいらっしゃいますか!? 見られない!

○女性：見ます。

○石井：あ、見ます。あえて手を上げられるというスタイルを取っていただいたわけですね。

大相撲というのは今またブームになっていることがあります。

今度の場所は11月13日から始まるわけですが、これが今私の中では、何を伝えようかというのを、今ものすごく気をもんでおります。

といますのは、白鵬が1000勝です。通算1000勝って偉大な記録になるんです。千代の富士とか、限られた人間、力士だけしかなしとげていないんですね。横綱だから人間じゃないですね、神様ですね。そういう方々しか達成したことがない1000勝まで、あと3としていまして、これも一つの見所ですし、当然豪栄道の

綱取りがかかっていることもあります。この間の場所で優勝しましたので、次に勝てば、13勝以上して優勝すれば横綱なんて言われています。あと高安も大関になりそうですし、あるいは遠藤も復帰してきましたとか、いろんなネタがあるわけです。

テレビにおいて相撲コーナーって、NHK以外で、皆さん10分以上見たことありますか。ないんですよ。これを全部やろうとすると大変なことになりますので、大体2、3分でしょう、相撲コーナーはやったとしても。ということは、伝えられるネタって1個か2個なんですよ。じゃ何に焦点を絞っていくか。そして、大相撲って15日間しかないですから、そうすると何をしゃべろうかなと考えてしまうわけです。

当然、豪栄道は1個そうだよと。でも、白鵬の1000勝よりも高安の大関のほうが気になるよねとか、いろいろあるわけです。ここのピックアップというのが非常に、ネタの選択というんですが、ここは一つ、私、仕事をやっても日々悶々とするというか、葛藤するというか、そういう状況になるわけです。

私は、しゃべりたいことがとにかくいっぱいあるんです、毎日毎日。今だとクライマックスシリーズですね。セリーグで、「黒田が昨日、もうちょっといいピッチングをするかなと思ったんですけど」とか、「井納が非常にいいのう」とかね、言いたくなかったけど言ってしまいました。。。日本ハムとソフトバンクだと、大谷君もすごいんだけど、柳田のトリプルスリー、男柳田、今シーズンは無理でしたけど、クライマックスに入ってまた打ち始めましたね、とかですね。

とにかく時間が限られた中で、さっき「テレビ、つまらない」ってはっきり言っていただき

ましたが、その割には、ものすごい一番前に来ていただいていますよね。ものすごい細かい字でメモしていただいています。「広辞苑かっ」というぐらい、「相撲の番付の下のほうかっ」というぐらい書いてらっしゃいますね。時間が限られているというのがまた一つ、テレビというメディアの難しさです。インターネットだとダラダラ、いろんな、しょうもない、あまり言っちゃいけないかもしれないですけど、一緒にやっている夏目さんの何とか報道とかありましたけども、延々書かれているということもありました。

1秒っていうものをどれだけ大切にしていかなきゃいけないのかということがありますので、なかなか難しいというのが現状にはなるのですが、そのときに僕が一番大切にしているのが、さっきも言いました、ちょっと話しは戻りますが、皆さんが会社とか学校とか、あるいはお家で、「お母さん、今日、高安は大関昇進の大事な一戦だよ」とか、高安の話とかは絶対話さないと思いますけども、そういう、「ちょっと会話になる何か」というのを提供できればなと思ってやっています。

自分自身が伝える時に、家での会話ですとか、会社での会話というのが増える何かを伝えたいって、日々思っております。

ネタの提供として大事な場面がありまして、例えばユニバーサルスタジオって今大阪で盛り上がっていますよね。行ったことありますか!? 若い方で。行ったことありますか。何に乗りました? フライング・ダイナソー? ハリーポッター?

○男性：スパイダーマン。

○石井：スパイダーマンもいいですよ、面白いですよ。

今ユニバーサルスタジオは非常に盛り上がって、ディズニーの集客よりも今成功しているなんて。松岡修造さんがリ・ボン！ 何て言っていますが、あれはどうかと思うんですけどもね。そこまで師匠もいったかなんていうところもあります。

ユニバーサルスタジオの例えば特集などがあって、「アトラクションに乗りたいね。お母さん、今度連れて行ってよ」という会話でもいいですし、会社の中で「あれ、面白そうだね。今度行かない?」みたいな、彼氏、彼女でも当然そうでしょうけども。そういう、いろんなエンターテインメントを伝える機会があるように、スポーツでも伝えたいなということを私は強く思っています。

そのためにはじゃどうすればいいかということになっていくわけですね。なかなか普段の会話の中で、「いやあ、柳田が昨日3三振だったから、今日は何とか復活してほしいよね」なんていう会話を、野球好きでもない人が果たしてするんですかということなんですね、問題は。ソフトバンク・ファンではない人がなぜ柳田の話題を突然しなきゃいけないかって、こういう疑問に陥るわけです。

じゃあ、どうすればいいか!? まず一つ考えられるのは、ブームをつくっていこう。もう一つ言えるのは、普通の人々でも、普通の一ファンでない人でも語れるスポーツというものを何かつくりたいなというふうに思うわけです。

今、私は日々、「あさちゃん!」といういわゆる媒体、メディア、テレビを通じてやっていることで、錦織君の企画があるんです。これはしょうもない企画でして、錦織君が2014年全米オープンで準優勝をしました。この時私はどういう状況になったかといいますと、こういう状

況になったんですね、この上の写真です。夏目さんも苦笑い、失笑ですかね。どうしてもああいう状態になってしまう。あちらの一番上、「日本の夢ですから」なんていうこともありますけども、こういう状態になって、実は「よし」と、これは錦織圭選手がスーパースターになると、私の中で確信したんです。

でも当時、グランドスラムというもののすごさというのは、今だと分かります!? グランドスラム、4大会だよ、まず全豪オープンがスタートして、その後フレンチ・オープン、ウィンブルドン、そして全米オープン、4大会があるよねって。しかも1大会優勝すると賞金はなんと4億円だよ、これはすげえ大会だって、みんな今は分かったわけです。でも、この時はあまり分かってない、正直なところ。

じゃ、どうしようといったときに、放送で、先ほど言いましたここにつながってくるんです。僕がやっている「あさチャン!」という番組のスポーツのコーナーでは、台本はありません。勝手に言いました。「私、『毎日錦織』というコーナーをやります」、勝手に言い放ちました。スタッフたちはみんな衝撃を受けていましたね、これを毎日やるんですかと。

アナウンサーというのははっきり言って、いわゆるアンカーという、陸上でも最後にテープを切る人をアンカーと言いますが、このアンカーというポジションは「最後に伝える人」という意味ですから、ディレクターが準備してプロデューサーが決断して、それを最後に伝えるっていう、いわゆる末端の仕事なんです、実は。

にもかかわらず、生放送中に私が「毎日錦織」をやりますってはっきり言ってしまった。これはどういうことかという、視聴者の皆さんが、あ、そうなんだ、やるんだって分かっているとこ

ろでやらなかったら問題になりますね、はっきり言って。だからプロデューサーも、「ええっ、じゃやらなきゃね」っていう形になったわけです。そこから始まりました、「毎日錦織」。あれは120日間ぐらい続いたんですかね、確か、「毎日錦織」というコーナー。

錦織選手、11月はオフです。動きがありません。僕もどうしようかと思いましたが、これは9月ですから大体2カ月ぐらいたった時ですが、錦織選手がオフに入ってしまった。情報が全くない。錦織選手はフロリダに住んでいる、連絡もつかない。練習もしていない、オフですから。

「何を伝えるのよ」となった時に、私は初めて気付きました。「何でもいいから伝えよう」と。「しょうがない」、「言っちゃったし」っていうことですね。100日続いていますからね。伝えたことというのは、ひたすら、ひたすらです、「テニスの魅力」。みんながオフシーズンに何をしているとか、あと全国小学生大会の話題とかです、ね、そこまで下るか、という、10歳の男子を追いかけてみたりですとか、もはや錦織選手は全く関係ないんですけど、錦織選手に憧れるというだけでその企画でいこうみたいな。やる事がなくなっちゃって、そうってしまったわけです。

120日ぐらいたった時に、さすがにこれはきつい、となりました。でもこの120日間の間に錦織選手は、言わずと知れた日本のスーパースターになってくれたわけです。

そうすると、視聴者の皆さんは何をするか。テニスをやっているって仰いましたが、テニスをやっていらっしゃるんですよね? 「毎日錦織」とか「あさチャン!」は見てくださっていますか!?

○男性：ちょっと……

○石井：見てない？

○男性：朝遅くて。

○石井：あ、朝遅い。大学生？

○男性：はい。

○石井：じゃ、これから5時25分に起きてください。2時半に私は起きていますからね、毎日。

テニスをやってらっしゃる方は、取りあえず「TBSイコールTENNIS」という流れになったんです。これは今でもそうなんですけど、今でもよくお手紙とかもいただきますし、メールもいただきますが、はっきり言います、TBSは男子のテニス中継を一つもやっていません。やっているのはNHKとテレ朝さんです。あとWOWOWさんですね。あとGAORAとかです。TBSは全く、1大会も錦織選手の中継をやっていません。にもかかわらず「TBSイコールTENNIS」と、錦織圭っていう存在により、こういう流れをつくることができました。

そして、錦織選手の話をする時は数字も上がります。これが不思議なもので、やっぱり、自分たちで流れをつくる、そして伝え続けるということの大切さを学びました。

そして、「毎日錦織」というのが終わった後に、毎日伝えられないということで企画を変えまして、「がんばれ錦織」というタイトルに変わりました。ただ応援し続けるというニュースなんですけど、これをやって最近ですというんなパターンができて、今やっているのだと「僕の名は」っていうのをやっていますけどね。学生さんたちは苦笑していますけどもね。今『君の名は。』という映画が大ブレイクしていますので、「僕の名は圭」というコーナーをやっています。

しかも、錦織選手は今けががしてしまっていて、この

数週間、全然試合に出てくれないんです。その間はキリオスという、どうしようもない、オーストラリアの選手をひたすらフューチャーし続けるという意味の分からないことをやっています。意外と錦織選手のライバルだというだけで放送するのに視聴率が上がるんです。

これも一つのきっかけになりまして、いわゆる、「TENNISイコール錦織圭」、イコール他の世界のスーパースター。そして何とんでも、テニスをやるとお金持ちになれるかもしれないという、子どもたちの夢まで膨らんでいったわけです。

『フォーブス』誌というアメリカの一流雑誌があります。このフォーブス誌がデータを取り、世界のアスリート長者番付というのを掲載しました。その番付で、錦織選手は今、世界で30番ですからね。ウサイン・ボルト選手よりも上です。テニス選手ということでいえば、トップ10の中に4人入っています。

とにかくテニスというのはお金になるんだというのが、世界的にも、そして日本の中で少しずつ認知をされて、これがまた皆さん分かりやすいわけです。「お金になる」っていった瞬間に人気のあるスポーツ3位になっていますからね、テニスが。野球、サッカー、テニスって、これが一つ皆さんの興味がある部分なのかなと思うわけです。

自分の中で自分がやりたいって思ったことを形にしていかなきゃいけないっていうもの、そしてそれがブームになると信じ続けることというのがどれだけ大切かということ、また感じる部分でもあります。

今、私はチャレンジしていることがあります。今はフィギュアスケート・シーズンです。フィギュアスケート好きだよ、という方はいらっしや

いますか!? 真央ちゃんとか。誰のファンでいらっしゃるんですか!? 真央ちゃんは好きですか!? 浅田真央選手。ああ、真央ちゃん好き。本当に今日本ではフィギュアスケートというのも一つ盛り上がっているものでもあるんですね。

大丈夫ですか!? 第1部が間もなく終わる!? まだ全然しゃべり足りないですけど、私。。。全然しゃべり足りないです。大丈夫ですか!? 「そろそろ締めてください」です。失礼ですね、勝手に呼んどいて。あっ、違いますね。

フィギュアスケートというものに関して、日本はものすごく人気があるということで、今「あさちゃん!」という番組の中では、毎週、織田信成さん、陽気な織田信長の子孫ですけども、あんなに織田信長は陽気だったとは思えないのですが、信成君に来ていただきまして、毎週、いろんなフィギュアの魅力というのを伝えているんです。

これがまたTBS、他の局がいろんなクライマックスシリーズをやっている中で、「フィギュアスケートのノービスB」ってご存じですか!? 知らない!? 9歳とかのフィギュアスケートですが、女子の9歳の選手を追っかけてみたりですか、とにかく我々は、下の年齢から全員取り囲んでやろうということでやっているわけです。やっぱりそれをすることによって、フィギュアの好きな方々は毎朝「あさちゃん!」を見てくださるわけです。

これも不思議なもので、実は、TBSではフィギュアの中継を一つも持っていません。テニスと一緒になんです。でも、「FIGUREイコールTBS」ってなりつつあるわけです。これまた一つのきっかけといえますか、自分たちで流れをつくっているわけです。

そして自分たちが伝えることによって、思わ

ず家庭で、そして会社でクスツとしてしまう。「あの9歳の子、かわいかったよね」という話題であれば、べつにフィギュア・ファンでなくても話しができますよね。あるいは、先ほど言った「僕の名はっていう、あれくだらねえな」って、「My name is KEIだつてよ」っていうそういう話しですとか、今人気がある「RADWIMPS」という、若い方は知っていると思いますけど、そういう方々の曲を聞きながら、「そういえば、あさちゃん!ってああいうのをやっていたね」とか。

そういうちょっとしたフックになる、くだらないものを皆さんの家庭の中でもお話しいただけたりすれば、よりまたスポーツの裾野というのが広がっていくのではないのかなということをつくづく最近感じている次第です。

「もうそろそろやめろ」って顔をしていますね。厳しいんですよ、明治大学の方々は。。。私、さっきも言いました、毎朝2時半に起きて仕事をして、朝5時25分から番組に出て8時までです。その後、大体他の番組の収録があるわけです。さっき何やっているというのを説明しましたが、取材に年間300回ぐらい行ったりですか、地方、あと海外も行ったりしますが、そういう生活をしている中で、とにかく今日のパワポの資料も早くよこせ、早くよこせと言って、せかしてくるわけです。もう、今日送ってやりましたよ。ギリギリ間に合ったなど、自分の中でも良かったなと思っはいます。。。。

そんなこんなで、今、第1部を話させていただきましたが、第2部もごぞいます。質疑応答は今なしのほうがいいですね!? なしがいい!はい、ということで、第1部「伝える、伝わる」ということで皆さんにお話しをさせていただきましたが、私が言っている意味、たぶん飛び飛

びで理解していただいているのではないかと思います。第2部はより具体的な、いろんな選手たちの写真も交えながらお話しをさせていただきますので、どうぞ皆さんよろしくお願います。ありがとうございました。

○司会：ありがとうございました。もしかすると、まだ3時間ぐらいここから必要なのではないかと思います。

いろいろお話しいただいて、ジャーナリズムというのか、とりわけスポーツジャーナリズムということの思い、その真髓といったところについて、だいぶお話しをしていただけたのではないかと思います。

石井アナウンサーにエールというのか、お願いというのか、聞いていて感じたことを、ぜひひとつ。

○石井：はい。

○司会：明治の卒業生だからというわけじゃないですけども、水谷君を取り上げてもらって、ありがとうございました。そのインタビューで、「どう？」と言いついて、「メダルを取るのが使命です」と。これはたぶん彼の本心、心からの声だったと思いますね。ちゃんと本人の思っていることを引き出すようなインタビューでした。これがスポーツジャーナリズムではないでしょうか。いわゆるアスリートファーストなインタビューです。

しかし、リオオリンピック、私もテレビで見えていました。確か水泳だったと思いますが、とあるインタビューアールが、レースが終わった直後の選手にインタビューをしていた場面をみました。終わったばかりだし、次のこともあまりそんなに考えられない状況の中で、次のレースに向けてのコメントをインタビューアールが求め

てきて、決してそんなことを言いたいわけではないのに、完全に誘導し、それを言わなければこのインタビューが終わらない、と感じてしまうぐらい強引に誘導し、最終的に、「金メダルを取ります」って言わせたんですね。

○石井：なるほど。

○司会：たぶんそれは、本人が本当に言いたかったことではなく、インタビューアールが言わせただけだったと思うんですね。私、スポーツ選手のメンタルのサポートをしているので、そこでちょっと違和感を感じたわけです。

○石井：そうですね、専門ですから、先生は。

○司会：それが何かといいますと、「かき乱すなよ」ということです。

○石井：「かき乱すなよ」と。厳しいですね。

○司会：蹴りでも入れたくなる気持ちになりました。その言葉を引き出させたということで、インタビューアールの中ではもう「インタビューアールの仕事した」って、「視聴者が聞きたい言葉を言わせた」と、たぶん思っているんじゃないかなと思うわけです。しかし実際は、「引き出した」のではなく、「言わせた」に過ぎないのではないかと思います。それは、決して選手の本心ではないわけです。先ほどの水谷選手に対するアスリートファーストなインタビューに対し、明らかに、メディアファーストでしかないインタビューだったということです。今日の石井アナウンサーの話の中でも、それが極めつけかもしれませんが、恐らくそれがつまらない番組の根幹というか、そんな気がします。そしてそういうことが、選手の心を乱し、決して好結果につながるものとは思えない、つまり、「メンタル的にマイナスなことをしてくれるな」、ということです。

○石井：そうですね。

○司会：なので、ぜひ選手の生の声というか、本当に思っていることを引き出すという、まさに今石井アナウンサーの中で一番大事にしていることをより大事にしていってもらって、日本のスポーツジャーナリズムを、もっとまともなものというか、そういうものを目指して行って欲しいですね。

○石井：そうですね。

○司会：ぜひ！ たぶん今はまだ、石井アナウンサーが、日本の中ではちょっと先を行き過ぎていて、まだメディア業界のほうが、ついてきてない可能性があるかもしれませんが、ぜひ風穴を開けてもらって、いいものが皆さんに伝わるようにぜひぜひ突っ走ってもらいたいですね。

○石井：はい。田中先生に蹴り上げられないように気を付けます。

○司会：大丈夫です。実際に蹴れるほど私は強くはありません。

○石井：そうですね(笑)、分かりました。ありがとうございます。すみません。

○司会：いえいえ。

さて、質疑応答の時間を考えていたんですが、第1部終了の時間もきてしまいましたので、いったん休憩を挟み、第2部をやりまして、その後に時間がもしあるのであれば、第1部の内容と併せて質疑応答の時間を設けたいと思います。

休憩は、10分ほどよろしいですかね。右側に時計がありますけど、51分ぐらいから第2部をスタートしたいと思います。トイレはこちらか、もし混んでいるようであれば4階のほうをお使ください。では10分後、再開したいと思います。

○石井：皆さん戻ってきてくださいね。このまま帰っちゃうというパターンもありますからね。また後ほどお会いできることを楽しみにしています。ありがとうございました。

第二部 講演 「言葉とスポーツ」

石井 大裕 氏 (TBS アナウンサー)

○田中：時間になりましたので、早速ですが、第2部の「言葉とスポーツ」を始めていきたいと思います。もしかすると時間を超えるかもしれませんが、1時間ぐらいい目安でお願いしたいと思います。それでは、石井アナウンサー、よろしくをお願いします。

(拍手)

○石井：皆さん、戻ってきていただきまして良かったです。ありがとうございます。

1時間と限定されて、時間を守れよというプレッシャーにも感じるわけですが、今からお話しさせていただきますのは「言葉とスポーツ」となります。先ほどまでは、テレビのメディアとはどういうものか、そして伝える、伝わるということでしたが、ここからはやや実践編として「スポーツと言葉」について進めていきたいと思います。

こちらが放送の写真になります。上は番長ですね。三浦大輔投手。この間まさに引退をしたばかりですが、この三浦投手を取材しているところなんです。気持ちとしてどうしてもこうなっちゃうんです。応援ですね。なので取材、応援、放送というのが、私がしていることということでまとめてみました。

この応援をしているアナウンサーというのはなかなかないですけど、やっぱりファンの方々の気持ちを思うと、どうしても同じ気持ちになってしまいます。ということで、こういうことをしているわけです。

こちらはちょっと真剣な表情をしていますけど、ニューヨークですね。ニューヨークで取材を終えて、今から生中継をしようという状況です。これはたしか、「NEWS23」のための生中継だったかと思います。

ということで、ここからお話ししていくのは、「スポーツと言葉」です。私はいろいろなアスリートとお会いしていくわけですが、一番心に刺さる言葉をお話しくださるのがこの方です。井村雅代コーチです。ご存じですか。「うん、うん」と。

はっきり言って、練習なんかを見にいくと大変ですよ。怒声というか、怒鳴り声というか、この方は66歳なんですよ。ものすごく元気です。東京オリンピックの時は70歳になれるけど、たぶん変わっていないんだろうなと思います。

この井村コーチは、こんな笑顔でピースしてくれていますが、日々12時間ぐらいいです、水の中の練習は。残り5時間ぐらいいは、たぶんウェイトトレーニングをして、残りの6、7時間は寝るみたいな、飯を作っているんだ、みたいな感じになっています。でも、それぐらいいの合宿を毎日、シンクロナイズドスイミングの選手たちはやっているわけです。

リオデジャネイロ・オリンピックでは、「お家芸復活」なんていう言葉もありましたけど、日本は見事に2つのメダルを取りました。デュエット、三井（梨紗子）選手と乾（友紀子）選

手。そしてもう1つがチームですね。チームでも銅メダルを獲得しました。

この井村さんは、何といえますか、たいへん厳しい言葉を言うんです。「でぶ！」とかも普通に言います。これは今の指導者が、学校でやったら大変でしょうね。即、クビだと思います。昨今、学校で少しでも何か悪い言葉を言ったりしたならば、部活ですとか問題になりますが、井村さんはそういうのは関係ないんですね。

でもそれでも、なぜ彼女がこうやって日本代表を率えられるか。それは単純です。誰よりも選手のことを思っているからです。この1つに限ります。私は井村先生からいろいろな言葉をかけられました。この間も、リオデジャネイロ・オリンピックに行くときに、はっきり言って最悪でした。成田空港で、リオに行くに当たって同じ便だったんです。最悪でしたよ。

なぜ最悪かという、井村コーチは当然選手に対して厳しいですけど、我々メディアに対しても厳しいです。特に私は、日ごろから取材にも行かせていただいていますから、大変お世話になっていまして、よく知っている。

最初に言われた言葉、「あんた、覚悟を持って来たの！」って、一言言われたんです。「はい」としか言えませんでしたね。「持っています」と。「持ってきました、たぶん」というぐらいですけど、ほんとにそういう一言を言われまして、これはもう背筋が……。リオまで飛行機で大体30時間ぐらいかかります。ニューヨークまで14時間で、そこから乗り換えて、また12時間か13時間かかります。私はずっと背筋がピンとしていました。それぐらい緊張感のある方です。普段お話しさせていただくと、ほんとにおおらかな、心が広い、肝っ玉母ちゃんという感じなんですけどね。

私がこのリオで井村コーチから言われて、一番感動したというか、さすがだなと思ったのがあります。その言葉というのは、スポーツの素晴らしさについて聞いたときですね。デュエットでも銅、そしてチームでも銅を取って終わりました。競技が終わった後に聞いた言葉です。

「井村コーチ、これで日本は『お家芸復活』と言われます。今の気持ち、聞かせてください」。

この一言で、井村コーチはこう言いました。「あんたね、スポーツの素晴らしさって何か知っている。限界をつくらないことよ」と。こう一言言われたんです。コーチに「どういうことですか」と聞くと、「銅メダルを取ったでしょう。そうしたら、次は銀メダルよ。銀メダルを取ったら金メダル。金メダルを取ったら世界記録。そうしたら、さらにその上」。

終わった日ですよ。井村コーチは終わって、オリンピックを終えて、銅メダルを取って、選手たちが泣いているその横で、僕にこう言ったんです。表彰式が終わってから2分ぐらいしかたっていないですよ。この人はもう次を見ている。もう限界をつくらないということ。自分自身の中で体現しているというわけです。

私はこの言葉を聞いたときに身体が震えました。これがスポーツの素晴らしさかと。これがオリンピックの凄さかと。井村先生が仰った「限界をつくらない」という言葉は、小さいころから何度も、松岡修造さんをはじめ、いろいろなコーチに言われていました。それこそ、メンタルの田中先生にも言われていました。「限界をつくるなよ」。

でも、それを本当に体現されている方だなと思いました。オリンピックでメダルを取ってお家芸復活と言われて、この人は嬉しくないのか。たぶん嬉しいんでしょう。でも凜としたその姿

で、その言葉を聞いたときに、私も2020年に向けてアナウンサーとしてしっかりやらなきゃと、行きの飛行機ではなかった覚悟をやっとここで持つことができた次第でした。

でもそう考えますと、井村先生というのは非常に面白くて、まずデュエットという2人でやる演目が終わって、これは銅メダルを獲得したんです。これもかなりすごいというか、日本のお家芸復活ということだったんですが、このときも、井村先生は嬉しくて、とにかく涙を流して喜んでる姿というのが実はあったんですね。

私は近くに行って、「井村先生、良かったですね」とハグをして、「ほんとにありがとう」なんていうやりとりがちよっとありました。「いやあ、ほんとに選手を褒めてあげたい」「何て褒めてあげるんですか」と、そうしたら、ピタッと止まって、現場が一瞬凍り付きました。「あんた、何言ってるの！」って、私は言われました。「これからも練習よ」と言われました。「え？」「これからチームの演目があるでしょう」と言われて。「いや、泣いていたじゃないですか、井村先生」と。「そんなの、涙じゃないわ！」と言って、行っちゃいました……。

でも、やっぱりその切り替えの速さ。チームは2日後にあるんで、終わった日ぐらいは選手のことを褒めてあげるのかと思ったら、一言も褒めず、次にいきました。でも、それもこれも全て選手を褒めたくないわけじゃないんです。選手により高いところから世界を見てもらいたい、井村先生はそう考えているみたいです。

どういうことかといいますと、メダルを取るという次のステップがあります。次の頂きからまた景色が違うのよ。それを見てもらいたんだ」と、井村先生は言っていました。やはりそれだけ、選手のことを考えているからこそ、66

歳になった今、声を張り上げて、指導されているわけです。私はこうやってマイクを使っていますよね。水泳のシンクロの練習って、当然、大きな音楽が流れて、選手たちみんながそれに合わせて演技をしているわけなんですけど、井村先生はマイクを使いません。マイクをどういう状態にしているかということ、こういう状態で怒鳴っています。意味ないじゃないですか。

でも、熱くなって気持ちが入ってくると、マイクがどんどん離れていってしまう。喉はもうガラガラです。その中で毎日12時間叫び続けて、選手たちを叱咤激励しながら引っ張っていくという、このエネルギーを見てしまうと、自分自身も、取材をするほうもしっかりしなきゃいけないなというふうに思っています。

こんな井村先生は大阪人ですし、非常に厳しい言葉をかけるんですけど、言葉を換えればとにかく愛がある。それだからこそ、普通の学校だったらたぶん問題になるような言葉を言っても、選手たちも「井村先生が仰るんだから、私たちは頑張る」。嬉しかったですね。チームでメダルを取った8人のメンバー全員が終わった後、井村先生にメダルをかけたんです。これは先生のためのメダルですと。

そのとき、井村先生はまた涙を隠しながら流していらっしゃる姿がありました。これを見ると、選手たちの信頼、そしてこれから先に行くぞと、また次の山から新しい景色を見たいんだなという選手たちの気持ちも伝わってきました。井村先生は非常に素晴らしい指導者だなというふうに思っております。

こちらは今回のリオデジャネイロ・オリンピックで最初にメダルを取った方々です。メダルを取り過ぎちゃって、誰が一番最初に取ったんだろうって思っていらっしゃる方もいるかもしれ

ませんが、このお二人なんですね。初日に取ったのが、柔道の60キロ級、高藤（直寿）選手、そしてもう1人が近藤（亜美）選手です。この2人が銅メダルを獲得しました。ここから日本のメダルラッシュが始まっていくわけです。

私はこれを取り上げました。近藤選手は非常にいい柔道をして、ご家族も、小さいころからお父さまが柔道を教えていらっしゃって、近藤選手はお父さまに育てられるわけなんです、たいへん素晴らしい柔道を見ました。

この右側の高藤選手。この選手に話を伺ったときです。2年前のアジア大会からずっと取材をさせてもらっていたんですが、この高藤選手というのは、奥さんがとにかく怖い、とにかく普通じゃないぐらいに怖いです。

この奥さんは、インターハイで2連覇していて、とにかく柔道家としても有名な方でしたが、結婚されて高藤選手と日々過ごしていらっしゃいます。

やっぱりスポーツというのは、今、言いました。近藤選手もお父さまが柔道家でいらっしゃって、非常に教育熱心で、柔道をやられていた。いろいろなスポーツ選手たちも、パパで有名な人たちは結構いますよね、横峯さくらパパとか、宮里藍ちゃんのゴルフのお父さんもそうですし、野球でもイチロー選手のパパとか、いろいろな方々がいらっしゃって、そのお父さんが指導してくるケースが多いということと、あとは奥さまの支えがあったということですね。

スポーツというのは、私自身もそうでしたが、とにかくお金もかかりますし、いろいろな面でサポートが必要になってきます。そういう意味では、ご家族の支えというのが大きいんです。

でも、この高藤選手に関しては新しいタイプだと思います。奥さんがとにかく怖い。高藤選

手は、早いラウンドで負けちゃうんですね。そこから敗者復活戦で勝ち上がって行って、銅メダルまでたどり着くわけですけども、柔道というのは1回負けても、もう1回勝っていくと、組み合わせによってメダルまでたどり着くことができるんですね。その負けた後に高藤選手、「あんだ、何やってんの！」って、奥さんにめちゃくちゃ怒られたそうです。

メダルを取った後に、銅メダルを掲げて、奥さんのもとに行きました。そのときに奥さんに言われた一言は、「あんだ、何ミスってんのよ！」と怒られたそうです。でも、この奥さんの支えのことを、高藤選手は「いつも感謝しています。奥さんあつての僕なんで」「僕が馬鹿なんで」と、ずっと言い続けます。「いや、でも奥さんね、かなり厳しくて大変でしょう」「いやいや、僕が馬鹿なだけです」。高藤さんはずっと言い切ります。

その中で、奥さんと出会っていなければ、この銅メダルは獲得することはできなかったということもはっきりと仰っていました。とにかく、ご家族の注目も、今回のリオデジャネイロ・オリンピックではあったと思います。その中でも高藤選手は、この奥さまの言葉によって銅メダルを獲得できたという選手でありますね。

女子選手の中では、例えばバレーボールの荒木（絵里香）選手は、前回のロンドンで銅メダルを取りました。この荒木選手のご主人というのは、7人制ラグビーの日本を代表するような選手だったんですが、ご結婚されて4年ぶりに日本代表に返り咲いて、荒木選手はオリンピックにも出られたわけです。

荒木選手のご主人というのは先ほどの高藤選手の奥様とは真逆ですね。めちゃくちゃ優しいです。とにかく奥さまのことをサポートして、

奥さまの栄養管理までされています。奥さまが選手としてバレーボールの代表にまた返り咲いても、毎日応援にいらっしゃっているほどです。

自分のお仕事をしながらも、奥さまの試合の応援に行ってお手伝いするというタイプもいれば、このように逆ですね。高藤選手の奥さんのように厳しく厳しく見守っていくという、そういうスタイルもあるんだなということを見せていただくというシーンがありました。そんなことで、非常に明るくて面白い選手ですね。

こちらは吉田沙保里選手です。仁川のアジア大会のときに金メダルを獲得したときの写真で、先ほど上がっていましたね。吉田沙保里選手が涙した瞬間、そして、銀メダルだった瞬間が非常に心に残っているという方もいらっしゃいました。

吉田選手の4回目のオリンピックは、テレビでご覧になったという方はいらっしゃいますか!? どうですか!? 銀メダルの瞬間をご覧になりましたか。ご覧になった!? まだ手を挙げないでください。

皆さんはご覧になって、かなり感動したと仰っていましたが、なぜこの吉田選手の言葉に「ごめんなさい」という言葉が出たと思われますか。メダルを取ったのに「ごめんなさい」ですよ。柔道ですとよくありますよね。日本のお家芸といわれているもので、なかなかメダルが取れない時期があって、メダルを取ったにもかかわらず、金メダルじゃないから「すみません」と、選手が謝っているシーンもあり、いろんなニュースだと、「なんで謝るの」なんていう見出しになったりしていました。

このレスリングにおいて、吉田沙保里選手がなぜ謝ったのか、誰に謝ったのか。ご存じの方はいらっしゃいますでしょうか!

当然、日本のレスリングファンの皆さんにも謝っていますし、日本の皆さんにもキャプテンとしてやったのに、謝っている。そんな中、先日またいろいろとお話しをさせていただきながら、いろいろと伺いました。

面白いのが、レスリングを始めたのは、お父さまがきっかけですね。栄勝さんです。残念ながら、おとしお亡くなりになれましたが、栄勝さんが開いた小さい道場で、彼女も3歳からずっとレスリングを始めるということになりました。もともと最初は、レスリングは女の子がやるようなスポーツじゃないということや、彼女はやりたくないという期間もあったりした中で、勝って、勝って、そして男の子を倒したり、骨折しながらも県大会に優勝したりするなど、そういうジュニアの成績を積み重ねていく中で、レスリングの魅力にとりつかれていったという選手なんですね。

皆さんもご存じのように、オリンピックで3連覇して金メダルを取って、国民栄誉賞まで取って、日本中で誰もが知る存在になったわけです。

その中での今回のオリンピックです。私は見えていましたが、会場の中はすごかったですよ。

ブラジルというのは柔術、柔道ですとか、あるいは格闘技、ヒクソン・グレイシーとかね。ご存じの方がいるかもしれないですけど、グレイシー一族なんていうのもブラジルにはあって、レスリングと柔道の人気もものすごいんですね。

会場中が地鳴りのような。ブラジル人は出ていないのに盛り上がりちゃうわけです。あのブラジル国民の国民性というのは、羨ましい反面、あんまりまねしたくないという部分もあるわけです。足を踏み鳴らして、とにかくうるさいんですね。

吉田選手に伺ったら、日本のファンの皆さん

もたくさん会場に来ていただいていたのですが、「頑張れー！」とか、「こっからだあ！」とかいう、あの声援がやっていて聞こえなかったことはないと言っていました。北京でも、ロンドンでも、聞こえていたと。

試合をやっている最中に「頑張れ」という声が聞こえて、よし、頑張るぞとなったらしいんですが、今回は会場がうるさすぎて、全く声が聞こえなかったというわけです。私も声を枯らしながら応援していたのに、それが届いていなかったんだと思うと、ちょっとショックではありました。でも、それだけ会場中が盛り上がる雰囲気の中だったわけです。彼女は決勝戦で会場の雰囲気にのまれてしまったということでした。最後、もう1回いこうとするんだけど身体が動かない、自分の攻めのタックルがなかなかできなかった、というわけです。

これについて、最初に出た言葉が、あの「ごめんなさい」だったわけです。実は、小さいころからお父さんに、どんなときでも攻撃的なレスリング、タックルにいけて言われたことを守れなかった、というわけだったんですね。天国のお父さんに対して、怒られると思ったんですって。それはお父さまがお亡くなりになっているとか、そういうことは一切忘れていて、ご家族のところに行ったときに、お父さんに怒られる、ごめんなさいと、彼女は最初にそう思ったそうです。

でも、やっぱりそれだけ小さいころからお父さまから受けていた教育。「猛タックルにいけ」「諦めるな」ということが守れなかったということが、本人は相当悔しかったという話をされていました。

実は、お話しをしていいのか、悪いのか。ここだけにしておいてくださいね。たぶんまだメ

ディアに出ていない情報だと思うんですが、もうそろそろ解禁していいと思います。

実は、吉田選手の応援に、吉田選手のお兄さまがいらしたわけです。お兄さまというのは、お父さまの栄勝さんがやられていたレスリング道場を引き継いで、レスリングのコーチをやられています。お母さまがいらっしゃって、あとは応援隊がいらしていたという状況です。

実は、お母さまが準決勝までお父さまの遺影を掲げていらっしゃったということを知っていました。お父さまの力を借りて、吉田選手は決勝まで進むことができた。お父さまの遺影を持つお母さまの姿もテレビにも映っていました。

そして、決勝戦。お父さまの遺影の姿はテレビに映っていないんです。私はモニターも確認してまして、あれ？ お父さまの姿が映っていないなと思っていたんです。気になったんで、お母さまとお兄さまに聞いてみたんですね。

実は、準決勝が終わった後、2時間ぐらい空いていて、選手たちはお食事をしたりですとか、応援に来てくださっている方たちは自分たちのホテルに戻ったりですとか、その2時間を有意義に過ごされるわけです。

お兄さまが遺影をホテルに忘れてきちゃったみたいでした。お兄さまとお母さまは相当焦ったようですが、決勝戦は始まっちゃうので、しょうがない、応援しようということで切り替えて、全力で応援をされたというエピソードがありました。

遺影を持っていらっしやらなかったのが、またテレビがうまいなと思ったのが、中継が終わってどこかの局のスポーツニュースを見ましたが、決勝戦でも遺影を持っているようにニュースをやっているんですよ。日本テレビとかどっかですけどもね。どう考えても、準決勝

の絵を使っています。観客の絵だけね。そうするのはやっちゃいけないと思うんですが、どこの局か分かりませんが、やっていました。

とにかくそういうハプニングがあったそうで、お兄さまにそれを聞いたら、いや、石井さん、違うんですと。たぶんお父さんも、沙保里が負ける姿は見たくなかったんじゃないかと仰っていましたけど、ちょっとうまいことを仰っていましたけどもね。単純に忘れてただけだって、後で告白してくださいましたけれども、これはあんまりほかの人に言わないようお願いいたします。

裏話としてそういう話もありましたが、吉田選手とはとにかくすごいですよね。霊長類最強なんていわれますが、普段はバラエティー番組とかにも出演されたりしていて、非常に楽しい、明るい、素敵な女性でいらっしゃいます。

彼女の本当にすごいところというのは、とにかく後輩に慕われている、ということです。今回、レスリングにおいて、女子レスリングは金メダルをたくさん取りました。至学館大学という大学にみんな通われているわけです。卒業生の伊調馨選手は、4連覇ということで、史上初の大快挙を達成されました。あるいは川井（梨紗子）選手、登坂絵莉選手、土性沙羅選手、この4人の選手が見事にオリンピックで金メダルを獲得したわけですが、全員が全員、「この金メダルは吉田沙保里選手のおかげです」と言うんです。決して栄（和人）監督のおかげですとは言わないんです。

栄さんは前に出過ぎちゃって、担がれて喜んでいましたけど、とにかくみんながみんな、それだけ吉田選手を慕っているというのは素晴らしいなと思いました。

吉田選手にそのことを聞いても、「いや、そ

んなこと、ないです。私は普通に後輩たちと接しているだけです」と言うんです。普段の練習にいても、吉田沙保里選手はもう34歳です。年齢も上ですけど、大学でまだ練習されていて。大学1年生から4年生がいますが、そのほかにも高校1年生から3年生が同じように練習をしているんですね。選手たち全員の名前も当然覚えて、全員とコミュニケーションを取っている。この姿を見ると、自分のためだけじゃなく、こんなにレスリングをやっている人というのはいないのではないかと思うわけです。

自分のための練習とは思えないぐらい、他人にアドバイスをしながら、自分もトップを目指してやっている。だからこそ、ほかの選手たちがついてきますし、みんなが吉田選手のおかげだとはっきりと語るというところなんですかね。

でも、実は試合が始まる前ですけど、吉田選手からは試合当日もLINEでいろいろと連絡をいただきました。「緊張している。怖い」と言っていました。1試合終わるごとに、我々記者たちがいる前を歩いていくんですが、1試合終わるごとに「いや、やばい。怖い。どうしよう」と一言ずつ言って、通り過ぎていくわけです。

でも、準決勝が終わったときに、これでメダルは確定ですね。準決勝に勝って、決勝進出が決まっていますから、金か銀しかないわけです。だから、私の前に来たときに、「やっと怖くなくなってきた」と一言だけ言って去っていったんです。

その2時間後に決勝戦があって、敗れてしまうんですが、でも初めて怖くない自分で戦えている決勝戦というのは、私は吉田選手の思い切ったというか、そのレスリングを見ることが少してきたかなと思います。オリンピック前は本当にけがが多くて、「どうしよう、どうしよう」、

という状況から、「決勝戦だけは初めて少し楽しめた」ということも言っていましたから、そういう意味では、また東京オリンピックに向けて、現役続行なんていう記事も出ていましたけれども、私が取材するところによりますと、まだ続行ということは決めていないと言っていました。それは先々週ぐらいの話なので、確かな情報だと思いますが、そういうことを仰っていましたから、これから4年後は一体どうなるかと思います。

今回のオリンピックを通して私が感じたことは、これほどまでに次のオリンピックについて選手たちが聞かれることはないということです。なぜならば、4年後、東京ですが、と、全員が聞きたいことであるからです。

これは選手たちに聞いても、いやあ、どうしよう、どうしようとも迷いもある選手も当然います。年齢も34歳、吉田選手の場合がそうです。ほかの選手もそうです。

面白い話しがあって、あるオリンピック選手に話しを聞いたところ、4年間頑張ってきて、ロンドンからやってメダルを取って、気持ちとしては今が一番ピーク。世界の頂点に立った。そこからまた、あと4年間どうするってなったときに、これが例えば、あと5年間ある。「5年後がオリンピックです」と言われたら、「絶対やらないと思う」って、みんなが言うんです。「5年間ではやらないと思う」と。

じゃあ、「3年間だったら、どうですか」と聞くと、例えば、「東京オリンピックまで3年間です」と、今言われたらどうですか、と。すると、「やると思います」、でも、「4年間はどうですか」と聞くと、「いやあ、4年間ですか・・・。」「微妙です」と、みんな、ここで微妙になってくるんですね。「やっぱりオリンピックってうまくで

きていますね」と、みんなが仰るんです。「この4年というのが妙なんです、これがすごく難しいところなんです」と、みんなが口を揃えて話しをしていました。

テニスに置き換えますと、4年間世界ランキング1位を守り続けた男というのはいません。そして、トップで君臨し続けることというのは当然、世界記録に置き換えても、水泳でも世界記録というのはどんどん出てきますし、体操でも新しい技が、3回半ひねりみたいなものが、白井健三選手がやりましたけれども、ああいうものが出てきたりとかするわけです。

スポーツというのは道具もどんどん進化します。卓球台も日本製になったということで、今回は日本人が有利だったなんて言われていますが、実は、今回は日本で作られた卓球台だったんですよ。そういう道具も変わったりですとかしますから、選手たちが4年間やるというのはすごく難しい、そんな話しを聞きました。

でも唯一、先月私が取材に行ったところで、それを覆す一言を言ってくれた、初めて出会った人がいたんです。それがソフトボールの上野（由岐子）選手です。覚えていらっしゃるでしょうか、上野の413球って。北京オリンピックで413球を1人で投げきって、見事に金メダルを獲得しました。

ソフトボールは北京オリンピックが最後で、その後ロンドン、リオとなくて、また4年後の東京オリンピックで野球・ソフトボールと1つになりまして、競技として戻ってくるということになりました。それを記念してというか、上野選手にお話しを伺いに行ったんですが、あの選手はすごいですね。今、34歳です。それこそ北島康介選手と吉田沙保里選手と同じ年ですけど、上野選手が何と言ったかお分かりになりま

すか!?

「2020年、東京オリンピックがありますけど、どうですか。やっとまた戻ってきて、北京から何年待ちましたか、8年待ちましたよ。どうですか、このオリンピック、4年後迎えることになり、東京オリンピックになりまして」と言ったら、上野選手は「私にとって東京オリンピックは通過点にすぎません」と言っていました。この一言には度肝を抜かれました。

東京オリンピックを「通過点」と言う30代がいる!?……と。これは新しい、というか、やはり世界の野上だと思いました。東京オリンピックというのは、いわゆる日本人にとって、我々もそうですが、今、いろいろな団体が東京オリンピックをやることに関してもめたりしてはいますが、この一言をみんなに聞いていただきたいです。「東京オリンピックは通過点にすぎません」。いろいろなもめ事がありますけども、こういうふうにはっきりと言っている方がいるわけなんですね。

なぜ、そんなことが言えるかという、東京オリンピックで終わっていたら、日本のスポーツは発展しませんと、はっきりと言われるわけです。でも、彼女は金メダルを取って、それだけじゃなくて、それまでの日本のソフトボールを弱い時代からずっと1人で積み上げてきて、いまだに日本のエースです。1人だけ全く違うレベルの、それこそ少年野球とメジャーリーガーぐらい違うレベルで1人だけ戦っている選手です。

その上野選手がはっきりと私にそう言ってくれて、私はその時もすごい言葉に出合ったなと思いました。今日は「スポーツと言葉」ということでお話ししていますが、すごい言葉に出合ったなというふうに感じました。

でも、それだけ彼女が見ているところというのは、日本のスポーツの発展だったりとか、彼女が経験してきた辛い時期もあった、そしてソフトボール選手にとっては、このオリンピックというものがすべてと言ってもいいわけです。その中で、北京が終わってから何もない4年間、そしてまた4年間、そしてまた4年間と、12年間1人で耐え続け、支え続けていける彼女ならではの一言だなと思いました。吉田沙保里選手と同じ年ということで続いてお話しをしました。

この方々は“タカマツ”ペア（高橋礼華、松友美佐紀）ですね。バドミントン。決勝戦、見たよという方はいらっしゃいますか!?. 見ましたか。全部見えていますね。

（「大体」との声）

大体見ている。ありがとうございます。

“タカマツ”ペアの試合は見ましたか。“タカマツ”ペアは知らない？ 金メダルを取った方々なんですけどもね。非常にクールなお二人で、高校時代から先輩、後輩でダブルスを組み続けていて、高校時代に立てた夢が「世界一になること」ということで、もう1つが「オリンピックで金メダルを取ること」。

去年のうちに世界一というランキングは達成したんですが、プレッシャーがある中で迎えたりオデジャネイロ・オリンピックで見事に金メダルを取るわけです。何よりも感動させてもらった、決勝戦でデンマークの選手を相手に大逆転勝利を収めるという選手2人です。

この2人というのがまた面白くて、皆さんから見て右側の選手が松友（美佐紀）さんという、ちょっと天然キャラなんですけど、忘れ物がすごく多いということで、例えば携帯電話とかをすぐなくしちゃうとか、お財布をレストランの机に起きっぱなしで帰っちゃうとか、いろんな

ことがあります。左側がしっかりものの先輩ですね、高橋（礼華）選手です。

これで“タカマツ”ペアなんて呼んでいるわけですけど。この“タカマツ”ペアは、このリオデジャネイロ・オリンピックにおいて、実は一番金メダルに近いと言われていた選手たちなんです。それは世界的に見ても、このバドミントンという競技で、間違いなく金メダルを取らうと言われていた選手たちです。

その重圧というのはほんとに生半可なものではございません。その“タカマツ”ペアは、試合前に話を聞いても、「私たちは金メダルを取るために、ここに来ました」と、はっきりと自分たちも言う。普通であれば、そういうふうに言われているのかとか、先ほど、田中先生が蹴り上げると言っていた、メディアの人に無理やり金メダルという言葉が言われているアスリートがいたなんて仰いましたけど、でもそういうものなのかなと思う部分があるんですが、彼女たちは本気で金メダルしか見ていませんでした。そして見事に金メダルを取った。

でも、そのために彼女たちがしてきたことというのが、ずっと取材をする中で分かるんですが、この4年間、5年間、むしろそれしか見えないということがすごく分かるシーンというのが実は何度もあったんです。

“タカマツ”ペアは世界ランキングがトップです。にもかかわらず、日本でのバドミントンの全国大会では何度か負けているんです。世界一のペアですよ。日本の大会で負けているんです。これははっきり言って、あり得ないじゃないですか。

日本一じゃないのに、日本の大会で負けているにもかかわらず、世界一になった人、なんてそうそういるわけではありません。例えばイチ

ロー選手は、日本でも結果を出したから、当然メジャーリーグに行っても結果を出せる。日本で全く結果を出さない高校球児、そしてプロになって二軍暮らしの人が突然メジャーに行ったところで、結果を出せるわけがありません。

でも、“タカマツ”ペアは日本の大会では負けているんです。でも世界ランキングは1位になった。金メダルも取っている。これはなぜかという、日本での戦い方と、海外での戦い方、世界での勝ち方というのは違うんです。だから、私たちは日本で負けたところで、はっきり言って動じないんです。日本の選手たちに勝つやり方というのはまた違うんです。でも、それを日本でやっていたら、私たちの夢である世界ではチャンピオンになることはできない。4年間、こうはっきりと言いつけていたんですね。

普通だったら、逃げだしたくなりますよね。日本で負けて、みんなメディアに何負けているんだ。世界一になりたいんだらう、と言われていてもかかわらずです。はっきり言うと、会社というならば、平社員がミスを連発し、上司から怒られまくっているにもかかわらず、僕は社長になりたいですとずっと言い続けているのと同じですから。おまえ、馬鹿か、ちゃんと少しずつ、1個ずつステップを登っていけよ、というのと全く同じ状況だと捉えられがちにもかかわらず、私は日本で勝つためにやっているんじゃない。世界で勝つためにやる。

でも、こういうアスリートは非常に増えてきました。日本で勝つためにやるのではなくて、世界で勝つためにやる。

サッカー選手でいいますと、日本のJリーグでいろいろな経験を積み、海外に渡るとい選手もいますが、テニスでいうと、錦織選手が中学校1年生ですぐにアメリカに渡ってしまう。そ

して世界で揉まれて、世界が自分にとっての常識になるというケースは最近よく見るケースでもありますね。

錦織圭選手でいいますと、自分の中で、これが世界で戦うためには必要なことだというふうに思い続けることが成長させることになる、という言葉も言っていました、「タカマツ」ペアは、まさにそれを自分たちで体現して、金メダルを獲得したということになりました。

私もだいぶしゃべり倒してきましたけれども、眠くなってきていると思いますので、いろいろと伺いたいと思うのですが、よろしいですか。オリンピックの中で選手が言った言葉で、何か感動した部分とか、これ、心に残っているよということってありましたか!?

○男性：柔道の**大野**（将平）選手が、畳の上で一切喜ばないで。

○石井：大野が。

素晴らしい。私はほんとに嬉しいですよ。涙が出そうになってきました。ほんとにそうなんです。大野選手というのは、一言で言うと、侍ですね。彼は井上康生監督をとにかくリスペクトして、よく見えていますね。はっきり言ってマニアですか。

柔道をやっているんですか。

○男性：柔道は好きです。

○石井：好きなんです。でも、ほんとに素晴らしいところを見ていらっやいますね。

井上康生監督をリスペクトし過ぎて、柔道代表の中で、大野選手だけです。井上ジャパンと呼ぶんです。井上康生監督のチームだと。「井上ジャパンのために金メダルを取ります」と、彼だけが言うんです。誰1人として、メディアも井上ジャパンなんていう単語を使ったことがな

いですけど。

侍ジャパンとか、ハリル・ジャパンとか、サッカーではよくあるんですけど、井上康生監督をリスペクトして、井上ジャパンと1人だけが言う。彼は本当に柔道場に出るまで、一度も笑顔をつくらないですね。下に降りるまでですね。

私は、これについてインタビューして話を聞きました。「自分は美しい柔道を世界に広げたい。その美しい部分がやはり『礼に始まり、礼に終わる』。これです」と一言、僕に言ってくれました。

この言葉というのは、「美しい柔道」。とにかく日本のサポーターですとか、応援にいらっやる方というのは、スタジアムを全く汚さないですね。試合が終わって、ほかの国のサポーターが帰るとすごいですよ、カモメが。すごい量の鳥が来ます。なぜならば、皆さんが食べ残しとか、ピーナッツとかを下に捨てて帰りますから、カモメやら、ハトやらがスタジアムの観客席に大量に来るんです。

でも、日本のお客さんたちが見た後は鳥が全く来ないんです。僕らは取材が終わり、ファンの方たちが帰って、まだ何時間もそこで取材を続けているのでよく見るシーンなんですけど、日本代表の試合の後は鳥がほとんど来ないですね。だから、それだけ日本のファンというのはきれいにスタジアムを使う。これは美しいと。日本の美しさの1つであると、私は思うわけです。

選手の中で美しい選手を挙げると、バドミントンの奥原（希望）選手ですね。この選手も、けがで苦しんで、今回、銅メダルを獲得して涙を流されました。彼女は、前十字靭帯を2回切っているんです。これは大変な手術ですが、奥原選手はバドミントンのコートに入るときに、ファ

ンの皆さんや、自分がバドミントンができる幸せ、両親に対して一言決め文句があって、お礼を必ず一言言います。そして頭を下げたから、バドミントンのコートに入っていきます。

彼女のルーティンワークというのは、今回も注目された部分でもあったんですが、やっぱり美しい選手は、彼女ですね。それだけ、自分がプレーできる喜び、彼女は特に美しいバドミントンをします。

そして大野選手ですね。この大野選手の柔道も美しい。

さらには、今1つ言える選手でいいますと、右代（啓祐）選手ですね。皆さん、知っていますか。今回リオデジャネイロ・オリンピックで、キャプテン（主将）は吉田沙保里選手でしたが、旗手として旗を持った選手が右代選手なんです。この選手もアスリートとしては、ほんとに美しい心を持っている、謙虚に取り組んでいらっしゃる選手です。

右代選手は身長が196センチあるんです。身長、体重はウサイン・ボルトと変わらない。何の選手かといいますと、陸上の十種競技です。2日間で10種目をやらなきゃいけない。彼はヘラクレスみたいな人です。体もバキバキといえますか、筋肉が隆々。当然日本記録も持っていて、今回も注目されたんですが、残念ながら、28人中24位かなんかだったんですね。今回は残念ながら厳しい戦いに終わりました。

彼はとにかくこの十種競技というものを日本中に広めたいと思っているわけです。そして、十種競技によって、陸上の素晴らしさを伝えたいという、ただ謙虚な気持ちだけで戦っています。日本記録保持者。今回、旗手を務めたことによって、彼の知名度も少し上がるわけですが、彼を指導しているあるおじいさんがいるんです

ね。

このおじいさんは、右代選手のコーチをやっています。実は、素人なんです。布団屋さんなんです。この布団屋さんが右代選手を指導しているんです。右代選手は身体が非常に大きい、196センチあります。十種競技の中には投擲種目もありますし、短距離もありますし、長距離もありますし、とにかく大変なんですね。全部やるわけですが、右代選手は短距離があまり得意ではないんですね。それを鍛えるためにいろいろなコーチに習った。日本代表のコーチですとか、あるいは世界でも有名なコーチに右代選手は習いに行くんです。そうした中、自分の記録がバツと伸びないというときに出会ったのが、奥さまから紹介された、いわゆるジュニアのスポーツ少年団のコーチをやっている布団屋さんのおじいさんです。

このおじいさんとの出会いで、右代選手の陸上との向き合い方が変わるんです。布団屋さんまで取材に行ったことがあるんです。どこまで追いかけるんだというアナウンサーなんですけど……、そのおじいさんの布団屋さんまで行って、一緒に布団を打ったことがあるぐらいです。

布団屋さんのおじいさんは、スポーツ少年団で10歳ぐらいの子どもを普段指導しているんですが、右代選手はその指導方法を見に行くと、自分はこれだと、思ったわけです。日本代表のコーチよりも、このおじいさんの言うことを自分は信じていこうと言って、そのおじいさんに習い始めるわけなんです。

このおじいさんのほうも熱心で、今回リオまでは遠すぎるということで来られなかったのですが、おじいさまが右代選手にアドバイスをするわけですが、日本で1位の日本記録を持っている選手が、布団屋さんのおじいさんが言った

ことを素直に聞いて、自分の練習に活かして、さらにはタイムを縮めているという、この姿はある種独特な環境ではあるわけですが、スポーツの持つ素晴らしさというか、そこに生まれる友情、絆、信頼関係、強いから、弱いからとか、素人だからとかではなく、そのおじさまのひたむきな指導方法に尊敬の念を持つ右代選手を見て、ひとつリオ・オリンピックで感じさせられる嬉しいシーンでもあったわけです。

柔道の犬野選手とかからちょっと外れましたけど、でも選手たちの中では目立たないけれども、ほんとに努力してそれをサポートする周りの方々がやっぱりいるということなんですね。井上康生監督が柔道を率いたように、そういう部分があるのかもしれないね。

篠原（信一）監督という、最近バラエティーに出ていますけど、あごがちょっと前に出ていらっしゃる面白い方です。あの監督が決して悪かったとか、そういう話ではなくて、よく井上監督とは対比されますが、篠原監督が築いてきた若手の発掘が、今、井上監督のところに来て結び付いているという部分があるわけです。そしてこれからの柔道は東京オリンピックに向けてということになります。

続いてはこの人です。この方はご存じですか!? 今16歳。ちょうど先週また優勝しましたけども、知っていらっしゃいますか。前にポスターがありますけども、平野美宇選手です。皆さんはこの選手はご存じですか。知っています!?

伊藤美誠さんをご存じでしょう。代表で、最近テレビで引っ張りだこですね。福原愛選手は結婚しました。石川佳純選手、この伊藤美誠選手の3人が今回のリオの代表メンバーだったわけです。この伊藤美誠選手は15歳です。この平野美宇選手は同級生なんですけど、代表に入れ

なかったんです。今回のリオデジャネイロ・オリンピック。世界ランキング上位3人という条件で福原選手、石川選手、そして伊藤美誠選手だったわけです。

でも、この伊藤美誠選手と平野美宇選手は3歳のころから知っていて、ずっと一緒にやっけてきている。そしてライバル関係で、ダブルスも一緒に組んでいる。リオデジャネイロ・オリンピックも2人が出られるかなというところにも来ていたんですけど、代表に落ちちゃったのがこの平野選手です。

今回、平野選手は実は代表から落ちてはいるんですが、バックアップメンバーとしてリオに来ていたんです。何をしていたかという、練習相手と球拾いです。今、世界ランキング1桁です、9番です。世界のトップ選手が周りの日本人選手、しかも同級生が出ている中で、自分は球拾いをしているわけです。

この姿は、私は今回のリオでも鮮明に覚えています。でも平野選手は嫌な顔をひとつせず一生懸命です。みんなから水を持ってこいと言われて、走って取りにいった水を渡しに行く。こういった我慢というものがありました。

リオデジャネイロ・オリンピックの代表が決まってから、平野選手は相当落ち込んだそうです。でも、そこから同級生の伊藤美誠選手には、何と現在4連勝中です。やっぱりそこからの反骨心ですよ。そこに選ばれなかった悔しさが完全にバネになって、先週のワールドカップでも優勝しました。日本人は誰も優勝したことはない大会です。平野選手はここで優勝して、今、東京オリンピックに一番近い人として名前が挙がるようになってきました。

この選手は普段、非常にあどけない表情で、Hey! Say! JUMPの、ジャニーズの子が好きだな

んで、ツイッターで書きちゃうようなポワンとした女性で16歳です。東京オリンピックのときはまだ20歳ですから、そう考えますと、末恐ろしい選手です。

これは実は、お話しをしますと、リオデジャネイロ・オリンピックで当然悔しいですよ。同級生が出ているんですよ。しかも銅メダルを取っているんですよ。自分は出られない。僕だったら、ピンポン球を投げつけてやろうかと思うぐらい悔しいと思うんですけど、我慢して僕に一言言ったことがあるんです。

リオでお話しを伺ったとき、「どう？ 今回の大会というのは、平野選手にとってはどういう大会？」って。一言聞いたら、カメラとかは回っていないから、たぶん本心で答えてくれたと思うんです。「私は日本にメダルをもたらすことが今回の最大の仕事だと思っています。だから悔しくないんです。美誠ちゃんにも頑張ってもらいたいです」。そういうふう一言言ってくれました。16歳です。

もう、こういう一言をこういう若い選手から聞くと、日本の未来というか、明るいなというか、いろんなことを感じるがありました。そして今回、帰ってきてワールドカップで見事に金メダルを取ることですから、その一言の重みというものを、私は今週改めてかみしめながら生きていました。

そりゃ、嫌なこともあるんです。アナウンサーとしても、サラリーマンなので。こういうことを言うのも、ボイスレコーダーが回っていますが、まあいいです……。給料は基本的に同じなんです。働いている量とかでなくて、一応サラリーマンで働いていますので。でも、自分がやりたくない仕事というのは、アナウンサーでも当然ありまして、いろいろな思いが当然ある

んです。

働いて、あの仕事、やりたかったなあっていうのを別の人がやっているというシーンも結構あって。何でだろうって思って、落ち込みながら帰る日々もあるわけです。でも、その中で毎日そんな小っちゃなところでくよくよしている自分だとかが、この平野選手の言葉を聞いたら、「なんでそんな小っちゃいところで思っているんだ」、というふうに感じるようになりました。

平野選手の場合は同級生が銅メダルを取っている。その銅メダルを取った同級生のボール拾いをしているんですから。さすがに私は、やりたいなという仕事をやっているアナウンサーに飲み物を持っていったりはしません。でも、それを置き換えて考えたりすると、この16歳というのは素晴らしいなと、最近改めてその言葉を重く受け止めて、自分の人生にも活かそうと、学ぶことが多いなと思っております。

続いてこの方です。この顔を見たら、皆さんも当然知っているでしょう!? 誰も知らないです。何年前ですけど、モンゴルまで行って、白鷗のお母さんにお会いしてきました。私も取材する中で、白鷗関が優勝したときの写真に写り込んでいたりして、結構問題になった1枚なんで、絶対に写真を撮らないでください。何でTBSのアナウンサーが優勝の写真に写っているんだということです。これは白鷗に後ろに来いと無理やり言われて、写ってしまったので、自分ではどうすることもできなかったということになってはいます。

実は白鷗関のお母さん。オリンピックにかけてお話しをしますと、私は先ほども、スポーツというのはご家族のサポートが大切だということを言いました。白鷗という力士はいろいろ問

題があったりとか、取り組み中の態度があんまり良くないとか、そういうこともありまして、問題視された部分もあったわけですが、でもほんとは、たいへん心優しい横綱です。

白鵬関は、15、6歳の時にモンゴルから1人で日本に渡ってくるんです。その時というのは、ほんときゃしゃで、誰よりも小さくて細かったんですが、そこから稽古して強くなったわけなんです。

白鵬のお母さんというのはモンゴルにずっといて、日本に来られるわけでもなかったんですが、息子を送り出すときにどういう気持ちだったかというお話を聞くためだけに、モンゴルに行きました。とにかくこの異国の地に息子を送り出すわけです。実は、私と白鵬は同じ年なんですけど、16、7年前に送り出すわけです。特に小さい子どもで、日本の相撲の文化というのも何にも分からないときに送り出すという恐怖はあったというわけです。

白鵬のお父さんは、モンゴルではモンゴル相撲の神様といわれる大横綱でした。そういう意味では、格闘技に非常に理解があって、白鵬のお父さんというのがレスリングでオリンピックにも2回出ていて、東京オリンピックとメキシコで行われたオリンピックに出ているんです。

このお母さんが言っていたのは、「不安で不安でしょうがなかった」ということです。「ここまで大横綱になって、日本で活躍している姿はどうですか」と聞くと、「日本に送ってしまったことが寂しく残念で、いまだに自分を悔やむ」ということを言っていました。

日本人とはいろいろな考え方が違うんですけど、これだけ日本の横綱になって輝いている姿について誇りに思うとか、そういうコメントがくるのかと思っていたところ、お母さんは、

「15歳、16歳で自分で決断した白鵬を応援して送ったものの、自分が一緒にいてやれなかったことをいまだに悔やんでいるんだ」という話しをしていました。

海を渡っていく選手は日本でもたくさんいるんですが、モンゴルから日本に送るという、こういう形のアスリートもだんだん増えてきているわけです。

最近では、吉田沙保里選手のご実家には、何と住み込みでモンゴル人のレスラーがいたりするわけです。30人ぐらいジュニアの選手たちを指導しているということです。

彼らのお父さん、お母さんたちもモンゴルからレスリングの強い選手を目指すために、今度は日本留学なんていうことを考えてやっているわけなんですね。女子レスリングは、世界でも日本が1番だといわれていますから、そういう意味では、日本がいわゆるメッカなわけですね。だから、今、ここで話しをしている中で、たくさんの競技が出てきましたが、バドミントンでまず金メダルを取りました。ダブルスです。日本のバドミントンはシングルスも銅メダルを獲得している。

こういうのを見ますと、何が言えるかというと、これからは日本がひとつのスポーツ留学する場所になるのかなとも考えられます。柔道ですとか、お家芸といわれるものに関しては、入ってくるものもあるんですけども、例えば現在だと、よく出てきていますが、野球ですね。高校野球に外国の選手が交じっていたりとかするケースが非常に多いです。日本ハムで活躍する陽岱鋼（よう だいかん）という選手も、福岡の高校に入って、そこから日本ハムにドラフトでかかるわけですがけれども、そういう日本で活躍する外国人アスリートというのも、白鵬さん

の例を挙げてみても、今後出てくるのかなということも考えております。

そこで、白鵬のお母さんに話しを伺ったときもその話しをしまして、今日、なぜこの写真を出したかといいますと、2020年にかかってくるわけですが、1960年に東京オリンピックがありました。そのオリンピックをご覧になった方はいらっしゃいますか!?

いらっしゃる。私はぜひその時の話しを伺いたいんですが、東京オリンピックから見て、日本のスポーツがどれだけ進化を遂げてきたかという部分においては、あの当時の日本のメダル数も実は非常に多くて、日本が今まで数々のオリンピックで積み重ねていますが、今でもトップクラスに入る東京オリンピックでのメダル数だったんです。白鵬のお父さんがその東京オリンピックに出場されたわけですね。

あの時から見て、「日本のスポーツはだいぶ進化したんじゃないですか」と、お母さんは言っていました。その1つとして、自分の息子がモンゴルから海を渡って行って、日本を拠点にして戦うケースが出てきたというのは1つの大きな意味なんじゃないのかなと。60年が過ぎて、日本がスポーツで世界の中心になってきたということが言える出来事なんじゃないのかなということも、お母さんは仰っていました。

その話しに触れたかったので、この写真を出しました。

この方はご存じですか! 世界で一番足が速い人です。簡単に言うと、男子100メートルですとか、200メートル、すべての金メダルを今この人が取ってしまっているわけです。世界記録もすべてつくっちゃうというこのウサイン・ボルト選手です。

ボルト選手といえば、ボルトポーズなんてい

うものもありまして、日本中、世界中で、今回のオリンピックの中で世界が目にするアスリートといえば、このボルト選手ですよ。

テニスでいうと、ジョコビッチ選手、あとはマイケル・フェルプス選手ですかね。水泳で24個の金メダルを取っている選手ですが、金メダルを20個以上持っていたらそろそろ飽きたんじゃないかと思います。家のどこに置くだろうとか、いろいろ想像しちゃいますよね。

この3選手は実は今回、リオデジャネイロ・オリンピックの選手村でも、一番人気のある選手でして。選手村は当然、関係者しかいないんですが、みんなサインをくれとか、写真を撮ってくれとかいう選手なんですね。

ウサイン・ボルト選手は、私は今までに6回単独でインタビューをさせてもらったことがあります。この6回のインタビューの中で、ボルト選手というのは、よく覚えているんです、この人。言葉は悪いですけど、日ごろの言動とかから見て、そんなにスマートで賢い選手には見えないんですけど、ものすごく頭がいい。びっくりします。

私は、バハマでこのボルト選手に一番最初にお会いして、話しを聞いたのですが、そのときに話しをしたのは、ほんとに3、4分だったんですが、それ以降毎回お会いするたびによく覚えています。この間その話しはしただろう。何か月もたってから聞いているにもかかわらず、よく覚えているなという印象がある、そんな賢い選手なんです。

この選手は、実はいろいろなパフォーマンスとか、はちゃめちゃんなイメージもあるんですけども、実はボルト基金という財団を持っておりまして、自分が金メダルを取ったりした場合、賞金をもらえるわけですから、それを基金とし

て恵まれない子どもたちに渡しているわけです。あとはプーマとか、いろいろな会社と契約をしているので、そこからのお金も寄付につながっているという、自分で基金を持って学校を造ったりもしている、この人も非常に心優しきアスリートでして、国のためにですとか、いろいろなことを考えてやっているわけです。

僕はジャマイカの取材もしたことがありまして、ジャマイカにこういう言葉があるんですね。「3G」という言葉がありまして。何かといいますと、3つのG。これをしない限りは裕福な生活ができないという格言です。

まず1つ目のG。「ガンジャ」といって、これはあんまり言いたくはないんですけども、いわゆる麻薬ですね。この麻薬を売る。もう1つのGは「ガール」。女性としていろんな働き方ですね。あまりよろしくないことをして、身体を売って生計を立てている。もう1つのGは、貧困を抜け出すためにはこの3つだという、最後の1つが「ゴールドメダル」です。金メダルを取ることが、このジャマイカの貧困から抜け出す、もうそれしかないんだという諺があるぐらいなんですね。

首都でも危険な所はあるんですが、外れると、のどかでもあったりするんですね。犯罪が横行している地域もあります。私も取材に行きましたが、確かに危ないと感じるシーンもありました。その中で、ボルト選手から話を聞いたのが、「『3G』、そんなことはやめよう。とにかく子どもたちに良い教育を与える。そのためには自分が『3G』のうちの1つ、金メダルを取り続けることだ。世界で一番足が速くなるのが、何百万人の子どもたちの教育を救うことになるだろう」という話を私に真剣にしてくれたことがあります。

国を背負って戦うとか、いろんな言葉があります。オリンピックというスポーツは、特に先進国ではないといわれるアフリカの小さな国ですとか、あるいは中南米のそこまで裕福ではない国ですとか、カリブに浮かんでいる小さな島ですとか、そういうところから選手が出てきますから、そういう選手たちにとっての憧れであり、実際にボルトが体現している、まさに自分がやると誓った、「メダルを取って、自分が世界、特にジャマイカを幸せにするんだ」という言葉を体現しているというふうに感じます。

毎回いろいろなお話を伺う中でも、子どもたちに対する思いは非常に強く語ってくれています。TBSは「世界陸上」という中継がありますので、その中で僕も毎回話を伺うと、そういうことを言ってくれます。

この考え方は、なかなか日本では難しいわけです。もともとこういう社会（貢献）活動を、社会へのこういう還元の活動というのはロベルト・クレメンテというメジャーリーガーの活動でした。現在では、「ロベルト・クレメンテ賞」なんていうメジャーリーグの賞があります。これは何かといいますと、毎年、社会貢献を一番したメジャーリーガーが受賞することができる賞です。

このロベルト・クレメンテというのは、もともとプエルトリコの人なんですけども、ニカラグアで大地震が起きたときに、実は自分で飛行機をチャーターして物資を率先して送っていったんですね。それを何度かやられているわけです。

そのクレメンテの最後の亡くなり方というのも非常に歴史に残るような亡くなり方でした。

シーズンを終えたロベルト・クレメンテは、そのシーズンに3000本安打を達成したんです。

メジャーリーグで、通算で3000本安打。これは歴史に残る、史上30人ぐらいいか達成していない大記録です。つい最近、イチロー選手がその記録を抜きましたね。

このロベルト・クレメンテが、母国からニカラグアまでまた物資を送ろうとして飛行機で出発したとき、チャーターしたその飛行機が重量オーバーだったんですね。なぜならば、とにかくさんの物資を送りたい、ニカラグアに届けたいと、そういう思いがあって飛んだわけです。しかし、出発してすぐに飛行機が墜落しまして、そこで亡くなってしまうという出来事がありました。

そのロベルト・クレメンテという人ですが、なぜニカラグアに思い入れがあったかという、野球の国際大会でニカラグアに行ったときに、ニカラグアの人たちにすごく良くしてもらったということでした。お食事もおいしいものを出してもらったり、人々が優しくしてくれたり、自分がほんとに良くしてもらったなという、人と人のつながりがあったということです。

そんな国で起きた大震災によって、自分も何かできないかということで取り組んだ社会貢献活動がスポーツ界において広まっているというわけです。それがメジャーリーグでできたのが、「ロベルト・クレメンテ賞」というものなんです。

それを引き継いでいくのは、日本ではまだまだ開かれていないわけです。一流の選手たちも当然、日本の中で何かしたい、とにかく社会に貢献したいというアスリートたちも多いわけですが、実際にどうやってやったらいいとか、そういうものが日本ではなかなかまだ根付いていない部分があるというのも、ひとつまた東京オリンピックまでの課題なのかなんていうのは、

取材をする中で感じる部分でもあります。

こちらは岡崎（慎司）選手です、サッカーです。レスター（・シティFC）・岡崎選手ですね。時間もなくなってきましたかね。ですので、飛ばしますね。

そして小久保監督ですけども、侍ジャパンということで、最後に持ってきたのは理由がありまして。TBSではWBCを中継いたしますので、皆さん、よろしくお願ひしますということになります。

小久保監督も就任してからいろいろなことを経験されたようで、(2015WBSC)プレミア12というのが昨年はありました。日本の野球というのがまたひとつ盛り上がってきて、今度のWBCではイチロー選手も出るかなど、まだ分からないですが、メジャーリーガーがどれだけ出るかということも注目される部分ではあります。

この小久保ジャパンは、小久保監督も言うておられますが、子どもたちだったりとか、2020年に向けて、どれだけ自分たちがこの野球、ムーブメントとして広めていけるか、選手たちのプレーが子どもたちにとっての夢に変わるということも話しをしていました。

先日、私は王貞治さんともお話しをさせていただいて、王さん仰っていたことですが、今回このWBC、日本が世界一をほんとに奪還するというので、先ほどの話しにもつながるわけなんです、「日本が野球の中心だというふうには世界から認められる、そういうチャンスにもつながるんじゃないか」という話しもされていました。

今日は「言葉とスポーツ」ということで、いろいろとお話しをさせていただきましたが、あっという間に自分の中で終わってしまいました。

今日も仕事がないから6時ぐらいまでいっちゃおうかなみたいな感じもあるんですが、皆さんがお疲れのようなので、そろそろ引き揚げておきます。田中先生にバトンタッチしたいと思います。

○田中：ありがとうございました。

私としましては、まだまだ日付が変わってでも聞きたいような話しではありますが、時間も限られていますので、このあたりで締めたいと思います。あまり時間はありませんが、第1部において質疑応答もできませんでしたので、今日一日を通して何かお聞きになられたい点があるのであれば、2、3していただこうかと思います。

○石井：ぜひ質問をお願いいたします。

○田中：現役の学生さんで、アナウンサーになりたいとか、放送業界を実は考えているんだという人がいたら、優先的に質問をしていただこうかと思います。いかがですか!?

○石井：今日聞いて、やめたとか言わないでください。「今日聞いたんで、私、やめます」みたいな、そういうのは無しにしてください。

○田中：どうでしょうか。誰か、いますか。

○石井：ありがとうございます。大丈夫ですよ。

○女性：本日は講演をありがとうございます。

1つ、一日の日常についてお聞きしたいのですが、お仕事をされて、睡眠されていると思いますが、朝、起きてでしたり、夜寝る前でしたり、またお仕事中でしたり、何か毎日続けていることがありましたら、教えていただけないでしょうか。

○石井：毎日続けていることですね。朝の番組をやるようになってから、ある種の健康オタクになりました。睡眠時間とかが非常に短くなりますので、どのようにして次の日に身体を整え

ていくのかということだけを考えて生活しているなというのは思っております。

そういうことを考えますと、当然適度な運動ですとか、ストレッチですとか、あとはいろいろなアナウンサーがいますが、皆さんはアナウンサーとしてもしゃべりの練習をされるんです。外郎（ういろう）売りとかですね。ご存じかどうか分かりませんが、「拙者、親方と申すはお立ち会いのうちに」とか、ワーツという、しゃべりの口の回る練習をするパターンもあるんですね。

私の場合は新聞とか、本をひたすら音読し続けております。だから、僕のマンションの近隣に住んでいる方々は、頭、ちょっと大丈夫かなという人が住んでんじゃないかと、もしかしたら思っているかもしれません。そういうことを毎日続けております。

スポーツ選手だと、4年に1度のオリンピック。よし、頑張るぞ、みたいな、4年間で何とか結果をとかがあるんですけど、サラリーマンでいらっしゃる方とか、学生さんもそうだと思いますけど、ずっと毎日授業があったりですとか、仕事があるので、常に毎日楽しく過ごすように、つまらないことでも楽しくしようと思って生活しております。

ありがとうございます。

○女性：ありがとうございます。

○田中：何かありましたら、もう1点ぐらい。

○石井：2点ありますね。

○田中：2人いきましよう。まず先に手を挙げた手前の方。

○男性：ありがとうございました。一番聞きたいのは、石井アナウンサーにとって、言葉って何ですか。

○石井：かっこいい質問ですね。そういうのが

されたかったんですよね。『プロフェッショナル（仕事）の流儀』みたいじゃないですか。ここで音楽が鳴り始めるのですけどもね。

そうですね、言葉というのは、人を傷つけもするし、人を喜ばせることもできると思うんですね。だから、僕は「言霊」だと思っています。これは結構よくいわれる言葉だと思いますが、自分の魂が乗り移っている部分だと思います。先ほどは、目で演技をしろとか言われるとかもありましたけども、でも、やっぱりアナウンサーにとっての言葉というのは、魂そのものだと思います。

大丈夫ですか。ここらへんで音楽が鳴り始めたり、カメラのアングルとかが変わるんですが。

ありがとうございます。

○女性：いっぱいスポーツ選手にインタビューされると思うんですが、質問の仕方がいろいろあると仰っておられましたけど、スポーツ選手に毎回インタビューするときに、一番気をつけていることは、何を聞こうと考えているときに、一番大切な方法はなんでしょうか。

○石井：ほかの人はどうか分かんないんですけど、自分で一番考えているのは、とにかく自分で勝手に話をつくらないということですね。

先ほど田中先生も仰っていましたが、インタビューあって、金メダルって言わせたがったりとか、あるいは戦い方、戦術を聞いたかったりとかするんですけど、自分が想定していない答えは当然来る可能性はあって。でもテレビでこう使いたいとか、映像でこういう編集をしているから、この言葉はいるよねとか、そういうことは絶対にしないというふうには、自分では思っています。

自分はそうなんですけど、ディレクター陣とか、番組を編集してつくる人たちは僕がインタ

ビューすることはものすごくいらついて見ているかもしれません。

というのは、編集点を付けるアナウンサーは非常に多くて、例えばインタビューをするときに矢継ぎ早に聞くんじゃなくて、「今日のコンディションはいかがですか」「今日は非常に調子がいいです」とか言われた後に、ちょっと素を開けるんですね、間を取るんです。気持ちですね、0.2秒ぐらいつけると、編集するときそこに切りやすいんですよね。分かりますか。そうすると、きれいに編集できるんです。

僕の場合は、自分でも実はジャーナリストというか、編集をしていた時期があって、自分でも編集できるんです。アナウンサーで編集ができる人間というのは、たぶんこれはちょっと自慢になりますけど、あんまりいなくて、自分でも編集もできてというのはうちの局ではたぶん僕だけですかね。

なので、編集マン、ディレクターがどこを切りたくなるとかが分かるんですね。だから、わざと切れないようにしてやるんです。たぶんこれをやっている人はあまりいなくて、編集点を付ける人はいるんですけど、編集できなくしてやるんです。

自分が聞きたいこととか、一番この話しは盛り上がっているよねというところは、あえて相手の答えにかぶせて質問しちゃうわけです。例えば、選手が明日の戦いというのは、自分の人生の中での大事な一戦だと思っていますから、絶対に明日は負けられないぐらいのときには、そのためにはどうすればいいですかみたいな、重ねて言うわけです。

そうすると、切ると「で」で終わっているわけです。そういう戦いといいますか、自分の中では、ここは絶対に切らせないという気持ちを

持ってやっているんですが、ディレクター陣はそういうことをやられるとむかつくでしょうね。ここで切りたいのみにたいな。

そういう感じでしょうか。ありがとうございます。

○田中：特に正しく伝えるということを第一に考えている。編集されると、いかようにでもなってしまうということですね。

○石井：ほんとにそうだと思います。

○田中：それをどうコントロールしているかを意識している。

○石井：僕は、なぜそれがあるかという、トラウマがありまして。錦織圭選手と私に対戦して、私が負けている、ちっちゃいときの映像がいまだに流れたりするんですけど。あれは実は、私を追っかけているカメラだったんですよ。分かってくださいます？

実は当時、あの合宿のキャプテンは僕でして、キャプテンを追いかけているカメラだったのに、キャプテンが負けているから、錦織選手のことを撮っているというだけなのに、錦織選手のちっちゃいときの映像がないから、それを使われて、僕は何度も負けているみたいな感じになってしまうわけです。

だから、テレビって怖いと思いますから、勝手な編集ができないようにやっているというトラウマなのかもしれません。

○田中：ありがとうございました。

予定の時間をオーバーしていますので、本日の講演を終わりにしたいと思います。

それでは、盛大な拍手をお願いいたします。

(拍手)

○石井：ありがとうございました。長い時間にわたりましてしゃべり続けましたが、また今後ともよろしく願います。月曜日から『あさチャン!』ですね。ありがとうございます。よろしく願います。

○田中：あまりお時間はないのですが、もしよろしければ、フォトセッションをご希望の方は対応したいと思いますので、もしご希望される方がいらっしゃるようであれば、スマートフォンでも構いませんので、持ってきていただいて、ぜひ、撮影をしてください。

○石井：撮りますか。ぜひ一緒に撮りましょう。

○田中：適当にお並びいただき、順番に行きましょう。

○石井：ありがとうございました。

明治大学人文科学研究所紀要

第八十一冊 二〇一七年三月

明治大学人文科学研究所